

I S 戦士電童

東風乃扇

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

インフィニット・ストラトス×GEAR戦士電童
女性にしか使えないISを男性が動かした！

このニュースを受けて世界中で調査が行われた！

そしてついに見つかった二人目の男性適合者。

その名を天野星夜（あまのせいや）。

人よりちよつとプログラミングがうまいだけの普通の中学生だった彼の高校生活はどうなのか？

オリジナル主人公の機体が電童です。

その周りに電童のキャラクターをだす予定です

初めてのSSなので色々わからないので改善点、質問などありましたらお気軽にどうぞ!!

目次

番外編：データウエポンレポート	1
第1話 《IS学園入学式》	7
第2話 《果たし状》	14
第3話 《代表決定戦に向けて》	23
第4話 《初めての休日》	32
第5話 《激突！蒼零！》	38
第6話 《決闘!!白式!!》	44
第7話 《クラス代表、決定!》	51
第8話 《GEAR本社へ》	61
第9話 《襲撃されたGEAR本社》	72
第10話 《蒼い奇跡》	78
第11話 《データウエポン》	88
第12話 《交わした約束》	98
第13話 《クラス対抗戦》	108
第14話 《翠の誓い》	119
第15話 《楽しい日常》	130
第16話 《新しい風》	144
第17話 《3人目の男性操縦者!?!》	152
第18話 《冷めた心、凍った心》	165
第19話 《姉妹対決、打鉄式対霧纏》	180
第20話 《紅の決意》	187
第21話 《休息》	197
第22話 《GEARチャイナの謎》	207
第23話 《白の咆哮》	219

第24話 《レオのおつかい》

第25話 《黒い雨》

第26話 《学年別トーナメント》

第27話 《紫の光明》

第28話 《デュノア社の影》

第29話 《橙の願い》

第30話 《データウエポン大集結！》

第31話 《楽しい買い物》

第32話 《臨海学校》

第33話 《海！乙女の闘い？》

第34話 《本当の心》

第35話 《紅椿》

第36話 《銀の福音》

第37話 《失敗》

第38話 《折れない心》

第39話 《輝く刃は皆と共に》

第40話 《帰り道》

第41話 《夏休みに向けて》

第42話 《期末試験》

第43話 《夏休み》

第44話 《欧州合同IS演習》

第45話 《強奪》

第46話 《罨》

第47話 《それぞれの夏休み》

第48話 《花火》

229

240

254

266

277

290

299

310

318

326

346

358

372

381

395

409

433

447

466

481

489

501

517

529

551

第49話	《データウエポンの夏休み》	564
第50話	《新学期》	589
第51話	《学園祭準備中!》	608
第52話	《学園祭開催》	620
第53話	《学園祭の楽しみ方?》	633
第54話	《学園祭の裏事情》	652
第55話	《後片付け》	670
第56話	《高速機動訓練》	688
第57話	《飛べ!光よりも速く!》	707
第58話	《信頼》	729
第59話	《新たな可能性》	756
第60話	《専用機持ちトーナメント》	774
第61話	《キズナ》	794
第62話	《GEOS》	812
第63話	《編入生》	830
第64話	《GEOS対IS》	844
第65話	《夢》	859
第66話	《目覚め》	872

番外編：データウエポンレポート

データウエポンとは？

GEARによって発表された新しい概念の兵器。

本来はISの装備だがそれ以外にも動物のような形態をもつ。

それぞれが意思を持ち独自に行動することが出来る。

自身をデータ化することにより、様々な電子機器に入ることが出来る。

その機器がインターネット等に繋がっている場合繋がっている他の機器から出たりすることも出来る。

普段はデータとなっていてはか手の平サイズのエイリアス体で過ごしている。

データウエポンの大半は製作時には無かった特殊な力を発現させている。

データウエポンを装備している場合、機体にあるエネルギー全てを使って放つファイナルアタックが使用できる。

D W ー 1

ユニコーンドリル

象徴：信頼

共鳴者：セシリア・オルコット

属性：渦

装備箇所：右腕

特殊能力：ファイヤーウォール

一番最初に確認された、一角獣のデータウエポン。

元々は天野星夜が所持していたペットロボの意識がGEARで作成していた電子格納兵装アームドリルを取り込み、生まれたもの。

誕生直後に機能停止し、そのままGEAR本社にて調査されていた。

後に亡国機業によるGEAR本社襲撃の際に天野星夜とセシリア・オルコットの『信頼』する心に共鳴し、覚醒した。

特殊能力はバリア発生能力「ファイヤーウォール」
盾の無い電童はこれを使い仲間を守ったりすることが多い。
バリアの強度と範囲は使用エネルギー量が代わる。

また、同時に複数展開することは出来ず形状も板状で固定されている。

DW12

ガトリングボア

象徴：創造

共鳴者：更識簪

属性：光

特殊能力：クロックマネージャー

ユニコーンに続いて覚醒した猪のデータウエポン。

初のデータウエポンであるユニコーンドリルを解析し開発された
5体の一つ。

元々はブレストガトリングとして開発されていた電子格納兵装で
ある。

IS学園でのクラス対抗戦の際に乱入してきた謎のISとの交戦
中に天野星夜と更識簪の『創造』する心に共鳴し、覚醒した。

特殊能力は時間停止能力「クロックマネージャー」

放った光に接触した対象の時間を停める事が出来る。

強力な半面、消費するエネルギー量が非常に多く、多用は出来ない。

IS学園内では電童のデータウエポンの中で一番警戒されている。

DW13

ドラゴンフレア

象徴：慈愛

共鳴者：更識楯無

属性：炎

特殊能力：クラッシュレイ

3番目に覚醒した龍のデータウエポン。

元になった兵装は装備型火炎放射機フレイムランチャー。
更識姉妹の模擬戦時に乱入してきた凰牙と銅色のISとの交戦中に天野星夜と更識楯無の『慈愛』の心に共鳴、覚醒した。
炎を弾として発射したり、そのまま放射し熱したり、脚部に炎を纏わせる等、かなり器用である。
通常形態でも両手が使える為、様々な形でサポートできる。
特殊能力はプログラム破壊能力「クラッシュレイ」
物理的な攻撃力は無いが装備の機能そのものを破壊する。
理論上ISコアを破壊することの出来る恐ろしい能力。

—
D W 1 4

レオサークル

象徴：勇氣

共鳴者：凰・鈴音

属性：風

特殊能力：ハイパスキャン

4番目に覚醒した、獅子のデータウエポン。

元になった兵装はサークルカッター。

GEARチャイナ調査中に金色のISと戦っていた天野星夜と凰・

鈴音の『勇氣』に共鳴し、覚醒した。

特殊能力は解析能力「ハイパスキャン」

射程内に入った対象をほぼ瞬間的に解析する。

機体ステータス、エネルギーや弾薬の残量等を把握出来るため初手で装備することが多い。

能力の有用性から電童以外のISが装備している事も多い。

—
D W 1 5

バイパーウィップ

象徴：自信

共鳴者：ラウラ・ボーデヴィツヒ

属性：雷

特殊能力：イリユージョンフラッシュ

5番目に覚醒した、蛇のデータウエポン。

元になった兵装はスパークウィップ。

学年別トーナメントの際に暴走したISと交戦中に相互意識干渉をした天野星夜がラウラ・ボーデヴィツヒの『自信』を取り戻した事により共鳴し、覚醒した。

特殊能力は高速分身を作り出す「イリユージョンフラッシュ」

純粋な加速によって残像分身を行う。

その際、周囲に微量のエネルギーを散布し、ジャミングを行っているのでセンサーでの捕捉も難しい。

緊急時の高速移動手段として装備する事もある。

D W 1 6

ブルホーン

象徴：知恵

共鳴者：シャルロット・デュノア

属性：地

特殊能力：オートプレッシャー

開発されていた6体の内、最後に覚醒した、牛のデータウエポン。元になった兵装はヒートナックル。

シャルロット・デュノアを狙った襲撃事件の際に天野星夜とシャルロット・デュノアの『知恵』に共鳴し、覚醒した。

特殊能力は重力操作能力「オートプレッシャー」

指定した対象の重力を操作し、拘束、移動などをすることが出来る。データウエポンの中では最も破壊力のあるファイナルアタックを放つことが出来るが有効射程が短い。

D W 1 E X 1

輝刃（キバ）

象徴：友情（勇気＋信頼）

共鳴者：織斑一夏（勇気）、篠ノ之箒（信頼）

属性：嵐（風＋渦）

特殊能力：ゲットアビリティ（仮）

新たに誕生した7体目のデータウエポン。

試作可変武装タクティカル・アームズを素体としている。

福音事件の際に天野星夜と織斑一夏、篠ノ之箒の勇氣と信頼による『友情』に共鳴したユニコーンドリルとレオサークルが放ったエネルギーと後述のフェニックスエールの力により誕生した。

通常形態、大剣形態「ブレイカー」、弓形態「ストライカー」、突撃形態「スピナー」の四形態をもつ。

今までのデータウエポンとは違い、ハンドウエポンである。

特殊能力に関して誕生直後は確認されなかったがキャノンボール・ファストの際に一度確認された。

コピー能力「ゲットアビリティ」

この特殊能力は輝刃単体では使う事が出来ない。

輝刃が一定の条件を満たすと、ISの特殊能力をコピーする模様。

また、これによってコピーした能力は有限で、一回使用すると再度コピーする必要がある。

コピーの条件、ストック可能数などについては現状は不明。

飛焰（ひえん）

DW1EX2

象徴：理想（慈愛＋創造）

共鳴者：不明

属性：熱（炎＋光）

特殊能力：未確認

キャノンボール・ファストの際、突如乱入してきた亡国機業の大型兵器との戦闘中に誕生。

輝刃と同じように、ドラゴンフレアとガトリングボアのエネルギーを受けていると思われる。

大型ブースターと布仏本音が所持する恐竜型ペットロボが素体。

通常形態、バズーカ＋大型ブースター形態「ブラスター」、エアバイ

ク形態「スライダー」、飛行機形態「ファイター」の四形態をもつ。
特殊能力は現在未確認。

—
D W 1 0

フェニックスエール

象徴：不明

共鳴者：天野星夜？

属性：不明

特殊能力：インフィニットレイヤー

一度だけ存在が確認されたデータウエポン。

福音事件中に昏睡状態から目覚めた天野星夜が電童を展開した際に背中に装備されていた。

特殊能力は無限のエネルギーを産み出す「インフィニットレイヤー」

福音及び凰牙との戦闘中に輝刃を産み出すためにエネルギーを放出し虹色の粒子となって消滅した。

—
D W ?

ラゴウ

象徴：憎悪？

共鳴者：凰牙パイロット？

属性：毒？

特殊能力：デストラクションウイルス？

福音事件の発端になったと思われる機体。

肉食獣の様な体、2つの頭、大きな翼

各種特徴からデータウエポンと思われる。

通常形態でも高い戦闘力を有し、浸食系ウイルスプログラムを備えている。

装備すると背中、腕、脚にそれぞれパーツが付く。

亡国機業が保有しているようだがどの様な経緯で作成されたかは不明。

第1話 《I S学園入学式》

4月、それは新しい生活が始まる時期である。

入園、入学、入社などは特に変わる

とか、言ってる自分も今日から高校生だ。

新しい学校、新しい教室、新しい教科書や鞆等々。

周りにあるものすべてがこれからの生活に対して期待を湧かせてくれる。

だが、今の自分はその期待よりも不安や緊張の方が大きい……。

なぜならばこの教室には男子が自分と横に居る織斑一夏いちかの二人しか居ないからだろう……。

何故こんなことになったのか……それは約二ヶ月前までさかのぼる事になる。

——2月某日

そのニュースは世界を震わせた。

女性にしか扱えないはずのI Sを織斑おりむら一夏いちかという『男性』が動かしてしまったのだ。

I S 『インフィニット・ストラトス』とは宇宙開発の為に開発されたマルチフォーム・スーツの事である。

このI Sが登場したことにより、それまでであったあらゆる兵器は時代遅れの烙印を押される事となった。

しかし、欠点として女性にしか扱えないのだ。

優秀な兵器であるI Sを使えるⅡ女性が強い又は偉い、と世界で女性が優遇される。

女尊男卑の構図が完成するのにそんなに時間はかからなかったそうだ。

約10年の間一人として男性が動かせなかったI Sを動かしてしまったので、世界中で調査が行われる事になった。

——日本のある中学校

「えくと、皆さんご存知だとおもいますが、I Sを使えるかどうか検査を受けてもらいます。」

午後のHRにて担任にそういわれて男子生徒は全員例外なく体育館に集合していた。

「なあ、もし俺が使えたらどうしよう!!」

やたらとハイテンションな友人が言う。

「まあ、宇宙を飛ぶのは気持ち良さそうだけどな。」

まあ1年生から順に受けてもう3年生の4組、つまり八割程しらべて見つかってないのだからこの学校には居ないのだろう。

と心の中に思いながら友人たちと話ながら順番を待っていた。

ついに自分の番が回ってきた。

「じゃあ、名前を教えて下さい。」

試験官と思われる眼鏡の女性が話しかけてくる。

「はい、天野 星夜あまの せいやです。よろしくお願いします。」

「では、この打鉄うちがねに触れて下さい。検査はそれだけです。ので気持ちを楽にしてください。」

そういわれて、はい、と軽く答えてからISに触れる。

その瞬間、膨大な情報が頭の中に入ってくる。

わかる…解る…こいつを動かせると頭の中で確信する。

よく見るとISが光っていたらしく試験官の女性は軽く目を瞑っていた。

「え〜と…動かせるみたいですか?」

なんか疑問系で試験官に聞いてしまった。

「そうみたいです、こちらに来ていただいてよろしいですか?」

そういわれて自分が入ってきた時とは別の扉は案内され…間違
いでは無い事を確認すると、IS学園に入る手続きをすることになっ
た。

——で現在に至るわけだが……

本来なら女性しか生徒は居ないこのIS学園に男子生徒が二人い
る……

そんなんだから奇異の目を向けられるのは仕方のない事なのだろ
うが……

周りからの視線ブレッシヤーがきつい……

俺の中学校からIS学園にきたやつは居ない…完全にアウェーだ。隣の席の織斑一夏は知り合いが居るのかちらちらとポニーテールの娘を見ている。あつそっぽ向かれてる。

「全員揃っていますね、私が副担任山田^{やまだ}真耶^{まや}です。1年間よろしくお願いいたしますね。」

教壇に立つ山田先生があいさつをする。

そのまま自己紹介の流れになった。

自分はある行だからほぼ最初である。まあ慣れたものだが…

相川さんの自己紹介が終わる。

「次は…天野星夜君ですね。」

「はい。」

指名されて席から立ち上がる。

本来なら出席番号順のはず席だが、

男子二人は中央の最前列にされているため後ろを向けば全体を見渡せる。

二人しか居ない男子の自己紹介だからかすごいみられてる気がする…

「え〜と、天野星夜です。特技はプログラミングで、趣味はゲームかな？格闘技を習っていたので体力にはそれなりに自信があります。

ISに関してはこの2カ月で基礎を習った位です。授業のあしを引っ張らないよう頑張りますのでよろしくお願いいたします。」

とりあえず趣味と特技、今後の抱負みたいな言っただけどこれはいよね？

頭を下げてから席に座る。

周りの反応も悪くなさそうなのでひとまずほっとする。

「織斑一夏君？」

自己紹介は進み、次は織斑の番なのだが考え事でもしてるのか山田先生に呼ばれてるのに気付いてないようだ。

なんか山田先生涙目なだけけど…

「えっ…あっ…はい！」

あつやつと気付いた。

山田先生に促されて自己紹介を始めた。

「俺は織斑一夏です。よろしくお願いします。」

周りの視線が集中する。まあ自分と違って有名人の弟だもんなあ。

「……………以上です。」

クラス全体ズゴツと音をたてた気がする。

まさかの何も無しとは…………

次の瞬間には後ろにスーツ姿の女性が立っていて…

「まともに挨拶もできんのか貴様は…………」

「げえ?! 関羽?!

」誰が美髯公だ。」

スパンツといい音が響く、女性は手に持っていた出席簿で織斑を叩いた。

「全く、自己紹介もまともにできんのか。」

そしてスーツ姿の女性はクラスを見渡しながら話始める。

「諸君、私が織斑おりむら 千冬ちふゆだ。君たち新人を1年で使い物になる操縦者にそだてるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者は出来るまで指導してやる。」

担任の織斑先生の自己紹介が終わる、その直後後ろから衝撃がきた。

「キャ—————!」

「千冬さま!! 本物の千冬さまよ!!」

「ずっとファンでした!!」

「私おねえさまに憧れてこの学園に来ました!!」

「千冬様が担任なんて感激です!!」

等々ほぼ全ての生徒が一斉に騒いだせいで発生した衝撃だった。

それらを聞いた織斑先生は額を軽く押さえながら

「毎年よくこれだけの馬鹿者が集まる者だ。感心させられる。…それとも私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか?」

呆れたような感じに呟く。

「ち、千冬姉…」

織斑が織斑先生に何か言おうとするが…\スパンツ/またして

も出席簿で叩かれる。

「学校では織斑先生と呼べ。」

織斑先生に睨まれる。

「はい、織斑先生……」

織斑一夏が答えるとそのやり取りを見ていた他の生徒は……

「え……織斑くんって、あの千冬様の弟なの……?」

「じゃあI Sを使えるってのも関係して……」

「それだともう一人はどう説明するのよ?」

「ああついいなあつ代わって欲しいなっ!」

結構好き勝手に言ってるな……

あまり織斑千冬の弟って知らなかったんだな……

「とりあえず、静かにしろ。自己紹介の続きをやれ。」

織斑先生がそう言うと言とうと自己紹介が再開された……

こうしてHRが過ぎて行く……

——そして休み時間

「改めて、俺は織斑一夏!よろしくな!気軽に一夏って呼んでくれ!」

っと右手を差しだしながらこちらに挨拶をしてきた。

まあ唯一の同性だからな、気持ちは解る。

「天野星夜だ。よろしく、星夜と呼んでくれ。」

一夏と握手をする。まだ周りからの視線とか気になるが気にしないようにする。

「で、一夏さつきからこちらを見ているのはお前の知り合いか?」

朝から一夏が見ていたポニーテールの娘……篠ノ之さんが近づいてきたので聞いてみる。

「箒……」

「一夏……話がある……少しいいか?」

やはり一夏の知り合いの様だ。

二人で話したいのだろう。

一夏がこちらを見たので

「二人で話したいんだろ?行ってきたよ。女性の誘いを断るのは良くないぞ。」

「ああ：わかったありがとう。」

「すまん」

そういうと二人は廊下へ出ていった。

なんか武道でもやってたのかな？なかなかいい気迫だった。

そして教室には男子が俺だけになるので視線が集中し始めるが話掛けてくる生徒はいないみたいだ。

まあ女子校に男子が放り込まればこうもなるか…

「ちよつとよろしくて？」

前に現れた長い金色の髪をなびかせながら上品な感じの娘に話しかけられた。

「はい？なんででしょうか？オルコットさん。」

セシリア・オルコット：たしかイギリスの国家代表候補生だったな。

「噂の男性適合者というものがどれ程のものかと思ひましてね。」

オルコットさんは上から目線で語る。

ああこの世の中が女尊男卑だってよくわかるね…。

「自己紹介でいった通りで基礎部分を短期間に詰め込んだだけです。まあ両親がIS関連の仕事なので色々と教えてくれましたが…」

念のため口調には気をつける…

「あら、そうでしたの…まあ私の足を引っ張る様なことだけはしないで下さいね？」

「努力しますよ、よろしければご教授いただけるとありがたいですが…」

実際に代表候補生なのだからこのクラスの中でも成績は上位なのだろう。

教えを乞うのも悪くはないはずだ。

「礼儀をわきまえていらっしやるようですね。庶民に手をさしのべるのも貴族の役目、ありがたく思いなさい。」

そういうとチャイムが鳴ったのでオルコットさんは挨拶をしてから席へ戻っていった…

あれは完全に男性を見下してる感じだなあ。
とか思ってる。織斑先生が入ってきた。
一夏と篠ノ之さん遅刻じゃね？…

第2話 《果たし状》

入学式、自己紹介で終わったLHRが終わり普通の学校なら初日はそのまま下校の所が多いだろう。だが、このIS学園は初日から授業がある。

ちなみに授業はチャイムではなく一夏を叩く出席簿の音から始まった。

「初日から授業に遅れるとはいい度胸だな？織斑、篠ノ之。」

「す…すみません…」

「申し訳…ぎいません…」

二人とも頭を押さえながらそれぞれの席に着く。

内容としては、ここ2ヶ月で習った基本のおさらいって感じだな。

しかし流石にIS学園の教師だな。

参考書とか読んでもなかなか理解出来てなかった部分がかかり解りやすく教えてくれる。

周りの女子達は普通に頷いたりしてるから本当はもつとこの辺りは理解してなきやいけないんだろうな。

もしかしたら俺と一夏に合わせてくれるのかも。

しかし、先程から横に居る一夏の反応がおかしい…俺でも解るくらい優しく教えてもらってるはずなのにやたらと挙動不審だ。

「なあ…星夜は解るか？」

「まあこの辺りは教科書のさわりの部分だからな、山田先生のおかげで引つ掛かった部分がだいぶ減ったよ。」

小声で聞いてくる一夏にそう答えると一気に顔が暗くなる。

もしかしてこいつ、全く予習してないのか？

そんなことはないはずだ、あのモンハンの攻略本や川上先生のライトノベル（笑）よりも厚い圧倒的存在感溢れる参考書には必読ってデカデカと紅い文字で書いてあったぞ。

あの本を無視するとか、眼科が匙を投げるレベルを超えてるぞ。

「え〜と…ここまででどこか解らないところがある人はいますか？」

山田先生が黒板に要点をまとめ終えたのかチョークを置いて、振り

向きながら問いかける。

当然女子は首を縦に振るなりして、理解してる事をアピールする。

「天野くん、織斑くんは大丈夫ですか？」

やっぱりこの授業は、俺たちの為にやってるような感じだな。

「はい、非常に解りやすく助かります。」

「そうですか！わからなかったらいくらでも聞いて下さいね？先生ですからー！」

そう答えると山田先生は嬉しそうに胸を張りながら答えた。

うん、思春期の男子にはこの人は危ないね。刺激が強すぎる。

「織斑くんはどうですか？」

山田先生は隣に居る一夏に続けて聞く。

「すみません…わかりません…。」

「えつと…どこからどこまでがわかりませんか…？」

山田先生が恐る恐る聞くと…

「全部です。」

——マジか

「えっ」

山田先生が固まる。

「ほんとのほんとに全部ですか？」

「はい、全然わかりません！」

真面目な顔をしながら衝撃的な発言をする一夏。

それに対して、おろおろと汗を流しながら狼狽える山田先生。

そしてクラスの後ろで授業を見守っていた織斑先生が一夏に近づきながら聞く。

「織斑、入学前に渡した参考書はどうした？必読と書いてあったはずだが？」

「あれ、家の掃除したときに古い電話帳と勘違いして捨てました。」
＼スパーンツ！！／

今までより大きな音が教室に響く、この階全体に聞こえてそうだな。

「馬鹿者が…新しいものを渡すから1週間で覚えろ。」

「えっ…流石にあの厚さは…」

「わかったな？」

「……はい。」

まさか捨てているとは、まあ自業自得だな。

「山田先生…この馬鹿者は放っておいて授業を進めて下さい。」

織斑先生に促されて授業は再開された。

授業中、一夏はずっと理解出来ないからか唸っていたが。

——休み時間

授業が終わり先生達が退室するや否や一夏が聞いてきた。

「なあ、星夜はあの参考書全部読んで理解したのか？」

「一通り目は通したよ。ISに関して、早い人は小学生の頃から勉強してゐるらしいからね。それに追い付けなくても最低限遅れたくはなかったからな。」

「まじかよ…良ければ俺にも…」ちよつとよろしくして?」……えっ?」

一夏と話して居ると横からオルコットさんがやって来た

「まあ、代表候補生たる私、セシリア・オルコットが直々に話し掛けているのなんですよその態度は？」

「えーと…なんだよいきなり…」

さつきは居なかつた一夏と話をしにきたようだな。

「全く…そちらの方と違って礼儀がなっていないようですね。珍しいからチャホヤされているだけなのを理解しておりますの?」

「なんだよ、さつきから偉そうだな、そもそも代表候補生ってなんだよ?」

またしても一夏から爆弾発言、代表候補生すら知らんのか。

「一夏…代表候補生とは読んで字のごとく、国家代表の候補生の事だ。解りやすく言えばエリートだと思っておけばいい。」

「そう、エリートなのですわ!全く本当に何も知らないのですね? まあ入学試験で試験官の方を唯一倒した私の足を引っ張らなるのだけはいらないようにしてくださいね?」

と俺の説明に合わせてオルコットさんが腕を組み、見下すような態度をとる。

「えつと…俺も倒したぞ?」

一夏は答えると、オルコットさんが固まる。

「わ…私だけだと…」

「女子ではってことなんじゃないか?」

驚いた表情のオルコットさんとちよつと得意気な一夏…

「あなたはどうなんですか?」

念の為の確認か俺に聞いてくる。

「俺の場合は全国調査中だったから試験官が居なかったのもあって、所属企業の方から実働データを送ることで替わりにしたからやってないんだよ。」

「へくそうなんだ。所属企業ってなんだ?」

「ん?ああ俺の両親が勤めてた事もあってGEARグループの所属だ。」

そう答えながらGEARのIDカードを見せる。

「GEARって確か色々やってるよな?星見町のところにアミューズメントパークあつたよな?」

「ああ、星見野アミューズメントパークな。」

「って私を放って話をしないでくださいませんか!」

肩を震わせながらオルコットさんが怒鳴る。

それと同時にチャイムが鳴った。

「くっこの話はまたあとでさせていただきますわ。」

そう言うのと席に戻っていくオルコットさん。

「なんだつたんだ?あれ?」

事態を飲み込めてない一夏だった。

あれは完全に敵視されたな。

チャイムが鳴り終わるとほぼ同時に織斑先生が入ってきた。

その瞬間に教室からは雑談などの音が一切しなくなる。

すげえこんな教師はなかなか居ないな。

とか思っていると織斑先生が話を始める。

「先程の続きを始める前にクラス代表を決めたいと思う。」

「織斑先生、クラス代表について詳しく教えて下さい。」

手を上げながら織斑先生に聞く。

「天野、そう急ぐな。順を追って説明する。」

織斑先生は続ける。

「クラス代表、文字通りクラスの代表の事だ。各連絡事項やクラス代表会議の出席などが主な仕事になる。近いものではクラス代表が戦うクラス対抗戦があるな。」

つまりは、委員長とかそんな感じか、

「理解したか？では立候補者はいるか？自薦、他薦は問わん。」

そう言うや否やどこからともなく。

「はくい！私は織斑くんを推薦します！」

「私も〜!!」

一夏を推薦する声が聞こえる。

「えっ!?俺？」

驚き、席を立ちながら言う。

「ふむ、織斑か…他に立候補は？」

「待ってくれ！千冬ね／＼スパンツ／織斑先生…」

「自薦、他薦は問わないと言った、拒否権は無い。」

「じゃあ、俺は星夜を推薦する！」

自分だけだと嫌だから俺を巻き添えにするつもりだ。

「天野と織斑か、他に立候補がいなければ——」

「ちよっと待って下さい！納得がいきませんわ！」

バンツと机を叩きながらオルコツトさんが叫ぶ。

「そのような選出は納得いきませんわ！物珍しいからと何も知らない男を代表にして、恥さらしもいいところですよ！」

一夏を睨みながら続ける。

「大体、私はこの島国まで来ているのはISについて学びにきたのです！無知な極東の猿に代表が勤まりますの!?!実力でしたら私の方が上でしてよ！」

段々と熱くなっていくクラスの日本人の生徒は確実に敵に回したな…。

国家代表候補生としてプライドとかあるんだろうけど少し言い過

ぎだな。

「大体、文化なども後進的な「いい加減にしろ!!」つなんですって!」
机を叩き、一夏が吠える。

「さつきから聞いてれば好き勝手に言いやがって! イギリスだって島国でろくな料理なんか無いじゃないか!? メシマズ何連覇だよ!」

「なっ私の祖国を侮辱しますの!」

「先に言ってきたのはそっちだろうが!」

「いいでしょう!! そこまで言うのでしたら決闘ですわ! 全力で叩き潰して差し上げますわ!!」

「俺は構わないぜ。」

「で、あなたは何故先程から黙っていますの?」

「ここで俺に話を振るのか。」

「日本に対する感想に対してはオルコットさんがそう感じたならそうではないだろう。俺はイギリスに行ったことが無いから比べられないしね。」

自分が思った事を率直に伝える。

みんなの視線が自分に集まるのを感じる。

「ただ、オルコットさんはイギリスの代表候補生なんだから、もう少し言葉は選んだ方がいいと思うよ? それにクラス代表については自薦もいいと言っていたんだからオルコットさんが自ら立候補すればよかったんじゃないかな?」

「ぐっ……」

オルコットさんが言葉を飲み込む。

「あと、一夏はイギリスの人が作ったイギリスの料理を食べたことはある?」

「いや、ない……。」

「なら、さつきの発言は駄目だね、噂レベルの話は持ち出しちゃ駄目だよ。」

「だって…あいつが…」

「確かに先に言われたけど、それじゃ子供のケンカだよ。」

「うっ…」

一夏も黙る…篠ノ之さんがすごい気迫でこちらを睨んでくる。が無視する。

「まあいい、クラス代表については織斑、天野、オルコットの3名より選出する。異論はあるか？」

織斑先生の言葉に異論は無く、俺達は頷いて、他の生徒は沈黙で答える。

「では一週間後にI Sによる試合を行う。そこで決定する。試合形式は一对一計3試合行う、3名はそれぞれ準備を行うように！」

織斑先生が手を叩き、決定事項を伝える。

「では少し遅れたが授業を始める。」

こうしてこの話は一週間後の試合までお預けとなった。

——放課後

「ふう、疲れた。」

「ああ、本当につかれたぜ。」

まだ初日だと言うのに非常に疲れた。

解りやすかったとはいえI Sはまだ生まれて10年程しか経っていない物だ。

専門用語の羅列ばかりの教科書、事前学習してもこの疲労感、まったくやってない一夏はもつと酷いだろう。

「それはともかく、一週間か…一夏は平気なの？オルコットさんは強敵だけど…I Sもろくに動かしてないんだらう？」

「うっ…それはお互い様だらう？」

「悪いが俺はこの2ヶ月間、G E A Rでトレーニングを受けてたからそれなりに動かせるよ。」

少し笑いながら答える。

「えっ…マジかよ…だったらー！」

色々と教えて欲しいんだらうがそうはいかない。

「残念だけど試合までは手助けしないよ？それより後ならいいけどね。」

一夏は断られると思っていなかったようだ。一瞬固まってすぐに疑問を投げかけてくる。

「なんでだよ?」

「知識に関しては一夏の自業自得だし。一緒に特訓とかすると試合までにごちらの手の内をさらすことになるから、互いに。篠ノ之さんにも教えてもらえば? 知り合いなんですよ?」

「わかった…:そうする。」

そんな話をしていると教室に山田先生が入ってきた。

「天野くん、織斑くん、まだ教室に居ましたね。よかったです。」

ここまで走ってきたのか、少し息が上がった山田先生が入ってきた。

「はい、2人ともいますよ。」

そう答えると山田先生はポケットから2つの鍵を出しつつ近づいて来る。

「お二人の部屋が決まりましたので部屋のかぎを渡しに来ました。」

俺と一夏の前に1つずつ鍵を渡す。

「えっ…:一週間は家から通うって…」

一夏が驚いた顔をしながら答える。

「はい。その予定でしたが安全のために今日から入れるようにしました。」

「はあ…:そうですか。あつでも荷物取りに帰らないと…」

「心配ない。」

気がつくとき大きめな鞆を持った織斑先生が入ってきた。

「お前の荷物は持ってきた。着替えと携帯の充電器があれば十分だろう。」

本当に最低限だなく。一夏も何か言いたげながらも鞆を受け取っている。

「あの…:織斑先生、山田先生こっちは?」

「ああ、お前の荷物は先程GEARに連絡してあちらの寮から持ってきてもらった。すでに部屋へ運んである。」

よかった、この2ヶ月は安全のためGEARのIS施設の方で過ごしてたからほとんど旅行鞆にまとめておいてあったんだよな。

そのあとは寮に関する諸注意を聞いて寮に向かった。

「え〜と…1025…1025…あつここだ。」

一夏が番号を確認しながら進んでいく。

「ここが俺たちの部屋か……。」

「部屋、違うみたいだな……？」

そう言うで一夏が驚き

「マジか!？」

「ああ…見ろ……。」

そう言つて鍵についたタグを見せる。

良く見ると一夏の鍵に比べて汚れた感じの鍵には 《1階宿直室》と書いてある。

「まあ…そうなら仕方ないな。お休み星夜。また明日な。」

「ああ…お休み一夏。また明日。」

軽く挨拶をして部屋の前から立ち去る。

そのあと後ろからすごい音がした気がするけど平気だよね？

しばらく歩くと寮の端にある《1階宿直室》とかかれた扉を見つける。

ここが俺の部屋のようなだ。

念の為にまずはノック。反応無し。

人の気配も感じないのでそのまま鍵を開け、部屋に入る。

真ん中に自分の鞆が置いてあるだけの畳の部屋、トイレとシャワーと簡易キッチンがある部屋だ。

一夏と違つてこちらは1人部屋か…ありがたい。

俺はIS学園に知り合いないからな。

一夏の部屋は中から音がしてたから誰かと一緒なのだろう。

あの感じだと知り合いの篠ノ之さんかな。

布団をしき、荷物を解く、シャワーを浴びて今日は寝よう。

こうして波乱の初日は終わった。

第3話 《代表決定戦に向けて》

♪〜☒〜

目覚ましの代わりにセットした携帯からメロディが流れる。目が覚めて携帯を操作し、止める。

朝の5時半、軽く運動してから朝御飯食べて教室に行けるな。早速ジャージに着替えて寮の外に出る。

まだ朝早いからだろうがあまり人は居ないな。とりあえず寮の周りを軽く走るか。

そう決めると寮に沿うようにして走り始めた。

「ふむ、朝から走り込みか？ いい心掛けだ。」

走っていると声を掛けられたので足を止める。織斑先生だ。寮監だし朝の見回りかな？

「織斑先生、おはようございます。日課だったので、寮の周りの確認も兼ねて。」

「ああ、おはよう。天野、来週の試合は楽しみにさせてもらおうぞ。朝から無茶振りですか…。」

「ご期待に添えるか解りませんが全力で挑みますよ。」
「それでいい。ではまたあとでな。」

そう言うとき織斑先生は寮へ入って行った。

その後は走り込みの続きと腕立て伏せ等のトレーニングを行ってから寮に戻りシャワーを浴びる。

そろそろいい時間なので食堂に行きご飯を食べる。和食セットを注文し、空いてる席を探す。

「お〜い。星夜、ここ空いてるぜ！」

一夏だ。篠ノ之さんとご飯を食べているようだ。他にも女子が3人座って居る。

6人掛けのテーブルであと1つだけ空いた席を指差している。
「同席、よろしいですか？」

一夏が良くても他の人が嫌かも知れないので断りをいれる。

「いいよ。」

「天野くんもお話聞かせてよ！」

「ささ、座って座って！」

「……」

篠ノ之さんだけ無言だったがまあ、肯定として受け取ろう。

席に着き軽く話ながらご飯を食べる。

会話の内容としては食事の量とかその程度の事だった。

終始篠ノ之さんは無言で、食べ終わるや否や席をたち行ってしまった。

「さて、ごちそうさま。先に行くよ。一夏、遅れるなよ？」

「あはは、2日も連続で遅れる訳ないだろ？」

「天野くん、あとでねー。」

「食べるの早いね。」

「じゃね。」

食べ終わり、あいさつをしてから立ち上がる。

食堂を出る時に織斑先生とすれ違ったので、挨拶しておく。

さて、早く教室に行かないとな。

「おはようございます。」

教室に入りながら挨拶しておく。

入口に近い席の人は軽く挨拶を返してくれた。

よし、軽く予習しますか。

そしてチャイムが鳴り、織斑先生が入ってくる頃には全員が席についていた。

——そして授業は進む

昨日のうちに多少は予習したのか一夏は昨日よりは理解しているみたいだ。

とは言え自分も今は必死にノートを取っている。

単語は理解できているが全体の文として見るとまだ理解が足りない。

これで基礎の基礎なのだから、この先の授業を考えると山田先生辺りに補講でもお願いするようだな。

「ISは宇宙での作業を想定してるので、操縦者の全身をバリアで包んでいます。また、生体機能を補助する役割があり、ISは操縦者の肉体を安定した状態で保ちます。これらには心拍数や脈拍——」

「先生、それって大丈夫なんですか？体の中をいじられてるみたいで少し怖いんですけど…」

確かに、実際にやっている事を文字で見るとなかなか不安になるかもしれないな。

「そんなに難しく考えることはありませんよ。例えばですね、皆さんはブラジャーをしていますよね。——」

あつと気づいた顔をしながら山田先生は俺と一夏を見ると

「お二人にはわかりませんよね。あはは…」

「つまり、スポーツ等でするサポーターやテーピングみたいな補助を行っている、捉えていいですか？」

「そ、そうですね。そんな感じですよ。天野くんの考え方でいいですよ。」

山田先生が顔を赤くしながら答えた。

そんな感じで授業は進んでいく。

——休み時間

昨日とは違ってかわって大量のクラスメイト達から、一夏と一緒に質問責めにあっていた。

好きな食べ物とか今まで暮らしていた場所、好みタイプとかね。

適当に答えていると、一夏には織斑先生に関する質問が始まった。それを答えようとした瞬間には後ろに織斑先生の姿が。

何時来たんだこの人？

「休み時間は終わりだ。席につけ。馬鹿者。」

一夏を叩きつつ、周りを散らす。

「あと織斑、お前のISは準備に時間が掛かる。」

織斑先生の言葉にぼかーんとする一夏。

「予備機がない。学園で専用機を用意するそうだ。」

全く話に追い付いていない一夏を見ながら周りのクラスメイト達はザワザワと話し出す。

「一年のこの時期に…」

「企業か政府が支援するってこと…?」

「いいなあ、私も欲しいなあ…」

フリーズしたままの一夏に対して織斑先生が言う。

「織斑、教科書の6ページを音読しろ。」

言われるやすぐに教科書を持ち上げページをめくり、音読を始める一夏。

「え〜と…——」

ページを読む一夏、その要点を頭の中でまとめる。

一つ、『ISの『コア』は467個しか存在しない。

二つ、『コア』を作れるのは篠ノ之束博士のみで、博士は現在『コア』の製造を拒んでいる。

三つ、『コア』の取引等は禁止されておりIS委員会によって国家や企業毎に割り振られている。

四つ、俺と一夏は特殊ケースの為、その貴重な『コア』を割り振られている。ただし、モルモット。

「理解出来たか？」

一夏は理解したと頷いている。

「あの…織斑先生、篠ノ之さんってもしかして…。」

まあこんな珍しい名字ならそう思うよね。恐らく関係者なんだろうな。

「ああ、篠ノ之はあいつの妹だ。」

やっぱりか。その瞬間クラス中から篠ノ之さんに質問をするが次の瞬間。

「私にあの人じゃない!」

大きな声を上げて否定した。

「すまない…私は何も知らないから教えられないんだ…。」

悲しそうな声で言い、そのまま顔を外に向ける。

有名人の妹だから昔から色々言われたりしたんだろうな。

「では、授業を始める。山田先生、号令を。」

「あつはい。皆さん、席についてください。」

織斑先生と山田先生によって場の空気は替わり、授業が始まった。さて、頑張りますか。

「安心しましたわ。まさか訓練機でやるとは思っておりませんでしたけど。」

授業が終わり、オルコットさんが一夏に話しかけている。

「まあ、結果は見えておりますが。流星にフェアではありませんですしね。」

「やってみなきや解らないだろうが。」

そんな会話していると、オルコットさんはこちら見て。

「あなたは確か企業に所属してるそうですね？なら専用機は？」なるほど、尤もな疑問だ。

一夏も気になるのかこちらを見る。

「ああ、有るよ。GEARが用意してくれた相棒が。」

そう言い、左腕に着けている腕時計を見せる。

これが俺の専用機の待機状態である。

青を基調とした本体に、グレーのベルト。

人によつては安物の時計に見えるかも知れないがこれが俺の相棒だ。

「へえー、それが星夜の…。」

「まあ、無様な戦いだけはしないで下さいな。」

そう言い残すと踵をかえし、席に戻った。

「あっ飯食いにいこうぜ。箸も一緒にさ。」

「俺は構わないが…。」

一夏なりの気遣いなのだろう、授業前の一件でクラスから浮き掛けている篠ノ之さんも誘っている。

「……いくぞ。」

少し不機嫌な感じだけど良いようだ。

食堂では一夏に興味を持った上級生が一夏にコーチをしようとして出たが篠ノ之さんが姉の名前をだしてコーチを名乗り出た。

あの反応は一夏を取られたくないからか。

午後の授業は特に何事もなく終わった。

放課後になると一夏と篠ノ之さんは道場に向かった。

一夏に聞いたが彼女は剣道に全国大会で優勝したそう。

小さい時は一夏も一緒に篠ノ之さんの家の道場に通ってたとか。なるほど、あの気迫はそれか。

自分も来週の戦いに備える為、機体のチェックを行う整備室を探す。

もしかして使用に許可とか必要だったかな？

そんな事を思いながら廊下を歩いていると……。

「おおくあまのんだあ。どうしたの？？迷子？」

妙に間の抜けたような独特のイントネーションで話すのは同じクラスのほとけの布仏さんだったな。

「違いますよ。布仏さん。整備室を使おうと思ってね。」

「そくなんだ。こつちだよ。」

案内してくれるらしい。布仏さんに着いていく。

「私ね。この学園にお姉ちゃんがいるんだ。だから名前前で呼んで欲しいなあ。」

「ん？ああ、わかりました。本音さん。あと、あまのんって俺の事？」

「

「そうだよ。あまのんってしゃべり方が固いよね。」

「同い年と言っても、異性しか居ない所に放り込まれた身では、肩身が狭いからね。少しでも荒波立てないようにね。」

「そつかく。苦労してるんだね。ここだよ。」

いくつか並んだ、重そうな扉の前で止まる。

「扉には使用中って書いてあるけど。」

「大丈夫だよ。今使ってるのはかんちゃんだから。」

そう言っただけで扉を開けて入っていく本音さん。かんちゃんって誰だよ。

「お邪魔します。」

そう言いながら部屋に入る。

様々な点検用機器などが並んでいる部屋で、打鉄の様な機体と一人で向き合っている娘がいて本音さんが話しかけている。

この人がかんちゃんか。

「はじめまして、俺は天野星夜です。よろしくお願いします。」

「……更識さらしき 簪かんざし……そっちのスペースは使わないから、使っていないよ。」

「ありがとう。」

本人から許可が出たので指定されたスペースに行く。

点検といっても展開とかはしないから、コンピュータ繋げて各パラメーターをチェックするだけだ。

ふと、横を見ると更識さんがこちらを見ていた。

「どうかしましたか?」

「展開とかはしないの?」

噂の男性操縦者の機体は気になるよね。

「当日までのお楽しみにしてください。更識さん。」

「簪……1つ上に姉が居るから名前で呼んで。」

「わかりました。簪さん。そちらも専用機ですか? 打鉄の面影がありますけど……。」

それを聞くと少し暗い表情になり。

「まだ……完成してないから……。この打鉄うちがね式にしきは……。」

なんでも話を聞くと。

元々倉持技研と言う企業が開発を担当。

← 入学までには完成予定。

← 2ヶ月程前、まさかの男性適合者発見。

← 政府から男性用機体の開発要請を受ける。

← 男性用機体の開発に全スタッフ、リソースを投入。

← その間、打鉄式は放置され開発が中断。

余りの状態に我慢出来なくなり、簪さんが受領し、独自に開発継続する事に。

「なんか…その…。すみません。」

この話を聞いたら自然と頭を下げて、謝っていた。

「ううん…あなたも、織斑一夏も悪くない…。」

「でもなんで1人で？」

「お姉ちゃんに負けたくないから…。」

簪さんの瞳には強い決意みたいな物を感じる。

「そうか…。何か手伝える事があつたら言つてね。本音さんでも通じてき。今日はありがとう。」

「ん…さようなら…。」

「あまのん。またね。」

2人に挨拶をして整備室を去った。

部屋に戻るとパソコンの電源を入れる。

敵を知るのは基本だからな。

『イギリス代表候補生』『セシリア・オルコット』

この2ワードで検索をかける。

やっぱり結構出てくるな。

専用機はB ブルー・テイアーズ Tか…

流星に詳細なスペックデータは無いが解ることは射撃による戦闘を主眼に開発された機体みたいだな。

オルコットさんは母国だとアイドルみたいな扱いなんだ。

写真集とか出てるし。まあ綺麗だよな。

三年程前の越境鉄道による横転事故にてご両親が亡くなられている。

む、なんか余分なデータを見てしまった気がする。

そのまま調べるとオルコット家は比較的裕福な家だったようだ。

そう言えば自分から貴族とか言つてたもんな。

兄弟等は居ない。つまりは12、3才の頃から1人で家を守っていたのか。

結構な財産が有ったみたいだから色んな奴らが寄つてきたのは想

像にできるね。

そのせいであんなに男が嫌いなのかな？

これ以上は調べても何も出ないだろうからもうやめて寝るかな。

第4話 《初めての休日》

IS学園に入学してから数日、今日は初めての休日
完全寮制ではあるが外に出かける事にたいしては寛容で特別な申
請等はない。

この5日程で知り合った、仲良くなったクラスメイトと一緒に遊び
に行く生徒。

外国等の遠方から来ているため、最低限な物しかない部屋に必要な
物を買うために出かける生徒。

それなりに近い所に実家がある生徒は、家に帰って親や友人に話し
たい事が沢山あるだろう。

そんな訳で現在、学生寮はいつもより静かだ。

自分も旅行鞆1つ分の荷物では足りないものを買うに行く予定だ。

電車に乗り、大型ショッピングモール『レゾナンス』へ向かう。

「ふう、こんなもんかな?……ん?」

必要な物を買ひ、店を出る。

買った商品はIS学園には送ってくれるサービスが在ったので
送ってもらうことにした。

この時期は新生入生が沢山来るから大量購入の生徒に対する売上
増加を見込んでるのだろう。

折角来たのだからもう少し見てから帰ろうとしたが。

「だから、私は……!」

「いいじゃない。アタシ達と楽しい所に行こうだわ。」

「そーそー、色々教えてあげるバリ。」

「奢って上げるジャン?」

なんかすごい3人組に絡まれてるオルコットさんを見かけた。

彼女にとっては余計な事かも知れないがここで見てみぬ振りを出
来ないな。

「おーい。オルコットさん。」

「あつ……あなたは……!」

3人組の後ろからオルコットさんに呼び掛ける。
それに気づいた3人組は振り向きながら。

「なに？この娘はアタシ達が先に目をつけたんだわ。」

「あとから来た奴は黙ってるバリ。」

「それともお前、こいつの連れジャン？」

小物みたいな事を言いながら睨んできた。全然迫力はないけど。

「オルコットさん、待たせてすみませんね。さあ行きませう。」

3人を無視してオルコットさんの手を取り、離れようとする。

「アタシ達を無視するとは言い度胸だわ！」

「俺たちの怖さを知らないようバリ。」

「一発怖い目にあってもらうジャン!？」

そう言うど襲い掛かってきた。

オルコットさんを後ろに回し、3人の前に立つ。

3人は左右と正面の3方向から殴り掛かってくるつもりだ。

左右の2人がほぼ同時に拳を突き出してくる。

少し近かった右から来ているバリ男(仮)の腕を掴みつつ、腹に一
発。

体がくの字に曲がる、そのままバリ男を正面から来ていただけ男
(仮)に押し付ける様に放る。

2人が体制を崩したので左のジャン男(仮)に体勢を低くしながら
足払いをかける。

体が宙に浮いたところでそのまま体を掴み、2人の方へ投げる。

「ジャン!？」「バリ!？」「だわ!？」

3人を瞬く間に三段重ねにする。

「まだ…やる?？」

構えなおしながら、3人を睨む。

「今日は調子が悪かっただわ。」

「つ、次は覚えてろバリ。」

「絶対いつか泣かすジャン!？」

テンプレの様な捨て台詞を言いながら3人は逃げて行った。

後ろに居るオルコットさんの方を向きつつ。無事を確認する。

「大丈夫だった？オルコットさん。この時期は慣れてない生徒に案内するとか言つてナンパする奴らが居るんだよね。」

「助けて頂いた事にはお礼を申しますが、あの程度の者でしたら私だけでも平気でしたわよ？」

オルコットさんはこちらを軽く睨みながら言う。

「まあ、オルコットさんなら平気なのはわかりますけど。知り合いが困っていて、それを無視するのは自分が嫌だからね。」

少し乱れた服を直しながら答える。

別にオルコットさんを過小評価している訳ではない。

ただ、見て見ぬ振りはしたくなかったから。これは本心だ。

「そうですか。……全く本当にこの国は低俗ですわ！」

元々印象が悪くなかった上に、あんな奴らに絡まれたらそうもなるよね。

「なあ、オルコットさん？」

「なんですか？」

「例えば、イギリス料理を全く知らない人がいてさ、たまたま入ったイギリス料理の店が不味かったからってイギリス料理全てを否定されたら、どう思う？」

オルコットさんはすぐに何が言いたいのか察したようだ。

「つまり、私が短絡的だとおっしゃるつもりですか？」

「国家代表候補生なんだからもう少し慎重になった方がいいんじゃないの？」

立ち話もなんなので近くのベンチに座り、話しをする。

「俺はオルコットさんを全然知らないし、オルコットさんもそうでしょ？第一印象ってのもあるけどそれだけで全く関わらないのもつたないでしょ？最低でも1年間は同じクラスの仲間なんだし。」

この前の騒動でクラスの一部からオルコットさんに対する評価はあまり良くない。

威張り散らしているとか、全員を見下してるとか結構な言われようだ。

確かに全員仲良くとは難しいだろう。

でも、ギスギスした空気は誰も望まないはずだ。

「なぜ…ですか？」

オルコットさんが聞いて来た。

「あなたは先日私を庇うような言い方をされました。この国を侮辱した私を…なぜですか？」

「確かに日本は故郷だし、馬鹿にされたら怒るよ？でもオルコットさんが言ったのは『オルコットさんから見た日本』と『オルコットさんから見たイギリス』を比べた話でしょ？だからその評価を変えるだけの物をオルコットさんに知ってもらえばいいじゃないかな？」

オルコットさんはまだ知らないだけなんだ、だから知ってもらえばいい。

「それに物珍しさだけで一夏をクラス代表に推薦したのも事実だし、自己紹介の時に専用機持ちで代表候補生なのをオルコットさんは言っていたんだから誰か推薦するべきだったね。俺も推薦しなかったから同罪だけど。」

あの時は様子を見ていただけの俺も悪い部分はある。

「もう一度言うけど、オルコットさんも誰かに選んでもらえるって決めたのは良くなかったかな？『私が皆さんを導きます！』位言ってもよかつたんじゃないかな？」

「確かに…あなたの仰る通りですわ。」

「あの時、私はただ珍しいだけの、知識も、覚悟も無さそうな男が担ぎ上げられているのを見て、子供の様に癩癩を起こしただけですわ。」

オルコットさんはキツと前を見つめる。

「それではいけませんわね。貴族として間違った方向へ進みそうな者達を導かねばなりませんわね。」

スツとベンチから立ち上がり、こちらに振り向きながら。

「そのためにも、まずは皆の前であの男を完膚なきまでに倒し、目を醒まさせて差し上げませんと。当然、あなたも全力でお相手させていただきますわよ？」

「ああ、悔いの無い試合にしましょうー！」

俺も立ち上がり、手を差し出す。

一瞬、オルコットさんはキョトンとしてから握手をする。

ぐうぐう…

急に気の抜ける音がした。

俺のではない。目の前のオルコットさんの顔が段々と紅くなる。

ちょうど今は昼時だし仕方ないね。

「オルコットさん…近くに良い和食の定食屋があるから行ってみませ
ん？奢りますよ？」

「え…ええ…すっかりエスコートしてくださいませ…。」

さっきの音は忘れるのが紳士なのだろう…。

オルコットさんの知らない日本文化を知ってもらおうとしよう。

その後、2人で昼食をしながら様々な事を話した。

日本とイギリスの違いを知り、お互いに驚いたり、笑って楽しく過
ごせた。

笑ってるオルコットさんは初めてだな。

「うん、そっちの方がいいですね。」

「何がですか？」

「いえ、今まで笑ってる所を見たことがなかったので。やっぱり女性
は笑顔の方がいいですから。」

オルコットさんは少し考える。

「そうですね。両親が亡くなってから笑った事など無かったかもし
れません。」

気になることを聞いてみるか。

「今、オルコットさんには『信頼』できる人って居る？」

「『信頼』…？ええ、居りますわ。それはメイドとして仕えておりま
すが、私は姉のように慕っている。チエルシーです。今はイギリスの実
家を任せておりますの。」

よかった、人間不信とかではないようだ。

「なら、チエルシーさんに良い報告が出来るようにしないとね。」

「ええ、そうですね。まずは明後日の試合の全勝報告したいもので

すわね。」

「残念ですが一勝一敗かも知れませんか？」

そのまま談笑が続いた。

食事をした後はオルコットさんが買い物を買ってないので、店の案内をしてあげた。

「ふう…本日は色々ありがとうございましたわ。天野さん。確かにまだまだ知らないことがありましたわ。」

初めて名前で呼ばれた気がする。

「ええ、お役に立てたなら良かったです。」

「では、また明後日に…ご機嫌よう。」

「はい。また明後日に…。」

こうしてIS学園に来て最初の休日は過ぎて行った。

第5話 《激突！蒼雫！》

俺がIS学園に入学してから一週間が経った。

今日はクラス代表を決めるため、俺と一夏、オルコットさんが対決する。

第三アリーナのピット、待機室にあたる部屋にて俺は精神を研ぎ澄まして試合に備えていた。

機体は万全、体の調子も良好だ。

まだ一夏のISが届いてない為、最初にオルコットさんと戦うのは俺なる。

この一週間で仲良くなった本音さんと簪さんが、先ほどピットまで激励に来てくれた。

今は観客席にいるのでここには居ないが、応援されて悪い気はしない。

今までGEARでの模擬戦しかやってない、初めての対戦だ。悔いのないよう、全力で行こう。

『天野くん、準備はいいですか？』

部屋に備え付けられたスピーカーから、山田先生の声が聞こえる。

「はい、準備は万端です。」

答えると同時にピットのハッチが開き始める。

『では、天野くんのタイミングで出てください。』

一度息を吐き、心を落ち着かせる。

そして前を見て。ISを展開する。

青の装甲が体を包み込む。

四肢にはホイールの様なパーツが付き、動作確認の為か軽く回転する。

そしてヘルメットの前方に付いていたバイザーが上がり展開が終了したことを伝える。

——電童——

珍しい全身に装甲を纏うタイプのISだ。

これが俺の愛機、第二の体。

ズシリ、と重たい音をたてながらカタパルトに立つ。

「天野星夜、電童！行きますす!!」

力強く叫ぶとカタパルトによって加速し、アリーナに向かい射出される。

アリーナの中央付近には、オルコットさんが自らの専用機を纏い待機している。

正面に対峙するように飛び、静止する。

「お待たせしました。オルコットさん。」

「ええ、お待ちしておりましたわ。天野さん。」

こちらを見るオルコットさん。

ブルー・ティアーズ、ネットで写真は見たけどやはり直接対峙すると違うな。

彼女の経験からか、余裕を感じられるが隙はない。

「天野さん、私はまだ貴方の全てを知りません。その実力を見せて頂きます！」

「わかりました。俺も貴方をまだまだ知らない。代表候補生まで登り詰めた意思と力、見せてくれ！」

それぞれが構える。

俺は拳を…彼女は銃を…

全く知らない相手ではない。でも、戦うのは初めてだ。

持てる力、全てをぶつける！それが戦う相手に対して出来る最大の礼儀だ！

『それでは……セシリア・オルコット対天野星夜の試合を始めるっ！』
試合開始のブザーが鳴り、先に動いたのはオルコットさんだ。
構えた銃から電童に向かい一筋の閃光が走る。

身を捻りに回避するが掠ってしまっただらしく、軽微のダメージがア
ナウンスされる。

狙いが正確なお蔭で予測出来たから、直撃を避けれた。

そのままオルコットさんは、距離を取るため後ろに後退しつつ射撃
を行う。

こちらは回避を続ける。オルコットさんの癖を見破るために。

「なかなかやりますわね。なら、これで！」

オルコットさんはそう言いながら機体から4つの影を射出する。

「踊りなさい！セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる
円舞曲で！」

ブルー・ティアーズの特徴と言える武装、自立機動兵器ブルー・ティアーズと言うらしい。

名前が被って解りづらいな。ビットとも呼ぶ。

ともかくこの時点で俺は本人を含めた5つの砲口から狙われるわけだ。

「天野さん、貴方先程から何をしていますの？武器を出さずに私に勝つつもりですか？」

セシリアさんの言葉に、激しくなった閃光の嵐を掻い潜りながら答える。

「じゃあ、見せてあげますよ！」

四肢に付いているホイールの様なパーツへハイパープラズマドライブが回転を始める。

回転が上がるにつれ、四肢それぞれにエネルギーがたまる。

技に警戒しながらも正確な射撃を繰り返すオルコットさん。

射撃の癖は読めた。ビットは反応の弱い部分を狙うようしている。

だから位置を誘導できる。

よし、ここだ！

四肢に貯まったエネルギーを、一気に解放する。

「閃光！！雷刃撃！！」

閃光雷刃撃せんこうらいじんげき。

ハイパープラズマドライブからのエネルギーを解放し、そのまま自身を回転させて周囲を焼き払う技だ。

想定外の攻撃だったのか、オルコットさんは反応できずビット4機を一瞬にして失う。

射程ギリギリの位置に居たオルコットさんは、余波を食らって少身体勢を崩した。

その隙を逃さずに接近する。

「うおおおお!!疾風!!三連撃!!」

一気に距離を詰めると正拳突き、回転蹴り、裏拳のコンボを叩き込む。その反動でまた距離が開く。

「ぐうっ…まさかこれほどとは。」

セシリアさんは腹を押さえながらも、こちらを睨み、銃を向ける。

「ですが!まだ負けていません!!」

銃口から再び閃光が放たれる。紙一重で回避をしそのまま一直線に接近する。

「かかりましたわね!!」

ガシヤンと音をたてながらブルー・ティアーズからビットが射出される。

「なにっ!!」

予備がある位考えて置くべきだった。

勝手に相手の武器を失わせたと思っていた俺は隙を晒し、そこにビットからミサイルが打ち出される。

直撃し、大きな衝撃と爆炎に包まれる。

機体から警報が流れる。無防備な所で当たったものだから非常にまずい。

機体ダメージ大。防御力低下。

スラスター損傷。機動力低下。

「ぐっ…。やるね。オルコットさん…。」

再び距離が開いた状態で向かい合う。

お互いにダメージは大きい。次に当たった方が勝ちなのは誰が見ても明白だ。

「ふっわずか2カ月足らずの初心者である貴方がこれ程のものとは…。」

「お褒めにあずかり光栄ですが…。まだ終わってはいない。」

「ええ、これで終幕フィナーレと参りましょうか?」

「望む所だ!!いくぞ!!」

俺は電童と今まで培ってきた技を信じる。

この距離では先程の様に閃光雷刃撃とかを使ってる余裕はない!

ハイパーセンサーから送られてくる情報を受け止める。

オルコットさんが手に持つ銃から、閃光が放たれるとその後すぐに2機のビットからミサイルが打ち出される。

このまま避けた所で、追撃を貰うだけだ。

「はあああ!!」

気合を入れて叫びながら、ミサイルに向かって行く。

「一体何を!?!」

そのままミサイルひとつを掴むともう一方のミサイルにぶつける。

あまりにも破天荒な行動の為かビットと本人、両方の動きが止まる。

その隙にビットを殴り飛ばして、オルコットさんの上を取る。

PICの制御を切り、重力によって加速する。

右足のハイパープラスマドライブを、高速で回転させながらオルコットさんに近づく。

「爆砕!!ばくさい重落下!!じゅうらっか」

本来ならば純粹な重量と落下の加速のみで攻撃する技をだが、電童の場合はハイパープラスマドライブによる回転分のダメージが載る。オルコットさんは咄嗟に銃を盾にしようとするが、焼け石に水だ。銃が碎け、そのまま本人に当たる。

そして――

『ブルーティアーズ、シールドエネルギー0、勝者は天野星夜!!』

俺の勝利を告げるアナウンスが流れる。

良かった。勝てた。

そんな風に考えていると目の前のブルーティアーズを纏ったオルコットさんが気を失ったのか、そのまま真つ逆さまに落ちていく。

咄嗟に加速して彼女を掴み、抱え込むように抱き寄せる。

減速をかけてはいるが先程の戦闘のダメージが原因か、あまり効かない。

そのまま地面に対して、自分をクッションにするように落下する。ドガンと、すごい音をたて地面に衝突した。

見た感じオルコットさんに、大きなケガは無さそうだ。

ピットの方から担架をもった先生達が走って来るのを見ながら自分の意識が徐々に無くなっていくのを感じた。

「安心しろ、お前のお陰で外傷もない、すでに目が覚めて今は織斑との試合に向けて準備をしている。」

「天野くんもすぐに検査をします、結果しだいで試合に出れますよ。」
よかった、無事なようだ。

しかしすぐに次の試合の準備か、流石は代表候補生だ。

「じゃあ担当の先生を呼んでできますから、少し待っていてくださいね。」

そう言ってから山田先生は、部屋から出ていく。

「なかなかいい動きだったな天野、拳法か？」

「はい、少林寺拳法の出雲道場で習いました。電童に合わせていくらかアレンジはしていますが。」

織斑先生の質問に答える。

「そうか、山田先生も言っていたが、この後の検査で異常がなければ織斑との試合もできるがどうする？」

「是非やりたいです。後日にしたら楽しみにしてる皆に悪いですから。」

「そうか。では私は次の試合の準備があるからな。しっかり見てもらえ。」

織斑先生が部屋から出ると入れ替わりで、白衣を着た先生が入ってきて検査を受けた。

「特に問題は見られませんね。体が丈夫だからかな。」

「鍛えていますから。」

検査も問題なかったので次は一夏との試合だ。

迎えに来た山田先生と一緒にピットに行く。

山田先生に聞いた所、一夏が負けたらしい、しかも自爆だと言うのだからビックリだ。

「織斑くんの準備が終わったら連絡しますので、天野くんも準備をして待っていてくださいね。」

山田先生はそう言ってピットから出ていった。
言われた通り、機体の確認をする。

「機体のエネルギー補充とかは気絶してる間にしてもらったから大丈夫だな。」

確認を終えるとピットの扉が開いて、オルコットさんが入ってきた。

「あつオルコットさん、平気だったんですね。それと一夏に勝ったんでしょ？おめでとう。」

先生から聞いては居たが、やはり目で見ると安心出来るな。

「先程はありがとうございます……。貴方が身を挺して助けて下さったと。」

オルコットさんが頭を下げる。

「頭をあげてよオルコットさん、目の前で助けられるのになにもしなかつたらきつと後悔してたから。この前と一緒にだよ。」

「貴方の言う通りでしたわ。」

頭を上げながらオルコットさんは言う。

「何が？」

「織斑一夏さんのことです。先程の試合は私が勝ちましたが後一歩の所まで追い詰められました。あの人もまた、覚悟と強さを秘めた瞳をしておられました。」

オルコットさんは続ける。

「私の父は常に母の顔色を伺ってばかりの人でした。それはISが世に出る前からで、女尊男卑の世になってからはさらに情けなく見えました。」

「そんな父を見て、私は育ちました。そして3年前、両親はいつもは別々に居たのに、その日は一緒に列車に乗って事故にあい他界しました。私には莫大な遺産が残り、それを狙う金の亡者が沢山来しました。」
俺は黙ってオルコットさんの話を聞き続ける。

そんな彼女もこちらをしつかりと見つめてくる。

「私が今まで見てきた男性はそんな方ばかりでした。だから、男は弱く、情けない者だと。ですがそれは間違いだったと貴方に教えていただきました。ありがとうございます。そして、今までの無礼を謝らせて下さい。」

再び頭を下げる。

「オルコットさんがどれだけ苦労してきたのか、全然想像もできないけど、大変だったのと努力をしてきたのはわかるよ。俺は気にしてない。でも、後で一夏やクラスの皆にも謝った方がいいと思う。」

「何かあったらさ、俺で良ければ力を貸すよ。クラスメイトを信じてさ、頼るのは貴族も庶民も関係ないよね?」

オルコットさんに手を差し出す。

今回は普通に握手をしながら、オルコットさんは言う。

「はい、天野さん、『信頼』させていただきますわ。あの…私の事はセシリアと、呼んでくださいいな。」

「ああ、わかりました。セシリアさん。俺も星夜で構いませんよ。」

そういうと嬉しそうな顔をしながら。

「はい!せつ星夜さん!」

元気に返事をしてくれた。

『天野くん、聞こえますか?織斑くんの準備ができました。』

山田先生からの通信だ。

一夏の準備が終わったようだ。

「天野です。わかりました。アリーナに出ます。」

先生に返事をして、電童を展開しながらカタパルトへ向かう。

「あつあの星夜さん!御武運を!勝利を!信じておりますわ!」

「ああ、セシリアさん。行ってくるよ。天野星夜、電童!行きます!」

セシリアさんが見送ってくれる中、再びアリーナに向かう。

よし、次は一夏が相手か……。

アリーナの中央付近に少し遅れて一夏がやって来た。

「待たせたな!星夜!って変わったISだな?」

「フルスキン全身装甲は初めてかな?こいつは電童だ。」

一夏は初めて見るらしい。

つまり最初の試合は見てないのか。織斑先生の指示かな?

お互いに手の内が全くわからない状態か。

「俺のは白式だ!さて、勝たせてもらおうぞ!星夜!」

刀を構えながら一夏が言う。

「ふん、さつきは自爆だつらしいな？力みすぎて同じミスするなよ？」
「こちらも拳を握り構えを取る。」

『それでは織斑一夏対天野星夜の試合を始める！』
開始を告げるブザーが鳴る。

剣士対闘士の戦いが始まった。
四肢のハイパープラズマドライブの出力を上げながら、一夏に近づ

く。
一夏は上段に刀を構えて、真つ直ぐに降り下ろす。

左腕のドライブ部分を使い刀を弾く。当たった一瞬で火花が散る。

「なっ！どんだけ速いんだよ!？」

「驚いてる暇はないぞ！」

残った右腕の出力を上げながら殴る。

「旋風!!回転拳!!」

こちらの拳が腹に入り一夏の体がくの字に曲がる。

このまま畳み掛ける!!

両手を合わせて握り思いつき降り下ろす。

「剛腕!!粉碎撃!!」

一夏が体勢を戻す前に、頭部へ向けて腕を降り下ろす。

そのまま一夏は、勢い良く地面へ叩きつけられる。

「ぐっ…まだ…終わりじゃねえ!!」

立ち上がり、まだ闘志を燃やす一夏に対して、俺は先程セシリアさんを倒した同じ技を掛ける。

「爆砕!!重落下!!」

全体重に思いつきり加速に加え、最大速度で回転する右足のハイパープラズマドライブ。

「はああああ!!」

気合を入れて叫ぶ。対する一夏は避けようともせず刀を構えた。

「いくぜー星夜あーこれが俺の『零落白夜』だあ！」

一夏が叫ぶと手に持つ刀の形に変化が現れる。

一部が開きそこからエネルギーが溢れ巨大な刃を形成する。

成る程、これは当たれば只ではすまないな。

だがここで怯んではいられない。

奴の刀のより速く当たればいい。それだけだ!!

そう思い出力を上げる、足のハイパープラスマドライブからエネルギーが溢れ出る。そのエネルギーが全身を包み込む。

俺の意思を汲み取り電童が力を貸してくれる。

ならこの技は爆砕重落下改め：

「閃光せんこう!!剛爆雷ごうばくらい!!」

巨大な雷となった俺は一夏に向かい加速する。

一夏もこちらが間合いに踏み込むのを、今か今かと待っている。

わずか数秒の出来事のはずなのに長く感じられる。

「うおおお!!」

「はあああ!!」

一夏が刀を横に振るうがこちらが途中から加速したせいか斬撃は体をかすめ、右腕に当たる。

この一撃でこちらのシールドエネルギーが半分近く持っていける。

右腕はやられたが、こちらの技が潰されたわけではない。

そのまま加速を失う事なく一夏にぶつかつた。

纏っていたエネルギーが白式に纏わりつく。

倒れた白式の上に居る俺はそこから後ろに飛び退き、着地する。

そして後ろに振り向きながら、左手を開きその手の平に右の拳をぶつけ、抱拳礼の形をとる。

その瞬間、白式に纏わりついていたエネルギーが爆発する。

後方で起きた爆風を背中で受ける。

『白式、シールドエネルギー0、勝者は天野星夜!!』

今回も俺の勝ちだ。

「お疲れさまですわ。星夜さん。」

「おつかれさま〜あまのん〜。」

「…お疲れさま…天野くん…。」

試合が終わり、ピットに戻るとセシリアさんだけではなく、本音さ

んど、簪さんも居た。

決着が付くやすぐにダツシュして来たのだろうか？

ISを解除する。

「ああ、みんな、ありがとう。」

セシリアさんが、タオルとスポーツドリンクを持ってきてくれたのでお礼を言い受けとる。

「いやあくあまのん強いね。2人に勝っちゃったね。」

「凄く…格好良かった…。」

「まあ、星夜さんなら勝つと信じて降りました！」

待ってる間にお互いの自己紹介は済んでるみたいだな。

「いや、今回ははつきり言つて一夏が理解してないから勝てた気がするよ。」

素直に思つたことを伝える。

「刀だけじゃなくて武器つてのはその長さや重さとかを覚えてから実戦で使うものだ。今日いきなり渡された刀や鎧白式で戦つた一夏は素人以下と言つても過言じゃない。」

俺の言葉に3人はうなずき。

「成る程…確かにそうですね。」

「じゃあくおりむーが慣れてたら結果は違ったかも知れないってことかな？」

「実力はまだ未知数って事だね…。」

「まあ、その辺は織斑先生がしっかりと指導するだろうから平気でしよ。」

ドリンクを飲みながら答える。

こうして俺のIS学園での初戦闘は、大金星でスタートした。

第7話 《クラス代表、決定!》

クラス代表決定戦を行った翌日。

朝のHRにてクラス代表が山田先生の口から発表された。

「1年1組の代表は織斑一夏くんに決定しました。あつ一繋がりいいですね。」

山田先生は楽しそうに言い、クラスの女子は盛り上がる。

状況を理解してないのは隣の席で呆けた顔をした一夏だけだろう。

「あの…先生…。」

一夏がやつと口を開く。

「何ですか？織斑くん？」

山田先生は無邪気に聞き返す。

「俺は昨日の試合で2回とも負けたんですけど…。なぜクラス代表になってるんでしょうか？」

まあ普通はそう思うよな。

「だって、普通に考えて2回共勝った星夜が代表じゃ無いんですか!？」

一夏は俺——天野星夜——を指さしながら大きな声を上げる。

「えっと、それは——」

山田先生が言おうするがこちらから言っておこう。

「俺と」

「私が」

「おまえを推薦したからだ!」

「あなたを推薦したからですわ!」

セシリアさんと声が重なる。なんか嬉しそうだなセシリアさん。

「確かにお前が負けたのは事実だが。」

「しかし、考えてみればそれは当然でしたわ。」

「まず、お前は入学時のIS知識、操縦技術は全く無かった。」

「それに比べて私や星夜さんは、差はあれど専用機を使った訓練をしております。」

「なら、今後この差を埋めるために出来る事は。」

「一夏さんが代表となり少しでも多くの実戦の機会を設けることです。」

わ。」

「どんなことも実戦こそが何よりの糧となるだろうからな。」

「よってそれを織斑先生と山田先生に相談し、推薦させていただきましたわ。」

昨日の放課後、実はセシリアさんが俺の部屋に来てクラス代表を辞退すると相談を受けたのが始まりだった。

その時に2人で話し合い、大体こんな感じで一夏の代表が決まった。

ちなみにこの台詞はアドリブです。

思いの外きれいに出来たな。セシリアさんスツゴい笑顔だ。

「で、でもよ?！」

一夏が反論しようとするが、甘い。

「一夏、あの時の織斑先生は『俺達3人の中から決めること』、『試合で決定をする』としか言っていないよ?一番勝った者をクラス代表にするとは言っていないよ?！」

「だからって当事者が居ない所で普通決めるか?！」

「俺もセシリアさんも、そして先生達も、お前に強くなって欲しいからクラス代表に推薦するんだよ?わかる?！」

「ぐっ…:わかった…:。」

実際、一夏にとつても悪くはないはずだ。

代表になれば色々と出なきや行けない事も増えるから知識も技術も付くはずだ。

あとは一夏のやる気次第だ。

「いやあくセシリアも天野くんもわかってるねー。」

「私たちは貴重な経験が積めて、情報を他のクラスの子に売れる。一粒で二度美味しいね。織斑くんは!！」

そんな会話をしていると織斑先生が入ってきたので雑談は終わり、授業が始まった。

因みに昨日のうちにクラスみんなにセシリアさんは初日の暴言に対しての謝罪を行っていた。

お陰でクラスのみんなからの陰口みたいなのもなくなった。良

かった良かった。

——その日の放課後——

「なあ、星夜にセシリア！俺に教えてくれ!？」

授業が終わり、今日の授業内容についてセシリアさんに色々聞いて居たところで横から一夏がやって来た。

「いや、どうしたんだ？いきなり?」

「一体どうなさいましたの?」

「2人とも朝言ってたろ？実戦は何よりも糧になるって。だから教えてくれ!」

確かにいったね。でも…。

「俺は構わないが…その後ろにいる方が許可を出すかな?」

一夏の後ろにいる不機嫌な篠ノ之さんを指さしながら聞く。

「一夏、貴様は私が教えているのにそれだけでは不満だと言うのか?」

そのまま一夏と篠ノ之さんの言い合いが始まる。

2人の話を聞くと

一夏は篠ノ之さんに教えて貰う約束をしたがこの一週間は剣道だけで知識的な事は何もやってないそうだ。

確かに篠ノ之さん言う通り使ってるのは人間だからそれを鍛えるのはいいけど少しは座学も必用だよ?」

それに篠ノ之さんただけどどうしてもアリーナの使用許可をとつても訓練機が予約で一杯の為一夏が一人で飛ぶ位しかやれないそう
だ。

「じゃあさ、曜日で予定を決めてさ、剣道をやる日、ISの模擬戦をやる日、座学の勉強の日を決めたら?」

とりあえず提案をする。あらかじめ決めて置けば訓練機も借りれる可能性が増える。篠ノ之さんだって悪くないはずだ。

「いや、その必要はない!!」

篠ノ之さんは言いきる。

「一夏の教官は足りている。私が直接頼まれたのだからな!」

いや、その一夏が俺達にも言ってきたんだよ?」

「篠ノ之さん、あなたは一夏を強くしたいの?それとも一夏を独占し

たいの?」

「なつなげそんな話になる!!そんな事はない!!私はただ、一夏には私が教えるから充分だと言っているんだ!」

ばんっ!篠ノ之さんが机を叩く。

「今、一夏は自分から俺達にも教えて欲しいって言ってきたのを見てた?それは篠ノ之さんとの勉強だけでは足りない和一夏が思ったからだろうか?」

俺は言い返す。

「一夏!貴様は折角私が特別に教えていると言うのに、それを力不足だと言うのか!」

一夏を睨む篠ノ之さん。

「いや、俺は色んな人から教わった方が良いと思って……。それに筈にばかり迷惑をかけるのも悪くなって:。」

たじろぎながら答える一夏。

「はあ、一夏、そつちで話が着いたらこつちにきてくれないか?」

このままでは話が進まなそうなので一旦切る。

「あつ……。ああ……。そうだな……。ゴメン、迷惑かけた。いこうぜ筈?」

一夏が篠ノ之さんに呼び掛ける。

「ふんっ!!」

あからさまに不機嫌な態度をとり、歩いていく篠ノ之さん。

「筈さん、不機嫌でしたわね。」

さつきまで沈黙していたセシリアさんが言う。

「ああ、きつと幼馴染みが好きすぎて他の人と、話してるのすら許せないんだろうな。一夏、『愛』が重そうだな。刺されないか心配だよ。」

「そう、ですわね。」

セシリアさんと苦笑した。

——結果——

結局は一夏と特訓を俺達もやることになった。

原則として筈さん——本人から筈と呼べと言われた——の訓練機が予約出来たら俺とセシリアさんに声をかけるそうだ。

——後日——

授業も進み基本知識は一通り終わり、実技授業も増えてきた。

だが、内容としては実機を使った授業ではなく、実際のISでの動きを見る授業である。

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践して貰う。天野、織斑、オルコット。試しに飛んで見せる。」

織斑先生に呼ばれて、クラスの列から出る。

まあこのクラスは専用機持ちが多いので見本には困らない。

専用機持ちが居ないクラスは先生がラファールや打鉄など使い実践するらしい。

歩きながら心の中で右腕の愛機に呼び掛ける。

全身が光に包まれ1秒ほどで自分の体には電童が装着される。

「熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ。」

「はい。精進します。」

そうか、プロはもっと早いのか。

横ではすでにブルーティアーズを展開し終えたセシリアさん。

大絶賛苦戦中の一夏がいる。

それぞれの待機形態は

セシリアさんのブルーティアーズはイヤーカーフス

一夏の白式はガントレット

「早くしろ。」

織斑先生に睨まれ一夏は腕を突きだしガントレットに手を添えて集中する。

あのポーズが1番 イメージしやすいそうだ。

俺も最初の2週間位は構えをとらないと展開できなかつたしな。

やっと3人が展開を終えたので織斑先生は。

「よし、飛べー！」

織斑先生の言葉を聞き、セシリアさんとほぼ同時に急上昇する。

一夏は反応が遅れたのか少し下を飛んでいる。

『何をやっている。スペック上の出力はブルーティアーズよりは上のはずだぞ。最大加速性能なら電童より上だぞ。』

織斑先生から一夏に対しての厳しいお言葉だ。

『自分の前方に角錐を展開するイメージ』ってなんとなく感覚がつかめないんだよな。」

「一夏、教科書はあくまでも参考で自分に合った方法をやるしかないよ。」

「そういわれてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよ。なんでういてんだ？これ？」

「ウーン、確かにいまいち理解はしてないが電童なんて羽すら無いよ？」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますわよ？」

さすがはセシリアさん、理解してるんだね。

「わかった、説明はしなくていい。」

「ああ、きつと半分も理解しきれない。」

一夏と一緒に答える。

「そう、残念ですわ。ふふっ」

なんかセシリアさんが楽しそうです。

試合以降、クラスとの距離が縮まってる感じがするよ。

最初の頃の態度は忘れよう。

『一夏あっ!!いつまでそんなところにいる！早く降りてこい!!』

いきなり怒鳴り声が聞こえる。

箒さんだ、山田先生のインカム奪って喋ってるな。

ここからでも地上の様子がよくわかる。

全員の顔がすっかりと見分けられる。

「これでも機能制限がかかっているんですよ。本当なら広大な宇宙空間での自分の位置を把握するための物ですから。」

セシリアさんが説明する。なるほどね。

ちなみに先日、一夏に教える箒さん見たが擬音ばかりで一夏が理解してるかは非常に怪しかった。

『お前達、急降下と完全停止をやってみる。目標は…そうだな、地上から10センチだ。』

「了解です。では星夜さん、一夏さん、お先に。」

織斑先生からのお題に対してセシリアさんが最初に動く。

さすがは代表候補生、難なくクリアしたようだ。

こちらを向き微笑むセシリアさん。

「じゃあ、次は俺がいくよ。」

そう言い放ち地上に向け加速する。

地上に近付き減速をかける。足を地に向ける。思ったよりも減速が効かないな、仕方ない着陸しよう。

そう思い足を正座のような形にしつつ、横に向けるそして少しだけ脚のドライブユニットを起動する。

地面に向け直角に進んでいる体を修正する。このままだと地面に爆砕重落下をしてしまう。

まるでそこに螺旋の坂があるように空中を行く。まるで滑っているように見えるだろう。

脚のドライブユニットをホイールに見立て地面に着陸し、少しずつ減速し停止する。

「すみません、失敗しました。」

「ふむ、まあ墜落、衝突しなかつただけでした。出来ないにしてもその後にフォローが出来ている。次はうまくやれよ?」

織斑先生が評価する。今回は妥協点のようだ。

そして次は一夏の番だ。

一気に加速するが停止の事をまるで考えなかったのか、そのまま地
面対しての衝突した。

グラウンドには衝撃がはしり、砂埃が舞う。

なるほど、後少して俺もあんなったかも知れないのか。
ありがとう一夏、お陰でわかったよ。

「馬鹿者…誰がグラウンドに大穴開けると言った?」

織斑先生があきれながら一夏に言う。

「……………すみません。」

「一夏く大丈夫か?」

「一夏さん?大丈夫ですか?」

「全く、昨日あれほど私が教えたというのに…」

それぞれが一夏に声をかける。

「ああ、大丈夫だ。ありがとう」

そう言いながら一夏は穴から這い上がる。

「ISを付けていて怪我をするわけないだろう。」

箒さんが言う。

「あくまでほとんど怪我をしないだけですわ、内部に衝撃が入るなどで、打撲のような痕が残ることもございますわよ。」

「そうだな、過信は良くないな。」

セシリアさんの言葉に頷く。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは出来るな？」

一夏が機体を確認しながら3人が再び皆の前に並ぶと次のお題だ。

「は…はあ…」

「返事はいだ。」

「は…はいっ！」

気の抜けた返事をする一夏に渴を入れる織斑先生。

「よし！始めろ。」

織斑先生に言われて一夏は横を向き人が居ない事を確認して、集中する。

剣を構えるような姿勢になり、両手に光が集まりその光が収まるとその手には刀―雪片式型―が握られていた。

「遅い、0.5秒で出せるようになれ。」

織斑先生、辛口です。

機体は1秒未滿、『武装は』0.5秒を目標に練習しないとね。

「次はオルコット、お前が武装を展開しろ。」

「はい！かしこまりました。」

織斑先生に言われ、セシリアさんは一步前が出る。

左手を肩の高さまであげて、横にぴしつと伸ばす。

一瞬光を感じるとそこには専用ライフル―スターライトMkIII―が握られていた。

そして、それを構え、セーフティが解除される。

ここまで約1秒である。

「オルコット、展開が早いのは良いことだが、そのポーズはなんだ？誰を撃つつもりだ？矯正しておけ。」

先生から評価点と改善点を伝えられる。

「ですが、これは私がイメージを固める為に必要な―」

「直せ、わかったな？」

言い返そうとするが、有無を言わせぬ迫力で黙らせた。

「天野、お前の機体の武装は？」

次は当然自分の番だ。

「えくと、恥ずかしながら電童の拡張領域《バススロット》はまだ何も入っていないですよ。」

――バススロットにはね――

「そうか、それなら今度、学園の武装を貸し出すから、インストールして練習しろ。もしくは早めにG E A Rに連絡を取り武装を貰っておけ。」

「わかりました。お世話をおかけします。」

練習しとかなないと織斑先生に叩かれるな。

次の休みにG E A Rに言って早めに受理しないと。

「オルコット、お前は近接武装を展開しろ。」

再びセシリアさんだ。

「えっ、あつ、はっはい！」

とっさに反応できず声が裏返る。

珍しいな。

セシリアさんは銃を一瞬で格納し、近接武装を展開しようとする。

先程とうって代わり、なかなか展開出来ずにいた。

「くう……。」

「まだか？」

「ああん！もう！インターセプターツ！！」

武器名を口に出して呼ぶことでイメージを固め、展開する。

これは初心者用として武装関連の教科書に書かれている方法だ。

「何秒かかっている？お前は実戦でも相手に待って貰うつもりか？」

「間合いに入れなければ問題はありませんわ！！」

確かに、近づく前に倒せるのならそれでも良いかも知れないけどね。

「実戦では何があるかわからないよ？」

「この前の試合で素人と初心者の2人に簡単に入られていたな。あと、実戦で遠距離武器が破壊された場合はどうする？」

「うっ……。」

織斑先生に言われ、言葉に詰まるセシリアさん。

『あなた達のせいですわよ!?!』

個人回線で言われた。

それは理不尽だよ、セシリアさん。

「特に天野には二回の接触で簡単に落とされたな。」

織斑先生もうやめて！セシリアさんのライフはもう0よ!?!

そこでチャイムが聞こえてくる。

「む、今日の授業はここまで。織斑、穴は埋めておけよ。」

あっやっぱり自己責任ですか。

「なあ…星夜…。」

捨てられた犬のようにこちらを見てくる一夏。

「どうしたの?一夏?」

わざと惚ける。

「手伝ってくれないか?」

ちなみに他の皆はさっさと行ってしまった。

箒さん、ここで手伝いをしてあげば2人きりになれたのに。

「はあ、さっさとやって終わらせるよ。あと、晩御飯は奢ってね?」

「ああ、すまない、頼む。」

そして2人で穴を埋めた。結構な重労働だったので晩御飯は大盛りにしてやった。

第8話 《GEAR本社へ》

今、俺―天野星夜―は電車に乗っている。

目的地はGEAR本社。

目的は

約2週間分の電童の稼働データ（主に代表決定戦）の提出。

電童の点検、整備。

この2つかな？

しかし、流石は国際企業、結構近くて助かるね。

まああえて気になることがあるとすれば―

「星夜さん、どうかされましたか？」

「あまのん、飴なめる？」

「…あと2駅で着くね…。」

なぜか横で笑顔のセシリアさん達がいることか…。

朝、食堂でご飯を食べていた時に今日はGEARに行くと言えたら

「一度行ってみたい。」と簪さんが言っつて。

他の2人もそれに賛同してきた。

ちなみに最近食堂で食べる際、この4人で取ることが多い。

流石に無理だろうとGEARに問い合わせたら。

「えっ見学希望者？別にいいわよ。」

と二つ返事だったよ。

まあ、この3人ならスパイとかはしないだろうけど。

簪さんにはいい気分転換になればいいかな。

未だに専用機が完成しそうになく、結構苦戦してるらしい。全体の

6割ほどしか出来てないらしい。

「みなさん、こちらがGEAR本社ビルになります。」

なんとなく旅番組のレポーターっぽく言っつてみた。

「流石は国際複合企業の中核、立派な建物ですわね。」

「おお。デカーイ！」

「ISの研究施設も凄そうだね。」

それぞれが感想をのべるなか正面ゲートに近づく。

「こんにちは、黒崎さん。」

「こんにちは、星夜くん。後ろの3人が見学者だね？」

「よろしくお願ひします！」

3人が答える。

ゲートを開けてもらい。受付で3人分の来客用IDを受けとる。

「はい、これは来客用だから帰るときに返してね。これがないとほとんどの扉が開かないから。」

説明しながらわたす。

ほぼすべての扉に対してこのビルではIDのチェックを行う。

IDレベルで開けられる扉に制限がかかり、機密を漏洩しないようにしている。

「じゃあ、ISの研究室に行くよ。着いてきてね。」

「はい。かしこまりましたわ。」

「れっつごう。」

「…楽しみ…。」

移動しながらセシリアさんが聞いてきた。

「あの、星夜さんのご両親はここで働かれていらっしやるんですよね？」

ああ、その事か。

「今は2人ともアメリカのGEARで働いてる。」

「そうなんですか…。出ればご挨拶しておきたかったです。」

セシリアさんが挨拶すると、なんか話がふつとびそうだが。

「天野くんの親はどんな事をしてるの？」

「たしかに気になる。」

「ん〜基本はプログラム関連だよ。今は何やってるか詳細は知らないけど。」

公私は分ける親だったからな。

その影響なんだろうな、俺がプログラミング得意なの。

「よし、ここだ。」

IS研究室と書かれた扉の前に立つ。

「井上さん、こんにちは。」

「おお！星夜くん！待っていたよ。」

ドクター井上、IS研究者の一人で、電童の開発チームのリーダーだ。

「この前君に言われた武装はきちんと作っておいたからね。」

「えつと…全部？」

「当然、全部だよ？」

たしかに電童のテスト中に武器が無いって知って色々武器っぽいもの羅列した記憶はある。

あれ全部かよ。

「これがリストね。」

そう言われて渡された資料を見る。

電童用武装一覧

実体剣

トマホーク？2

ヨーヨー？2

ライフル

ゴーガン

三連装キャノン砲

九連装ミサイル

脚部三連装小型ミサイル？2

バズーカ

ext…

「あはは…。」

呆れてものが言えねえ。

「これはまた…使うのが大変そうですね。」

「おお、あまのん、大変だね。」

「……なんか何処かで見たいことのある武装だね。」

まあこれだけあれば手数には困らないだろうな。

「あと…井上さん—」

「ああ、あとであちらに顔を出してあげなさい。『彼ら』も君に会いたがってるよ。」

3人の頭に疑問符が浮かぶ。

「とりあえず電童をよろしくお願いしますね。」

そう言って待機状態の電童を渡す。

「ああ、ありがとう。諸君、仕事だよ。」

そして部屋にいた職員が動きだしさまざま操作を始める。

「では、終わったら呼ぶから、その子達を案内して上げたらず？」

「そうします。では、またあとで。」

3人を連れて部屋をでる。

「で、次はどこに向かっていますの？」

「どこかなく？御菓子売り場？」

「本音…それはないと思うよ…。」

折角なので色々と見て回っているが機密とか見せないために結構場所が限られる。

廊下を歩いていると。

「おお！星夜くんではないか!？」

「あつ渋谷社長。こんにちは。今日はいらつしやらないと、聞いてたんですが。」

「ああ、予定が思ったより早く終わってね。星夜くんに会おうと急いで戻ってきたんだよ。」

渋谷社長、GEARの社長、すんごく偉い。

でも、普段はすごく優しいが剣道、柔道、書道の有段者で護衛とかいらぬ。むしろ足を引っ張る。

この女尊男卑の世界で男の経営者は伊達じゃない。

「そうですか。ありがとうございます。あつ彼女達はクラスメイト達です。」

簪さんクラス違うけど、細かいことはいいんだよ。

「そうか、星夜くんはどうですか？」

あんたは俺の親か。

「ええ大変すばらしいですわ。この前も私と一夏さん相手に大立ち回りでしたし。」

「すごいよね〜』ばくさい!じゅうらつか〜!』って」

「うん、すごかった。まるでヒーローみたいで。」

「そうかね。結構だよ。うむ、時間もちょうどいいし、わが社自慢の社員食堂で食べていきなさい。私の奢りだ。」

「本当ですか!?!」

「彼女達だけだよ。」

「ですよね。」

食堂に向かう。

IS学園の食堂も凄いがこちらだつて負けてはいない。

それぞれが食べたいものを選び注文する。

「IS学園の食堂もすごいですが、こちらもなかなか味があっていいですね。」

「もぐもぐ。おいひ〜。」

「本音、回りにソースがついてる。」

3人とも満足してくれたようだ。

『全館放送、全館放送、渋谷社長、申し訳ございませんが、社長室にお戻りください。』

「ん、何事かな?星夜くん、これからもがんばってくれ。皆さんも勉強に励んでください。」

「はい、頑張りますよ。社長。」

渋谷社長は食器を片して食堂から出ていった。

「急にどうしたんでしょうか?」

「社長は大変だね〜。」

「まあ、国際的企業だし色々あるのかも。」

他の国のGEARからの連絡とかかな?

「あつこのあと電童受け取ったら少しだけ奥の機密エリアに行くから。下の階の物販でも見ててよ。」

まあ本社ビルだけあって見学とかよくあるから1階に土産屋を兼ねた販売店がある。

ここでもしか買えないものも結構ある。

ちなみに今の限定品は井上さんが個人的に作った物を改修し商品

化している『超合金1／10電童』だ。

通販でも扱っておりません！

「そうですか。かしこまりましたわ。」

「おいしいおやつあるかな。」

「本音：はしたないよ。」

なんか簪さんが本音さんの保護者に見える。

「よし、ご馳走さま。じゃあ、先にいくね。エレベーターは食堂を出て右にあるから。」

そう言つて席をたち、食堂を後にする。

IS研究室に向かう。

「井上さん。どうですか？」

「おお、ちょうど今、終わったところだよ。」

電童を受け取り右腕に着ける。

軽く機体のデータをウインドウで開き確認する。

完璧だ。武装も全部のつてるし。

「じゃあ、あそこについてきます。」

「うん、いつてらっしゃい。」

井上さんに挨拶をし、部屋をでる。

向かうのは機密エリアにある部屋だ。

《DW研究室》と書かれた部屋に入る。

ここには今まで何度も足を運んだ。

それは俺がIS適正が判明する前からだ。

あれは3年位前の出来事か。

仕事が忙しい両親が俺の為に買ってくれたオモチャのデータ弄つてた時だった。

それはIS技術を利用して作られたオモチャで自己学習機能を持ち、だんだん賢くなるいわゆるペットロボだった。

ただ、これはその中でも最初期の商品だったのでこの時には2世代位遅れていた。

小学校入学時から家に居たので愛着があった。

しかし、経年劣化が激しくなり、動かなくなってしまったので、こいつの中にあるデータを何とか家のパソコンなどに移せないか色々試していた。

体がなくてもこいつと一緒に居たい。

その一心で作業に没頭していた。

その為、自分に近づく危機に気がつけなかった。

ガシャンツ！

部屋の窓が割れる。後ろを振り向くがその直後に謎の煙を掛けられて意識をうしなつた。

そう、IS関係者を狙った誘拐事件だった。

その時、GEARには俺を誘拐した旨を伝える連絡があつたそう
だ。

要求はひとつ、俺の両親が当時考えていたIS武装の電子格納の技術を使用した実験機だ。

この頃はまだ試作機すら完全には完成しておらず、研究も机上の空論では無いことを証明したばかりだった為、論文を発表すらしておらず、犯人がどうやってそれを知つたのかは未だに不明だ。

そして俺は気がついたらどっかの廃墟にいた。

…ベタ過ぎるだろ。…

そんなことを考えていると部屋の外からマスクで顔を隠した奴等が入ってきた。

「おとなしくしていればあとでかいほうしてやる。」

「そのままいいこでまっつてろよ?」

無事な保証はどこにもないが逆らうとやばそうだし、手足も拘束されてるからおとなしくする。

「どうだ? やつらからへんじはきたか?」

どことなく変なイントネーションで話す犯人達。

ここで見えるだけで3人、もっと居るのは想像できる。

当時小学6年の自分は内心恐怖していた。

「やつら、わたすものはないとかいってきたぞ!」

「ふん、ならばこいつをいたためつけ、そのえいぞうをおくってやろう。」

電話をしていたやつが横のやつに告げる。

手にはナイフや木の棒があり、何をするつもりかは明白だ。

「やつやめろっ!!来るな!!」

俺は叫ぶ!体を少しでも動かし奴等から離れようとするが無駄な抵抗だった。

すぐに追い詰められる。必死に体を動かし、抵抗を続ける。偶然にも足が奴等の一人にあたる。

「ぐっ!よくもやったな!」

火に油を注ぐだけだったようだ。

俺に向けて木の棒を振り下ろす。

あっこれは無理かな?

そう思った時だった。

奴等が俺から没収した荷物をまとめて置いといたのだろう。

その中にはペットロボに指示を飛ばす為の端末もあった。

端末のから蒼い光が溢れる。

その光の中から、2メートル程の『なにか』が急に飛び出し、木の棒を振っていた男に当たる。

「ぐええっ」

自分に、恐らく奴等も何が起きたかわからなかった。

「なんだこれは!?!」

「きいてないぞ!?!」

「これがいつていたしんぎじゅつか!?!」

『なにか』は俺と奴等の間に立つ。

その後姿は非常に見覚えがあった。しかし、こんなに大きくなかったはずだ。

「えっ……『ユニコーン』…なんで……?」

そう、誘拐される直前までいじっていたペットロボ、—ユニコーン—だった。

ちよつと見た目が違うけど。一番違うのは頭についていた通信用アンテナ兼ねた角だったはず部分がドリルになっている事だ。

「なにかわからないがやってしまえ!」

奴等が襲い掛かってくる。

「ユニコーンっ!!」

俺は再び叫ぶ。

ユニコーンは馬のような鳴き声をあげながら奴等に体当たりやバックキックを、行い蹴散らす。

奴等が吹き飛んだ隙にユニコーンはその角を使い拘束を解く。

「ありがとう。ユニコーン。」

「あつガキがにげやがる。」

「ころさないでいどにいたためつけろ。」

奴等は俺をまだ捕まえる気のようにだ。

次の瞬間、部屋の壁の一部が吹き飛ぶ。

GEARのロゴが入ったISが入ってきた。

「こちら、GEAR所属のベガ・アルクトスです。無駄な抵抗はやめなさいー!」

「ちっにげるぞー!」

奴等が煙幕をはり、逃げる。

この人は味方みたいだ、GEARは両親の居るかいしやだし。

「天野星夜君ね?大丈夫?」

ベガと名乗ったこの人はこちらの保護を優先するためか奴等を追いかけてなかった。

「彼らは恐らく金で雇われた奴等よ。捕まえても黒幕にはたどり着けないわ。」

そういいながら近づいてくる。

ユニコーンが威嚇するように立つ。

「大丈夫だよ、ユニコーン。この人は。」

頭を撫でながら落ち着かせる。

「天野君、これは?」

「わかりません。こいつ、自分のペットロボだと思っんですけど。何でここにいて、こんなにかいのかはわかりません。」

「そうなの。とりあえずこのままで迎えを待つわ。いいわね?」

「はい。助けていただきありがとうございます。」

次の瞬間、ユニコーンが倒れる。

「ユニコーン!?!どうしたの!?!」

「どうやらエネルギーが切れたみたいね。」

その後、警察とGEARの人がきて、倒れたユニコーンはGEARが回収した。

その後、判明したことは、

偶然にも俺のユニコーンは通信状態にあり、俺を誘拐されたのを見ていた。

その通信回線を使い。自分が使えそうな体を探した。

そこでユニコーンはGEARで俺の親が研究していた電子格納武装の『アームドリル』の試作品に目を着けた。

それと合体し新たな体を得たユニコーンは体をデータ化し、自分の操作端末に送信した。

どうやって合体し、体を構成したりしたのは不明だが。

あいつが俺を助けたいと想って起こした『奇跡』だと思ってる。

「あれから3年、未だに目覚めないんだよな。」

そう。あの時俺を助けたユニコーンはあれ以降一度も動いていない。

ただ、AI?が生きているからか。接続された電子機器を使いコミュニケーションを取ることはできる。

ちなみにユニコーンはその後、『ユニコーンドリル』とされ、《データウエポン》として研究されている。

他にも同じように電子武装に意識を与えて、生物の型を与えられた者達がいる。

レオサークル

バイパーウィップ

ドラゴンフレア

ブルホーン

ガトリングボア

今、この部屋には6体のデータウエポンが居るが、誰一人として体

を動かすことは出来ていない。

あの時以来、俺は休みの度に両親につれてもらいここに来ていた。「やあ、みんな、久しぶり。」

語りかけるとそれぞれに取り付けられたモニターに文章が表示される。

これであいつらと会話をしている。

俺はこの2週間で会ったことを友人達に話すのであった。

そしてしばらくすると、どこからか爆発音と振動が伝わってきた。

第9話 《襲撃されたGEAR本社》

GEAR本社を爆発と振動が襲う少し前―
社長室に向かう渋谷。

確か今日の午後の予定は3時からでもう少し余裕があったはずだ。
つまり呼ばれたのは何か起きたと言うことだ。

「浅野くん、どうしたのかね？」

秘書の浅野愛子に聞く。

「はい、それが先程『亡国機業』の構成員らしき人物が周辺にて確認されたとアルテアさんから通信が入りました。」

「なに？ 『亡国機業』だど？ まさか奴等の狙いは星夜くんか？」

「わかりませんが最近、亡国機業と思われる襲撃事件が多発しておりますので注意したほうがよろしいかと。」

優秀な部下達からの報告をうけ、すぐに考えを巡らせる渋谷。

「うむ、すぐにベガ君に連絡を取りたまえ。周辺の警備に向かわせるぞ。あと、アルテア君には星夜くんのご学友のガードに付くように言ってくれ。」

この本社には普段、ISは一つ、ベガ・アルクトスの使用する『ワルキューレ』のみ。

企業の規模から見ると少なく感じるが

世界各地にある研究所にはそれぞれ1個のコアがあることを考えると非常に多い。

『こちらアルテアです。星夜くんの友人の護衛ですね？ 了解しました。』

『こちらベガ、ワルキューレの準備が出来次第に周辺の警備に当たります。』

「よろしく頼むよ。いくら代表候補生でも何かあるかわからないしね。」

『はっ！』

通信が切れる。渋谷はふうつと息を吐く。

「亡国機業め…一体何を企んでいるんだ。」

「失礼します。わたくし、『みつるぎ』の広布(ひろふ)ともうします。」
受付に長身な女性がやって来た。

まあこの会社に来る人は非常に多く、別に変なところはない。

「あれ？たしか『みつるぎ』の交渉担当は——」

「はい、担当が今日は体調をくずしまして、急遽わたくしがお越しさせていただきました。連絡が届かず申しわけございません。」

素晴らしいながら丁寧にお辞儀をする。

同じ女性でも見惚れるような容姿に受付の者は ぽーっとしていた。

「では、こちらの来客用IDカードをお使い頂き、4階にどうぞ」

「あら、丁寧ありがとうございます。4階ねわかりました。」

IDカードを受け取り広布はエレベーターに向かう。

そして…エレベーターの扉が開き彼女がはいる。

「まあ…ここまで来れば充分でしょう。」

そう呟くと彼女は『IS』を起動した。

エレベーター内部で爆発が起こり、警報が鳴る。

そして彼女はエレベーターの床を突き破り、一般公開されていない地下の研究施設を目指す。

「さあ、いただくわよ。電子格納兵装、『データウエポン』を…このスコール・ミュゼールが！」

広布改めスコール・ミュゼールはあらかじめ入手していた地図に従い。一目散にデータウエポン研究室を目指す。

爆発音と振動が伝わり、警報が鳴り響く。

「まさか、狙いは俺か？」

俺―天野星夜―は男性操縦者だ。

そんな俺を狙ってる奴が居ても不思議じゃない。

でも、俺が目的なら警備のあるこのタイミングではなくてもいいはずだ。

それこそ帰りの電車内なんかの方が断然やり易いはずだ。

つまり目的は別にある。

このGEAR本社を襲ってまで欲しいものを考えろ！
まさか…

「こいつら…か？」

周りにいる『データウエポン』達、こいつらが目的なら充分にあり得る。

それぞれに接続されたモニターにはその考えを肯定する表示がされる。

こいつら自身もそう思ってるようだ。

なら、ここに向かってくるはずだから電童で撃退しよう。

『星夜くん！聞こえる!?!』

通信が聞こえる。愛子さんだ。

「はい。聞こえます。」

『侵入者が現れてそちらに向かっているわ。ISを持ってるから気をつけて！狙いは—』

「恐らくデータウエポンです。俺が目的ならもつと狙いやすいタイミングがありますし。それにこいつらもそう言ってます。」

自分の考えを伝える。

『そうですか。施設内は現在のパニックになっています。避難がまだ終わってないので大技は控えてください。』

「了解です！こいつらを渡すものか！」

電童を纏いながら、そう言う目目の前の扉が爆ぜた。

「あら、データウエポンをもらいに来たのに噂の男性操縦者がいるなんて。」

「悪かったな、こいつらは渡さない。」

金色のISを纏った女性はこちらを見つつ笑う。

「きょうは『リムーバー』持ってきてきてないのよね。残念だけどたっぷりと教育してあげる時間も無いのよ。」

「じゃあさっさと帰ればっ。」

「仕事の成果もなしに帰れるわけないでしょ？」

会話をしつつも距離を測り、飛び込む、ここで戦ったらこいつらに被害がでる。それだけは避けないと。

ハイパープラズマドライブを起動させながら殴りかかる。

しかし、簡単に受け止められる。

「ふうん。パワーはあるみたいね。」

「ぐっ！簡単に受け止められた!？」

経験の差はいかんともし難いようだ。そのまま格闘の連撃を仕掛けるが。すべての軽くいなされてしまう。

「まだまだ経験が足りないわね。坊や、激しいのも嫌いじゃないけど時には優しさも必要よ?」

「ちっずいぶんと余裕だな!？」

正直焦ってる。こちらの攻撃が掠りもしない。

とりあえず、あいつらから引き離すのが先決だ。

このまま勢いで押しきる!

「甘いわよっ!」

後ろに付いていた巨大な尻尾で叩かれる。

そのまま壁にめり込む電童。

その隙を逃さず尻尾の先端を開きこちらの頭を掴む。

「あはははーあなたはどこまで耐えられるかしら?」

笑いながら頭を掴む力を強めつつ、こちらを殴る。

殴られると炎があがり、燃える。これがこいつの力か…

そのままサンドバッグのように殴られていた。

セシリアたちは物販コーナーで買い物を楽しんでいた。

その時、爆発音と振動が襲った。

周りにいる客も驚き、突然の事態にパニックとなる。

「セッシー!」

「セシリアさん!」

「お二人ともご無事ですな?」

お互いの無事を確認する。

周りではGEARのスタッフが避難誘導している。

その時、3人に1人の男が近づいてきた。

「セシリア・オルコット、布仏本音、更識簪だな？私はアルテア、GEARの警備担当だ。何者かによる襲撃だ。天野星夜の関係者として君たちが狙われる可能性がある。こちらへ。」

アルテアと名乗る男はそう告げると誘導してくる。

「ま、待ってください。星夜さんは!?!」

「そうそう、あまのんは?」

「たしかさつき機密エリアに行くって…。」

「ああ、彼はちやうど企業秘密の部屋に居るため、そのままその防衛に当たるそうだ。」

「でしたら、私も!」

セシリアが名乗り出る。

「気持ち解るし、ありがたいが…。ここで何か君たちに…特に君の場合は国際的な問題になりかねない。」

「友人の窮地に何もしない事が、正しいとは到底思えません!」

セシリアは強い意思を持った瞳でアルテアを見つめる。

その瞳を見てアルテアは…

「確かに、個として正しい事と、群で正しい事は違うだろう…だが!」
『アルテアさん!ベガさん!聞こえますか!?!星夜くんがピンチです!今すぐ救援を!!』

インカムから聞こえる愛子の声は焦りを感じる。

「なに?了解した。すぐに現場に向かう!ベガはどうした?」

『すみません、兄さん。今、襲撃者の仲間と思われるISと交戦中です!』

やはり襲撃者は一人ではないようだ。

突然、部屋の明かりが消え、先程から鳴っていた警鐘が止まる。施設の全てのシステムがダウンしたようだ。

「どうした!?!何があった!?!」

アルテアはインカムに呼び掛けるが応答がない。

「くっ!」

「一体これは?」

「システムダウン？」

「ハッキングかなー？妨害電波系かなー？」

「とにかく、今は緊急事態だ。早く避難しろ！」

アルテアが告げると3人は。

「やはり状況がよくありませんわね。私は星夜さんの所に行きますわ。」

「警備システムがダウンしてその上、扉が全部ロックされてる。」

「制御端末から逆ハッキングだー！」

それぞれやれることをやろうとしている。

「仕方ない、セシリア・オルコット、星夜くんはこのポイントだ。苦戦している。また、外でこちらのISがほかのISとも交戦中だ。敵の増援に注意しろ。残りの2人はこっちだ。こっちにメインの端末「メテオ」がある。」

そうやってセシリア以外は走る。

セシリアはブルーティアーズを纏い、黒煙を上げるエレベーターの扉に入り指定されたポイントを目指す。

今、助けに行きます。待っていてください！

セシリアは狭い通路を全速力で飛翔する！

第10話 《蒼い奇跡》

GEAR本社地下の通路。

俺―天野星夜―はピンチに陥っていた。

突然の襲撃者に対して電童で撃退を試みるも軽くやられてしまい。現在サンドバッグ状態だ。

何とか意識はあるがきつい。

頭が万力で締め付けられたような状態で反撃しようにも動かそうとする手、足を先に攻撃されてしまい抵抗が出来ない。

先程廊下の明かりが消え、通信も途切れた。施設全体が制圧されるのか？

救援も望めなさそうだ。

「あははは！…このまま持ち帰って私、スコールのペットとしてゆつくと調教して上げる。データウエポンと一緒にね！」

ぐっ…あいつらをやらせる訳には…

だがこのままじゃ奴の言う通りになってしまう。

「星夜さんから、離れなさい!!」

一筋の閃光が走る。

それは俺を捕まえていた尻尾に当り、頭の拘束が緩くなる。今だ！…っと思ひ、腕で尻尾を弾き距離をとる。

「ありがとう、セシリアさん。」

「お礼を言うのはまだ早いんではなくて？」

セシリアさんに礼を言いつつ構える。

「ふん！ブルーティアーズか…あんたまで居たとは…」

「これ以上の狼藉はこのセシリア・オルコットとブルーティアーズが許しませわ！」

ライフルを構えつつセシリアさんが言う。

「こんな狭い空間であんたに何が出来るって言うの？」

確かにスコールの言う通りではある。

本来、ブルーティアーズは広大な空戦フィールドで真価を発揮する機体だ。

このような狭い場所ではビットの使用は難しい。

『信頼』出来る仲間が近くにいるってことだけでも違うんだよ。」

「そうですね。そんな事も解らないのですの?」

「ふん、あんたのはコアだけあればいいか。持って帰るものが増えちやったわね。どこかで土産用の袋をもらえないものかしら?」

おどけた口調でスコールは言う。まだ余裕綽々って感じだな。

「星夜さん! 援護しますわ!」

「ああつ! 頼む!」

セシリアさんの援護を受けつつ再度スコールへ飛び込む。

「うおおお!」

「あらあら、坊や彼女が来たから張り切ってるの?」

「俺とセシリアさんはそんな関係じゃないっての!!」

「まだ違いますわよ! 言いがかりは止してくださいませ!」

ちっこいつ、2対1でも余裕かよ。

反応がでたらめに早い!

まだ遊び半分じゃないか!

「んくでも、そろそろ時間だし決めさせてもらおうわよ! プロミネンス!」

相手のISの肩から炎が伸びる。

それを鞭のように扱い俺を叩く、セシリアさんの射撃はそれを振り回し描き消す。

「ぐあつ!」

俺を吹き飛ばしその隙にセシリアさんの方へ飛び込む。

「はっインター!」

「全然遅い!!」

一瞬の内に2つの炎の鞭でセシリアさんが焼かれる。

「きやああ!!」

「セシリアさん!」

こちらに飛ばされたので受け止める。

2人ともダメージのせいか立ち上がれない。

「さて、これで終わりね。なかなか楽しかったわよ、坊や!」

「そう言い、両手の中に炎が集まり徐々に大きくなっていく。

「ソリッド・フレア：大丈夫殺しはしないわ。大事なモルモットですもの。坊やはね♪」

つまり、セシリアさんは殺される可能性があるわけだ。

やらせはしない！

傷だらけの体に鞭を打ち立ち上がる。

それを見たスコールは笑みを浮かべる。

「いいわあ、反抗的な子を従順にするのは楽しいでしょうねえ！これでつぶれなさい！」

「うおおおおお！」

ハイパープラズマドライブの出力を無理やり上げて腕からエネルギーを放つ準備をする。

閃光雷刃撃で威力が足りるか解らないがやるしかない。

「俺の後ろに俺を『信頼』してる仲間がいるんだ！負けられるか！」

「そうですね！私はこの方を『信頼』しておりますの！」

「だから、ここで諦めたら、ホントに駄目になってしまう!!」

セシリアさんもライフルを構える、いつもより出力を上げてるのだろう。銃口からエネルギーが溢れている。

「じゃあ、さようなら！」

そう言いスコールは巨大な火球を放る。

「いくぞ！セシリア!!」

「はい！星夜さん!!」

まったく同時に閃光を放つ。

「閃光!!双迅撃!!」

2人の声が重なる。

そして火球と閃光がぶつかり、巨大な爆発が起きる。

「ふう、まさかここまでやるなんてね。よそうが——」

スコールの台詞が途切れる。

それは予想外の光景が目の前にあつたからだ。

自分はプロミネンスコートと呼ばれる防御システムがあるのでそ

れなりに今の爆発を防げていた。

情報ではあの2機に防御系の装備は無いはずだ。

では、今この目の前に展開されている赤いバリアのようなものは何なのか？

そしてその向こう側に居るものは……。

「こ、これは」

「一体、なにが……？」

俺とセシリアさんも状況が理解出来なかった。

俺たちには広域バリアを展開するような装備はない。

だから爆発に飲み込まれるのを覚悟していた。

だが爆発が来ない。気がついたら目の前には赤いバリアが展開され俺とセシリアさんを守っていた。

ハイパーセンサーが近くになにかが居ることを伝えていたのだが今の今まで気がつかなかった。

それは馬によく似た体をもち、その頭には大きな角のようなドリル。

そう……まるで3年前の事件と同じような状況だった。

「えっ……おまえ……。」

「なんですの……？星夜さん。これは……？」

セシリアさんははじめて見るその姿に驚いて居るようだ。

「ユニコーンドリル……。」

「ユニ……コーン……？」

ユニコーンドリルはこちらに振り向く。

『自分を使え。』

そう言ってるように見える。

気が付けば俺はユニコーンに向けて右手を伸ばし、叫んでいた。

「ファイルセーブ!!ユニコーンドリル!!」

ユニコーンは蒼い光を放ち、掌サイズの光球となる。

そして電童の胸部が開き、その中に蒼い光を放ちながら入り格納される。

続けて叫ぶ。

「ユニコーンドライブ!! インストール!!」

叫びに応じて右腕に新たな武装が眩い光を放ちながら、装着された。

この光をセシリアさんは目を瞑る事なくそれを見つめていた。

逆にスコールはこの光景を見て、驚いていた。

「ぐっ…なんなの? これは!!」

こちらは2人とも満身創痍だ。

だからと言って諦める積もりはない。

むしろ今は負ける気が欠片もない。

そう、最高の相棒が右腕にいるのだから。

ユニコーンドリルの頭部をそのまま腕に装着したような形のユニット。

その目が力強い光を放つ。

自分がするべき事を頭の中に情報として教えてくれる。

「スコール!! これで終わりだ!!」

四肢にあるハイパープラズマドライブが限界を超えて稼働する。

電童の全エネルギーが右腕に集まる、正しくはそこに装着されたユニコーンドリルにだ。

バックパックの上部ファンが開き、余剰エネルギーが放出される。

スコールも先程と同じ武装を使う積もりか、火球を作り出している。

だが、こちらの勝ちだ!

「ユニコーンドリル! ファイナル! アタック!!」

叫ぶと同時に右腕をつきだす。

先端のドリルが回転しそこから蒼きエネルギーの螺旋が放たれる。

スコールの放った火球を難なく打ち消しそのままスコールへ命中する。

「うっ、うわああああ!!」

スコールの叫びが聞こえる。再び爆発が起こる。

その爆煙が晴れるとそこにはボロボロのISを纏ったスコールが

倒れていた。

直後、スプリンクラーが作動し周りの火を消火する。
掌握されてたシステムを取り戻したようだ。

「ふっうふっう……」

スコールがゆっくりと立ち上がる。

「まさか……私が……ここまでやられるなんて……いいわ……認めて上げる。
今回は坊やたちの勝ちよ……」

「覚えて置きなさい……。私は『亡国機業』……ファントム・タスクのスコール・ミューゼル!!」

「必ずや貴方を……潰してあげる!」

スコールが何かを投げる。

まぶしい光を放つ、フラッシュグレネードだ。

対IS用の物だったのだろう。目の前が白くなった。

その際にスコールは俺達の前から姿を消した。

本社の施設が復帰しはじめていたが、侵入者用のシステムを使用した所で、満身創痍のIS一つ止める事は出来ない。

その後、スコールは亡国機業の仲間に回収されたようだ。

「はあ、はあ、セシリア……さんは……大丈夫……?」

「はあ……はあ……何とか……」

お互いにボロボロだったか命に別状は無いようだ。

よかった……ありがとう……ユニコーン、お陰で守れたよ。

腕についていたユニコーンが外れ、データ化して行く。

その直後、俺は膝を付き、機体が解除されるのを感じながら意識を手放して行った……。

夢を見ていた気もするし、見てなかったかも知れない。

なんか体がだるい……それに重さを感じる……。

目を開くと白い天井、消毒液の臭い、それと思い出せる範囲の記憶を辿るところがGEARの医務室なのは予想がつく。

視線を重さを感じる方に向ける。

そこには包帯を巻いたセシリアさんが居た。

すうすうと寝息を感じる。

看病していてそのまま寝ちゃったのかな。

自分も怪我してるのに…。

何とか動く腕を使い頭を撫でる。

起こさないように優しく撫でてみると、微笑んだ。

…可愛いな…

って何考えてんだ？俺は…。

撫でるのをやめる。

誰か来ないかな？とりあえず状況が知りたい。

そう思っていると頭にコツンと何かが当たる。

そちらに視線を向ける。そこには掌サイズのユニコーンがいた。

「…また…助けてくれてありがとう…。」

しつかりとお礼を口にする。

ペコリと頭を下げるユニコーン。

うん、昔のあの頃のように嬉しい。

ユニコーンが枕元に置いてある待機状態の電童に入っていく。

どうしたんだろう？とか思っていると誰かが部屋に近づいてきた。

足音からするに複数だ。

「天野くん…！」

「あまのん…！」

ユニコーンを肩に乗つけた簪さん、本音さん、渋谷社長、アルテアさんとベガさんまで居る。

みんなを呼びに行ったのかユニコーンは。

その後、目を覚ましたセシリアさんも含めて、話を聞いた。

今までの話を聞いた。

あのとき、スクールとは別のIS使いもいて、ベガさんを足止めしていた。

施設のシステムをダウン状態から戻したのは簪さんと本音さんだった。

俺とセシリアさんが怪我をしたくらいでそれ以外に大きな怪我人は居ない。

設備で破壊されたのは主戦場となった地下の廊下とエレベーター周辺、スコールが逃げる時に壊した壁位なので本部機能としては問題ない。

こんなところか。

「天野くん、オルコットくん、今回の事は後日、報告書を上げてもらいたい。また、可能であれば戦闘記録もだ。」

渋谷さんが告げる。

セシリアさんはあくまでイギリスの機体だからね、データを取るにも無断ではできないよね。

「はい、かしこまりました。この事は本国にも報告をします。その際に正式な許可をとっておきます。」

「うむ、よろしく頼むよ。」

「しかし：今までまったく反応がなかったデータウエポンがなぜ？」

アルテアさんが疑問を口にする。

「ええ、しかも今回は3年前と違い、そのまま起動状態を維持、データ等も使いこなしているようですし。」

ベガさんも不思議そうな顔をしている。

「その辺は井上くんの報告を待とう。まだ天野くんは目が覚めたばかりだ。あまり負担をかけてはいけないよ。」

渋谷社長がアルテアさんとベガさんを連れて部屋を出ようとする。

「ああ、この件はすでに学園側にも伝えておいた。今日は全員、このまま休んでいきなさい。明日学園まで送ろう。では、天野くん大事にね。」

そう言い残り部屋を出ていった。

部屋が静かになる。

「とにかく：みんな無事で良かったよ。」

「一番危なかったのは星夜さんですからね!？」

「うん：そうだよ、天野くんが倒れて心配したんだからね。」

「あまのんー？状況を理解しようね？」

周りからジト目でみられる。

「うう：すみません。」

「わかればよろしい。」

3人がうなずく。

ユニコーンまでうなずいてるぞ。

「ところで…星夜さん、この子は一体…？」

「うん…データウエポンって何？」

「おしえてよ？あまのんく？」

まあ気になるよね。

「さて…どこから話せばいいかな…？」

3年前の事件とデータウエポンの概要を軽く説明した。

「電子格納…そんなことができるんですね。」

「だから、ケータイから出てきたりするんだ。」

「他の子も目覚めるといいね。」

それぞれが感想を述べる。

電子格納とは武装をデータ化しサーバー等のメモリーに保存することだ。

サーバーに保存した場合、そのサーバーにアクセスできれば誰でも呼び出す事が出来るようになる。

また、外部に保存するため、本体のISのバススロット容量は必要ない。

例えばセシリアさんが雪片式型を呼び出したり、一夏がスターライトMKIIIを呼び出したり出来るようになる。

欠点としてはバススロットの武装を取り出すより時間が掛かると、その格納した端末と通信状態でなければ取り出せないことか。

今回見たいにハッキングや電波妨害などで通信に制限がかかる人たちまちそのサーバーから取り出せなくなる。

ただし、ユニコーン達は別だ。こいつらは自分の意思で行動するため、通信状態の良し悪しはあまり関係ない。

ネットワークに繋がっていればそれだけでやってこれる。

そして武装となって力を貸してくれる。頼もしいものだ。

「しかし、何故、今回は動いたのでしょうか？今まで動かなかったんですよね？」

「うくん、さつき渋谷さんも言ってたけど井上さん待ちかな？明日になれば何か分かってるかもよ？」

「うん、そうだね。」

「あつままのん、お腹空いてない？何かもらって来ようか？甘いの。」

みんなで仲良く話をしながら時間が過ぎていった。

第11話 《データウエポン》

GEAR本社襲撃事件の翌日。

世間では日曜日だ。

俺―天野星夜―とセシリアさんは医務室でそれぞれ検査を受けていた。

あの激闘のあと、GEAR本社の社員寮で一泊した俺達は朝から事情聴取を受けていた。

とくに直接スコールと接触したのは俺達なので午後までかかった。

「はあく。やつと終わった。」

「さすがに疲れましたわ。」

やつと解放された俺達は食堂で遅めの昼食を食べていた。

「2人とも、お疲れさま。」

「大変だったね。」

「でも：帰ったらGEARと学園に今回の報告書を出さないといけないんだよな。」

「私の場合は本国にも出しますから英語の報告書もですわ。」

セシリアさんと同時にため息をつく。

まあこのあとの事は今は忘れよう。

気持ちを切り替えて目の前のカツ丼を頬張る。

「あとで井上さんが皆に話があるっていつてたよ。」

「ユニユニたちの事かな？」

机の上で遊ぶユニコーン、それをつついてる本音さん。

簪さん達は先に聴取が終わったからこのあとの事聞いているのか。

「1日経ってないけど：まあ何かあるんだろうな。」

まあ井上さんとか研究室の人達ってワーカーホリックの毛があるからな。

没頭してたんだろうか。

そんな感じで昼食を食べ終わり、会議室に向かった。

「では、皆さんお揃いですね？」

井上さんが会議室で全員の前にたちの確認する。

ここに居るのは、俺達4人と渋谷社長、アルテアさん、ベガさんだ。「では、今回の事件で判明したデータウエポンの事を説明させていただきます。」

井上さんの発言に合わせ部屋の照明が暗くなり、正面のスクリーンに映像がでる。

「まず、データウエポンは星夜くんの何に反応したのか？」

井上さんは投げ掛ける。

「生命の危機？」

ベガさんは答える。

「そう、今までの2回とも星夜くんの危機的状況下で現れました。」

それはたしかだ、3年前も今回もどっちもヤバかった。

「しかし、重要なのはそこではありません。単なる危機的な状況下では恐らく反応は薄く、3年前と同じように終わるでしょう。」

「では？博士は何が影響したと？」

「これです。」

スクリーンに映像が写される。

当然だが俺とセシリアさんがスコールと戦ってる映像だ

『俺の後ろに俺を信頼してる仲間が居るんだ！負けられるか！』

『そうですわ！私はこの方を信頼しておりますの！』

『だから、ここで諦めたら、ホントに駄目になってしまう!!』

うわあ…こう見せられるとすごく恥ずかしい…。

「この時、研究室に居たユニコードリルが反応して、起動したのです。」

井上さんは告げる。

「ユニコードリルは星夜くんの『想い』に反応したと思われます。」

「俺の…想いに…」

膝の上に居るユニコーンに視線を向ける。

ユニコーンも視線を反してくる。

渋谷社長がたずねる。

「それはどのような想いなのかね？」

「はい、それは信じる心、つまり『信頼』だと思われます。」

スクリーンにはデカデカと信頼の2文字が…

「更に言えばこの時、オルコットさんと同調、いや、共鳴の様なものを起こしていたと思われれます。」

「私と…？」

セシリアさんが聞き返す。

「はい、こちらはお互いのISが記録している搭乗者の感情をグラフとして表示した物です。これの一致率が8割を越えています。そして一致した瞬間にそれらの数値が一気に跳ね上がっております。」

「つまり、感情がエネルギー源だと言うことなのか？」

アルテアさんが言う。確かに不思議エネルギーみたいな感じがする。

「ISのセカンド・シフトやワン・オフ・アビリティーには搭乗者の感情も関係していると聞いてはいますが…」

ベガさんの言う通りIS自体も意識を持つてるとか言うくらいだし、無関係とは思えないが。

「まだ、推測の域を出ませんがデータウエポンが求めるのは純粋な感情のエネルギーよりも、特定の感情エネルギーが必要と思われれます。」

「だから今回はユニコーンだけが反応したの…？」

「他の子の好物はなんだろうねー。」

簪さんと本音さんも反応する。

「そしてそのエネルギーは残念ながら我々では作り出すことは難しいと思われれます。」

「そうなんですか？」

井上さんに聞き返す。

「はい、恐らく2人のISのコアとそれぞれの心が奇跡的に合い、今回の事が起こったと思われれます。」

「じゃあ、他のやつは…。」

そのままですか、と言おうとして。

「完全では無いですが使えるようになるかも、知れませんが。」

井上さんを見る。

「今回、ユニコーンドリルは電童のコアを經由して、武装化しました。ISコアがデータウエポンに影響したと考えます。」

確かに、光球になって胸部に入ってきたよね。

「他のデータウエポンたちも同じように取り込めば使えるようになる可能性があります。」

「デメリットはあるのかね？」

「それに関してはわかりません。」

「なら、本人たちの意思を尊重し、実施するでしょう。」

渋谷社長と井上さんがまとめる。

「星夜くん、残りのデータウエポンたちと話し合い、どうするか決めたまえ。」

「わかりました、終わったら、早速聞いてみますよ。」

「では、次に説明しますは、彼らに与えた武装には無かった能力についてです。」

スクリーンには俺とセシリアさんをバリアで守ってるユニコーンが映る。

「ああ、たしかにあんな装備は無かったはずだ。」

「これはユニコーン自身の能力とされます。今後、他のデータウエポンが目覚めたらこのような能力が附属すると思われれます。」

「今回ユニコーンは星夜くんを守るために、このバリア能力、ファイヤーウォールを発現させたようです。」

「今回は大体こんな感じですよ。今後もわかり次第ご報告いたしますので。」

部屋の明かりがつく。

「じゃあ、あいつらの所についてきますね。」

善は急げだ。

とりあえず今回わかったことは。

一つ、データウエポンたちは俺の感情に反応する。

二つ、その感情は俺一人では駄目、他の人と共鳴する必要がある。

三つ、俺一人感情だとすぐにエネルギー切れ?になる為、仮に起動

しても3年前と同じようにすぐ停止する。

四つ、データウエポン本人たちもどの感情かはわからない。(井上さんが確認したそうだ。)

五つ、電童のコアを介することで永続的に維持が出来るようになる可能性がある。

六つ、本来の装備に付与されていない機能が追加される。

例：ユニコーンのバリア (命名：ファイヤーウォール)

「では、各データウエポンと電童のコアを接続します。」

俺とデータウエポンたちは電童のコアの接続を試して見ることにした。

ユニコーンの中に残っていたデータをみて、取り込んだ状態を可能な限り再現した。

……結果

「まさかこのチビ形態のみとは。」

残りのデータウエポンの取り込みは問題なく進み、異常も無かった。

ただエネルギーが少ないのか武装化もできず、通常形態も取れない。

なので今、こいつらはデータ化して電腦世界に居るかチビ形態(エイリアス体)で実体化するしかない。

「こう見ますと可愛らしいですわね。」

「うん…微笑ましい。」

「よし…よし…お菓子食べる?」

「いや、こいつは何も食べないから。」

机の上には戯れるデータウエポンたちが居る。

「この子たちはどうなるの?」

「こちらに置いていかれますの?」

「いや、俺と一緒にいればまた、何かの感情に反応しやすくなるかも、って言われたからつれてく。」

「これってペットカウントかな?」

…まあ元はペットロボだね。

これからは部屋が愉快になりそうだ。

とりあえずこの事件はこれで一件落着かな？

帰りはG E A Rから専用ヘリコプターで帰った。

帰りのヘリ内ではなんか簪さんが何か考えてる様な顔をしていた。

思い詰めてなきやいいけど。

その日の夜

「それでは、織斑くんのクラス代表就任を祝して！」

「カンパニー!!」

先日決まった一夏のクラス代表決定パーティーが開催された。

本当なら昨日やる予定だったが俺達が居ないのを気遣ってずらしたそう。

優しさが嬉しいね。

ただ、俺達が帰ってこなかった理由を知らなかった一部の奴は『俺が『セシリアさん、本音さん、簪さん』と『学園外で一泊』した事しか知らない為、色々と邪推しているようだ。

先程から何人かに囲まれて質問攻めに合うセシリアさん達、顔が真っ赤だよ。

ちなみにどう見ても人数がクラスより多いので簪さんがいてもまったく問題ない。

リボンの色すら合わない人が居るし。

あと、パーティーの横断幕に『織斑一夏クラス代表就任パーティー』って、書いてあるがその下に俺の名前を書いたあとに消した痕跡あるぞ!?

それにあっちの壁には『天野くんがだれに手を出したかトトカルチヨ』の模造紙が張ったままだぞ!?!せめて剥がせよ!!

しかもなんで一番人氣が『男らしくまとめて頂いた!』だよ!?!俺って節操なしに見られてた!?

さて、心の中で一通りツツコミを入れたら、一夏の方に行く。

「おめでとー!一夏ー!」

「あつ星夜!?!お前大丈夫なのかよ!?!千冬姉から怪我したって聞いたぞ!?!」

「あら、聞いてたの?」

「ああ、IS使ってたから大したことはないよ。それどころか心強い味方も増えたしな。」

と視線を中央のテーブルへ。そこにはクラスメイトたちと遊ぶユニコーン達。

「へへあれって一体なんだ?玩具にしか見えないけど。」

「まあ追々わかるよ。」

ちなみに織斑先生には詳細報告済み。

明日の朝には報告書も出来上がりそうだし。

「はいはい、新聞部です。話題の新生入生達に特別インタビューをしに来ました。」

「あつ私は2年の黛薫子。新聞部副部長ね。これが名刺。」

いきなり近づいてきた先輩はそう言って名刺をだす。

画数多いなあ。小さく名前書くとき大変そう。

「まずは、クラス代表になった織斑くん!感想をどうぞ!」

ボイスレコーダーを一夏に向ける。

「えー:なんて言うか、がんばります。」

一夏なげやりだな。

「もつといいコメントちょうだいよ!『多少の無茶は!承知の上だ!!』とか!」

「自分、不器用ですから。」

「うわ、前時代的!」

「じゃあ、適当に捏造しとくから!」

適当に答えると捏造かよ。それってジャーナリストとしてはそれでは駄目だろ。

先輩はこちらに振り向き。

「次はいきなり三股中の天野くん!一言どうぞ!」

あつ捏造不可避く。

「爆砕重落下と剛腕粉碎撃、どちらか選んでください。今から実演し

は写真へ映るため動く。

あつという間に集合写真だな。

流石は箒さん、一夏の隣は譲らなかつたな。

簪さんも俺の横だ。俺の前には中腰の本音さん。

あと、俺の頭上にデータワーエポン達。

「クラスの思い出だよ！」

と、みんなの談。まあいいか。

結果夜中までみんなで騒いでた。データワーエポン達も楽しそう
何よりだ。あいつら、一応物食べれるんだな。

「ふう、疲れた。」

そう言いながら散歩をする俺。

何となく夜風に当たりたかつたからだ。

「あつ！そこのあんだ!？」

声をかけられた。

「一応確認しますが俺の事ですか？」

「そうよ！ここにあんだ以外居るわけ？」

回りを見渡す。

「居ないですね。」

「でしょ？」

小柄な割にはデカイボストンバッグを持った女性が近づいてくる。

「あんだってここの生徒？」

「はい。1年1組の天野星夜です。」

「なるほど、あんだが『2人目』ね。私は凰鈴音（ファン・リンイン）

よ、よろしく！」

「よろしくお願いします。で俺に声をかけた理由はなんですか？」

「あつそうだった。私は明日から転入するんだけど本校舎一階総合事
務受付ってどこ？」

くしゃくしゃの紙を見ながら聞いてくる凰さん。

「えーと。ここから…」

口で説明がし辛いな…どう見ても凰さん初めての場所な訳だし。

「よし。レオ、出ておいで。」

待機状態の電童から白い光と共に手のひらサイズのレオサークルが出てくる。

「ちよつとなによそれ!？」

「こいつはレオサークル。俺の仲間って言うのかな?」

「変わったもの持つてるわね。で?何でだしたの?」

「レオ。鳳さんを総合事務受付まで送ってあげて。」

コクリと頷くレオサークル。

鳳さんの目の前に飛び。背を向けて宙を行く。

「あとはその子に着いていけばいいですよ。」

「あっありがとう。ってそのあとはこいつはどうすればいいのよ。」

レオサークルを指差しながら言う。気が回る人だな。

「ああ、勝手に帰ってくるんで気にしなくていいですよ。鳳さん。」

「そうなんだ。わかったわ。あと、私の呼び方は鈴でいいわよ。」

「わかりました、鈴さん。俺も天野でも星夜でもご自由に呼んでください。」

「わかったわ。ありがとう星夜。」

手を降りながらレオサークルについていく鈴さん。

まだ4月なのに転入か…書類の不備とかで遅れたのかな?

あの感じは拳法やってそうだな。

その後、やけに怯えた感じでレオは帰ってきた。

恋する乙女は恐いそうだ。

第12話 《交わした約束》

パーティーの翌日の朝

俺―天野星夜―は探し物をしていた。

「うくん……ここにも居ない……。」

ユニコーンが朝から居ないのだ。

まあユニコーンはいつらの中でも好奇心が旺盛な奴だから、散歩でもしてるのかも。

まあ、緊急事態って訳でもないからいいか。

いざとなれば電子化して呼べばいいし。

朝からセシリア・オルコットの機嫌は良かった。

ちよつと良いことがあったからだ。

いつも通りの時間に規則正しく起きる。

今日も朝日が眩しい……と窓に何かいるのか陰がある。

「鳥かしら？」

窓に近づく、よく見るとそれは先日できた小さな友人だ。

「あら、ユニコーンさんお早うございます♪」

ユニコーンドリルだ。室内に居るけど気にしない。きつと待機状態のお互いのISを通じて来たのだろう。

「何かご用かしら？」

ユニコーンは肩に乗ってきた。

「ふふ、本当に可愛らしいですね。」

先日の自分達を守った時の頼もしさとは違った一面。

しかし、ここにいたら彼は困らないだろうか。

そうだ。ユニコーンを届けに行けば朝から彼に会う口実になる。

そう思うとさつそくパジャマから着替えようとする。

「あら、レディの着替えは見るものでは無いですよ。」

ユニコーンにハンカチを掛けて目隠し代わりだ。

データウエポン達に性別はあるのだろうか。そんな事を考えながら着替えを終えて。彼の部屋に向かう。

「たしかこの時間なら部屋に居るはずでしたわね？」

肩に乗るユニコーンに聞く。コクリと頷いた。

すると廊下に出てくる星夜を見つけた。

「星夜さん、おはようございます♪」

「おはようございます、セシリアさん。あつユニコーン、お前セシリアさんの所にいたのか。」

「はい。ですのでお届けに参りましたの。」

肩のユニコーンを手に乗せ、差し出す。

「わざわざありがとう。これから食堂に行つて朝食にするけどセシリアさんは？」

「ええ、私も丁度これから朝食ですの。」

「じゃあ、行こうか。」

「はい、参りましょう。」

今日は朝から彼に会い、誘つて貰えた。こんな小さな幸せを感じる
と機嫌も良くなるものだ。

「織斑くん、天野くん、おはよー。転校生の噂って聞いた？」

朝食を食べて、一旦部屋に戻つてから教室に入ると聞かれた。

「転校生？今の時期に？」

一夏が聞き返す。

「そう、なんでも中国の代表候補生だつてさ。」

「へえ、あの人も代表候補生なのか。」

俺が相づちを打つ。

「へ？天野くんは知ってるの？」

まあ当然そうなるよな。

「ああ、昨日道案内をした。」

レオサークルが。

「まあ私の存在を危ぶんでの転入かしら？」

ポーズを決めながら言うセシリアさん。きつと違うと思うよ？

「別にこのクラスに転入するわけでもあるまい。関係ないだろう。」
と箒さん。

「なあ星夜、そいつってどんな奴だった？」

「ん？一夏は気になる？」

「ああ、少しは。」

横にいた箒さんの機嫌が悪くなる。

一夏は気づいてないな。

「お前にそんな事を気にする余裕はあるのか？もう少しでクラス対抗戦だろう？」

一夏に現実を叩きつける箒さん。

「そうですね。対抗戦に向けてより実戦的な特訓をいたしましょう。」

「まあエネルギー切れの自爆にならない程度にはならないとな。」

「まだそのネタ引つ張るのか!？」

他愛の無い話をする。

ちなみに対抗戦で優勝したクラスには全員に学食デザートフリーパス半年分が配られるとのことで、一夏に掛かる期待は結構重め。

「まあ、やれるだけやってみるか。」

「やれるだけじゃダメだよ。」

「織斑くん、勝ってね！」

「男子足るもの、弱気でどうする？」

「クラスのみんなの幸せは織斑くんに託された！」

みんなで一夏に勝ちを願う。甘い好きな人にはたまらない景品だもんね。

「まあ、専用機持ちって1組と4組しか居ないから楽勝だよ！」

誰かが言う。4組：簪さんか…。

「その情報…古いわよ…。」

声がしたので入り口の方を見ると昨日見たシルエツト…鈴さんが立っていた。

「2組も専用機持ちが代表になったから。そう簡単には勝てないわよ！」

力強い宣言。なかなかの気迫だ。

「鈴…お前、鈴か!？」

一夏が言う。

「あら、知り合いなの？」

「そうよ、中国の代表候補生、凰鈴音！今日は宣戦布告に来たって訳。」
小さく笑う。それを見た一夏は…。

「何やってんだ、すげえ似合わないぞ。」

「んなっ…何て事言うのよあんたは!?!」

鈴さんの雰囲気が変わる。これが素か…。

「おい。」

「なによ!?!」

スパン

いつもは一夏に落とされている出席簿が鈴さんの頭に!?!

「凰、クラスへ戻れ、あと入口に立つな、邪魔だ。」

いきなり表れた織斑先生に説教される鈴さん。

「千冬さん…。」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ。それとも…。」

再び出席簿を構える。素直に下がる鈴さん。

「じゃあ一夏、後でね!?!逃げないでよ!?!」

そう言い残すと2組へ向かう鈴さんだった。

「では、SHRを始める。織斑、号令!!」

こうして今日も授業が始まる。

鈴さんのことが気になるのか篤さんは授業に集中できなかつた為、先生達に注意を受けていた。

——
休み時間、食堂

「待ってたわよ!一夏!」

鈴さん食券販売機前にて仁王立ち。(ラーメン装備)

「なにが待ってただよ。そこに居ると食券出せないだろ。」

「ラーメン、のびますよ。」

一夏と俺でそれぞれ答える。

「わかってるわよ。あんたが来ないのが行けないのよ。」

鈴さんが退いたので、食券を購入。

食堂を見渡してみたが簪さんは見当たらないので一夏と一緒にテーブルへ。

「久し振りだなあ。お前、いつの間に日本に帰ってきたんだ？おばさん元気？いつ代表候補生になったんだ？」

一夏が鈴さんに矢継ぎ早に質問する。

「質問ばっかしないですよ！あんたこそ、なんでIS使ってるのよ。ニュース見てびっくりしたじゃない。」

2人の会話が弾む、疎外感を感じ、簪さんがたずねる。

「一夏、そろそろどういう関係か説明をだな…。」

「一夏さんとお付き合いでもされてますの？」

「まあ、仲が良いのは解ったよ。」

セシリアさんの言葉に反応して顔を真っ赤にする鈴さん。

「べ、べべつ、別に付き合ってる訳じゃあ。」

「そうだぞ。ただの幼馴染みだよ。」

一夏を睨む鈴さん。

「なんだよ？なんで睨むんだよ。」

「ふん、なんでも無いわよ。」

一夏、お前って……。

あんだだけ鈍感だとこんなに悩まなくていいんだろうな…。

一夏が俺達に向けて。

「えーと、簪が引越したのが、小4だろ？鈴はそのあとに来たんだ、で中2の頃に中国に帰ったから大体1年ぶりだな。」

なるほどね。

「で、こつちが簪、前に言っただろ？俺の通ってた道場の娘。あと、クラスメイトの星夜とセシリア。」

なんか俺達の紹介雑じゃね？

「ふうん、そうなんだ。」

鈴さんは簪さんを見る、その人は同類（ライバル）だよ。

「初めまして、よろしく。」

「ああ、よろしく。」

2人の間ではゴングが鳴ったに違いない、一夏争奪戦の。

「よろしくお願いしますね。凰鈴音さん。」

「これからよろしくしますね。鈴さん。」

俺とセシリアさんがあいさつする。

「ふうん。よろしく。まあ悪いけどあんた達には興味ないから。」

おお。大胆発言。

「それはなぜかしら？」

怒りを抑えながら聞くセシリアさん。

「だってあたしが勝つから。あたしより弱いやつには興味ないの。」

「では、この中で一番弱い一夏さんも興味ないのですね。」

セシリアさんが返す。

「なら、一夏、私が操縦見てあげようか？」

こつちなど興味が無いのは本当のようだ。

裏表が無いんだろうな。

本当に思った事をそのまま伝えたのだろう。

「そうか!? そりゃ助かる。」

「一夏に教えるのは私の役目だ! 頼まれたのは私だ! それに補助も間に合っている。」

箒さんが当然の反応をする。

「あたしは一夏に聞いたの、外野は黙ってなさいよ。」

「私は一夏に頼まれたんだ!」

そんなやり取りが続いたので食べ終わった自分は席を立つ。

「ごちそうさま。」

「ごちそうさまでしたわ。」

セシリアさんも同時だったようだ。

まあ痴話喧嘩は放っておこう。

俺には俺の用事がある。

「じゃあ一夏、また後でな。」

「えっ!?! どこかに行くのか!?!」

救いを求める目でこちらを見るがそんなことは知らない。

食器を返却棚に返し食堂をあとにした。

整備室

そこでは更識簪が自分の機体である打鉄式を前に作業していた。先日のGEAR襲撃の際、自分に力が有れば友人達の傷は減ったのではないか。

そう思えて仕方がない。自分の好きなヒーローだって力が無くても立ち向かう。

「あの時の…天野くん…本物のヒーローみたいだつな…」

最初は電童の見た目がテレビに出るようなデザインで気に入った。

あの時の彼はきつと後ろにいた『セシリア』の為に立ち上がり、向かい合っていた。

そしてその2人が協力し、その心に応じて更なる力が手にはいる。

まさに王道展開だった。

でも、そのあと彼らは傷だらけだった。

そうだ、テレビの創作ではない、現実は違う。

そんなものはテレビの中だけで充分だ。

今回のような事件が今後起こらない理由はない。

特に彼は2人しか居ない男性操縦者だ。

その特異性から狙われる可能性は高い。

この前のスコールと言う人物だつてまだ居る。

ならば自分も彼を守つてあげたい。

守られるだけは嫌だから。

『無能なままで、いなさいな。』

頭のなかに前に言われた言葉が響く。

「くっ……」

小さく歯ぎしりする。同時に画面にはエラーの表示が。

「なんで、駄目なの…」

ここ最近は武装の作成を行っていた。

元々倉持技研から機体を受領した時点で本体は大体完成していた

のでそちらは調整だけだった。

問題は武装だ。

荷電粒子砲「春雷」

超振動薙刀「夢現」

そして八連装誘導弾「山嵐」

とくにネックなのは山嵐だ。

8×6個のミサイルを制御するためのシステムが全くうまくいかない。

これがあるだけでもこの機体は完成度がはね上がる。

電童と共に戦うのなら射撃で支援した方がいいはずだ。

「やっぱり、簪さんここにいたんだ。」

気がつくとも入口に天野星夜が立っていた。

「天野…くん…。どうしたの…?」

「いや、食堂で見なかったからこつちに居るかなって。」

そう言いながら彼は手に下げた 袋を渡す。

「購買で買ってきたから。食べないと午後が大変だよ?」

袋の中を見ると飲み物とサンドイッチだ。

「私の…為に?」

「うん。大切な仲間だからね。」

彼のその優しさが嬉しかった。初めてあったときから変わらない。

事ある毎に手伝えることは無いかと本音と一緒に色々してくれる。

電童の稼働データだっけを見せてくれた。

あと個人的に電童の写真も撮らせてもらったことがある。

ノリノリでいろんなポーズを取ってくれたっけ。

「うん、ありがとう。」

袋を受けとる。

「いただきます。」

手を合わせてからいただく。

整備室に置かれた打鉄式式を見て星夜は聞いて来た。

「この前の事、気にしてるの。」

「…うん…私は何も出来なかったから…。」

素直に答えた。

「奪われたシステムを奪い返したのは簪さんでしょ?」

「本音やGEARの人が居たから…。結果は変わってない…。」

あくまで手伝いをしただけだ。彼女は自分は何も出来ていないと思っっている。

「簪さんが居なかつたらシステムの復旧が最低でも30分は遅れていたそうだよ。」

「そうだったら俺はあの時に火傷して今、ここに居なかつたかも知れないよ。」

そう、あの時スプリンクラーが機能して消火してなければ、電童が解けた直後には炎のど真ん中で倒れていた。

「だから、あの時、俺は簪さんに助けってもらってたんだよ。ありがとう。」

星夜は頭を下げる。

「えっでも…。」

簪は驚いていた。自分はその時、彼を守っていたのだと。そんな力はないと思っっていたから。

自分は…無能な人間なのに…。

「これからも…よろしくね。簪さん。」

「よろしく…。『星夜くん』…。」

「そうだ、助けて貰ったお礼だつてGEARから贈り物が簪さんにあつたんだ。」

星夜は思い出して手を叩く。

「お礼?。」

「ああ、来客のみんなには迷惑もかけて、その上、助けて貰ったからね。」

そう言いながら星夜は待機状態の電童を操作する。

そうしてそこには仮想ディスプレイが表示され、データが出る。

「これって…。」

「ああ、井上さんたちが俺から聞いていた打鉄式の話から必要なデータだろうってさ。」

そこには様々なパターンのミサイルの制御システム、荷電粒子砲の設計データなどが写し出されていた。

「これをどう使うのかは簪さん、君が決めることだ。」

簪の端末にデータが送られていく。

「私は…この機体を一人で作ろうとした。」

簪は語り出す。

「それは姉の存在があったから。」

「小さい時から比べられて、何一つ勝てなくて。」

涙を浮かべながら語る。

「ある時、姉に言われたの。『無能なままでいろ』って」

「どうしても追い付きたかった。姉に私を見てほしかった。だから、このI Sを一人で完成させれば追い付くことができると思ったの。」

「でも、そんな事よりも今、私を見てくれる友人を助けることが出来るようになるために。この機体を完成させたい。」

「俺はそのお姉さんを知らないけど、簪さんを知ってる。だから言うよ、決して無能なんかじゃない！簪さんにはこの機体を『創造』する力があるんだ。」

「みんなの力を借りるのは全く恥ずかしい事じゃない、俺だって一人出来ることなんか高が知れてる。この前だってみんなに助けて貰ったしね。」

「うん、だから、手伝って欲しいの。この機体を『創造』するために。みんなの力を。」

簪は入口に視線を送る。

「かんちゃんのお望みならかなえちやうよくー！」

「仲間を信じ頼る。『信頼』されたからには答えませんと。」

いつの間にか本音とセシリアが居た。

「ありがとう。」

「じゃあ、みんなで打鉄式式の完成を目指して頑張ろう！」

「『おくー！』」

「これ、完成したら俺じゃ勝つの難しいな。」

「完成したら『一緒に戦おうね。』」

「ああ約束だ。」

こうして打鉄式式の開発は急ピッチで進んでいくのであった。

第13話《クラス対抗戦》

整備室にて打鉄式式の開発を約束した日の放課後。

俺―天野星夜―はアリーナにて白式と模擬戦を行っていた。

「どうした!?!一夏!全然近寄れてないぞ!」

「星夜!!てめえ!俺に射撃武器無いのを知ってるくせに!?!」

この前受け取った武装を駆使して一夏を翻弄する。

ライフルで牽制し、ミサイルの至近爆発でダメージ。そして姿勢が崩れたところでキャノン砲が直撃する。

「星夜!貴様!男らしく堂々と戦え!」

見ていた箒さんが叫ぶ。

「一夏は後付け武装が無くて、刀一本だ。だから様々な射撃に対してどう回避して近づくかが重要だ。その為の訓練だよ。」

大好きな一夏が一方的にやられて憤るって子供かよ……

「それはわかるが……」

「それにさ、近接戦闘はこのあと箒さんがやるからね。俺とセシリアさんは射撃で鍛えるよ。」

「む……そうか……」

打鉄を纏った箒さんがこたえる。

本当に一夏が好きなんだな。

「てか、お前の機体、武器乗りすぎだろ!?!」

「まあね。俺が慣れてないから個別に呼び出したりとかはしないけどね。」

全身に火器を纏った電童は一夏に対して各砲を向ける。

何度か使ってみたが使い勝手は悪くない。

ただ、俺が慣れて無いので出したり、戻したりするのに時間がかかるので。

「なら、最初から出してしまえばよろしいのでは?」

とセシリアさんのアドバイスを実施中。

多少機体が重くなるが頭に掛かる負担は少ないのでこれはいいな。

出し入れの練習は続けるけど。

「よし、これで!!」

弾幕が途切れた。

これを好機と見た一夏、ブーストを吹かし、接近する。

「ファイナルロード！ユニコーン!!」

俺と一夏の間ユニコーンドリルが出現する。

「なっ!?!そんなんありかよ!?!」

一夏はいきなりの事態に足を止める。

「セシリアさんのビットより数はないよ。頑張りな!」

ユニコーンが角を使い、突きをかます。

避ける一夏、その間に俺は武器を格納する。

そして右手を掲げ。

「ユニコーンドライブ！インストール!」

声高らかに宣言をすると、一夏を牽制していたユニコーンが光り、次の瞬間には右腕に装着されていた。

「なんだそりゃあ!?!」

驚く一夏、まあいきなりの現れたり武器になったりで無理もないな。

一足で近づく。腕についたユニコーンのドリルが回転する。

そしてそのドリルで白式の装甲を削る。

「ぐああ!」

一夏はダメージに耐えきれないのか吹き飛ぶ。

「いくぞ！ユニコーンドリル!!ファイナルアタック!」

機体のエネルギーをほぼ使いきる電童とデータウエポンによる。その名の通り、最後の一撃、これを一夏は耐えきれるか？試してみた。

「なっ!?!うわああ!」

そのままエネルギーに飲み込まれる一夏、試合終了だ。

「なんか、何も出来なかった気がする。」

ビットにて感想をのべる一夏。

「何もさせないように動いたからね。特に一夏は色々と単調だからね。」

「ぐはっ!?!」

いいリアクションだ。

「一夏はまず、飛び込むんじゃなくて最初は回避に徹して相手を見極めるところからだね。」

「ん、そうだな、次はそうしてみるよ。」

「じゃあ、俺とセシリアさんは用があるから、これで。」

「ああ後は筈と頑張るぜ。」

着替えたならそのまま整備室へ向かおうとする。ピットの前に鈴さんが居た。

「一夏ならまだ掛かるよ？急用なら呼ぶけど？」

「えっ急用って程でもないからいいわよ。」

なんか謙虚だな…。

「まあ、疲れて出てくるからそれなりにしてあげなよ？」

「それくらいわかってるわよ。」

まあ両手にタオルとドリンク持つてるしね。ごく丁寧に常温ぼいし。

「鈴さんは気が回るなあ。」

「誉めても何もでないわよ。」

「そうですか、では、俺はこれで。」

「うん、じゃあね。」

手を降って別れた。その後、セシリアさんと合流し、整備室へ。

俺たちが来るまでに本音さんと簪さんと整備科の先輩へ頼みに行っていたそうで、そこには結構な人数が集まった。

この間の黛先輩もいる。

整備科の先輩としても専用機に関われるのはメリットだし、それも3機、内1機は噂の男性操縦者の物だ。

「じゃあ、打鉄式式の作成を中心にやりつつ、他の機体も調整をしようか？」

先輩たちが簪さんを中心に話を進めていた。

さて、俺にできるのは力仕事位か。

「天野くん！そのケーブル持ってきて！」

「ディスプレイが足りない！倉庫の液晶ディスプレイ持ってきて！」

「そこにあるキャディ邪魔だから、端によけて！」
「了解！」

力と体力ならそれなりに自信はある。
プログラミングは得意だがあくまで個人レベルの話、ISには余り役に立たない。

しかし、簪さんは凄いな。両手両足に上下2個づつ、計8個のキーボードを駆使している。

あれで打ち間違いがないし、一般人よりも圧倒的な速さで打ち込んでいる。

今日中に終わるものではないのでそこそこの時間で今日は終了だ。
明日の授業に支障が出ても本末転倒だし。

「よし・今日はここまで！また、明日も来るからね！」

「二「ありがとうございます！」」

先輩たちにお礼を言う。

「よし、俺達も帰るか。」

「そうですね。」

「くたくだよ。」

「うん、ありがとう。これならクラス対抗戦にも間に合うかも…。」
それぞれ片付けをしながら話していた。

「ちがうよ。簪さん。」

「えっ?」

簪さんが聞き返す。

『間に合うかも』じゃ無いよ。間に合わせるんだよ。」

「うん、そうだったね。」

簪さんが笑顔で答える。

「じゃあ、また明日ね。」

「またね〜あまのん。」

「はい、また明日。」

「また…明日…。」

挨拶して皆と別れる。

部屋に帰った後、飲み物を買いに外へ出ると、自販機の隣のベンチで泣いてる鈴さんを見つけた。

「鈴さん、どうしたんですか?」

「あつ星夜…何でもない。」

どう見ても何かあったよね!?

「もしかして…一夏絡み?」

まあ一番可能性が有るものを聞く。

「うん…あいつね…覚えてなかったんだ…。」

「覚えてない?」

俺は聞き返した。

「うん、1年前に中国に帰ったのは一夏が言ってたわよね。その時なだけで…」

恥ずかしそうに昔をすこし語る鈴さん。

つまり、離れ離れになるときに

「毎日お味噌汁作ってあげる。」のニュアンスで告白していたが、一夏には「毎日奢ってくれる。」位にしか思っていないようだ。しかもそれで怒った鈴さんに対して謝る気もないと。

「それは…ひどいな…。まだすっぱりと覚えてないと謝ってくれた方がマシだな。」

「あいつ、こつちがどんなに真剣に『勇気』を振り絞って行ったと思っ
てんのかしら?」

これは擁護できないな。

「まあ、その怒りは今度の対抗戦でぶつけたら?で、勝ったら土下座しろ!位言ってみたらどうです?」

「そうね、その手があったわね。ぐうの音も出ないくらいケチョンケ
チョンにしてやるんだから!!」

一夏は知らずの内に対抗戦の難易度を上げたようだ。

「あんたは、こつちを応援して良い訳?同じクラスなんでしょ?」

本当にこの人は優しいな。こつちの心配ですか。

「それで言ったら今は4組の人の手伝いをしてるので、問題はないです。それに勝つか負けるかは一夏次第です。」

「なら、いいんだけど。」

「よし！明日さっそく言ってみるわね！星夜、ありがと！」
立ち去っていく鈴さん。うむ、恋する乙女の力は凄いな。

翌日

「一夏！今度の対抗戦で勝ったら昨日の事謝ってもらわよ！」
宣言通りに来た鈴さん。

「おう！ならおれが勝ったら説明してもらわよ！」
まあそう返すのがどうだろうな。

「えっ説明は…その…」

言葉の歯切れが悪くなる鈴さん。

「えっええ！いいわよ！あたしが勝つからね！」

「今度の対抗戦、絶対負けないからな！」

「謝る練習して待ってなさい！！」

「鈴こそ説明用の原稿作っておけよ！」

「そろそろ織斑先生来るぞ。」

俺の一言で解散となった。

入れ替わりで織斑先生が来て授業がはじまる。

それから2週間程は一夏の訓練や打鉄式式の作成で時間が過ぎていく

「っ…っいに…」

「…完成…したね。」

「ああ…」

「長くて短い2週間だったわ…。」

ようやく完成した打鉄式式、俺の電童やセシリアさんのブルーティ
アーズの稼働データ。

GEARからの提供された各種データ。

そして整備科の先輩たちの助力によって、今完成した。

何度もテストを繰り返し返し、トライ&エラーの精神で機体の詳細を煮

詰めていき、完成度を高めた。

各武装のテストも完了した。

さらに俺達との模擬戦もこなし、簪さんに合わせた調整もした。

「ありがとう……ごいしました……。これで、今週の対抗戦で御披露目できます。」

簪さんが全員に礼を言う。

「いいってことよ。こっちもいい経験ができたし。」

先輩たちもいい笑顔だ。

「折角だからさ、3人で並んでよ！IS揃い踏みって！」

黛さんがカメラを構える。

「そうだね！皆で記念写真だ！」

「いいですね。撮りましようか。簪さんが中央ですね。」

皆で打鉄式式を纏った簪さんを中心に集まる。

電童とブルーティアーズを展開し、並ぶ。

「よし！タイマーセット！」

黛先輩も並び、カメラからカシヤツと音がする。

「じゃあ写真出来たら焼き増しして渡すから！」

こうして、打鉄式式は完成した。

そして、今日はクラス対抗戦の日だ。

ちなみに1回戦目からなかなか熱い試合が見れそうだ。

《1組代表、織斑一夏・白式》対《2組代表、凰鈴音・甲龍》

いきなりの組み合わせだ。

3組の子達はなんかお通夜みたいな雰囲気だ。

まあ、あのクラスだけ量産機だしなあ。合掌。

「あまのんくこっちこっち。」

本音さんだ。隣の席を叩いて居るのでそこに座る。

「簪さん、どうだった？」

「調子よさそうだったよ。このまま目指せ優勝だね。」

「その場合は本音さん半年のフリーパス貰えないよ？」

「あつ……。」

固まる本音さん。友人の活躍と自分の幸せを秤にかけているようだ。

「まあ簪さんが勝ったら手伝ったお礼として、奢ってもらったら？バチは当たらないんじゃない？」

「でも私はかんちゃんの子のメイドだし。」

本気で悩む仕草をする本音さん。

「あれ？セツシーは？」

「そろそろ来るよ。」

言ってるそばからセシリアさんが来た。

「となり、失礼しますね。」

隣に座るセシリアさん。

アリーナには丁度、鈴さんと一夏が飛び出してきていた。

「どちらが勝つと思われませんか？」

セシリアさんが聞いて来た。

「うん、鈴さんはたった1年間で代表候補生になったんだから技量面では圧倒的に不利だろう。でも、一夏はそれを覆せる可能性がある。」

零落白夜―白式のワンオフアビリティだ。

端的にまとめると自分のシールドエネルギーを攻撃力に変換する能力、当たれば勝ち、外せば敗けだ。

「そうですね。機体を見ると鈴さんの機体も近接系のようですし、当てられる可能性はまだありますわね。」

ここ数日の訓練ではひたすら様々な射撃を掻い潜る練習をしたのでいけるはずだ。

「しかし、相手は第三世代機、何が飛び出すか…。」

「油断は禁物ですね。」

「がんばれ〜おりむー！」

アリーナで向かい合っていた一夏と鈴さん、なにか話しているようだ。

「そーいや先日、別件でさらに怒らせたとか。」

「火に油を注ぐなよ。DMか？」

『クラス対抗戦、第一試合、1組代表〈織斑一夏〉対2組代表〈凰鈴音〉

試合：開始！』

アリーナにアナウンスが流れた。

開始と同時に相手の懐へ飛び込む一夏。

撃たれる前に討て！を実施するつもりだ。

だが相手の2振りの青竜刀で止められた。

そのまま激しい打ち合いが始まる。

「はあ、まったく一夏は……。」

ため息をつく。

「星夜さん？どうしましたの？」

セシリアさんが聞いてくる。

「戦うときはまず回避に専念して見極めろって教えてたはずなのにな……。」

「ああ、そうでしたわね。」

訓練の様子を思い出すセシリアさん。

「剣の腕がすごいのはわかったけどさ……。その剣術を活かすための戦術が無いからな……。」

実際、今は一夏が押している。2振りの青竜刀を捌き、小さいが確実に当てている。

鈴さんが大きく振りかぶり一夏を吹き飛ばす。

「何か仕掛けるのかな？」

「そうですね。」

「なにするんだらうね。りんりんは。」

甲龍の両肩に浮くユニットのカバーがスライドする。

そしてユニットの中心にある球体が光り、直後に一夏は《殴り》飛ばされた。

飛ばされた一夏はすぐに体制を立て直す、そしてすぐにその場から飛ぶ。

一夏がいた場所は大きな音が響くと同時に爆ぜた。

「何が起きたんだ？」

注意深く見ているも弾らしき物は見えない。

あの効果範囲なら相当な衝撃を産み出するのは確実だ。

だが撃っていると思われる鈴さんは平然としている。

自身の反動は無いのか？

「あれは…衝撃砲ですわね。」

セシリアさんが答える。

「衝撃砲？」

「空間自体に圧力をかけて、砲身と弾丸をその場で精製するんだよ。」

セシリアさんに変わり本音さんが答えてくれた。

「そう、ブルーティーズと同じ第三世代型兵装、その特徴は砲身も弾丸も不可視であることです。」

「さらに、砲身斜角とかも関係なしに好きに撃てるんだ。だから後ろを向いていても撃たれるよ〜！」

「2人ともありがとう。」

説明に対して礼を言う。

「つまり、一夏は相手の思考を先読みして動くか、相手の思考より速く動くしか無いな。」

「そうですね。それしか対処は難しいかと。」

「弾がいくら直線しか進まなくてもね〜。おりむ〜難しいよ〜。」

先ほどから一夏は回避に専念しているが、やはり見えない砲撃は避けきれないようだ。

じりじりと削られるシールドエネルギー。

「よし。」

短く言った。

「どうしましたの？」

セシリアさんが疑問に思ったのだろう。

「いや、これだけの苦境で一夏の目が敗けを認めていない。まだあいつには切り札があるからだ。」

「なるほど…もしかして…。」

訓練を思い出せば一夏が狙う手も見えてくる。

「一夏…『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を試すのか…？」

一夏は最後の数日間瞬時加速の練習をしていた。

瞬時加速の名の通り瞬間的に加速し踏み込む。

近接系にとっては修得必須の高等技能だ。

一夏は鈴さんとの間合いと攻撃のタイミングを計り、逆転の一撃を放とうとした。

その瞬間、

大きな爆発音と衝撃がアリーナ全体を襲った。

「一体何が…!?!」

混乱する他の生徒を横目に俺達はアリーナの中央に表れた謎の影から目を離さないようにしていた。

第14話 《翠の誓い》

クラス対抗戦の最中、突然の襲撃者。

俺―天野星夜―は目の前の出来事に対して考えを巡らしていた。

「あいつら、亡国機業か？」

視線の先にはアリーナのバリアを破壊して侵入してきた謎の灰色のISが居た。

「わかりませんが…良くないことは確かですわね。」

セシリアさんが答える。

周りからガシャガシャと音がする。

隔壁が降り、ロックされていく。

今いる客席とアリーナの間にはバリアが張ってあるがこいつはそれを破って侵入してきた。

つまり、意味をなさないだろう。

その事に気がついた生徒から我先にと逃げようとする。

「あれ!?開かない?」

「なんですってー!?じゃああいつが撃ってきたらどうなるのよ!!」

「やだあ!?死にたくないわよ!」

口々に騒ぐ、生徒たちが恐慌状態になる。

このままでは危険だ。

待機状態の電童で通信を行う。

「織斑先生、客席の生徒がパニックを起こしています!隔壁を開けてください!」

『天野、こちらでも事態は確認した。あのISからハッキングを受けているのか此方からも開けられん。3年生の精鋭たちにシステムの奪取を行っているが時間がかかる。』

「こちらからもデータウエポン達を侵入させて制御を試してみます。このままだと怪我人が出ます!」

『わかった。もしの場合は隔壁の破壊も許可する。』

「了解です。」

通信を終了し、データウエポン達を呼び出す。

「皆、頼むぞー！」

電童からユニコーン以外のデータウエポン達が飛び出し、隔壁の端末にデータ化して、侵入する。

数秒後、隔壁が音を立てながら開く。

「皆さん！落ち着いて！ゆっくりと避難してください！」

「押さずに！駆けずに！慎重に！」

「お・か・しは避難の基本だよー！」

俺、セシリアさん、本音さんで誘導する。

他の隔壁もデータウエポン達が次々に開けていく。

「織斑先生、一夏達の援護に向かいますでしょうか？」

『いや、そのまま生徒達の避難を続ける。奴の攻撃がそちらに向かった場合の対処を頼む。』

「わかりました。」

アリーナのバリアを突破する攻撃力か…ファイヤーウォールでも厳しいな…。

「客席の隔壁を開けきつたらピットにいる簪さん達を頼む。」

データウエポン達に指示を出す。

まだピットには次の試合に向けて準備していた簪さんと3組の代表がいるはずだ。

「この辺りは落ち着いたので他の所を見て参りますわ。」

「わかった、俺もあちらを見てくる。本音さんは避難してください。」

「うん、2人とも気を付けてね。」

2人と別れ、他の隔壁の近くに行く。

隔壁が開いたお陰かそれなりに落ち着きつつ避難している。

「怪我をされた方等は居ませんか？」

「急ぎ避難しようとして怪我をする人が居ないとも限らない。」

「あつ天野くんだ！助かった〜。」

生徒の1人が言う。

「はい、ですのでゆっくりと進んでください。」

「こちらも問題は無さそうだ。だが何が起こるかわからないからな。気を引き締めないと。」

ちらつと一夏達の方に視線を送る。

先ほどから一夏が前衛で鈴さんが後衛の陣形を取りながら戦っているが状況は芳しく無さそうだ。

ん？何か一夏と鈴さんが話しているが相手のISは動こうとしない。

なぜだ？観察でもしてるのか？

2人の会話が終わったようで一夏が突撃姿勢をとる。その時だった。

「一夏ああっ!!」

箒さんの声だ。アリーナの中継室からマイクを通して叫んでいる。

「男なら…男なら、そのくらいの障害を退けて見せろ!!」

その放送の発信源たる中継室に灰色のISは腕を向ける。

まずい、そう思ったときには一夏が鈴さんの衝撃砲を受けてそのエネルギーを利用した瞬時加速で間に割り込んでいた。

「一夏あ!?!」

箒さんが悲痛な声で叫ぶ。

直撃、一夏が吹き飛ばす。地面で倒れて動かない。

鈴さんが一夏に駆け寄ろうとするが灰色のISがそれを許さない。格闘戦を仕掛けている。

「織斑先生！一夏の救助のためアリーナにいきます！アリーナのバリアを！」

『ダメだ！相手からのハッキングレベルが上がったのかデータウエポン達が開けた扉も再度閉められている。』

織斑先生の焦った声が聞こえる。

直後に目の前の隔壁が下がり、ロック音がする。

「破っ！」

先ほど許可は貰ってるので今度は電童を展開し、破壊する。

この隔壁周辺の生徒達が最後だったのでこれで客席の避難は完了だ。

セシリアさんが走ってくる。

「星夜さん！私はどうしたら!?!」

軽く混乱してるな。

「セシリアさん！落ち着いて！一夏は気絶してるだけだ。まだ大丈夫。ユニコーン！」

ユニコーンを電童から白式へ転送する。

ユニコーンは一夏を守るため、背中に乗せる。

アリーナの外壁の一部が大きな音を立てながら爆発する。

あそこは…

「こちらは4組の更識簪です。所属不明ISの相手は私が入ります！今の内に2人は逃げて！」

簪さんがピットのゲートを破壊して内部に入ったようだ。

鈴さんと灰色のISの間に夢現を振りながら割り込み。押し込む。

その隙に鈴さんは一夏を乗せているユニコーンに近づき、一緒に簪さんが開けたピットの穴へ向けて進む。

「セシリアさん！俺たちもあそこから行くぞ！」

「はい！向かいましょう！」

彼女だけにやらせるわけには行かない。

残念だがバリア破る攻撃力は俺たちにはない。

セシリアさんもISを展開し通路を急ぐ。

「簪さん！」

俺とセシリアさんが到着する。

俺はそのまま灰色のISに向かって跳び蹴りをかます。

「援護に回りますわ！」

「星夜くん！」

2人とも灰色のISと距離をとる。

『お前達、先ほど一夏達を受け取ったと救護班から連絡が合った。また、データウエポン達も頑張っているがハッキングのせいで教師達のISが取りに行けない。あと篠ノ之の馬鹿も回収済みだ。』

「了解です、このまま交戦します。」

返事をする。よし、一夏達は無事か。

「お前の目的は解らないが…。」

「私達の友人を…学園を…。」

「襲った報い、受けさせるよ！」

3体1の戦いが始まった。

なんだ？こいつの反応は!?こっちの動きに後出しで反応してる!?
拳を、脚を、何度振るっても当たりそうもない。

時折距離を開けたタイミングでセシリアさんと簪さんの射撃すら
難なく回避する。

とりあえず周りには気を配らなくて良いし、試合の途中だった一夏
達とは違いこちらは全力で行ける。

その筈なのにこちらが少しずつ削られていく。

「ユニコーンドライブ！インストール！」

右腕にユニコーンドリルを装備、ドリルを回転させて突きだす。

「くらええー！」

ドリルを避けられる。そのまま左足の蹴りを繰り出す。

それすらもスラスターを吹かし、回避する。

左腕から追撃として技を繰り出す。

「飛翔！烈風波！」

フル回転するハイパープラズマドライブが周囲の空気を圧縮し竜
巻として放つ。

流石に対応しきれなかったのか竜巻に飲み込まれる。

「ついに当たりましたわ！」

「当たっただけだ、まだ致命傷じゃない！」

「砲撃、来る！」

灰色のISが駒のように回転し、ビームを乱射する。

先ほどとは違い連射のため威力はそこまで高くはない。

ファイヤーウォールで無効化する。

あつちは連戦なのに疲れた様子がない、それにこの反応速度は…。

「もしかして…こいつは機械か？」

「何をいっておりますの星夜さん、ISは機械ですわよ？」

「そうじゃなくて、人が乗ってない無人機なんじゃないかってこと。」

「それはあり得ない。」

俺の発言に簪さんが答える。

「ISは人が乗らないと絶対に動かない。」

「そうですね、教科書にも書いてありますよ?」

確かに書いてはあったな。

「だけど、技術は日進月歩、確実に進んでいる。それにユニコーン達の存在もある。」

こいつらだって無人ISの一種とも言える。

「確かに、そうですね。」

「それで?無人機だとしてどうするの?」

2人とも納得したようだ。

「なら、やつにはパターンがあるはず、それを見切れば大技も当てられる。」

機械ならプログラムに合わせて動いてるだけだ。

「では?どうしますの。」

セシリアさんが聞く。

「奴の反応速度を逆手にとる。」

ファイヤーウォールを解除してドリルを回転させながら飛び込む。

右手を構える。それに反応した灰色のISはドリルを対応するための構えをとる。

俺はそのまま横を通りすぎ、左の裏拳を喰らわせる。

やはり、予測以外の行動には対処が遅れるようだ。

「そこですわ!」

体勢を崩したところにブルーティアーズの一斉射撃が入る。

「このまま、終わらせる!」

打鉄式式の春雷が続けて照射される。

爆発に包まれ、吹き飛ぶ灰色のIS、奴の目が不気味に光った。

そしてチャージした両腕のビーム砲を天に向けて撃つ。

何が目的だ?

『お前達!!上だ!増援が来るぞ!』

織斑先生から通信が入る。

今の砲撃で開いたバリアの穴から新たな機影が複数、飛び込んで来た。

人が入りそうに無い細い体に細い手足、それに対して大きな楕円形の嘴みたいな物がある頭。

灰色のISに比べ、戦闘力は低そうだが数がいる。いきなり5体も増えるとは…。

「なんかゲームの雑魚とボスって感じだな。」

それにしても出る順番逆だけど。

敵はそれぞれの武器を放つ。

「ぐっこれは不味い!？」

「とにかく、数を減らしませんと!」

「弾幕が、厚い…。」

5体の量産型が威力は低いけど連射の利くビームガンで弾幕を張る、そしてタイミングを計った灰色のISから強力な砲撃がやってくる。

なかなかのチームプレーだな。

こちらは回避に専念するかしかない、突破口を見つけないとじり貧だ。

まだダメージは少ないが精神的にこの弾幕はキツイ。狙いは甘いが数があるので視界が埋まる。

ファイヤーウォールで防げないことはないが足を止めたら灰色のISから特大の砲撃が飛んでくる。

「はああああ!!」

いきなり青龍刀を振り回しながら鈴さんが敵の軍団に下から飛び込んだ。

「鈴さん!いつの間!?」

「あたしだって代表候補生よ!このまま引き下がるわけには行かないわ!」

鈴さんが飛び込んだお陰で敵の弾幕が途切れた。

「そんなボロボロの機体では無謀ですわ!」

「そうだよ。せめて衝撃砲での射撃を…。」

2人は鈴さんに声をかける。

「シールドエネルギーは回復させられたけど龍砲はさっきから調子が悪いのよ!!」

つまり、前に出るしか無いのか。ボロボロの機体で、当たればただではすまないのに。

6体の敵のなかに突っ込み、攪乱している。

その『勇氣』に答えないと！

「うおおおおお！」

近くに居た量産型に近づきドリルを叩き込む。

装甲が抉れ中の機械が露になる。オイルらしき物が飛沫となって飛び散る。まずは1機だ。

「なかなかやるじゃない！」

青龍刀を振り回し、灰色のISを追う鈴さんが言う。

「そいつは俺がやります！鈴さんは2人と周りのやつを！」

鈴さんと入れ替わり灰色のISに張り付く。

フェイントを交えながら攻撃する。

さつきよりはマシになったか、だが鈴さんも状態が良くない、早めに決着を着けないと！

「キヤアアアア！」

後ろから悲鳴がした、鈴さんの声だ！

「鈴さん!？」

振り向くとそこには落下していく鈴さんの姿が！

一体何が!?

「鈴さんに抱きついて自爆いたしましたわ!？」

セシリアさんが驚きながら言う。

何だって！そうか、こいつらは機械だ。命令を実行するだけなんだ。

戦闘中に別の事を考えてしまっていた。次の瞬間後ろに居た灰色のISから強烈な打撃を喰らう。

セシリアさん、簪さんも同じように量産型から一撃を貰い、鈴さんの近くに落とされた。

3体の量産型と灰色のISは空中からエネルギーをチャージしていた。

「ぐうう、2人とも、鈴さんを連れて逃げろ！」

意識を失っている鈴さんの前に立ちユニコーンを構える。

「星夜さん、どうするおつもりで？」

セシリアさんが訪ねる。

「最大出力のファイヤーウォールなら奴のチャージした射撃でも数秒はもつ！はやく！」

「いけませんわ！それでは星夜さんが！」

「セシリアさん、はやく行つて！」

簪さんが立ち上がり、山嵐を展開する。

「これで少しは軽減できるはず……。」

簪さんはセシリアさんを見ながら

「それにセシリアさん、武器がもう……無いよね？」

「そうだ、ビットもライフルも破壊されているのだ。」

「仕方ありませんわ、お二人ともちゃんと帰って来てくださいな。」

鈴さんがかつぎ上げ外壁の穴へ向かうセシリアさん。

それにやつらは当然気づく。

「仲間は……やらせない……!!」

力強い宣言と同時に山嵐が放たれる。

48個ものミサイルが敵に向かい放たれる。

ちなみに今、簪さんはこれをマニュアルで動かしている。

計8個の仮想キーボードを使い、それぞれのミサイルに命が吹き込まれたかの様に飛ぶ。

プログラムでは決して出来ない軌道を描き、ミサイルが敵に向かう。

量産型が前に出て、ミサイルを撃つ。流石に全部の迎撃は出来ないようで、何発かが敵に当たる。

だが……灰色のISには届なかつた……。

量産型もダメージはあるが健在だ。

灰色のISからは今、まさにビーム砲が発射されようとしていた。

「諦めるかよ……！」

俺は叫んでいた。

「まだ、始まったばかりなんだよ！俺たちはまだまだこれからの日々

を『創って』いくんだよ！打鉄式を完成させたように！」

「うん！まだまだ『造り』たりない！楽しい思い出を皆と一緒に！」

簪さんと叫んでいた。

「だから！こんなところで負けてられない！！」

その瞬間、強い光が周りを包む、その光に触れた灰色のIS達は動きが止まっていた。

ただ止まっているだけではない。ビーム砲の周りに溜まっているエネルギーも止まっている。まるであそこだけ一時停止した映像みたい……。

「止まった……？」

「なぜ……？」

疑問を浮かべる俺達の前に、猪が居た。

そうか……これがお前の能力か……。

「ガトリングボア……お前も一緒に戦ってくれるのか？」

コクリと頷くガトリングボア

右手を伸ばし力を込め、宣言する。

「ファイルセーブ!!ガトリングボア!!」

ガトリングボアが翠の光球となり、電童の胸部へ格納される。

ユニコーンの時と同じだ。

「ボアドライブ!!インストール!!」

右腕に装着されていたユニコーンは格納されており、今度は胸部に新たな武装が装着されていた。

「行くぞ！簪！これで決める!!」

四肢のドライブユニットを回転させながら叫ぶ。

「わかった星夜！残りのミサイルを全部撃つ！」

2人で構える。ターゲットは動かない。

「ガトリングボア！」

「ファイナル！アタック!!」

その瞬間胸部のガトリング砲から翠のエネルギーが放たれる。

それと同時にその周りを大量のミサイルが追跡する。

そして巨大な爆発を起こし、敵は消滅した。

「織斑先生……こちらは……終わ……りました。」

『ああ、よくやった。もう増援も無いようだ。ハッキングも終わった。』

電童が解除される。ファイナルアタックを使ったからエネルギーが尽きたのだ。

「簪さん……ありがとう……大丈夫……？」

「うん……今度……は……守れた……」

簪さんも疲れては居るが嬉しそうだった。

流星に疲れた……その場で倒れ込む。

「せつ星夜……くん……。大丈夫……？」

倒れたからか聞いてくる簪さん。

「ちよつと疲れただけだよ。大丈夫。」

短く答える。

近くのピットから教師達が担架をもつてこつちに来ていた。

なんか前にもこんな事があったな。ああセシリアさんと戦った時だ。

そのあと、医務室まで2人ともつれていかれ検査をした。

特に問題は無かったが疲れてたので医務室のベットで寝てしまっていた。

第15話 《楽しい日常》

クラス対抗戦の日の夜

IS学園のとある部屋。

地下50m程の場所にある。

そこには今日、撃破された所属不明のIS6機分の残骸が集められていた。

教師の中でも権限を持たないと入ることが出来ないこの部屋で2人の人物が話していた。

織斑千冬と山田真耶の2人だ。

「織斑先生…この機体達…全て無人機でした。」

真耶はディスプレイを操作しながら答えた。

「やはりか…コアの方は？」

「1つだけ回収されました。灰色のISからです。」

写し出されるは今日の戦闘映像だ。

「どのようにして稼働していたのかは不明です。最後の天野くん達の攻撃で壊れてしまったようで…。」

「量産型の1機は天野に突かれただけのはずだ…。なぜその機体のコアが無いのだ？」

千冬は疑問を口にする。

「確かに…不思議ですね…。」

映像は量産型の1機に電童がドリルを突き立てる瞬間が写し出される。

「…まさかコアがそもそも存在しないのか？」

千冬が可能性を指摘する。

「まさか…コアが存在しないISなんて…。」

確かに戦闘力こそは低かったがそれでも第二世代のISと同等の機動性等は確認されている。

「データウェアポン達のような存在なら？」

「確かに…あれらもコアは存在しませんね。」

GEARが作り上げたとされている。最新の兵器達。

あれも今回の無人機に近い特性を持っていた。

「では今回の件はGEARが？」

「いや、それはないだろう。それだと灰色のISの説明がつかない筈だ。」

「そうですね、コアは未登録の物でしたから…。」

そうこれは468個目のコアなのだ。

開発者である篠ノ之束しか製造できないとされているISのコア。

最低でも今回の襲撃者は篠ノ之束本人か関係者の可能性が高い。

「まあいくらここで議論しても状況は変わらない。」

「そうですね。」

「しかし、電童…あれは恐ろしいな。」

映像はガトリングボアが召喚され、敵が停止する所だ。

「はい、豊富なバスのロット、様々な能力のデータウエポン、そして『通常のIS3機分』のエネルギー反応…。」

「全てのデータウエポンの力が解放されたとき、世界はどう思うのかな…。」

恐らく黙ってはいないだろう…。その考えを千冬は口に出せなかった。

「GEARはなぜあんな物を造ったのか…。」

謎は深まっていく…。

夜、俺―天野星夜―は今日の出来事をGEARに報告していた。

『なるほど、それで…』

「はい、ボアが覚醒しました。」

渋谷社長は居なかつたので代わりに井上さんに報告していた。

『そうなるそろそろ…あれも考えないとな…』

「…あれ？」

また何か作ってるのかこの人は…。

『ああ…こちらの話だよ。…詳しいデータは明日か明後日にGEARに来てくれた時にね。』

「わかりました。…では。」
通信を切る。

まあ今日は金曜日だから報告にはいきやすいな。
今度は一夏とかも誘ってみるか。

そう思い、ベットで寝そべる。

こんこん、とドアを叩く音がする。

「はい、どなたですか?」

一夏、セシリアさん、簪さん辺りかな?

「あたしよ、鈴よ。今平気?」

鈴さんだった。どうしたんだろこんな時間に。

そう思いながらドアを開ける。

「鈴さん、どうしたんですか?」

「今日は…ありがとう。助けてくれて。」

わざわざお礼をいいに来てくれたようだ。

そのまま立ち話もあれなので部屋に入ってもらおう。

座布団に座り机を挟む形で向き合う。お茶は当然出している。

「いや、俺達もあの時の鈴さんには助けられたよ。」

実際鈴さんが突撃してなかったらどうなったかわからないし。

「でも、その後あたしがやられたせいで…。」

「仲間を気遣うのは人として当然の事です。それに鈴さんは一夏と

試合もしてましたから俺達よりも疲弊してましたし。」

ましてや相手が自爆するなんてね。

「お礼を言いに来た筈なのに励まされちゃったわ。」

苦笑する鈴さん。

「あつ一夏との件はどうなったんですか?」

わりと気になるので聞いてみた。

「あつああ…あれ?一応…一夏が謝って終わったわ。」

なんか他にもありそうだけど触れないでおこう。

「そうですか…まあ一夏攻略はなかなか難しそうですね。」

鈴さんの顔が赤くなる。

「うつ…まあね。昔から変わらないのよね…あいつは。」

そのまま暫く鈴さんから一夏との思い出話を聞いていた。

「もうこんな時間ね、あたしは自分の部屋に帰るわ。」

「そうですね。おやすみなさい。」

「おやすみ、星夜。」

手を降りながら部屋を出る鈴さん。

さて、寝るか。

翌日の朝。

GEARに向かう為、電車に乗っていた。

今回のメンバーはセシリアさん、簪さん、本音さんの前回のメンバーと一夏、箒さん、鈴さんだ。

「GEARの本社か：何かあるんだろうな。」

「ふん。ただの会社だろう。子供じゃないのだからはしゃぐな。」

「世界でも有数の企業の本社よ。ただの会社なわけ無いでしょ。」

一夏達がそれぞれ口にする。

「まあ星見町にあるから直ぐに着くよ。」

「今回は賑やかになりますね。」

「今日はボアの検査だよね…?」

「なにが好物だったのかな…?」

まあ前回のようない事件はあるまい。…うん。

星見野駅にて下車。駅のロータリーに行くと同前回は違い、ここまで迎えが来ていた。

「アルテアさんとベガさんに迎えてもらおうとバチが当たりそうな気がしますね。」

「今回は人数が多いからね。車くらい用意するわよ。」

「前はある事があったからな。念のためだ。」

アルテアさんとベガさんがそれぞれ車で迎えに来ていた。

俺はアルテアさんの車の助手席に乗る。安全圏だ。

そのまま後ろにセシリアさん、簪さん、本音さんが乗る。

ベガさんの車には一夏を挟むようにして箒さんと鈴さんが乗る。

「星夜くん、今、迷わずにこっちに乗ったな？」

アルテアさんが聞いてくる。

「だってベガさんスピード狂みたいな運転するじゃないですか。」

「ああ、完全にバイクと同じ感覚で運転する癖があるな。」

ベガさんは趣味でバイクを乗ってるがそれが車の運転に反映されるのは流石に…。何度逝きかけたことか。

「そんなにひどいんですの？」

「結構大人しそうな感じだったけど…。」

「見かけによらないんだね。」

車が発進する。後ろに止まっていたベガさんの車が凄い加速をしながら飛ぶように追い越して行つた。

「なんかパワーアップしました？」

「ドクター井上とやろうとしていた車の改造なら止めた筈だが…。」

ちなみにこちらは安全運転、質実剛健のアルテアさんです。

本社の従業員用地下駐車場に停まる。

そこには魂の抜けかけた3人の姿があつた。

「3人とも大丈夫か？」

「せつ星夜…。」

「なによ、あの運転…。」

「一度も減速せずにここまで来たぞ…。」

ちなみにベガさんは苦笑い。

「ベガ：客人を乗せてるときはしっかりと運転をだな…。」

アルテアさんの説教が始まる。

「じゃあ、井上さんの所に行つてきます。」

客人用IDガードも受取済みだ。

説教モードのアルテアさんは置いておこう。

「おつ星夜くん、待っていたよ。さあ、ボアのデータを！」

研究室に入るや井上さんが近寄ってきた。前もってまとめておいたデータチップをわたす。

これは簪さんからのデータも入っている。

「では、さっそく見てみるよ。何か判明したらすぐに言うからね。」

すぐさま様々な機器が様々な画面を表示する。
専門家に任せておこう。

そのまま他のところを見て回った。

前回と場所が被るが仕方ない。

「やっぱ世界的企業はすごいなあ…」

「IS関連だけじゃないからね、ホント色々やってる会社よね。」

「近くに遊園地があると聞いたが本当なのか？」

3人が回った感想を伝えてくる。

「あつ星見野アミューズメントパークのことかな？あるよ。最新技術を惜し気もなく突っ込んだアトラクションの数々が。」

GEARでは様々な部門があるがその部門間の情報のやり取りも盛んだ。これが企業が大きくなつた秘密なのか？

「そろそろいい時間だし食堂でも行きますか。」

食堂に向け、移動する。

「この食堂っていくらだ？」

一夏が聞いてきた。これが主夫か…。

「あー俺が奢るから好きな食べなよ。」

ここは誘った奴が出すべきだな。

「えっでも星夜に悪くないか？」

「これでもGEAR所属だからな、給料出てるんだよ。」

それも結構な額で。

「星夜が奢るって言ってんだから素直に礼を言っておけばいいのよ！」

「折角だから御馳走になるとしよう。」

「そうか…それなら一番高いやつでも食うか!？」

「おう！男に二言はない！」

社員食堂だからそんなに高くないし。

「あまのんく今度、学食のあれおごつて〜！」

「あの、1食二千円のパフェの事？それは自分で買おうね本音さん。」

最高級パフェか…。あれ一体何でできてるのかな。

「まあこの食堂もおいしいですからね。」

「本音、変なこと言わないの。」

食堂に着いたのでそれぞれが好きな物を選び、テーブルへ。

「さて、このあとはどうしようかな。」

食べながらもこれからの事を考えてた。

見せられる所は大体見せたし。

「この前と同じように下の階でお買い物でしょうか？」

セシリアさんが答えた。

「それだと前回とほぼ同じだしなあ…。」

前回来た3人に申し訳ないような。

「だったらパークにでも行ってきたら？」

いきなりベガさんが横からやって来た。

「あ…ベガさん、解放されてたんですね。」

「さつきはごめんなさいね。ハンドル握ると…つい…ね？」

ついですまされる範囲かな？

「ああ、気にしてないですよ。」

一夏が答える。

「パークってさつき言ってたアミューズメントパークの事よね？そんなに近いの？」

鈴さんが聞いてきた。

「ええ、目と鼻の先よ。」

「上の階なら窓から見えるよ。」

ベガさんと俺が答える。

「それに、星夜くんが居れば顔パスよ。」

その分俺の給料減るのは顔パスとは言わないよ、ベガさん。

まあ格安だけど。

「まあ、楽しむには最適ですね。」

「このあとも特に予定ないしいんじやないか？」

一夏が賛同する。

「そうね。折角タダなら行きましようよ。」

鈴さんも乗る。

「まあ、一夏が行くのなら私も行こう。」

箒さんも来るつと。

「最近はずか変わったアトラクションが出来たってニュースでやってたね…。」

箒さんも興味ありと。

「おいしいお菓子をゲットするのだ〜!」

本音さんは菓子狙いね。

「星夜さんとテーマパーク…行きます!」

セシリアさんの頭のなかの映像はきつと2人つきりなんだろうな。

「じゃあ行つてきますよ。」

満場一致で行くことに決まった。

「で、ここが星見野アミューズメントパークだ!」

まあそこそこの大きさかな。

ここで遊べば1日は余裕で潰せる。

「ホントに目と鼻の先ね。」

「皆にパンフレット貰つてきたよ〜。」

「星夜くんもいる…?」

本音さんと箒さん、早い。

「うん、貰つておくよ。ここ毎月何処かしら弄つてるから。」

まさか一晩でジェットコースターのコースが代わるとは誰も思うまい。

ISの技術を流用したアトラクションなんかもあるから大人も楽しめるのが売りだ。

「へ〜、おい、星夜!あそこ見ろよ!電童が2機いるぞ!」

一夏が驚きながら指を指す。

「えっ?マジ!」

鈴さんが言いながら振り向く。

他の皆も釣られてる。

「ん、あああれは着ぐるみだよ。GEARとしても今、電童は立派な看板だからね。」

そう、何回かCMも撮つたし。

「そうだったのか、焦つたぜ。」

「でも、構えとか凄いうまいわね。よほど練習したのかしら？」
鈴さんは動きを見て言う。

今ステージの近くでデモンストレーションがわりに2機の電童が
組手をしていた。

あの動きは…。

「もしかしたら…あいつらか？」

「あいつら？心当たりがありませんの？」

セシリアさんが聞いてくる。

「ちよつと挨拶してくるよ。」

そう言ってからみんなから離れて組手中の電童に近づく。

「なに？2人揃ってGEARでバイトでもしてるの？」

俺の声を聞き、動きを止めてこちらを見る。

「おっ星夜じゃねえか!?元気だったかよ！」

「あっ星夜！ひさしぶりだね！」

やっぱりこの声は…。

「おう、ひさしぶり、銀河に北斗。」

小学生の頃からの友人2人だ。2人はヘルメットをとる。

「いやあく、お前がうちの道場通っててよかったよ。お陰でこのアル
バイトが来たんだぜ？」

「似た背格好で同じ流派だからショーのエキストラにつてさ。」

「ああ銀河はそうだな、北斗はあの特技だしな。」

銀河の家は出雲道場で俺が通ってた道場。つまり同門って事にな
る。

北斗は昔から変わった特技で一度見たことがあれば大体の動きが
できてしまう観察眼の持ち主だ。

「これ、結構条件は良くてさ。なかなか、いい小遣い稼ぎになるんだ。」
「まあ、2人しかいない男性操縦者の機体を使ったショーだから、人気
なんだよ。」

なるほどね。電童は見た目もヒーローショーむき出しな。

「そっか邪魔して悪かったな、またそのうちな。」

手を振って別れる。

「おう！またな！たまには道場にも顔出せよ！」

「何時でもうちの喫茶店に来なよ。母さんが心配しててね。」

「ああ、エリスにもよろしく。」

一夏達の所に戻る。

「なんだ？知り合いか？」

「ああ、小学生の頃からの友人だよ。片方は同門ね。」

「あつだから動きが同じ感じなのね。」

皆も納得のようだ。

「パンフレットにも：書いてあるね。創作劇『GEAR戦士電童』だつて。」

「かんちゃん、後で見てみよ？」

簪さんこうゆうの好きだもんね。

「じゃあ、時間決めて、それぞれで回ろうか？」

このまま固まって行動する理由もないし。

「じゃあ、一夏！こっちに行きましょう！」

「待て！一夏は私と来るのだ！」

さっそく一夏の争奪戦がスタートだ。

「じゃあ、3人で回ろうぜ！」

一夏…この唐変木め…。

「まあ…一夏がそういうなら良いだろう。」

「そうね、そうしましょうか。」

結局一夏と俺のグループに別れる形に落ち着いた。

「さて、どこから行こうか？」

「私はこう言うところはあまり経験がありませんので…。」

「星夜くんの友達が出てくるなら劇は見えてあげたら？」

「おつ、あつちから甘いにおいく。」

匂いにつられる本音さんを追いかけていきなりカフェへ。

「本音さん、さっきご飯食べたよね？」

「甘い物は別腹だよ。」

「本当によく入りますわね。」

「本音は昔からこうだから…。」

「コーヒーや紅茶を飲む3人に対し、パフエを頬張る本音さん。

ホントに、好きなんだな。」

「劇は何時から始まるのでしょうか？」

「えっと…『GEAR戦士電童』午後の部は15時30分からだね。」

「今は大体13時30分だから…1時間と少しは回れるな。」

「あまのんのおすすめは？」

「まあ普通は行ったことありそうな奴に振るよね。」

「IS技術を使ったアトラクションかな、ジェットコースター系の『ドラグナー』、バンジー系の『ウェイブライダー』この二つは絶叫系が好きななら外せないね。」

「…それ以外は？」

「粒子格納技術を使ったモグラ叩きみたいな木人連続叩き、通称『木連叩き』、様々な仕掛けでびっくりするどつきりハウスの『冥王屋敷』とか？」

「なかなか、インパクトがある名前ですわね。」

「近くのアトラクションから行ってみよう。」

そんな感じでアトラクションを楽しみながら劇まで時間を潰した。

『GEAR戦士電童、開演10分前です。』

「なかなかいい席があったな。」

「流石に小さな子が多いですな。」

「男の子には特に人気みたいだね。」

「まああの見た目だからね。」

客席は結構埋まってるな。

パンフレットの内容を見るに勧善懲悪物をやるようだし、男の子向けだろうな。

なにに、この作品だと電童は巨大なロボットなのか。

それで悪の侵略者から町を守ると、まあありふれた感じではあるな。

で、北斗と銀河はそれのパイロット役なのか…。

『うおおお!!』

『地斬!!乱舞塵!!』

ドガアアン!!

『俺達、マグネイト・テンが世界を守る!』

『この、電童で!みんなと共に!』

パチパチ……

うくん…なかなか面白いな、最近はどうゆうのも見てないなあ。

明日は久しぶりにニチアサでも見るか。

そのあとも適当に見て回っていたが井上さんから解析できたと通信があつたので本社に戻ることにした。

「では、ガトリングボアに関して判明したことを報告しますね。」

「申し訳ないですが今回は反応した感情と特殊能力についてだけです
が。」

井上さんが申し訳ないような顔で言う。

「まあそれだけわかれば十分ですよ。」

「データウエポンの研究はこれからも続けるのだから、そんなに気負わなくても。」

「そうですね。…では……。」

スクリーンに映像が写し出される。

またあの恥ずかしい奴か…

『まだ、始まったばかりなんだよ!俺たちはまたまだこれからの日々を創っていくんだよ!打鉄式式を完成させたように!』

『うん!まだまだ造りたりない!楽しい思い出を皆と一緒に!』

『だから!こんなところで負けてられない!!』

やっぱり恥ずかしいな…。

井上さんが喋り出す。

「今回は星夜くんと更識さんの造り出そうとする心……『創造』に反応したと考えられます。」

スクリーンにデカデカと『創造』の2文字が。

「私たちの…造り出そうとする心…。」

『創造』か…打鉄式を一緒に作ったのとかもあるのかな…?」

「ええ、その可能性はあると言えますね。」

井上さんが答える。

「特に今回はお2人だけでなく、チームで更識さんの機体を作り、これにより、複数人の人と軽いものではありませんが星夜くんは共鳴状態にあったとおもわれます。」

「そして、あの時にお2人の感情によってその小さなエネルギー達を爆発させた感じですね。」

なるほどね。全員で作った時、すでに少し感情エネルギーが貯まっていたんだ。

「じゃあ、みんなで作った『奇跡』なんだろう?」

「はい、そう言うことになりますね。」

本音さんに井上さんが答える。

「それで?特殊能力とは?映像を見る限り、相手だけが停止しているようだが…。」

アルテアさんが聞く。

「はい、ガトリングボアの特特殊能力はクロックマネージャー…つまり、時間操作です。」

へー、だから敵が停まったのか…って、

「それってめちゃくちゃ反則能力なんじゃ…。」

「その代わり、エネルギーを非常に使いますよ。」

井上さんが特徴を言う。

「まず、時間操作と言いますが時間も戻すことはできません。対象の空間内時間を遅延させる能力です。」

スクリーンの映像が切り替わる。

「また、停止状態の空間に対してはこちらから干渉することは出来ません。時間が停止しているため、変化も起きないのです。」

「でも、あの時は…停まった敵を倒しました…。」

簪さんが聞く。その通りだ。

「あれはガトリングボアが当たる直前で能力を解除した為ですね。」
やっぱりチート能力だな。試合では使えないかな。

「今の電童では対象空間の広さでも違いますが。30秒程使うとエネルギー不足の可能性がありますが気を付けて使うように。」

なるほどね。消費は並みじゃないのか。

「あとはガトリングボアから出た光、これが対象の決定を行うようです。これを当てないと停まりません。」

あれって結構ゆっくり広がったな。高速戦では使えないかも。

「今回はこのくらいですね。また、何かしら判明したらそのときは報告しますので。」

こうして報告は終わった。

「なあ、俺達も聞いて良かったのか？」

「そっちの機密では無いのか？」

「弱点までさらしてたけどいいの？」

一夏達が聞いてくる。

「駄目だったら最初に追い出してやるから。平気なんですよ。」

「まあそうだろうけどさ…。」

「最低でも俺はそう言う事をしないと信じてるしね。」

「そう言われると何も言えないわね…。」

そんな話をしながら俺達は帰りの支度をしていた。

第16話 《新しい風》

5月のある日、何時ものように過ごして居たが最近は気になることがある。

俺―天野星夜―を見ている奴がいる。

始めて感じたのは実は結構前からなのだが

あの頃はまだ物珍しさ故に奇異の目を向けられているのかな？

位にしか思ってたが確かになに俺を監視してる感じだ。

特にクラス対抗戦以降はその傾向にあるだろう。

電童やデータウエポンを警戒して何処かの国か企業が監視をしてる可能性はあるな。

「あまのんく難し〜い〜顔してどうしたの〜？」

考えながら廊下を歩いていると本音さんが声を掛けてきた。

「ん？ああ、考えなきやいけないことは沢山あるから。」

ここでまた、変な事を言っつて巻き込むわけにもいかないな。

「たとえば？ストーリーカーとか？」

本音さん、鋭い。

「流石は暗部お抱えのお手伝い。お見通しだったかな？」

両手を上げ、降参の意思を表す。

「いや〜、それほどでもあるんだよく〜。」

袖の余った腕を上げパタパタと振る本音さん、なんか小動物みたいだな。

「あまり大事にはしたくないからさ、どう対処するかをね…。」

「ならいい方法があるよく〜。」

「本音さん、本当に？」

何時もの緊張感のなさから忘れがちだがやはり危機対処能力は高いな。

そんなことを考えてると本音さんは携帯を取りだしメールをする。

「びっ送信！〜これで大丈夫だよ〜。」

そう言われ、数分後見ている気配は消えた。

「ホントに消えた…どうしたの？本音さん。」

「いったい何処とメールをしたんだ。」

「お姉ちゃんだよ〜!」

「いい笑顔を見せる本音さん、姉かよ。」

「それってどう言うことなの?」

「なんか謎が深まったよ。」

「あまのんを見てるのがたっちちゃんさんだからお姉ちゃんに回収して貰ったんだよ。」

「つまりはストーカー?に心当たりがあったと。」

「それは知り合いだって事?」

「そうだよ。たっちちゃんさんは〜かんちゃんのおねえさんなのだあ〜。」

「見張れた理由ってもしかして:。」

「かんちゃんと仲良いからじゃないかな〜。」

「マジかよ:。簪さんにも相談するかな。」

「あまのん〜このあとは暇かな?」

「携帯を見ながら本音さん聞いてくる。」

「まあ、部活とかは入ってないし、今日は特訓とかもないしね。」

「じゃあさ、ついてきて〜。」

「そう言いながら歩き出す本音さん。」

「えつと本音さん、どこに行くの?」

「着いてからのお楽しみだよ〜。」

「そんな本音さんの後に続き、着いたのは生徒会室と書かれた扉。」

「生徒会に今回の件を相談するの?」

「ちよつと違うよ〜。」

「ガチャリと音をたてながら扉を開ける本音さん。」

「つれてきたよ〜。」

「ありがとう本音、そこにかけて貰いなさい。」

「言われるままに席につく。」

「すぐさまお茶と茶菓子が出てきた。」

「まずは自己紹介を、私は布仏虚。妹の本音がお世話になってます。」

深々と頭を下げる先輩。礼儀正しい人のようだ。

「いえいえ、持ちつ持たれつってやつですよ。」

顔を上げ布仏先輩は横にいる机で書類と格闘中の人を見る。

「あと、ここにいるお嬢様がご迷惑をお掛けしたようで。」

「あつもしかしてこの人が…。」

「そうよ！私は更識楯無。この生徒会の長よ！」

更識先輩は席をたち口元に扇子を近づけ、広げる。

その扇子には《生徒会長》の文字が。

「はやく書類を片付けてください。」

「はい。」

力関係はわかった。

「なんで更識先輩は自分を見張っていたんですか？」

とりあえず本題に入ろう。

「申し訳ございません。妹の簪お嬢様の事が気になって最近は何の良
い天野君をつけ回していたようです。」

それも生徒会の仕事を放り投げて。

「はあ、何でも、昔に簪さんに『無能なまままでいろ』って言ったそうで
すね?。」

更識先輩の動きが止まる。

「そつそれは…。」

更識先輩は明らかに挙動がおかしくなった。

「なのにその妹の近くに男が居るからってストーキングするのは大切
だから?。」

「はうう!?!」

見るからに小さくなったな更識先輩。

「大切なら大切だつてしっかり伝えないとわかりませんよ。」

「だ…だつてあれ以来簪ちゃんが…。」

「まあ一方的に無能の烙印押されたら普通は嫌いますね。」

「やっぱり…?。」

汗が凄いぞ更識先輩。

「お姉さんと被るから更識って呼ぶなって言われましたし。」

「ぐはああ！」

「なんか泣きそうだよこの人…。」

「えっと布仏先輩…この人は…。」

「はい、妹に嫌われてどう改善しようか考えてます。」

「とりあえず俺に付きまどっていただけると簪さんに報告はしますかね。」

腕を組みながら言ってみる。

「そんなことされたら私をもっと嫌われちゃう!!」

「じゃあ生徒会の仕事をしてください。」

「布仏先輩の言う通りです、まずは仕事をしてください。」

「でも…簪ちゃんが…。」

涙目だよこの人は…。

「まあ本人に改善する気があれば問題は無いと思いますけどね?」

「そうですね。とりあえず仕事を片付けた上でご自身の用を済ませてください。」

「あまのん、このケーキはむちやくちや美味しいんだよ。」

「やめなさい本音、布仏家の品格が疑われるでしょう?」

「ああ、本音さんがこういう人だと言って言うのはわかってますから。」

「むしろ不安になりますね。」

書類を片付ける更識先輩を横目に3人で茶会を楽しんだ。

「じゃあ、失礼しますね。布仏先輩。」

「ええ、これからはお嬢様が勝手に行かないよう。しっかりと見張っておきますので。」

「じゃあね。あまのん。」

…ここまで静かに仕事をしてきた更識先輩がこちらを見る。

「あの、天野君!お願いがあるの!」

「なんですか?」

「なんか真面目な顔をしてるので聞いておこう。」

「妹を!御願います!!」

は?!

「……えーと…。」

何て返すか困るな。

「ああ!?ごめんなさい、ちよつと焦ってたわ。」

「これからも友人でいて上げて、あの子…ネガティブなところがあるから…。」

本気で妹が心配なんだな。

「言われなくても、大切な仲間ですよ。」

更識先輩がほつとした顔をする。

「まずは、姉と良好な関係に修復することからですかね?」

「えっ…?」

更識先輩はキョトンとする。

「今までも簪さんから影を感じることはありませんでした。それはきつと姉とどうすればいいか分からないからだと思います。」

「だから、今度はしつかりと、自分の言葉をぶつけた方が良いでしょう。」

「えっ…ええ…わかったわ。」

生徒会室を後にする…。

今後の課題が1個増えたな……。

後日、放課後の特訓の後に簪さんに聞いてみた。

「なあ、簪さんのお姉さんってどんな人?」

「急にどうしたの…?」

警戒する簪さん。

「この前さ、本音さんのお姉さんに会ってね。本音さんとは全然違つてさ、だから簪さんのお姉さんもどんな人かなって。」

簪さんから見た更識先輩がどうなのかを知りたい。

「姉さんは…憧れてた…優秀で強くて…魅力的で…私が決して届かない人…。」

完全無欠…それが簪さんの中にある更識先輩のイメージか。

「けど…ちよつと前から…あまり顔も合わせてない…。」

「そっか…。簪さんはどうしたいの?」

「えっ?」

「お姉さんとさ…そのまままで…いいの?」

「う…。」

「お節介かも知れないけど簪さんを見てるとき、怖がつてる感じがするんだよね。」

「私が…姉さんを…？…確かにそうかも。」

「なんで、怖いのか？」

簪さんは目を合わせないが答えてくれた。

「きつと…無くなつちやうから…。」

「無くなる？…何が？」

「私の…居場所…。」

ああ…なるほどね

「大丈夫、俺達が居るよ。」

「えっ…？」

「そのお姉さんがどんなに優秀な人でも簪さんは替えの効かない大切な仲間だよ。」

「うん…ありがとう…。」

「だから、今すぐとは言わないけど逃げずに向き合った方が簪さんの為になると思うよ。」

「うん…そのうち…。その時は…頼っていい？」

「ああ、もちろん。」

とりあえず、一歩前進かな。

「やっぱりハヅキ社製がいいなあ。」

「ハヅキってデザインだけじゃない？」

「そのデザインがいいの！」

「性能的にミューレイのがいいなあ、スムーズモデル。」

「ものは良いけどさあ、高いじゃん。」

6月のある日、朝の教室ではクラスメイト達がカタログを手に話し合っていた。

ISスーツのカタログだ。

その名の通り、ISを使用する際に着用するスーツだ。

学校指定の物もあるがISは個人に合わせ、進化する。

そのため、早いうちに自分なりのスタイルを確立する一環として、

各自のスーツを用意させているそうだ。

「織斑君と天野君のISスーツってどこのやつ？見たことの無い型だけど。」

「あー、特注品なんだってさ、どっかのラボで作ったんだよ。イングリッド社のストレートアームモデルって聞いたぞ。」

周りからの質問に答える一夏、次は俺か…。

「当然だけど、俺のはGEARの特注品、バイタルデータを正確に保存するために全身を包む型を一から作ったそうだよ。」

「へーそうなんだ。ありがとう。」

教室のドアが開く。

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知して操縦者の動きを各部位に伝達、それをうけてISは必要な動きを行います。」

解説をしながら教室に入るのは山田先生だ。

「また、スーツは耐久性にも優れており、小経口拳銃の銃弾なら完全に受け止めます。あ、衝撃は消せませんのであしからず。」

流星は先生、暗記で出てくる。

「山ちゃん詳しい！」

「先生ですから。って山ちゃん…？」

「山ピー見直した。」

「今日がスーツの申し込み開始日ですからね。予習してあります。えへん。って山ピー？」

入学してから山田先生には愛称がつけられている。確か8個位か。慕われては居るが皆して軽く見すぎではないか？

「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちよつと…。」

「まーやんは真面目だなあ。」

「ま、まーやんって…。」

「あれ、マヤマヤの方がよかった？」

「それもちよつと…。」

「もー、じゃあ前のヤママヤに戻す？」

「あ、あれは止めてください！」

はつきりと拒絶した。他のもはつきりといえはいいのに。

「と、とにかく、ちゃんと呼んでください。わかりましたね？」
はいとクラスメイトは言ってるがここだけの返事だろう。

「諸君、おはよう。」

「おはようございますー！」

織斑先生が来ると一瞬で空気が変わる。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機だがISを使用する。気を引き締めて行うように。各自のスーツが届くまでは学校指定の物を使ってもらうぞ。それを忘れたら水着で受けてもらおう。それも無いようなら下着でもかまわんだろう。」

それは勘弁して欲しいな。このクラスは俺と一夏が居るんだから。ちなみに指定の水着はスク水、体操服はブルマだ。

趣味的すぎないか？

「では、山田先生、ホームルームを。」

「はっ、はいー！」

織斑先生に促され、山田先生がホームルームを始める。

「今日は何と転校生を紹介しますよー！しかも2人です！」

ええええええええ！っとクラスから声上がる。

いきなり2人も？なぜ分散させない？

教室のドアが開き2人の生徒が入ってくる。

「失礼します。」

「……………」

片方は礼儀よく挨拶をしながらはいる。

もう片方は不満があるのか無愛想な顔だ。

「えっ……」

クラスのざわめきが止まる。

なぜなら礼儀よく入ってきた生徒の服装は……

男物……つまり、3人目の男子生徒だ。

第17話 《3人目の男性操縦者!?!》

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不馴れな事も多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします。」

クラスの前で転校生の1人が挨拶をする。

俺―天野星夜―は、否クラス全体があっけにとられていた。

「おつ、男……?」

誰かが呟く。

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞き、本国より転入を―」

礼儀正しそうな立ち振舞い、整った顔立ち。髪は金髪で背中まで伸び、後ろで束ねている。俺や一夏と比べたら細い手足。全体の印象は貴公子と言ったところか。

「きや……」

「はい?」

「きやああああああああ!!」

揺れた、これは学園全体が揺れたな。

「男子! 3人目の男子!」

「しかもうちのクラス!」

「美形! 守ってくれる系の2人と違った守ってあげたくなる系!」

「地球に生まれて良かった!!」

他のクラスの生徒が来ないのは教師の方々の努力だろう。

「あー、騒ぐな。静かにしろ!」

織斑先生が言う。この反応は鬱陶しいと感じてるのだろう。

「み、皆さん、お静かに、まだもう1人の自己紹介が終わってませんよ
〜?」

もう1人の転校生を見る。

シャルル・デュノアとは真逆な銀色の髪は腰まで伸びている。小柄な体だがその風格は軍属なのか? 腰にもナイフがある。

「……………」

こちらを見下すような視線で見っていたが織斑先生に視線を変えた。

「…挨拶をしろ、ラウラ。」

「はい、教官。」

敬礼をする転校生、織斑先生は面倒くさそうな顔をしながら。

「もう私は教官ではない、ここでは教師と生徒だ。織斑先生と呼べ。」
「了解。」

たしか、織斑先生はドイツで教官をしていたことがあるそうだ。その時の生徒か…。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

沈黙が流れる。

「あつあの…以上ですか？」

「以上だ。」

山田先生が笑顔で聞かがラウラ・ボーデヴィツヒは無表情で返した。

泣きそうな山田先生を無視してこちらに歩いてくるな。

「貴様が…織斑一夏か？」

殺気が籠った瞳で睨んでくる。

「織斑一夏はあっち俺は天野星夜ですよ。」

「そうか。」

つかつかと音を立てて一夏の前に移動する。

ポケットのままの一夏、殺気に気づいてないな。

これは何かするな。

「貴様が！」

右腕を上げ、降り下ろそうとする。

「させないよ。」

振り上げた腕を掴む。

「貴様！何をする?!」

「それはこちらの台詞ですよ。」

こちらを見て叫ぶボーデヴィツヒさん。

一夏はまだ何がされそうだったか理解してない。

「私はこいつを認めない！あの人の弟であると、認めるか！」

こちらの手を振りほだき、空いている席に行く。

座ると目を閉じて周りとの接点を持たないつもりだ。

「あー…ゴホン！ではHRを終わる。各自はすぐに着替えて第二グラウンドに集合しろ！今日は2組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

手を叩き、行動を促す織斑先生。

「天野、織斑。面倒を見てやれ、同じ男子だろう。」

「わかりました。」

まあ、当然そうなるな。

「君が織斑くんと天野くん？初めまして、——」

挨拶をしようとするがそんな余裕はないよ。

「悪いが移動が先だ。」

「女子が着替えを始めるから。」

一夏がデユノアさんの手をとり、動き出す。

「男子は空いているアリーナ更衣室を使う。実習ごとに結構の移動があるから早めになれてくれ。」

「今日は第二アリーナ更衣室だ。」

「えつと…うん。」

なんか反応が変だな。

廊下に向かうと既に情報をつかんでいる生徒が待ち構えていた。

「ああつ！転校生発見！」

「織斑くんと手を繋いでる！天野くんもいるわよ！」

「織斑くんと転校生くんの薄い本…ぐふふふ。」

なんか変なやつがいたぞお！

このままだと授業に遅刻は必至、そうならば特別カリキュラム待ったなしだ。

「いた！こっちよ！」

「者共！出会えい！出会えい！」

どこから法螺貝が聞こえる。ここは武家屋敷か？

「黒髪もいいけど、金髪って良いわね！」

「瞳はアメジスト！」

「日本に生まれて良かった！ありがとう！お母さん！今年の母の日は川原の花以外の物をあげるね！」

おい、せめてカーネーションの一輪くらい買えよ！

「な、なに？なんで騒いでるの？」

状況を飲み込めないデュノアさん、困惑してる

「そりや男が俺達だけだろう！」

「へ…？」

自覚無しかよ！

「デュノアさん、男性操縦者はここにいる俺達3人だけだろう？だから集まってるの！」

「あつーうん！そうだね！」

「ここは女子校みたいな物だろ？だから男性が珍獣みたいなものだ！」

「そうか、そうだよね！」

やっと自覚したよ。

「俺は一夏、織斑一夏だ、一夏って呼んでくれ！」

「俺は天野星夜、好き呼んでよ。」

「わかったよ。一夏、星夜。僕の事もシャルルでいいよ。」

「わかったシャルル！」

「よろしくな、シャルル。」

さて、問題はこの状況だな。包囲網が完成しつつある。

「一夏！シャルル！外に飛べ！」

俺が叫ぶ！

「わかった！行くぞシャルル！」

「ええ!？」

いきなりの事だからか対応出来ないシャルル。

そんな余裕はないので一夏が対応する。

一夏がシャルルを抱き上げる。周りから黄色い叫びが聞こえる。

「行くぞ！シャルル！」

「ふえええ!？」

シャルルが悲鳴をあげる。

外に飛び出す一夏とシャルル、そして俺。

ここは2階だが問題ない。

「ユニコーン！ボア！」

仲間を呼ぶ。シャルルを抱えた一夏はユニコーンに跨がり、俺はボアの上に乗る。

そのまま、急ぎ更衣室へ向かう。

「ちっ流石に時間を喰ったな。」

「すぐに着替えちまおう！」

服を脱ぐ。

「わあ!？」

シャルルが変な悲鳴をあげる。

「どうした？時間は余りないぞ。」

「荷物でも忘れたのか？はやく着替えようぜ！」

「きつ着替えるよ？あっち向いててね？」

なんか変な感じだな。

話している一夏とシャルルを無視して着替える。

まあ、下に着ているので脱ぐ位だが。

「2人とも早いな、コツとかあるのか？」

「口より手を動かせ、遅れるよ？」

そういいながら部屋を出る。

「置いてくのかよ!？」

「俺は遅刻したくないからな。」

悪いが一夏は置いていく。シャルルと遅れる訳にはいかないからな。

グランウンドへ向かいながら気になったことを聞いて見る。

「なあ、シャルルってデユノア社の関係者？」

「うん、そうだよ。父が社長だよ。」

「…ああやっぱりそうなんだ。ありがとう。あそこが第二グランウンドな。」

グランウンドにつく、織斑先生の前には整列した生徒達がいる。

「天野とデユノア、織斑はどうした？」

「着替えに戸惑っているようです。あと、他のクラスの生徒の妨害に会ったので遅れますよ。」

フォローしておくか。

「そうか、しかしお前達が間に合ったのだ。あいつだけ遅れるのはあいつのせいだ。」

そうですか。

その後遅れた一夏は頭に出席簿が落とされた。

「ずいぶんとゆっくりですわね。男性の方々は。」

セシリアさんだ。

「仕方ないだろ。珍獣扱いでどこ行くにも囲まれるんだよ。」

「まあそうですね。」

セシリアさんは頷く。

後ろの方では一夏と鈴さんが話している。その後ろには織斑先生の姿、出席簿が落ちた。

そして授業が始まる。

「では、今日は戦闘実演してもらおう。凰！オルコット！」

「私ですか？」

セシリアさんが答える。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。前に出ろ。」

まあ今までもそうだったしね。

なんか不満を言う鈴さん、セシリアさんに織斑先生が小声でなにかを言う。

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットの出番ですわ！」

「まあ実力の違いを見せつける機会ね。」

なにを言ったか大体は察しますが。

「それで？お相手は鈴さんですか？」

「こっちの台詞よ。返り討ちだわ！」

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手はすぐに来る。」

向こうから凄い勢いでラファールが来てるけど。

当たるのはヤバイそうなので横に避ける。

ドゴオーン！

土煙と爆音を上げながら一夏に突っ込んだ。

山田先生がラファールに乗ってやって来たのか。

そして一夏と絡み合うような体勢で寝転がっている。
白式の展開は間に合ったのか怪我はないようだ。
しかし、一夏の手が山田先生の胸部に添えられている。
このラツキースケベ！

なんて考えてるとガシントと鉄を合わせる音がした。
鈴さんが甲龍を展開し双天牙月を接続した音だ。
それを一夏に投げる。

あの体勢では避けるのは難しそうだが。

山田先生が咄嗟にアサルトライフルを構え、発射。

その弾丸は双天牙月に当たると軌道を変え墜落する。

ほぼその場に居た生徒は現状を理解していない。

恐らく山田先生の実力に驚いているかんじだ。

「山田先生は元代表候補生だ。これくらいは造作もない。」

織斑先生が告げる。

「昔のことです。それに候補生止まりでしたし。」

なるほど代表候補生か、それなら納得の実力だ。

「さあ、お前たち、いつまで呆けている。始めるぞ。」

織斑先生が開始を促す。

「えっ？2人でですか？」

「いくらなんでもそれは…。」

セシリアさんと鈴さんは申し訳なさそうに答える。

まあ量産機1機と専用機2機では戦力差は凄く有りそうだが。

「ああ安心しろ、お前たちならすぐに負ける。」

自信たっぷりな織斑先生。

確かに先程の射撃は凄かったな。

「そこまでおっしゃるのなら、その実力をを見せていただきますわ！」

「ふん！私がいかに優秀か見せてあげる！」

ISを纏った3人が空へ上がり、模擬戦が始まった。

「よし、デュノア、山田先生が使っている機体について解説しろ。」

「はい。」

空中の激戦を見ながらもラファールを解説するシャルル。

そうか、デユノア社の機体だから詳しいのか。

解説が終わると調度山田先生も戦闘の締めに入るようだ。

上手く回避先を誘導して鈴さんをセシリアさんに当てて体勢が崩れたところにグレネードで纏めてトドメ。

「く、まさかこの私が…。」

「あ、アンタねえ、回避先を読まれ過ぎよ！」

「り、鈴さんこそ、衝撃砲を無駄撃ちしすぎですわ！」

「それはこっちの台詞よ！ビットのエネルギー切れ早いのよ！電童のファイナルアタックやクロックマネージャージャーじやあるまいし！」

「ぐぐぐぐう…。」

「ギギギギい…。」

言い合いをする2人、それを無視して織斑先生が告げる

「これでIS学園の教師の実力がわかったな。以後は敬意を持って接するように。」

なるほど、みんなから山田先生が甘く見られているのを考えて今日の模擬戦か…。

「さて、専用機持ちは織斑、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、凰、天野だな。ではそれぞれをリーダーにとしてグループに別れる。」

そう言われると俺、一夏、シャルルの所に人だかりが出来る。

まあ2組の生徒は特に男性操縦者との接点が欲しいのだろう。

このままではグループ分けが進みそうにない。

「なにをぐずぐずしている！出席番号で順番にグループにつけ！」

織斑先生が怒鳴る。

その直後、ピシツとそれぞれの前にみんなが整列する。

「全く、最初からそうしろ！」

「それでは、それぞれのリーダーさんは練習機を取りに来てください。早い者勝ちですよ。」

山田先生が回りに告げる。

俺は後ろを向きメンバーに聞く。

「ラファールと打鉄、どっちがいい？」

「どちらでもー」

「どっちでも余り変わらないでしょ？歩くだけだし。」
なるほど確かにな。

先生の所に行き、ラファールを受け取る。

授業内容はISに乗り、歩き、降りる。これだけ。

なのだが一夏の所では降りる際にしやがまないといけないのをしやがまずに降りて一夏にお姫様抱っこで運ばせていた。

こちらでも同じことをして貰おうと思ったのかわざと立ったまま降りたのでユニコーンたちに足場になってもらった。

セシリアさん、鈴さんの所では特に問題は無いようだ。

シャルルの所は自己紹介しながら乗ってはいるが問題は無いな。

ボーデヴィツヒさんの所は…放置されてる。勝手にわからず苦戦してるメンバー達、流石に織斑先生が注意すると渋々ながら教えていた。

「よし、そこまで。各グループのリーダーは練習機を格納庫に持っていけ。そのまま、午後の授業で整備を行う。」

織斑先生の指示に従い練習機をキャリアーに乗せて運ぶ。

ちなみにシャルルは周りの体育会系の女子が我先にと運んで居た。あれが人徳か？

「おーい、シャルル、星夜、着替えに行こうぜ。」

一夏が話かけてくる。シャルルとはやく馴染もうとしているのか積極的だ。

「ああ、わかった。シャルルは？」

「え、ええと…僕は機体の微調整をするから先に行って着替えててよ。待つてなくていいよ。」

なんかぎこちない態度でシャルルは言う。

「えくそんなこと言うなよ。待つのは慣れてるからさ。」

「いや、だから…僕は…」

一夏が食い下がる。シャルルは困惑する。

「一夏、シャルルが困ってるぞ。まだ馴れてないんだから、好きにやらせて上げな。」

助け船を出しておこう。

「星夜…。」

「それとも…一夏はシャルルが好みか？」

ちよつと引きつつ言ってみる。

「ええっ!？」

シャルルが真つ赤だ。周りの女子で聞き耳をたてていたやつが何人か反応してる。

「なっそんな訳ないだろ!？」

一夏がこちらに抗議の意を示す。

「じゃあ、先に行くぞ。シャルル、後でな、変な事を言つてごめんな。」

「おおい!・星夜!・待てよ!・シャルル!・またな!」

更衣室へ行き、着替える。まあ、上に着るだけだが。

「一夏、さっきのはやりすぎだぞ。」

一夏に注意する。

「だつてさ、来たばかりだから、色々と解らないだろ？」

「だからつて嫌がつてるのを強引に連れて行くのはダメだろ。」

ああ言うときは、気を配っておいて困つてるときに手を貸してやればいいんだよ。」

「そうなのか?でも着替えを一緒にするくらいいいだろ。」

「男同士でも嫌なやつは居るだろ。俺達はお互いに日本人だからいいけどさ、あいつは1人、国が違うんだ恥ずかしくもなるだろ。」

「うーん、そう言われるとそうかも。」

一夏にはこう言つたがなんか変な感じだな。

シャルルは何かしら秘密があるのかも。

見せたくない傷とかかな?

「あつそうだ。星夜、今日は昼飯を屋上で食べないか？」

一夏が思い出したように聞いてきた。

「屋上で?」

「ああ、折角いい天気だからシャルルも誘つて一緒に食おうぜ。」

「なるほど、そう言うのならいいぞ。簪さん達も連れていくよ。俺は買わなきゃ行けないし。」

「おう、俺はシャルルを誘っておくぜ。」

そこで一端別れて食堂にて簪さんと本音さんを見つけて事情を話して、購買のパンをそれぞれ購入して屋上へ向かう。

「……しまった一夏にやられた。」

俺は屋上についてから気がついた…。

屋上には不機嫌そうな簪さん、その手には手作りと思われる弁当箱。

「どうしたんだ？ 星夜達もこっちに座れよ。」

きつとこれって本当は簪さんが誘ったやつで一夏と2人で食事しようとしてたんじやないか？

まあここまで来てしまったら仕方ない。

「ああ、そうしよう。」

とは言え席が足りないので隣のテーブルに座る。

俺いつものメンバーで調度4人、一夏のテーブルはシャルルを追加して調度4人。

「あれ？ セシリアさん、今日は手作り？」

セシリアさんがバスケットを持っていた。

「はい！是非とも皆さんに召し上がって頂きたいと思ひまして！」

今日買ったのは3人とも菓子パンの類いなので夜にでも食べればいいかな？

「折角作ってくれたなら食べないとな。」

「うん、そうだね。」

「セツシーなにを作ったの？」

「はいっ！ サンドイッチですわ！」

バスケットを開くとそこには綺麗なサンドイッチが並んでいた。

その内のひとつを手取る

「いただきます。」

そう言ってから口に運ぶ。

「ぐう!？」

なんだこれ!？ 甘い？ 辛い？ 苦い？ 酸っぱい？

口の中では大戦争が勃発した。

「これは味のデパートか!?悪い意味での!

「あの…?皆さん…?」

「セシリアさん…。」

「…セシリアさん…。」

「セツシー…。」

「「味見はしたの?」」

顔を真っ青にした3人の声が重なる。

見た目は完璧だが味が最悪だ。

よくよく考えればセシリアさんは良家の令嬢だ。

メイドもいると言うし料理経験皆無か?

「いえ、本に書いてある通りにできたので平気だと。」

「なら、今すぐ味を見てくれないかな?」

「これを…美味しいって言ったら…。」

「セツシーの味覚を疑うよう。」

きつとセシリアさん言う本の通りとは写真のことか?

セシリアさんが1つを口にします。

たちまち顔が青くなり。

「申し訳(ご)ざいませんでしたわ。」

謝った。

「まあ、誰でも最初は出来ないよ。」

「セシリアさん、今度一緒に料理作る?」

「かんちゃんは上手だよ。」

「ぜひ、おねがいします。」

そのあとは購買で買っていたパンと鈴さんからの酢豚のお裾分けを食べた。あの酢豚はなかなかだ。店にあっても遜色は無いだろう。

午後の授業は特に問題なく終わった。

相変わらずボーデヴィツヒさんは自分の事しかやらないのでこちらから他の子に教えたりもしたが。

とりあえず朝の時間以外で一夏に手を出す感じは無さそうだ。

そういえばシャルルは一夏と相部屋だそうだ。

まああそこはつい最近までは箒さんと一緒だったがクラス対抗戦

の後に1人部屋になってたし調度いいか？

自分の部屋に戻り、座布団に腰をかける。

しかし、なんでいまさらフランスから3人目なんだ。

俺以外は世界中探して居なかつたんだよな？

何らかの理由で隠してたのか？

でも隠す利点は…。

駄目だ。…変に勘ぐるのは止めよう。こう言うときは…。

専門家に頼もう。

そう思い、電話を取る。

数回コールの後に出てくれた。

『もしもし？…どうしたの？星夜くん？』

ベガさんに繋がる。

「いや、G E A Rフランスに調べてほしい事がありました。」

『フランスに何か気になることも？』

「今日、フランスから3人目の男性操縦者が入学してきました。」

『……本当に？』

「はい、名前はシャルル・デュノア、デュノア社の社長さんのご子息だそうです。本当に居たか調べられますか？」

『わかつたわ。それは怪しいわね。こっちで調べておくわ。電童や星夜くん、織斑くんを狙ってる可能性もあるわね。気を付けて。』

「はい、お願いします。」

通話を終える。シャルルには悪いがなんか違和感が拭えないので調べてもらう。

「そういえば…ボーデヴィツヒさんはなんで一夏を敵視してるんだ？」

『私はいいつを認めない！あの人の弟であると、認めるか！』

朝のボーデヴィツヒさんの叫びが頭に響く。

「織斑先生の信者ってことかな？」

にしても何が原因なんだ？弟が居るくらいであんなに怒るか？

課題がいくつか増えてるな。少しでも減らさないと…。

そんなことを考えながら1日は過ぎていった。

第18話 《冷めた心、凍った心》

転校生のシャルル・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒ

ある日の放課後、俺―天野星夜―は新しく来た2人に軽く悩んでいた。

シャルルは違和感や怪しい点があるし、ボーデヴィツヒさんは周りに壁を作っている。

あともうひとつ悩みがある。

それは更識先輩の事だ。

簪さんと仲直りがしたいそうだが中々できないようだ。

こっちはお互いにその気があるからマシかな？

とりあえず出来ることからやるしかないか。

そう思い、織斑先生を探す。

職員室に行けばわかるか。

「失礼します。織斑先生はいらっしゃいますか？」

職員室にノックをして入る。

「ん？天野か、どうした？何か問題でも起きたか？」

よし、居た。

「織斑先生に聞きたいことがあつてきました。」

何かを察したような織斑先生。

「まあ、3人しかいない男子だ、悩みは色々あるだろう。こっちへ来い。聞いてやる。」

わざわざ個室かありがたい。

「ありがとうございます。」

部屋には簡単な椅子と机だけ、応接室つてよりも取調室みたいな。

「それで？話はなんだ？」

「ボーデヴィツヒさんの事を知りたくて来ました。織斑先生から見たボーデヴィツヒさんを教えてください。」

「なぜ？何処が気になった？」

「ただ弟が居るだけならあんな殺気は出ないはずですよ。」

「なるほどな。まあいいだろう。生徒の問題は生徒に片付けさせるか。」

そう言つて織斑先生は語り始めた。

まず、ラウラ・ボーデヴィツヒはドイツ軍が産み出した試験管ベイビーであること。

その中でも彼女は最も優秀だった。

しかし、ISが登場し、その適合性を上げるために行われた処置により異変が発生一気に『失敗作』の烙印を押されてしまった。

その後、ドイツで1年間教官をすることになった織斑先生に出会う。

織斑先生の指導で一気に成績が伸びて最優秀の座を取り戻した。

その時に織斑先生に強い憧れを持ったのだろう。

一夏を恨む理由はその教官をすることになった原因にある。

モンドクロツソと呼ばれるISの世界大会。

この決勝戦の際に一夏が誘拐されたのだ。

一夏を救うために織斑先生は棄権した。

つまり、織斑先生に黒星を付けた原因だと思つているようだ。

「産まれた理由が生き方を縛っている感じですね。」

「まあ、あいつは攻撃力が強さだと思つているし、私になろうとしていく。」

「力は心なのに…。それに他人に成れるわけ無いのに…。」

「あれも、まだまだ子供と言うことだ。だがそのままではいけないのも確かだな。」

「まずはその心に気づいてもらえないと行けないわけですね。」

「難しいが…出来るか?」

「最初から出来ないと思つていたら出来ることも出来ません。」

宣言する。

「ふふ、そうだな。確かにその通りだ。」

「まあ格闘家らしく踏み込んでみますよ。そこからどうなるかはわかりませんが。」

「その意気だ頼むぞ。」

「ありがとうございます。」

そう言つて部屋をでる。

そのまま職員室を出て、ボーデヴィツヒさんを探す。聞かなければ、彼女自身の心を。

放課後のグラウンド、そこで一人訓練をしていたボーデヴィツヒさんを見つけた。

「お疲れ様です、ボーデヴィツヒさん。」

「貴様は…天野星夜…何の用だ。」

赤い右目で睨み付けてくる。

「ボーデヴィツヒさんの事を知りたくてね。なぜ、一夏を狙うのかな？」

「貴様には関係がない、答える必要も無いな。」

まあ素直に答えてはくれないか。

「織斑先生の棄権による敗北を与えた原因だから？」

その瞬間、彼女は距離を詰め、ナイフを取りだし、こちらの喉元に突き立てようとした。

余りにも直情的で読みやすかった。

手首を叩き、ナイフを落とさせる。

そのまま腕を掴み背負い投げの要領で投げる。

「がはっ！」

背中から落ちた彼女はこちらを睨む。

「私にとって教官こそが全て！その強さが目標であり、存在理由！なければ完全でなければならぬ！」

立ち上がりながら彼女は続ける。

「教官をあんな風に変えてしまうあの存在が憎い！」

汚点を残した張本人である織斑一夏を排除する！どんな手を使つても！」

「一夏を倒しても、織斑先生を越えても、ボーデヴィツヒさんはボーデヴィツヒさんだ！あの人にはなれない！」

自分と言う存在を理解してほしい、産まれた経緯や理由はどうあれ、彼女は彼女だ。自分で決められる筈なのにそれを放棄している。

「それに、力だけじゃ織斑先生に追い付くことも出来ない！」

「ならば私に何が無いと言うのだ！」

「想いだ！何かを成そうとする想いが無ければそれは破壊を生むだけの力だ！」

「想いだと…そんなもの、必要ない！」

ISを展開し、こちらに手刀を降り下ろすボーデヴィツヒさん。その手にはエネルギーが貯まっている。

「あなたは織斑先生に憧れてるんだろ!? だったらなぜ立ち向かわない！なぜ逃げる!?!」

俺は動かない。直前で止まるボーデヴィツヒさん。

「私が…逃げているだと…? ふざけるな！」

「いいや、あなたは自分自身から逃げている！自らを信じてないから織斑先生になろうと逃げているんだ！」

「私、自身だと…?」

「そうだ！織斑先生から教えてもらった自分の強さを見ずに織斑先生という影に隠れようとしている。」

動揺してるな。

「そんなわけがあるか！私は教官によって、最強の座に戻ったのだ！この力は私だ！」

「…織斑先生が教えてくれたのはそれだけじゃないはずでしょ…?」

「…っ！これ以上貴様と話すことなどない!!」

彼女はISをしまい、寮へ走っていった。

やはり、彼女は再び力を失うことを恐れている。

力しか存在を証明する方法を知らないからだ。

だから織斑先生に…自分の知る最高の力に憧れてる。

「力は…心なり…。」

眩くが風に掻き消された。

彼女は理解してくれるだろうか…。

ボーデヴィツヒさんが去ってしまったので部屋に帰る。

「ん…？誰かいる？」

部屋に鍵は掛かっているが部屋から気配を感じる。

「誰だ!？」

鍵を開けても反応はなかったので勢いよくドアを開ける。

「あつお帰りなさい♪ご飯にする？シヤワーにする？それとも…」

「あつ布仏先輩ですか？更識先輩が自分の部屋に不法侵入を…」

更識先輩だったのですぐさま携帯をだし、布仏先輩に電話する振りをした。

「あつごめんなさい、スミマセン、虚ちゃんには言わないで。」

「じゃあ用件は何ですか？」

この人はあのあと数回会ったけどペースを握られるとやばい。

「えつと、実は…ひさしぶり簪ちゃんからメールがあつて…」

「へえ、そうですか。」

わだかまりが無くなったのかな？

「私に挑みたいって……。」

「なるほど……。それで？自分はどうすれば？」

「そのの仲介人になって欲しいの！」

つまりは見守って欲しいということか。

「きつと簪さんからも同じこと頼まれると思いますし、いいですよ。」

「ありがとう！」

「それで？いつやるんです？」

「今度の土曜日の午後よ。」

「わかりました。次の土曜日は開けておきます。」

よく見ると携帯にメールの着信がある、簪さんからだ。

内容は更識先輩に言われたのと同じ、お姉さんに挑むから見届けて欲しいとかかれていた。

了解を伝えるメールを返しておく。

さて、この問題はあと一歩かな？

「じゃあ、よろしくね天野くん♪」

そう言つて更識先輩は去つていった。

後日の放課後

一夏たちと特訓をしていた。

今日はシャルルも居る。

シャルルは専用機『ラファール・リヴアイブ・カスタムⅡ』を纏っている。

その名の通りラファールのカスタム機だ。

「えっとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ。」

「そうなのか？一応わかっているつもりなんだけど。」

今は一夏にシャルルが講義してる。

「一応知識としては知ってるって感じだね。僕や星夜と戦っても全然距離を詰められなかったでしょ？」

「確かに、瞬時加速も読まれてたしな。」

「一夏は接近戦オンリーだからより深く武器の特性を把握しないと行けないんだよ。瞬時加速も直線的で軌道予測はしやすいんだよ。」

「なるほどな。」

「あつても瞬時加速中に軌道を変えようとするとう無理な負荷が掛かるからやめた方がいいよ。」

シャルルの説明は横で聞いていても分かりやすいな。

箒さんは擬音だらけだし。

鈴さんは感覚的だし。

セシリアさんは理論的過ぎる。

「なぜあれで理解できんのだ…。」

「あんなに分かりやすく言ったのに。」

「私の説明の何が不満だったのかしら。」

前任のコーチ達かなにか言っているが気にしない。

「一夏の機体は後付武装（イコライザ）が無いんだよね？」

「何回も見てもらったけど空いてないらしい。」

「きつと単一仕様（ワンオフ・アビリティー）に容量を使ってるからだよ。」

零落白夜のことか…。

「普通はセカンド・シフトした後には発現するものなんだけどね。ファーストシフトから使えて、織斑先生の使ってたISと同じアビリティーなのも異常なんだよね。」

「姉弟だからとかじゃないのか？」

「血縁者でも同じアビリティーがでる理由にはならないよ。操縦者と機体の相性が重要だからね。再現しようとしても出来てないんだ。」

「そうなのか。」

「次は射撃の練習をしてみよっか。」

そう言つてシャルルは一夏にアサルトライフルを貸していた。

射撃を体感して覚えさせるのか、そう言うのもありだったな。

やっぱりシャルルは教師に向いてるな。

そんな感じに練習をしていたが：

「ねえ、あれって…」

「うそ、ドイツの新型？」

「まだトライアル段階だって…」

そこに来たのは黒いISを纏ったボーデヴィツヒだった。

「織斑一夏、私と戦え！」

殺気を隠すことなくぶつけている。

「嫌だ、理由が無いね。」

一夏は断る。

「貴様に無くても私にある。」

その言葉を聞き、一夏の表情が暗くなる。

理由はわかっているようだな。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしていたのは明白だ。だから、私は貴様を認めない！」

「また今度な。」

一夏は断じて戦わないつもりだ。

「ならば戦わざるを得ないようにしてやる。」

言うと同時に左肩の大砲が火を吹く。

「こんな密集空間でいきなり戦闘なんてドイツ人はビールだけじゃなくて頭もホットだね。」

その砲撃をシャルルが盾で防ぎながら銃を構えてボーデヴィツヒさんに向ける。

「ふん、アンテイクが。」

「ルーキーよりは動けるよ！」

2人が睨み合う。

「はい、2人とも、ストップだよ。」

間に割って入る。

「星夜！」

「貴様…何のつもりだ！」

「ここは練習をする場所であつて模擬戦をする場所ではないよ。ボーデヴィツヒさん、一夏を倒したいならこんどの学年別トーナメントで戦えるからそれまで待たせたら？」

「そんなものは関係ない！あいつは私が…！」

『その生徒！何をしている！学年とクラス、名前を言いなさい！』

放送が聞こえる。

「ちつ…邪魔が入ったか…。」

踵をかえすボーデヴィツヒさん。

「一夏、大丈夫？」

「大丈夫か？一夏、シャルル。」

「ああ、助かった。ありがとう。」

シャルルは武器をしまいながら一夏のところへ。

俺も近づく。

「今日はもうやめようか？」

「ああ、そうだな。銃サンキュー、参考になったぜ。」

「アリーナも閉館時間だしな。」

一夏が銃を返す。微笑むシャルル。

「えつと…じゃあ、先に着替えて戻つてて。」

ISを使った後、シャルルは必ず俺と一夏を先に着替えさせていた。

一夏は毎回一緒に着替えをしようと誘っている。

あと、一夏に聞いたら部屋に行く態度がぎこちないと言っていた

な。

一夏は頑張つてシャルルを説得している。

「たまにはいいじゃないか。」

「い、いや。」

「つれないこと言うなよ。」

「つれないって言うか、どうして一夏は僕と着替えたいの？」

「どうしてシャルルは着替えたがらないんだ？」

シャルルは強引な押しに弱いようだな。

「どうしてつて…はつ恥ずかしいから…。」

言い方と仕草がなんか女っぽいぞ、シャルル。

「慣れれば大丈夫だつて、さあ！一緒に着替えようぜ！」

「えっいや、えーと…。」

シャルルの視線がこちらに向く。あれは助けを求める目だ。

「一夏、シャルルが嫌がつてるんだからやめてやれよ。」

「引き際を知らないやつは友達無くすわよ？」

一夏の首根つこを掴み引つ張る鈴さん、やっぱりこの人は氣遣いが出来るな。

「では、星夜さん、一夏さん、シャルルさんお疲れさまですわ。」

「うむ、セシリア、鈴、私たちも行こう。」

「そうね、じゃあまた、夕食時にでも会いましょう。」

女子3人組が歩いて行く。

「シャルル、先に着替えてるから、ゆっくり来てくれ。」

鈴さんから引き継ぎ一夏の首根つこを掴み引きずる。

「ぐえ、苦しい…星夜、歩くから離してくれ。」

「うん、あとでね。」

シャルルと別れて更衣室に向かう。

「織斑くん、天野くん、デユノアくんいますかー？」

更衣室にて着替えていると外から声が聞こえた。

山田先生の声だ。

「はい？えーとデユノア以外は居ます。」

「どうかしましたか？」

「入っても大丈夫ですかー？着替え中ですかー？」

なんか語尾が延びてる。まあ自然となるときつてあるし。

「2人とも、終わってますから大丈夫です。」

「わかりました。」

ドアが開き山田先生が入ってくる。

「連絡事項ですか？必要ならシャルルも連れてきますけど。」

「あつそこまで重要でもないのとお二人から伝えてください。」

「えつと今月の下旬から男子の方も大浴場が使用可能になります。予定では週2回の使用日を設ける形になります。」

ああ、確か女子たちから色々と言われて難航してたらしい。時間別だと何があるかわからないしな。

ただあの広さを少人数で占拠とはなかなか贅沢だな。

一夏は余程嬉しかったのか山田先生の手を掴んで喜んでる。

そういうえば風呂好きだっていつてたよな。

「あれ、一夏に星夜、まだ居たの？」

シャルルが入ってきた。

「喜べーシャルル！俺たちも今月から風呂が使えるぞ！」

やたらとテンションの上がった一夏が報告する。

「あつそうなんだ。」

対して軽い反応のシャルル。

「悪いなシャルル、すぐに出るから。山田先生、連絡事項はそれだけですか？」

「あつはい、以上になりますけど。織斑くんは専用機に関する書類の提出があるので来ていただけますか？」

「わかりました。シャルル、今日は先にシャワー使ってくれ。」

「うん、わかったよ一夏。」

山田先生に付いていく一夏。

「じゃあ、シャルルまたあとで。」

「うん、星夜も、あとでね。」

部屋に戻り、シャワーを浴びる。

お茶を飲み、一息つくくと携帯が鳴る。

ベガさんからだ。

「もしもし?」

『星夜くん、今は大丈夫かしら?この間の件なんだけど…。』

シャルル・デュノアに関してなにかわかったのか。

『結論を先に言えば…シャルル・デュノアという人物は存在しないわ。』

存在しない?

「と、言いますと?」

『デュノア社の社長と本妻の間には子供は居ないわ。ただし、今は亡き愛人との間には居たみたいね。』

「つまり、その子供が。」

『シャルロット・デュノア、女の子よ。』

「じゃあ、男装してわざわざ入ったのは特異ケースとの接触が目的ってことですかね?」

『ええ、間違いないわ。デュノア社は現在、経営状態が良くないからね。あと広告塔位には思ってるかも。』

「はあ、いくら愛人との子供だからって捨て駒みたいな使い方ってします?」

『恐らくそれは本妻の方が決めたみたいよ?』

「やっぱり女性の方が強いと。」

『本妻は裏で色々とやってるみたいよ。そっちはまだ確認がとれてないから詳細は言えないけど。』

「そうですか、社長はお飾りだと?」

『ええ、本来経営能力は高いみたいだけど今はその力を活かせてないわね。』

無能な本妻が色々と仕切ってこけたわけか。

「なるほど、ありがとうございました。こっちでも彼女に聞いてみますよ。」

『シャルロット・デュノアに?』

「ええ、共犯なのか被害者なのかわからないので。」

『デュノア社についてはまだ詳しく調べるからまた連絡するわね。』

「お願いします。では。」

携帯を閉じる。同時にドアがノックされる。

「星夜、いるか?一夏だ。」

一夏がきた。

「どうした?一夏、まだ飯には早くないか?」

ドアを開けて答える。

「悪いな、ちよつと相談に乗ってくれないか?」

真面目な顔だ。

「何かあったのか?」

「ああ、俺の部屋に来てくれないか?みんなには内緒で。」

まさかね…。

「わかった行こうか?」

「ありがとう。星夜。」

一夏と一緒に部屋へ行くとそこにはジャージを着たシャルルが居るしかし、胸が出ている。

「つまり、相談事つてのは『シャルロット・デュノア』に関してつてこと?」

2人の目が驚きに満ちた。

「知ってたのか!?!星夜!?!」

「気づいてたの!?!星夜!?!」

「悪いけど初日から違和感を拭いきれなくてね。GEARに調査して貰ってた。」

「そつか……。そうなんだ…。」

シャルルは落ち着いている。いや、諦めてるのか?

とりあえず一夏の話の話を聞くと

シャルロットの事情を聞いてそれを救うために学園の特記事項に《生徒はあらゆる国家や組織に帰属せず、同意なくば外的な介入は許可されない》というのはあるから3年間は平気なことには気づいたと。

「でも、それだと根本的な解決は出来ないから相談したいと?」

「ああ、星夜ならGEARとかに頼めないか?」

「GEARに？」

「そうだよ、GEARはたしかフランスにもあるだろう？」

「まあ今回の調査も大体はGEARフランスが行ってるからな。」

「どうにか出来るだろう？」

一夏は友人を救いたいからこう言ってるんだろうな。

優しいやつだ。

「君は？どうしたいの？」

シャルロット・デュノアにも聞かないとな。

「えっ？」

こちらを見て呆然とするシャルロット・デュノア。

「ここまでの会話で俺は君からは何も言われてないからね。」

そう、最初の反応以外ずっと下を向いていた。

「一夏は君を助けたい。けど、それを君が拒んでいるなら余計なことになってしまうからね。」

「なんでそんなこと言うんだよ!?友達だろ!？」

一夏がこつちに喰いかかる。

「いくら、助けようと手を差しのべても相手が掴まなきや意味はない

よ。一夏。」

「僕は…、どうしたらいいのさ!？」

彼女は叫ぶ。

「僕には選ぶ権利なんか無いんだよ!!あの人たちに勝手に決められて
！居場所も取られて！僕はどうすればいいのさ!？」

「どうすれば良いかじゃない…。どうしたいか…だ!!」

俺は強く言う。

「僕が…どうしたいか？」

聞き返してきた。

「お前が絶望して選ばないのなら、俺達に助ける術はない。でも、お前
が希望を得るために動くのなら、俺達は全力で助ける。」

しっかりと目を見て宣言する。

「信じて頼る仲間を俺達は見捨てない。」

「でも、僕は君たちに嘘をついて…騙してたんだよ？」

「それで俺達に何かしら被害があつたか？なあ一夏？」

一夏に聞く。

「いや、何も取られてないな。」

「人間生きてれば嘘だつてつくこともあるさ。だから気にするな。」

「……僕は……。」

ポツリと呟く。

「僕は……ここに……いたい……。」

「まだ、僕の居場所がここにあつて……ここにいていいなら……一緒に居たい……。」

弱々しいが確実に言った。

「わかつた。なら、まずはデュノア社の事を何とかしないな。もしかしたらフランス政府も噛んでる可能性があるし。あとでGEARの信頼できる人に電話するから、事情を話してくれる？GEARフランスも調べやすくなるし。」

「うん、わかつたよ。」

彼女は答える。

「一夏ー？居るー？飯食べに行くわよー！」

鈴さんの声だ。

「シャルル、布団の中に。」

「あつうん。」

いきなりの声で一夏と2人で慌てるので、落ち着いて指示する。

「あれ？星夜も居るじゃない？どうしたの？」

ガチャリとドアを開けながら聞いてくる鈴さん。

「あつああ、シャルルが体調が悪いらしくてな……。」

「それで、俺の部屋にある常備薬貸してくれってな。」

とつさの芝居にしてはいい方だろう。

「へー。大丈夫なの？」

「熱とかは無さそうだし、ここ数日の疲れが一気に来たのかもな。」

「あー引つ越したあとに気が抜けたりするとならしいわね。」

「一夏、シャルルは俺が診てるから一緒に食事に行つてこいよ。」

「えっ？いいのか？」

「ああ、だから帰りに軽いの持ってきてくれ、俺とシャルル用で。」

「おう、わかった。シャルル、悪いな。」

「う、うんお願いね。」

弱々しく答えるシャルル。

「じゃあ、一夏借りてくわよ。お大事に。」

そう言つて食堂へ向かう鈴さんと一夏。

「星夜、ごめんね。」

「謝る必要はないよ。」

ちよつとした沈黙が部屋を包む。

「とりあえず、GEARに連絡するから事情を伝えてくれ。」

「うん、ありがとう。」

携帯を取りだし、ベガさんに繋ぎ、事情を話してシャルルに替わる。

その後、しばらく通話は続き。

「はい、お願いします。星夜、最後に替わってくれって。」

「ああ。」

携帯を受けとる。

『デュノアちゃんの事情はわかったわ。あとのことは私たちにまかせてね。何かあればすぐに伝えるから。』

「はい、お願いします。」

そう言つて通話を切り、携帯をしまう。

その後、一夏が戻ってきた。

「一夏、とりあえずGEARには連絡したからしばらくは待つしかない。」

「ああ、わかった。」

一夏から弁当を受け取り、立ち上がる。

「じゃあ今日は部屋に戻って寝るわ。おやすみ、一夏、シャルル。」
それぞれに挨拶して部屋を出た。

第19話 《姉妹対決、打鉄式式対霧纏》

この数日、俺―天野星夜―は簪さんに会っていない。
簪さんが避けているようだ。

理由としては姉である更識先輩の対決を控えて、1人で機体の調整などをしているようだ。

とはいえ明日の対決でそれは終わるだろう。

何でも今回は学園外にあるアリーナを借りて対決をするようだ。

学年別トーナメントも近いので他の人に対して気を使ったのだろう。

簪さんからは試合の時間と場所をメールで送って来てくれたのでここからのルートと所要時間を確認しておく。

「明日…どうなるのかな？」

データウエポン達に問いかけてみるが全員首を傾げるだけだった。

試合当日、予定は朝からなので早めに出かける。

部屋を出ると、

「あまのーん。おはよー。」

「天野くん、おはようございます。」

布仏姉妹だ。

「おはようございます。御二人も姉妹対決を見届ける感じですか？」

「はい、それに布仏家は更識家に仕える身、一緒に居りませんと。」

「かんちゃん、たっちゃんに勝てるかな。」

「本音さん、今日は勝つことは重要じゃないと思うよ。」

そんな会話をしながら、駅に向かい電車に乗る。

学園からはそんなに離れていないのですぐにつくだろう。

「天野くんは勝つことは重要じゃないと言いましたがどう思っていますか？」

「簪さんにとって重要なのはお姉さんに認めて貰うことです。勝つ必要は無いんですよ。」

「勝ち負けではなく、自分を見てももらえればそれだけでね。」

「どうゆうこと？あまのん。」

「無能では無いってお姉さんに認めて貰いたいんだよ。」

「あの言葉ですね。」

「はい、自分もお姉さんの為になにか出来るって言いたいんですよ簪さんは。」

「先輩も先輩でもっと言葉があったと思うんですけどね。守りたいなら。」

そう、ただお互いを思っているのに伝わってないだけだ。

しつかりと言葉にすれば…。

「それだけで今回の件は解決ですよ。ただ二人とも怖がってたんですよ。」

「これ以上、仲が悪くなることを？」

「そう、だから向き合えなかった。」

「じゃああまのんのお陰だね。」

「そうですね。天野くんが居なければきつと向き合えなかったでしょう。」

「それは過大評価ですよ。」

決戦の地、市内のアリーナにに着いた。

2人はすでに到着しているようでそれぞれ準備中のようだ。

布仏姉妹はそれぞれ別れて主の元へ。

「まずは簪さんだな。」

簪さんのもとに向かう。

「簪さん、おはよう。」

「おはよう。星夜くん。…ありがとう。」

「お礼を言われるようなことはしてないよ。」

「…星夜くんに言われなかったら私はずっと逃げてたと思う…。」

「そうかな？」

「うん、だから星夜くんから貰った強さ、姉さんに見てもらおう。」

「たとえどんなに負けても、心だけは負けるな。」

「え…?。」

俺の眩きに簪さんが耳を傾けた。

「世の中強い奴は山ほどのいる。だから負けることは構わない、気持ちの負けが本当の敗北だ。」

「気持ちの…負け…?」

「ああ、だから、今の自分を全力で見てもらう事だけを考えるんだ。勝ち負けは関係ない。」

「うん! わかった。」

目には強い意志がある。大丈夫だな。

「ごめんね簪さん、あつちにも挨拶をしてくるよ。」

「うん、ありがとう、いつてらっしゃい。」

部屋を出て、更識先輩の部屋にむかう。

ノックをしてから許可をとり、部屋に入る。

「天野くん、わざわざ来てくれてありがとうね。」

「結構余裕がありますね。もっと切羽詰まってるかと思ったんですが。」

「そんなことないわよ。おねーさんこれでも緊張してるからね。」

「今日はしっかりと伝えてあげてくださいね?」

「う、わかってるわよ。」

「じゃあ、特等席で見させて頂きますよ。ロシア代表の力を。」

「ふふっ、見惚れても知らないからね?」

よし、調子はお互いに問題ないな。

3人しかいない客席、その前にはISを纏い向かい合う更識姉妹。

簪さんの打鉄式

更識先輩のミステリアス・レイディ

片や鉄、片や霧、

まるで正反対だ。

「姉さん…。」

「簪ちゃん…。」

お互いに得物を構える。

薙刀と槍。

「いくよー!」

「来なさい！」

簪さんが飛び込みながら夢現を振るう。先輩はそれを槍で弾く。「こうやって簪ちゃんが私に向かってきたのはいつ以来かしら?」
「……。」

無言で簪さんは夢現を何度も振るう。

だがそれは全て槍で防がれている。

簪さんは1度距離をとり、荷電粒子砲、春雷を放つ。

だがそれは水のカーテンにより防がれる。

アクアナノマシンによる水の制御、これがあの機体の特徴か。

簪さんはそのまま春雷を撃ちながら周囲を旋回し、山嵐を数発だけ放つ。

今度はミサイルに対して槍に付いたガトリングを放ち迎撃する。

「……………なんで……………?」

簪さんは呟いた。

「……………なんで攻撃しないの!？」

そうだ、迎撃以外の行動をまだ更識先輩は取っていない。

移動すらしない、向きを変えるだけだ。

「私じゃ姉さんの相手にならないってこと!？」

簪さんは叫びながら山嵐をと春雷を構える。

「私は無能だって!また馬鹿にするつもり!？」

春雷を連射しながら山嵐を乱射する。

「っ!」

全体を水の防壁で包み、防ぎきる更識先輩。

「簪ちゃん……。」

「なによ!?!姉さんは!私がどんなに頑張っても無駄って言いたいのか!?!」

簪さんは涙を流しながら叫ぶ。

「違うわ…簪ちゃん……。」

静かに答える更識先輩。

「私はただ…簪ちゃんを守っていたかっただけ。」
簪さんを優しい目で見つめる。

「でも、それは間違いだったわ…。」

「何が…違ったのよ…。」

「簪ちゃんがどんな気持ちだったのか考えなかった。」

更識先輩は自分の手を見て握る。

「ただ…私にとつての簪ちゃんに居て欲しかったの。ずっと私のそばに居て欲しかったの。」

「だから…無能で居ろって…?…」

「そうよ…簪ちゃんが私のそばから離れてほしくなかったから…。」

「私は…姉さんに憧れてた…何でも出来て、頭も良くて…まるで完全無欠なヒーローみたいだった…。」

「ええ…簪ちゃんが私に憧れてたのはわかった。」

「だから、一緒に！横に並んで居たいって思ってたの!!なのに!…」

「ごめんね…怖がりなおねえちゃんです。」

「どうゆうこと!?!…」

「更識家の仕事を簪ちゃんがするのを…怖がってたの。怪我をするんじゃないかって、怖い目に合うんじゃないかって。」

「全部…私の為だったて言いたいのに!…」

「違うわ、私の自己満足、大好きな簪ちゃんを守ってヒーロー気分になりたかっただけなのよ。」

2人はただ、語り合う。

自分の心を相手にぶつける。

「それも…今日でおしまいね。」

更識先輩は構える。

「来なさい、簪ちゃん、あなたの全力、私が受け止めて上げる。」

「私も…もう姉さんから逃げない！正面からぶつかる！気持ちで負けないために!…」

にらみ合う。睨みあつた時間は一瞬だったかも知れないし数秒間だったかもしれない。

先に動いたのは簪さんだった。

再び大漁のミサイルをばら蒔きながら春雷を放つ。

先程と違い、正確に同じ場所を狙った射撃。固い防御なら同じ場所

に続けて当てて壊すつもりか？

その激しい射撃を受ける更識先輩はそのまま槍を構えて突進してきた。

簪さんは即座に夢現を展開し槍を防ぐ。

「なかなかの攻撃力よ簪ちゃん。結構エネルギーが減ったわ。」

「まだ…まだ！」

接近戦の間合いで春雷を放つ。

2人を爆煙が包む。

煙のなかから出てきた2人はそのまま射撃戦に移行。

お互いの回避を読みつつ春雷とガトリングの応酬が続いた。

やはり現役国家代表である更識先輩のほうが上手だ。

上手く簪さんの回避を読み的確に当てていく。

そろそろ春雷のエネルギーが減ってきたのか簪さんの射撃頻度が落ちる。

「ごめんね、簪ちゃんこれで終わりよー！」

素晴らしい更識先輩は槍を簪さんに向けて投てきする。

まさか得物を投げると思っていなかった簪さん、避けることはできなかったが隙ができた。

その隙を狙って接近した更識先輩。

手には新たな武器が水を纏った剣が握られていた。

「はああー！」

剣は蛇腹剣で鞭のようにしなり。簪さんを斬る。

そのまま剣を巻き付け、一気に引く。

シールドエネルギーが無くなった。簪さんの負けだ。

「簪ちゃん…頑張ったわね。機体も…技術も…私の想像を越えているわ。」

「素晴らしいながら簪さんを撫でる更識先輩。

「でも…まだ届かなかった…。」

『『まだ』ね…。彼と一緒に追い駆けるつもりかしら？』

「うん、いつか必ず…お姉ちゃんに追い付くから。」

「ふふ、そうやって呼んでくれるの久しぶりだわ。」

二人とも笑ってる。よかったしつかりとわかり会えたみたいだ。そんな2人を見てると自然と笑顔になる。

「かんちゃん、よかったね。」

「お二人で仲良くされているのはいつ以来でしょうか。」

2人にも感慨深いようだな。

「疲れてるだろうから。はやくピットに戻って休憩にしましょう。」

アリーナの2人に声をかける。

「ええ、そうね。簪ちゃん、大丈夫？戻る？」

「うん、大丈夫だよ。お姉ちゃん。」

2人が肩を並べて戻ろうとしたときだった。

／＼ドン！／

爆発と共に何かがアリーナをぶち破って侵入してきた。

「一体なに!？」

「襲撃者!？」

煙がはれる、そこにいるのは……。

「く……黒い……で……電童……?？」

黒と赤の装甲に包まれた電童だった。

第20話 《紅の決意》

更識姉妹の対決は姉である更識先輩の勝利で終わった。

だがその直後にアリーナのバリアを破り何者かが侵入してきた。

俺―天野星夜―と近くにいた4人はこの事態を飲み込めていない。なぜならば：侵入してきたのは黒い電童だったからだ。

よく見れば違いは色だけではない。

頭部のバイザーが上がっておらず仮面のように付いている。電童には無い角らしきものが付いたバイザーだ。

全員の視線は黒い電童に注がれている。

「天野くん…あれ、何か知ってる?」

「更識先輩、俺も始めて見ましたよ。」

「電童の…2号機?」

「でもなんかあれ、悪そうだよ。」

「無理矢理バリアを破った時点で友好的な存在ではないと思いますね。」

奴はまだ動かない。こちらを見ているだけだ。

「とりあえず、本音さんと布仏先輩は避難して学園とGEARに連絡して貰っていいですか?」

携帯をちらつと見ると圏外を指している。

この辺りにジャミングをしているようだ。

ISの通信もダメそうだ。

「そうだね。かんちゃん達の足を引っ張るのはやだしね。」
「皆さま、御武運を…。」

2人はすぐに近くの扉から出る。

IS学園と違い電動式では無いためロックはかかったりしない。俺は電童を纏いアリーナに飛び込む。

アリーナのバリアは無効化されているのか機能していない。

「簪さん!更識先輩!」

「短距離通信しか出来ないみたいね。」

「黒い電童…あれがやってるのかな?」

3人で黒い電童を見る。

2人の前に立つ。

「何が目的だ!？」

それでも反応はない。

だが、背を向ければ危ないのは明白だ。

奴からは殺気を感じる。

「簪ちゃん…あなたは逃げなさい。」

「えっ!？」

更識先輩の言葉に驚く簪さん。

「あいつの目的が何であれ、打鉄式式はもうエネルギーが無いでしょ？このままだと危険だわ。」

「でもっ!？」

「大丈夫。お姉ちゃんは不死身で無敵よ？それに天野くんも居るし。あつ横取りなんかしないから安心なさい♪」

「もっ！もう！お姉ちゃん!!」

簪さんが顔が顔を赤くする。

こんな会話をしながらも警戒は解いていない。

簪さんは少しづつ後ろに下がる。

「しかし、ホントに何なのかしらね？」

「電童の研究用にもう一体作ったとしても日本には置かないと思いますけど。」

GEARグループの全体でISコアは15個位持っている。

それぞれの施設に1個置いているから他の研究所から持ってきたらその仕事が無くなってしまう。

「それに2号機を完成させたら井上さんが黙ってないだろうし…。」

あの人なら喜んで報告してくるはずだ。

「なら、強奪されたって事かしら?」

「そうですね。亡国機業ならやりそうですね。」

スコールとかやりそうだ。

沈黙を保っていた黒い電童が動いた。

狙いは…簪さんか!？」

黒い電童の前に割り込み正拳突きをかます。

「うおりゃあー！」

黒い電童はこちらの拳を掴んで止める。

ピクリとも動かないパワーは互角か!?

「俺がこのまま押さええますから更識先輩は援護を!!」

「ええー頼んだわよ！天野くん！」

そのまま黒い電童と殴りあい続ける。

「ええい！やりづらい!!」

思いつき蹴りを入れて弾く。

弾かれた黒い電童に更識先輩からガトリングの掃射が決まる。

「余りダメージは無いみたいね。」

「当たる前に腕のハイパープラズマドライブからエネルギーを出して消してみたみたいですし。」

腕の周りにエネルギーを発生させて盾がわりにしてみたいだな。

「とりあえず、簪さんの離脱はできましたし。」

「そうね。思いつきやりましょうか？」

2人で左右に別れて攻め立てる。

「ユニコーンドライブ！インストール！」

右腕にユニコーンを装着しドリルで突く。

それを蹴り上げで弾く黒い電童。

上げた足をそのまま踵落としの要領で下げてくる。

「ぐうっ」

だか、その隙に水を螺旋状に纏った槍、蒼流旋で更識先輩が後ろから突く。

しかし、それすら軽く躲す黒い電童。

回避しながら振り向き、更識先輩に拳を突き立てる。

しかし、それは水の防壁で防ぐ。

「パワーはあるけど。それだけのようね。」

距離を取り、構え直す。

更識先輩は余裕そうだな。

「更識先輩、エネルギーは大丈夫ですか？」

「大技を使わなければ問題ないわ。」

さっきの戦いもほぼ無傷だし、平気そうだな。

今度はあちらから仕掛けて来た。

四肢のドライブを稼働させ、更識先輩に飛び込む。

更識先輩は蒼流旋で拳を、脚を弾く。

「電童って格闘だけだったかしら？」

不適な笑みを浮かべる。

「なら、私には勝てないわよ!!」

纏った水のがドリルのように回転し、黒い電童に突き刺す。

それを僅かに横に移動し、左の脇腹に掠める程度の損傷で抑えた黒い電童は更識先輩の腕を掴む。

「なっ！」

そのまま右の全力パンチを叩き込んだ。近距離の為、水の防壁が不十分だったのだろう。

さらに殴った瞬間ドライブユニットからは圧縮された空気の竜巻が発生する。

零距离の飛翔烈風波、その威力は絶大だ。

吹き飛ばされる更識先輩を受け止める。

「更識先輩！大丈夫ですか!？」

「ちよつと勝負を焦ったかしら？」

顔には血が付いている。ISが止血はしてるだろうが頭の傷はなにかあるかわからない。

黒い電童はそのまま両腕にエネルギーを貯める。

あれは閃光雷刃撃の準備だ。

「ファイヤーウォール!!」

ユニコーンから赤い光を放ち、防壁をつくる。

黒い電童から閃光が放たれる。

「ぐうう…。」

さすがの威力だ。やはり電童と出力とかは一緒みたいだ。

この状態だとファイナルアタックを撃っても避けられてしまうだろう。

でも、更識先輩もこれ以上の長丁場良くないだろうし。

「きゃあああー！」

後方から声がした、この声は…！

「簪ちゃん!？」

「簪さん!？」

先程離脱したはずの簪さんの声だった。

何かに吹き飛ばされるようにアリーナに再び入ってきた簪さん。

破壊された壁を見る。

「なんだ…？あれは…？」

銅の色をした細かいパーツが簪さんを吹き飛ばして居たようだ。

ブルーティアーズのビットのような兵器か？

「簪ちゃん!?!大丈夫!?!」

更識先輩は簪さんに近づく。

すでにエネルギーが無い状態で食らった為か簪さんに意識はない。ハイパーセンサーにはバイタルサイン出ている。気を失っただけだろう。

「更識先輩は簪さんをお願いします！」

ここは俺がどうにかしないと。

銅色のパーツは黒い電童の横に集まるとドッキングする。

まるでその姿はでかい手の生えたけん玉だ。

「あれ…無人機なの…？」

「じゃあ…先日と同一犯ですかね？」

あの形状で人が入るわけがない。

とりあえずわかったことはあの銅色のけん玉から強力な電磁波が出ている。

ジャミングはあいつを倒せばいいんだな。

銅色のけん玉は再度パーツ単位になるとこちらに飛んでくる。

「ユニコーン！ボア！簪さんたちを守って！」

データウエポンを召喚し2人を守らせる。

「天野くん!?!どうするつもり！」

「けん玉がジャミングを出しているなら！」

バラけるなら纏めて倒す！

そう思い、四肢にエネルギーを貯める。

「閃光！雷刃撃！！」

閃光雷刃撃で周囲を焼き払う。

よし！銅色の奴は頭？を残して全部潰した！

そのまま黒い電童に向かう。

「うおおお！」

回転蹴りをかます。しかし、それは腕で防がれる。

「天野くん！！後ろよー！」

「えっ？」

更識先輩に言われるが同時に後ろから撃たれた。

それは先程倒したと思った銅色のけん玉の腕のパーツだった。

指先からレーザーが撃てるようだ。

体勢を崩した瞬間を黒い電童が見逃すはずもなくそのまま格闘の連撃を貰う。

「ぐはあ！」

連撃の締めとして蹴りをくらい更識先輩達の近くに落とされる。

「天野くん！大丈夫!？」

「まだ、動けません…。」

とはいえ…不味いな。…こっちは3人ともボロボロだ。

よく見ると銅色のけん玉は全体のパーツがあった。

「あいつ、どうなってるんだ？」

「パーツをどこからか転送してるみたいよ。」

更識先輩は見ていたようだ。

じゃあ壊したのは間違いないと。

「ならそのパーツのストック全部壊してやる。」

「そんな余裕は無さそうね。」

咄嗟に更識先輩が水の防壁で3人を包む。

ユニコーンとボアだけではけん玉のパーツを迎撃しきれはるはずもなく、いくつかのパーツがこちらを囲んでいた。

パーツ同士の間に電磁波が流れる。

「くうう、なかなかヤバイわね。」

「そろそろユニコーン達も限界だ。はやくどうにかしないと。」

ユニコーン達のダメージが増えてきたのでデータ化させて格納する。

パーツのエネルギーが無くなったのか1度包围をとき、再びドッキングするけん玉。

両手をこちらに向け、レーザーを撃つつもりだ。

黒い電童も構えている。こちらに飛び込む気だ。

こちらも構え、黒い電童に備える。

更識先輩もけん玉の方に集中している。

「はああー！」

飛び込んできた黒い電童を受け止める。腕と腕が当たる。

そのまま押し合いになる。

けん玉からも10本のレーザーが放たれる。

それは更識先輩が水の防壁で防ぐ。

ただ、エネルギーが少なくなつて来たのか防壁の面積が先程よりも小さい。

「ぐううう…。」

「くう…。」

徐々に押され始めていた。俺も、更識先輩も…。

「まだ、まだだ！」

力を込めて黒い電童を弾く。奴はバク転しながら着地する。

「今さっき！この2人はやつとわかり合えたんだよ！お互いに大切な…『愛』おいしい人だつて！」

「そうよ！私は簪ちゃんを『愛』してる！そして簪ちゃんの『愛』を見届けたい！」

「だから！守る！愛おいしい物を全て！！」

その瞬間周りを炎が包む。黒い電童とけん玉に向かって炎の塊が飛んでいく。

2体はそれを避ける。

その炎は俺達の前で止まると真の姿を表す。
それは龍の姿だった。

「ドラゴンフレア……。今度はお前か……。」
ドラゴンフレアは叫ぶ。

すると光線が発射され、けん玉が飛ばしてきたパーツに当たる。
するとパーツ達は糸が切れたかのように真つ逆さまに落ちていく。
次に黒い電童に向けて発射する。黒い電童は腕をクロスして防ぐ。
その直後光線が直接当たった右腕がだらんと力無く垂れた。

この隙を逃さない！
俺は右腕を伸ばす。

「ファイルセーブ!!ドラゴンフレア!!」

紅い光となり電童の胸部に収納される。

「ドラゴンドライブ!!インストール!!」

左足に新たなる力が装着される。

「私も…見ているだけじゃだめよね!」

更識先輩が横に立つ。

黒い電童は動かせる左腕にエネルギーを送り込んでいる。閃光雷
刃撃か。

けん玉も新しい体を転送したのか黒い電童の横で構えている。

「行きます!先輩!」

「ええ!天野くん!」

四肢のドライブユニットが回転する。エネルギーがドラゴンフレ
アに送られる。

更識先輩も槍を構える、その槍に全身の水が集まっていく。

「ドラゴンフレア!」

「ミステリアス・レイディ!」

「ファイナル!アタック!!」

左足に装着されたドラゴンフレアから紅いエネルギーが放たれる。

更識先輩の突きだした槍から大量の水が放たれる。

放たれたふたつの力は螺旋となって突き進む。

「はあああ!」

黒い電童とけん玉も撃ってきたがそんなものは一瞬で打ち消し紅と青の螺旋は目標へ進む。

「消し飛べええ!!」

目標に当たり大爆発が起こった。

「はあ、はあ…。」

「これ以上の来られたらきつわね。」

2人で爆心地を見る。

煙が晴れると頭?のみのけん玉とボロボロの黒い電童が立っていた。

黒い電童はこちらを睨んでいたがけん玉の頭?を掴むとそのまま何処かへと飛んで行ってしまった。

「ふう…。助かりましたね。」

「なんで、逃げたのかしら?」

『——くん!せ——くん!』

『——や—ん!—やさ—!』

雑音だらけの通信が聞こえる。

『星夜くん!星夜くん!聞こえる!』

『星夜さん!聞こえておりますか!』

ベガさんとセシリアさんの声だった。

布仏先輩と本音さんが通報してくれたのだろう。

「GEARの人はともかく、IS学園の生徒から心配されないのも傷つくわね。」

「まあ、セシリアさんは更識先輩の事知らないですし。」

「それもそうね。…そういうえば…天野くん?」

「なんですか?更識先輩?」

電童を解除し、その場で腰を降ろす。

更識先輩もISを解除する。

「その『更識先輩』ってなんか堅苦しくて嫌だから、楯無、もしくはたちちゃんって呼びなさい。」

先輩命令ねと小さく言う。

「わかりました。楯無先輩。」

「うん、素直でよろしい。そうゆう子、おねーさんは好きよ。星夜くん」

猫のように笑う楯無先輩。

「あまのーん！」

「お嬢様！ご無事ですか!?!」

「星夜さん！簪さん！ご無事ですよ!?!」

「星夜くん！更識さん！大丈夫?」

向こうから布仏姉妹が来る、空からはISSを纏ったセシリアさんとベガさん。

「とりあえず大きな怪我は無いと思います。先輩が頭を切ってしまっただようですが。」

「ISSのおかげで止血はすんでるから大丈夫よ。」

血をハンカチで拭いながら答える楯無先輩。

「とにかく、救急車が来るから。それですぐに病院に行って検査するわ。だからそのまま安静にね。」

ベガさんに言われ素直に待った。

待ってる間に目が覚めた簪さん。問題は無さそうだ。

セシリアさんたちが応急措置してくれた。

しかし、あの黒い電童は何だったのだろうか……。

デカイ謎が残った事件だった。

第21話 《休息》

市内にある病院の一室

俺―天野星夜―はベットのの上に居た。

更識姉妹の試合。

その後の黒い電童と銅色のけん玉の乱入。

そしてドラゴンフレアの覚醒。

戦闘後、救急車に乗って近くの病院にて治療を受けた俺達。

とりあえず全員大きな怪我は無かったので良かった。

今、部屋にはセシリアさんが居る。

「星夜さん、気分はよろしいですか？」

「うん、特に問題は無いよ。」

今、電童は手元がない、先程、ベガさんに頼んでGEARに送った。

「しかし、今日は一体なぜ市内アリーナに？訓練でしたら学園でもできましたわよ？」

セシリアさんの疑問は最もだ。

「ああ、今日は特訓とかじゃなくてね。簪さんと楯無先輩の問題だったから。」

「簪さんのお姉さんですか？そういうえば前にもその様なことを話しておりましたね。」

「もう決着も付いたから大丈夫だけどね。」

「そうですか。」

窓から外を見る。

「あつ星夜さん、お昼もうお食べになられましたか？」

思い出したように手を合わせるセシリアさん。

「いや、まだだけど。」

壁の時計を見ると13時頃を指している。

先程まで戦闘していて、その後検査だったので昼はまだ食べていない。

「でわ、私がついて参りますわ。」

席を立つセシリアさん。

「いや、セシリアさんに悪いよ。」

特に包帯を巻くような怪我もないのでベットから出ようとする。

「いいえ！いけません!!」

セシリアさんに押し倒された。

「いいですか？星夜さんは先程まで戦闘していて疲れがたまっているはずですよ。」

ずいっと顔が近づく。

「ですから、私がついて参ります。そのままお待ちくださいな♪」

「わっわかった…。だからこの体勢は危ないから降りて貰っていい？」

「えっ…？」

今、ベットの上で寝そべる俺に覆い被さる形のセシリアさん。

それに顔も近い…。垂れた長い金色の髪が俺に当たりそうだし匂いですが…。

「ひゃう！」

現状を把握して急に赤面するセシリアさん。

「セツシー…抜け駆けはよくないな。」

いつの間にか居た本音さん。

「ほほ…本音さん!?!いつの間にな。」

本音さんに驚き、飛び退くセシリアさん。

「看病するんじゃないの？今のはどう見ても襲ってたよ。」

「い、いえ、これは…せ…星夜さんが…。」

「俺のせいだよ…。」

どう見ても押し倒したセシリアさんと押し倒された俺の絵だったもんな。

「そうですね！星夜さんが動こうとするので私は止めただけですよ！」

顔を真っ赤にしながら弁明するセシリアさん。

小悪魔のような笑みの本音さん。

「いやいやあれはそれどころじゃ無かったと思うよ。」

「あの、本音さんはどうしたの？簪さんの部屋に居たんじゃないの？」

話がずれそうなので用件を確認しなければ。

「セツシーとあまのんが2人つきりでかんちゃんが気になって仕方がないみたいだから来てみたんだよ。」

「そしたら襲ってるって？これは事故だよ、本音さん。」

「ん〜。あまのんがそうゆるなら、今回は信じて上げよう。」

なんとか疑いを晴らして貰えたようだ。

「で、では星夜さん！私がお昼をもつて参りますので、そのままお待ちくださいね！」

そそくさと顔が赤いままのセシリアさんが部屋から出ていく。

「本音さん、簪さんの調子はどう？」

「かんちゃんは大丈夫だよ。ちよつと疲れてるだけ。」

「そうか、よかった。」

「楯無先輩はどうだろう？頭から血を流してたし。」

「お嬢様でしたら表面を少しも切った位です。あとも残りませんよ。」

ガチャリと音を立てながらドアを開けて入ってくる布仏先輩。

「そうですね。わざわざ知らせてくれてありがとうございます。布仏先輩。」

「いいえ、お嬢様も『星夜くんの様子に気がなる〜。』と言われてましたので。」

「あれって何だったんだろうね〜。」

あれ、とは黒い電童の事だろう。

「ああ、修理も兼ねてさつきGEARに電童を送ったからその中でチェックはするでしょ。」

「天野くんが知らなくてもGEARで開発した可能性は？」

「まあ、俺に教える義理は無いと言えど無いのであり得るのですが。電童開発メンバーの性格を考えると黙ってはいないですね。」

みんな子供みたいなのところがあるからなあ。

「じゃあ、他のGEARで作ったのかな？」

「データはGEARで共有しておりますよね？」

「はい、その可能性が一番高いと思います。完成した直後にも亡国機業にでも盗まれたんじゃないでしょうか？」

まあそんなところだろうな。

「そういえば、学園と市に対する報告は私たち生徒会で行いますので天野くんはG E A Rに報告をおねがいしますね。」

今回は市内のアーリーナだから市にも報告すんだな。あとは警察かな？

「えっ？いいんですか？」

「同じ内容の報告書を何個も渡してもお互いに無駄ですから。」

「わかりました。布仏先輩、ありがとうございます。」

「そういえば、私の事も名前で呼んでも構いませんよ。布仏だと2人居ますから。」

「先輩なのは1人だけですが。わかりました。虚先輩。」

「あまのんも生徒会に来る？」

「それを決めるのは生徒会長のお嬢様よ。」

「そういえば生徒会は3人なんでしたっけ。」

楯無先輩の一存でメンバーは決まるそうだ。

「星夜さん、お昼をお持ちしましたわ。」

セシリアさんが戻ってきた。

「ありがとう。セシリアさん。」

「いえいえ、星夜さんの為ならこの位はいくらでも。」

「では、私たちもどりますね。」

「かんちゃんにはセツシーが誘惑してたつて伝えておくね。」

「そんな誤情報流さないで!!」

「私が山嵐の標的にされますわ!」

「冗談だから大丈夫だよ。……(たぶん)」

なんか最後に不吉な事を呟いたような。

こうして部屋には再び俺とセシリアさんだけになった。

「星夜さん、折角ですので私が食べさせてあげましょうか？」

「大丈夫です。」

それに持ってきてくれたのサンドイッチだし……。

「セシリアさん……。」

「なんですかの？」

「これ…セシリアさんが作った？」

「違います。」

膨れっ面になって怒るセシリアさん。

「ごめん、気になってさ。」

あのインパクトがね凄すぎたんだよ。

ポカポカと叩かれたけど気にしない。

その後、すべての治療と検査が終わり、病院からGEAR本社に向かった。

今回も会議室にて井上さんが前に立つ。

「私たちも居ていいのかしら？」

「そうですね。GEARから見たら部外者ですが。」

先輩方の反応は当然だろう。

「私も本音もいつも居るし平気だよ。お姉ちゃん。」

「私とかんちゃんとセツシーは皆勤賞を目指すのだから。」

「たしかに、ユニコーン、ボアとおりましたね。」

ちなみにGEAR側は俺、アルテアさん、ベガさん、渋谷社長だ。

「今回はいくつか報告内容が有りますので、まずはドラゴンフレアからですね。」

部屋が暗くなりスクリーンにドラゴンフレアの映像が写る。

「ユニコーンドリルの『信頼』、ガトリングボアの『創造』では今回、ドラゴンフレアはどんな心に反応したのか…」

スクリーンの映像が替わる。

あく恥ずかし奴だ。すっげえ恥ずかしいやつだ。

『今さっき…この2人はやっとわかり合えたんだよ！お互いに大切な…愛おしい人だって！』

『そうよ！私は簪ちゃんを愛してる！そして簪ちゃんの愛を見届けたわー！』

『だから！守る！愛おしい物を全て！！』

これって最近思ってたんだけど公開処刑か何か？って位恥ずかしいです！

実は皆で俺の反応見て楽しんでませんか？

で、今回は何だったんだろうね。

井上さんを見る。

「今回、ドラゴンフレアが反応した感情…それは…『愛』ですね。」

スクリーンはデカデカと『愛』の一字が。

この文字綺麗だけどいつも誰が書いてんだろう。

……………は？

「えっ？」

「あい？」

「LOVE？」

「ゆ〜？」

俺、簪さん、セシリアさん、本音さんで答える。

本音さん違う、そうじゃない。

「はい、今回は星夜さんと更識楯無さんの慈しむ心にドラゴンフレアは反応しました。」

全員ポカンとする中で淡々と報告する井上さん。

「星夜くんが…お姉ちゃん…」

「星夜さんが…あの方に…？」

セシリアさんと簪さんがぶつぶつと何か言ってる。

「え、えくとデータウエポンは感情に反応するのよね？それで今回は私と星夜くんの感情に反応したってこと？」

軽く焦った感じの顔が赤い楯無先輩。

「そうね。うふふ…いいじゃない。『愛』って。」

ベガさんが面白そうに笑ってる。

「そ、それで、今回はどのような能力が付与されたのかね？」

「なにか特殊な光線を発射していたようだが。」

なんか今までにない空気の中で渋谷社長とアルテアさんは井上さんに問う。

「はい、ドラゴンフレアの特異能力…それはクラッシュレイ。プログ

ラム破壊です。」

映像は銅色のけん玉から放たれたパーツが落ちる瞬間だ。

「これはクラッシュシュレイにより通信プログラムが破壊され、制御が出来なくなっただけのために落ちていると思われます。」

「じゃあ、あいつの腕が垂れ下がったのも。」

「ISの補助システムのプログラムが破壊されて機能しなくなったのかと。」

そう言うことか。

「で、あの黒い電童は一体なんだったのかしら？GEARの皆さん？」

まだ顔を赤くしながらも本題に入る。たしかに今回はこれが一番知りたい。

渋谷社長が口を開く。

「この話を聞き、GEAR全社に問い合わせたよ。でも、どこも知らないと返してきた。」

「では？ISコアの数は？」

そうだ。ごまかしが効かないISコアの数を確認すればどこかのGEARから無くなったかわかるはずだ。

「うむ、それも調べたが一応揃ってる。…しかしGEARチャイナが怪しいね。」

「あそこだけ、報告が他の所にくらべ遅いのだ。それに証拠の映像も少し前のものだった。もしかしたら内通者が居るのかも知れない。」

中国か…GEARの中でも規模が大きい分入り込まれるって事か。

「この事はまだ調査中だ。申し訳ない。」

渋谷社長は頭を下げる。

「また、同時に居た銅色の無人機も同様だ。」

「今回は国家代表候補生、国家代表、男性操縦者のISコアを狙った襲撃と思われる。」

アルテアが言う。

「最近、亡国機業と思われる襲撃事件が多いのだ、その一環で狙われたと思われる。」

「まあ、個人が持つISコアの強奪の方が企業からより簡単でしょう

しね。」

まあ普通に考えてそうだろう。

「でも、無人機を作れるような技術力を持つところって…。」
簪さんは呟く。

「無いとおもうけどなく。」

本音さんも言う。

「あればすぐに発表して莫大な財産が稼げますね。」
と虚先輩。

「まあ、ここでこれ以上議論しても意味は無さそうなので、今回はここまでですね。」

スクリーンの映像が消え。部屋の明かりがつく。

「星夜くんもご苦労、IS学園までは前と同じようにへりで送ろう。」
「ありがとうございます。渋谷社長。」

お辞儀をする。

「では、準備ができたなら呼ぶから食堂でお茶でも飲んで待つてなさい。」

「はい、わかりました。」

そう言われて食堂へ。

全員分お茶をいれてテーブルへ。

「で…お姉ちゃん…。」

「星夜さん…。」

黒いオーラを纏ったような簪さんとセシリアさん。

「説明…してくれる…?。」

「えつと…:…な、何を…:…かな?。」

余りのオーラに汗を流しながら答える。

「そ、そうよ…:…なにを聞きたいのかしら?。」

楯無先輩も焦っているようだ。

「お嬢様、天野くん、わかってますよね?。」

虚先輩は直接オーラをぶつけられていないからか余裕だ。

「ドラランの事じゃ無いの?。」

本音さん…。

「そうですね！」

「お姉ちゃんと星夜くんが共鳴した感情が『愛』ってどう言うこと!?!」
セシリアさんも簪さんも今までにない気迫です。

「私だってさつき、知ったのよ!?!データウエポンの秘密!」

楯無先輩も気迫に押されてる。

「それに、きつと『愛』って言っても色々あるだろ!?!家族愛とか!?!」
とにかくこの2人を説得しないと!

ここでブルーティアーズと打鉄式で暴れられるとやばい!

「星夜とお姉ちゃん…?」

「家族愛…?」

危険度が上がった。

2人の目からハイライトが消えてる。

「ほっほら!私と簪ちゃんの姉妹愛に反応したのよきつと!」

楯無先輩も必死だ。

「でも、データウエポンは星夜と共鳴しないとダメなんだよ?」

「一体星夜さんはなにを愛していたのでしょうか!?!」

「ほら、俺のはきつと慈愛とか博愛とか!そんな感じ!みんなの楽しい日々を愛してるのか!」

なんとか2人のオーラが収まってきた。

「そう?…ほんとに?」

「そうです?」

「ええ、そうよ。簪ちゃん、セシリアちゃん、落ち着いて、それに私より簪ちゃんの方が付き合いは長いでしょ?」

「星夜くんが私の事を愛してるなんてそんな嬉しいこと…。」

あつ…

「お姉ちゃん?今、なんて…」

「嬉しいと…おっしやられましたわね…」

「お二人とも落ち着いてください。」

やつと虚先輩の援護か。

「仮にお嬢様と星夜さんがお互いに愛してるのであればお嬢様はこんなに落ち着いていられませんか。」

「だっちゃんさんは照れ屋さんだから。」

布仏姉妹の言葉はどっちの援護なのかいまいちわかんない。

「……………」

「……………」

2人は黙ってこちらを見る。

「だから、ドラゴンフレアが反応したのは慈愛とか博愛って意味だと思っよ。それをまとめて『愛』って言ったんだよ井上さんは……………」

「なら……………いいけど。」

「まあ……………今回は信じましょう。」

よかった。落ち着いた。

そのあとはお茶を飲みながらヘリの準備が整うのを待った。

第22話 《GEARチャイナの謎》

黒い電童に襲われてから数日後の木曜日。

俺―天野星夜―は空港に居た。

本来なら学校での授業があるのだが今日は許可をとつての休みだ。まあその分の補講は受けなければならぬのだが。

『まあ、お前達の成績なら1、2日程度遅れたところで変わりはない。』と織斑先生に言われた。

優秀って意味なのか手遅れって意味なのか…。

「はあ、なんであたしまで…。」

横で鈴さんが大きいため息を吐く。

「一夏との2人つきり旅行じゃなくてごめんね。」

「なつなにバカな事言ってるのよあんたは!?!」

なぜこんな組み合わせかと言うと

『GEARチャイナの件なのだが。困った事になってね。』

「困った事?」

『中国政府が介入してきてね。』

「なぜ?中国政府が?」

『我が国の企業に不当要求を行っているとね。』

「まあ、GEARグループって地場資本みたいなものですしね。」

『ああ、だから日本の企業が偉そうにするなってね。』

「一応こつちが上でしょくに。」

『情報を要求するなら対価を払えと言ってきてね。』

「そうですか、で?なんでそれが俺の所に来るんですか?」

『彼らの要求がね。』

「男性操縦者のデータですか?」

『そう、しかも本人が来いと言っていてね。』

「料理されて食べられそうですね。」

『本来ならそこは笑えるジョークなんだがね。』

「だからと言って調べないわけにも行かないですし。」

『だから変わりにガードをつけると言ったんだよ。』

「中国側が出すとか言ったんでしょ？」

『ああ、だから最大の譲歩として—』

中国の代表候補生、鳳鈴音を指名したと。

「いきなり本国から連絡があったと思つたら『男性操縦者を本国にいれるから好き勝手させないように見張れ!』つてこつちが勝手すぎでしょ—」

「ほんとにごめん、今度奢るから…。」

ちなみに鈴さんにはこちらの事情（黒い電童等）は話した。

「まあ、国のやつらが後ろめたい事してるんならあたしがブツ飛ばすけどね!」

腕を組み、宣言する。

「もしその時が来たら手伝いますよ。」

「でも、なんで同じGEARなのに言うこと聞かないのよ？」

「分かりやすく言うと全てのGEARはその国の企業として動くのでそれぞれ独立してるんですよ。ただ、同じ看板持って、情報を共有してるだけって感じですね。」

基本的に仲はいいんだけどね。

「で、電童の偽物作ってるかも知れないって？」

「それ、余り大きな声では言わないでくださいね。」

「わかってるわよ。それよりも、今日の流れてどんな感じよ?いきなりだったから予定がわからないのよ。」

「まず、中国政府の指定した施設に行って電童の稼働データを提出します。候補生管理官って方が来るそうなのでその人に渡します。そのあとGEARチャイナに行って視察です。」

「まさか、楊管理官…。」

なんか鈴さんが暗くなる。

「まさか…苦手なんですか？」

「うん…ちよつとね。」

「あはは…。まあデータを渡すだけですから話すことは無いと思いま

すよっ。」

「いや、絶対になんか小言を2つか3つは言ってくるわ。」

そんなに厳しいのか？

「てか、なんで今日なの？別に土曜とかでも良くない？」

「日付も向こうの指定でして。」

「ああ…そうなの…はあ。」

「まあ、さっさと行って帰るだけの日帰りです。鈴さんにはご迷惑お掛けしますね。」

「ええ、帰ったら1食奢りなさいよ！」

「デザートも付けますよ。」

2人で受付を済まして搭乗ゲートへ。

「てか、あんたと2人になるのって珍しくない？」

「えーと、確かに2人で何かをするのは初めてですね。」

だって鈴さん大抵一夏と居ますし。

「帰ってセシリアとかに撃たれないわよね？」

「2人で任務って言えば大丈夫ですよ。」

「まあ、やましいことする訳じゃないしね。あんたならその辺は大丈夫か。」

飛行機に乗る。

ちなみに貸し切りとかではなく普通の航空線だ。

俺達2人ってどうみられてるのだろう？

「あんたはどう思ってるのよ？」

「GEARチャイナの事ですか？」

「違うわよ。」

呆れた顔をしながら続ける。

「セシリアとかの事よ、あんたはちゃんと気づいてるんでしょ？」

ああ、そっちね。

「大切な人たちですよ。」

「その言い方は卑怯じゃない？」

「わかってはいますよ、自分がどう思われているか。」

「で、誰なのよ？セシリア？簪？まさか本音？」

おもちゃを見つけた子供みたいだな。

「今、そんな余裕は自分も一夏も無いですよ。」

「……そう?」

「だから、大切な人たちです。手の届く範囲は守りますよ。」

「まあ、いいわ。あんたははしつかりと答えを出しそうだし。」

「一夏ほど鈍感ならこう悩まなくていいんじゃないかな。」

「あれはそれ以前に何も考えてないじゃない。」

なかなか酷い評価だな。

「そういえば、ドラゴンフレアだっけ? あいつはなんだったの?」

『慈愛』だそうです。優しい心とかそんな感じの。」

「へへ。あとさ、ゲータワーエポソって私とかでも使えるの?」

「ええ使えますよ。ただ燃費が余り良くないですが。」

「ああ、電童用に調整してあるからって事ね。」

「そんな感じですよ。使ってみたいんですか?」

「ほら、ファイヤーウォールとかクロックマネージャーって使えるのかな? ってね。」

「今度使ってみます?」

「帰ったら貸してよ。一夏をギツタンギツタンにするから。」

「あはは。」

そんな会話をしてる内に着いた。

中国の空港に降り、ゲートを通ると眼鏡を掛けたスーツ姿の女性がたっていた。

「はじめまして、天野星夜です。楊候補生管理官でよろしいでしょうか?」

「はい、この度の訪問で担当をさせていただく楊麗々です。」

「お久し振りで、楊候補生管理官。」

俺と鈴さんで挨拶をする。

なんと言うか神経質な感じの人だな。言葉を一つ間違えるだけで怒りそうだ。

「では、時間もありませんのでこちらへお願いします。」

案内された先には車が止めてあり。乗り込むよう、指示された。

「本日は中国の国営IS施設にデータを渡していただきます。」

「そのあと、GEARチャイナに行かせて頂けると?」

車の中で話をする。

「いいえ、それより先は私は聞いて降りません。先方の担当にお聞きください。」

「わかりました。ありがとうございます。」

鈴さんはずっと黙っている。

「凰鈴音代表候補生、あちらでは問題を起こさないようお願い致しますよ。」

「こつちで起こしてたのか…。」

「わかっています、楊候補生管理官…。」

「IS学園では、凰代表候補生には日々指導や模擬戦闘をしていただき、非常に感謝しています。」

「男性操縦者との戦闘データ…それは貴重ですね、今後とも頼みますよ、凰代表候補生。」

フォローになったのかな?

車が止まり、研究施設のような場所に着く。

「ここです。降りてください。」

「わかりました。」

「車は狭くてやなのよね。」

鈴さんが軽く背伸びをしながら言う。

「まあ、気持ちはわかりますけど。」

「では、正面の施設です、お入り下さい。私はこれから別の仕事がありますので、失礼します。」

「ありがとうございます。」

楊管理官に挨拶し施設に入る。

「ふーんこんなところあったんだ。」

「鈴さんは初めて?」

「だって訓練とかならアリーナとかだしね。」

それもそうか。

「ああ、お前が男性操縦者か…さあ、ISを貰おう。」

「研究員らしき人物が近寄ってくる。」

「本日はデータを渡すために来ました、電童を渡す必要は無いですね。」

「そちらが用意したデータでは改竄されている可能性がある。よって直接調べさせていただくよ。」

不敵な笑みを浮かべる。

「機体を調査するのは今回の話にはありませんね。」

怪しすぎる…鈴さんも目付きが替わる、

「なに？約束すら守れないの祖国の連中は？」

「小娘が…うるさいぞ、お前も外に出ろ！」

「あたしが命令される筋合いは無いわね。力も無い癖に威張り散らしてるやつって嫌いなもの。」

男は不機嫌そうに。

「仕方ない、少々痛い目にあってもらうしかないな。」

「なあ鈴さん、今のつて、」

「完全に悪者の台詞ね。やられるだけの。」

そんな会話をしながらも背中合わせになり警戒する。周りを複数の男に囲まれた。

「その機体を解析すれば男の使えるISを作れる！そうすればバカな女共に逆襲出来るんだ！」

今回は亡国機業は関係なし…かな？

「この事…楊管理官は……。」

「知らないでしようね……。あの人は色々と堅いから。」

取り敢えず蹴散らすしかないか。

男共が飛び込んでくる。

2人でISを展開する…ハズだったが反応がない。

取り敢えず敵は素人なので軽く避けて包囲から鈴さんと一緒に抜ける。

「なっ…なんで甲龍が…反応しないの？」

「電童…データウエポン共に反応なし…？」

お互いに愛機に目をやる。ジャミング？

「所詮はガキよ、ISが使えなければすぐに捕まるわ！」

後ろのドアは当然ロツク済か…。

「はあー！」

「てやあー！」

とはいえ俺と鈴さんなら苦戦する要素もないのでそのまま迎撃する。

「これ、セシリアとかだったら大変だったんじゃないの？」

「鈴さんだと安心して任せられますね。でも、無理は駄目ですよ？何かあれば一夏に顔向けできなくなります。」

「なんでここで一夏が出てくるのよ。」

まだ軽口を叩く余裕はある。

なんでISが展開できない？

ハッキングを受けたりはしてないようだが。

「さすがだぜ！ISが展開出来なくなるって言ってたが本当みたいだな！あれはー！」

「でも、予定だと一人のはずだったのにどうしましょうか？」

「女も構わんやっちまえ！IS奪ったら好きにしていぞ！」

「いくらなんでも幼女はなあ。」

なんか向こうが言ってるな。

「誰が幼女よ！確かに胸は小さいけどさ！」

「鈴さんは素敵な女性だよ？一夏が気づいてないだけで。」

「あんたもさらっとなに言ってるのよ!!」

取り敢えずあいつらはなんかしらの技術的協力を受けて俺を襲ってる。

これはGEARチャイナは黒か……。

「ともかく、このままだとヤバイわね。」

「上手く逃げないとね。」

「逃がすかよ！野郎共！」

あくまで生身の人間相手なので日頃鍛えてる俺や鈴さんではまず、捕まらない。

10人位の男性が集まってもほんとに素人なので迎撃は楽だ。

「このままだと増援が来そうですが。」

「そこね、こいつらだけとは思えないわ!」

政府がどこまで噛んでるか知らないけどさ。

とにかく逃げつつ、窓とか探すけど録にないな!

「機密とかの関係で無いんじゃないの!?!」

「ありえる!」

データウエポンたちは実体化が出来ないみたいだけど。ほかはなんとかなるね。

「みんな、施設のコントロールハック、よろしくね。」

「最速で頼むわよ!」

入った部屋にあった端末からケーブルを繋げデータウエポン達を送り込む。ジャミング下だろうが施設を乗つとれば問題ないはず。

その間に鈴さんはドアにロックをかける。

「どうするのよ?」

「まさかGEARチャイナにすらたどり着かずに襲撃とは。」

ドアを叩く音が響く。

「ほんとにごめんね、鈴さん。」

「なんで星夜が謝るのよ。どう見ても今回はそそのかされたあいつらが悪いわ。」

ケーブルを繋げた電童に情報が出る。

「この施設にはジャミングに使えそうな物は無いですね。」

「後付けの物ってこと?」

「なので、ジャミングは無効化はできません。取り敢えずドアのロックは全部外せるようにしたから外に出るだけですな。」

「この状況で?」

「廊下でスプリンクラーを作動させます。多少の隙はできるはずですよ。」

「その間に2人で強行突破?」

「はい。」

「ま、他に手はないからいいわよ!」

作戦会議は終わる。

「3…2…1…それ！」

ドアの鍵を開け、同時にスプリングラーを作動させる。

「うわあ！」

「なんだ！」

「くらえっ！」

「邪魔よ！」

ドアを開けつつ、先頭のやつらに殴りかかる。

吹き飛ばした後は一目散に来た道を進む。

「あー！もー！びしょびしょじゃない！」

「すみません！これしか無いので！」

「わかってるわよ！」

スプリングラーは作動したままのため、全身ずぶ濡れだ。

濡れた何かを踏み、バランスを崩す鈴さん。

「痛っ！」

「鈴さん！大丈夫!？」

「大丈夫よ！足を止めない！」

開いた施設の入り口の前には先回りをしていたのか数名いた。

「ふん、濡れても大した色気はでないみたいだなそのガキは。」

水のせいで服が体にびったり付いてるからな、ラインが出てる。

「あんたらみたいなのやつらに見られたくもないけど。」

「はっ！まさかここまでやるとは思わなかったよ！」

リーダー格の男は言う。

「よく見たらあんた、先日GEARで情報の漏洩をしたからクビになつたやつじゃないか。」

さつきはよく見えなかったけど。

「へエーじゃあ、こいつが今回の？」

「さあね。目的は相変わらずわからないし。」

「じゃあこの施設って…。」

「ああ、『やつら』が用意したダミー施設さ、政府にも顔が利くらしいからな。てめえを調べるために用意したのさ。」

男は自慢げに言う。

「『やつら』?」

「そんなに知りたきやおとなしく捕まる事だな!」

「お断りよ!」

2人で正面に向かい蹴りをいれてそのまま外へ出る。

「よし!外に出れた!」

「まだジャミング圏内だけどね!」

まあ、外に出ればこちらのものだ。

走って逃げても余裕だろう。

「じゃあ、星夜はすぐに町に向かって走って!」

「鈴さんは!」

「さっきこけた時にちよつとね。挫いたみたい。やっぱり誤魔化せそうにないから。」

施設から男たちがおつてきた。

「ちい、ちよこまかと逃げやがって!」

「女の方も覚悟しろ!たつぷりと遊んでやるからな!」

「つ!鈴さん!」

殺気を感じたので鈴さんを抱えて跳ぶ。

「きやつ!」

俺達の居た所にビームが飛んできて爆発を起こす。

「うわあつ!」

「ぎゃー!」

爆発で吹き飛ぶ男たち。

あいつらも予想外なのか!

ビームの飛んできた方を見ると金色の巨躯の機体がこちらを見ていた。

「なっ!ISだと!?!聞いてないぞ!」

男は叫ぶ。

「もしかして、あいつがジャミングの原因か?」

「その可能性はあるわね。…で星夜、はやく下ろしなさいよ。」

鈴さんを抱えたままだったので下ろす。ちなみにお姫様抱っこってやつだ。

「どうするのよ？・星夜。」

「どうするもこうするも。あいつをどうにかしないと駄目なんだろう？」

「よしー何者か知らねえがこいつらをやっちまえー！」

男は金色の巨体をみて叫ぶ。

そのまま金色の巨体が口を開けると再びビームが飛んでくる。

俺と鈴さんは避ける。

だが周りの男たちが被害を受ける……！

「こいつ、見境なしか!?野郎共！逃げるぞ！」

男たちは逃げようとして走るがそこに先回りして金色の巨体が立ちはだかる。

「えっ?」

「ぎゃあああー！」

金色の巨体は右腕を降り下ろした。

ISで人を殴ればそれは……。

そこには物を言わなくなった男たち『だったもの』が転がっている。

「な……なんなのよ……こいつ……。」

「一時的な協力者だったから口封じのためにつてか？」

とにかく、次はこっちが不味い。

金色の巨体はこちらをみる。

「俺が目的ならー！」

「星夜!？」

俺は鈴さんから離れるように走る。

金色の巨体はこちらを追ってきた。

よし、鈴さんから離れば、そのうち通信が可能になるはず！

金色の巨体は俺の前にたちはだかる。

「ISの速度なら当然か。」

ギリギリだが金色の拳を避ける。

っち、責めて電童かDWが使えれば！

「がっ!!」

何回か避けてはいたがやはり、人間の限界か捕まってしまう。

大きく口を開け、エネルギーを貯める。

鈴さん…大丈夫だろうか…。

「うらあぁー！」

金色の巨体に横から振動が入る。

衝撃で体制を崩したと同時に俺を手放す。

「げほっ！助かった！」

「その台詞まだ早いんじゃない？」

そこには甲龍を纏った鈴さんがいた。

「あれ、効果範囲が狭いみたいね。私があいつを押し込むからその隙に電童つけてはやく来なさい！」

言い終わるよりもはやく踏み込んだ鈴さんは金色の巨体をフルパワーで押し込む。

200mほど離れるとまだ通信は出来ないようだが展開することは出来た。

俺も鈴さんも怪我をしてるがそんなことは言ってもらえない。

目の前の驚異を排除しないと！

第23話《白の咆哮》

中国のとある研究施設

俺―天野星夜―と鈴さんは襲われていた。

本当なら中国政府が指定する研究所にて電童の稼動データを渡して、その後GEARチャイナに行く予定だったのだが。

ダミーの研究所だったらしく、その研究員たちに襲われるがなんとか脱出。

そこに金色の巨体を持った機体が現れたのだ。

「ちいつ！見た目通り堅いわね！」

「パワーもありますしね！」

取り敢えずちいつの武装は口からビームを吐くのと腕の有線式のロケットパンチか。

後は機体の展開が出来ない特殊なジャミングか。

通常のISの1.5倍はあるであろう巨体は防御力も高く、パワーもすごい。

2人で攻めてはいるがなかなか有効打が放てない。

「このまま粘ったら現地の警察とか来ないかな？」

「結構離れてるから難しいでしょ。敵の増援なら来るかもね。」

もともとそれなりの施設をだったのだろう。

町からは離れた山中にあるので救援は望み薄だ。

「こいつ、あのとときの奴の仲間かしら？」

クラス対抗戦の事を言っているのだろうか。

「その可能性は高いですね！あと、黒い電童！」

「やっぱりウチの国かあ!?嫌になるわね本当！」

敵は足を地に付けているのでやり易いかな？

「旋風回転脚！」

「双天月下斬！」

下段の回し蹴りと鈴さん上段からの切りつけ。

「技名あったんだ。」

「ちよつとあんたの見て言ってみただけよ。」

次は合体攻撃かな？

しかし、ダメージはやっぱり薄い。

あいつの装甲、なにでできてるんだ？

ジャミング用のエネルギーだってただではないだろうに。

「鈴さん、あのー」

「離脱して通信して来いなら却下ね。」

読まれてる。

「じゃあ打開策は？」

「倒す。」

分かりやすい。

「敵の装甲を破れる武装が使えないけど。」

「ぶち破るまで殴る。」

金色の巨体が近づく。

エネルギー節約のためか、口のビームの使用頻度は少ない。

こうなったら間接とか狙って攻撃するしかないか。

「旋風回転拳！」

「飛翔破碎弾！」

あつ衝撃砲に名前つけた。

脚の間接を狙って攻撃するがやはり敵もわかっているのか腕で防がれる。

挟み込むように移動して後ろから衝撃砲を放った鈴さん。

反応を見る限り効果はないようだな。

純粹なパワーでも向こうが上なのであまり近くにいとそれはそれでやばい。

取っ組み合いになってもこちらが押されるだけだ。

「うおおおおおー！」

拳を握りしめひたすらに殴る。

こうなりやダメージを蓄積させて破るしかない！

右足を集中して狙う。

しかし相手も動かない訳は無いので反撃の拳を避けるため一旦離脱して距離を取る。

「右足狙い?」

「どつか1ヶ所に集中して蓄積するしかないかと思ってね。」

「まあいいと思うわ。こつちで気を反らすから頑張りなさい。」

ちつ、ボアが使えれば火力で押しきれるんだけどね。

取り敢えず今は前に俺、後ろに鈴さんの形が安定しているな。

再度踏み込み右足を狙う。

金色の巨体が防御のために両手を使い防ぐ。

「なっ!?!」

鈴さんの声が聞こえる。

「なにかあった!?!」

「こいつ、背中にミサイルまで!!」

「なにつ!?!」

小型のミサイルが背中から発射される。

誘導性とかはそんなによくはないな。

腕のドライブユニットにエネルギーを軽く貯め盾の代わりにして防ぐ。

鈴さんも衝撃砲の連射と双天牙月を振り回し防ぎきる。

「まったく!タフなやつね!」

「こつち言うときは零落白夜がうらやましいと思うね!」

あれなら一撃だろうに。

「無い物ねだりしても仕方ないわね。」

「でも、このままだとじり貧ですね。」

一気に決めるか。

四肢のドライブを回転させエネルギーを貯める。

「閃光!雷刃撃!!」

ありつたけのエネルギーの刃を腕にまとい相手の右足に叩きつける。

「こつちもくらえっ!」

鈴さんも背中から再びミサイルが撃たれないように衝撃砲を連射する。

右足にあたり、装甲の一部が剥がれる。

「よしーこれでー!」

その瞬間、金色の巨体に殴られる。
肉を切らせて骨を断つつもりだったのか。
全力で殴られ、吹き飛ぶ。

2回くらい地面をバウンドした。

「ぐふう!」

「星夜!」

鈴さんがこちらに気を取られた所を狙い、金色の巨体は瞬時加速を
使った体当たりを鈴さんにかます。

「かはっ!!」

肺の中の空気が全部出されたような感じだ。

苦しい。

体当たりを食らい吹き飛んだ鈴さんを金色の巨体は腕を伸ばして
つかみそのままこちらに叩きつけてきた。

地面と甲龍に挟まれる。

「ごめんね、星夜、大丈夫?」

「鈴さんは軽いから大丈夫ですよ。」

2人共立ち上がる。まだ平気だ。

そこにミサイルの大軍が叩き込まれる。

「ちい!!」

「はあ!!」

2人でミサイルを迎撃する。

ミサイルを迎撃している隙に金色の巨体からビームが今までに無
い威力で放たれる。

直撃こそ無かったが2人とも吹き飛ばされる。

「そろそろ本気でヤバイですね。」

「逃げるつもりは無いわよ?」

「まだ、そんなこと言って:。」

「ここであんた置いて逃げたらそれこそあとが怖いし。2人くらい。」

「下手すると簪さんのお姉さんも付きますよ。」

「なら、なおの事逃げられないじゃない。」

「でも、無策なら無謀ですよ。」

「星夜が居るじゃない。」

「へ?」

間抜けな感じで返してしまった。

「星夜が居るから平気でしょ?」

「まあ、今までにたような事態は何回かありましたけど…。」

「だから、今回も勝利への道を『創造』するって『信頼』してるのよ。」

「そうですね、鈴さんを『愛』する人の元まで帰さないかね。」

「だから、それはやめなさい。」

鈴さん、顔が赤いよ。

先程からこんな会話をしながら回避等続けている。

「さて、火力も装甲も、」

「あつちが上だからって、」

「負ける理由にはならない!」

「仲間が居るから!」

「巨大な敵にも!」

「『勇氣』を持って挑めるんだ!!」

その瞬間、白い光が溢れ出す。

獅子の咆哮が辺りを揺らす。

これは…。

「解る…!?!」

「あたしにも…!?!」

目の前に居る敵…周りの環境…仲間…

ISにはハイパーセンサーはあるがその比ではない。

いや、ハイパーセンサーは基本的に外的な情報だけだし、スキャン機能も時間や距離の制約で戦闘中は使う余裕なんか無い。

しかし、今、俺と鈴さんは確実に敵の全てを見ていた。

機体の構造、各種エネルギー残量…。

「ジャミングユニットは…そこにあるのね!!」

鈴さんの衝撃砲が背中中の装甲を抉る。

今までと違い装甲と装甲の間に叩き込まれた衝撃砲は小さいが確

実なダメージを与えた。

その隙に懐に飛び込んだ俺は背負い投げの要領で巨体を投げ飛ばした。

ジャミングが無くなり目の前に現れたのは…。

獅子の姿…。

「お前が教えてくれたんだろ？レオ！」

「ありがとね！レオ！」

レオサークルが吼える！

それに合わせて俺も手をかざす。

「ファイルセーブ!!レオサークル!!」

レオサークルは白い光になり電童の胸部に格納される。

「レオドライブ!!インストール!!」

右足にレオサークルが装着される。サークルカッター型の装備だ。

鈴さんと一緒に投げ飛ばした金色の巨体を見る。

やつは口にエネルギーを貯めている。

残念だがお前の敗けだ！

「鈴！行くぞ!!」

「ええー！全力で叩き込む!!」

四肢のドライブユニットは全力で稼動し、エネルギーをレオサークルに送る。

甲龍も両肩にあるユニットにエネルギーを貯めているのが解る。

「レオサークル！」

「シエンロン！」

「ファイナル！アタック!!」

左脚を軸に右足を大きく振る。

レオサークルから光輪が放たれる。

甲龍から放たれた見えない極大の弾丸は相手の胸部を大きく凹ませる。

そこに光輪が回転しながら飛び込む。

まずは両腕を切り落とし、そのまま胸部へ。

ガリガリと音をたてることも無く凹んだ装甲を斬る。

相手の口に貯まっていたエネルギーが爆発する。

「これで…武装は潰したはず。」

「ええ、自爆以外はね。」

警戒を解くこと無く爆心地を見る。

「ちっ!?」

「丈夫なやつね!!」

両腕と前面装甲を失ってはいるがまだ金色の巨体はたっていた。

不味いな、ファイナルアタックでエネルギーはほぼ無い。

「星夜!上よ!」

「なっ!!」

上からの襲撃を避けるため後ろに跳ぶ俺と鈴さん。

そこには黒い電童が立っていた。

「ここどこいつかよ!!」

「絵に描いたようなピンチね!」

2人で構えるが黒い電童は構わず金色の巨体のコア?みたいなユニットを引く抜くと飛びさって行った。

残った部品はご丁寧に爆発し、目眩ましと証拠隠滅の役割を果たしていた。

正直、助かった。あのまま黒い電童が襲ってきていたら2人共やられていた。

センサー類の反応が無くなったのでISを解除する。

「よかった。」

「流石にへとへとよ…。休みたい。」

「鈴さん、ジャミングは無くなったので信頼できる人に連絡を…。」

GEARチャイナは正直今は怪しい。

一応信頼できる方はいるけどその人に連絡がとれるとも限らないし。

「そうね。楊管理官なら—」

「こちらはGEAR本社に連絡をしておきます。」

それぞれ連絡をする。

「はあ、疲れたわ。」

「休める場所も無いですからね。」

お互いボロボロではあるが平気そうだな。

「取り敢えずあのベンチに…。」

「そうね、地面に座る訳にも行かないし。」

近くに残ってた休憩所みたいなベンチを指差す。

「痛っ！」

「あっそうか、鈴さん脚を。」

さつき捻ってたね。ISをつけてたから忘れてたか。

そう思い鈴さんの前に行く。

「ちよつと失礼します。」

「ひゃっ！ちよつと星夜!?!」

ベンチまで鈴さんを運び座らせる。

「別に平気だったのに。」

「鈴さんは強いですけど女の子ですから、大切に扱いませんと。」

「あんたも結構ジゴロ？」

「うーん、狙ってるつもりは無いですけどね。」

「気を付けたほうがいいんじゃない？」

「そうします。」

刺されたくないし。

「取り敢えずG E A R 本社はこれから中国政府とG E A R チヤイナに
対してこの事を連絡するそうですが…。」

「きつと無駄よね…。楊管理官はすぐに来るみたい。救急車と一緒に。」

「じゃあ、このまま待ちましょう。」

「ええ、そうね。」

電童からエイリアス体のデータウエポン達が出てきて周りに散ら
ばる。見張りをしてくれるみたいだ。

「あいつらつって結構働き者よね〜。」

「そうですね。その代わり普段は好きにしていますし。」

主にネットの海とか生徒寮とか。

「ねえ、レオサークルってさ…。」

「ええ、今覚醒しました…。」

「あたしと、星夜で？」

「はい、鈴さんとの『絆』で。」

「なんか…恥ずかしいわね。」

顔を赤らめながら言う鈴さん。

「鈴さんのお陰で助かりました。ありがとうございます。」

「星夜ってなんか壁があるわよね。」

「そうですか？」

「さつきは『鈴！』って呼んだのにさん付けに戻ってるし。」

俺の声真似をする鈴さん。たまに勢いで呼んじやうんだよな。

「そう言われても癖みたくないなものですし。」

「いい？これからは『鈴』よ、わかった？」

人差し指を立てこちらに突きだす。

「さん付けは…？」

「駄目♪」

にこやかに宣言された。

「セツセシリアさんだってさん付けだし…。」

「あんたはセシリアじゃないでしょ？」

「これは…逆らえないな。」

「わかったよ…『鈴』。」

「うん♪よろしい♪」

なんかいい笑顔。

「でも、その笑顔は一夏にしようね。」

「う…わかってるわよ。」

一夏には弱いね。

「はあ…迎えとかはまだかな？」

「元々はちゃんとした施設だったみたいだし。道路とかはしつかりしてたけどね。」

「こんな山中だと時間がかかるか。」

「このあとどれだけ拘束されるんだろう。」

「このあとも大変だよね…きつと。」

「それ…言わないでよ…考えないようにしてたのに。」

頭を抱える鈴、こうして見ていると楽しいな。

怒られるから言わないけどね。

その後しばらくして、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

楊管理官が呼んだらしく、すぐに近くの病院までいき治療と事情聴

取を受けることになった。

これ、何時帰れるのだろう…。

第24話 《レオのおつかい》

中国にてトラブルに見舞われた俺―天野星夜―と鈴だったが、レオサークルが覚醒したおかげもあり、なんとか敵は退けた。

その後、近くの病院で治療を受けた。

鈴の脚も特に問題は無いようでよかった。

その後の事情聴取も特に問題なく進んだ。

理由としては俺の報告を受けた渋谷社長が文字通りすつ飛んで来たお陰で文句を言われずにすんだ。

あとは鈴も中国側の奴等に

『星夜になにか言うなら私が一発殴ったあとにね!』

とか言つて脅してた。

本当に使りになる人だよ。

俺が一夏なら今のところの評価で鈴<箒さんだな。

あつてもあいつの場合は基準が織斑先生か…。

頑張れ鈴、応援してる。

で、GEAR本社と中国側で色々あったらしい。

結果的に教えて貰えたことは――

あの黒い電童はやはりGEARチャイナにて秘密裏につくられた機体。

GEARチャイナ社長は完成したことを知らなかった。(作製は指示していた。)

俺達の襲撃時にGEARチャイナも襲撃され、製作時のデータなどをごっそり持っていかれた。(予備パーツ等も含む)

作成に関わったスタッフは全員その襲撃前後から行方不明。(一部は襲撃時に殺害された)

データウエポンは再現出来なかったが機体スペックは再現。

コアはGEARチャイナで使っていた研究用の物を使用。

GEARチャイナ社長が政府関係者に賄賂を渡し、今回の事を仕組んだ模様(襲撃場所の提供など)。

ただ、他に協力者が居たようだ(金色の巨体の組織)。

つまり、GEARチャイナには機体開発時から開発チームを外部組織に乗っ取られていた可能性がある。

「で、そのチャイナの社長ってのは？」

「残念ながら雲隠れしましたよ。」

俺と鈴は渋谷社長が乗ってきた専用飛行機と一緒に帰ってきた。

夜も遅いのでそのままGEAR本社にお世話になっている。

学園への報告もおわっている。

こんな対応をうまくはなりたくなかったな。

「じゃあ今、GEARチャイナって…。」

「色々ガタガタだよ。」

「勝手に電童作って奪われて…。しかもそれを調べられたくないから星夜を襲ったって事でしょ？」

「チャイナ社長も裏の組織と繋がっていて狂言襲撃だったかも知れませんが。」

「はあ、その裏の組織ってのが鍵よね。」

「まあ、そうだと思います。」

夕食を食べながら話す。

「あつ、名前はわかったの？」

「開発時の名前が『凰牙』ですね。」

報告書のコピーを見ながら答える。

「おうが…オーガとかけてるのかしら？」

「さあ？可能性はありますね。強そうですね。」

「電童って名前の由来は？星夜は知ってるの？」

「ん？知らないですね。電子格納兵装を使う者とかそんな感じですかね。」

「まあそんな感じはするわね。」

名前と言つと。

「しかし、まさか鈴が技名つけるとは思わなかったよ。」

「だってあれ、決まると気持ち良さそうだったから。」

「まあ気を込める意味でもありますし。」

「ねえ、今度さ、合体攻撃とかやってみない!？」

目を輝かせて鈴は語る。

「合体攻撃？一夏に決めるの？」

「いいわね！私がレオ付けて、星夜がボアを付けて『ダブルファイナルアタック！』とかー！」

「えーとクロックマネージャー前提？」

「もちろん。」

「まあクロックマネージャーで止めた際に他の人がでかいの撃ち込むのはいいですけど。」

クロックマネージャーは燃費がスツゴい悪いから…。

「じゃあ今度練習しましょう！」

「まあ、月末のトーナメントは個人戦ですが。」

鈴が止まる。

「ねえ、トーナメントでクロックマネージャーって使う気？」

「さあ、ルール次第では？」

「そ、そう。」

何回か個人の模擬戦にてクロックマネージャーからのファイナルアタックを使用したのが現状勝ちが確定する。

基点のクロックマネージャーが当たればだが。

「星夜がボア付けた時点でプレッシャーがヤバイのよ。」

「まあ、それだけの物ですからね。」

「えっと今あんたが出来るのは、」

「ユニコーンのファイヤーウォール、ボアのクロックマネージャー、ドラゴンのクラッシュレイ、レオの解析能力ですね。」

「レオのあれは私にも効果あったのよね。」

「レオがデータ送ったんじゃないですか？」

「なるほど。そうなの？レオ？」

机の上のレオに話しかける鈴。

レオは首を縦に振ってる。

「よしよし、あんたはいいやつね。」

レオを撫でる鈴。気に入ったのか？

「鈴はレオが気に入ったの？」

「ん〜自分が覚醒に関わったと思うと愛着みたいのがわいてね。」
「ああ、何となくわかりますけど。」

明日は金曜だから早めに出て学校に戻らないと…。
朝はここからまたヘリかな。朝早いと電車無いし。

翌日朝のHRには間に合った。

「あつ〜星夜！また事件に巻き込まれたって大丈夫か？」

一夏が教室入るなり聞いてきた。

他の人もよってくる。

「俺も鈴も大丈夫だよ。」

「ああ、そうかくよかった…あれ？」

一夏が不思議そうな顔をしてこつちを見る。

「どうしたの？一夏？星夜になんかついてるの？」

シャルルが聞く。

「もしかして星夜って鈴と仲良かったのか？」

「どうして？」

「星夜って人を呼ぶときはさんを付けるだろ？なのに今『鈴』って呼んだぜ？」

「確かに僕と一夏以外はさん付けだったよね。」

ちつ何でそこに気づくのには気がつかないんだ。

「星夜…もしかして…」

一夏が真面目な顔でしゃべる。…嫌な予感がする。

「鈴と交際とかしてるのか？」

一瞬で場の空気は絶対零度に至っただろう。

ピシリツとかそんな風に表現できそうなガラスにひび入ったような音が聞こえた気がする。

「え…一夏？」

シャルルはこの場の空気を察し一夏を見る。

「だってクラスのみんなと違ってそう呼ぶって事は仲がいいってことだろ？それに特訓の時も連携上手いし。」

「た…たしかにそうだけど…。」

実際に連携が一番合うのは鈴だ。波長が合うのか遠近どちらも有効な連携が出来る。

そのお陰でお互いの意見交換なんかもよくやってはいたが。

「そうか、それならいつもの鈴の態度も納得だな。うん。」

勝手に納得する一夏…どこが納得なんだ…?

そんなことを思っていると後ろから殺気を感じる。

「せ・い・や・さ・ん」

その言葉と同時に顔の横にインターセプターが突きだされた。

頬に血が…。

セシリアさんは邪悪な笑顔をこちらに向ける。

「どうゆう事か…」説明を…していただけますよね… ?」

機体を展開はしていないがインターセプターのみをこちらに向ける。

周りのやつらは携帯やら何やらを操作している。

あれが女子のコミュニティ拡散能力か。

あつ本音さんもすごい顔で操作してる。

選択肢ミスったら5回位死ぬな…これ。

「一夏…。」

俺はゆっくりと…確実に告げる…。

「お前…次の放課後の特訓で生きてると思うなよ?」

死刑宣告を…。

「えっ?…なんで?」

一夏は訳がわからないって顔をしていた。

「諸君、おはよう席に付け。」

織斑先生が入ってきた。

「オルコット…お前は何をしている?」

「はっ!」

その後、織斑先生からありがたいお話がされるセシリアさんでした。

――
昼時には朝の一夏の発言は全校中に広がったようだ。

俺を見る目がみんな違う。

一夏の勘違いだとクラスの奴等には言ったが半分も信じていないだろう。

楯無先輩と虚先輩が尾行してきてるのは無視する。

「一夏……。」

食堂には今回の唯一の味方と思われる。鈴が居た。

すでに話は鈴の耳にも届いている。殺気を立てている。

ちなみに一夏もこちらの話を聞いてわかってるとかいったけど絶対違う。

「おっ！鈴か！どうしたんだ？星夜ならこっちだぞ！」

「この噂話はあるんだが原因なんですか？ってね……？」

鈴が機嫌悪いのはいつものことくらいに思ってるのか？

こいつは？

「おう、だって良く良く考えればお前と星夜って結構話してたりするし、星夜も『鈴』って呼んでるし。」

難解な推理小説を読んで犯人が分かったぜ！って顔の一夏。

「なあ、鈴……。」

「ねえ、星夜……。」

「次の放課後の特訓でこいつを塵も残さず消そう。」

本気の殺気を出し宣言する。

「言っておくけどそんなことは無いからね？セシリア、簪。」

鈴がセシリアさん達に言う。

「本当ですか？」

「学園中の話題になってる。」

疑いの眼差しを向ける。

もしかしてドラゴンが『愛』だったのを引きずってる？

「だって一夏よ？こいつが恋愛事を見抜けると思ってるの？」

鈴は一夏を指差し聞く。

「そう言われると……。」

「あやしい……。」

「だから、何度も言ってるだろ？俺と鈴はそんな関係じゃないっての

！」

「そうよ！何を根拠に言ってるのよ！」

俺と鈴は反論する。

「では、何故呼び方が違いますの？」

「鈴って呼び捨て…。」

「ああ？それ、あたしが堅苦しいからやめろって言ったのよ。」

「だからそう呼んでる。それに一夏とシャルルだってそうだろう。」

昼飯を食べながら会話を続ける。

「はあ、一夏のバカのせいでこつちまでいい迷惑だわ。」

「次の放課後の特訓は楽しみにしておけよ？一夏…。」

こうして昼休みは過ぎていった。

GEAR本社、データウエポン研究室

井上は今回の件で覚醒したデータウエポン・レオサークルについて調べていた。

電童と甲龍のデータを見て、目の前に居るエイリアス体のレオを調べた。

「うん、ありがとうレオ、これで終わりだから星夜くんの所に帰っていいよ。」

使っていた機材を片付けながらレオに言う。

レオは立ち上がり、コクリと頷き、データ化して、パソコンへ入っていく。

「ふむ、これで明日には報告できますね。」

そんなことを言いながら部屋を片付け、明日の流れを考える。

レオは学園にある端末からエイリアス体で実体化する。

電童の中に直接戻っても良かったが適当に遊んでから帰ろうと思っただ。

時間的にも放課後だし、色々あるこの学園は楽しい。

「あつレオっちく。今帰ったの？」

呼ばれたのでレオは振り替える。

よく遊んでくれる人―布仏本音がいる。

肯定の意味として首を縦に振る。

「そうなんだ。今学園はあまのんとリンリンの事で噂がいつぱいだよ。」

データウエポンたちは直接喋れないだけで理解することは出来るし、必要なら近くの端末に文章を出力出来るので普通に会話が出来る。

「私はこれから購買でお菓子を買いに行くのだ。じゃあね。」

手を振りながら去っていく本音。レオも前足をぱたぱたと振っておく。

見届けたレオ廊下をふよふよとゆつくりと進んでいく。

廊下になにか落ちてているのを見つけるレオ。

ゴミならゴミ箱に捨てないと行けないし、落とし物なら届けなければ。

近づくとそれは万年筆だった。

結構使い込まれた感じの万年筆だ。

落とし物と判断し、啜えるレオ。

いつもなら総合受付にでも持っていけばいいが折角なので自分で落とし主を探してみようと思ひ探し始めた。

判断

廊下に落ちていて先程、布仏本音はこちらから歩いて来た。

本音が落としした可能性があるのですまずは本音の元へ。

購買へ向かう。

「おお、レオっちどうしたの？」

お菓子が大量に入った袋を持った本音と会う。

レオは啜えている万年筆を見せる。

「ん？万年筆？私のじゃないよ。使っていないし。」

確かに使っている記憶はない。

「廊下に落ちてたの？」

コクリと頷く。

「ん。確か前に新聞部の誰かが使ってるのを見たようなく。」

なるほど、書き物をしている人なら万年筆を愛用していてもおかしくは無いはずだ。

レオは情報提供の感謝を伝える文章を本音の携帯に出力してその場をさる。

「レオっち頑張れ、初めてのおつかい。」

自主的に始めたのでおつかいかどうかはあやしいが。

確かにこう言うことは初めてだ。

今は物を持っているのでデータ化せず飛んでいく。

途中何人もの生徒にあつたので聞いて見たが、全員持ち主ではなかった。

ちなみにデータウエポン達が飛んでいても誰も気にしない。

最初の頃は驚かれたりもしたが今はみんな近所の飼い犬か猫を見つけたような対応だ。

新聞部に着く。

ドアを開けることは出来ないので叩く。

小さい音だが気づいて貰えるだろうか？

「は〜い？誰かな〜？入部希望？タレコミ？」

ドアが開く、副部長の黛薫子だ。

「あつレオサークルだ！どうしたのって…万年筆？」

レオは近くのパソコンの画面に持ち主を探していると出力する。

「ああ〜確かに部長が万年筆使ってるけどそれはここにあるわよ。」

部長席と書かれた机には人は居ないがそこには万年筆が置いてある。

「あれは机の上で書くときに使うから持ち運びもしないはずだし、他の人じゃない？」

副部長の黛薫子が言うのだから新聞部の部員では無いのだろう。

仕方ないので頭を下げてから外に出ようとする。

「あつレオくん！レオくん！天野くんって鈴ちゃんの事をどう思ってるか知ってる？」

こちらの質問に答えてくれたのだからこちらも答えないと悪いと判断したレオはこの前の事件中に言っていた言葉を思いだし、画面に

出力する。

『星夜は鈴なら安心して任せられる。』

『星夜から見て鈴は素敵な女性。』

『星夜は鈴は強いけど大切に扱う。』

『鈴は星夜が居るから平気。』

『鈴は星夜を信頼してる。』

とレオが覚えている範囲で星夜と鈴がお互いに言っていた事を出力する。

嘘は書かれてはいない。しかし、黛薫子が全力で勘違いするには十分な材料が投下された。

最後にレオが画面に一枚の写真を出力する。

データウエポンは映像記録等もその気に成れば残せるのだ。

実は事件の後、周りを警戒して、楊管理官が来たときに知らせに行ったら二人は寝ていたのだ。

ベンチでお互いに肩を寄せ合いながら寝てるので何となく写真として保存しておいたのだ。

「なつ、今度からはデータウエポン達に取材すれば完璧!? ありがとう！レオくん。これはいい記事書けるわ!」

やたらと嬉しそうな黛薫子を見て、良いことをしたとこ判断するレオ。

「あと万年筆って言ったら教師の方に聞いた方が早いんじゃない? 結構居るみたいだし、それは古そうだし。」

黛薫子のアドバイスを聞き、職員室を目指す。そろそろいい時間なのでここで見つからなければ職員に預ければいいだろう。

「あつ、レオサークルくんどうかしましたか?」

1組の副担任の山田真耶だ。

啞えている万年筆を見せる。

「あつそれって織斑先生のやつですよ。」

ここで持ち主が判明した。

「今日、落としたようで探してましたよ? たしか、今日通った道を見てくるって言っていましたから。」

「ちよつと待つて下さいね。」

そう言つて携帯を取りだし電話をする山田真耶。

きつと織斑千冬に電話をしてくれてるのだろう。

「ええ、レオサークルくんが今職員室に持つてきてくれました。…はい、わかりました。」

通話が終わり、携帯をしまふ山田真耶。

「寮の部屋に居るそうなのでそのまま届けてもらつていいですか？」

コクリと頷き寮の織斑千冬の部屋を目指す。

「ああ、これだ。ありがとう。」

織斑千冬に万年筆を渡す。

「これは一夏がアルバイトをして、最初の給料で買ってきたやつだ。もう3年前になるか。」

大切そうに万年筆を見る織斑千冬。

「あいつは未熟だがお前らの主人もまだまだだぞ？ 気を抜くなと伝えておけ。」

コクリと頷き部屋を出るレオサークル。

そのまま主人の部屋に戻るが校内新聞の緊急号外の内容に関して叱られるのであつた…。

第25話 《黒い雨》

俺―天野星夜―は恒例となりつつあるGEAR本社にて報告会に向かう。

俺、鈴は当事者なので。

セシリアさん、簪さんは黒いオーラ放ち俺を挟んで居る。

楯無先輩は手に持った扇子に《監視中》って書いてる

布仏姉妹はただ付いてきたって感じだね。

あつでも本音さんは『目指せ皆勤賞』とか前に言ってたな。

一夏は何故か距離を取ってるし。

シャルルは落ち着かない感じだな。

一夏の隣では安心した様な顔の箒さん、いや鈴は一夏だからね。

「僕もいつて平気なの？星夜？」

取り敢えず話題が欲しいシャルル、空気が重いもんね。

「平気だって、本音さんとかは皆勤賞だし。」

「レオっちの好物は何だったのかな？」

「好物？」

シャルルが本音さんの発言に反応する。

「ああ、データウエポン達は俺と誰かが感情的共鳴をすると覚醒して武装としての力を使えるようになるんだ。」

原理は不明だけど。

「へーそうなんだ。だからユニコーンとボアを使っているこの前の時に急にドラゴンを使い始めたんだ。」

納得するシャルル。

「ただ、データウエポン本人もどんな感情が起動エネルギーかわかってないから。」

「それを調べてもらったんだ。」

「そう、その報告会ね。」

「他の子達は誰とどんな感情で共鳴したの？」

シャルルは当然の質問をする。

「記念すべき最初のデータウエポンは私、セシリア・オルコットと星夜

さんが『信頼』し、ユニコーンドリルが起動したのです。」

得意気なセシリアさん。肩にはユニコーンが乗ってる。

「次は私、更識簪と星夜くんの打鉄式を『創造』したことでガトリングボアが目覚めたの。」

頭の上にボアを乗つけて簪が続ける。

「そして、私、更識楯無と星夜くんの『愛』♪でドラゴンフレアよ！」
楯無先輩の周りを飛ぶドラゴン。

扇子を畳み、再度広げると《愛》の文字が書かれていた。どうなってるんだ？

『信頼』のユニコーンドリル：『創造』のガトリングボア：『愛』のドラゴンフレア：愛？」

そこには突っ込むなシャルル！

「お姉ちゃん：『愛』じゃなくて『慈愛』：。」

「もしくは『博愛』ですわ：。」

2人のオーラが：。

「だってドクター井上が言ってたじゃない。」

「確かにそう言っただけじゃありませんけど：。」

最近慣れてきたのかこのネタで楯無先輩にいじられまくる。

その度に2人からプレッシャーが：。

「そ：：そうなんだ。レオはなんだろうね？星夜。」

「ああ、井上さんが言うってことはもうわかったんだろうけど。」

「あのとときのあたしと星夜かあ。」

悩む仕草の鈴。

当日の夜とかも結構2人で話したけど。

「鈴と星夜なら『激怒』とかじゃないか？勢いとかあるし。」

一夏がいきなり失礼な予測する。

「この2人なら『不屈』とか？諦めないって感じの。」

シャルルのイメージはそんな感じなのか。

「ふむ、ならば『気迫』か？この2人の気合はなかなかのものがあるからな。」

と箒さん。

「結構攻撃的なイメージになりやすいわね。『情熱』とか？」
と楯無先輩。当然のごとく扇子は《情熱》と書かれている。

「お二人とも格闘家ですからね。そこに引きずられてるのかと。『信念』でしようか？」

と虚先輩。

「2人で『突撃』とか？」

と本音さん。それだとブルが反応しそうだな。

「むむむ…お二人の『闘志』…とかでしようか？」

とセシリアさん、なんかクイズ番組みたいになってきた。

「ええっと…『正義』…かな？」

と簪さん。

「はは、いつの間にかクイズ番組だ。」

「正解者には星夜が晩飯奢るってことで。私は『熱血』かな？」

鈴が言う。当事者が答えていいのかな？

「じゃあ正解者不在の場合は俺が一夏に爆砕重落下を食らわせます。」

「なんでだよ！」

驚く一夏。

「だって俺の旨味が無いじゃん。」

当然の権利だ。とばかりに腕を組む。

「金タライの替わりにしては威力があるわね。」

そう言う楯無先輩の扇子は《一撃必殺》の文字。

「電童は使いませんから安心してください。」

「それでも嫌だよ！」

俺がお前を殴りたいだけだ。

「そろそろ駅に着くね。」

「ああ、そうだな。」

駅にも向かえ来ていましたよ。マイクロバスで。

運転手は吉良国さんです。26歳独身男性。

「まさか吉良国さんが向かえとは…。」

「ははは…まあ普段はパークの送迎バスとかやってるし。」

人数的にも3台必要になるならこれの方がいいか。

「ベガさんの運転を確実に回避できるからいいか。」

「星夜くんも言うね。」

「あつ吉良国さん、秘書課の浅野さんとお見合いの結果は？」

「何で星夜くんが知ってるの!？」

「ベガさんが楽しそうに教えてくれました。」

「それは忘れてくれ。」

「わかりました。」

そんな会話をしていたら本社到着、何時もの会議室だ。

「では、今回はデータウエポン・レオサークルについての報告を始めます。」

井上さんがスクリーンの前に立つ。

「あれ？アルテアさんとベガさんは？」

「ああ、彼らは今回の件でGEARチャイナの方に行ってるよ。」

いつもの人が居なかったので社長に確認、なるほどあの2人が調べ
るなら問題はないかな。

「では、『信頼』『創造』『愛』に続きレオサークルが反応した心とは？」

ちくしょうく何度やってもこれは恥ずかしいぞ！

今回は外部資料ないから、俺か鈴の視点じゃないか。

『さて、火力も装甲も、』

『あっちが上だからって、』

『負ける理由にはならない!』

『仲間が居るから!』

『巨大な敵にも!』

『勇気を持って挑めるんだ!!』

誰かこの恥ずかしさを共有できる人はいないのか？

スクリーンは俺と鈴の視点の分割表示だ。

「レオサークルが反応したのは…『勇気』…星夜くと凰さんの恐れず
に立ち向かう心に反応したとおもわれます。」

後ろのスクリーンは恒例の『勇気』文字が格好いいな。

「『勇気』…ですか。」

「あたしと星夜の『勇気』…。」

鈴と呟く。

「『勇気』なかなかしつくり来る組み合わせですわね。」

「むしろ今まで無かったのが不思議な感じ?」

「そうね、2番目とかに来てても良いくらいな感じよね。」

なんか言ってる。

「え〜と、特殊能力は?私と星夜で敵の事とか丸見えだったんだけど。」

鈴が井上さんに問う。

「はい、特殊能力は射程内の対象を解析を行う。ハイパースキャンです。」

「あのスキャン精度はすごかったですね。」

「ええ、弱点とかそれどころじゃなかったわね。」

しかもほぼノータイムの解析ってすごいね。

「そんなにすごかったの?」

シャルルが聞いてくる。

「ああ、射程内に入ったら装甲の状態や各種武装の状態、とかね。」

「それはすごいね。」

「でも他の能力に比べると地味じゃないか?」

一夏が言う。

軽くショックを受けるような仕草をするレオ。

「そんなことはないわよ!」

一夏に言い返す鈴。

「あんたの残りエネルギーとか弱点が丸見えになるのよ?」

「まあ、そうなんだけどさ。ほらくロックマナージャーの方がすごくな?」

「まあ、あれは確かにすごいと言えはすごいけどエネルギー効率悪いわよ。」

一夏は燃費が悪いのが好きなのか?」

「獅子は一撃で仕留める為の眼を持つてる。って考えるとそれっぽい

じゃない。ね〜?」

レオを撫でながら語る鈴。

うーんとか唸りながら考える一夏。

そんな一夏と鈴を横目に今回の報告会は終わった。

「で、僕たちはどこに行くの?」

俺の後に歩くシャルルが聞いてきた。

「星夜がこの近くに友人の家があるって言ってたわ。」

鈴が答える。

「そこが喫茶店やってるんだってさ。」

一夏が補足を入れる。

「こんな大人数で良いのか?」

人数を気にする箒さん。

「先程星夜さんが一声かけたそうですので平気ですわ。」

箒さんの疑問に答えるセシリアさん。

「喫茶店だと軽食になるわね。」

扇子を広げながら言う楯無先輩。扇子は《軽食》

「個人の店ながら評判は良いみたいですね。」

サイトか何かで確認をしたのか、評価を言う虚先輩。

「ポラールって名前だっけさ〜。」

店の名前を言う本音さん。

「ポラール…北極星の意味だったはず。」

名前の意味をさらっと答える簪さん。

「まあ、男性操縦者と判明してから会えてなかったから挨拶かねてね。」

さすがに10人で行くのは多いので前もって言うておいた。

「いらっしやいませ! あっ星夜待ってたよ。」

「いらっしやい。ゆっくりしていいってね。」

「おひさしぶりです。織絵さん、北斗。」

店に入ると店の主人の草薙織絵さんと息子の北斗がいた。

「元気そうで安心したわ。さあ座って。」

「こつちのテーブル席、5人ずつ座って。」

「すみませんね、なかなか挨拶ができなくて。」

「いえいえ、ちゃんと元気ならそれで良いわよ。」

「はい、サンドイッチは前もって作ったから皆さんは飲物選んでください。」

「「はーい。」」

久しぶりな客人に嬉しそうな織絵さんだった。

北斗は俺の事に関して色々質問をされてたな。

「北斗も織絵さんも元気そうだよかったよ。」

「うん、また来てよ、星夜。」

「いつでも来てね。お友だちもね。」

「「ありがとうございました。」」

全員で挨拶をし、店を出る。

「また来ような！星夜。」

「そうだな、一夏。」

「あつ先に五反田食堂だな。」

ああ一夏の友人の家つてやつね。

「楽しみにしておくよ。」

そんな感じで休みは過ぎていった。

月曜の放課後

まだ俺と鈴の勘違いは解けていない。金曜の夜に出た号外が原因だ。

最初はただの一夏の勘違いであると言えばよかったが、レオが黛先輩に言ったことは事実であるために噂の信憑性が上がったのだ。あとあんな写真を提供するとは…。

また、他の噂も流れている。

『学年別トーナメントで優勝すると男子3名の内一人と交際出来る』
と言う噂がまことしやかにささやかれている。

「はあ、どうしたものかな。」

どうせ噂の出所は鈴か箒さんだな。

『勝つたら付き合え』とか言ったのだろうか。

それを聞いたやつが都合のいいように解釈したのかな？

「…あれ？」

電童の状態を確認するとユニコーンとレオがいない…。

授業中には出ないように言っているし、このあとは特訓するの知ってるから出るはずは無いんだけどな…。

「どうしたんだろ？」

今日空いてるのは第三アリーナだったな。

みんな居るだろうし行くか。

…なんか周りが慌ただしく無いか？

「嫌な予感がするな。」

そう思い走り出した。

「あ」

第三アリーナにて特訓を行おうと入ったセシリアと鈴の目が合う。

「あんたも特訓？」

「そうですわ。」

あの噂を今朝知った2人は当然優勝を狙う。

「ちようどいい機会だし、この前の実習を含めてどっちが上かはつきりさせとく？」

「いいですわ、あとは星夜さんの件もはつきりさせませんと。」

「だからあれは周りが勝手に勘違いしてるだけだっつての！」

2人は武器を構え距離を取る。

「では—」

セシリアが開始を宣言しようとするが間に砲撃が撃ち込まれる。

2人は砲弾の飛んできた先を見る。

そこには漆黒の機体がいた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ…。」

「シュヴァルツェア・レーゲン…。」

2人は各兵装を戦闘状態へ移行しながら漆黒の機体を見る。

「中国の《甲龍》、イギリスの《ブルー・ティアーズ》か、データの方

がまだ強そうだったな…あの様ではな！」

恐らくは先日の山田真耶との戦闘の事を言いたいのだろう。

「なに？偉そうなこと言うわりにはろくに他の生徒に指導も出来ないやつが何の用よ？」

「友人がいなくて訓練相手が居なくて構って欲しいんでは？」

口で言われた分は口で返す。

「はっ下らん種馬に群がるメスごときでは訓練にもならんな。ああ役にはなるか。」

「スクラップがお望みな訳？ドイツって暇なの？」

「本人に直接言う度胸の無い臆病な方はどうされたいのかしら？」

「あんな奴等は私が戦う価値もないな。わざわざ蟻ごときを気にする必要も無いだろう？それとも私に負けるのが怖いか？下らんペット遊びに付き合えなくなるかもなあ？」

下らないペット…データウエポン達の事だろう。

自分たちを馬鹿にされるのなら我慢は出来るが仲間を馬鹿にされて我慢が出来る彼女達ではなかった。

「セシリア…。」

「鈴さん…。」

「潰す！」

「そうだ！来い！力とは何かを教えてやる!!」

鈴が前に出て、セシリアが後ろにて援護…何度かやったタッグ訓練のお陰でそれなりの形にはなっている。

この2人がタッグを組む場合、相手は一夏に箒か星夜が付く。

今回の場合は星夜の電童を2人で攻める際のフォーメーションを使用する。

「何をする気か知らんが喰らうがいい！我が停止結界をな！」

こうして2対1の戦いは幕をあげた。

鈴&セシリア対ラウラはラウラの圧倒的有利なだった。

「ここまで相性が悪いとはね。」

甲龍、ブルー・ティーズ共にダメージは多く、一部に欠損してい

る。装備も満足に使用できない。

相手のISが持つ特殊兵装A I C―慣性停止能力。機体のエネルギーを使い空間の慣性を停止させる。見えない網で相手を絡めとる兵器だ。

ガトリングボアのクロックマネージャ―と違いこちらにも意識はあるから、まだ対応は出来るはずだがどこか一ヶ所が捕まればそのまま全身が固められる。

止まったところにリボルバーカノンかワイヤーブレードが叩き込まれ、直撃する。

「理論最大稼働のBT兵器ならともかく、このような未完成品ではな。」

ワイヤーブレードで鈴を捕まえ、振り回し、セシリアに当てる。

2人が重なり体勢を直す前に瞬時加速にて近づきプラズマ手刀を叩き込もうとする。

その時、目の前が蒼く光る。

「くっ!?なんだ!?!」

突然の事に距離を取り、観察を試みようとするラウラ。

そこには蒼き一角獣の姿があった。

「ユツユニコーンさん!?!」

セシリアが驚き、声を上げる。

「くっこけおどしか!!」

脅威では無いと判断し、再び飛び込もうとする。

だが、急に横から何かに突き飛ばされた。

「がっ!?!」

ラウラは飛ばされた方向を見るとそこには白き獅子がそこに居た。

「レオー!」

鈴も声を上げる。

「俄仕込みの畜生ごときで私を止められると思うなよ!」

特殊兵器など無いただの大きいだけのペットロボなど瞬殺出来ると思っていたが、それは違った。

A I Cの網を見えるかのように避ける獅子、そしてワイヤーブレード

ドを赤いバリアで防ぐ一角獣。

「ええい！小賢しい!!」

なかなか思うように行かずイライラが募るラウラ、この2体はこちらに手を出してこない。

「貴様ら！馬鹿にしているのか!?!」

この2体を無視してセシリアと鈴を狙おうとする。

そうするとそれを防ぐ為にか攻撃を仕掛けてきた。

一角獣は角のドリルと蹄、獅子は鬣のカッターと爪を使い動きを妨害する。

あくまでこの2体は防衛に専念しているようだ。

ラウラが翻弄されている内にセシリアと鈴は体勢を整える。

「所詮は数が居なければ何も出来ないゴミ共が!!」

ラウラは叫ぶ。

「体勢を整えた所で、もう貴様らには武器は無い!」

「くっ！例えそうだとしても！諦めませんわ!」

ラウラに向けセシリアが叫ぶ。

「気持ちで負けなければ本当の負けではありません!」

その言葉を聞き表情を歪めるラウラ。

「実戦で負ければ死あるのみ！気持ちなど!!…想いなど!!」

「それとあんた！いつ私の武器が全部ダメになったって?」

鈴は不敵に笑う。

「何？戯れ言を!!」

データでは甲龍は2本の実体剣、両肩と両腕に衝撃砲が付いているだけのはずだ。

「残念だったわね！最高に頼りになる、最強の武器が残ってるわ!」

鈴は右腕を天高く掲げる。

「ぶつつけ本番だけどね!!」

鈴は笑いながら声高らかに宣言する。

「レオドライブ！インストール!!」

目の前に居た白き獅子が光となり甲龍の右脚に装着される。

「なんだ!?それは!」

「えっ!? 鈴さん!? 使えますの?」

「星夜に許可は取ってあるわよ!」

右脚を前にだし構える鈴。

「これが私の『勇気』!」

「それがどうしたあ!!」

ラウラは先程までと同じくA I Cによる捕縛を試みる。

「残念だけど丸見えよ!」

そう言い放ち、鈴はA I Cを回避する。

「何!? どういう事だ!?」

「獅子の眼を! 舐めるなあ!!」

驚いてるラウラに接近し右脚を振り上げる。

「レオ! 旋風脚!!」

ラウラに今までに無いダメージが入る。

「うがあ!」

6つのワイヤーブレードを放つが紙一重に避けられる。

「はあ!」

蹴り飛ばされるラウラ。

「さすがにエネルギー足りないし、ファイナルアタックは無理よね。」

右脚のレオを見ながら言う鈴。ステータスを見るとファイナルア

タックに使用不可の表示がある。

「ふざけるなあ! それが『勇気』だと! 笑わせる!」

そのとき、上から銃弾の雨が降る。

「鈴! セシリア!」

「大丈夫!? 下がってて。」

観客席の方から一夏とシャルルがやって来る。

恐らくは零落白夜の力でアリーナのバリアを破って来たのだろう。

2人はそれぞれ武器を構えながらラウラを見る。

「一夏...」

「無様な姿をお見せしましたわね。」

レオは甲龍の脚から外れ再度鈴の前に立つ。

「ふん、ならば貴様らにも教えてやる!! 力をな!」

「やってみやがれ！」

一夏は瞬時加速を使い接近し、ラウラに斬りかかるがA I Cで止められる。

「ぐっ、なんだこれ？クロックマネージャー…？」

「感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな！」

動けない一夏に肩のリボルバーカノンを向けるラウラ。

「このシュヴァルツエア・レーゲンの前では貴様も有象無象のひとつに過ぎん、消えろ！」

砲弾が放たれる寸前に後ろからアサルトライフルを連射され、一夏の拘束がとける。

「一夏、離れて。」

ラウラの後ろに回ったシャルルが2丁のアサルトライフルを構える。

「ああ、助かった！」

そのまま、一夏とシャルルはラウラとの戦闘に入る。

一夏だけを狙うラウラをシャルルが撃つ形が続く。

一夏とシャルルが戦っている内に2体のデータウエポンはセシリアと鈴を守る様に下がる。

このままだと邪魔になると感じたセシリア達もデータウエポンと共にピットに向かう。

「ふん、あんな奴等はどうでもいい！織斑一夏！貴様は！貴様だけは！！」

「俺だつて…ここまでやられて黙つてられないんだよ！！」

そう叫びながら飛び込むラウラと一夏の間割り込む影。

それはI S用のブレードを持ったスーツ姿の織斑千冬と電童を纏った星夜だった。

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる。」

「一夏、気持ちは解るが止まれ。」

I Sの補助無しに軽々と木の棒を振るうかの如くI S用のブレードを、扱う織斑千冬。そのブレードはラウラのシュヴァルツエア・レーゲンを押し止めていた。

一夏も電童に肩を捕まれ動けない。

「模擬戦するのは構わん、だがアリーナを破壊するような事態は教師として黙認しかねるな。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか。」

「教官がそうおっしやるなら。」

素直に従い、ISを解除して去っていくラウラ。

「星夜！あいつは鈴やセシリアを！」

「感情で動くのを否定はしないけど落ち着け、それだといらない隙を生むだけだ。」

「まったく、データウエポンの方が冷静だな。織斑、デユノアお前達もわかったな。」

「あ、ああ…わかった。」

まだ心が落ち着いて無いためか素で答える一夏。

「教師に対する口のきき方を考えろ。馬鹿者。」

「は、はい！」

「僕もそれで構いません。」

一夏とシャルルは答える。

「天野、お前なら無いとは思うがお前もだぞ？」

「わかってますよ。織斑先生。」

「学年別トーナメントまで、一切の私闘を禁止とする！」

アリーナ内に居るすべての生徒に聞こえるように織斑千冬の声が響いた。

第26話 《学年別トーナメント》

今、俺―天野星夜―は 学校の保健室に居た。

第三アリーナでの決闘騒ぎが起きてから大体1時間程経過していた。

ベットの上には包帯を巻いたセシリアさんと鈴がいる。

「別にあのままでも勝てたんだけどね。」

「あそこから華麗なる逆転劇をお見せするところでしたのに。」

と負け惜しみの2人。

「お前らなあ…。怪我が大したこと無くて安心したぜ。」

「そうだな。骨折とかは無いみたいだし。」

「こんなの怪我の内には―いたたたっ。」

「そもそもこうやって横になつてること事態が無意味―つううっ!」

強がろうとするがエイリアス体のユニコーンとレオがそれぞれの包帯を軽くつつく。

それだけでこの状態だ。

「ちよつとレオ、なにをするのよ!」

「ユニコーンさんもですわ!」

「2人に無理するなって言いたいんだよ。」

涙目になりながら膝の上のデータウエポン達に抗議する2人。

一夏が馬鹿にするような目で見てる。

「バカつてなによ!バカ!」

「一夏さんが大バカですわ!」

一夏は何故ばれたのかわからないって顔してるな。

分かりやすいんだよお前の顔。

「てか、ユニコーンとレオは居たのになんで星夜は居なかつたんだ?」

一夏が聞いてきた。

「いや、俺もユニコーンとレオが居ないなって思いながらアリーナに向かつてただけだから。それでこの騒ぎだし。」

正直驚いた。

「じゃあ、ユニコーンとレオはどうやって2人のピンチを知つたんだ

？」

「偶然ブルー・ティアーズか甲龍と交信したんじゃないか？」

もしくは野性の勘ってやつかな？

「まあ、レオ達には助けられたわね。ありがとう。」

「ユニコーンさん、レオさん、ありがとうございます。」

それぞれ膝の上のデータウエポンを撫でる。

「2人とも、好きな人にカツコ悪い所を見られて恥ずかしいんだよね？」

飲み物を買って行ったシャルルが帰ってきた。

今の台詞を一夏は聞き逃したようだ。便利な耳だな全く…。

そんなこと言われてセシリアさんと鈴は顔がたちまち赤く染まる。

「ななな何をいつてるのよ！全っ然わかんないわね！こここここれだから欧州人は！」

「へべっ別に私はそう言う邪推をされるとさすがに気分を害しますわねっ！」

分かりやすい動揺。

「烏龍茶と紅茶、これ飲んで落ち着いてね？」

そう言いながらペットボトルを渡すシャルル。

「ふっふん！」

「不本意ですがいただきましたましよう！」

それぞれペットボトルを引ったくるように受けとる。

一応一息つけたかな？

「あっそう言えばさつき、鈴がレオサークル使ってたよな？」

「そうだね、てつきり電童専用だと思ってたよ。」

今まで聞かれなかったしね。

「ん？電童用に調整はされてるけど元々IS用の技術だよ。使えない訳ではないよ。」

「そうか、なら俺もクロックマネージャーとか…。」

よりにもよって一番燃費が悪いやつを…。

「また、エネルギー切れで自爆したいのか？」

「いや、あれで当てれば一撃だろ？」

まあ確かにな。

「そうなるとレオの解析能力は結構魅力的かも。」

シャルルなら活かそうだな。

「むしろシャルルは相手にレオが付いたら危ないかもな。残弾数とか丸見えだから。」

「確かに武器を切り替えるタイミングが読まれちゃうね。」

それでもシャルルの切り替えは隙無いけどな。

「なあ、星夜、今度俺にも貸してくれよ。」

「本人達に聞け。今回だつてレオが鈴に許可しただけだし。」

そう、こいつらにはロックとかの概念は無い、データウエポン本人が認めればいいのだ。

逆に俺が嫌われると使えない可能性がある。

「トーナメントの時も借りるわよ。」

「勝手に決めないの。まあレオは鈴になついてるし呼べば来ると思うよ?。」

「本当!。」

ちよつとした冗談のつもりが思いがけない返事が来て驚く鈴。

「よし、レオ!俺も頼むぜ!。」

とレオに手を合わせる一夏、レオはそっぽを向く。

「あつあれ?。」

困惑の一夏。

「あんたねえ、レオの特殊能力聞いて何て言ったか覚えてないの?。」

あきれたような顔の鈴。

「あんな風に言われたら普通はねえ…。」

シャルルが答える。

「あれは俺が悪かった!よくよく考えれば射撃避けるときとかすごい使えるよな!。」

苦しい言い訳だ。しばらく一夏はレオを使えないな。

「では、私が呼べばユニコーンさんが?。」

「来ると思うよ?結構セシリアさんの所行ってるし。」

暇があるとセシリアさんの所に行くからなユニコーンは。

「それに今回は2人のピンチを察して来たわけだし。2人は使えて当然だろうね。」

「僕も使えるかな?」

シャルルが聞いてきた。

「みんなが同時に呼んだりとすると優先度は低いだろうけど使えるんじゃない?シャルルの評価は悪くないし。」

むしろ一夏以外なら大体使わせてくれるよ一回目はね

そのあとの評価次第かな?

「そつか、今度の訓練で使ってみてもいい?」

「そうだな、ユニコーン、レオ、ドラゴン、ボアの4連ファイナルアタックを一夏にやるか?」

「対象が俺!」

「ちゃんとクロックマネージャーをつけるよ。」

「確定じゃないか!」

「冗談だ。」

みんなで笑う。

「そういえば残りのデータウエポンって…。」

シャルルが聞いてきた。

「ああ、バイパーとブルな。」

エイリアス体の2体をだす。

「どんな武器なの?」

「ああ、バイパーは電磁ウィップでブルはナックルホーンだよ。」

「ああんかイメージしやすいね。」

「まだ使えないけど。楽しみにしててくれ。」

そんな風に話している。

…ドドドドドドドドドドドツ!!

「なんだ?なんの音だ!」

「地鳴り?大量の気配がこっちに来るな。」

「よく冷静にいられるね星夜!」

ドカーンツ! 比喩ではなく本当に聞こえた。

その音と共に保健室のドアが床と水平に飛んでいき壁に当たった。

誰が直すんだろ？

「織斑君！」

「デュノア君！」

「天野君！」

僅か数秒もしない内に保健室は通勤ラッシュユさながらの混み具合だ。

男子3名を囲み手を伸ばしてくる。

これがバーゲンセールの商品の気持ちか……。

知りたくなかったな。

この中に取り込まれたら死にそう。

まるでゾンビゲームだ。

「な、なんだ？なんなんだ？」

「ど、どうしたの？みんな…ちよつと落ち着いて？」

「俺たちは指名手配されるようなことしたか？」

「「これ！」「」

つとなんかチラシを渡される。

見てみると学内の緊急告知だな。

「な、なになに…？」

一夏が声を出して読む。

「今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、2人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により、選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは——」
「そこまででいいから！とにかく！」

あつなるほどね。

「私と組もう！織斑君！」

「私と組んで！デュノア君！」

「やっぱり嵐さん!?天野君！」

いきなり学年別トーナメントの仕様変更、とにかく男子と接点が欲しいのだろう。

相変わらず俺だけ鈴判定かよ。

「悪いな！俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

一夏ははつきりと宣言する。
しばらく沈黙が部屋を包む。

「まあ、そうゆうことなら。」

「他の娘と組まれるよりはいいか…。」

「男同士もやはり良いわね!」

なんかずれてるのが居た気がするが、納得したようだ。

まあシャルルの事情を知ってる俺が一夏が組むのが一番だろう。

当然そうなると思ちらに矛先が向くわけで。

「天野君! 女の子は鳳さんだけじゃないわ!」

「私と一緒に不倫と言う背徳感溢れる新しい世界に!」

「私ならおっぱいあるよ!?! 大きいよ!!」

なんかずれた発言ばかりだな。

鈴も怒ってるし。

「はあ、何度も言うけど俺と鈴の交際の事実は無いからね?」

「ならなおのこと組めるよね?」

「天野君がフリーなら浮気じゃないよね。」

「さあ! 決めて!」

はあ、なんだ…このエネルギーは。

「今知ったので何も考えてないですし、今決める必要は無いのでこちらからパートナーにしたい方には声をかけますので。」

こんな感じでいいかな?

「やっぱり…鳳さんかあ…。」

「イチヤイチャコンビかあ。」

「この前、鳳さんの実家に挨拶行ったらしいしね。」

中国には行ったけどさ!

そんなことを口々に話ながら保健室から出ていく生徒達。

ふう、よかった。全く誤解がとけないけど。

「いつ一夏は私と組みなさいよ! 幼馴染みでしょうが!」

「せっ星夜さん! ぜひ私と!」

さて、この2人を黙らせないとな。

「駄目ですよ!」

いつの間にか居た山田先生。

いきなりの登場でみんな驚いている。

「お二人のISを確認しましたがダメージレベルがCを超えかけています。まずは修復に専念させてください。トーナメント参加の許可は出せません。」

やっぱりあのダメージは酷かったか。

「うぐ…わ、わかりました。」

「不本意ですが…非常に…非常に！不本意ですがトーナメントは辞退いたします！」

機体に後遺症を残さない為にも今回は引きさがざるを得ないとは。

「折角データウエポンさんが助けてくれたお陰で本国での修理などが必要なく、自己修復可能な範囲なので。ISに無理させて肝心な所でチャンスを失うのはとても残念なことです。そうなるほしくありませんし。」

「はい…。」

「わかってますわ…。」

「一夏、なんで2人が諦めたかわかってないな？」

一夏が先程から不思議そうな顔をしているので言ってみる。

「ああ、だって鈴とか一度言いだしたら曲げないし。」

「一夏、ISの基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三だよ。」

シャルルに言われて一夏は考えてるがなかなか出てこないようだ。

「…ISは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼働も含まれ、ISのダメージがレベルCを超えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、それらは逆に平常時での稼働に悪影響を及ぼすことがある。」

「おお！それださすがはシャルル！」

シャルルが教科書の内容を一語一句間違えずに言うのと納得する一夏。

「しかし、何だってラウラと戦うことになったんだ？」

一夏が疑問を口にする。

まあ大体は読めるが。挑発されたんだろう。

「えっ、いやそれは…。」

「それは…その…女のプライドを侮辱されたと言いますか…。」

まあその辺りだろうな。

「つまり、星夜と一夏の―」

「ああああ、もう！デユノアは一言多いわね！」

「そ、そうですね！おほほほほ！」

一夏以外にはわかりきった答えを口にしようとしたシャルルをセシリアさんと鈴は押さえる。

「おい、あまり無理するなよ。怪我してるんだから。」

ユニコーンとレオがそれぞれの肩に乗る。

「ぴぐう!!」

激痛が走り変な声を上げる2人。

「れ…れお…あんたねえ。」

「ゆに…こーんさんも…。」

「2人が無理しないよう、監視としてその2体置いてくから、1本ずつならジューズ位、買ってこれるよ。お大事にね。」

そう言って手を振りながら部屋を出る。

この扉は誰に言えばいいんだ？

いつの間にか居ない山田先生は何も言わずに帰ったけど。

「天野、少し良いか？」

部屋に戻る途中で織斑先生に呼び止められた。

「はい？なんででしょうか？」

「月末の学年別トーナメントなんだが…。」

「はい、タッグルールに変更ですよね？」

「そうなのだが実は1年は全体数が奇数なのでな。特別にお前はデータウエポンをパートナーとして出場して貰おうかと思うのだが、それでいいか？」

「そうなんですか？わかりました。」

「すまないな、ここで教師をパートナーにするとそれも問題だからな。」

「そういえばデータウエポンって规则的にどこまで使用可能ですか？」

「ああ、別に制限はしない、あいつらの能力はいわゆるワンオフアビリティーだからな、ただ独立行動をとるのは常に一体だけにしろ、試合中の変更もみとめん。」

つまり、ボア単独は可能か。

「わかりました。ありがとうございます。」

「では、たのんだぞ。」

そう言い振り向く織斑先生。

あつそう言えば。

「織斑先生。保健室のドアが破損してるようなので早めの修理をお願いいたします。」

「あ、ああわかった。報告ごころう。」

こけそうな織斑先生って珍しかったかも。

うくん、俺とデータウエポンでコンビか…。

学年別トーナメント当日…

一夏つてくじ運いいのか？

第一試合

〈織斑一夏&シャルル・デヌノア〉対〈ハラウラ・ボーデヴィツヒ&篠ノ之箒〉

最初からクライマックスじゃないか。

ボーデヴィツヒさんと箒さんのコンビは抽選…と言うよりも申しなかったのがあの2人だけだったそうだ。

箒さんが1回ボーデヴィツヒさんに連携の練習をしに行ったそうだが追い返されたって言っていたな。

ちなみに俺は今日の試合に出ないので客席だ。

隣はセシリアさんと鈴。

「なんとか甲龍は直ったけど…。」

「私もブルー・ティアーズは直りはしましたがやはり調整不足では…。」

2人とも怪我は大したことなかったしね。

それだけに今回のトーナメントに出れないのが悔しいのだろう。

「まあ、今回は観察に専念して今後に繋げるしかないんじゃない?」

「そうね、星夜の言う通りね。」

「そうですね。次に活かしましょう。」

「さて、一夏たちはどうA I Cを攻略するか楽しみだな。」

「そうね、どうするのかしら?」

「ちなみに星夜さんならどう攻略されますか?」

「恐らくA I Cは対象の選択を本人が行うみたいだから相手の視界を奪うか、効果の薄い遠距離から攻めて集中力を落としてから一気に接近して一撃で潰す。」

「なるほどね。てことは一夏が攻めるって事ね。」

「いや、ボーデヴィツヒさんは一夏に執着してるから囷になる。」

「つまり、シャルルさんをアタッカーにすると?」

「うん、恐らくボーデヴィツヒさんからみたらただの第二世代機だ。警戒も薄いだろうからでかいのも入れやすいはず。」

「二でかいの?」

「ああ、飛びつきりを…ね。」

そんな話をしていたらアリーナに4人が出てきた。

距離があるので聞こえないが何か話してるな。

そして開始のゴングが鳴った…。

始まるや瞬時加速を使いボーデヴィツヒさんに突撃する一夏。

早速A I Cに捕まっている。

「本当に一夏には観察って概念が無いのか?」

「今回は一撃必殺を狙われたのでは」

「にしたってあの飛び込みはないんじゃない?」

そのままリボルバーカノンを撃とうとするボーデヴィツヒさんにシャルルが一撃を入れ、一夏を解放する。

横から箒さんが刀を持ち突撃する。

それを邪魔と判断したのかボーデヴィツヒさんは箒さんにワイヤーブレードを放ち絡めると一夏に向けて叩きつけた。

「パートナーを邪魔者扱いとは傲慢すぎますわ。」

「あいつ、ほんとに1人で戦うみたいね。」

「他の生徒は全部石ころにでも見えるのかな。」

「少しだけ混戦状態だったが一夏とボーデヴィツヒさん、シャルルと箒さんの対決に移行した。」

「先に箒さんを倒すおつもりでしょうか？」

「その前に一夏は持つのかしら？」

「まあ、ボーデヴィツヒさんの動きを見ると援護の概念は無さそうだし…。2人で集中して戦う為にも先に倒したいんだろうね。」

しかし、シャルルの戦い方はすごい。

流れるように武器が代わる。それにより次の瞬間には戦い方も代わるのだからすごいね。

近距離を選べば射撃が、遠距離から撃とうとするなら接近しての格闘戦まで、ほんとにうまい。

俺達のなかで一番自分のリズムで戦える人物だ。

「あらら、箒さんは性格的に合わないのかな？シャルルは。」

「箒さんは純粋な剣士ですからね。剣が届くか届かないかの距離は難しいでしょう。」

「シャルルはうまくずらすからね。あたしも苦手かな。」

一夏はその間、ボーデヴィツヒさんに食らいついていた。

ワイヤーブレードなどで削られてはいるが本命はしっかりと防いでいる。

「一夏も粘るな。」

「そうですね、うまくA I Cを避けてはおられますね。」

「でも、結構削れてない？」

ついに一夏の集中力が途切れたのかA I Cに捕まったようだ。

ワイヤーブレードの一斉射を撃ち込まれ、そのままワイヤーブレードで叩きつけられた。

しかし、そこに箒さんを倒したシャルルが合流する。

「やっと一夏達の本領発揮かな？」

「そのための訓練もしてみたいですね。」

「あつ、零落白夜を起動したわ。」

一夏は前に出るのは変わらないがワイヤーブレードはシャルルがアサルトライフルで的確に撃ち落としている。

一気に決めにかかる一夏だったがダメージ蓄積のせいか目の前で零落白夜が強制的に解除されてしまう。

しかし、シャルルのお陰で最大火力のリボルバーカノンには破壊できている。

「一夏!?!ここでエネルギー切れ!?!」

「あいつの場合はSEも食うからな、ダメージを貰いすぎたか。」

「しかし、シャルルさんだけで勝てるのでしょうか?」

シャルルが入れ替わりでボーデヴィツヒさんの前になる。

AICで捕まったがシャルルの銃を拾った一夏がマニュアルで援護射撃を行う。

その隙にシャルルは今まで使ったことの無かった瞬時加速を使い密着する。そして隠していた牙を露にした。

「あれって…?」

「パイルバンカー…。」

「シールド・ピアース。」

そのまま左腕のリボルバーバンカーを全弾叩き込むシャルル。

ボーデヴィツヒさんは力なく倒れていく。

これで終わったな…そう思ったとき異変は起きた。

ボーデヴィツヒさんが叫ぶと機体に激しい電流が流れる。

「なんだあれは!?!」

「一体何が!?!」

「初めて見ますわ!?!」

機体が飴のようにドロリと溶けたと思うと次の瞬間にはボーデヴィツヒさんを包み新たな形に変わっていく…。

それはまるで…かつてのブリュンヒルデ、織斑千冬の愛機〈暮桜〉の姿があった…。

第27話 《紫の光明》

学年別トーナメントの最中、異変は起きた。

ラウラ・ボーデヴィツヒのIS〈シユヴァルツェア・レーゲン〉が突然変化したのだ。

それを目撃した瞬間、俺―天野星夜―はセシリアさん、鈴と共に立ち上がり客席からアリーナを指す。

「一体何なんだ？ あれ？」

「溶けて気がつけば千冬さんの偽者だし！」

「セカンドシフトではありませんね！」

すでに警報が鳴り響き、一般生徒と来賓は避難を開始している。あれ？

「今回はハッキングされてないな。」

「ジャミングも無さそうね。」

「隔壁も降りませんし、設備もすべて機能してますわね。」

つまり、今回は今までの奴等ではない？

「とにかく急ごう。」

「相手が千冬さんの偽者なんて一夏は絶対許さないわ！」

「それ以前にあそこにいる方々は皆さんエネルギーが少ないはずですよ！」

施設に問題は無かったので障害なくアリーナに進む。

俺たちがアリーナに到着する。

一夏を取り押さえる箒さんとシャルルが居る。

一夏は白式を纏っていない。つまり、エネルギーが全部尽きたのか。

「どけよ！ 箒！ 邪魔をするなら―」

「いい加減にしろ！ 一夏！」

一夏の頬を叩く箒さん。

冷静さを取り戻した一夏。

「あれは…千冬姉のデータだ！ それは千冬姉のものだ！ 千冬姉だけのものなんだよ！ それを…！」

「やっぱり、一夏は千冬さんよね。」
鈴が言う。

「でも、それだけじゃない！あんな訳のわかんない力に振り回されてるラウラも気に入らねえ。ISとラウラ、どっちもぶん殴らなきゃ気がすまない！」

そこは同意だな。

「ああそれは俺も同じだ一夏、強さも、想いもわからない奴は1発殴つてやらないとな。」

「一夏、今のお前に何ができるのだ？白式のエネルギーも無いのだから？？」

「ぐうう…。」

箒さんに痛いところを突かれた一夏。

「ここには星夜達も居る。すぐ教師の鎮圧部隊も来る。」

一夏を説得する箒さん、一夏が心配なんだな。

「俺がやる必要はない、か？」

「そうだ。」

あの黒い暮桜はこちらから動かなければ反応はしないようだな。

「違うんだ箒、全然違う。俺が『やらなきゃいけない』んじゃない。俺が『やりたいんだ。』ここで引いたらそれは俺じゃない。織斑一夏じゃない。」

姉の誇りを守る。一夏はその為に…今、戦いたいのか。

「馬鹿者！ならばどうするのだ？エネルギーはどのみち——」

確かに…今の白式は装甲の展開すらできない。

「無いなら他から持ってきてくればいいでしょ？」

「シャルル…。」

シャルルが一夏に近づく。

「普通のISなら無理だけど、僕のリヴァイヴならエネルギーを移せると思う。」

その一言で一夏の顔が明るくなる。

「そうか！なら——」

「けど！絶対に負けないでね！」

シャルルにしては珍しく力強い物言いだ。

「ここまで啖呵きつて行くんだ。負けたら男じゃねえよ。」

「なら、負けたら一夏さんのお召し物は明日から女子の制服ですね。」

「ここに証人が居るんだからね!」

セシリアさんと鈴も乗る。

「う……、いい、いいぜ! 負けないからな!」

まだ軽いジョークを言う余裕はあるようだ。

黒い暮桜がこちらに向かって来はじめた。

「一夏、あの〈黒桜〉のトドメはお前に譲ってやる。それまで待つてろ。」

「そうね、そこでエネルギー移して待つてなさい。」

「必殺の一太刀をお願い致しますね。」

電童、ブルー・ティアーズ、甲龍を纏い前が出る。

黒桜は居合いの構えだ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ!! これがお前の望みか!」
拳を突きだしながら叫ぶ。

黒桜の振った雪片とぶつかる。

側面に回り込んだブルー・ティアーズと甲龍から支援射撃が入る。

黒桜は1歩分だけ下がり射撃を回避する。

無駄は無い、確かに織斑先生みたいだ…けど、なぞるだけだ。

「そんな! 物まねで! お前は満足なのかよ!」

「千冬さんは! もつと気高いわよ!」

「織斑先生を尊敬しているのなら! それはむしろ侮辱ですわ!」

鋭い斬撃が振るわれる。だが、軽く受け止める。

「技は! 心をもって完成する! こんな形だけの技じゃ俺にはかすり傷もつかないぞ!」

2人は黒桜が逃げないように弾幕を張る。

今、俺は黒桜と弾幕のカーテンの中で決闘している。

「織斑先生に近づきたいのなら! 織斑先生になるんじゃないよ! 『ラウラ・ボーデヴィツヒ』として、横に立とうと思わないんだよ!」

「自分を見てもらいたいんだろ! 織斑先生のお陰で成長した自分を誉

めてもらいたいんだろ!!」

いくら声をかけても黒桜に反応はない。

「この…バツカヤロオオオオオオオオオオ!!」

右のストレートが黒桜の胸部に当たる。

その瞬間…ラウラ・ボーデヴィツヒの姿が見えた…。

……どこだここ？

なんか浮遊感がある…。

今、俺は…黒桜と戦闘して…。

『なぜだ…?』

ボーデヴィツヒさんの声だ。

『なぜだ!? 私は今! 最強なのだ! なのになぜ! 倒せない!!』

気が付けば目の前に鬼の形相のボーデヴィツヒさんがいる。

『前にも言いましたよ…。 想いの無い力は破壊を産むだけだつて。』

『必要ない! そんなものは! 想いなど! 心など!』

『信念も誇りもないただの剣に敗ける奴はいないよ。』

『力がすべて! すべてを壊せば! 私が一番だ! ヴァルキリーだ!』

『あと…そろそろお前は黙れ…。』

目の前に居るボーデヴィツヒさんの偽者のを全力で殴る。

見事に顔に入り吹き飛ばされる。

『さて、ボーデヴィツヒさん…。』

後ろを見ると怯えたような顔をしたボーデヴィツヒさんがいた。

『あつちは外で暴れてるバカだろ? こつちが本当の君だね?』

『なぜ…わかった…。』

『あの黒桜が振るう剣には何も無かったから。』

『お前も…そんな顔をするのだな…。』

『そんな顔?』

『教官と…同じように…笑うのだな。』

『それは…きつと守る物があるから…かな?』

『守る…もの…?』

『ああ…だから強くなれる。』

少し寂しそうな顔をする。ボーデヴィツヒさん。

『私には…何もないな。戦うことしかない。それが私の生まれた意味…。』

『じゃあ、まずは自分の誇りを取り戻そうか？』

『なに…？』

『あれ、ラウラ・ボーデヴィツヒとして暴れてるけどあんなのは君じゃない。』

先程殴り飛ばしたやつを指差す。

『昔、織斑先生に教えてもらったんでしょ？自分の力と誇りを…。ラウラ・ボーデヴィツヒとして、自分がどうしたいのか？どうありたいのか？あんなのじゃないでしょ？』

『そうだ…私は…教官のお陰で…自分を…。』

『だからさ、それを守ろう？あんなやつに任せないでさ。』

黒ボーデヴィツヒ（仮）は叫ぶ。

『もう手遅れだ！この体は私の物だ！そんな何もない空っぽな人形に返すものなどない！』

『残念だったな、ボーデヴィツヒさんは空っぽじゃないし人形でもない。』

『そうだ、私はあんな存在に成りたかった訳じゃない、ただ教官の側に、居たかったんだ。』

『だから織斑先生の中にある一夏が羨ましかったんだ。』

『そうだ、教官は何かあるとすぐに弟の話をしていた、あの人の中心だった…。だから嫉妬した。』

『でき損ないの人形がうるさい！とつとと消えてしまえ！』

『私は目の前に居る敵を倒す！それが私の生まれた意味だ！』

ボーデヴィツヒさんと黒ボーデヴィツヒはにらみ合う。

『ボーデヴィツヒさんには、生まれた意味より、生きる勇気を…。』

『生きる勇気…？』

『生きるってことは自分で選ぶこと。その結果を恐れず選ぶ勇気を持つ。』

『そうか…自分で選ぶこと…確かに今までの私は何も選んでなかった』

かもしれない。』

『織斑先生の横に居たいって選んだよ。』

『確かに…ではもうひとつ選ぶとしよう。』

『なにを選ぶの？』

『教官から貰ったものを守りたい！そのために取り戻す！』

『わかった！手伝うよ！』

『私はお前の仲間に酷いことをしたぞ？』

『ラウラ・ボーデヴィツヒの本当の始まりはここからだよ。過去は関係ない。』

黒ボーデヴィツヒを指差す。

『さて、ボーデヴィツヒさんの誇りをかえしてもらおうよ！』

『そうだ！私が私であるために！お前を超える！もう私自身からは逃げない！』

『それが！ラウラ・ボーデヴィツヒの『自信』になる！』

黒ボーデヴィツヒは叫ぶ。

『私は織斑千冬の技を覚えているのだ！最強の技を！』

そんなことは関係ない。

『ラウラ！お前は織斑先生にはなれない！』

『ああ、だから私はラウラ・ボーデヴィツヒとして！教官を超える！』

『だから！お前を認めない！』

俺達の周りを紫の光が包みんだ。

「い…今のは…？」

「星夜！どうしたの!？」

「星夜さん！どうなさいました!？」

今のは一瞬の出来事だったのか？

「あんだ、いきなり黒桜と一緒に固まったのよ！」

「星夜さん！なにを!？」

黒桜に触れている右腕がずるりと黒桜の中へ入る。

まるで水飴の中に手をつっ込んだみたいだ。

中で手がなにかに触れる、ボーデヴィツヒさんだ。

「うおおおおお！」

そのままボーデヴィツヒさんをつかみ、引つ張り出す。中から裸のボーデヴィツヒさんが出てくる。まだ意識があったのかこちらを見つめていた。

彼女を抱えあげ、後ろに跳ぶ。

「一夏！想いの力！見せてやれ！」

一夏を呼ぶ。

「ああ！わかった！」

右腕と雪片のみを展開した一夏が黒桜に向かって直進する。いつもの雪片と違い、最低限のエネルギーで日本刀のような刃を形成していた。

居合いの構えをとり、黒桜からの袈裟斬りを弾く。

「そんなのは…ただの真似事だ！」

そのまま構えを直し、真っ直ぐに断ち切った。

真っ二つに為った黒桜。

俺が抱えるボーデヴィツヒさんを見ながら一夏は言った。

「まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやる。」

これで終わった…。

そう思っていたがそれは違った。

割れた黒桜が再び形を変えた。

今度は生身の織斑先生とボーデヴィツヒさんを型どったような形だ。

今度は剣術もなにもない、ただ殴りかかってくるだけのようだ。

「うわあ！なんだこれ！」

完全にエネルギーが尽きた一夏を2体は狙うが間一髪でそれをよけた。

セシリアさんと鈴がそれぞれを接近戦で止める。

「一夏はボーデヴィツヒさんを頼む！シャルルと箒さんも。」

「ああ、わかった！」

「気を付けろ奴等、なにをする気かわからんぞ。」

「ボーデヴィツヒさんは任せて、星夜。」

気を失ったボーデヴィツヒさんを一夏達に預ける。
さっきの黒ボーデヴィツヒがまだ暴れてるのか？

「これ以上…誇りを…汚すなよ…偽者野郎が…。」

鈴はともかく、セシリアさんは接近戦は苦手だ早く援護しないと。

「セシリアさん！下がって。」

「はい！星夜さん！お願いしますわ！」

入れ替わり織斑先生の偽者と殴り合う。

「彼女はもう！違うんだよ！お前なんかの力では強くなれないって知ったんだ！」

「自分で自分を信じるって！織斑先生と並ぶって決めたんだよ！『自信』を取り戻せたんだよ！だから邪魔するな！」

先程と同じ紫の光が溢れ出す。

光は俺と鈴が戦っている織斑先生とボーデヴィツヒさんの偽者に体当たりをして吹き飛ばす。

そこには紫の蛇が居た。

「いくぞー！バイパーウィップ！」

バイパーウィップは相手を威嚇するような仕種をする。

俺はバイパーに向けて手をかざす。

「ファイルセーブ!!バイパーウィップ!!」

紫の光が電童の胸部に格納される。

「バイパードライブ！インストール!!」

左腕にバイパーウィップが装着される。

偽者2体が立ち上がる。

「セシリアさん！鈴！下がって！」

「わかりましたわ！」

「星夜！決めちゃえ！」

2人は俺より後ろに下がる。

「はあっ！」

俺が敵に向かい飛び込む。

その瞬間周りは目を疑っただろう。

「ええ!?なにあれ！」

「電童が！増えましたわ！」

今、電童は周りから見たら8体に増えたのだ。

4体ずつ、偽者を取り囲む。

左手を振るうとバイパーの頭部が射出される。

バイパーの頭部と本体の間にあるワイヤーには電気が流れる。

そのまま再度左手を振るう。

ワイヤーがしなる。バイパーの牙と電気の鞭によるダメージが蓄積される。

最後に偽者を1ヶ所に集める。

そして分身は消える。

「バイパーウィップ!!」

左手を持ち上げバイパーをカウボーイの投げ縄のごとく振り回す。

四肢のドライブユニットが全力で稼動する。

エネルギーはバイパーに送り込まれる。

「ファイナル！アタック!!」

莫大なエネルギーを纏ったバイパーを叩きつける。

その場に巨大な雷が落ちたかのような音がして偽者を爆発させた。

「ふう……。終わったか……。」

これで今回の件は終わったかな……？

敵が完全に居なくなつたので電童を解除しながら考えていた。

「ふう……あ……。」

保健室で目を覚ましたラウラ。

「気がついたか？」

いきなり声をかけられた。この声は……。

「織斑……教官……一体……なにが？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくはじっとしている。」

千冬にやさしく声をかけられた。

「なにが……起こったのですか……？」

激痛を無視して上半身を起こすラウラ。

その金と赤の瞳で真っ直ぐに見つめる。

「一応：重要案件で機密事項だがな……。」

千冬はゆつくりと話す。

「VTシステムは知ってるな？」

「ヴァルキリートレースシステム：過去のIS操縦者の動きをトレースするシステムです。」

「そう、IS条約で研究、開発、使用のすべてが禁止されている。それがお前のISにつままれていた。」

「……………」

ラウラは口を閉ざす。

「巧妙に隠されていてな。操縦者の精神状態、機体のダメージ、操縦者の願望の条件が揃うと発動するようになっていた。」

「あの時の私が：望んだから……。」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

いきなり大きな声で呼ばれ驚く。

「はっはい！」

「お前は誰だ？」

「わっ：私は先程までは空っぽで何もありませんでした……。」

「ほう、なら今は？」

予想外の答えが来たのでそのまま続きを促す。

「私はラウラ・ボーデヴィツヒです！いつか教官と並び、そして：超えて見せます！」

力強く宣言するラウラ。

千冬の知るかつての彼女を超えていた。

「そうか……。私を超えるか……。楽しみにしているぞ。この3年間：お前がどう悩み、成長するか見させてもらおうぞ、小娘。」

「はい！見ていてください！」

千冬は席をたち、ベツトから離れる。

そしてドアに手をかける。そのまま思い出したように喋る。

「ああ、それからな、お前は私にはなれないぞ、アイツの姉はこう見えて心労が絶えん。まあそんな事はもう言わないか。」

ドアを開き外へ出て行ってしまった。
数分後この部屋にはラウラの笑い声が響いていた。

第28話 《デュノア社の影》

学年別トーナメントは初日から大ハプニングだった。

本来なら1週間はかけてやるはずの物が初日の第一試合からボーデヴィツヒさんのシユヴァルツエア・レーゲンの暴走により他の試合は出来なかった。

この詳細については何も聞かされてないので分からないが。

結局、事情聴取とか報告書の作成とかでもう夜だ。

ちなみトーナメントは当然中止、ただし全員のデータ取りのため一回戦目のみを全部やるそうだ。

その日程も後日決定するとの事だ。

俺―天野星夜―も今は食堂で晩飯を食べていた。

「なあ、星夜…。」

一夏が聞いてくる。

「なんだ？一夏？エビフライはやらないぞ？」

好きなものは最後にとっておく派なのでな。

「違う違う。あれ？なんだ？」

一夏が指差したのは落胆した女子の軍団だった。

「…優勝…チャンス…消え…。」

「交際…無効…。」

「…かゆ…うま…。」

ああ、あの優勝したら男子と交際って噂話を信じてた奴等か…。

なんか1人ゾンビ化しそうな居ないか？

「さあな。おおかた仲間内で賭けでもしてたんじゃないか？」

こいつには真実伝えても無駄だろうし。

「なるほどな…。でもそんなに落ち込むか？」

「あとは今後の予定が崩れたからかもな。」

「ああ、試合は後日みたいだな。」

ちなみにシャルルもこの噂は知らないようだな。

俺もデータウエポン達から聞いた話だな。

「うわわあああん!!」

バタバタと音をたて10名ほど走っていった。

「どうしたんだろうね？」

「さあ……？」

「まあ女には女の事情があるんだろ。」

ちなみに更識姉妹や布仏姉妹は生徒会関係で来賓の客の対応に追われていたらしい：お疲れさまです。

セシリアさんと鈴は調整中だった機体を使用したので再度調整中だ。

「あれ？」

一夏は呆然と立っていた箒さんを見つける。

「そういえば、箒。」

何か伝えることがあるのか箒さんに近づくと一夏。

「なんだ？一夏？」

「先月の約束なんだけどさ。」

あつ箒さんが今回の噂の原因か。

「つきあってもいいぞ！」

えつまじ？一夏？俺は箒さんより鈴をオススメするぞ。

その言葉を聞いた箒さんはとたんに元気になる。

「本当に本当にいいんだな！」

「ああー！いいぞ！」

一夏の返事を聞き、嬉しさを隠しきれない箒さん。

「ご、ごほん。一応理由を聞こう。」

わざとらしい咳払いをしながら聞く箒さん。

「そりゃあ幼馴染みの頼みだからな。付き合うさ。」

「そ、そうか。」

「買い物くらいな！」

箒さんは一瞬にして天国から地獄へと落とされた気分だろう。

「そんな……ことだろうと……。」

鬼の面でも付けたかのような箒さんは拳を握る。

「ん……？」

一夏はまだ自分が核地雷を踏み抜いたとは知らないようだな。

「そんな事だろうと思っただわ！」

一夏の腹に箒さんの右の正拳が入る。いいパンチだ。

そのまま体勢を崩したところでみぞおちに蹴りを思いっきり入れる。一夏はその場で倒れた。

取り敢えずスカートでのハイキックは推奨しませんよ箒さん。

「ふん！」

鼻を鳴らし、ズカズカと去っていく箒さん。

「一夏って、わざとやってるんじゃないかと思うね。」

「それを自然にやるのが厄介なところだよ。」

「なんだよ？どういう意味だよ。それは……。」

「さあね。」

2人で茶を飲む。

15分ほどして一夏は復活した。

「ああそういうばちよつと聞きたいんだが。」

一夏が席に座りながら聞く。

「何かな？何でも聞いてよ。」

恩人である一夏に頼られて嬉しいのか気分のいいシャルル。

「ISで会話ってできるのか？えーと、プライベート・チャネルとは違う、なんか2人だけの空間、みたいなどころでの会話なんだが。」

「一夏、お前もあつたのか？」

もしかしたら黒桜を殴ったときと同じか？

「星夜もあつたのか？」

「ああ、黒桜を殴ったときにな。」

「一瞬止まったのはそれが原因だったのか……。」

「うーん……IS同士の情報交換ネットワークの影響で特殊な相互意識干渉が起こるって聞いたことがあるけど。」

「おお！それだと思う。……うーん……。でも何だったんだらうなあれ……？」

「ああ、俺もいまいちわからん。」

「まあ、作った東博士が自己進化するようにしてるから把握出来てないらしい。」

「しかも本人失踪中だろ。」

「束さんらしいな…それ。」

「そうか一夏は面識があるんだっけか。」

「ねえ、星夜も一夏も2人だけの空間ってボーデヴィツヒさん？」

「あ、ああ。そうだけど。」

「ああ、俺はあと黒桜の意志？見たいのも居たけど。」

「ふーん。そう。」

不機嫌になったシャルル。

まあ仲のいい男子が他の娘と2人だけの空間ってのは気に入らないんだろうな。

嫉妬心には気付いてないが不機嫌になったのは察しているようだな一夏。

「織斑くん、デユノアくん、天野くんここに居ましたか。さつきはお疲れ様です。」

山田先生が近づいてくる。

「山田先生こそ、ずっと書記で疲れなかったですか？」

「いえいえ、私は昔からああいった地味な活動が得意なんです。」

えへん、と胸を張る山田先生。大きな胸が揺れる。

この人はわざとやってんのか？対応に困る。

一夏は顔を背けるが鼻の下伸びてるぞ。

「一夏と星夜のスケベ」

ぼそつと呟くシャルル。

「ちつ違う、誤解だシャルル！」

「俺もかよ…。」

「ふん…。」

表向きは男でも実際は女性だからね。敵対心があるんだろうな。

「どうかしましたか？」

元凶の山田先生に自覚なし。

「いえ、何でもありません。」

「そうですか。」

そろそろ用件を聞くか。

「で、ご用件はなんですか？山田先生。」

「あつはい、先日話していた大浴場の事なのですが…今回の件でゴタゴタしていて今週は無理かも知れません。」

「そ、そんな…。」

ああ、そういうえばそんな事言つてたな。軽く忘れてた。

一夏は大分シヨツクのような固まつてる。

「で、でも、来週末には使えると思いますので！また詳しく決まりましたら連絡します。」

「わかりました。わざわざありがとうございます。」

「あつ、あとデュノアくんにはこれが…。」

そう言いながら山田先生は封筒をシャルルにわたす。

「これは…？」

シャルルは山田先生に聞く。

「本日、来賓で来られていたデュノア社の方が本人に渡してくれ、と預けられていきました。」

そうか、今日は外部からも大勢の人が来てたもんな。

シエア3位の企業の人間なら誰かしら来てるか。

「ありがとうございます…。」

「はい、では私はこれで。あまり遅くならないよう、しつかり寝てくださいね。」

山田先生はそう言い残し去っていった。

「それは取り敢えず部屋で見たらどうだ？」

手紙を受け取ってから固まったままのシャルルに声をかける。

「う、うんそうだね。」

「じゃあ、部屋にいこうぜ。」

一夏とシャルルはうなずき席を立つ。

そのまま2人の部屋へ向かう。

「で、誰からだ？シャルル。」

「指令か何か？」

「それが…。」

シャルルに来た手紙はデュノア社の社長夫人からの物だった。

「社長夫人って実質的な支配者か…。」

「確か前にシャルルをぶったやつか…。」

「うん、2人のそれであってる。」

「それで?」

シャルルに内容を聞く。

「男性操縦者のどちらかもしくは両方を指定した場所につれてこいて。」

なんか予想通りと言えば予想通りか。

「指定時間は明日の夕方…だよ…。場所は港の近くにある倉庫…。」

「これってもしかしなくてさ、拉致でもするのか?」

一夏が予想する。

「ここまでベタだと笑いが出そうだ。」

「よし、俺はGEARに連絡を取る。」

「取り敢えず明日の夕方か…授業の後すぐに行く感じだな?」

「2人とも…いいの?」

シャルルは気まずそうに聞いてくる。

「だってどう見ても2人を襲う気だよ。」

「なら、それをぶち壊すまでだ。」

「もしかしたらこれで問題が解決できるかも知れないだろ?」

「そうだけど…。」

「大丈夫だって。いざとなったら俺の白式も星夜の電童もあるんだしな…。」

「むしろ合法的にあいつらを殴るチャンスかもしれないしな。」

「ごめんね…2人とも…。」

俺はすぐにGEARに連絡を取る。

アルテアさんが出たのでそのまま用件を伝えた。

『なるほどな。ならば、明日、私も現地に行かせてもらおう。』

「えっ…アルテアさんが?」

『なんだ?私では不安か?』

「いえ、むしろ過剰戦力になりそうで。」

この人は刀持つと凄いからなあ。まだ見ぬ相手に同情するよ。

『まだ、ベガはGEARチャイナで調査を続けているからな。手が空いているのは私くらいだ。』

「わかりました。お願いします。」

『あと、GEARフランスのジョルジュから調査報告があったのでデータを送っておく。目を通しておいてくれ。』

「はい、ありがとうございます。では、明日…。」

通話を終える。

「どうだった？ 星夜？」

「ああ、GEARも支援してくれる。安心だ。」

「僕のせいでごめんね？」

「仲間を助けるのは普通だよ。」

「ともかく、少し早いけど今日は疲れたから寝ようぜ？」

「そうだな。おやすみ、シャルル、一夏。」

「あつ…ねえ…2人に頼みがあるんだけど…。」

シャルルが少し恥ずかしそうに言ってくる。珍しいな。

「どうしたんだ？」

「珍しいなシャルルが頼み事なんて。」

「僕達だけの時で良いからさ、シャルロットて呼んで欲しいんだ。母さんからもらった大事な名前。」

なるほどな。ずっとシャルルって呼んでたけど本名はシャルロットだもんな。

「わかった、シャルロット。」

「シャルロットね、わかった。」

「ありがとう。」

嬉しそうに笑うシャルロット。

そのまま2人に挨拶をして部屋に戻る。

部屋に戻った俺は再びアルテアさんに連絡をする。

『どうした？ 送った資料に問題でもあったか？』

「いえ、先程連絡したデユノア社の呼び出しですがもしかしたら今日かも。」

『なに?』

「ちよつとシャルロットの様子が変な感じだったし俺たちに手紙を直接は見せてくれなかったんです。」

『なるほど。』

「怪しかったのでシャルロットのISにはデータウエポン達を忍ばせておきました。」

『わかった。私もすぐに出る。目的地の変更などがあればまた、連絡してくれ。』

「ありがとうございます。」

携帯をしまう。暫くして電童にデータウエポン達からの情報が流れてきた。

やはり、1人で決着をつけに行くようだ。

あとをこつそりついて行こうと廊下に出ると織斑先生が居た。

「天野、こんな時間にどうした?」

「ちよつと外に空気を吸いに行こうと思ひまして。」

「もう、消灯時間だ。」

「デュノア社の事知ってますよね?」

「……………」

沈黙…肯定か…

「彼女が今、決着を着けようと出ていったみたいです。」

「なんの話かは知らないが私も疲れている。もしかしたら見回りの際に見落とすこともあるかもしれないな。」

「人間ならミスはありますよね。」

「独り言だ。」

そのまま去っていく織斑先生。

つまりこの問題は学園側は干渉できないのか。

心の中で織斑先生に礼を言つてこつそりと外に出る。

さて、追いますか。

少し後ろを着けていく。

IS学園はどこにも所属しないように土地は埋め立て地みたいな島だ。

つまり、どこに行くにも橋を渡る必要がある。

そこに行くのと走っていくシャルロットが見えた。

データウエポンたちがGPSの代わりにシャルロットの場所を教えしてくれるので視界から消えても焦らない。

アルテアさんにも場所は伝えてある。

暫く行くと近くの港に付く、その1つの倉庫だけ明かりがついていた。

あそこか…。

「すまない、星夜くん、遅れた。」

「いえ、バツチリですアルテアさん。」

アルテアさんは2本の刀を持つてる。本気だ…。

「先程、あそこにシャルロットが入っていききました。」

「では、デュノア社の者があそこに？」

アルテアさんと慎重に近づく。

中からは声が聞こえる。

シャルロットの声と知らない女性の声。

デュノア夫人の声か。

「まったく！あの泥棒猫の娘なんだから男に腰振るくらいかたんでしょ？なのにまだどちらも手に入らなかったなんて、ほんとに使えないくず猫ね。」

「そもそも男性として入学したんですよ？ハニートラップなんて出来ませんよ。」

「まつ！とにかくデータだけとつてくれればよかったのよ。そのあとあんたがどうなろうと知ったことじゃないのよ！」

…つまり、データを盗んだ後はシャルロットの事はどうでもいいと。

周りには黒服のサングラス…ほんとにベタだな。

15人くらいか…。

「アルテアさん。」

小声で呼ぶ。

「ああ、好きにしろ。」

「ありがとうございます。」

正面から俺だけ入っていく。

「シャルロット…夜中の無断外出は関心しないぞ。」

「誰だ!」

こちらの声に反応したのはデュノア夫人だった。

「せ、星夜…なんで…?」

「お前は隠し事が下手なんだよ。」

「また、ばれてたのか…。」

シャルロットはため息を軽く吐く。

「ともかく、丁度良いわね。渡しなさい。」

偉そうにデュノア夫人は右手をだす。

「は? ババアに渡すものなんかないよ?」

挑発的に言ってみる。

「貴方、今、わたくしをなんと言いました?」

プルプルと震えながら聞いてくる。

「うるせえお婆はん。それにお前にはもうなにも残ってないんだよ。」

「なんですって!!?」

キーンと声が響く。

「あんたは今まで好きにやり過ぎた。今頃フランスのデュノア社では大掃除の真っ最中だよ。」

「そ、そんなことはあり得ないわ! わたくしにはあのお方が付いているのよ!」

「その大物政治家との癒着問題で今、フランスは大騒ぎさ。」

GEARフランスの調査でデュノア夫人が行った不正は山のようにあつたのが判明し、それを警察などにリークした。

「それにさ、シャルロットの母親を泥棒猫って言ってるけどそれも逆だしな!」

「星夜!? どうゆうこと?」

シャルロットも聞いてくる。

「シャルロットの母親は普通の家の生まれで、デュノア家の跡継ぎで

ある君の父親とは当時交際はしていたそうだが。」

「あの人はわたくしの為に産まれたのよ！あんな野良猫なんかにやるものですか!？」

「で、それを気に入らなかつたあんたが色々とやったんだろ？親の金と権力を使ってさー！」

「そうよ！あの女は邪魔だったのよ！」

「でも、別れた時には既に身籠っていたのさ、シャルロットをね。」

「えっ？じゃあ僕は…。」

「本当は愛されてるんだよ、きつとね。」

「あの人はあんたのことを知って金を送ってたのよ!!わたくしの金を！泥棒猫なんかに！」

「お前のじゃなくてその人の金だろうが！会社の金を勝手に持ち出してるあんたが言うな！」

盗人猛々しいはこの事か。

「で、ともかく、おぼはんにはフランスに帰ったら牢屋が待ってるからね。」

「あんたのせいね！お前たち！やっておしまい！」

悪役の台詞だなそれ。

周りに居た男たちが銃を構えるが次の瞬間。

「ぐあー！」

「ふぐおー！」

「ぬあー！」

半分ほど倒れた。

「安心しろ、峰打ちだ。」

アルテアさんである。その両手には刀が握られている。

「日本に銃を持ち込んだ時点で犯罪だよ？」

「貴様らに勝ち目はない、投降しろ。」

俺とアルテアさんで睨む。

「わ、わたくしは偉いのよ！何をやっても許されるのよ！」

「なにも成さずに遊んでるだけのやつがなに言ってるんだ。」

「そのわりには会社の経営に首を突っ込んで居たようだがな。」

「ええい！ともかく！あんたのISを寄越しなさい！」

夫人が怒鳴る。

「あんたに渡すものなんか無いって言ったろ？シャルロットもな！」

「そんな野良猫！ほしけりやくれてやるわ！」

「貴婦人にあるまじき言葉遣いだな。まあいい、悪人ども！覚悟！」

俺とアルテアさんが同時に飛び込む周りに居た黒服どもはすぐに片付いた。アルテアさん、早すぎ…俺3人しか倒してないよ。

「ええい！どいつもこいつも！使えない屑ばかりね！」

夫人を再度睨む。

「ほら、おとなしく捕まりな！」

「貴様にもう抵抗の手段はあるまい。」

「あるわ！とっておきの力がね！『御館様』の力が！」

「『御館様』!?!」

3人の声が重なる。

直後、足元から銀色の刃が飛び出してきた。

「なっ！」

「うわっ！」

「2人とも！大丈夫か？」

全員間一髪で避けた。

「漸く来たのね!?遅いわよ！わたくしを誰だと思ってるのよ！」

銀色の刃はそのままひとつになると人の頭の付いた錨のような形になる。

「あれが『御館様』？」

「わからん。だが敵なのは確かだ。」

「あれは…錨？」

俺とシャルロットはISを展開する。

アルテアさんは刀を構える。

「ははは！やってしまいなさい!!」

デュノア夫人は銀の錨に命令する。

その瞬間、銀の錨はデュノア夫人に向けて先程の刃を突き刺した。

「な…なぜ…？」

疑問を口にしながら倒れていく。

あれでは…即死だ。

「前の金色ゴリラと同じで証拠を消すためか？」

「ひ…酷い…。」

「次はこちらのようだな。2人とも、構えろ！」

銀の錨は丸い塊見たいになるとそこから無数の刃をこちらに伸ばしてくる。

俺たちは避ける。

シャルロットはアサルトライフルを構え、俺はガトリングボアを装備する。

「食らえ！」

「当たって！」

2人で撃つが銀の塊はそれを回避しこちらに近づこうとする。

「やらせん！はああ！」

床を滑るように移動する相手にアルテアさんが刀を振り落とす。

だが当たる直前に床に溶けるように相手が消えた。

「なに!？」

驚きを隠せない俺達、次の瞬間、後ろから銀の刃が襲いかかる。

「ぐう！」

「きやあ！」

姿勢を崩す位だったが、これはまずい、あいつの自身も結構早いし、周辺の鉄と同化できるのか？

「2人とも！大丈夫か!？」

「大丈夫です！アルテアさん！」

「僕も平気です！」

3人で背中を合わせるように立つ。

これは簡単には終わりそうに無いな…。

第29話 《橙の願い》

IS学園近くの港にある倉庫…。

そこで俺―天野星夜―達は戦っていた。

デュノア社の手紙でここまで来たシャルロットを追って来たわけだが。

「やっぱりジャミングされてますね。」

「だが、ここで逃げては周りに無用な被害が出るぞ！」

「でも、あいつ溶けたりして攻撃が当たらないよ!!」

相手は再び周り溶け込んでいた。

見えないならこれだな。

「レオドライブ！インストール！」

右脚にレオサークルが装備される。

「そうか！ハイパスキャンなら！」

「見えぬ敵も捕らえられるか!?!」

レオが解析データを表示する。そのデータはシャルロットにも転送される。

「この倉庫全体に溶け込んでる!?!」

「どこからでも伸ばせるってこと!?!」

言った瞬間に全周囲から刃が延びてくる。

レオがスキャンしていたから来る方向はわかるので回避は出来る。

「とにかく、あいつを止めないと…。」

とにかく銀の刃が出ては消え、出ては消え、を繰り返す。

俺たちは迫り来る刃を避けたり、弾いたりする。

「アルテアさん！」

「ああ、このままでは私が足手まといになってしまうな。離脱して救援を呼んでこよう。」

「では、僕達で援護します。」

アルテアさんが倉庫の出口に向けて走る。

それを阻止するためか狙いがアルテアさんに絞られた。

「やらせるかよ！レオ！旋風脚！」

「やらせないよー！」

アルテアさん狙いの刃をそれぞれ弾く。

出口を閉じるように銀の膜が張られる。

「その程度では私は止められんー！」

立ち止まる事なく刀を振り銀の膜を切り裂く。

そのまま外へ出るアルテアさん。

あの銀のやつ I S の装甲と同等の固さだよ？

「ねえ、星夜…あの人は何者？」

「凄い人…。」

そうとしか言えない自分が居る。

俺達も追いかける形で外に出る。

これで全周囲から狙われる事は無くなったな。

「これからどうするか…。」

まだ延びてくる刃を弾きながら呟く。

弾いたりしても向こうにダメージ入ってなさそうなんだよな。

「あの人の斬撃もダメージは無いみたいだったしね。星夜、ドラゴン

フレアのクラッシュユレイで止められないかな？」

「確かに…ドラゴンドライブ！インストール！」

今度は左脚にドラゴンフレアが装備される。

左右の脚にデータウエポンを装備した俺は敵が動くのを待つ。

今度は真下か。

「食らえークラッシュユレイ！」

刃に当てたが止まらない。

「止まらない!？」

「まさか、これは只の鉄ってこと？」

シャルロットは冷静に分析する。

「つまり、本体に当てないと意味はないって事か。」

「そうみたいだね、ごめんね、無駄撃ちさせて。」

「試行錯誤は普通だ、ましてや敵は正体不明、シャルロットの考えは間

違ってないよ。期待してる。」

「星夜に期待されたら答えるしか無いね。」

「ああ、アルテアさんが呼びに言った増援が来る前に倒すか。」

「そうだね、そして聞かないと。」

「真実を君のお父さんにね。」

再び刃がやってくる。

「僕は知りたいんだ！本当の事を！その為にもここでやられるわけには！」

「お前がなんで俺達を襲うかは関係ない！どんな策で来ようとも！」

「2人の『知恵』で突破する!!」

周りに橙色の光が放たれる。

それは銀の刃に当たると、銀の刃はその光に包まれる。

そしてそのまま銀の刃はその場に圧縮されていくように集まる。

「こっこれは…。」

「ついにお前か…ブル。」

目の前には橙色の牛が居た。ブルは叫びを上げる。

俺は右手を上げる。これでこの行程も最後か…。

「ファイルセーブ！ブルホーン!!」

ブルホーンは光球になり、電童の胸部に格納される。

「ブルドライブ！インストール！」

右手にブルホーンの頭を模したナツクルガードが装備される。

「星夜！レオのハイパースキヤンの結果を見るとあそこに全部集まってる！きつとこれがブルの能力だよ！」

「そうみたいだな。いくぞー！」

四肢のドライブユニットが回転する。全てのエネルギーをブルホーンに送り込む。

「先に僕からもやられた分殴らせてもらおうよー！」

シャルロットは素晴らしいながら左腕のシールドをパージし、自身の最強兵装、パイルバンカー〈グレー・スケール〉を開放する。

「落ちろ！銀粘土！」

シャルロットが上から叩きつけるようにグレー・スケールを食らわせる。

「ブルホーン!!」

俺も地面に叩きつけられた銀の塊に向かっていく。

「ファイナル!!アタック!!」

ブルホーンを地面に叩きつける。

するとエネルギーが結晶となり相手に向かう。

結晶が当たるとそのまま爆発した。

「反応は…無いね。」

「みたいだな。」

ジャミングも収まったので敵は完全撃破または撤退したと判断する。

『星夜くん敵を倒したのか?』

アルテアさんからの通信が来る。

「はい、ブルホーンが覚醒したお陰で助かりました。」

『そうか、よかった。警察がそちらに向かっている。対応はGEARで請け負う。2人は今のうちにこっそりと学園に帰ってくれ。まもなく日付も代わる。』

「わかりました。お願いします。」

通信を終える。

「なんだって?」

「対応はGEARの方でやってくれるからこっそりと帰っていいってさ。」

「わかったよ。ねえ、星夜…ブルホーンは僕と星夜で覚醒したって事だよね?」

「まあ、そうなるね。何に反応したかはわからないけど。」

「そっか…えへへ。」

どこか嬉しそうなシャルロット。

「来てくれてありがとう。星夜。嬉しかったよ。」

「俺としては一夏に気づかれなかったのが凄いな。」

「一夏は本当に疲れて寝ちゃってたから。」

「そうか、取り敢えずデユノア社に関してはまた明日な?」

「うん、詳しく教えてね…。」

そのままこっそりと学園に帰っていった。

翌日：IS学園は休校状態だった。

先日に来ていた来賓、また今日以降に来る予定だった人たちに対しての対応で教師たちが手が放せないためだ。

一応全時限自習扱いではある。

昨日の2つの事の報告書をこの時間でまとめてしまおう。

しかし、これで全部のデータウエポンが覚醒したのか…。

井上さんも大変だな、これから2体分の解析だよ。

でも、バイパーは誰と共鳴したんだろ。

近くに居たのは…セシリアさん、鈴、箒さん、シャルロット、一夏

……ボーデヴィツヒさん？

「星夜は何やってんだ？」

一夏だ。

「みんな好き勝手にやってるけど。お前はやることがあるんじゃないか？自習だよ。」

主に報告書とか。

「うぐ、確かに。」

一夏が小声で聞いてくる。

「昨日の夜、シャルロットの事が解決したって本当なのか？」

朝にシャルロットから聞いたのかな？

「ああ、ほぼ解決した。それは放課後に詳しく話すしデータも送る、ここでは喋るな。」

「わかった。」

黙々と作業を続けているとドアが開いた。

ボーデヴィツヒさんだ。

怪我は治っているようだ。

全員の視線がボーデヴィツヒさんを集まる。

「ボーデヴィツヒさん、体調は大丈夫？」

こう言うときはこちらから手を差し伸べないとな。

「あつああ。貴官のお陰で助かった。礼を言わせてくれ、ありがとう。」

なんか緊張してるな。

「そ、それと…クラスの者にはトーナメントだけではなく、様々な迷惑をかけたこの場を借りて謝罪させてくれ、すまなかつた…。」

深々と頭を下げるボーデヴィツヒさん。

「いや、謝ってすむ問題では無いかもしれない。でも、

私はこれしか知らない。」

頭を下げたままのボーデヴィツヒさん。

「いや、まあ…なんだ。顔上げろよ。ラウラ。」

一夏が声をかける。

「トーナメントに関してはラウラは悪くないんだろ？朝、千冬姉が言ってたし。」

朝のSHRで言ってたな。

「確かに色々とあつたけどさ、ただ、知らなかったただけだろ？なら、俺達が教えてやるよ。」

一夏は笑顔で言う。

「だって今まで軍隊に居たんではしょ？なら色々違うし、戸惑うもんね。」

シャルロットもラウラに声をかける。

「わからない事は恥ではありませんわ。私もこちらに来てから沢山の事を知りましたし。」

セシリアさんもラウラに語りかける。

「こう言ってるセツシーだって色々とあつたんだよー。」

横から本音さん。

「専用機持ちがこれだけ固まれば問題のひとつやふたつは起きるから気にするな。」

俺も手を差し出しながら言う。

「これからよろしく、ラウラ・ボーデヴィツヒさん。」

「よ、よろしく頼む…。」

握手をする。

その後クラスの奴らから質問攻めに合うボーデヴィツヒさんだった。

最初は怖かったけど今は分相応の…小動物みたいなオーラが出るな。

この問題もこれにて決着…かな？

放課後に一夏達の部屋に行く。

それぞれの機体の方にGEARフランスからの報告書を送っては
あるからもう読んでるだろう。

「一夏、シャルル。入るぞ。」

ノックしてから部屋に入る。

廊下なのでシャルル呼びだ。

「おう、星夜やつと読み終わったぜ。」

「本当に詳しく調べたね。」

まあ、情報量は結構あったからな。

「まあな。で、シャルロット、会社に連絡とかしてみた？」

一応聞いてみる。

「えつと…父さんからメールが来てて…この報告書と同じような事を
書いてあった。それと…謝罪の言葉の動画…。」

えつと時差は確か7時間位で日本が進んでるから。

向こうは今、朝くらいかな？

「ちようど今ならフランスは朝だろ？電話、してみたら？」

「うん…ごめんね…まだ、怖いんだ。」

「そっかなら、無理強いはしないよ。」

ちよつと強引だったか。シャルロットの意思を尊重しよう。

「でも、近い内にかけてみるよ。直接聞きたいこととかあるし。」

「そうか。」

「んーと…結局はこの本妻って奴が悪かったんだよな。星夜？」

「全部が全部って訳でもないけど大体はそんな感じだよ。」

「でも、あの人も…。」

そう、あの銀色のやつによって…。

「本当はしっかりと罪を償って欲しかったけど…。」

「あの人が言ってた『御館様』って何だったんだろ…。」

「きつと凰牙を使ってる組織だとは思うけどな…。」

「でもさ、そうゆうのは俺たちの仕事じゃ無いだろ?」

一夏の言う通りか。

「そうだな、その通りだ。考えても無駄だな。」

「そうだ星夜、これで全部のデータウエポンが覚醒したって事か?」

「そうだな。ユニコーンに始まり、ボア、ドラゴン、レオ、バイパー、ブル。これで6体全部だよ。」

名前を呼びながらそれぞれをエイリアス体で召喚する。

「そっか、バイパーは確か分身してたよな?ブルはどんな力を持つてるんだ?」

「見たところ対象を一定のところ引きずり出して固定するって感じだったな。」

「そうだね、ボアと違ってその対象を引き寄せたり出来るから同じ拘束系でも使い勝手は違うね。」

シャルロットと見た感想をのべる。

「分身からの零落白夜とかかつこいいだろうな。バイパー!今度の特訓で頼むぜ!」

バイパーに手を合わせる一夏、この前のレオと同じようにそっぽを向かれた。

「ええ!?なんでダメなんだよ。」

「さあ?」

「データウエポン達って仲良いみたいだし、レオの件を皆気にしてるのもよ?」

「そんなあ。」

うなだれる一夏、自業自得だ。

「僕はブルの覚醒に関係してるみたいだし、今度使ってみようかな?ね、ブル?」

シャルロットに答えるブル。

「えっ特殊能力で引き寄せてからのバンカー&ファイナルアタック?」

「確かにそれは強力そうだね。」

シャルロットは実弾武装が多いから消費の激しいファイナルアタックを使つてもそこそこ戦えるな。

「そう考えると一番火力があるのつてシャルロットか？」

自分に撃ち込まれるイメージでもしたのか一夏は顔が真っ青だ。

「一番安定感はあるな。」

「ふふ、誉めてもなにもでないよ？」

3人の笑い声が部屋に響いた。

その日の夜に、シャルロットはデュノア社長と電話で話したそう
だ。

これからは仲よくやって行けるかも知れないとの事だ。

良いことだな。

その翌日、朝のSHRは少しだけ荒れた。

シャルロットが自分の正体を明かしたのだ。

お陰で山田先生は再び寮の部屋割りとかで苦労するとか泣いてた。

お疲れさまです。

クラスの皆も驚いては居たがすぐに受け入れた。

相変わらずの順応性だ。

取り敢えず、トーナメントの日程はまだ決まらないのかな？

そんな事を考えながら今日の授業は進んで行くのであった…。

第30話 《データウエポン大集結!》

6月の末日俺―天野星夜―は困惑していた。
「どうしてこうなった?」

そう、先日的事件で学年別トーナメントが中止になったからその代わりの評価試合をやるって聞いて…。

電童を纏ってアリーナに出ると……。

俺以外の1年生専用機持ちが待ち構えていた。

「あの…織斑先生?」

『どうした?天野?』

「これは一体どうゆう状況ですか?」

つい聞いてしまった。

「なあ、千冬姉…。」

『織斑先生だ。』

「すみません、織斑先生…。で、でも…。」

一夏も困っているようだな。

「先生…これはどう見ても…。」

シャルロットも苦笑いだ。

「私達と星夜さんが戦うような構成に見えるのですが。」

セシリアさんの言う通りだ。

「いくら電童にデータウエポンがあるからと言ってもこの戦力比は…。」

ボーデヴィツヒさんも罪悪感がありそうだ。

「連戦ならともかく…同時って…。」

鈴、それはそれできつい。

「この目的は…?」

簪さんも理由を知らないようだな。

『ああ、天野の能力を見るのにこれ以上適した状態はあるまい。』

「だからって1対6は…。」

『データウエポンでどうにかできるだろ?やってみせろ。他の生徒達も観ているぞ?』

拒否権がない…。

「仕方ない…。やるか！」

気合いを入れ、構える。

「星夜はいいのかよ!？」

「一夏…この学園で織斑先生に逆らえる生徒っている？」

「居ねえな…。」

「でも、タコ殴りは…さすがに…。」

「鈴、こちらは織斑先生の言う通り、データウエポンが居る。全部出せば数では勝つ。」

「そりゃあそうだけどさ。」

「戦力差はそれでも酷いものだな。」

「ボーデヴィツヒさん、常に戦場でもフェアとは限らないしね。」

「…一理あるな。」

「みなさん…それで納得されて良いのでしょうか？」

「セシリアさん、そっちは数が多いだけ、こっちは連携がいい。」

「たしかにこれほどの人数での共闘はありませんが…。」

「星夜…いいの？」

「シャルロット…この際、俺の限界に挑むとするよ。」

「そ、そうなんだ…。」

「せ、星夜くん…。」

「簪さん、戦いは数だけじゃないってことを俺は証明しなきゃいけないよ。」

「か、勝つつもりなんだ。」

それぞれは困惑しながらも構える。

「じゃあ、織斑先生…合図を。」

『では…天野星夜対その他1年生専用機持ちの試合を開始する!』

「二こつち雑!?!」

「ファイルロード!!データウエポン!!」

電童の周りに蒼、翠、紅、白、紫、橙の光が出る。

全てのデータウエポンたちを召喚する。

「行くよ!!みんな!最初は好きにしていよ。」

データウエポン達がそれぞれ飛び出す。

「その赤き壁、撃ち抜かせていただきますわ！ユニコーンさん！」

スターライトMkⅢとビットを展開しユニコーンと対峙するセシリアさん。

「ボア、あなたはこれらすべてを止められる？」

春雷と山嵐を展開し構え、ボアを見る簪さん。

「6体同時召喚ってなかなかの迫力ね！レオ！かかってきなさい！」

双天牙月を構え、レオに飛び込む鈴。

「いくら蛇だろうとこのワイヤーブレードを避けられるか!？」

プラズマ手刀とワイヤーブレードを構え、バイパーと格闘戦を始めるボーデヴィツヒさん。

「ブル！僕の高速切替についてこれる？」

ブルに対して挑発的な笑みを見せるシャルロット。

「こい！ドラゴン！俺がドラゴンスレイヤーだ！」

ドラゴンに対して雪片を構える一夏。

さて、最初は小手調べかな？

「いくらファイヤーウォールでも！多角的な攻撃なら！」

ユニコーンに対してビットでの同時攻撃を行い翻弄するセシリアさん。

たしかにファイヤーウォールは1面しか防げないので様々な方向から来るビットは有効かも知れない。

だがユニコーンは多少のダメージを気にせず真っ直ぐに突き進んだ。

「そのまま突き進むとは！やりますわね！ユニコーンさん！」

インターセプターを展開し、セシリアさんはユニコーンとの接近戦に移行する。

「広範囲に展開した山嵐をすべては防げるかな？」

簪さんはボアに向けて山嵐を広範囲に撃ち込む。

ボアは鼻のガトリングを撃ちながら前進していく。

「広範囲なら一転突破？それだけじゃ私に勝利への道は造れないよ？」

夢現を展開し、ボアに斬りかかる簪さん。

「レオ！どうせあんたにや衝撃砲は当たらないんでしょ？こっちはどうよー！」

鈴は双天牙月を接続し、振り回しながら攻撃する。

レオは鬣にあるカッターを回転させながら双天牙月を防ぎ、爪で攻撃する。

「なかなか器用じゃない！」

蹴りなどを駆使してレオとの攻防を続ける鈴。

「ちいっ！人型でないとこもやりづらいのか!!」

プラズマ手刀やワイヤーブレードを軽々と回避されるボーデヴィッツヒさん。

尻尾で軽く叩かれたり、強靱な牙に噛まれる。

「だが！相手が誰だろうと！簡単には負けん！」

うまく距離を開けるボーデヴィッツヒさん。それに食らい付くバイパー。

「ブル相手なら近づかれないようにすれば！」

ショットガンとアサルトライフルで近づかれないように弾幕を張るシャルロット。

対するブルは弾を自分の特殊能力で落とす。

「お互いに有効打がないね。」

ブルの突進をかわすシャルロット。

「だあーちよこまか動きやがってー！」

雪片を振りながらドラゴンを追う一夏。

ドラゴンは時おり炎を吐いて攻撃する。

「それなら、避けるまでもない！」

炎を気にせずドラゴンに突進する一夏。

ドラゴンは爪で反撃する。

「データウエポンだけだと牽制までかな？やっぱり。」

アリーナの中央で呟く。

ちなみに四肢のドライブユニットは稼働しエネルギーがたまっている。

「皆、俺との試合だって忘れてない？」

「まつまさか！」

「この配置…誘導されたのか!!」

俺が言うのとセシリアさんやボーデヴィツヒさんは狙いに気づいたようだ。遅いけど。

「閃光！雷刃撃!!」

アリーナ中央で溜めに溜めたエネルギーを開放し回転する。

データウエポンたちによっていい感じに誘導されたので全員にダメージが入る。

「データウエポン！ドライブインストール！」

装着箇所が被るのでブルはつけられないが、5体のデータウエポンを装着する。ブルの場所を今度井上さんに相談しよう。

「5体同時!?!」

「さすがに無理があるだろ！」

「なんかブルが可哀想だよ！」

5体の同時装着は流石に驚きを隠せないようだな。

シャルロットは一人そのままのブルが気になるようだが。

「まあまあ、ブルにはブルの仕事があるから。」

そう言いながらバイパーの力で分身する。

「囲まれた!?!」

「でも、あの消費ならファイナルアタックは飛んでこないはず！」

「全方位からボアのガトリング乱射はきついよ!?!」

驚いてるうちに仕掛ける。

「まずは！一夏！」

一夏にバイパーを叩き込む。

「続けて鈴！」

鈴にユニコーンの突きを食らわせる。

「お次はラウラ！」

ラウラにはガトリングボアのプレゼント。

「そしてシャルロット！」

シャルロットにはレオサークルのカッターで切る付ける。

「簪さんもね！」

簪さんにはドラゴンフレアの炎を浴びせる。

「セシリアさん、後ろね！」

セシリアさんには後ろからブルが突っ込む。

全員にダメージを入れつつ1ヶ所に固める。

「いいように遊ばれるだけで終われるか！」

「一夏！邪魔よ！離れなさいよ！」

「ちがう！これはブルの力だ！」

「まだ説明聞いてないぞ！」

「一夏さん！それが普通ですから！」

「ボアとはちがうタイプの拘束系？」

ボアの力を使い全員を1ヶ所に集める。

ボーデヴィツヒさんを中心にして、身動きとAICを封じる。

再び四肢のドライブユニットが稼働する。

一つ一つの威力は下がるけどこんな風に皆が見てるわけだし。

見た目が派手な技で決めますか。

「データウエポン！スパイラルアタック！」

装着している5体のデータウエポン達から蒼、翠、白、紅、紫の光が放たれ、突き進んだ。

6人は爆発に巻き込まれる。

『勝者、天野星夜！』

試合終了だ。

「ごめんな、ブル：どこかに同時装着できるように井上さんに相談するよ。」

データウエポン達を解除しつつ、ブルを撫でる。

でも、これって見た目だけで威力はむしろ単体のファイナルアタックより低いんだよな、エネルギーのロスが多い。

直撃だから今回は倒せたけど。実戦では使えないな…。

『試合は終了した、それぞれピットに戻れ。』

「わかりました。織斑先生」

指示にしたがってピットに戻る。

「やっぱり星夜は強いなく。」

「まあ、データウエポンの各能力をしつかり使えばそう簡単には負けないな。」

更衣室で一夏と話す。

「そういえばさ、ブルとバイパーはまだ調べてるのか？」

「ああ、一通り調べ終わったから明日GEARで聞くけど、来るか？」

「おお！行く！行く！」

「折角だしボーデヴィツヒさんも連れていこうか、あまり出掛けたりしてないそうだし。」

「そうだな。シャルロットに頼むか。調度さ、臨海学校に向けて買い物行こうと思ってたし。」

「終わったら帰りにレゾナンスでも行けば良いだろ。」

「よし、そうしよう。」

翌日、GEAR本社に向かう電車のなか。

「な、なあ星夜…。」

「どうしたの？ボーデヴィツヒさん。」

隣に座るボーデヴィツヒさんが訪ねてくる。

「私はGEARに関係ないのだが…いいのか？」

「それ言ったら星夜以外全員がそうよ。」

いつものパターンのため鈴が答えた。

「それに…バイパーが覚醒したときにはラウラさんもいらっしやいましたし。」

セシリアさんの言うとおりではあるな。

「そうかもしれないが…あのときの事などろくに覚えていない。」

「まああの時のラウラは気絶してたからな。」

確かに…。

「でも、GEARの方に確かボーデヴィツヒさんのデータも送ったんだよね？」

簪さんの言う通りあの場のIS全てのデータは送ったね。

「じゃあ、立派な関係者じゃない。私たちなんて来賓の対応してた

し。」

楯無先輩が言う。扇子は『非関係者』

「でもくたつちゃんさんやお姉ちゃんまで付いてきたんだ。」

「主が行くなら従者は従うのみ…ね。」

そんな会話の布仏姉妹。

「データウエポン…私にも使えるのだろうか…。」

なんか一人空気が違う箒さん。

「僕と星夜でブル…バイパーはほんとに誰だったんだろ？」

「未だにそこだけがわからないんだよな。」

「そうだ、ボーデヴィツヒさんにはデータウエポンがどんなものか説明をちゃんとした事無かったよね？」

「ああ、そうだな。折角だから教えてほしい。」

ボーデヴィツヒさんにはGEARにつくまでデータウエポンの説明をした。

いつも通りの会議室、ちよつと疲れたような感じの井上さんがいた。

「では、バイパーウィップとブルホーンに関してわかったことを説明しますね。」

「お願いします。」

「では、まずはバイパーウィップからですね。」

まさか…わかったの？

さすがは井上さんだ。

じゃあ、何時もの恥ずかしいやつか？

「今回は少し不思議な物で反応した感情と人物はわかりましたが反応した瞬間がわからないのですよ。」

スクリーンには俺とボーデヴィツヒさんの写真…いつ撮った？

……あれ？

「まさか…俺と共鳴したのは…。」

「はい、ボーデヴィツヒさんと星夜くんの自らを信じ、力とする心…『自信』です。」

後ろのスクリーンに自信の二文字。

「先程…星夜達からはデータウエポンがどんな存在かは聞いたが…
本当なのか…？私はあの時は…。」

ボーデヴィツヒさんも信じられないって感じの態度だ。

あのタイミングだと…もしかして。

「このときにお二人は相互意識干渉状態だったそうですね？」

俺が黒桜を殴った映像がスクリーンに映る。

「はい、そうみたいです。」

「しつかりとは覚えていませんが…。」

「それぞれ機体のデータを解析するとこの時に強く共鳴しバイパーは
目覚めたようです。」

「そうだったんですか。」

「自信…。」

自分の胸に手を当てて何かを思うボーデヴィツヒさん。

「さて、次は特殊能力ですね。」

そう言って映像は電童が分身する時の物に切り替わる。

「あの時はいきなり電童が増えるからびびったわよ。」

「いきなり8人分身…まるで忍者だな。」

鈴や箒さんが感想を述べる。

「はい、バイパーの能力は圧倒的な加速による、イリユージョンフラツ
シュです。」

「圧倒的な…加速…？」

「じゃあ、電童がその気になったら目に見えない速度で動くってこと
かよ。」

「はい、バイパーを装備している間は高速移動が可能になりますよ。」

「でも、レーダーとかは…。」

「バイパーの方でその空間にエネルギーを微量に撒いて簡易的にシヤ
ミングを行っているのでそれぞれが微少のエネルギーを持った機体
のように映ります。」

「それならなかなか判断はできないわね。」

そう答える楯無先輩。

「では、次はブルホーンですね。」

スクリーンの映像が変わる。

「ブルホーンがデユノアさんと共鳴で覚醒したのはご存じですね？では、どんな心に反応したのか？」

これで最後、これで最後、そうしかも一回はやらなくてすんだんだ。

『僕は知りたいたんだ！本当の事を！その為にもここでやられるわけには！』

『お前がなんで俺達を襲うかは関係ない！どんな策で来ようとも！』

『2人の『知恵』で突破する!!』

よし！終わった！この恥ずかしさは今後は無い！やったぜ！

「今回は二人の知識を持って、勝利を得ようとする心…『知恵』ですね。」

スクリーンには知恵の二文字。

「知恵…かぁ。」

「シャルロットらしいな。」

「うむ、戦力差を覆す戦略を立てたのだ。納得だな。」

皆、シャルロットには納得のようだな。

「でも、星夜が知恵？なんかイメージ出来ないんだけど…。」

「ちよ、鈴と俺なら確かに合わないかも知れないけど！」

「ちよっと！星夜はあたしが馬鹿つて言いたいわけ!？」

鈴がこちらに食いかかってくる。

「先に言ったのは鈴だ。よってこれは正当な反撃だ。」

「なんですつってえ〜！」

「ほんと、星夜と鈴は仲良いよな。」

ちなみに未だにあの誤解は解けていない。

「鈴、ここにいる真の馬鹿をどうする?。」

「ほんとにどうして殺ろうかしら?。」

…
なんか最近は学園内に〈星×鈴を見守る会〉とか出来てるらしいし

「何で2人して俺を睨むんだよ。」

「この唐変木が……。」

「こいつは未だに本気でそう思ってたんだろうな……。」

「では、ブルホーンの特異能力ですが……。」

「見たところボアと違う拘束系の様でしたけど。」

「はい、これは重力操作能力、オートプレッシャーです。」

「重力操作ですか。」

「ええ、ブルホーンから放たれた光が当たった対象に掛かる重力を操作して拘束します。ですので対象の位置を操作することも可能です。」

「えっ？重力を操作するのなら下に落ちるだけじゃないんですか？」

「一夏が聞く。」

「正しくは『対象に働いている重力を操作する』ので、その方向を下以外などにできます。この銀色の敵に対して行ったのはあの中心部に対して強力に作用する重力を設定したからこのように球体になりました。」

「これはなかなか使いやすいな。」

「なるほど。だから昨日は私を中心にして集まったわけだな。」

「ボーデヴィツヒさんは動きを封じないとA I Cが来るからね。」

「以上が今回の報告内容ですね。」

「部屋の明かりがつく、これで終了だ。」

「あっ井上さん。ユニコーンとブルが装着箇所が被るのってどうにかなりませんかね？」

「なるほど。確かに被ってますね。こちらでもなにか考えておきます。」

「お願いします。」

そんな感じで今回の報告会は終了した。

で、このあとは…レゾナンスで買い物だ。

第31話 《楽しい買い物》

GEARでの報告会の後、俺―天野星夜―は皆と一緒に大型ショッピングモールのレストランに来ていた。

「さて、どこから行こうか？」

皆に聞いてみる。

「まずは腹ごしらえか？」

時計を見つつ一夏が言う。

確かにいい時間だ。

「この人数だし、無難にファミレスかしら？」

楯無先輩が言う通り、11人…多いな。

先輩の扇子には《団体様》って書いてある…あれの原理知りたい…。

「これだけ居ますとそちらの方がいいですわね。」

周りをぐるっと見渡してセシリアさんがうなずく。

「まあ、品揃え的にもファミレスがいいだろう。」

箒さんもうなずく。

「じゃあ、あっちね。」

そう言っつて鈴は歩き出す。

「僕もラウラもあまり詳しくないから道案内をよろしくね。」

「すまないが、よろしく頼む。」

シャルロットとボーデヴィツヒさんは俺の後ろを着いてくる。

「じゃあ行こうか？星夜くん。」

「簪さん？抜け駆けは許しませんわよ？」

俺の隣を簪さんとセシリアさんで挟む。

「あまのんく。レッツゴ〜。」

「本音、天野くんにたかるつもり？駄目よ？」

まあ、ファミレス位なら気にならないけど…。

まあ皆で食べるのは悪くない。

ボーデヴィツヒさんやシャルロットはファミレス初体験だったそうだ。

「さて、食い終わったし、買い物に行きますか？」

一夏は店を出るなり言った。

「一夏く、何から買うの?」

鈴は一夏を見上げるような形で言う。

まあ、身長差のせいだろう。

「この人数なら一回別れて場所と時間決めて後で合流で良いかな?」

この人数だと目立つ…。

早めに別れておこう。

「そうね、星夜くん組と一夏くん組に別れようか?」

楯無先輩が言う。扇子は『班別行動』

「えっと星夜と俺が別れて…。」

俺と距離を開ける一夏。

「私は一夏と共に行くぞ、お馴染みだからな。」

そう言いながら一夏の隣へ行く箒さん。

「私も一夏と行くわ。」

負けじともう片方の隣を取る鈴。

「じゃあ、僕とラウラもそちらに行くよ。そうすれば半分でしょ?」

ボーデヴィツヒさんの手を取り、一夏によるシャルロット。

一夏組は箒さん、鈴、シャルロット、ボーデヴィツヒさんね。

「じゃ、こっちは。更識姉妹に布仏姉妹、そしてセシリアさんね。」

軽く見回しながら言う。

「ちよつと〜セットみたいに言わないでよ〜。」

泣いた振りの楯無先輩。扇子は『ニコイチ』

なんか意味違うような…。

「間違いでは無いですし。それでよろしいのでは?」

全く気にしてない虚先輩。

「ラウラウ〜デュツチ〜またね〜。」

手を振る本音さん。

「星夜くん、どこからまわる?」

俺の横に着く簪さん。

「今度の臨海学校で使うものだから、水着からかな。」

後はいくつか服かな?

「あの、星夜さん！よろしければ私の水着と一緒に選んでは頂けないでしょうか？」

そうくるよねやっぱり。

「わ、私も選んで欲しいな…。」

「あまのんのく好みを探ろく。」

まあこの3人なら変なのは選ばないでしょ。

「わかりました。取り敢えず水着売り場に向かいますしょう？」

「星夜くくん…おねーさんのも選んで欲しいな〜♪」

楽しそうにお願いをしてくる楯無先輩。

「2年生は臨海学校ありませんよね？」

「それでも水着は使うわよ？特に今年は星夜くんも居るしね♪」

この人はなに言っても引き下がりがりそうにないな。

「わかりました。全員せめて候補選んでおいてください。その中から俺も言いますから。」

「だつてさ、虚ちゃんも買う？」

にこやかに笑いながら虚先輩を見る楯無先輩。

「私は去年のがありますので…。サイズも変わっていませんし。」

女性は毎年替えるイメージがあるけどね。

「駄目よく虚ちゃん、折角星夜くんが選んでくれるのよ？ここは買っておかなきゃ！」

俺を指さしながら言う楯無先輩。

「楽しんでますよね？」

虚先輩はそんな楯無先輩を軽く睨む。

「当然♪」

そんな会話しているとすぐに水着売り場に着く。

「じゃあ、自分は先に自分の買ってきますので、その間に選んでおいてください。」

「は〜い。簪ちゃんには刺激的なの選んでおくから♪」

笑いながら楯無先輩が言う。扇子は『過剰露出』

どんなの選ぶつもりですか!?

「楯無先輩は自分の選んでください。」

「冗談よ♪」

本当にこの人は楽しそうだな。

あつた頃の悩みっぷりが嘘みたいだ。

「天野くん、お嬢様はこちらでも見張ってますから。」

「虚先輩、お願いします。」

さて、男性用水着売り場に行こう。

まあ、そんなに派手なのは要らないしトランクスタイルのやつで良
いか。

この辺は男は楽でいいな。

会計を済ませて、女性用水着売り場に向かう。

「あつ、星夜さん。どちらが良いと思われませんか？」

「星夜くん、どっちが良いかな？」

「あまのんくこれどうかな？」

俺を見つけるなり手に持った水着をこちらに見せ、聞いてくる人。

まずはセシリアさん。

青と白か…多少のデザイン差はあるけど両方ともビキニタイプか
…。

「セシリアさんは…左手にもった青の方がいいかな。」

色も機体と合うしね。

「そうですね、ではこちらに致しましょう。」

簪さんは緑のレース付きのワンピースと黒のビキニタイプか…。

「簪さんは…右手にもった緑のレースつきかな。」

「ん、ありがとう。これにする。」

本音さんは…。

「本音さん…それは水着なの？」

本音さんが持つてるのはどう見ても着ぐるみなんだけど…。

猫と狐かな？

「そうだよ。」

「えつと…狐のほうで…。」

「おつけ。ありがとあまのんく。」

3人は会計へ…本音さんは本当にあれでよかったのか？

「星夜くくん。これとかどうかしら？」

後ろから声を掛けられた。楯無先輩か…。

「もう少し自分のことを考えて選びましょうよ…。」

なんで赤のスリングショットなんて選んだんですか…。

「つまりこれなら、星夜くんの視線を独り占めね！」

「虚先輩…この人どうにかしてください。」

横にいる虚先輩に助けを求めろ。

「天野くんに引かれてますけどよろしいのですか？後日、プール等に誘っても来てくれないと思いますよ？」

「むく、それは困るから。こっちはかしら？」

今度はビキニタイプか…まだましだな。

「それをお願いします…。」

「おっけく、虚ちゃんは？」

「私は買いません。」

「そっか？残念。」

そんな会話しながら会計に行く先輩達。

その後は適当に服とかを買っていった。

途中似たような感じでどっちが良いか聞かれたけどそれくらいならね。

時間になったので一夏組と合流する。

うくん。安定の一夏クオリティか、鈴と箒さん、シャルロットの機

嫌が悪そうだ。

「そっちは何かあったのか？空気が重いぞ。」

一夏に聞いてみる。

「いや、気がついたらこうなってるさ。」

この唐変木じゃ解らないだろうな。

「そう言えばボーデヴィツヒさん。服買ったの？」

別れるまでは学園の制服だったはずだ。

今は黒のワンピースに身を包んでいる。

「ああ、シャルロット達に言われてな。制服だところのような状況では

むしろ目立ってしまうとな。」

「そうだね。休日には制服の人は居ないだろうし。服は誰が選んだの？」

「ん、数があつた方が良いと言われてな、皆にひとつずつ見立てて貰つた。これは一夏が可愛いと選んだものだ。」

あつ不機嫌な理由が大体読めてきた。

「一夏め…。」

「なんであたしのは選ばないのよ…。」

「ラウラにだけだよ可愛いって言ったの…。」

やっぱりな！

「星夜の方は無かつたか？」

「特に問題なく終わつたよ。そつちとは違うからな。」

「そうかこつちは横暴なやつに絡まれたりして大変だつたぜ。」

大袈裟にため息を吐くような動作をする一夏。

「お前が小物オーラでも出してたんじゃないか？」

「小物オーラって…。」

一夏がショックを受けたような仕種をする。

「確かに星夜つて普段から凜々しいからその手のやつらに絡まれないんじゃないの？」

「一夏も星夜みたいに普段からしつかりしてれば格下に見られることもないじゃない？」

鈴は俺と一夏を見比べながら言う。

「そうですね、あの手の人たちは自分より弱そうな人を狙いますし。」

セシリアさんもうなずく。

「全く、普段からシャキツとしろ。一夏は格好いいのだから…。」

箒さんの言葉の後半はゴニョゴニョ言つた為、一夏には届いていない。

しつかり言えばいいのに。

「でもなあ…しつかりしてるはずなんだけどな…。」

「一夏…普段から織斑先生に見られてると思えば？」

そうすればましになるだろ。

「普段から千冬姉に…？それだと気が休まらないんだけど。」

「知るか、取り敢えずそう思っていると織斑先生には言っておくよ。」

その言葉を聞き、一夏はあせる。

「それはやめてくれ！」

「冗談だ。」

そんなこんなで買い物は終わった。

その日の夜。

俺と一夏、シャルロットで自動販売機前で軽く話してる時だった。

一夏が急に言い出した。

「そういや、折角の呼び名が普通になっちゃったな。」

シャルロットを見ながら言う。

ああ、シャルロットって呼び方ね。

「そういうなら愛称でもつけてあげたらどうだ？」

一夏に提案する。

「本人が良ければそれでも。シャルロット？」

「えっ僕は全然構わないよ。折角だしつけてほしいかな。」

シャルロットに言われて考える一夏。

「うーん。星夜はなんか良いのあるか？」

おい、言い出しっぺ。

「無難そうな奴だと後ろを削ってシャルかな？」

「あついいな！それ！呼びやすいし、親しみ安いし。」

一夏がうんうんとうなずく。

「シャルロットもそれで良いのかな？」

ここは本人に聞こう。

「う、うん。いいよ。全然いいよ！」

やたらと嬉しそうなシャルロット改めシャル。

「これからもよろしくな、シャル。」

「よろしく！シャル。」

「えへへ、よろしくね、星夜、一夏。」

彼女は笑顔だった。

第32話 《臨海学校》

7月5日、明日は臨海学校の日だ。

「明日から臨海学校だ、忘れ物等はないように、また、現地でもIS学園の生徒として節度を持った行動を心掛けるように。」

教壇では織斑先生がクラスに対して色々と言ってはいるがきつと大して効果はないだろう。

10代女子に海ではしやぐなつて無理な話だろう。

「では、明日は8時30分に出発するのから遅れるなよ？織斑、号令。」
一夏の号令で挨拶をして、今日の授業は終了だ。

「さて、荷造りしますかね。」

俺―天野星夜―は特にやることも無かったので部屋に戻って明日の準備を進めていた。

「初日は移動と自由時間、2日目が装備のテストやって3日目は帰るだけっつと…。」

予定表を確認し、荷物を用意する。
着替えと水着、タオル類…。

鞆に詰めていく。男は必要なものが少なくてこう言うときに楽だ。
2日目の装備テストでは電童用の新装備が送られてくる。

臨海学校には教員と生徒のみで行われるので専用機持ちには前日、現地に装備が届いてるそうだ。

テストする装備のスペックとテスト内容を確認する。
「ん〜。可変型ハンドウェポンね。名前はまだないのか。」

書類には〈試製大型可変大剣〉と書かれている。
非常に大きな大剣だ、全体で2m越えるのか。

さらに変形して大型の弓になるつと…。

「テストは近接時における取り回しと遠距離時の弓の威力と精度か…。」

確かに電童で大剣を振ったことはなかったな。

これは苦勞しそうだ。

そんなことを考えてるとドアがノックされる。

「あつあのっ！星夜さん！おりますでしようか？」

セシリアさんの声だ。

「セシリアさん？どうかしたの？」

ドアをあける。

「もしかして：明日の準備をさせていただきましたか？」

「ん？大体終わってるよ。話なら中で聞くよ？」

部屋の中を指差す。

「あつ、そこまで大きな話ではないので、ちよつとしたお願いがあります…。」

もじもじと頬を赤めながらこちらを上目遣いで見るセシリアさん、これは破壊力抜群だ。

「なつなにかな？出来ることなら聞くよ？」

「あつ明日の海での自由時間なのですが、出ればその、サンオイルを塗っていただきたいと思ひまして…一人では塗りきれないところもありますし…。」

一夏ならここで友達にくとか言うんだろうな。

「背中位なら…うん、いいよ。」

「あつありがとうございます。よろしくお願いします。では、明日の朝に。」

返事を聞くと嬉しそうにセシリアさんは帰っていった。

「オイル位なら…変な噂にはならないか…。」

他の人にもやつてとか言われそうだけどそれは仕方ないな。

男には解らない憧れのシチュエーションの1つなのだろう。

「さてと、準備はできまし、飯でも食べるか。」

準備も終わったので飯でも食べに行こう。

食堂に行くとボーデヴィツヒさんとシャルが居た。

「ボーデヴィツヒさんとシャルもこれからご飯？」

「ああ、星夜か…。」

「うん。何を食べようかなって。」

えーと今日のメニューは…。」

「明日の夕飯は向こうの旅館だから和食だろうな…。」

メニューを見ながら考える。

「そう考えると洋食かな？」

確かにシャルの言う通り洋食なら被り難いだろう。

「なるほど、そうやって食事のバリエーションを増やしているのか。」

「ボーデヴィツヒさんはあまり食堂じゃ見なかったよね？」

6月の間は見た記憶がない。

「聞いてよ星夜、ラウラったらさ『これで十分だって』携帯食しか食べないんだよ。」

「普通の軍隊でも主計科とかが作るよね？」

「行動に必要な栄養を補給出来ているから問題は無いのだが…。」

「ね？だからさ、見聞を広げる為に食べようって言ってるね。」

なるほど、シャルなりの気遣いか。

「皆と一緒に食事をするのを目的にしてみたら？」

「ふむ、食事を通じて親交を深めて情報を得るのか…。」

なんかずれてるな…。

「皆で行ったファミレスはどうだった？」

「あれほど食事を楽しんだのは初めてだった。」

あんなに笑ったボーデヴィツヒさんはこちらも初めてだった。

「そんな『当たり前前な幸せ』を増やしてみようか？」

「そうだよ。ラウラ、今は学生なんだから楽しまないね。」

「星夜やシャルロットの言う通りだ。楽しんでみるとしよう。」

それぞれ食事を決めてテーブルへ。

「しかし、ボーデヴィツヒさんも変わったね。」

「そうだね。最初は近寄りたいたい感じがひしひしと出てたもんね。」

シャルと一緒にボーデヴィツヒさんを見る。

「すまない、先月の私は忘れてくれると助かる…。」

顔を赤くしながら言われた。

「わかってるよ。あの頃は『ラウラ・ボーデヴィツヒ』じゃなかったんだからね。」

あれは俺が言ったことでもあるし。

「そうだ、星夜が教えてくれたから、私は今、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』としてここに居れる。」

「それなら良かった。」

「哲学的な話だね…。って僕もそうか。」

シャルが考えるような仕種をする。

「シャルロットも？」

ボーデヴィツヒさんがシャルに聞く。

「うん、僕が今、ここに『シャルロット・デユノア』として居れるのは星夜に言われたからだよ。」

「一夏も居ただろ…。」

「でも、あの時、星夜が『お前がどうしたいかだ』って言わなかったら…一夏の優しさに甘えるだけで自分では何もしなかったかも…。」

「どちらにしても、決めて立ち上がったのは2人自身だ。俺はちよつと手を貸しただけ。」

「それでも私はあの言葉に教えられた…。」

「うん、僕はその言葉に救われたんだよ…。」

「ありがとう。星夜。」

2人はこちらを見てお礼を同時に言ってきた。

「面と向かって言われると恥ずかしいものがあるね。」

「あと、星夜に頼みがある。」

「ボーデヴィツヒさんが？なになかな？」

「私の事も名前で呼んで欲しい…。親しいものは名前で呼び合おうと副官から聞いた。」

「わかったよ。ラウラさん。」

名前で呼ばれて嬉しそうな顔になるラウラさん。

「まって星夜、さん付けも無しだよ。」

横からシャルが言ってきた。

「ラウラは親しい人同士の呼び方を希望してるんだよ。だったらさん付けみたいな他人行儀の呼び方はダメだよ。」

シャルが胸の前で腕をクロスさせてバツ印を作る。

「シャルロット、別に私はそこまで…。」

ラウラが遠慮がちに言う。

「シャルの言う通りだな。ごめん、ラウラ。」

シャルの言うことは間違つて無いので訂正しておく。

「私は気にしてないが、そっちのほうが嬉しいな。」

嬉しそうにラウラが答える。尻尾があつたら振つてそうだな。

「じゃあこれからはラウラだね。」

シャルも嬉しそうに言う。

「よろしく頼む…。」

ラウラは顔を赤くしながら言う。

食事が終わり、食器を片付ける。

「じゃあ、また明日。」

「うん、明日ね。僕とラウラの水着姿を楽しみにしててよ。」

シャルが小悪魔的笑みを浮かべながら言う。

確かに買ったときは別行動だったからデザインを知らないな。

「楽しみにさせてもらおうよ。」

「う、うむ、楽しみにしておけ。」

ラウラが少し慌てながら言う。

イメージして恥ずかしくなったのかな？

2人と別れ、部屋に戻りその日はそのまま寝た。

夜の学生寮2階の一室。

「ふっふっふっ…。」

そこには不気味に笑う更識楯無が居た。

「今頃、簪ちゃんはぐっすり眠っているはず！」

謎の発言をする楯無の手には先日 of 買い物の際に星夜からダメ出しを貰った水着が握られていた。

「こっそりと簪ちゃんの水着をこれにすり替えれば…。星夜くんとの面白ハプニングは待った無し！」

しっかりと簪のサイズぴったりの水着を用意している。

「そーすれば簪ちゃんとの距離も縮まるわね！セシリアちゃんには悪
いけど。」

一応これでも妹の為にやっている。(8:2の割合で楽しんでいるが。)

「ではーいざ行かん！簪ちゃんの部屋へ！」

そう言つてドアノブに手を掛けて部屋を出ようとする。

いきなり自分のISへミステリアス・レイディが紅と翠の光を放つ。

光が消えるとドラゴンフレアとガトリングボアがエイリアス体で居た。

「あら？どうしたの？こんな時間に2体揃つて来るなんて珍しいわね？」

放課後にデータウエポンが遊びに来たことは数回あった。

それでも常識的な時間だった。

「まさか！私の手伝い！？簪ちゃんにはこの水着が似合うわよね？」

嬉々として2体に水着の入った袋を見せる。

しかし2体のデータウエポンはがっくりと項垂れるような動作をした。

「えっ？駄目？駄目なの？」

ドラゴンとボアは頷く。

「だってこれさえ着れば星夜くんの視線は釘付け間違いなしよ？そうすれば簪ちゃんと急接近間違い無しよ！」

ドラゴンが楯無の手にもつ袋を奪う。

「なっ！その水着を着て恥ずかしさに悶える簪ちゃんが見たいのになっ！」

ドラゴンの口から小さな炎とボアの鼻先のガトリングから弾が放たれて楯無に当たる。

エイリアス体では攻撃力は無く精々冬場の静電気位のダメージだ。

「えっ？目的が変わってる？可愛い簪ちゃんを見るのはおまけよ。あくまで星夜くんとーあいたた！」

台詞を言い終わる前に再度2体からツツコミかわりの攻撃を食らう。

「とにかく、貴方達が私の敵だつてことはよくわかったわ！行くわよ

！」

「騒がしいぞ、更識……何時だと思っている。」

ドアが開き、織斑千冬が入ってきた。

「あつはは。織斑先生……お疲れさまです……。」

「とつとと寝ろ、わかつたな？妹の荷物に下らん小細工などするな。」

さすがの楯無も千冬に逆らえる訳もなく頷くしかない。

「わかりました……。」

「まったく、私も明日は早いのだ。無駄なことをさせるなよ。」

千冬は去って行った。

「はあ、諦めるしか無いか……。データウエポン達にやられたわ。」

ドラゴンとボアは既に居ない。千冬が来るまでの時間稼ぎだったようだ。

「よし、夏休みに着せよう……。」

簪の知らぬ所で良からぬ事を考える楯無であった……。

「ではみなさん、揃いましたので出発しますね。」

予定より10分早く集まった生徒達。

普段は時間ギリギリに来る生徒もこの手の行事ではむしろ一番乗りしたりするから現金な奴である。

昔なら確実に銀河がそのポジションだったな。

バスは合計で4台、1クラス1台に乗る。

一夏と俺の隣の席を取ろうと騒ぎになりかけたので前もって作つたくじで決めさせた。

朝から織斑先生に怒られたくないしな。

「星夜はわざとわざとくじなんて作ってたんだな。」

一夏が感心する。

「いつもの事を考えろ。一番公平で速やかに決められるだろうが。」
学年別トーナメントの事を思えばこの位はね。

一夏の隣はシャル、俺の隣は本音さんだ。

「よろしく、あまのくん。」

「よろしく。本音さん。」

本音さんなら変に気を使わなくて楽かも。

「あまのんはく遠足のバスは寝る派？お菓子派？ゲーム派？喋る派？」

「行きは大抵横の人と話したり、前後の席の人たちと何かやってるな。帰りは大体の人が寝てないかな？」

「そうだねくはしゃいで帰りは寝ちやうよねく。」

「本音さんはお菓子派だよね？」

「そのとくりく。」

鞆の中から沢山の菓子類が出てくる。

「まだ出発したばかりだよ？途中でサービスエリアとかも寄るみたいだし、食べ過ぎは良くないよ？」

「大丈夫だよく。甘い物は別腹く。」

さっそく菓子を1つあけて食べ始める本音さん。

「まあ、程々にね。」

「うん。」

こうしてバスは綺麗に並び目的地へ走っていく。

第33話 《海！乙女の闘い？》

「では、ここでは昼食を含めた休憩とする。出発は1時間後だ。遅れたら置いていくのでそのつもりで。」

織斑先生の言葉が終わり、全員がバスから降りる。

サービスエリアで昼食をとってから現地に着いてその後は自由時間だ。

俺―天野星夜―はサービスエリアのメニュー一覧の前に立つ。

「さて、何を食べようかな。」

メニューを見てると横に鈴が来た。

「こう言う所って値段の割りに味がね…。」

確かに、ちよつと割高な設定のが多いな。

「一夏のところ行かないの？誤解が解けないよ。」

ただでさえ謎の組織が暗躍してるのに。

「半分諦めてるわ。元凶が全く反省しないし。」

確かにそうですけど！

「そんな発言すると1人でビットと大量のミサイルを相手にする事になるよ？」

セシリアさんと簪さんが全力で来そうだよ。

「レオでどうにかならないかしら？」

鈴はすぐにレオを使おうとするな。

「エネルギーとかは見えるけどね。実弾は…。レオ以外は使わないの？」

「ん〜。使えなくはないんだけど、なんかしつくり来ないのよね。」

相性的な問題かな？

「早く決めないと、席も少ないし。」

ちなみに一夏は既に食べ始めていて周りを多数の女子に囲まれている。

「星夜さんは決まりましたか？」

「星夜くん、決まった？」

「あまのん〜このパフェ沢山苺が乗ってるよ〜。」

食事を既に決めてトレーに乗せたセシリアさんと簪さんと本音さん。

本音さんのは甘味しか乗ってないよ。

「本音さん。ご飯食べよ?」

「これは主食だよ!」

「本音、パフェはデザートだよ。主食じゃない。」

「女の子は甘い物で動いてるのだから。」

「おっしやりたいことは解りますが…。」

きつとこれは治らないだろうな。

「このチャーハンセットにするか。」

「無難にラーメンセットにしときますか。」

2人で買ってる間に3人には席をとって貰った。

2人で列に並ぶと周りからお似合いだのラブカップルだのと話し声が聞こえる。

「なんか最近は鈴とセット扱いされるのになれた気がする…。」

「なんだかんだ言って星夜も諦めてない?」

だって唯一の味方が半分諦めるのにどうしろと?

「孤立無援って救いがない…。」

「しかも最近の一夏は事あるごとにあたしとあんたを組ませようとするしね。」

そう、いい笑顔の一夏が謎のお膳立てをすることが多い。

「あの唐変木め…。」

「それが嫌ならあんたがセシリアか簪と付き合えば?」

ごり押しで解決かよ。

「力技過ぎ…。」

「でも、それくらいしないと一夏は止まらないわよ?」

「それなら鈴が一夏に正直に告白すれば終わらない?」

「あいつは絶対に『お前には星夜が居るだろ。』位は言うわね。」

うわー違和感なく想像できるのが悔しい。

食事を受け取り、席に向かう。

「星夜さん、最近は鈴さんと何かをすることが多くありません?」

「そうだね星夜くん、鈴さんと一緒なの多くない？」

席に着くとセシリアさんと簪さんに睨まれた。

「それが嫌なら事あるごとに組ませようとする一夏をどうにかしなさいよ。」

「最大の原因はあいつだ。」

2人に反論しつつご飯を食べる。

「あと、なんか変な組織が学園内に出来てるだろ？」

「そうそう、へ星×鈴を見守る会だっけ？」

「ええ、あるそうですね。」

「沢山の人が星夜くと鈴さんの行動を見てるらしいけど…。」

「この前は2人の薄い本作ってたよ。」

「本音さん、そう言う情報はもつと早く欲しい…。」

「それはお姉ちゃんが全力で駆逐したから平気。」

楯無先輩グツジョブ！

「あたしと星夜でどんな本作ったのよ…。」

頭を抱える鈴。

「内容を知りたいような、知りたくないような。」

この前偶然見かけた夏×星の本よりはましだろうが…。

「うん、それは忘れよう。ご馳走さま。」

皆食べ終わったので食器を片付ける。

あと少しで到着とはいえバスでの移動だ。

時間があるうちにトイレに行こう。

皆と別れて案内板を見てトイレに向かう。

その時…ほんの一瞬周りがぼやけたような感じがして。

『今回も狙われております…。ご注意を…。星夜さま…。』

不意に誰かに声をかけられた。

サービスエリアは一般の客も居る。沢山の人が居るなかで俺だけに向けられたメッセージ。

どこから声がかけられたか解らず周りをぐるっと見渡したがそこに怪しい人物は居なかった。

狙われてる…？俺が…？

心当たりがありすぎるのも確かだが今のは誰だったんだ…？
知ってるような…知らないような…。

「おーい、星夜どうした？」

一夏が声をかけてきた。

「あつ一夏か…何でもない。」

いたって冷静に振る舞う。

「そうか？…ならいいけど。トイレに行くんなら早く行こうぜ？…そろそろ出発だ。」

時計を見るともう10分前だ。急がないと。

さっきの警告は心の中で留めておこう。

さっさとトイレを済ませてバスへ急いだ。

その後もバスに揺られてトンネルをいくつも抜ける。

「海！見えたあ！」

抜けた先で横手に海が広がる。

天気もよく、水平線の向こうまでよく見える。

「本音さん、海が見えてきたよ。お菓子は片付けてね。」

「うん、わかったよ。あまのん。ポッキー食べる？」

そういいながらポッキーを俺に差し出す本音さん。

「うん、ありがとう。」

しかし、本音さんは本当にずっとお菓子を食べてたが大丈夫なのか？

「ん？あまのんどうかしたの…？」

お菓子を片付ける本音さんはこちらの視線に気づいて聞いてくる。

「いや、ずっとお菓子を食べてたからね。大丈夫なのかなーと。」

「大丈夫だよ。全部ここに行くから。」

自信満々に自分の胸を指差す本音さん。

確かに背にたいして胸は大きいが…。

「星夜さん…？」

後ろの席に座るセシリアさんから黒いオーラが。

「なんででしょうか？セシリアさん？」

汗をかきながら振り向く。

「一体今はどこを見られていたのでしょうか？」
顔は笑っているが目が笑ってない。

「あまのんは私のナイスばで〜に夢中なのだ〜。」
そんなオーラもどこ吹く風の本音さん。

「むむ、つまり星夜さんは胸の大きい方が好みと？」
「そんなことは一言も言ってませんよ。本音さんも変なこと言わないの。」

「あまのんは〜おっぱい魔神だつてかんちゃんとりんりんに伝えておくよ〜。」

「頼むから変な噂を流さないでくれ…。」

しかも簪さんと鈴に伝えたら俺の命が確実にすり減りそう…。

「冗談だよ〜。」

軽く笑う本音さん。本当に勘弁してくれ…。

しかし、セシリアさんの隣に座ってるラウラが変だ。

朝からずつと落ち着かないのかそわそわしている。

「なあ、ラウラは大丈夫か？なんか落ち着きが無さそうだけど。」

「だ、大丈夫だ。あまりこう言う状況に慣れていないだけだ。」
ならいいが。

「お前たち、そろそろ目的地だ。ちゃんと座っている。」

織斑先生の一言によつて全員が席にしっかりと座る。

そして間もなく到着する。

4台のバスからはIS学園の生徒がわらわらと出る。

「ここが今日から3日間お世話になる〈花月荘〉だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ。」

「よろしくお願ひします。」と全員で挨拶をする。

「はい、こちらこそ、今年の一年生も元気があってよろしいですね。」
着物を着た女将さんが挨拶をする。

毎年お世話になってるようだな。

「あら…こちらが噂の…。」

女将さんと目が合う。

「天野星夜です。よろしくお願ひいたします。」

挨拶をして、頭を下げる。

「男が2人居るので色々と手間をかけてしまい申し訳ありません。挨拶をしろ、織斑。」

ちよつとタイミングを失った一夏の頭を押さえて下げさせる織斑先生。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

「うふふ。清洲景子です。ご親切にどうも、しっかりしてそうな子達ですね。」

「天野はしっかりとしていますが、こちらは不出来です。ご迷惑をお掛けします。」

一夏を指差す織斑先生。

「織斑先生は弟さんにずいぶんと厳しいんですね。」

「手を焼かされてますので。」

一夏は不満そうな顔で見ているが事実なので何も言わないようだな。

「では、みなさん、お部屋へどうぞ。別館を更衣室としておきましたので、海へ行かれる方はそちらをご利用くださいな。」

女将さんの説明を聞き、みんながはいと返事をする。

バスの荷物室に預けてあった旅行鞆を受け取り、部屋をめざす。

「そういうえば、織斑先生。」

織斑先生に声をかける。

「どうした？天野？」

「しおりを見ても俺と一夏の部屋が書いてないのですが。」

そう、しおりの部屋割り一覧を何度見直しても俺と一夏の名前が無いのだ。

まあ理由は大体予想つくけど。

「ああ、お前なら解っているとは思うが馬鹿対策だ。織斑も付いてこない。」

織斑先生に言われるまま2人で後ろに付いていく。

「こい。」

「えっ？こいって…。」

「なるほど…。」

ドアには〈教員室〉と書かれた紙が貼つてある。

「最初は2人で一部屋という話だったのだがな。それだと確実に天野を簀巻きにして廊下へ放り出して織斑との2人きり空間を作り出すとうとする馬鹿が居るといふ話になつてな。」

「はあ、と溜め息をつく織斑先生。」

「箒さんですね、解ります。」

「結果、私と同室になったわけだ。これなら、馬鹿共も近付けまい。」

「織斑先生の言う通りですね。」

「そりゃあ、そうだろうけど…。」

「なんかこつちを見て不機嫌そうな一夏。」

「織斑、安心しろ、天野が私に手を出すことはないぞ。なにせこいつには凰が居るからな。」

「こいつはシスコンでもあつたな。」

「そうだった。」

「納得の一夏…つて。」

「織斑先生、俺と鈴はそんな関係では無いですよ?。」

「教師間でもこのネタで持ちきりだぞ?天野。」

「織斑先生がすげえ良い笑顔だ。」

「この人は解つてからかつてる。」

「まあ、魔王の城に飛び込む勇者はこの学園には居ないのは確かですね。」

「部屋に入り、鞆を置く。」

「大浴場はお前たち2人だけは時間制だ。深夜、早朝に使いたければ部屋の方を使え。」

「わかりました。」

「さて、あとは自由時間だ。好きにしろ。」

「織斑先生く、いらっしやいますか?。」

「山田先生の声が聞こえてそのまま織斑先生は外へ行ってしまった。」

「海、いくか?。」

「そうだな。せつかくの自由時間だしな。」

明日は丸々つぶれる訳だし。

しかし、あの警告が気になる…。

今回もつてことは今まで俺たちが襲われた事を知ってる人物って事になるしな。

「星夜、早く行こうぜ？」

小さいリュックを持った一夏に急かされこちらも準備をする。

「待たせた。」

部屋を出て、別館の更衣室を目指す。

途中で箒さんを見つけた。

なんか中庭の方を見てる。

「おおい、箒。どうしたんだ？」

一夏が声をかける。

箒さんの視線の先には地面から生えたら何か。

明らかに人工物だ。〈引っ張って下さい〉と書いてある紙が貼ってある。

「なに？これは？」

じつと見ていた箒さんに聞いてみる。

「さあな、私には関係ない。」

箒さんはそっぽを向くとそのまま歩いて行ってしまった。

「どうする？一夏？」

「引っこ抜くか…。きっと束さんのだ。」

知り合いのイタズラのようだ。

束つて…。

引っこ抜こうとする一夏。

「星夜さんに一夏さん。何をしてますの？」

「あっセシリアさん、なんか不審な物があつてね。」

「のわっ!？」

思いつきり力を込めたとされる一夏。

盛大にスツ転ぶ。

転んだ先で目を開ければ確実にセシリアさんのスカートの中が見える位置なので一夏の目を踏んで塞ぐ。

「ちよっ!? 星夜!? 何すんだよ!?!」

「セシリアさん、離れて。」

「あつ、そうですね。ありがとうございます。」

状況を把握出来ない一夏をそのままにセシリアさんを下げさせる。

十分に距離をとつてから足をどかす。

「いきなり目を踏むとか危ないだろ!!」

一夏が怒りの抗議をする。

「俺が踏まなかつたらそのあとお前はブルー・ティアーズで蜂の巣だったぞ。」

「あつ…。」

納得したようだな。

「で、それは何ですか?」

セシリアさんが一夏に聞く。

「てつきり埋まつてると思っただけだな…。」

頭をかく一夏、予想が外れたようだ。

キイイイイーン

遠くから音がする。しかも徐々に大きくなっている。

音の方を向くと何か巨大な物が突っ込んできていた。

ドゴオオオオオン

その物体は地面に刺さった。

3mはあるであろうその物体。その見た目が…。

「二に、にんじん…?」

3人の声が重なる。

そう、人参なのだ。幼稚園児が描いたようなデフォルメされた人参だ。

「はっはっはっ! 引っ掛かったね! いくくん!」

人参が真つ二つになり、中から人が出てきた。

青と白のワンピースに身を包み、さながら一人で不思議の国のアリスを再現したような装飾品の数々。

やたらと愉快なかんじの人だな。

「お久しぶりです、東さん。」

普通に挨拶をする一夏。

てかやつぱり束つて言ったな。つまりこの人が…。

ISの産みの親…篠ノ之束…。

「いっくん、いっくん。おひさー。箒ちゃんはどこかな？」

まるでこの場に一夏しか居ないような素振りで一夏に話しかける。

「えーと…。」

なにか返事に迷っている一夏…。

「まあこの私が開発した箒ちゃん探知機へフアンゲルで一網打尽なのだよー！じゃあね！いっくん！またあとでねー！」

そのまま走り去って行った…。足速いな。

探知機はまるでクラゲみたいな形をしていた。

なんか探知機つてよりも捕獲機つて感じだったな。

「なあ一夏…今のが…。」

「ああ束さん、箒の姉さんだ。」

「今のが篠ノ之博士ですか!?現在は行方不明で各国が探している！」

「そう、その篠ノ之束さん。」

一夏曰く常識が全く通じない人だそうだ。

「箒にようがあるみたいだし、関係なさげだし。俺と星夜はこれから海に行くけどセシリアは？」

「わ、私も海へ。せつ星夜さん。」

「わかってる。昨日の約束だろ？また後でね？」

昨日の夜のサンオイルの確認だろう。

「はい、よろしくお願いしますね。また後で。」

頭を軽く下げてから別館へ向かうセシリアさん。

「約束ってなんだ？」

一夏が聞いてくる。

「ああ、背中にサンオイル塗って欲しいって頼まれたの。」

「へえ、日焼け対策は大変なんだな。」

そこじゃないだろ…。

そんな会話をしながら男子更衣室を目指す。

しかし、男子更衣室を一番奥にしたのは誰だ？

おかげでいろんな会話が女子更衣室から聞こえる。
胸の大きさがどうか。

水着のデザインがダイタンだとか。

聞いているだけでも恥ずかしい。

きつと更衣室の中だから油断してるんだろう。

更衣室に着き、早速着替えを始める。

俺も一夏も手早く済ませて海へ向かう。

「あ、織斑君と天野君だ！」

「う、うそお！私の水着変じやないよね?！」

「うわあ2人とも鍛えてるう。」

「かっこいい…。」

「あの肉体が夜には…ぐふふふふ。」

「おーい！あとでビーチバレーやろー?！」

浜辺に着くとすぐに女子の注目を浴びる。

なんか変なの混じってたような…。

一夏はビーチバレーのお誘いに対して軽く返事してた。

「まずは準備運動だな。」

「ああ、足つつてもカッコ悪いしな。」

適当に広めのところで準備運動をする。

何事も基本が大事。

「い、ち、か〜！せ、い、やく〜！」

鈴が元気よく走って来た。そのまま一夏に飛び込み、肩車の体制に

なる。

まるで猫みたいだ。

「2人そろって真面目ねえ、一生懸命体操しちゃってさ、ほらほら、終わってたでしょ？泳ぐわよ！」

一夏の上ではしゃぐ鈴。

水着はタンキニタイプだ、スポーティーなイメージにぴったりだ。

「鈴、基本は大事だぞ。」

「溺れても知らねえぞ。」

2人で注意する。

「あたしは溺れたこと無いわよ。前世は多分人魚ね。」

人魚ねえ、どちらかと言えば鈴は山の生物だと思うが…。

「おー高い高い。ちょっとした監視塔にねれるわね、一夏。」

鈴は周りをぐるつと見渡す。元々鈴の背は低い方だからより高く感じるのだろうか。

「監視員じゃなくて監視塔かよ!?!」

「人の役に立つじゃない。」

「てか、俺よりも星夜の方が背は高いだろ。」

「5cm程度じゃあまり変わらないだろ。」

「試してみるか。星夜、動かないでね。」

鈴は一夏から俺へ飛び移る。本当に猫だな。

「視界はあまり変わらないけど、星夜の方が安定感あるわね。」

「ずっと鍛えてたからかな?」

肩に鈴の体重が掛かるが対して重くないので問題は無いが周りの視線が痛い。

交代制だとか早い者勝ちだとか聞こえる。

あれはカップルだからOKとかも聞こえる。

「りりりっ、鈴さん! ななっ何をしていますの!?!」

パラソルとかを抱えたセシリアさんがやって来た。

「ん〜? 一夏と星夜の乗り比べ。」

「評価が終わったなら降りてもらっていいかな?」

このままだと頭が動かせん。

変に動かしてT O L O V Eるのは一夏だけでいい。

「そうですわよ! 鈴さんは星夜さんに手を出さないでくださいませ!」

「仕方ない。それ!」

鈴は華麗に俺から降りる。やはり猫だな。

「星夜さん! 約束通りにお願ひしますわね!」

パラソルとシートを準備しながらセシリアさんが言う。

「わかってる。オイルは…これか。」

取り敢えずオイルの容器を確認する。

うーむ、流石はセシリアさん、高そうだなこれ。

周りで見ていた女子が自分達も塗ってもらおうとか言ってる。おい、わざわざ塗ったオイルを落としに行くな。

「では、星夜さん、お願いしますね。」

先日買った青の水着にパレオをつけていた。

パレオを外し、後ろに手を回して水着の紐を外す。

そしてシートに寝そべる。

スゴく健康的で美しいと感じる背中を前に緊張が走る。

「じゃあ、やるぞ。えっとこれはそのまま塗ればいいのか？」

初めてなので勝手が解らない。

「えっと、手で少し温めてからお願いしますわね。」

「ああ、わかった。」

ボトルから少量のオイルをだし、掌で温める。

そしてセシリアさんの背中に塗り始める。

柔らかいな。それでいてすべすべ。

そんな感想を抱きながら背中にオイルを塗っていく。

「背中が終わったよ。セシリアさん。」

「あの、出来ればそのまま脚とか、お尻も……。」

「え……さすがにそれは……。」

セシリアさんがもじもじとおねだりをする。

流石にこれより下はアウトだろう。

そんな風に思っていると。

先ほどからこちらを見ていた鈴がサンオイルのボトルを手を持ち。

「はいはい、星夜に迷惑かけないの。ペタペタっと。」

「はひゃあ!? ちょっと鈴さん! 冷たい!!」

セシリアさんの残りの塗ってない部分にペタペタと塗っていく。

温めずに塗っているため変な声を挙げるセシリアさん。

鈴が来たので少し距離を置く。

「鈴さん! いい加減に!!」

あまりの所業に怒りを爆発させようとしたセシリアさん。

そのままガバツと立ち上がったものだから先程紐をほどいたまま

の水着はシートに置き去りになる。

「あ。」

「ぶべっ！」

間一髪。

通常形態で勝手に出てきたユニコーンが一夏をバックキックですつ飛ばす。

ユニコーンは俺とセシリアさんの間に出たため俺の視界は蒼一色だ。

「きゃああー！」

とつさに腕で胸を押さえつつ水着を拾いすぐにつける。

「あーごめん。」

軽く謝る鈴。

そんな鈴を涙目で見るセシリアさん。

「いつ今更謝った所で許しませんわ！」

「じゃあ逃げるわ。」

そう言つてそそくさと逃げる鈴。

何故か俺とそこで延びてる一夏を引きずっていく。

「ちよつとー鈴！なぜ俺まで!?あとユニコーンはよくやったーセシリアさん、俺も一夏も見えてないから！」

取り敢えずファインプレーを見せたユニコーンは誉めておく。

「星夜さんになら見られてもよかったですけど…。つて星夜さんまで持っていかないでくださいませー！」

いつもと違い俺まで持つていく鈴に抗議するセシリアさん。

「別にいいじゃない。友達と遊ぶだけなんだから。」

特に気にしない鈴。

「はっ！なんで鈴に引きずられてんだ!?!」

目を覚ます一夏、直後に鈴によつて海に放り込まれる。

「ぶは！なにすんだよ！鈴！」

「なぜ俺まで…。」

「ほら！2人とも！ブイまで競争よ！負けたら@クルーズのパフェおごりね！よーい、どん！」

言い終わると同時に泳ぎだす鈴。こちらもクロールで追いかける。

「こら！卑怯だぞ！待て！」

「その程度のスタートダッシュはハンドにもならないな。」

「ぼーっとしてる一夏が悪いのよ！星夜は流石ね！でも負けないわ！」

前を泳いでる鈴に追い付く。

一夏も全力で泳いでくる。ほぼ横並びになり、ブイに近づく。

「誰が一番かわかった？」

「ほぼ同時だったな。」

「よし！じゃあ次は陸に早くついた奴で仕切り直しな！よーいどん！」

一夏が思いっきり泳ぐ。

「ちよっと！一夏！」

「先にやったのは鈴だからな！」

こつちが振り向く前に既に泳ぎ始めてる一夏。

それを追うため2人で泳ごうとする。

そして、泳いでると。

「がぼっ!!」

横を泳いでた鈴が体勢を崩す。

足がつったのかもしれない。

とつさに鈴の腕を掴む。

落ちないようにしっかりと抱き上げる。

「ぶはっ！」

「大丈夫か!?!鈴！」

「だっ大丈夫…。ちよっと水飲んだだけよ。ありがとう。」

取り敢えずこのままでと良くないので鈴を背中に回す。

鈴も何も言わずにこちらの首に手をまわした。

「ゆっくり戻るぞ。」

「うん。お願い。」

「なにが前世は人魚だよ。やっぱり猫じゃないのか？」

「ううっ……言い返せない…。」

「鈴！大丈夫か!？」

一夏が異変に気づいて戻ってきた。

「まったく。一夏が急に泳ぎだすからじゃない!!」

「俺のせいだよ！先にやったのは鈴だろうが！」

俺の背にいる鈴と言い争いを始めた。

しかし、こう接触していると背中に当たるものだな。

なにとは言わないが。

「2人とも静かに。」

喧嘩を止めてそのまま陸へ。

そのまま鈴をおんぶする。

「ちよつと！星夜！大丈夫だから！ここで平気だから！」

「一応あの木陰のところまで運ぶからな。そのあとは好きにしろ。」

背中軽く抵抗をした鈴だったがそのままおとなしくなる。

「やっぱり2人は仲良いな！星夜、あとは頼むぜ！」

一夏がいい笑顔で先程ビーチバレーを誘っていた一団に行ってしまった。

「あの、薄情者め…。」

「一夏は絶対あとは2人でどうぞって考えてるな。」

あの笑顔は絶対そうだ。

木陰に着いたので鈴を降ろす。

「足は大丈夫か？」

「う、うん平気。ありがとう…。」

「少しここで休んでな。結構水を飲んだら？」

「うう…。」

恥ずかしそうにうずくまる鈴。

「なんか飲み物もらってこようか？」

「だつ大丈夫！大丈夫だから！ほら！簪の所でも行ってあげなさいよ！ね！」

やたらと捲し立てる鈴。

そんなに見られたくないのか？

「わかったよ。でも、無理はするなよ？」

そのまま立ち去る。

電童からエイリアス体のレオが飛び出て鈴の元へ行った。

まあレオの好きにさせるか…。

さて、簪さんはどこかな？

「あつ星夜くん！」

「あまのくん。」

「おつ、簪さん、本音さん。」

先日買った水着を着た簪さんが来た。

隣には狐の水着に身を包んだ本音さんだ。

気がついたら居なかったボアとドラゴンも一緒になって砂の城を作っている。

「砂の城？これって結構むずかしいよね？」

「うん、そうだよ。でもかんちゃんやんはスゴくうまいのだ。」

「そんなことは無いよ。誰でも出来るから。」

「いや、この大きさの城はなかなか見ないと思うが…。」

既に高さ1mはある城だ。これはプロと言う奴だな。

結構細かい所も作ってあるし。

「そう…かな？」

「うん、普通出来て50cmも無いと思うよ。」

「あまのんも一緒に作る？」

「簪さんが良ければ。」

「うん。一緒に作る？」

そんなこんなで城作りの手伝いをする。

固めて削って、そんな作業の繰り返しだ。

「しかし、こうゆうのって作ってもすぐに形がなくなるよな。」

「そうだね。だけどそれがいいんだよ。」

「夏の思いでだよ。」

「出来上がったら写真でも撮るか。」

「うん。」

元々結構出来ていたのですぐに完成だ。

「いや、即席でこのクオリティだもんな。凄いな簪さんは。」

「あ、ありがとう。」
満足げな簪さん。

「じゃあ写真をとろう。」
写真を撮る。

その直後ビーチボールが飛んできて砂の城に直撃した。
当然崩壊してしまった。

「おーい！悪い！ボールが勢いよく飛んじまってさー！って!!」
一夏が駆け寄って来る。

先程言っていたビーチバレーのボールだろう。
近くまで来て初めて城の存在に気づく一夏。

このあとの自分の運命を想像したのか顔から血の気が引いていく。
「あ…その…ごめん。」

言い訳をせずに非を認めた事は評価する。
「簪裁判長、判決を…。」

この城の制作者は簪さんなので判断を仰ぐ。
「写真をとったあとは壊すだけだったし。気にしてないよ。」

簪さんは笑ってる。機嫌は悪くないようだ。
「いや、本当に悪かったー！」

頭を下げる一夏。
そのあと一緒にビーチバレーをやった女子も一緒に謝ってた。

簪さん曰く壊すまでが砂の城らしい。だから気にしないとの事。
「シャルとラウラもビーチバレーやってたのか？」

「うん。」
「ああ、砂の上での運動は普段とは違った力の入れ方が必要でない訓練になる。」

相変わらず軍人目線のラウラ。
「はは、ラウラらしいな。しかし、2人とも可愛らしい水着だな。」

「なあ!?!かわ!可愛い…。」
「えへへ、そうでしょ?ちなみにラウラの髪は僕がセットしたんだ。」

「そうなのか。結構印象変わるな。」
黒を基調としたレースをふんだんに使った水着のラウラ。

普段とは違い髪もアップテールになっている。

シャルの水着もオレンジ色を基本にした物だった。

「かわ、かわ、かわいい、可愛い…。」

ぶつぶつとずっと言ってるラウラ。

言われ慣れてない言葉でオーバーヒートしてるな。

よく見るとラウラの左手首に見慣れたものが付いてる。

「なあ、シャル。ラウラの左手首に付いてるのって…。」

「うん。星夜の予想通りエイリアス体のバイパーだよ。」

自分の尻尾を噛んでブレスレット見たいに擬態してるバイパーだ。

「気がついたら皆居ないと思っちゃったよ。」

バイパーはなにがしたいのだろうか…。

「ブルもすごいね。さっきは試合中に皆の胸を見て鼻の下伸ばしてた一夏をすつ飛ばしたんだよ。エイリアス体なのにね。」

シャルの横を飛んでるブル。

「ああ、ブルはデータウエポンで一番力があるからね。おーい、ラウラ。」

取り敢えずラウラを正気に戻す。

「ああ、すまない。取り乱した。」

そのまま少し皆で話していると。

「どうだ？楽しんでるか？」

「怪我とかしてないですか？」

後ろから声がする。織斑先生と山田先生だ。

「はい、楽しんでますよ。」

「そうか。明日は大変だからな。しっかり遊べるうちに遊んでおけよ？」

「はーい」と皆で返事をする。

そのままその場に居た人達で再度ビーチバレーをすることになった。

「じゃあチーム分けは織斑くんチームと天野くんチームたまね。」

「簪さんはやる？」

「あまり得意じゃないから本音と一緒に審判をやるね。」

「応援するよ。あまのん。」

「おう！頑張るよ。」

皆で楽しく海を満喫する。

このまま終わればいいんだが…。

あの忠告が頭から離れない…。

第34話 《本当の心》

「いただきます。」

俺―天野星夜―は夕食を取っている。

臨海学校の初日は皆と仲良く楽しい時間であつという間に過ぎていった。

流石は天下のI S学園が最良にする宿だ。

ご飯も一級品だ。

刺身を中心とした料理の数々。

なかなか味わえる物ではないな。

旅館の決まりで全員が浴衣姿で食べている。

ちなみに席はクラス毎になるので簪さんと鈴は居ない。

俺の隣はセシリアさんとラウラ。

向かいに座る一夏の隣はシャルと箒さんだ。

「ふう、魚の鮮度もいいし、添えてあるわさびもいいな。」

「そうだよな! 星夜! これ本わさだぜ! 本わさ! 学生の飯じゃねえよな!」

「あまりはしやぐな一夏、みつともないぞ。」

子供のようにはしやぐ一夏を制する箒さん。

「本わさって?」

「どれの事だ?」

シャルとラウラがそれぞれのお膳を見て本わさを探す。

「刺身の皿に添えてある緑の奴だよ。」

「本わさってのは本物のわさびを下ろした奴の事さ。学校とかで見るとは練りわさ。着色とかしてあるんだ。」

俺と一夏でそれぞれ答える。

その話を聞いて、シャルとラウラはそのわさびの山を箸にのせ…口に運んだ。

「あつ…。」

俺と一夏が硬直した直後。

「!!」

声にならない声を上げる2人。

「だっ大丈夫か？」

「ほら、水だ。飲め。」

「んぐっ！んぐっ！ぷはあっ！」

横のラウラに水を渡すとすごい勢いで飲む。

「ら、らいひようふだよ…。」

涙目で無理矢理笑顔を作るシャル。

「シャル、ラウラ、無理するなよ。」

「わさびは薬味…調味料の一種だから付けすぎるなよって言おうと思っただのに…。」

俺も一夏も止める暇がなかった。

「ふ、風味があっつておいひいよ…？？」

「これが…日本のワビサビ…。」

涙目のまま感想を述べる2人。

本当に健気だな。

「うっ…くう…。」

「セシリアさんも大丈夫？」

俺の横で先程から慣れない正座をしているためか、苦痛の音が聞こえる。

ラウラはドイツ軍の頃に織斑先生から叩き込まれたから平気だそうだ。

「どうする？あっちの机に移る？」

「それでは折角星夜さんの隣に座った意味が…。」

普段から一緒にたべてるのにね。

「わかったよ。俺も一緒に移動するから。」

折角の料理なのだし明日の事を考えればここで無理をする必要はない。

「では、料理は私が移動させよう。」

「ありがとう。ラウラ。セシリアさん、立てる？」

「はい、なんとか。」

まるで生まれたての子鹿のような足取りだった。

俺、セシリアさん、ラウラは隣の机に移動する。

国際色豊かなIS学園を迎え入れる旅館のため、しっかりと机も用意されている。

「これなら落ち着いて食べられるでしょ?」

「ご迷惑をお掛けします……。」

「学園に帰ったらセシリアは正座の練習だな。その時は茶道部に来い、私と織斑教官で指導できる。」

「それは……なかなかハードですわね。」

ラウラと織斑先生に挟まれて正座の特訓…新手の罰ゲームか?

「2人はあまり和食食べてるところ見たことないけどやっぱり苦手なの?」

「揚げ物等は大丈夫なのですが…。魚を生で食べるのはまだ抵抗がありますわね。」

「織斑教官が我が部隊に教導していただいた事もあり、日本食には前から興味はあったが食べる機会が無くてな。」

「まあ、食べれる物を食べれば良いんじゃないかな?」

「そうですね。でも、全く手をつけないのも礼儀に反しますので…。」

恐る恐る刺身を口に運ぶセシリアさん。

「わさびには驚かされたが生の物を食べるのはサバイバル訓練をしているから大丈夫だ。」

いつも通りちよつとズレた発言のラウラ。

そのまま周りの皆と談笑しながら食事を堪能した。

なんだかんだ言いながら刺身を全部食べたセシリアさんだった。

食事を堪能した後は風呂の時間だったので一夏と向かった。

露天風呂からは海が一望できる。

「ああ、いい湯だな。そう思うよな?星夜。」

「そうだな。それにこれほどの露天風呂を2人だけで使うとかなかなか無い贅沢だな。」

「そうだ。星夜に聞きたいことがあったんだ。」

「ん？なんだ？」

「鈴のどこが好きなんだ？」

「ぶふううっ!？」

いきなりなにいつてんだこいつは……。

「あのなあ、何度も言ってるけど俺と鈴は付き合っただけじゃないからな？」

「最近さ、鈴と話してると結構星夜の事を聞いてくるんだよな……。」

それってただの話題作りじゃないのか？

いくらネタが無いからって俺を使うなよ……。

鈴、これは勘違いを加速させてるぞ。

「はあ……。まあ、俺から見た鈴に関する評価ってことなら言ってもいい。」

「それでいいぞー！」

素直じゃないなとか思ってるだろうな……。

「気は回るし、飯も上手い、たった1年で代表候補生になれるほど勤勉だ。容姿もいいし、ただ少しだけ短絡的な部分があるけど純粋にいい人だよ。」

うん、こう言ってみるとなかなか理想的だな……。

「……やっぱり好きなんじゃないのか？」

「お前なあ……はあ……。じゃあ、お前はどうかなんだ？こんだけ女性が居るんだ一人くらい好みの奴とかいるんじゃないのか？」

「えっ？俺か……。正直考えた事も無かったな。俺って女に嫌われやすくてさ……。」

……どの口が嫌われやすいと？

「例えば？」

「箒とか鈴はすぐに俺の事を殴ったりするだろ？それに蘭……ああ俺の友達の妹なんだけどさ、その子も俺と話するとき態度がよそよそしいんだよ。あと、俺と話してる子ってさ少し話すとすごい勢いでどっかに走って行くのが多くてさ。」

ほぼ照れ隠しだろ……。

「ああ……そう言うこと……。」

これが真の唐変木か……。

「じゃあ、一夏の女性の好みは？」

「えつと……………」

考え込む一夏…。

「別に今まで可愛いとか綺麗だって感じた子の特徴とか上げればいいんだよ。」

「ああ！あれだ！」

「おっあるのか!？」

「一生懸命にやってる人ってかっこいいというか綺麗って言うか…。」
「ああ、それはわかるな。心からそれをやってる奴は引かれるところがあるよな。」

なんだ、まともな感性は残ってるようだな。

「でも、俺なんかと付き合いたいって思うやついるのか？」

「確実に俺よりは多いぞ。」

北斗や銀河も結構ラブレター貰ってたよな。

IS学園では見たことないけど。

「そうか？星夜の方がかっこいい活躍しまくってるじゃないか。」

「今日だけでお前に話しかけてきた人数を考えろ。俺より多い。」

「星夜には鈴が居るからだろ。俺はあまりみたいな物だろ？」

「はあ、そう言うことにしといてやる。そろそろ時間だな。」

「あつ本当だ。上がるか。名残おいしいけど…。」

本当に風呂好きだな…。

「明日もあるだろ。」

「それもそうだな。」

風呂から上がったあと少し一人なりたかったのでそのまま旅館の周りを散歩していた。

襲われるのなら…明日だよな…。

その時はみんなを守るだろうか…。

「やっほー。データウエポンのご主人君♪」

急に声を掛けられた。この声は…。

「何かご用でしょうか？篠ノ之束博士。」

まさか篠ノ之東博士から声を掛けて来るとは。

一夏が聞いた話だと織斑先生と一夏と箒さんと両親位しか判別しないそうだが…。

「うん♪君に聞きたいことがあってね。」

「答えられる範囲のことならお答えしますよ。」

「君は『どこまで』知ってる?」

えらくアバウトな質問だな。

「データウエポンのことですか?」

「うん、わかった。何も知らないと。」

これでわかったらしい…。

「他に聞きたいことが?」

「なるほど。GEARの意味も知らないわけだ。」

「GEARの意味?」

なんでこの人がGEARの事を?

GEARの意味ってなんだよ。

「うん、君の事はわかったよ。じゃあね♪また明日♪襲撃対策はバッチリ決めときなく♪」

「あつーちよつとー!」

瞬く間に視界から消えていった…。

「GEARの…意味…。」

一体なんだ?

東博士と関係があったのか?GEARは…。

しかし、また明日って…しかも襲撃の事を知ってた。

まさか東博士がこれまでの犯人?

それともあの警告の主?でもしやべり方全然違ったし。

解らないことが多すぎる。

取り敢えず襲撃の事は織斑先生に伝えるか。

東博士が言ってた訳だし。

「ん?あれは…。」

俺たちの部屋の前に張り付く集団…。

セシリアさん、簪さん、鈴、ラウラ、シャル、箒さん揃って何やつ

てんだ？

「揃いも揃って何を―」

「シッ！」

鈴が咄嗟に俺の口をふさぐ。

部屋の中から声が聞こえる。

『千冬姉、久しぶりだからちよつと緊張してる？』

『そんな訳あるか、馬鹿者。——んっ！す、少しは加減しろ……。』

『はいはい。んじゃあ、ここは……。』

『くあっ！そ、そこは…やめっ、つうっ!!』

『すぐに良くなるって。だいぶ溜まってたみたいだしね。』

『あああっ！』

これは織斑姉弟の声だ。

そしてここにいるみんなの顔は赤い。

何を想像したかわかりやすいな。

『じゃあ次は——』

『一夏、少し待て。』

2人の声が途切れる。

俺を押さえてる鈴を除く皆がドアに耳を当てようとする。

バンッ!!

「ひぐっ」

「あうっ」

「へぶっ」

「うきやっ」

「プギユッ」

ドアが突然開いた為、鈴以外は全員頭をぶつけてしまった。

「天野、凰、お前達は何をやっている。」

鼻っ面を押さえる面々を無視してこちらを見る織斑先生。

俺と鈴は正面から引っ付いて鈴の手が俺の口に添えられてるだけだが。

「仲がいいのは知っているが場所は選べよ。」

「なっ！千冬さん違いますから!!」

「織斑先生：マツサージは終わりましたか？」

「ふん、馬鹿共が騒いでるから中止だ。」

俺は何をしていた知ってるから冷静だが周りは完全に勘違いをしてたようだな。

「まあいい、全員入れ。」

「は、はい。」

織斑先生に言われて全員部屋に入る。

「天野、冷蔵庫に飲み物がある。配れ。お前の分もある。」

「わかりました。」

冷蔵庫を開ける。

コーラ、紅茶、スポドリ、オレンジ、ラムネ、コーヒー、アップル。

俺、セシリアさん、鈴、シャル、箒さん、ラウラ、簪さんがそれぞれ手に持つ。

「一夏、お前はもう一度風呂に行つてこい。汗臭い。」

「その言い方は無いじゃないのか千冬姉…。」

話ながらもタオルを手にもち、風呂へ向かう一夏。

「まあ、皆、くつろいでくれ。」

「天野の言う通りだぞ。普段の馬鹿騒ぎはどうした？」

「い、いえ、その…。」

「お、織斑先生とこうして話すのは…。」

「はじめてですし。」

特に簪さんは接点少ないよな。

緊張するよな。

「おい、天野。私用のやつもとれ。」

「これですよね？はい。」

そう言つて冷蔵庫から出したビールを渡す。

まあもうオフで良いんじゃないかな。

この人なら自制は出来そうだし。

「いつもなら一夏に一品作らせるが…天野は何か作れるか？」

「鍵っ子だったのでそれなりには…。卵焼きとかどうですか？」

「よし、作れ。駄賃は既に渡しただろ？」

コーラの事か…。

「わかりました。女子会の声は聞きませんよ。」

部屋にある簡易キッチンに向かう。

絶対これはあいつらを肴に一杯やる気だろ…。

星夜が部屋から出ていき静かになった部屋。

今の部屋の主である千冬が口を開く。

「さて、お前らはどっちがいいんだ？…ここにいるのは大半は天野のよ
うだが…。」

「ぶふうっ！」

「篠ノ之と嵐が一夏、オルコットと更識が天野、ボーデヴィツヒとデユ
ノアは中間と言ったところか？」

千冬は楽しそうに見渡す。

「わ、私はただ一夏の剣の腕が落ちてるのが腹立たしいだけです。

星夜は関係ありませんし。」

箒はラムネを飲みながら答える。

「あたしと一夏は腐れ縁みたいなやつですし…。せ、星夜は…その
…友達って言うか…ゴニョゴニョ。」

なぜか煮え切らない態度の鈴。

「一夏さんはただクラス代表としてしっかりしていただけだけで
すし。星夜さんは共に高め合うお方だけでして…。」

気丈に振る舞うセシリア。

「そうか、2人にはそう伝えておこう。」

しれっと言う千冬。とっさに3人は詰め寄り。

「…伝えなくて結構です!!!」

その様子を見て笑う千冬。

「星夜くんは私にとってヒーローみたいな感じで…織斑くんは…馬鹿
?」

簪が考えてから答える。

「ふむ、あいつは馬鹿だな。天野は自分がヒーローだとは言わないだ
ろう。」

「はい、あくまで手を貸しただけだって言うと思うけど。それを出来るのが星夜くんの良いところだから…。」

簪は頬を紅く染めながら答えた。

「僕は…2人の…優しいところですよ。」

シャルロットはぽつりと、答えた。

「ふつ一夏は誰にでも優しいぞ。それに天野は厳しいと思うぞ。」

「そうなんですよね。一夏はそこがちよつと悔しいなあ。星夜はつかず離れずの距離で見守ってくれて、倒れそうな時にだけ手を貸してくれるんですよ。」

シャルロットは照れ隠しが下を向いてしまう。

「で、ボーデヴィツヒ、お前は？」

今まで黙っていたラウラに話を振る。

「あの2人の…強い所に惹かれます。」

「どちらも弱いだろ。」

千冬はバツサリといい放つ。

「いえ、強いです。私よりも…心が…。」

「まあお前がそう思うのは勝手だしな。」

千冬はビールを一気に飲む。

「一夏にしろ天野にしろ、欲しければ全力で奪って見ることだな。」

「織斑先生く。つまみ出来ましたく。」

星夜が戸を開けて入ってくる。

「おう、待っていたぞ。お前の料理ははじめだな。どれどれ…。」

「そんなに期待されてもこまりますけど。」

苦笑しながらも卵焼きの乗った皿を渡す星夜。

「ふむ、なかなかいけるな。これなら他のも期待できるな。」

「誉めすぎですよ。一夏みたいにマッサージは出来ませんし。」

空になった缶を拾ってゴミ箱に持っていく星夜。

「そう謙遜するな。そうだ。天野に聞こうと思っていたが…。」

「なんですか？」

周りの女子は何を聞くのか気になり固唾を飲む。

「お前に彼女はいるのか？中学時代とか無かったのか？一夏は今だに

女つ気の欠片も無くてな。」

千冬は爆弾を投下する。

「中学時代は俺の近くにモテモテの男が2人もいたので俺は無いですよ。」

「なら、今は？学園中でお前と凰の噂話で持ちきりだぞ？」

「それは一夏の勘違いです。」

「そ、そうですね。千冬さん、あつあたしと星夜は…。」

「ん？嘘から出たまこと…、火の無いところに煙は…と言うこともあるだろう？それに凰もまんざらでは無いだろう？」

楽しそうに笑う千冬。

「生徒を酒の肴にしないで下さい。」

「普段から手を焼かされているんだ。少し位ならばチは当たるまい？」

「そうかも知れませんが…。」

「折角だからなもうひとつ聞こう。この中なら誰がいい？」

千冬の目の前で座る6人を指差す。

とたんに箒を除く全員が星夜を注視する。

「別に付き合えと言っている訳ではない。今のお前から見て誰が女性として一番魅力的か言ってみろ。」

「黙秘権を行使します。」

星夜が言うところ人はホツとしたような残念なような顔をする。

「つまらんな。」

「皆、それぞれ魅力はありますよ。」

「まあ、そう言うことにしといてやるか。」

急に戸が開き、一夏が入ってくる。

「ふう、さっぱりした。皆まだいたんだ。」

「ん？そろそろ就寝時間か、ほれ、明日の朝には遅れるなよ。」

その一言で解散となった。

織斑先生はそのあとは酔いのためかすぐに寝てしまった。

東博士の件は朝に報告しよう。

「じゃあ、俺たちも寝るか。」

一夏が布団に入る。

「そうだな、明日も早いし。電気消すぞ。」

「たのむく。おやすみく。」

「おやすみ、一夏。」

布団に入る。

しかし、先程織斑先生に聞かれたが誰が一番か。考えたこともなかったな。

なぜか鈴まで反応してな。

鈴が俺狙いに変わった?…ないない。

でもあの中で付き合うのかく全員が美少女だ。

一番なのは——かな。

そんなこと考えながら眠気に逆らわず眠りに落ちた。

第35話 《紅椿》

臨海学校2日目の朝

俺―天野星夜―は起きてすぐに織斑先生に昨夜の事を報告した。
あとの対処は学園側が行うからその件は忘れろって言われたが
きつと巻き込まれるだろうな…。

さて、昨日は遊ぶだけだったが今日は朝から晩までISの各種装備
試験のデータ取りだ。

一般生徒はそれぞれの班に割り振られた装備の試験をする。

俺達専用機持ちは一夏を除きそれぞれの所属先から装備が送られ
てきているのでそれらの試験だ。

俺はG E A Rから送られてきた装備は一つだが各データウエポン
のテストも行うので総合試験の量は皆と変わらない。

朝礼が終わり、IS試験用ビーチにて準備に入る。

このビーチは四方を崖に囲まれているため、周りからは視認されに
くいので秘密試験にはもってこいだ。

織斑先生が専用機持ちを集める。

俺、一夏、セシリアさん、簪さん、鈴、シャル、ラウラ。

そしてなぜか簪さんも呼ばれた。

「篠ノ之、お前は今日から―」

「ち――ち――ちゃん!!」

織斑先生の言葉を遮るようにすごい速度でこちらに向かってくる
人影。

「束…。」

「やあやあー会いたかったよ、ちーちゃんー！さあ、ハグしよう！愛を確
かめ―たわばっ!」

篠ノ之束博士だった。

織斑先生は飛び込んできた束博士を片手で掴む。顔面に対してア
イアンクローって奴だな。

織斑先生はうんざりしたような顔だ。

「うるさいぞ、束。」

「ぐうぬぬぬ。相変わらず容赦のないアイアンクロードだねっ！」
するつと顔の拘束を解く束博士、そのまま箒さんに近づく。

「どうも…。」

「やあ！久しぶりだね！何年ぶりかな？おつきくなつたね！おっぴい
が！」

箒さんの胸を揉もうと手をワキワキさせながら詰め寄る束博士。

／＼ごん！／

鞘付きの刀で箒さんが叩く。

「怒りますよ…。」

「箒ちゃんがあぶったー！いったーい！」

叩かれた部分をさすりながら涙目の束博士。

「束、自己紹介しろ、生徒が困ってる。」

「えーめんどくさいなあ、天才の束さんだよー。」

すごくめんどくさそうに自己紹介をする束博士。

「ね、姉さん。」

箒さんが近づく。

そして束博士の目が輝く。

「わかってるよ！箒ちゃん。さあ！空をご覧あれ！」

空を指差す束博士。

空を見るとコンテナらしき物が降りてきた。

地面に着くとそれはパカパカと開く。

そこには紅いISが収まっていた。

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃんの専用機！へ紅椿だ！全スペックが
現行ISを上回る束さん特製ISだよ！」

つまり、箒さんが束博士にISを作って貰ったと言うことか…。

理由もきつと一夏に近付くためとかそんな感じだなあの顔は…。

「姉さん、あと一つは？」

「ん？専用のデータウェアポンのこと？あれは無理だよ。それはおいと
いてフィッティングしようね。」

箒さん、さらつと録でもない要求してたのね。

「篠ノ之さん、専用機貰えるんだあ、身内ってだけで。」

「ずるいよねえ。」

何人かがこちらを見ながら話している。

「10年間引越しを繰り返して、家族と離ればなれの生活をしたい？」

「えっ? どうしたの? 天野くん。」

「皆が羨ましいって言ったけど小学生の頃から引越しを繰り返して友達も出来ず、仮に出来てもこちらから連絡は出来ない。家族とも一緒に過ごせないで政府の人間におはようからお休みまで監視される10年間を過ごしたい?」

「えっ? なにそれ?」

「政府の保護プログラムの内容。更に言えば自分の進路すら決められなかったんじゃないかな? 箒さんは。」

たった2ヶ月ほどの保護プログラムでもうざかったのにそれを10年もやられた箒さんは大変だったろうな。

「そ、そうなんだ...。」

「だからそこまでしてほしい? 専用機? 開発者の身内ってだけで政府からずっと睨まれるんだよ。俺は嫌だね。」

「でもそのあとは人生勝ち組じゃない?」

「戦争になったら真っ先に放り込まれるよ。それで勝ち組?」

「...: やっぱいいいや。」

「でしょ? 以外と良いこと少ないよ。」

結果だけを見ると専用機っていう特典があるけどこれのために10年間も拘束されるとか苦痛だよな。

「よし、フィッティング完了。あとは自動処理でパーソナライズも終わるよ。いっくんく白式見せて? 束さんは興味津々なんだよ。」

「え、あっはい。」

白式を展開しながら束博士に近付く一夏。

さて、俺も自分の作業を進めるか。

まずは試作武器のテストだな。

「名前が無いままだとあれだし、勝手に名付けるか。」

試製大型可変大剣じゃ呼び辛いしな。

「戦略的に使い分ける手持ち武器だし。へたくテイカル・アームズ」
よし！決定！」

こう言うのは勢いも必要だ。

まずはソードモードで素振り。

「よっ！はっ！ふっ！」

ブオン！と音をたてながら振るう。

大きな剣の為、どうしても縦か横にしか振れないな。

「おーい。」

やっぱりデカイから扱いにくいな。

その代わり攻撃力は申し分無さそうだ。

「おーい、聞いてる？」

「なんですか？東博士？自分と博士には特に接点無いと思いますけど。」

「IS使ってれば関係者だよ。」

結構強引な理論だ。まるで友達の友達の友達の：みたいな感じだな。

「自分に何か？」

「箒ちゃんの紅椿の模擬戦相手になってよ。データウエポン無しで。」

まさかの模擬戦の申し込みだ。

「一夏じゃ駄目なんですか？」

「いっくん相手だと勝負にならないからね。」

どう勝負にならないのだろうか…。

そこへ織斑先生が寄ってくる。

「天野、私からも頼む、今の篠ノ之は浮かれているからな。現実を引き戻せ。」

まさか織斑先生まで言ってくるとは。

『織斑先生、私は浮かれてなどおりません。冷静です。』

空に居る箒さんがこちらに通信を飛ばしてきた。

聞こえていたようだ。

「篠ノ之、その発言が浮かれている証拠だ。天野、その武器の実戦テストだと思ってやってみろ。」

「織斑先生に頼まれたら断れませんね。では、データウエポンを預かって下さい。」

データウエポン達を出して織斑先生に預ける。

「わかった。束には触れさせんよ。」

「ちよつとデータ取るくらい良いじゃんよちーちゃん！」

話し合う2人を尻目にタクティカル・アームズを持ったまま飛ぶ。空中で向き合う。

「ふん、今までは訓練機ゆえに遅れを取ったが紅椿ならデータウエポンの無い電童など！」

「まだ、慣らしの途中でしょ？気軽にやろうか。」

タクティカル・アームズをアローモードに変形させる。

『では、天野星夜対篠ノ之箒の模擬戦を行う。試合開始！』

織斑先生の合図と共にお互いが動き出す。

距離は50mほど、ISなら瞬時加速が無くても近づける距離だ。

こちらは後ろに下がりながらタクティカル・アームズから光の矢を放つ。

「ふん！いつもの逃げ腰か！星夜！」

「今回はこいつの試験もかねてるしね。それに相手の得意距離で戦う必要は無いからね。」

戦いの定石だ。正々堂々と戦うのが正しいとは限らない。

普段から箒さんや一夏の剣術は見ているからどれだけ驚異的かもわかる。

箒さんは矢を避けながら近づいてくる。

成る程、機動性は白式以上か。ただまだ箒さんが慣れてないから動きが大雑把だ。

いくつか当たりながらも箒さんが10mほどまで迫ってきた。

右手の刀を突きの体制で構えている。

「くらえ！雨月！」

突きに合わせて刀からエネルギーが放たれる。

あまりにも露骨な構えだったので避けるのは容易だった。

「これはどうだ！空裂！」

こんどは左の刀を横一文字に振るう。

同じように刀からエネルギーが帯状に放たれる。

これも上昇することで簡単に避けれる。

そのままこちらはタクティカル・アームズをソードモードに変形させながら縦斬りを入れながら飛びかかる。

「そんな大振りの攻撃など！」

箒さんは両手の刀を×の字にクロスさせて受け止める。

紅椿はパワーも有るみたいだな。

結構勢いが有ったはずなのだが簡単に受け止めた。

確かにこれは大きな武器だから振り方は限られるし予測もしやすいだろう。

「甘いよ、箒さん。」

拮抗している状態から右足の蹴りを入れる。

回転するドライブユニットと当たった装甲から火花が散る。

「ぐっ!？」

「飛翔! 烈風波!!」

そのまま伸びた右足から飛翔烈風波を喰らわせる。

「なに!?!それは腕の技ではないのか!？」

「なにも飛翔烈風波は腕から出すものじゃないよ。」

あくまでハイパープラスマドライブが圧縮した空気を竜巻として放つだけなので四肢の何処からでも出せる。

再び距離が開いたので即座にアローモードに変形させて撃ち抜く。

「喰らうものか!」

空裂を振るってエネルギー同士をぶつけて相殺する。

「うおおお!」

エネルギー同士が当たった事による爆風の中をアローモードのタクティカル・アームズをかまえたまま突撃する。

「なんだと!？」

箒さん是对応できず、そのままぶつかる。

巨大な武器なので耐久もある。この程度では特に問題はない。

「ゼロ距離、取った!」

密着させた銃口？から最大出力で放とうとする。

『天野、篠ノ之。試合は中断し、すぐに降りてこい。』

突然、織斑先生から中止の通信が来た。まさか…。

「わかりました。直ちに戻ります。」

「…わかりました。」

試合の流れに納得がいかなかったのか箒さんは不機嫌そうだ。

正直、今のは負ける要素が無かった。

今までの訓練の際の打鉄を使っている箒さんの方がまだ見込みがあつた。

砂浜に戻るといつのまにか東博士は居なくなっていた。

データウエポン達を電童に回収する。

「現時刻よりI S学園教員は特殊任務行動に移る。今日の日程は中止、各班はI Sを片付けて旅館の部屋へ戻れ。連絡あるまで待機だ。」

いきなりの中止宣言。

やはり、襲撃者が来るのか。

周りの生徒達は突然の事で動揺している。

「とつとと戻れ！以後、許可なく室外に居るものは身柄を拘束する！いいな!!」

織斑先生の発言により各班は迅速に行動する。

「専用機持ちは全員集合！織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、嵐、更識、天野——それと篠ノ之もだ！」

「はいー！」

全員返事をしたが箒さんだけはちよつと普段と違った。

専用機持ちと言われたのが嬉しいのか？

織斑先生に付いていきながら不安を覚えるのは俺だけではないよ
うだ。

一夏も箒さんを見て不安そうな顔をしている。

旅館の一番奥にある大宴会場用の部屋に専用機持ちと教師が集まっていた。

「では、現状を説明する。」

大型の空中ディスプレイが表示され、それを見ながら織斑先生の説

明を聞く。

「2時間ほど前、ハワイ沖にて稼働試験中のアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS（銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）が謎の獣型ISに襲撃され、制御を失い暴走。2体とも監視空域より離脱したと連絡があつた。」

まさか軍用ISを暴走させて襲撃させる気か。

獣型：まさかデータウエポンか？

GEARチャイナのようにデータから作ったやつが居るのかもしれない。

一夏は話が飲み込めないのか箒さんと一緒に周りを見ている。

本来、専用機持ちは軍人みたいなものだ。

こうゆう事態の対応も必要になる。

ベガさんやアルテアさんから教わつてた俺はましたが一夏と箒さんはこの手の教育は一切受けて無いだろう。

他の皆は真剣な眼差しでディスプレイと織斑先生を見る。

「その後の追跡により、この2体の内、獣型はロスト、福音は2Km先の空域を通過することがわかつた。時間は50分後、学園上層部からの通達により、我々で対処する。」

淡々と説明を続ける織斑先生。

「我々教員は訓練機を使用し、周辺海域の封鎖を行う。お前達専用機持ちが直接の対処をする。」

まあただの打鉄やラファールだと第三世代の軍用IS相手には役不足だろうな。

「それでは、作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように。」

「はい。」

セシリアさんが手をあげる。

「オルコット。」

「目標の詳細なスペックデータを要求します。」

「わかつた。これは2ヶ国の最重要軍事機密の為、情報が漏洩した場合、全員に査問委員会による裁判と2年以上の監視が付くからな。」
「了解しました。」

ディスプレイに目標ISのデータが表示される。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型：私のISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね。」

「攻撃と機動に特化した機体ね。厄介だね。スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから向こうが有利ね。」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど連続しての防御は難しい気がするよ。」

「しかも格闘性能が未知数だ。持ってるスキルもわからん。偵察は行えないのですか?」

セシリアさん、鈴、シャル、ラウラが意見を交換する。

「無理だな。目標は現在も超音速飛行を続けている。接触は1回限りだ。」

「織斑先生、襲撃を行った獣型ISの情報は有りませんか?」

「天野、お前が危惧するようにデータウエポンに近い物と思われる。試験部隊から来た情報はこれだけだ。」

ディスプレイに表示されたのは異形だった。

赤い身体、白い羽根、そして最も特徴的なのは双頭であること。

「この獣型ISは試験中突然出現し、福音を襲ったそうさ。試験を見守っていたアメリカ、イスラエルの軍はこの2体によって壊滅的な被害を受けているため、援軍は期待できん。」

「こちらの方に武装は?」

「爪と牙だけだそうさ。圧倒的な加速で懐に飛び込むらしい。」

「じゃあ、ボア達みたいにできるなら。今は福音の中にある可能性があるかも。」

俺と簪さんで謎の獣型ISを分析する。

「つまり、この作戦は――」

「高速で移動する機体を――」

「射撃を潜り抜けて――」

「一撃で行動不能にさせて――」

「謎の獣型ISの追撃に対処する事が出来る――」

「速度と攻撃力が必要になる―」

全員の視線が一夏に集まる。

さすがに自分が見られてることには気がついたようだ。

「お、おれ?」

「零落白夜でやるのよ。」

「問題は一夏をどうやってそこまで送り届けるかだよね。」

「そうですね。エネルギーは可能な限り零落白夜に回しませんと。」

「速度だけじゃなくて白式を乗せて行ける出力も必要だね。」

「超高感度ハイパーセンサーもいるな。」

「この中で超高速戦闘の経験者って居るのか? セシリアさんかラウラか?」

「みっみんな待ってくれ!?俺がやるのか!?!」

一夏が全員に問いかける。

「織斑、これは訓練ではなく実戦だ。覚悟が無いならば無理強いはいはしない。」

織斑先生が一夏に声をかける。

確かに無理強いをするくらいなら他のやつが行くべきだ。

特に一夏は今まで一般人の感覚しかなかったのだから。

「やります。やって見せます。」

一夏は強い目で織斑先生を見る。

あれは黒桜の時に見せた目だ。

問題ないだろう。

「よし、それでは作戦内容に入る。この中で最高速度が出せる機体はどれだ?」

「それなら私のブルー・ティアーズが強襲用高機動パッケージヘストライク・ガンナーが送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています。」

「速度だけならハイパーウィップを装備すれば高速で移動することは可能です、また高感度ハイパーセンサーに関してレオサークルで代用可能です。しかし、自分は高速戦闘の訓練経験がありませんので他の人が装備すべきかと。」

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です。」

「ふむ、それならば問題ないな。他に訓練経験があるものはいるか？」

「はい。私ならシュヴアルツェ・ハーゼにて通算訓練時間が35時間あります。」

「あたしも12時間なら訓練経験があります。」

「他は居ないようだな。よし、ならば——」

「ちよつと待ったく!!」

織斑先生の言葉を遮るようどこからともなく声がする。

「その作戦!ちよつと待ったく!」

天井から束博士が現れた。

「山田先生、室外へ強制退去を。」

「えっ!?!はっはい。篠ノ之博士——」

束博士は近づく山田先生の横をすりと抜ける。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もつと適任なのがいるよ。」

「束…:さつさと出ていけ。」

部屋の外を指差し、織斑先生が言う。

「ここは断然、紅椿の出番なのだよ〜!」

束博士は箒さんを指差し叫ぶ。

「どう言う意味だ?」

「見て、これが紅椿のスペックデータ。」

束博士は織斑先生に紅椿のデータが写っているとされる仮想ディスプレイを見せている。

「新技術の展開装甲を使っているからパッケージ換装をしなくてもいいんだよ。」

展開装甲…:それは装甲が文字どおり展開したりしてその場で機体を調整することによる万能性の高い装備だそうだ。

もはやその場で機体を組み替えてると考えてもいいのかもしれない。

ちなみに一夏の白式、正確には雪片式型に試験的に搭載していたそうだ。

「だから、紅椿は第四世代型ISってことになるね。」

今、全国のIS研究者達は東博士から見たら遅れてるところか無駄な事しかしてないってことかよ。

まだ第三世代型の試作機を作ってるのにこの人は丸々一世代飛ばしやがった。

「東、やり過ぎるなといったはずだぞ？」

「そうだっけ？でも、箒ちゃんにはこれくらいしてあげないとね。それに紅椿はまだ完全じゃないよそれはデータウエポンみたいだね。」

何でそこでデータウエポンが出てくるのか。

本当になにか知ってるのか？

「それにしても、この状況は10年前の白騎士事件を思い出すね。」

「話を戻すぞ。東、紅椿の調整にかかる時間は？」

「7分あればできるね。」

「オルコット、ブルー・ティアーズの準備はどれ程で終わる？」

「現在インストール中ですので全部で20分ほどで終わりますわ。」

「よし、本作戦は織斑の白式を主力とする。エネルギーを温存するため現地までは篠ノ之の紅椿にて移動する。オルコットのブルー・ティアーズ、ボーデヴィツヒのシュヴァルツェア・レーゲンは同行し、戦闘支援を行う。」

織斑先生の発言にあわせ、メインディスプレイに表示されてる地図に情報が書き込まれる。

「デュノア、更識、風、天野は周辺の警備をしてもらおう。」

「あの、織斑先生…それはどうゆうことでしょうか？」

織斑先生の話を聞き、簪さんが質問する。

「今回は正規軍のISを奪った奴等が近くを通りすぎるがこれが偶然とは思えない。今までのような襲撃だとすればあれは囹の可能性が高い。」

確かに、直接ここに来ないのはこちらの戦力を分散させたりするのが目的かもしれない。

だからと言ってそのままあれを放置するとどこで暴れるか解らないからな。

「作戦中はペアで行動しろ、織斑と篠ノ之、オルコットとボーデヴィツヒ、デュノアと更識、天野と凰、作戦終了までは絶対に一人になるなよ。」

ディスプレイにそれぞれのペアが表示される。

「了解！」

全員が返事をする。

「では作戦開始は30分後だ。それぞれは機体のチェックと調整を行え、織斑は山田先生から高速戦闘に関するレクチャーも受ける。会議はこれで終了だ。準備にかかれ！」

織斑先生の掛け声と同時に全員が動き出した。

「天野、頼みがある。」

電童のチェックと補給を済ませると織斑先生が声をかけて来た。

「一夏の白式の中には既にユニコーンが待機してます。直接装備をせず、召還してサポートに回すよう一夏にも伝えました。ラウラにもバイパーを渡しました。高感度センサーは付いてるそうなのでレオはそのままです。」

「すまないな…。」

「あと、簪さんとシャルにもそれぞれボアとブルを渡してあります。戦力の分配ならこのくらいでしょう。」

織斑先生が言いたいことはわかっている。

皆が無事に帰ってくる為に出来るだけの事をやらないと。

「大丈夫ですよ。織斑先生、全員が持てる力を出しきれば成功しますよ。」

「ああ、お前には迷惑をかける。データウエポンを分散させてすまないな。」

「活躍しすぎて一夏の出番が無いかも知れませぬ。」

「そういえばあいつは嫌われてるのでは無いか?」

「公私混同はしませんよ。それに普段は一夏がバカをするから突っ込みいれてるだけです。」

「そうか、なら安心だな。今まで来た襲撃者がまた来るかも知れん、気を付けろよ。」

「はい。わかりました。」
こうして作戦の開始に向けた準備を進めていった…。

第36話 《銀の福音》

臨海学校2日目はほぼ全ての日程が中止となった。

アメリカ・イスラエルの協同で作られた第三代型軍用ISが襲撃され暴走し、近くの海域を通ると言う。

その事態の鎮圧に俺―天野星夜―を含めた全ての1年生専用機持ちで対処する事になった。

昨日は皆でバカ騒ぎをした砂浜には俺達専用機持ち8人の姿があった。

「来い、白式。」

「行くぞ、紅椿。」

「出る、シュヴァルツエア・レーゲン。」

「おい出ませ、ブルー・ティアーズ。」

「行くよ、リヴァイヴ。」

「来て、打鉄式式。」

「行くわよ、甲龍。」

「頼むぞ、電童。」

それぞれが愛機の名前を呼び、展開する。

本当なら箒さんと一夏以外は呼ばなくても展開出来る。

だが、これから向かうのは今までの試合でも、訓練でもない…実践だ。

だから自分が命を預ける相棒を呼び、確認したのだ。

「じゃあ箒、よろしく頼む。」

「男が女の上に乗るなど私のプライドが許さないが、今回は特別だぞ。」

「セシリアとラウラもよろしく頼むな。」

「ええ、サポートはお任せくださいませ。」

「一夏、お前は前の敵だけを見る、周りは我々が守る。」

今回の作戦では一夏は可能な限りエネルギーを温存するため、箒さんに乗っかる形になる。

最初だけは何時ものツンデレで嫌味を言っていたがすぐに一夏に

頼られている事実からか箒さんは誰が見ても浮かれているのがわかる。

そんな箒さんを見て、一夏は目に力を入れていた。

きつと気を引き締めたのだろう。

「鈴、俺達は警戒だ。何が来るか解らないが気を引き締めろよ?」

「あんただだってデータウエポン貸し出してんだから気を付けなさいよ。いくらコア・ネットワーク経由ですぐに帰って来れるって言うても誤差がでるんでしょ?」

「わかってるよ。」

「ま、この中なら一番相性は良いと思うけど。」

「確かにね。タッグ戦の成績は一番だな。」

「気負わず行きましよ。あんたさつきからピリピリしすぎ。肩の力を少し抜きなさいよ。」

鈴が電童の肩をポンツと叩く。

「う…今まで襲われ過ぎてるからかな?」

「全く…あんたは皆から『信頼』されてるし、全員のために前に出る『勇氣』がある。だから『自信』持って『知恵』を出して勝利への道筋を『創造』しなさいよ。じゃないと『愛』してくれてる奴らに失礼じゃない?」

「ありがとう、鈴。そっちだって緊張してるだろに気を使ってもらって。」

本当にいい人だな鈴は。

一夏、お前の嫁候補には勿体ない位だぞ。

『全員、準備は良いか?』

織斑先生からの通信が全員に入る。

「はい。大丈夫です。」

全員が織斑先生に返事をする。

『織斑、篠ノ之、今回の作戦は一撃必殺だ。オルコットやボーデヴィツヒのサポートもあるが短期決戦を心掛ける。』

「了解。」

「織斑先生、私は状況に合わせて一夏のサポートをすればいいですか?」

『そうだな。だが無理はするな、お前は紅椿を受け取って数時間も動かしていない。オルコットやボーデヴィツヒも居るから何かあれば頼れ。』

「わかりました。出来ることをします。自分の身は自分で守りますので必要ありません。」

箒さん、やはり声が浮わついているな。

『オルコット、ボーデヴィツヒは福音の牽制および獣型ISに対する警戒を怠るなよ。』

「お任せくださいませ。」

「バイパーも問題はありません。行けます。」

『周辺警戒組も作戦開始後は指定ポイントにてそれぞれ警戒に当たれ、気を付けるよ。何が来るかはわからん。』

「了解です。」

「わかりました。」

「了解。」

「それぞれデータウエポンも入れて4人です。余程の事がなければ奇襲は受けにくいかと。」

『では、作戦を開始するー!』

織斑先生から作戦の開始が宣言される。

それと同時に全てのISが一瞬にして高度300mまで上がる。

その後は攻撃チームの4人は衛星からのデータリンクを使い目標の現在地を確認して接触予測地点へと飛んでいく。

こちらもそれぞれの指定された地点へ移動する。

「こちら嵐、天野ペア。目標地点に到着。周囲警戒に当たります。」

「現在は特に問題はありません。」

『こちら本部、了解した。そろそろ攻撃チームが目標と接触する。そちらも注意しろ。』

「了解です。」

さて、このまま一夏が福音を斬って終わればいいが…。

そう簡単にはいかないだろう。気を引き締めないとな。

「近くに小さい島があるくらいか…。何かを隠すならあそこかしら

？」

鈴が視界内に捉えた島を見ながら言う。

「この辺りも十分な深さがあるから海のなかもありうるね。ファイルロード。ドラゴンフレア、レオサークル。」

ドラゴンとレオを召還しておく。

俺と鈴で背中合わせになり、左右はドラゴンとレオが見る。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか…。」

「そろそろ一夏達も現場着くから動きがあるならこのタイミングだな。」

センサーに反応が来る。

「真下!？」

「やはり海の中!？」

下を見つつそれぞれ距離を取る。

次の瞬間、大量の水が竜巻の如く昇ってきた。

「これは!？」

「波動龍神撃!？」

ハイパープラズマドライブで大量の水を圧縮して叩きつける技だ。

この技を俺…電童以外で使えると言えば…。

「こちら風、天野ペア！本部！聞こえますか！」

「ダメ！星夜！お得意のジャミングだわ！一夏達や簪達にも繋がらない！」

海中から風牙が飛び出して来る。

このタイミングでこいつが相手か。

「俺が前に入る！鈴は援護を！」

「わかったわ！」

タクティカル・アームズを構え風牙に斬りかかる。

風牙は両腕を使い受け止める。

ドライブユニットを使いタクティカル・アームズを弾く。

こちらは無防備な状態になる。

すかさずこちらに追撃を入れようとする風牙。

「やらせるか！崩拳！」

左右から鈴の腕部衝撃砲、ドラゴンの火球が飛んでくる。後ろに退き回避する凰牙。

そのままレオが飛び込み追撃をかける。

「喰らえっ！」

タクティカル・アームズを変形させて撃つ。

レオが直前まで張り付いていたのにもかかわらず難なく回避する。

この戦い…簡単には終わりそうにないな…。

鈴と並び、凰牙を睨み付けながら構える…。

「こちらデュノア、更識ペア。目標地点に到着しました。」

「そのまま警戒に当たります。現在問題はありません。」

『こちら本部、了解した。攻撃チームが間も無く目標に接触する。注意しろ。』

「わかりました。」

「周辺には何もなし…。奇襲をかけるなら海の中からじゃないと難しいね。」

「そうだね。バイパー程の加速が無い限りはそれこそステルスでもないと。」

簪とシャルロットは話ながらもそれぞれの機体の中に待機していたデータウエポンを呼び出す。

「頼むよ、ブル。」

「よろしくね、ボア。」

2体のデータウエポンは頷く。

「敵が来るならきつと同時に来るかな？」

「そうだね。そうすればお互いにフォローとかし辛くなるし。」

2人は冷静に周りを見渡す。

「センサーに感あり、来る！」

「あれは…：鳥？」

センサーに反応があった方を向くと鳥のような機体が近づいてきていた。

「本部に連絡は…無理みたいだね。」

「まずはあれを倒してそのあとは織斑くんの援護かな？」

「そうだね。状況的にそっちが優先だね。」

それぞれ武器を構える。

レーダーに表示されてある距離はみるみると減っていく。

距離が500mを切った瞬間に鳥のような機体が2門のビーム砲を放ってきた。

2人は散開して避ける。

そのままお返しにアサルトライフルと春雷を放つ。

敵は体をロールさせて回避する。

ブルとボアはそのまま敵にむかって突撃する。

敵はブルとボアを避けるように横に曲がるとシャルロットと簪を中心に旋回を始める。

「見た目通りに機動性が高そうだ。」

「なら、ショットガンと山嵐で逃げ場を無くせば。」

シャルロットはショットガンとアサルトライフルを構え、簪は春雷と山嵐を構える。

ブルとボアも2人に合わせるためタイミングを計っていた。

一夏を背に乗せた簪は目標地点に向かい飛んでいた。

その後ろにセシリアとラウラが並んでついてくる。

「見えたぞー！一夏ー！」

「あれかつ!!」

「ボーデヴィツヒより本部へ、目標を視認、これより接触します。」

「また、周囲に獣型ISは確認できませんわ。」

『こちら本部、了解。そのまま予定通りに行動しろ。仮に獣型がデータウェアボンなら奴から出てくる可能性もあるから注意しろ。』

「了解！」

ハイパーセンサーに目標である銀色のISが映る。

本部に報告を済ませそのまま目標に近づく。

(資料にあった多方向同時射撃ってどんな攻撃だ?)

一夏は頭の中で敵の情報を思い出す。

まだまだIS初心者の一夏ではわからない事が多いので考えるのはやめて、雪片式型を握りしめる。

「加速する！目標には10秒後に接触する！一夏、集中しろ！」

「私とセシリアで左右から入れる、その隙を狙え。」

「一夏さん、頼みますわよ。」

「ああ！」

セシリアとラウラはそれぞれ左右に別れる。

箒は一夏を乗せたまま加速する。

「攻撃開始！」

「喰らいなさいな！」

「うおおおおおおお！」

ラウラは肩のリボルバーカノンをセシリアは大型ライフルヘスターダストシューターを発射する。

そのタイミングに合わせて一夏は箒の上より瞬時加速を使い飛び込む。

福音の目前を狙って放たれた射撃は狙い通りに牽制の役割を果たす。

それにより福音は減速し体制を崩した。

零落白夜を発動し、真上から斬りかかる一夏。

(行ける!!)

光を纏った刃が福音に触れる直前。

「なにっ!？」

身を翻し斬撃を紙一重で避けた。

「一夏！そのまま逃がすな！追撃を掛ける！」

「ここで逃げられると後がありませんわ！」

「わかった！箒も援護を頼む！」

「任せろ！」

「敵機確認、4体、迎撃モードへ移行」

機械音声が聞こえる。

「攻撃、開始」

福音は周囲に対して翼から大量のエネルギー弾を発射する。

一夏に向かつて飛んできた弾は全て突然出現した赤い壁に防がれる。

「サンキュー、ユニコーン。」

ファイヤーウォールを展開するユニコーンに礼を言いながら構え直す一夏、射撃が止むと同時に再度斬りかかる。

それに合わせてセシリアとラウラからも援護が入り、福音の行動を妨害する。

一夏に合わせて箒も飛び込み、2人で連続で斬りかかる。

流石の手数に福音は防御などを織り混ぜながらも最低限の動きで最低限のダメージに抑えていた。

〈軍用IS〉の恐ろしさを肌で感じる一夏達、徐々に焦りが出始めている。

「くっ！思うように当たらない！」

「大丈夫だ！奴は確実にダメージを蓄積している！このまま私と一夏なら倒せる！」

しかし、箒だけは違った。何も知らないからか攻め立てる。

開いた腕部装甲からもエネルギー放ちダメージをわずかだが与える。

だが箒が密着している為、セシリアとラウラは思うように射撃が出来ないのだ。

「箒！一度距離を取れ！」

「そのまま押しきれぬ相手では無いぞ！」

「何を言う！このまま一気に倒せば良からう！星夜のような腰抜けではない!!」

「見極める為に距離を取るのも必要ですわよ!？」

仲間達の声も聞かず攻め続ける箒。

(このまま勝てば皆はいや、一夏は私のことを――)

勝ったと思いついでいた箒、次の瞬間。

／グオオオオオオオオオツ!!／

獣の咆哮が轟く。

「獣型か!？」

「どこだ!？」

「一夏さん!上ですわ!」

「一夏!そんなのはそいつらに任せておけ!お前と私でこいつを!」

一夏は襲いかかって来た爪を紙一重で避ける。

「セシリア!ラウラ!ユニコーン!こいつを頼む!その間に俺たちで福音を倒す!」

雪片式型で獣を弾き、福音へ飛び込む一夏。

一夏を追おうとする獣、そこへ射撃を入れて追撃を防ぐラウラとセシリア。

「私が前に出る!ユニコーンはセシリアを守れ!」

「援護しますわ!」

バイパーの力を使い、分身するラウラ。

「全方位からのA I C、避けられるものか!!」

「こちらも喰らいなさいませ!」

多少の燃費は悪くとも短期決戦を仕掛けるラウラ。

だが、獣は一瞬で加速し、A I Cの射程外へと移動してしまう。

「ちっ!掠りもしないのか!!」

「なんてデタラメな加速ですの!?!」

分身を解除するラウラ。

双頭の獣はこちらを見定めるように構えている。

「だが、負けはしない…。」

「ええ、当然ですわ。」

互いに睨み合う。

四つの戦いは始まったばかりだ…。

第37話 《失敗》

アメリカ・イスラエル共同開発の軍用IS〈銀の福音〉が謎の機体に襲撃され、暴走。

それを止めるため出撃したIS学園1年生の専用機持ちだったが他の襲撃者も現れ、4つの戦いが始まった。

シャルロット&簪。

この2人の戦法は圧倒的弾幕で敵の動きを封じ、敵の苦手とする距離から攻撃をする。

単純ながらもこの戦法は非常に有効である。

同じ学年で言えば一夏やセシリアはそれぞれ得意な距離と不得意な距離がはつきりしているためこの2人との相性は悪い。

さらに今は敵を拘束する事が出来る2体のデータウエポンが居るため、戦況は有利に傾いている。

シャルロットのショットガン、簪の山嵐が敵の動きを予測し、未来位置へ射撃を行う。

鼻っ面にショットガンの散弾や大量のミサイルが飛んでくるので敵は旋回などして回避する。

そうすれば減速する、そのタイミングを狙ってデータウエポンからの攻撃または特殊能力が入り、動きが鈍る。

そこにシャルロットのアサルトライフル、簪の春雷が追撃をかける。

先程からこのような流れだ。

「よし、いい流れだね。」

「敵には体当たりとビーム砲以外に攻撃手段が無い？」

2人は戦いながらも敵を分析する。

「でも、この速度は驚異的だ。本当は支援機なのかも。」

「確かに…データウエポンに近い感じがする。」

結構こちらの攻撃が当たっているはずなのだがこの敵はダメージが入った感じがしない。

まるでその場で再生でもしてるのだろうか。

「なら、特殊能力は再生か防御かな？」

「うん、さつきから動きにダメージを感じられない。」

簪は話ながら自分の機体のステータスを確認する、山嵐の弾数、春雷の残りエネルギー、ブースト残量…。

「シャルロットさん！これ以上長引くところが不利になるかもしれないから一気に決めよう！」

「そうだね。簪はクロックマネージャーで停めてくれる？そこにブルのファイナルアタックを入れるから！」

シャルロットの機体は手持ち式の弾薬兵装が多いためエネルギーの減りが他の機体に比べ少ない。

そのため、機体のエネルギー残量に威力が比例するファイナルアタックを高い威力で撃つことができる。

「ブルドライブ！」

「ボアドライブ！」

「インストール!!」

シャルロットはブルホーンを、簪はガトリングボアを装備する。

「まずは山嵐！」

「ショットガンはこれでラスト！」

先程までと同じように敵の動きを制限するため、山嵐で包囲し、ショットガンで鼻っ面を狙う。

敵は山嵐と散弾の間をすり抜けようとするため、比較的弾幕の薄いところに機首を向ける。

「回避軌道予測、クロックマネージャー!!」

簪は敵の減速に合わせて当てるため、クロックマネージャーを発動する。

敵にクロックマネージャーの光が当たる。

「最大停止時間2.5秒！」

「ブルホーン！ファイナルアタック！」

簪が停止時間を言い終わるよりも先にブルホーンに有りつただけのエネルギーを送りながら瞬時加速を使い敵の懐に飛び込むシャル

ロット。

「はあああああ!! 砕け散れえ!!」

右腕を振りかぶり、エネルギーを纏ったブルホーンを叩きつける。直後、大量のエネルギーを叩きつけた敵は爆散する。

爆発が収まり、周辺を確認するも敵影は無かった。

「よし! 敵機撃破!」

「本部! 聞こえますか!? こちらはデユノア、更識ペアです! 所属不明機に襲われましたが撃退に成功しました!!」

通信が回復した事を確認し、すぐに本部と連絡を取る。

『デユノア、更識、こちら本部。今すぐに攻撃チームの方へ向かえ、現在他のやつらとの連絡が取れん。』

「了解! デユノア、更識ペア直ちに攻撃チームへ合流し、援護します。」

『頼むぞ。』

2人は座標を確認し、攻撃チームの初期目標地点へ向かう。

2人が飛び去り、静まり返った後、水面からゆっくりと浮上する物があった。

「ふむ…元より足止めのもりでしたが私のベクターを撃破するとは…。なかなか楽しめそうですね。」

白い体を持つ細身の機体…その足元には《今、倒した敵》の姿があった…。

「我々の今回の役目はこれで終わり、後はラゴウと凰牙の仕事…戻りましょう。」

足元にいる機体に合図を送り、シャルロット達が向かった方とは別の方角へ飛び立って行った。

ラウラ&セシリア

一夏の援護を行っていたセシリアとラウラは予想通りに現れた獣型の敵と対峙していた。

「ぐっ!? こいつ、何者だ! バイパーの加速についてくるだど!」

「こちらは手数が普段より少ないのに…。」

今のセシリアの機体ブルー・ティアーズは全てのビットを封印し、

スラストアーとして使うことでスピードを上げたヘストライクガンナーだ。

そのため攻撃はストライクガンナー用の大型ライフルヘスターダストシューターのみのため、手数が普段よりも少ない。

敵とインファイトを繰り返すラウラ。

敵の爪と牙を右のプラズマ手刀と左のバイパーで弾く。

タイミングを計ってワイヤーブレードを射出するが掠りもしない。

「ちいっ!!」

離れた瞬間にセシリアがライフルを撃ち込むも敵は飛び上がり回避した。

「ユニコーン!」

ラウラの合図と共にファイヤーウォールを展開したままユニコーンが突撃する。

／グガアアア!／

赤い壁に叩きつけられるような形になる獣。

そのままユニコーンがラウラの方へ敵を運ぶ。

「喰らえ!クラッシュヤーファング!」

左腕を振りかぶり叩きつける。

同時に腕に装備したバイパーが牙をもつて噛みつく。

しかし、次の瞬間バイパーが強制解除される。

「バイパー!?!どうした!?!」

突然の事態にラウラは左手を見る。

しかし、戦闘の最中その一瞬は命取りとなる。

／ギシャアアア!!／

その隙を見逃さずラウラに爪と牙を突き立てようと体勢を立て直した獣が襲いかかる。

「やらせませんわ!」

飛びかかる敵をセシリアの一撃が吹き飛ばす。

「すまない。セシリア。」

「それよりもバイパーさんは?急にどういたしましたの?」

「わからん。やつに噛みついた途端に解除された。」

ラウラがステータスを確認するとバイパーウィップ機能不全の表示が出ていた。

「もしかしたらそれがあの敵の特殊能力かも知れませんわね。」

データウエポン達の持つ特殊能力かも知れないと2人は結論付け獸を見据える。

「いざと言うときに使えんと困るからユニコーンはセシリアがしまつておけ。」

「そうですね。ユニコーンさん、ブルー・ティアーズのなかに。」

セシリアの指示に従いブルー・ティアーズに入るユニコーン。

「とにかく…あいつの攻撃はヤバいな。」

「そうですね。直接接触は可能な限り避けるのが無難ですわね。」

2人は獸に対し、射撃を主体に攻め始めた。

だが先程と異なりバイパーによる加速もユニコーンの援護も無い状況ではこちらが当たらないようにするので手一杯だ。

「なんとか…しなければ。」

「ラウラさん、7時の方角の海面に船がありますわ!？」

セシリアに言われてそちらに少しだけ意識を向ける。

そんなには大きくないが確かに船が居る。

「なんだと!?!確か教師陣が海域を封鎖しているはずでは!?!」

「公式にこの海域全体に対して放送をかけた筈ですのに…。」

つまりは公には出来ない船…密漁、密入国、敵の偽装船…これらが可能性としてはある。

「怪しすぎる。だが手を出してこないなら今は無視する。可能なら後程対処する。」

「ええ、データ収集の為の船の可能性もありますからね。」

敵と戦いながらも可能性を考えた2人はそれを放置するしか無かった。

「しかし、あの位置だと一夏達と近い、警告しなくては…!」

「そうですね。一夏さん!近くに不審船あり!気を付けて下さいな!」

一夏&箒

福音と対峙する一夏と箒、2人は左右から敵を挟むように動き、それぞれ斬撃を与えていく。

流石に大きな攻撃は当たらないようだが相手も防御や回避に集中しているのか先程のような射撃は鳴りを潜めている。

(さつきと違ってユニコーンは居ない。しっかりと避けないとな…。当たったらその分、零落白夜の時間が減っちゃう。)

「一夏！私が動きを止める！その隙に！」

「わかった！箒、頼むぞ！」

(とにかく今は倒すことだけを考える！)

雪片式型を握りしめる。

「La……………♪」

まるで歌うかのようなマシンボイス。

福音は箒に向け、大量のエネルギー弾を発射する。

「ふん！甘いぞ！その程度では当たらん!!」

敵からの攻撃を紙一重で避けて空裂を振るう。

至近距離から放たれたエネルギーを避けるため、強引な軌道を描く

福音。

(今だ！)

隙が出来た瞬間、一夏は敵の懐に飛び込み雪片式型で斬りつける。

左腕の一部を落とす福音。

今までの攻撃と違い、しっかりとしたダメージが入った。

「左腕、ダメージレベル上昇、機能低下」

「このまま終わらせる！」

『一夏さん！近くに不審船あり！気を付けて下さいな！』

セシリアから通信が入る。

言われてリーダーを確認すると確かに海面に船が一隻居る。

「一夏！そんなのは放っておけ！どうせ犯罪者の類いだ！」

「関係の無い奴だったらどうするんだよ！」

「今はこいつに背を向けられる状況か!?!」

「対象危険度再設定、排除」

福音が広範囲攻撃を行う。

敵の攻撃を避けるため距離を取る一夏。

いくつかの弾が謎の船に向かうのが見えた。

「ちくしょう！」

瞬時加速を使い、エネルギー弾の先回りをする。

零落白夜でエネルギー弾を消す。

今のでエネルギーがそこをついた。

展開していた雪片式型が閉じていく。

光を放たなくなった雪片式型を構える。

「まだだ……気持ちまで折れちゃいない！」

「一夏！なぜあんなやつらを助けた!？」

箒が近づいてくる。

「箒：俺は守るって決めたんだよ。だから、守れるやつは全部守る。

それは譲らねえ、例え千冬姉でもな。」

「ここでやつを逃がすほうがもつと被害が出るとわからんのか!？」

「零落白夜が使えなくなっただけで負けるかよ！」

「対象、エネルギー低下、危険度低下、殲滅」

福音が羽から大量のエネルギー弾をこちらに向けて放とうとする。

「箒！とにかく今は上に！流れ弾があっちにいかないようにするぞ

！」

「仕方あるまい。」

2人は上昇する。

2人に向けて大量のエネルギー弾がばら蒔かれる。

距離があるためそれなりに弾には間隔があるため、なんとか小さい

ダメージですむ筈だ。

「一夏さん！コア・ネットワークを通じてユニコーンさんをそちらに

送りますわ！」

『ファイヤーウォールで時間は稼げる筈だ！』

「セシリア！ラウラ！そっちは大丈夫なのか!？」

『やつとデータウエポンは相性が悪いようだな。そちらに送る。』

「わかった！助かる！来い！ユニコーン!!」

一夏の呼び掛けに答えてユニコーンがセシリアの元から送られてきて、一夏達の前に出る。

「頼むぞ、ユニコーン！」

一夏の言葉に合わせてユニコーンはファイヤーウォールを展開し、まっすぐ福音に向かって進む。

「敵、障壁展開、強度計測」

「うおおおおー！」

ユニコーンと共に飛び込んだ一夏が福音を斬る。

しかし、今度は腕で止められてしまった。

「ちっ、堅いな…。」

「まだー私がいるぞー！」

そう言い福音に飛び掛かり、2本の刀で斬りつけようとする筈。

振りかぶった瞬間、全身の展開装甲が閉じた。

さらには刀が光となって消えていってしまった。

具現維持限界（リミット・ダウン）…ISのエネルギーが少なくなり、機体を展開できなくなるのだ。

今はまだ機体は展開出来ているが一撃でも喰らえば機体の強制解除は避けられない…。

ここは戦場だ、学園のアリーナで気を失うのとは訳が違う。

「敵、排除」

「筈いいい!!」

筈に向かい飛び込み、抱え込む一夏。

そのまま福音から離れるように飛ぶ。

当然、ユニコーンは2人を守るためにファイヤーウォールを展開する。

「……だが。」

「グオオオオオオ！／＼」

ユニコーンに真横からセシリア、ラウラと戦っていたはずの獣が噛みつく。

ファイヤーウォールは1面にしか展開できない為、この奇襲に対処出来なかった。

「なっ！ユニコーン!!」

ユニコーンの首を2つの頭が噛みつく、メキメキと音を立てるユニコーンの装甲。

少しずつつアイヤールが薄くなっていく。

「一夏！今は少しでも離れろ！」

「ユニコーンさんを離さない!!」

獣を追いかけてきたセシリアとラウラがユニコーンを助けるため狙いをつける。

獣はユニコーンをセシリアとラウラに向かって放り込む。

ラウラが受け止める。

ユニコーンの目がいつもの緑の輝きを失い、黒くなっていた。

「ぐっ！ここは一旦退くぞ！」

「一夏さん！後ろです！」

「敵、障壁解除、攻撃再開」

「ぐあああああ!!」

獣に意識を向けていた一夏は福音の事を忘れていた。

一夏に向かって射撃をいれる福音。

箒を守るため、その攻撃を全て背中で受ける一夏。

わずかに残っていたエネルギーシールドは一瞬でつき、白式の装甲が砕け、そのまま海へ落ちる一夏。

(あっ…せめて…箒だけでも…リボン…燃えちまったな…。)

一夏が庇った為、最小限のダメージすんだ箒、呆然とする彼女はただ一夏と、一緒に落ちるだけだった。

「いつ一夏あああああ!!」

「一夏さあああんっ!!」

「新たな敵の接近を確認、機体状況確認、戦域からの離脱を優先」

仲間がやられ叫ぶ2人、その2人を無視して獣と福音はそれぞれ飛び去る。

『攻撃チーム！聞こえる！こちらはデユノア、更識ペア。状況は!?!』

『攻撃チーム！聞こえていたら返事を!!』

シャルロットと簪が飛んでくる。

「こちらはラウラ！一夏とユニコーンがやられた！」

「箒さんもエネルギー切れですわ。目標は逃げられましたの！一夏さんが海に落ちたのでこれから引き上げますわ。」

『えっ！一夏とユニコーンが！』

『すぐにそちらに行くから待ってて！』

シャルロットと箒が合流し、すぐに海から一夏と箒を引き上げた。

引き上げた2人は気絶しているようだった。

「こうなると星夜達が心配だ。」

「だけど、このまま行ったら足を引つ張るだけだよ。」

「行けても誰か1人だけ…。」

「私のストライクガンナーでしたら…。」

『駄目だ！許可できません。』

「教官?!なぜです!?!」

敵が離れたおかげで通信が回復したようだ。

『仮に援護に行けたとして、戻る途中に敵からの攻撃があったらどうする？ボアやブルだけでは対処できません。まずはそちらの負傷者を連れてこい。その後、救援に向かえ。』

「わ、わかりました。」

「攻撃チーム並びデュノア、更識ペアはすぐに本部へ戻ります。」

『ああ、頼むぞ。こちらは負傷者の受け入れ準備を進めておく。』

倒れた仲間を抱えてもと来た方角へ周囲を警戒しながら戻るのがあった。

俺―天野星夜―は鈴と共に凰牙と睨み合っていた。

「いい加減あんたの名前くらいは知りたいものだな！」

「同感！頭部装甲吹っ飛ばして顔を拝ませてもらおうわよ！」

鈴と同時に左右から凰牙に斬りかかる。

しかし、本当にこいつは何者なんだ？

所属も目的もわからないしな。

凰牙は鈴の方へ飛び込む。

双天牙月の斬撃を潜り込むように避け、腹に向けて拳を入れようと

する。

そこに横からレオが飛び込む、レオの攻撃を回避するため後ろに下がる凰牙。

そのまま後ろから俺が切り込む。

「はあああー!」

凰牙は即座に回転蹴りを行い、タクティカル・アームズの腹に踵を当て、弾く。

「相変わらず反応がでたらめだな。」

「衝撃砲も普通に避けるし、やになっちゃうわね」

しかし、何度も攻撃をしているがあいつからは今回はあまり仕掛けてこない。

「もしかしてこいつ、時間稼ぎが目的か?」

「つまりは一夏たちに何か仕掛けてるかもって事ね。」

そう考えるとここでちんたらやり合う訳にもいかないな。

「一気に決める!」

「ドラゴンドライブ!」

「レオドライブ!」

「インストール!」

俺がドラゴンを鈴がレオを装備する。

「喰らええええっ!」

鈴が一気に凰牙との距離を詰める。

「レオ!旋風脚!!」

レオのカッター部が凰牙の胸部装甲の一部を削る。

「もう、一回!」

あげた足をそのまま降り下ろす。凰牙は体をひねり回避する。

「こいつも喰らえっ!」

至近距離からの衝撃砲を叩きつける。

さすがの凰牙ももろに喰らったらしく勢いよく吹き飛ぶ。

「火龍!重落下!!」

ドラゴンを装備した状態で爆砕重落下を決める。

当然当たるときにはゼロ距離でドラゴンの炎を喰らわせる。

そのまま海面へ落ちる凰牙。

海に大きな水柱がたつ。

「まだ…終わってないわね。」

「ああ、全部しっかり軽減してやがる。」

多少はダメージが入っているようで海面から出てきた凰牙には所々に焦げなどが見える。

「ふっ…ふはははっ!!」

いきなり凰牙が笑った。

「何がおかしい!?!」

「やっと思出したと思ったら笑い声!」

「お前を!倒せる!」

いきなり俺を指差す凰牙。

「やっぱり俺が目的か。」

「まあ分かりきってたし。」

「だが、簡単に消したらつまらないからな!お前の大切なものから消してやる!守れなかったと後悔しながら消えろ!」

今度は鈴を指差す。

「あんたがあたしを倒す?出来ると思ってるの?」

「そもそも俺達を倒すつもりかよ。」

2人で構える。

「お前らだけじゃねえんだよ!聖獣持ちは!来い!ラゴウ!!」

凰牙が手をかかげる。

次の瞬間ドス暗い影の中から福音を襲った獣が現れた。

「ラゴウドライブ!インストール!!」

ラゴウと呼ばれた双頭の獣が吠えると黒い影になり凰牙を包む。

「これが俺の『憎悪』!!」

凰牙の両腕には双頭を模したナツクルガードに似た物、両足には巨大な爪、背中には白い巨大な翼。

正に悪魔と呼ぶにふさわしい姿だった。

『憎悪』…何を憎んでるんだかな。」

「星夜のと比べて暗いわね。他には『絶望』とか『孤独』とか?」

「貴様らとの力の差…思いしれ！」

「来い！『憎悪』なんぞに負けるかよ！」

「私の『勇氣』を思いしれ！」

ラゴウをまとった凰牙がこちらに飛び込む。

まっすぐ進んでくるのでこちらから正拳突きを叩きこむ。

しかし、それは残像だった。

「なっ!？」

「全然遅えよっ！」

「があっ!？」

「ぐううっ!？」

右から喰らったと思ったら下から、左から、後ろから、次々と攻撃を一方的に喰らう。

気がついたら近くの小島に鈴と共に叩きつけられた。

「まずは…お前からだ！」

上空から鈴に向かって蹴りをいれる。

「かはっ!!」

「り…鈴…!」

そのまま鈴を踏みつける体勢の凰牙。

脚に着いたラゴウの爪がメキメキと音を立てて装甲に食い込む。

「ぐっ! あああっ!!」

「はっはっはっ!! やっぱりお前らじゃ話にならねえな。」

凰牙は腕を振り上げる。

鈴は先程の踏みつけで絶対防御が発動したのか気絶している。

「これで終わりだ!!」

腕を降り下ろすその瞬間、レオが凰牙を突き飛ばす。

「ちっ、邪魔すんな!!」

鈴の上から凰牙が退いた。

「ドラゴン！鈴を頼む！」

ドラゴンを呼び出す。

ドラゴンは鈴を掴むと一目散にもと来た方角へと向かう。

「ふん！逃がしたか…まあいいか、あれはおまけみたいなものだ。」

こちらを向く凰牙。

こちらはなんとか立ち上がる。

「まだ、負けてない……。」

「そうだ、これから負けるんだよ！」

凰牙は両腕のラゴウの口にエネルギーを送り込む。

黒いエネルギーが溜まる。

恐らくは…ラゴウのファイナルアタック。

「くっ!?レオ！行くぞ！」

咄嗟にレオを装備する。

こうなったらファイナルアタックで打ち消すしかない。

四肢のドライブユニットが最後の力を振り絞るがごとく無理矢理

回転し、出力を上げる。

「レオサークル!!」

「ラゴウ!!」

「ファイナルアタック!!」

右脚のレオから放たれた光輪のエネルギーはラゴウから吐き出されるドス黒いエネルギーに軽やかに消される。

そのままエネルギーの濁流に飲み込まれた。

「ぐうっ！あああああ!?!」

頭の中にまるで虫が巣くったような感覚。

脳みそだけがぐちゃぐちゃにされてるみたいだ。

エネルギーの濁流が収まった時、俺は吹き飛ばされ、海に落ちていった。

第38話 《折れない心》

軍用ISの暴走、その制圧に向かった専用機持ち達は敗北した。気絶した一夏と箒、そして動かなくなったユニコーンを抱えて帰ってきた4人。

「では、エネルギーの補給が終わり次第、星夜たちの援護に向かいます。」

医療班に一夏と箒を預け、ユニコーンを技術班に預ける。

ラウラは千冬に自分のすべき事を伝える。

「ああ、ボーデヴィツヒ、オルコット、デユノア、更識の4名は補給が完了次第すぐに――」

「織斑先生!!」

真耶が走ってくる。

「山田先生、何かありましたか?」

「今、海岸に気絶した凰さんを抱えたドラゴンフレアくんが!」

「凰が!?天野は一緒ではなかったのですか!?!」

「くっ!織斑先生!我々はすぐに出ます!」

「わかった、無茶はするなよ!」

3人はすぐさま海岸へ走る。

「凰さんは機体のダメージが少し多いだけなので大丈夫そうですね。」

鈴の状態を確認し担架に乗せる教師達。

「ドラゴンフレア、戻ってきたところ悪いがすぐに星夜の所まで案内を頼むぞ。」

ラウラの言葉にドラゴンは頷く。

「しかし、凰と天野がこれほどの状態に追い込まれるとは…一体敵は何者だ。ドラゴンフレア、可能なら私の端末にデータを。」

ドラゴンは千冬の手元の端末に先程の交戦記録を送る。

「これが…凰牙。」

「やはりあれはデータウエポンだったのか。」

「あの速さで電童以上の攻撃力…恐ろしいですわね。」

「皆、いこう!星夜くんの所に!」

「お前たち、凰牙に会っても逃げることを考えろ、今は人命が優先だ。」

「了解！」「了解！」

セシリア、簪、ラウラ、シャルロットは機体を展開し、即座に飛び立つ。

ドラゴンが先頭になりそれについていく。

しばらく飛ぶと映像の最後にあった小島に着く。

「ここか…。凰牙は居ないようだな。」

「あの砂浜、挟れてる。ここで戦ったみたいだ。」

「星夜さん！星夜さん！」

「聞こえてたら返事をして!!」

ジャミングは消えているようで星夜に対して通信で呼び掛けるが返事がない。

「こちらラウラ、現場に到着しました、敵は確認出来ず。これより天野星夜の捜索に当たります。」

『こちらは本部、了解した。それと篠ノ之と凰が目を覚ました。回復を待つてそれぞれ事情を聞く。気を付けろよ。』

「了解です。」

ラウラは通信を切る。

「ドラゴン道案内助かった。機体内に入って休んでくれ。」

ドラゴンは頷くと近くにいたセシリアのブルー・ティアーズの中にデータ化して入っていった。

「星夜くん、どこだろう?」

「もしかしたら海に落ちて潮に流された可能性もある。電童のコア反応を探そう。」

「ブルもお願いな。」

全員がレーダーの出力を最大にして探す。

10分ほど探すと海底に反応があった。

「この下のようだな。」

「慎重に行こう。」

「敵が待ち構えてる可能性があるからね。」

「星夜さん…。」

海の底に力なく倒れた電童とレオサークルを見つめる。

「まさか…電童のこんな姿を見ることになるとはな。」

ラウラが海底から電童を引き上げた直後に呟く。

「そうだね、ボロボロになることは合っても勝つまでは絶対に立ち上がって居たから…。」

レオサークルを抱える簪が頷く。

「大丈夫だよ…星夜はきつと立ち上がるから…。」

「ええ…星夜さんは心の強さを知っている方ですから…。」

暗い雰囲気の中、急いで旅館の方角へ飛んでいく4人だった。

星夜を連れて帰ってきた4人。

すぐに星夜は医務室として割り振られた旅館の一室に運ばれた。

レオサークルも先に回収されていたユニコーンの横に並べられている。

「お前たち、よく戻った。現在、我々の目標である福音を含めた敵勢力は全てロストしている。状況に変化があればまた指示する。それまでは待機しろ。」

千冬が淡々と指示をする。

「教官、一夏とユニコーンの容態は？」

「ああ、一夏は命に別状は無い、ただ眠っているだけだ。いつ目覚めるかはわからない。」

その言葉に全員がほつとする。

「ただ、ユニコーンドリルに関してはお前たちから。」

「織斑先生！それは一体どうゆう事ですの!?!」

千冬の言葉にセシリアが身を乗り出す。

「オルコット落ち着け。」

「セシリアさん、気持ちはわかるけど、落ち着いて。」

簪がセシリアを止める。

「データウエポンはISとは違う、それはお前たちも知っているだろう。よって今GEARにデータを送り、チエックをしてもらってい

る。」

「織斑先生、鈴と箒は？目が覚めたと聞いていますが。」

シャルロットがここに居ない2人の事を聞く。

「あの2人は先に待機室に行かせた。」

「わかりました。」

「現状、作戦中止の連絡は無い、よって福音が見つかり次第すぐに出撃することになるから各員はしっかりと身を休めておけ。」

「教官、その時に紅椿は出すのですか？」

ラウラは一番の懸念材料になる箒の事を聞く。

「あの状態では使い物になるまい。ただの的を戦場に送り込むつもりはない。他に何もなければ待機室に行け。」

全員が挨拶し、部屋を出る。

「山田先生：GEARから返事は？」

後ろに立つ悲痛な顔をする真耶に千冬は問う。

「非常に：危険な状態だそうです、このままでは侵食されて消滅の危険があると…。」

「打開策は？」

「データウィルスの為、ワクチンがあれば何とかなるかも知れないと…。」

「生徒を守るため、回避できたであろう攻撃を喰らった奴が消えるのをこのまま見ていると？」

「GEARの方がこちらに来て間にも間に合わない可能性が…。」

「なら、こちらのスタッフと機材でできる限りやるか。」

千冬は大きなため息を吐く。

「天野に関しては？」

「機体もダメージが大きいですか本人の神経のダメージが深刻だと思います。」

「神経？」

「はい、それが敵の攻撃を喰らった際に各種センサー類から入る情報に膨大なノイズがのってしまい、脳が処理できなかつたと思われるます。」

「そうか…あいつらになんと伝えればいいか…。」

真耶から貰った飲み物を一気に飲み干し頭を冷やしても答えは出なかった。

待機室に向かう4人、部屋の戸を開けると鈴だけが居た。

「鈴さんだけ？ 箆さんは？」

箆が部屋を見渡しながら聞く。

「隣が医務室だからね、一夏の隣でシヨボくれてるわよ。」

鈴がイライラしながら答える。

「直接戦った鈴に聞きたい事がある…。」

ラウラが訪ねようとする。

「鳳牙の事でしょ？ 素直に言ってラゴウってあの獣が付かなければ勝てたかもしれない。」

「たしかにドラゴンさんのデータを見る限り優勢だったようですが。」

「ラゴウは何か弱点とかがありそうだった？」

「うくん…見たところラゴウも格闘用みたいだから、箆とシャルロットが牽制するだけで戦い易くなるはずよ。」

鈴は自分が感じた事を素直に言う。

「問題はデータウエポンとしての特殊能力ですわね。」

「恐らくはデータに対するもののようなだ。先程バイパーが使用不能になっている。」

ラウラは仮想ディスプレイにバイパーのステータスを表示する。

「大丈夫なの？」

シャルロットが尋ねる。

「ユニコーンやレオ程ではないが武装化等は難しいな。バイパーが言うには人に例えると風邪になったような感じだそうだ。」

「つまり、バイパーは死ぬほどではないけど立って歩くのは辛いつて感じ？」

「ああ、あっちの2体は重症を負ってるから解らないだろうが…。」

「ちよつとごめんね、本音を呼んでくる。」

「本音さんを？ どうして？」

「本音は元々整備科希望で、データウエポンに関しても井上博士達に色々聞いてたみたいだから何か解るかも。」

そう言つて簪は部屋を出た。

「色々大変なことになってるね、かんちゃん。」

千冬に許可を取り、宿の部屋で待機していた本音を呼んだ簪。

「どうにか出来そう?」

「仮に敵の攻撃が破壊プログラムなら、バイパーの方でそのデータを解析すればワクチンが作れるかも。」

「布仏、ここにある機材は好きに使い、ユニコーンドリルとレオサークルを頼む。」

「了解しました、織斑先生。」

本音は千冬に返事をしてユニコーンとレオに接続されたコンピューターのもとに向かい、作業を始める。

普段ののほほんとした雰囲気のは全くなく、真剣な眼差しでディスプレイを見つめる。

「本音、必要なものはある?」

簪は本音に訪ねる。

「こっちは大丈夫だからかんちゃんは休んでて、また出撃するんでしょ?」

「布仏の言う通りだ、更識は休め、こちらは教師がバックアップに回る。それと今、GEARとホットラインも繋がった。先方のスタッフにも意見聞き、作業を続ける。」

「わかりました、本音、お願いね。」

「任せて。」

本音は簪の言葉に振り向かずには答える。

簪は部屋から出ていった。

「布仏、バイパーは問題無いのか?」

「はい、バイップの言う通り人で言えば風邪をひいた感じで、このままでもそのうち回復します。」

「どうしてこんなにも違うのだ?」

「ユニユニとレオっちは敵が自分の意思で注入したけど、バイップは

噛んですぐに放したからそこまで酷くはならなかった見たいです。」
「なるほど、毒を注入されたのと舐めただけなら舐めた方が幾分は平気と言うことか。布仏、後を頼む。必要な物があれば近くの教員に言え。」

「わかりました。」

作業をする本音と技術スタッフを残し、千冬は部屋を出て、会議室に向かう。

「山田先生、ボーデヴィツヒ達から報告のあった所属不明の船は？」

「はい、すぐに海域封鎖担当者を向かわせましたが確認できませんでした。」

「なら、やつらの船か…？」

「今回の襲撃…織斑先生は何が目的だと思えますか？」

「ラゴウのテスト辺りが妥当でしょう。しかし、それを考えるのは我々の仕事ではない。」

「生徒達を無事に帰すことですね。」

「そうです。既に2人倒れてしまいましたか…。」

「織斑君、天野君…。」

「しかも、データウエポン達が居なければさらに被害が増えていたかもしれない。」

「これ以上は…。」

「ええ…絶対にやらせん。」

千冬は各種情報が映されるディスプレイを睨む。

待機室にてセシリア、簪、鈴、シャルロット、ラウラは円陣を組み、話し合っていた。

円陣の中心にはデータウエポン達が居る。

「現状、僕たちが使えるデータウエポンは…。」

シャルロットは視線をデータウエポン達に向ける。

「ドラゴンフレア、ガトリングボア、ブルホーンの3体だ。」

ラウラがそれぞれを指差し確認しながら言う。

「クラッシュレイ、クロックマネージャ、オートプレッシュャー…。拘

束系能力が2つ、ラウラさんのA I Cも含めれば3つもありますわね。」

セシリアが能力を確認する

「シャルロットさん達、パッケージをインストールしてみたいだけど終わったの？」

簪が装備を確認しながら訪ねる。

「うん、防御特化パッケージへガーデン・カーテン。ファイヤーウォール程ではないけど防御に自信はあるよ。」

シャルロットは笑いながら答える。

「私も砲撃特化へパンツァー・カノーニアだ長距離での砲戦なら負けん。」

ラウラも続いて答える。

「攻撃特化パッケージへ崩山、ファイナルアタックには負けるけど。継戦火力はなら負けないわ。」

「鈴さん、それは比べるのが間違っておりませんか？」

セシリアが鈴の言葉に突っ込みを入れる。

「そうになると、ボアはラウラさんが付ける？」

「いや、クロックマネージャの射程距離を考えると使いこなせん。

一番相性の良い簪が引き続き使うべきだな。」

「うん、解った。」

「欲を言えば僕はユニコーンを使いたかったけどね。」

「そのユニコーンとレオ…ついでに一夏の方は福音と凰牙をぶん殴らないとね。」

鈴が拳を握る。

「鈴さん、星夜さんの分は？」

セシリアが鈴を見ながら聞く。

「あれは勝手に起きて殴りに来るでしょ？だから私たちが勝手にやっちゃダメじゃない。」

さも当然といった感じで鈴は答える。

「本当に鈴って星夜と付き合って無いの？」

シャルロットが疑惑の眼差しを向ける。

「なに？付き合ってる事にしてほしい？」

余裕の笑みをこぼす鈴。

「鈴さん！」

セシリアと簪の声が重なる。

「あたしは星夜を信じてるだけよ。」

「話を戻すか、ドラゴンとブルは誰が付ける？」

ラウラが脱線した話の軌道修正をする。

「ドラゴンは中距離、ブルが近距離だね。」

簪が2体のデータを出して答える。

「シャルロットが使わないならあたし、ブル使って良い？」

「僕はかまわないよ。」

「ありがと。」

「ドラゴンはどうしようか。セシリアさんが付けると邪魔になるし…。」

「じゃあ、ドラゴンは僕が使うね。」

「よし、基本陣形を確認しよう。まず、私がへパンツァー・カノーニアにて遠距離からの狙撃。」

「私はヘストライクガンナーの速度を活かした一撃離脱の遊撃ですわね。」

「私は中距離での牽制を行うよ。」

「僕は中距離での防御だね。」

「そしてあたしはぶん殴る。」

円陣の中央のデータウエポン達もやる気を示すためかそれぞれポーズをとる。

「あとは福音か、凰牙が見つかるのを待つだけだね。」

「そうですね。」

「今、ドイツの副官と連絡を取り、ドイツ軍の衛星も使っている。時間の問題だろう。」

「さらっとすごいことやってるよね、ラウラさん。」

「日本では使えるものは親でも使えと言うらしいからな、それを見習った。」

「ちよつと違つような…。」

「どこ…どこだ？」

俺―天野星夜―は気がついたら草原みたいな所に立っていた。確か臨海学校中に軍用ISの暴走を止めるため出撃するから警備に出て、凰牙と戦つたところまでは覚えてるんだけど。

「鈴…無事かな。」

パートナーの安否が気になるが今の俺には腕にあるはずの電童も無い。

「しかし…何も無いな…。」

まわりは見渡す限りの草原だ。

風も日差しも程よくこのまま昼寝でもしたいくらいだ。

「まさかここが死後の世界って訳じゃないよな。」

とりあえず適当に歩き始めた。

「結構色々居るな。」

大した距離は歩いていないが気がつけば色々な生き物が居た。

馬、猪、龍、ライオン、蛇、牛…。

幻想的な生き物も居る気がするが気にしない。

そんな中を迷うことなく真つ直ぐ歩いていく。

まるで引き寄せられるように…。

―
旅館の一室。

医務室に割り振られたその部屋には2人の男性が寝かされている。

織斑一夏と天野星夜。

この2人は全身に包帯が巻かれている。

（私のせいだ…。）

ずっと一夏を見ていた筈…。

今日の自分の行いを頭の中で省みる。

（私が…しっかりとしていなかったから…。）

姉に頼み込み、自分専用のISを貰った。

しかもそれは世界最強のISだと言われた。

一夏と一緒に居たい…。

ただそのためだけに貰った物。

ただど力を手に入れた人間はそれを使いたくなる。

(私は…どうしていつも…。)

手に入れた力を制御出来ずに溺れる…。

箒はこれが初めてでないことを理解していた。

(中学の頃の剣道もこうだった…。)

剣道の大会で優勝した事もあったでもその時の自分は酷く醜かつた…。

何故なら心の中では自分より下のものたちを見下していたのだ。

武道を嗜む身の者であればそれがどんなにしていけないか解るとだ。

(周りにもあれほど言われたと言うのに…)

今日は朝の模擬戦の前から浮かれていると言われ、否定した。

作戦前も周りが支えようとして居たのに拒否した。

戦闘中も冷静に見極める事を弱腰だと馬鹿にした。

(それがこの様か…。)

目の前の一夏を見る。

3時間は過ぎたが目覚める気配はない。

一夏はこんな自分をかばって傷を負ったのだ。

もしかしたら一夏の横で寝ている星夜も元を正せば自分が失敗したせいで傷を負ったのかも知れない。

(こんな私には…専用機を…いや、ISを使う資格など…。)

そんな考えをしていると突然部屋の戸が開く。

「まったく。まだ居たの?」

鈴が入ってきた。

箒は全く動かなかった。

「なに? 分かりやすく落ち込んで『私、反省してまーす。』ってアピール?」

箒は反応しない。

「最低でも一夏とユニコーンがやられたのはあんたの責任よ。」

鈴はそのまま続ける。

「星夜は優しいからラグウがこっちに来たことはあんたのせいじゃ無
いって言うだろうけど。そっちの戦線が崩れなければラグウをこっ
ちに呼んだ時点で福音はどうにか出来たんじゃないの?」

鈴が部屋に入ってから箒は微動だにしていな。

「なにか言うことは無いの?」

「わ…私は…。」

やっと箒が口を開いた。

「もう…ISを使わない…。」

「あんたはそんな軽い気持ちで専用機を貰ったのか!」

鈴は箒の頬を思いつき叩く。

元々力を入れていなかった箒はそのまま倒れる。

「一緒に訓練が出来ないから、一緒に時間を増やしたいから専用機を
貰った!?それだけでもふざけてるのに調子に乗って周りに迷惑かけ
るだけかけてそのまま逃げるの!」

鈴は箒の胸ぐらを掴み、持ち上げる。

「あんたねえ…専用機持ちを何だと思ってる?あたしだけじゃない!
セシリアも!ラウラも!シャルロットも!簪も!」

鋭い目付きで箒を睨む。

「国中の奴らが切磋琢磨してるなかで一番になって!色んなもの背
負ってんのよ!」

虚ろな眼のする箒を怒鳴り続ける。

「それを…あんたは気まぐれで貰って!怖くなったら捨てる!?そんな
わがまま通ると思ってるのか!」

「力を持ったなら!その責任を果たしなさいよ!それに!1度負けた
から何だってのよ!」

「私が…戦ったら…。」

「ちっ!あんたの事をね!星夜はずっと評価してたのよ!」

「えっ…?」

予想もしたことがない言葉を言われた箒。

「あいつは勝敗じゃなくて、どんなやつが相手でも、性能に差があつて

も、正面から臆さずに立ち向かえる強い心があるってさ。…それも見込み違いだったようだけど。」

「星夜が私を…。」

「心が負けた臆病者は要らないから待機してろって千冬さんが言ってたわよ。」

「ど…どうしろと言うのだ!」

箒が怒りを纏った言葉を放つ

「どうしろ? 大事なものは箒がどうしたいかだよ?」

シャルロットが入ってきた。

「私が…どうしたいか…だと?」

シャルロットの言葉を繰り返す箒。

「そうだ、結果を怖れず、選ぶ。それが自分を作り出す。」

ラウラも入ってきた。

「一人で出来ることは高が知れてる。だから、手を取り合って、助け合おう。」

「クラスメイトや友人を信じ頼る事は弱さではありませんわよ。」

専用機持ち達が揃って箒を見る。

箒は腑抜けて居た体に入力立ち上がる。

「私は…戦う! 戦って今度こそ勝つ! 敵に! 何よりも己の弱い心に!」

闘志を燃やした眼差しを前に向ける。

「決まりね。」

鈴が笑う。

「シュヴァルツェ・ハーゼから報告があつた。ここから30Km程離れた沖合に目標を確認。ステルスモードには入っていたが光学迷彩は持っていないようだ。」

ラウラが告げる。

「さすがはドイツの特殊部隊。良いタイミングだね。」

「まずは織斑先生に報告だね。」

「では、参りましょうか。」

全員が医務室から出ていく。

「先に行ってるわよ。早く来ないと見せ場がなくなるからね。」
鈴は部屋を出る前に寝ている2人に静かに告げた。

「既に知っていると思うが、先程ドイツ軍のシュヴァルツェ・ハーゼより情報提供があり、福音の所在が判明した。」

作戦会議室に千冬の声が響く。

「また、福音以外は現在確認されていない。だがこれと交戦すれば出てくるのは確実だろう。」

メインディスプレイには福音、凰牙、ラゴウのデータが映し出される。

「だが、今回の目標はあくまでも福音だ。凰牙に関しては無理に撃破する必要はない。福音のパイロットの回収、ならびに機体の回収、出来なければ破壊だ。」

千冬は箒を見る。

「篠ノ之、行けるのか？」

「はい！行かせてください！」

千冬と箒は目を合わせる。

「ふん、その目なら平気だろう。」

「作戦内容はお前たちから提出された物で構わん。好きにやれ。」

「了解！」

「やられたデータウエポン達は布仏が中心となって対処している。今は気にするな。」

「かしこまりましたわ。」

「では、これより、作戦を始める。全員の帰還を以て作戦は完了とする！総員準備にかかれ！」

千冬の言葉で全員が動き出す。

雪辱を晴らすために。

第39話 《輝く刃は皆と共に》

海上の数百mの位置で静止する影がひとつ。

IS〈シルバリオ・ゴスペル〉

先程の戦闘で負った傷を修復していた福音はまるで胎児のような形で宙を漂う。

斬られた腕は既に直っている。

不意に顔を上げる福音。

その瞬間、福音は衝撃と爆風に飲み込まれる。

「初弾命中、このまま砲撃を続ける。」

遠く離れた場所からラウラの砲戦パッケージへパンツァー・カノーニアを装備したシユヴァルツェア・レーゲンが砲撃を行う。

左右の肩からレールカノンを発射する。

福音は初弾以降、当たりそうな弾を自らのエネルギー弾で撃ち落としながら真っ直ぐにラウラへ近付いていく。

(敵機接触まで……3000……2000……なかなか速いな。)

今のラウラは機動性を捨て、攻撃と防御に特化した装備だ。

このまま接近を許せば成す術無くやられるかもしれない。

(それは私が1人ならな！)

さらに距離が縮まり、福音が攻撃体制になる。

その瞬間、ラウラは笑った。

「セシリアー！」

ラウラが名前を呼ぶと同時に上空から垂直に蒼い影がやって来て福音を弾く。

セシリアは機体をステルスモードにして待機していたのだ。

弾くと同時に反転し、真下から福音に狙いを付ける。

「当たりなさい！」

体を仰け反らせ、回避する福音。

「対象B確認、排除」

福音の背中になにかが当たる。

「遅いよ。」

ブルー・ティアーズにステルスモードで乗っていたシャルロットが福音にショットガンを2丁突きつけたのだ。

2つの銃口から放たれる散弾、そして左足に付けたドラゴンからも火炎弾が打ち出される。

「対象C、D確認、排除」

ダメージを受けながらもすぐに反撃の準備をする福音。

「残念だけど、それじゃあこの〈ガーデン・カーテン〉は破れないよ。」
実体シールドとエネルギーシールドをそれぞれ2枚、計4枚のシールドを駆使して福音からの反撃を防ぐ。

防ぎながらも得意の高速切替でショットガンからアサルトカノンに持ち換える。

敵の砲撃の僅かな隙を突き、反撃をいれるシャルロット。

その間に距離を取ったラウラが再び砲撃を再開、セシリアも高機動射撃を繰り返す。

「優先順位変更、現空域からの離脱を優先」

周囲に弾をばら蒔き、牽制してから逃走を図る福音。

しかし、次の瞬間。

「予測通りだよ。」

上空から大量のミサイルをばら蒔く簪。

福音の目の前はミサイルで埋め尽くされた。

「ミサイル迎撃」

エネルギー弾を撃ち、ミサイルを迎撃する福音。

「速度が落ちたね。」

簪は左右の春雷と胸部のボアを使い攻撃する。

「対象E、F確認、離脱を優先」

羽を盾の如く使いこちらの攻撃を弾く福音。

それぞれが上手く立ち回り、福音の逃げ道を塞ぐ。

福音に狙われた者は回避と防御に専念し、残りの者が攻撃する。

「よし、無理に撃墜する必要はない、確実に弱らせるぞー！」

「シャルロットさんと簪さんはダメージは大丈夫ですか？」

「まだ大丈夫、デカイのが来たらクロックマネージャーで止めて避け

るから。」

「実体シールドが1枚ダメージが多いかな。それ以外は問題なし。」

「よし、プランに変更なし、このまま続行す……む！」

突如、福音が居る位置と違う方向に砲撃を撃つラウラ。

「やはり来ましたわね！」

「凰牙、ラゴウの接近を確認。」

「さて、ここからが本番だね。」

こちらに向かってくる凰牙とラゴウ。

「さつきはその人形ごときに2人殺られたんだっか？せいぜい俺を楽しませてくれよ！行け！ラゴウ！」

／ガオオオオン！／

凰牙とラゴウが戦いに飛び込もうとするその瞬間。

「待ちくたびれたわね。」

「お前らの相手は我々だ。」

海中で待機していた鈴と箒が真下から飛び込む。

「また殺られに来たのかあ!？」

「今度は……。」

「負けん！」

鈴は凰牙へ、箒はラゴウに飛び込む。

「はああああ！ブル百烈拳!!」

鈴は右腕に装備したブルを連続で叩き込む。

凰牙は両腕のハイパープラズマドライブを稼働させ、出力を上げる事でブルの威力に対抗する。

「なかなかの攻撃力だな！これなら楽しめるか!？」

「まだまだ、これはジャブよ！」

次の瞬間、甲龍の両肩にあるアンロックユニットがカバーを開く。

そこにはそれぞれに2つの砲門がある。

「喰らえ！」

計4門から衝撃砲が放たれる。

普段なら不可視の弾丸を発射する龍砲だが今回は炎を纏った拡散弾を放った。

福音の弾数とも張り合える程の量の炎の弾丸が凰牙を襲う。

「ぐおおおお！だが！この程度の炎で俺を焼けると…」

「これがストレートよ！ブル！」

鈴が叫ぶと同時にブルはオートプレッシャーを発動し、先程放った炎の弾丸を鈴の右腕に集め纏わせる。

「なんだとお!!」

「ブル！爆炎拳！」

炎を纏ったブルを叩きつける鈴、当たる瞬間、圧縮された炎を解放する。

爆発のような衝撃で吹き飛ぶ凰牙。

「ほら、私を倒すんじゃないかったの？」

凰牙を挑発する鈴。

「まぐれ当たりでいい気になるなよ！」

四肢のドライブユニットを稼働させて突撃する凰牙。

「何発だって当ててやるわよ。」

鈴と凰牙は激しい打ち合いを始める。

「人ならざる者と戦うのはなかなか難しいものだな。」

ラゴウを引き付けている筈、2つの刀を使い双頭の牙をいなしていた。

「だが！《私だけで》勝つ必要はない…皆で勝てば良いのだ！」

(そのためにもラゴウは私が食い止める。)

仲間が福音を倒すことを信じ自らの役割を果たすためにラゴウの爪と牙を弾く。

今の紅椿は先程の出撃とは違い消費を押さえるため、展開装甲のほとんどを封印している。

あくまでラゴウに追い付くための機動性に割り振った状態だ。

おかげでラゴウから大きな一撃を貰うことも無いがこちらの決定打も特にないまま刀と爪の打ち合いは続く。

なかなか攻撃が上手くいかないからかラゴウは怒りと思われる咆哮を上げる。

「勝機を見出だすまでは、倒れる訳にはいかん！」
両手の刀を握りしめ箒はラグウに挑む。

草原を歩き続ける俺——天野星夜——は、ふと空を見上げた。

「あれは……鳥かな……？」

赤い鳥が飛んでいる。

その鳥は燃えるような赤い翼を持ち、空高く飛んでいたが、こちらに気づくと前に降りてきた。

気がつくとも周りの動物達が鳥に向かって頭を下げていた。

「お前が……この主……？」

『否、我は主にあらず』

声……頭の中で響くような感じだ。

テレパシー……ってこう言うことを言うのか？

「周りのやつらが頭を下げてるのに……？」

尊敬されてるってことか？

『我は——を力に換えるもの。』

「えっ？」

一番大事そうな所が聞こえなかった。

『汝、——を知ってなお——を産み出せるか？』

「ごめん、さつきからなんか大事な所だけ風か何かに消されてるけど……。」

『我等の主は1人……』

気がつくと鳥の横には女の子が1人立っていた。

長い髪はウェーブがかかっている。

髪の色は虹のように光の反射でさまざまな色に見える。

服装も特徴的だな。

青と白の何処かの民族衣装みたいな感じだな。

まるで地球の服じゃないみたいだ。

「君が……この……。」

『我等が主に問う。』

女の子が語りかけてきた。

…俺が主？

『汝、力を求めるか？』

「ただの力なら要らないかな。」

『何故？』

「力が足りないなら皆と力を合わせるだけだよ。俺一人が強い必要はないから。」

『そうか…皆と力を…その心忘れるなかれ。』

女の子が目をつむる。

周りに虹色の光があふれる。

『汝の紡ぎし絆はこれからも新たなる力を与えるだろう。』

光が収まると女の子が居なくなっていた。

『我は汝の翼…絆を紡ぎし先にて再び合いまみえようぞ。』

赤い鳥が翼を広げた。

「お前は…。」

近くに居る動物達も顔をあげてる。

よく見れば全部データウエポンを生き物にした感じだな。

鳥を見る。

「お前の名前は？」

『我が名はフェニックス。』

「フェニックス…。」

世界が光に包まれる。

気がつくのと隣に一夏が立っていた。

「おっ一夏。」

「あつ星夜。」

俺の足元は草原だけど一夏との間くらいから一夏側はきれいな砂浜の海だった。

「行くか。」

「そうだな。」

何も言わずとも俺たちが今しなければならぬことはわかっている。

「仲間のところ…!!」

再び世界が光を放つ。

旅館のとある一室。

そこではずつと絶えずキーボードを叩く音が響く。

「敵ウイルス進行率60%…紺幹部到達まで…」

『このウイルスはその場で学習して侵食率を上げるようですね。』

「ユニコーンドリルくんとレオサークルくんの見た目が!」

ユニコーンとレオに繋がれたパソコンを操作する本音。

モニターの先にはGEARデータウエポン研究室の面々。

徐々に紫色に染まる2体を見て慌てる真耶。

「苦戦してるようだねえ。」

慌ただしい部屋に場違いなほど朗らかに入ってくる束。

「篠ノ之博士!」

「あれは自己進化理論を応用した攻撃性ウイルスだから防ぐよりもこちらから攻撃して先に潰せばいいんだよ。」

『こちらから攻撃!無茶苦茶な!』

「ラゴウはデータウエポンだよ?ただの人間のプログラミングで勝てるわけないじゃん。」

「それでも諦めたら…本当に終わっちゃうから、できる限りのことをする。」

本音は束が入室しても一度も目をディスプレイから離さずに操作を続ける。

「うんうん、このくらいで諦めてたらなんにもできないよね〜♪」

満足そうな顔をしながらユニコーン達に近づく束。

「篠ノ之博士!?!いったい何を?」

真耶が問いかける。

「いやいや、ちよつとお手伝いをね。いいでしょ?ちーちゃん?」

「これ以上この2体の症状が悪化したらわかってるな?束。」

いつの間にか居た千冬に言われて笑顔になる束。

「安心しなよ、ちーちゃん。箒ちゃんを助けたデータウエポンを見捨てるわけないじゃん。」

「なら、さっさとやれ。」

「さて、やりますか。」

東は自分のデバイスからユニコーンとレオにケーブルを繋ぐと凄まじい速度でキーボードを叩く。

『侵食率、低下!』

「すごい…これなら行ける。」

「東さんは天才だからね!それにデータサンプルまであるなら余裕余裕。」

ディスプレイに表示される各種データが先程まで赤で埋まっていたが瞬く間に消えていく。

「さて、これでウイルスの進行は抑えたよ。」

東はケーブルを抜きながら言う。

「抑えた…?」

千冬が聞く。

「うん、これ以上は無理。完全に消しきれれば目覚めるよ。」

「どう言う意味だ?」

「外科医は傷を治せても心は治せないよ。」

確かに2体を見ると見た目は治った。

だが両目に光は無い。

「あとはデータウエポンのご主人君に任せるよ。じゃあね。」

「東…感謝する。」

「ちーちゃんからのお礼の言葉…最高の報酬だね。」

部屋から出ていく東。

「織斑先生!織斑君と天野君が目を覚めました!」

東と入れ違いで医療班の担当教師が入ってくる。

「なに!?!」

「織斑君と天野君が!?!」

「あまのん!?!おりむー!?!」

部屋に居る全員が驚きと喜びが混じった声を上げる。

「千冬姉!皆は!?!」

「すみません、状況を教えてください。」

一夏と星夜が部屋に入る。

「お前たちはまず精密検査を受けろ。説明はその後だ。」

千冬は極めて冷静に指示を出す。

「千冬姉、今そんな余裕は無いんじゃないのか」

「織斑先生、レオだけじゃなくてユニコーンとバイパーまでやれてる。なら、少しでも戦力を増やすのが先決です。」

「だが！お前達に何かあったらー！」

珍しく感情が前に出る千冬。

「ありがとう、千冬姉。でも、ここで皆を守れない方がもつと嫌だ。」
「俺も一夏と同じです。手を伸ばせば届くかも知れないなら俺は全力で伸ばしたい。」

強い意思を灯した瞳で千冬を見る2人。

「あいつらは今、福音と交戦中だ。お前達は凰牙とラゴウを足止めしている凰と篠ノ之の援護に入れ。」

「織斑先生!？」

「今のこいつらには何を言っても無駄でしょう。」

ため息を吐きながらもどこか嬉しそうな千冬。

「わかりました。鈴の援護に入ります。」

「俺は箒の援護だな。」

星夜は本音の元に行く。

「本音さん、ありがとう。あとちよっただけユニコーンとレオを頼む。」

「うん。任せて。」

笑顔を見せ合う星夜と本音。

「では、織斑、天野の両名はただちに出発し、交戦中の味方を援護せよ。現地の状態はジャミングのせいかわからん。ボーデヴィツヒの指示に従え。」

「了解！」

2人はすぐに旅館の外へ出て、それぞれのISを纏って空へ飛ぶ。

「あれ…今の…」

「まさか……」

それを見届けた者たちは驚きを隠せなかった…。

ラウラ達が福音と交戦し、福音は最初こそ離脱を試みていたが難しいと判断し、こちらの殲滅に切り替えた。

「皆！大丈夫か!？」

ラウラが全員に聞く。

「こちらはダメージはありませんが、エネルギーが6割を切りましたわ。」

「ちよつと山嵐の弾数が怪しくなってきた。ダメージは小破つて所。」
「ガーデンカーテンのダメージはあるけど本体は問題ないよ。弾数も心配なし。」

福音と戦い始めて時間が経つては居るが全員の声に悲壮感等はない。

全員が勝利を信じているからだ。

「この士気の高さ、本国の我が部隊に見せてやりたいな。」

「あら、おほめに預かり光栄ですわ。」

「気持ちだけは…。」

「絶対に負けないからね!」

「敵、殲滅」

福音がエネルギーを溜める、広範囲に射撃を行う準備だ。

「足を止めた！クラッシュレイ!」

シャルロットの左脚に装備されているドラゴンから光が放たれる。

その光は福音の左の翼に当たる。

「左翼、機能不全、自己診断プログラム起動」

突然機能が停止したため、福音の行動が止まる。

「皆！あとはお願い！クロックマネージャー!」

簪のボアから光が撃ち出され福音を包み込む。

「セシリア！右翼に集中させろ!」

「かしこまりましたわ!」

クロックマネージャーにより動きが止まった直後、ラウラとセシリアが最大火力を持って福音の右翼を撃ち抜く。

「メインスラスタ機能停止、補助動力切り替え」

「まだまだあー！」

「これで終わらせる！」

簪が山嵐を撃ち、その爆風が消えるよりも早くシャルロットがパイランバンカーを腹部に叩き込む。

「ダメー…上昇…危険度…全体…能…」

言葉が途切れながら海に落ちる福音、大きな水柱をたてながら海に落ちる。

「よし、機能停止を確認後、回収して…」

ラウラが次の行動を指示しようとしたが急に海から巨大なエネルギー反応を感じる全員。

「こっこれは…」

「セ…セカンドソフト…」

「仕切り直して所かな？」

「全ステータスを2割増しで仮定、軌道予測。」

光を放ちながら海から再び上がって来る福音を睨みながら全員は武器を構える。

――
凰牙と鈴の戦闘は殴り合いが続く。

（ラゴウを付ける暇は与えない！）

鈴の作戦はラゴウを装備させない為に攻め続ける事だ。

データウエポン達は非常に強力な物が多いがその代わりに装備する際の際が大きい。

だから遠距離からの攻撃を捨て、張り付き続ける事で凰牙に時間を与えないようにしていた。

「オラオラオラオラア！」

「破あああああ！」

凰牙のドライブユニットが高速で回転する。

それに合わせてエネルギーが溜まる。

「くっ閃光雷刃撃っ!？」

「喰らえっ!!」

至近距離で発動された閃光雷刃撃を避けることは出来ず左のアン

ロックユニットに当たる。

「へへっ！よく避けたなあ!!」

「ちいっ！余計なの貰った!」

すぐに警告を発するウインドウが開かれるが邪魔なので消す。

「なかなか楽しめるな！お前!」

「こっちは楽しむ気なんか無いっての!」

「あっちも盛り上がってるみたいだぜ!」

凰牙の言葉と同時にレーダーに高エネルギー反応がでる。

「あれが福音?」

「さて、ここからクライマックスだぜ!!ラゴウ!」

少し目を福音に向けてしまった鈴、その隙を逃さず箒と戦っていたラゴウを呼び寄せ装備する。

「しまった!」

「すまない!鈴!ラゴウを仕留めきれなかった。」

鈴と合流する箒。

目の前にはラゴウを纏い悪魔のような姿の凰牙が居る。

「オラア!」

驚異的な加速を持って飛び込む凰牙、箒が拳を受け止める。

「速度なら…。負けん!」

「ほお!これについてくるとはな!」

腕に装備されたラゴウの頭部を模したナツクルガードの牙を刀で弾く。

「まあ、今日は楽しんだしそろそろ終わらせるがな!オラアツ!」

力一杯蹴りを入れる凰牙。

箒は防御するが弾き飛ばされた。

「痛っ!」

「箒!?こんのおおおお!」

ブルの角が赤く発熱し、凰牙を殴る。

だがラゴウを装備し、速度が上がった凰牙には掠りもしなかった。

「貰ったあ!」

凰牙の強烈な回し蹴りが鈴の腹に入る。

「ぐはあっ！」

思い切り飛ばされる鈴。

なんとか姿勢を建て直す。

「やっぱりラグウは凶悪ね。」

「ああ、あの速度とパワー。恐ろしいな。」

箒と鈴で凰牙を睨む。

「箒、そっちの状態は？」

「こちらは大きなダメージは無い。ただ高速戦闘を行っていたからかエネルギーが少ないな。」

「こっちは左のユニットがごっそりやられたわ。」

「おいおい、こっちはまだジャブだぜ？」

先程の鈴の物真似をして挑発する凰牙。

「じゃあストレートを放ってみたら？」

強がりとして鈴は笑いながら答える。

「行くぜえ！」

凰牙は力を込めて飛び込む。

「やらせん！」

箒が前に出て刀を振りかぶる。

「間合いが甘え！」

紙一重で2本の刀をかわして箒を掴む凰牙。

そのまま鈴へ投げつける。

「ぐううっ！」

「ったあく！」

勢いよく飛ばされ、体勢を崩す2人。

「まとめて仲良く逝けよ！」

上昇し蹴りを入れる凰牙。

2人はなんとか回避する。

「くっこうも一方的とは!？」

「福音のほうもヤバそうなのに!？」

「おいおい、他のやつの心配かよ？」

翼を拡げ加速する凰牙、2人は咄嗟に防御の姿勢をとるが大きな衝

撃で吹き飛ばされる。

ついに福音と戦っている所まで吹き飛ばされる。

「箒！鈴！」

「セカンドシフト機とデータウエポン装備の凰牙…。」

「事態はあまりよろしくありませんわね。」

「でも、諦めないよ。」

「くつすまない、抑えきれなかった。」

「こうなりや纏めて倒す！」

「友軍機確認」

「さあて！お前らはどこまでもつ？」

セカンドシフトを果たした福音は新たにエネルギーの翼が生えていてそこから大量のエネルギー弾を放てるようになっていた。

圧倒的な弾幕に全員は敵に近づけず、攻勢に出れなかった。

「ぐっ！流石にそろそろシールドが！」

「山嵐：残弾ゼロ！」

「避けきれませんわ！」

「ちい！これ以上は!？」

「オートプレッシャーの射程外か！」

「紅椿もエネルギーが…。」

いくら攻撃をしようとも大量のエネルギー弾に阻まれ消える。

そして回避の隙を狙い、凰牙の格闘が入る。

「はっ！さっきまでの威勢はどうした!？俺を倒すんじゃないのか!？」

凰牙の攻撃を双天牙月で防ぐ鈴だったが弾かれて手から落としてしまう。

「なっ！」

「貫ったあ!!」

強烈な踵落としを喰らう。

近くにあった小島に叩きつけられた鈴。

「鈴!？」

「攻撃」

飛ばされた鈴に気を取られた瞬間、ラウラに瞬間加速を使い接近する福音。

「しまっ…」

ラウラが言葉を言い終わるよりも早く翼で包み込み全方位からのエネルギー弾を浴びせる。

「ラウラ!!」

「崩れたなあ!!隙だらけだ!」

シャルロットに思い切りパンチを入れる凰牙。

実体シールドが砕け、シャルロットも吹き飛ばされる。

「クロックマネージャー!」

簪がクロックマネージャーを使い凰牙の動きを止める。

「友軍援護」

「きやああ!」

すぐに福音からの射撃を入れられ、解除される。

「くっ!まだですわ!」

「さつきからチョコロチョコと!鬱陶しい!」

ラゴウの加速を使いセシリアに追い付く凰牙、インターセプターで斬ろうとするが。

「無駄な抵抗すんじゃねえ!」

インターセプターを砕かれ、そのまま首を捕まれるセシリア。

「く…う…」

「ははは!もつと苦しめ!絶望しろ!」

ぎりぎりとしてシリアの首を締め上げる凰牙。

「やらせんで!」

「対象H排除」

セシリアを助けようとする筈だったが福音が立ちふさがる。

「邪魔だあ!」

刀を振るい福音を斬る筈。

福音はその刃を掴む事で止める。

「ぐう…なんて力だ…!」

次の瞬間、機動性を上げるために開かれていた展開装甲が閉じてい

く。

(いかん！エネルギーが…！)

「対象H、エネルギー低下」

福音の翼が箒の周りを包む。

(先程のラウラにやった攻撃か！)

周りの光が強くなる発射の為のエネルギーが溜まっていくのがわかる。

「はああああー！」

刀を放し、福音の腹に蹴りを入れる箒。

「攻撃開始」

蹴りが入ると同時に辺りを光が包んだ。

爆発と共に落ちていく箒。

「あははは！これでお前らも終わりだな！」

セシリアを締め上げる凰牙が笑う。

「ま…まだです…わ…。」

「へえ、まだ喋れるのか…ん？」

凰牙はセシリアを掴んだまま下に顔を向ける。

「いくら…やられたって…立ち上がるわよ…。」

「そうだ…心は…。」

「心だけは…。」

「絶対に負けない…！」

鈴、ラウラ、シャルロット、簪がよろよろと立ち上がり、浮かび上がる。

「へえ、しぶといな。」

「我々は…信じているからな…。」

なんとか意識をつなぎ止め、落下を防いだ箒。

「この状況で何を信じてるってっんだよー！」

セシリアを箒たちに向かって叩きつけるように乱暴に放り投げる。

すぐにスラスタ等を使い体勢を直すセシリア。

「そんなに仲良いなら纏めて消してやるよー！」

凰牙は四肢のドライブユニットを高速で回転させ始める。

「シルバーベル最大出力」

福音もエネルギーを溜め始める。

こちらは全員なんとか浮いている状態で回避行動をとれるものはいなかった。

「うおおおおおおおおお!!」

「やらせるかああああああ!!」

突然、青と白の影が凰牙と福音に飛び込む。

「てめえ! まだ生きてやがったか!」

「まだ心は折れちやいないって事だ!」

「敵増援」

「さつきはやられたが今度は負けねえ!」

電童と白式が凰牙と福音に襲いかかる。

「いっ一夏!」

「せ、星夜さん!」

「2人とも目が覚めたのか!」

「でも…あの姿は…?」

「もしかして…。」

「セカンドシフト…?」

救援に来た2人の機体は普段の見慣れた姿ではなかった。

白式は全体的に鋭角的になり、背中のブースターユニットは一回り大きくなっている。

また、左腕には見慣れない装備がついていた。

電童は見た目こそ変わらないが背中に巨大な白い三対の翼がついていた。

「皆! 遅れてすまない!」

「あとは俺と星夜に任せてくれ!」

2人は敵を見据え構える。

俺と一夏は海岸でそれぞれ機体を展開しとんだ瞬間、機体の変化に気づいた。

一夏の白式はセカンドシフトを果たし、より高機動により攻撃的に進化したようだ。

こちらは背中にさっきの夢みたいなところであつたフェニックスが装備されている。

機体のステータスを確認するとエネルギーの表示が∞を示している。

これがフェニックスの力…。

「いくぞ！凰牙！」

「来いよ！今度こそ纏めて消してやるよ！」

「福音！お前は俺が倒す！」

「優先対象に設定」

一夏と共に敵に飛び込む。

タクティカルアームズを呼び出し斬りかかる。

「なんだあ!?!その翼は!?!」

「答える義理はないな！」

何回か斬り付ける。

凰牙は腕に装備したラゴウの牙で弾く。

「だが！ラゴウの速度についてこれるか!?!」

凰牙は加速する。

フェニックスがついたが確かに早くは飛べるがバイパーのような能力はない。

「くっ！」

「所詮はこけおどしか！」

病み上がりのせいか体も少しダルい。

思ったように動けない。

徐々にダメージが入る。

「やっぱりあっちから消すか！来い！福音！」

そう言うとう凰牙は皆が居る方に向かって飛ぶ。

凰牙と呼ばれた福音も一夏と距離をとり、合流する。

「待て！」

すぐに追いかける。

「これで終わりだぜ！ラゴウ！」

「全門開放チャージ開始」

凰牙と福音が皆の居る方に向かって構える。

「終わり？そんなことはない！終わるのはお前だ！」

箒さんが声を上げる。

ボロボロの機体で前に出て刀を構える。

「なんだとお!？」

『信頼』出来る仲間が居る限り何度でも、立ち上がれる！」

「仲間が居るから！『勇氣』は無限にわいてくる！」

一夏が箒さんの言葉に続ける。

箒さんの隣で雪片式型を構える。

「1人では出来なくても！」

俺も声を上げる。

一緒にタクティカルアームズを構える。

「2力を合わせれば！出来ないことはない！」

その瞬間、背中のフェニックスが虹色の光を放つ。

「虹…?」

「なんて…暖かい光…。」

「おい！星夜の横に!？」

「ユニコーンさん!？」

「レオ!？」

俺の横にさつきまで毒にやられて倒れていたはずのユニコーンと

レオが居た。

「なぜだ！あいつらは確かにウイルスに犯されたはず！あの蛇ならと

もかく！」

凰牙が焦ったような素振りをする。

『新たなる力…』

頭の中にフェニックスの声が響く。

「なんだ!?!この声は!?!」

「新たなる力…だど?」

一夏と箒さんにも聞こえているようだ。

『呼べ…その名を…』

「来い！輝刃！」

頭の中に浮かんだ名を呼ぶ。

するとユニコーンとレオから蒼と白の光が放たれ、タクティカルアームズに注がれた。

「あれは…。」

「星夜の武器が…。」

「データウエポンに…。」

「進化しちゃった…。」

俺の目の前に見たこともないデータウエポンが居た。

白を基調とし、獣の体、頭には真つ赤な長い角。

まるでユニコーンとレオを足した感じだ。

『新たな力、汝等なら使いこなせるだろう。また会おう…。』

気がつくくとフェニックスが虹色の粒子となって消えていった。

輝刃を産み出すので力を使い果たしたのか。

心の中でフェニックスに礼を言いながらやるべきことをやらねば。

「輝刃ドライブ！インストール！」

俺が叫ぶと輝刃はその場で変型し、巨大な剣になった。

「一夏！行くぞ！」

「おう！」

一夏が零落白夜を発動する。

俺も同じようにファイナルアタックを発動準備に入る。

「輝刃ブレイカー！」

「白式・雪羅！」

「ファイナル！アタック！」

輝刃ブレイカーの刃から莫大なエネルギーの刃が形成される。

「うおおおお！」

「理解不能、危険度不明、迎撃」

凰牙と福音が大量のエネルギーを放つ。

しかし、それは2つの光の刃で切り裂かれた。

「このお!!」

凰牙がぎりぎりのところで避けたようで装甲の一部がかけている。

「へっ！貴様はもうエネルギーはねえな！」

「くっ！避けたのか！」

「福音も撃破仕切れていない！」

「ダメージ上昇、排除」

向こうもダメージがある。

まだ機体としてのコンディションはこっちがましだ。

俺と一夏は再び凰牙と福音との格闘戦に入る。

「ラゴウ！やつらを喰ってこい！」

凰牙がラゴウを外し、召喚する。

「輝刃！ユニコーン！レオ！」

こちららも輝刃をブレイカーモードから通常形態にする。

まだダメージの無いユニコーンとレオも皆の直援に回す。

輝刃とラゴウは高速の格闘戦を始める。

「ラゴウに追い付くとはやるな！あの新顔！」

「ラゴウだけを見てる余裕は無いぞ！」

俺はひたすら凰牙と殴り合いを続ける。

機体のダメージは向こうが多いがこちらはエネルギーが無い。

「星夜！」

皆が後方から撃てる武装を使い弾幕を張る。

その隙に箒さんが近づいてくる。

「受けとれ！」

そういわれ手を握るとエネルギーが全回復した。

「これは…？」

「〈絢爛舞踏〉…紅椿のワンオフアビリティだ。」

「ありがとう。」

「礼を言うのは私だ、しかし、それは後だな。」

「そうだな。やることをやらないと。」

2人で凰牙を見る。

「くっ!?エネルギーの回復だと?ラゴウ!これで決めるぞ！」

凰牙は再度ラゴウを装備してファイナルアタックの準備に入る。

「輝刃ストライカー！」

「雨突！空裂！」

今度は輝刃が弓矢のような形に変型する。
矢のところには角がある。

輝刃ストライカーにエネルギーを送る。

絢爛舞踏のエネルギーを貰ったためか機体と輝刃が金色に輝く。

箒さんは刀を構え、そちらにエネルギーを送っている。

「ファイナルアタック！」

まずは箒さんの斬撃と突きによるエネルギー刃が飛ぶ。

凰牙が放ったラゴウのファイナルアタックと当たり、その威力を殺ぐ。

そのまま大量のエネルギーを纏った輝刃と共に突撃する。

「これでええええ！」

「なっ!?ぐあわああ！」

突撃の勢いで凰牙は弾き飛ばされ、海へ落ちる。

「一夏は！」

「先にエネルギーは渡したがすぐに援護を！」

落ちた凰牙は無視してまずは福音に向かう。

「星夜！箒！福音はでかいのを撃つつもりだ！」

「こちらに気付いた一夏。

福音を見ると残りのエネルギーを溜めている。

「あの威力だと零落白夜でも消しきれない。」

「確かに…。」

「星夜、前に試合でやった全データウエポンのファイナルアタックならどうだ!?エネルギーなら絢爛舞踏で！」

箒さんが言う。

「そうか！それなら完全にあれを相殺出来る。そのあとの隙について一夏が斬れ！」

「わかった！」

俺の後ろに箒さんが回り、背中に手を乗せる。

紅椿からエネルギーが送られて来る。

先程のフェニックスの如くエネルギーが増え続ける。

「データウエポン！ドライブインストール！」

フェニックスの置き土産か全データウエポンの傷は治っていた。
バイパーも平気だ。

右腕にユニコーン

右脚にレオ

左腕にバイパー

左脚にドラゴン

胴体にボア

そして前回付けられなかったブルを右肩に装備する。

「スパイラルアタック!!」

箒さんと同時に叫びスパイラルアタックを放つ。

7色の光が福音に向かう。

「高エネルギー反応、迎撃」

福音も迎撃のため全てのエネルギーを放つ。

お互いに大量のエネルギーがぶつかり合い、大爆発を起こす。

「終わりだあ！」

そのまま一夏が左腕の装備からエネルギークローを展開し右手の
雪片と一緒に振る。

福音は機能を停止し、解除される。

パイロットの女性が落ちそうになるが先回りした輝刃が背中に乗
せる。

「これで状況は終了か…?」

「凰牙は？」

「海に落ちてそのまま撤退したみたい。」

「結局顔は見れなかったわね。」

「本部、聞こえますか？こちらデユノアです。」

先程海に落とした凰牙に警戒しながら通信を試す。

『……………部……………えるか…』

最初は雑音が入っていたが徐々に収まっていき。

『こちらは本部！お前たち！聞こえるか！』

「はい、こちらは全員無事です。」

「福音の回収に成功しました。パイロットも、無事なようです。」

『そうか、ユニコーンドリルとレオサークルが急に消えたときは驚いたぞ。』

「織斑先生の驚いた顔：珍しいかも。」

「確かに：珍しいですわね。」

「私も見たことはないな。」

『つまりんことを言っていないでさっさと戻ってこい。医療班も待機している。』

「わかりました。」

全員で旅館の方へと飛んでいく…。

長かった戦いの終わりを感じながら。

第40話 《帰り道》

暴走した福音と戦いは輝刃が誕生したことや一夏の白式がセカンドシフトしたこともあり、無事に勝利した。

俺―天野星夜―は旅館に向かいながらも機体のステータスに目を通していた。

「うくん。居ないな」

電童の中をどれだけ探してもフェニックスが見当たらないのだ。

「どうしたの？星夜くん。」

隣で飛んでいた簪さんがこちらを覗き込んでくる。

「いや、フェニックスが居なくなってるね。どこに行ったんだろ。」

「フェニックス…先程の翼の事ですか？」

セシリアさんも話に入ってきた。

「ああ、もしかして輝刃を産み出すのに力を使い果たしたのかな…。」

「あれもGEARで作ったのかな？」

シャルが当然の疑問を口にする。

「いや、データウエポンの新型を作る計画なんて聞いてないし、今までの6体の解析や研究でそこまで手は回らないと思うけど。」

「井上さん大変そうですね。」

「まあ、輝刃と一緒に報告しとくか。」

福音のパイロットを運ぶ輝刃を見る。

「なあ、星夜。あれってやっぱり誰かと共鳴したってことだよな。」

一夏が聞いてくる。

「そう思う。まさか試作武器がデータウエポンになるなんて思いもしなかったけど。」

「データウエポンは不思議なものだな。」

簪さんがうなづく。

「まあ、そのあたりも含めて井上さんが解析して説明会やと思うよ。」

「その時は呼んでね。」

「私も興味があるな。」

「全員声かけるから安心してね。シャル、ラウラ。」

「一夏も白式がセカンドシフトしてるなんてね。」

一夏を見ながら鈴が言う。

「起きて展開したらこうなってるんだよな。」

自分の機体を見ながら話す一夏。

「まさかこれほどの短期間でセカンドシフトまで行くとはな。」

ラウラが言うことは最もだ。

一夏は白式を受け取ってからまだ半年間もたっていない。

それほど一夏と白式の相性が良いってことなのか？

「そんなにすごいことなのか？」

「一夏、現役でセカンドシフトした機体を数えてもまだ世の中には10機にも満たないんだよ。」

「まっマジか!？」

シャルの説明を聞き、ビビる一夏。

「一夏さんは今後はもっと慎重になられた方が良いかも知れませんがね。」

セシリアさんが静かに言う。

「なんでだ？」

「織斑くんや星夜くんはただでさえ貴重な男性操縦者だよ。そこにセカンドシフト機って付加価値が増えたから…。」

「もしかしなくても非合法な方法でも欲しがらば山のように居るだろうな。」

「ひ、非合法って…。」

簪さんと俺の言葉を聞き顔が軽く引きつる一夏。

「1人での行動は極力なくし、移動の際も人通りの多い道を選べば多少はましだろう。」

「ど、努力するよ…。」

ラウラが一夏にアドバイスをする。

「よし、旅館が見えてきたぞ。」

そんな会話していると旅館が見えてきた。

海岸につき、待機していた医療班の先生に福音のパイロットを預け

る。

全員がISを解除する。

「お前たち、よく戻った。」

皆の前に織斑先生が立つ。

「かんちゃん〜！あまのん〜！みんなおつかれ〜。」

「まずは皆さんこちらを。」

山田先生と本音さんが飲み物を配る。

受け取った飲み物を軽く口に含む。

「このあとは全員診察を行うから医務室に向かうように。」

「織斑君と天野君は待機室で待っていてくださいね。」

山田先生と本音さんに連れられ女性陣が医務室へ向かう。

「全員無事で良かった…。」

織斑先生が呟いた。

「千冬姉…。」

「なんだ？一夏。」

一夏と織斑先生の視線があう。

「俺、皆を守れたかな…？千冬姉見たいに…。」

「ああ、しっかりと守ってるさ。だから胸を張れ。天野、お前もな。」

「ありがとう。」

「はい、ありがとうございます。」

「さて、お前たちも疲れたろう？部屋で休め。」

「わかりました。」

「わかった。」

俺と一夏は返事をして待機室に向かう。

「ふう…疲れた…。」

「ああ、よく考えたら俺達、昼飯食べてないな。」

午前に出撃してからそのままやられて、目が覚めたら夕方だったもんな。

「そうだな。もう少しで夕飯だろうし変に腹に入れてもな…。」

「皆の診察が終わるまで待つか…。」

「そうだな…。」

とりあえずISスーツを脱ぎ、備え付けの浴衣に着替える。
壁際に置いてある座布団に座る。
疲れていたせいか俺は座るとそのまま寝てしまった。

「…やさん。……………くださいな。」

「……………て。せい……………おきて…。」

誰かが俺を起こそうと声をかけている。

「んん……………」

だんだんと頭がはつきりしてくる。

「せいや、おきろ。そんなことではてきにおそわれてしまうぞ。」

「せいや〜つぎはあんたたちのばんよ〜。」

「ふうあ…。あれ？俺、寝てた？」

起きると皆が俺を覗き込んでいた。

「あ、起きたね。」

「よほど疲れているのか？」

「気分悪いならそのまま寝てるか？俺が先生に伝えておくぜ？」

「大丈夫だ、心配かけてごめんね。」

立ち上がる…が寝起きでいきなり立ったせいかバランスを崩して
しまった。

「のわっ!?!」

「きゃあ!?!」

「ひゃわ!?!」

目の前で俺を揺すつて起こしてたセシリアさんと簪さんに向かって
倒れてしまう。

「せつ星夜さん!?!お気持ちは嬉しいですけど…。」

「星夜くん…。その…恥ずかしい…。」

顔を赤くする2人。

「うわあああー!?!ごめん!」

とっさに起き上がるが足をもつらせる。

今度は横に倒れそうになる。

「ちよつと、大丈夫!?!」

鈴が俺を支えようとする。

「わぷっ!？」

「ひゃんっ!？」

そのまま鈴に抱きつく体制になってしまった。

「ちよつちよつと星夜。」

「わああ!？」

顔を真っ赤にした鈴。

「せ・い・や・さ・ん?り・ん・さ・ん?」

「せ・い・や・く・ん?り・ん・さ・ん?」

先程まで顔を赤くし、恥ずかしがっていたセシリアさんと簪さんの2人は黒いオーラを纏いながら立ち上がる。

「せ、セシリア、簪…落ち着いて…ね?」

「ふっ2人とも落ち着いて…。」

……これは死ぬな…俺…。

「織斑君。天野君。まだですか?」

医務室で待っていたが俺たちがなかなか来ないので様子を見に山田先生が来た。

「は、はい!…すぐに行きます!な、一夏!？」

「おう!行きます!行きます!」

すぐに部屋の出口に向かう。

「では、星夜さんは後で聞きますので…。」

「先に鈴さんに聞こうか…。」

鈴、ごめん。

心の中で謝るとそそくさと部屋を出て隣の医務室に向かう。

「薄情者く!!」

待機室には鈴の叫びが木霊する。

検査を終え、部屋に戻る。

「ただいま戻りましたく。」

恐る恐る開ける。

「あら?星夜さん。もう終わりましたの?」

「星夜くん。大丈夫だった?」

2人の黒いオーラは収まっていた。

「ああ、特に問題はなかったよ。それと、さつきはごめん！」
先程の件をしっかりと謝っておく。

「@クルーズ。」

不機嫌そうな鈴がボソツと言った。

「はい、おごります。好きなものを選んでください。」

「あっ！私もですわー！」

「わ、私も！」

セシリアさんと簪さんもこちらによってくる。

「大丈夫だって皆におごるよ。」

「じゃあ今度の休みは空けときなさいね。」

これくらいで許してもらえるなら安いものだろう。

後処理も終わり、夕飯の時間まで部屋に戻り待機する。

「あっ今のうちに……。」

なにかを思いだし、一夏が鞆を漁り出す。

「どうした？一夏。」

「星夜、ちよつと野暮用だ。すぐに戻るさ。」

一夏はそういうと綺麗な小袋を持って部屋を出ていった。

そう言えば今日は箒さんの誕生日でプレゼントを用意したって
言ってたな。

「俺も北斗にメールすっか……。」

携帯を取りだし友人へのバースデーメールを送った。

律儀にお礼のメールをすぐ返すあたり北斗らしい。

ちなみに帰ってきた一夏の顔は少しだけ赤かった。

「ねーねー。教えてよー。」

「ちよつとだけ！ちよつとだけでいいから！」

「だくめ。機密だから。」

夕飯の時間になり食堂で食事をする皆。

今日の大半を部屋の中で窮屈に過ごしたクラスメイト達は今日の

ことを聞き出そうと必死だ。

とは言え専用気持ちとして訓練をしつかり受けている俺たちは機密としか答えない。

今はそのなかで最も話しかけやすいシヤルに集まっている。

「これ聞くと大変なことになるけどいいの?」

「そうだよ。色々と制約がつくからね?」

「ちえく。」

なんとか説得し、散ってもらった。

「あれ? 箒さん。リボンさつきはしてなかったよね? それに朝と柄も違うし。」

確か作戦中は付けてなかったはず。

「ああ、これは…その…。」

顔を赤くして言葉が詰まる箒さん。

「今日は箒の誕生日だからな。俺がプレゼントしたんだ。」

一夏がどや顔で言う。

「へえ、つまり一夏が選んだやつか。似合ってるね。」

「そ、そうか?」

「そうだろ? 店で見た時に箒にはこれだ! って思って買ったんだ。箒も気に入ってくれた見たいで良かったぜ。」

嬉しそうな一夏と箒さん。

「誕生日…星夜さんはいつのですの?」

隣のセシリアさんが聞いてきた。

「俺の誕生日? 12月25日だよ。」

「覚えやすい誕生日だな。」

箒さんが頷く。

「イベント事と一緒にだからね。」

「じゃあそのときはクリスマス兼誕生日パーティーだな。」

「そうだね。その場合ケーキは2つかな?」

一夏とシヤルが話してる。

「パーティーか…。」

「ラウラ? どうかしたの?」

隣でラウラが考えるような仕草をしている。

「いや、今までそう言うのをやったことが無いからな。」

「これからやる機会は沢山あるから安心しなよ。」

「そうか。それは楽しみだ。」

ラウラはにっこりと笑った。

そんな感じで夕食の時間は過ぎていった。

――

夜。

部屋に一夏も織斑先生も居ないので外をふらついていた。

「ふう、風が気持ちいいな…。」

何となく歩いていると。

周りの景色が一瞬ぼやけた。

この感じは昨日もあつたな。

『この度は輝刃の覚醒、おめでとうございませす。星夜さま。』

昨日の警告をしてくれた声だ。

「警告してくれたのは助かるけど誰なんだ？」

返事を期待はしないがとりあえずそのまま語りかけてみる。

『申し訳ございません。今は答えることが出来ません。』

「せめて顔くらい見たいものだ…。」

そのあとは全くなにも聞こえなかつた。

本当に誰なんだ？しかも輝刃のことを既に知ってたぞ。

ずっと見ていたのか…。

「まあ、敵じゃないみたいだし…。」

どうにも出来そうにないからほっておこう。

そろそろいい時間だし部屋に帰って寝るか。

――

「うーん…。紅椿の稼働率は42%か…まあ初日だしこんなものかな？」

東が空中に出したディスプレイを見つつ呟く。

そこには紅椿のステータスが表示されていた。

「白式は驚くなく。まさか生体再生まで可能だなんて。まるで――」

「まるでへ白騎士のようだな。お前が心血を注いで作り上げた1号機のようにな。」

東の言葉が続けるように千冬が東の後ろに立つ。

「やあ、ちーちゃん。」

「おう。」

目を会わせない2人。

互いに背を向けている。

「問題です。白騎士はどこに行つたのでしょーか？」

「へ白式をへしろしき」と呼べばそれが答えだ。」

「さすがはちーちゃん。」

楽しそうにはしゃぐ東。

「次は私の番だな。データウエポンとはなんだ？」

「それはGEARに聞いてほしいなく。あれはISじゃないしく。私
が作ったわけでもないしく。」

「お前は何を知っている。」

「ちーちゃん、今の世界は楽しい？」

「そこそこにな。」

「そっか…。」

次の瞬間、風の音と共に東の姿は消えた。

「ふう…。やはり何も掴めないか。」

千冬はそのまま旅館の方へと歩き始めた。

翌日。

予定で言えば片付けて帰るだけなのだが昨日の事件の後処理の關係で俺達、専用機持ちと本音さんは帰りのバスに乗らずに書類を書かされていた。

内容は昨日の事件に関して知り得た情報に関する確約書とかが主になる。

「どうせ書くんだ報告書も書いて出せ。」

と織斑先生のお言葉で関係書類が終わるまでは帰れなさそうだ。

「なあ、星夜ここってどう書けばいいんだ？」

「戦闘時の事は白式の記録見てかけ。」

「どこまで書けばいいかわからないんだよな。」

「私もこうゆうのは初めてで、勝手がわからん。」

「この手の報告書を書いたことの無い一夏と箒さんが苦戦している。

俺とラウラが一番すらすら書いてるか。」

「こんなこと上手くなりたくなかった…。」

「まあ、普通はそうよね。」

「お前達、口よりも手を動かせ。」

「はい。」

ちなみに俺はGEARに出す報告書もここで書いた。

後半は唸ってる一夏と箒さんに皆でアドバイスをすることになった。

「失礼するわ。」

一通り書類が書き終わり、皆で休憩していたらドアを開けながら一人の女性が入ってきた。

「えくと…どちら様で？」

一番ドアに近かった一夏が立ちあがり対応する。

あの顔は確か…。

「私はナターシャ・ファイルス。〈銀の福音〉の操縦者よ。君は？」

「俺は織斑一夏です。えいと、白式の操縦者です。」

やはり、昨日助けた福音の操縦者か。

「ふーん。なかなかいい顔してるじゃない。」

どこか品定めするような視線で見るファイルスさん。

「えつと…。」

なんと答えるか迷ってる一夏を抱きしめ頬にキスをするファイルスさん。

「昨日はありがとうね♪ホワイトナイト君♪」

何が起きたか解らず呆然とする一夏。

「それじゃあ君がもう一人の？」

こちらを見るファイルスさん。

「はい、天野星夜。電童の操縦者です。」

「あれは最初ロボットかと思ったわ。」

電童の感想を述べながる。

結構この人日本語うまいな。

「それは結構言われますね。」

「あなたも昨日はありがとう。ブルーファイター君。」

距離があつたためかこちらには投げキッスですんだ。

「他の子達も迷惑かけたわね。バーイ。」

手を降りながら部屋を出ていくファイルスさん。

「一夏あ…貴様あ…。」

「一夏…モテモテだねえ…。」

どす黒いオーラを纏いながら一夏のもとへ行く箒さんとシャル。

「ふつ2人とも…どうしたんだ？」

一夏が2人のオーラに気圧されていた。

「あれ？鈴は殴らないのか？」

「いいのよ、どうせあれは学習しないし。」

まあ確かになぜ殺気を向けられたか理解してないだろうな。

「でも、私たちどうやって帰るんだろ？」

「行きに使ったバスは全て行ってしまったしな。」

「織斑先生も何もおっしゃりませんでしたけど。」

簪さんやラウラの言う通りだ帰る手段は気になるな。

「でも、もう少ししたら出発だから…。」

「まさか装備と一緒に帰るのか？」

あの大量の機材を運び込んだのは学園だ。

その機材やスタッフと一緒にでも帰るのだろうか。

「お前達、これから昼食だ。そのあとにここを出発する。荷物を纏め

てから食堂に來い。忘れ物などするなよ。」

織斑先生が部屋に來て今後の予定を告げる。

「わかりました。」

それぞれ返事をする。

大体荷物は纏めてあつたのですぐに昼食を皆でとつた。

「では、お世話になりました。」

「はい、またご縁があればお願いいたしますね。」

旅館の方々に挨拶をし、出発する。

やはり帰りの手段は機材撤収用トラック等か。

「さて、3人毎に別れて乗り込め。すぐに出るぞ。」

織斑先生の指示に従い移動する。

大きいトラックだから後ろにも3人用の座席があるタイプだ。

「よし、一夏はこっちだ。」

「ちよつと箒、引つ張るなよ。」

「ほら、早く行こう。」

両サイドから挟んで箒さんとシャルが一夏を連行する。

「じゃあ星夜さんは私と…。」

「あんたは行き一緒だったんでしょ？箒に譲ってやりなさいよ。」

俺と乗ろうとしたセシリアさんを横からきた鈴が妨害するよう

に俺と簪さんの手をとりトラックへ向かう。

「ちよつとなぜ鈴さんまで！」

「オルコット、さつきと乗れ、ボーデヴィツヒ、布仏と一緒にだ。」

鈴に抗議をしようとしたセシリアさんを織斑先生が止める。

織斑先生に言われたからにはセシリアさんも従わざるを得ない。

「かんちやーん、りんりん頑張つてね。」

本音さんは手を振りながら向こうのトラックへ乗る。

こちらにもトラックへ乗り込む。

簪さん、俺、鈴の順番だ。

「何故に？」

「星夜、どうかしたの？」

「何で鈴までこっち？」

「あそこでグダグダしてたら確実に千冬さんの出席簿よ。」

「それはわかるけど鈴さんは織斑くん狙いじゃないの？」

鈴をジト目で見る簪さん。

「ほら、どうせ道中の大半を寝てる一夏と一緒に乗っても意味ないわよ。それなら変なハプニングを起こさなそうなこっちの方がいいで

「しよ？」

「あー…一夏なら寝ててもハプニング起こしそうだな。」

「なんとなくそれはわかる気がする…。」

「それにこの面子なら一番静かそうだし。」

軽く欠伸をする鈴。

「正直、寝てたいな。」

「そうだね。朝から重労働だったし。」

3人の意見が一致し、目を閉じて寝た。

しばらくして目を覚ますと学園の近くだった。

両手がそれぞれの手に握られていたがこの暖かさは嫌いじゃないな。

ただ、2人して俺の肩を枕にするのはさすがに恥ずかしいし、動けない…。

「2人ともそろそろ着くぞう。」

2人に声をかけて起こす。

「んう…うん。」

「ふうう……んん。」

2人が目を擦りながら起きる。

「うくん。よく寝た。」

「ほんとにね。まさか到着するまで寝てるとは。」

「でも、やっと帰ってきたって感じがするね。」

トラックから降りてそれぞれの荷物を持つ。

「お前たちはこれで解散だ。好きにしていぞ。明日の授業には遅れるなよ。」

織斑先生が他の教師達と一緒にトラックから大きな機材などを下ろしながらこちらを見て言った。

「わかりました。お先に失礼します。」

織斑先生達に挨拶をしてそれぞれ寮の部屋に向かった。

「ただいま。」

自分の部屋に戻る。

特に誰か居るわけでも無いがつい言ってしまう。

「さて、まずは軽く飲み物飲んでから片付けるか。」

冷蔵庫から飲み物を出してコップに注ぎ飲む。

そんなことしていると待機状態の電童からデータウエポン達が飛び出した。

「お前たちも、ありがとう。お疲れ様。」

それぞれのデータウエポンが喜ぶような仕草をする。

そのなかで中心に居る新入りを見る。

「これからよろしくな。輝刃。」

輝刃は軽く頭を下げ挨拶をしてきた。

これからどうなるかわからないが仲間達とこいつらが居ればこれからも平気だろう。

こうして短くも長い臨海学校は終わったのだった。

第41話 《夏休みに向けて》

色々あった臨海学校から帰ってきた翌日の放課後。

俺―天野星夜―は生徒会室の前に立っていた。

「楯無先輩…俺に何の用なんだろう？」

朝、楯無先輩から『放課後に生徒会室まで来るように♪』ってメールが来ていた。

とりあえずドアをノックする。

「楯無先輩、天野星夜です。」

するとすぐにドアが開かれる。

「よくお越しくございました、天野くん。お入りください。」

「あつ虚先輩。こんにちは。」

虚先輩に招かれて部屋に入る。

「やあ♪星夜くん♪」

「こんにちは、楯無先輩。」

生徒会長用の机に座った楯無先輩。

「今日はどう言ったご用件で？」

「うん。これはとても大事な案件よ。」

楯無先輩が真面目な顔でこちらを見る。

「大事な…案件。」

あまりのオーラに固唾を飲む。

「簪ちゃんの水着写真プリーズ！」

先輩の手にある扇子には《お色気満載》何を期待してるんだ。

「旋風！二連脚!!」

いきなりはっちゃけたので強めのツツコミを入れる。

「いたた…いきなり酷くない!？」

「どこが大事な案件ですか!？」

「私にとって簪ちゃんの水着は貴重なのよ!」

気がつけば扇子の文字は《重要文化財》絶対違う!

「コントはこの位にして本題に入りましょう。お茶も入りましたし。」
いつの間にかお茶とお菓子を用意していた虚先輩。

「まあ虚先輩がいるから真面目な案件もありますよね？」

「星夜くんの中で私の信頼度低い？」

「そんなにシヨックなら日頃の行いを正したらどうですか？」

シヨックを受ける仕草をする楯無先輩とそれに追撃をかける虚先輩。

「じゃあ、本当の案件に戻りましょうか。空気もほぐれた事だし。」

「はあ…。」

とか言ってるけど簪さんの水着写真は絶対に本音だよな。

「さて、天野くんは今、生徒会で問題視している案件に関わりがあります。」

「俺が関わってる？」

襲撃されたりしてるからかな？

「星夜くんは知らない？本来IS学園の生徒は何かしらの部活動に参加しないといけないのよ。」

「しかし、天野くんと織斑くんは未所属ですね？」

「あっはい。俺も一夏も部活などには参加してないですね。」

そんな決まりがあったのか。

今まで色々あったのと何も言われなかったから気にしてなかった。

「で、その事に関していろんな部活から生徒会に苦情が来てるのよ。」
「ですが、天野くんに関しては今までの事を考えると部活動に参加するのは好ましくないと思われます。」

「アクシデント率高いですからね。」

「ええ、G E A R 関係もあって不特定多数の人間がいる大会とかに参加する部活動は特にね。」

「お二人がこう切り出したって事は何か対策が？」

「ええ。簡単なものです。」

「君を…生徒会の会計補佐に任命する！」

そう宣言し、閉じた扇子を開く《会計補佐》の文字が。

「会計補佐…確か虚先輩が会計でしたよね？」

「ええ。そうですよ。」

「まあ所属といっても形だけみたいな物だから。気負う必要はないわ

よ。」

「しかし、それでいいんですか？他の部活動から反発されそうですけど。」

「まあ色々言われるだろうけどそのあとの対策もあるわ。大丈夫よ。」

「天野くんはこれまで通りで結構ですよ。何かあればこちらから呼びますから。」

「わかりました。何か手伝えることがあればそのときは呼んでください。」

「では、早速。簪ちゃんの水着写真を！」

楯無先輩が笑いながらこちらを見る。

「最初の仕事は楯無先輩に簪さんの水着写真を要求されたと本人に報告することですね。」

「そんなことされたら私が簪ちゃんに嫌われちゃう！」

そんなこんなで自分の生徒会所属が決まったのだった。

—
そのあと、必要な書類の記入をしてから生徒会室をあとにした。

実際の所属の発表は夏休み明けらしい。

「あっ！星夜見つけた！」

「ん？鈴か。どうしたの？」

廊下を歩いてたら鈴がこっちにやって来た。

「ほら、明日休みでしょ？@クルーズで奢る約束したじゃない」

「ああ。あの件ね。」

福音と戦った後の話ね。

「そ、あんたは予定大丈夫？私は平気なんだけど。」

「明日なら問題ないよ。セシリアさんや簪さんはどうだろう。」

「待った。あの2人の事だから『星夜と2人だけで行きたい』って言うわよ。ここで残りの2人も誘うのは一夏みたいな唐変木だけよ。」

確かに鈴の言う通りか。

「それに、私と先に行っておけば後の2人をしっかりエスコートできるでしょ。」

「なるほど。納得だ。」

さすがは鈴だ細かな所に気遣いがある。

「じゃあ明日でいいわね？」

「おう。朝から行くか？確かあそこって人気なんだろう？」

何回かネットなどで見たが結構行列でできるみたいだし。

「そうね。せっかくだからそのあと買い物に付き合いなさいよ。」

美少女からのデートの誘いを断るのは野暮ってやつだな。

「OK。迷惑かけたのはこっちだからね。付き合うよ。」

「じゃあ、明日の朝9時出発よ。駅で待ち合わせね。」

「わかった。また明日な。」

約束して鈴と別れる。

翌日の朝。

待ち合わせ場所の駅で鈴を待っていた。

「よくよく考えたら周りの勘違いが加速しそうだな。」

まあ今さらどうこうできるものでもないか。

「しかし、女性と2人で出掛けるって経験無いなあ。」

入学直後のセシリアさんの時位か？あれもたまたま会っただけだし。

「お。ちゃんと先に来てるじゃない。感心感心。」

鈴が来た。

「先と言っても5分じゃ大した時間じゃないし。それにこの距離で遅刻するのは寝坊しかないだろ。」

「ま、それもそうか。」

「それじゃ行きますか。」

「ええ。」

2人で並んで歩き始める。

「一夏、見たか。」

「ああ。バツチリ。」

「鈴も中々やるねえ。」

物陰から星夜と鈴の2人を見る影が3つ。

箒、一夏、シャルロットの3人だ。

「でもよ、確か奢るのって鈴だけじゃなかったよな？なんで鈴だけなんだ？皆で行けばいいのに。」

「はあ、さすがは一夏だよ。」

「全くだ。」

「え？」

なぜ自分に向けて冷ややかな視線を送られるのかわからない一夏。

「まあ、折角だし。星夜と鈴のデート、つけてみようよ。」

「やっぱり星夜と鈴はカップルじゃないか、臨海学校の時もあんなに否定してた癖に。」

「興味が無いと言えば嘘になるな。」

こうして尾行が開始された。

「今更だけど星夜と鈴が並んできると身長差すごいな。」

「確かに。星夜は180近くあるようだし。」

「鈴は小柄だからね。『兄妹』って言われても不思議じゃないかも。」

2人にばれないようこっそりついていきながら3人はそれぞれ思ったことを口にする。

「ここが@クルーズか…。」

「なに？初めて？」

「甘党でも無いと男はなかなか来ないと思う。」

「それもそうか。」

鈴と2人で店に入る。

店員に案内され、2人席に向かい合うように座る。

通りに面した窓際の席だ。

「さて、どれにしようかな〜♪」

楽しそうにメニューを見る鈴。

「俺はこの『@クルーズパフェ』でも食べてみよう。」

俺はメニューの見てすぐに決める。

「即決ね。」

「初めてだからな。基本のやつを食べてみようって決めてたし。」

店の名前がついてるからこれが基本だろうし。

「ふくん。じゃあ、私はデラックスにしようかな。」

それぞれ注文が決まったので店員を呼び、注文する。

「しかし、結構男の客もいるんだな。」

「そうね。別に女性限定って訳でもないし。」

「内装とかもつと女性客を意識してるかと思っただけど。」

「むしろ男性受けの制服とか採用してるしね。」

「確かにな。鈴もあの制服似合うんじゃないか？」

「えっ？私が？」

「ああ、普段から鈴って活発なイメージの動きやすさ重視の服だろ？」

ああいう可愛い系の衣装も良さそうだなって。」

「なつなに言ってるのよっ！あたしが似合うわけ無いでしょ！」

急に顔を赤くして否定する鈴。

「そうかな？」

ん〜。とちよつと頭のなかでこの制服を着た鈴をイメージする。

悪くないな。

「いや、行ける。」

「どこが!？」

「だって鈴可愛いし。」

「だああ〜変なこと言わないでよ。もうっ！」

顔が更に赤くなりそっぽを向く鈴。

そんな話をしてると注文したパフェが来た。

「デラックスというだけあってすごいな。」

色々とトッピングが山のようになっている。

所謂全部乗せてやつか。

「そうでしょ？でもなかなか手が出せなくてね〜。」

「確かにな。4,000円越えてるのはなかなか難しいかも。」

「自分へのご褒美にしても高過ぎるわよね。」

値段もカロリーもな。

「なんか今、失礼なこと考えなかった？」

鈴が軽くこちらを睨む。

「はは、まさか。」

2人同時に手を合わせ。

「いただきます。」

「どうだ？」

「仲良くパフェ食べてるだけだな。」

「特に何も無さそうだね。」

星夜と鈴を見守る3人は向かいのカフェに入り様子を伺っていた。

「流石になって話してるかわからないしね。」

「あの2人が偶然窓際に座ったから見れているようなものだしな。」

「鈴があんだけ笑ってるのは久しぶりだな。」

「ん。鈴つてもっと押すかと思っただけどそうでもないのかな？」

「ん？押すってなにをだ？シヤル？」

「何でもないよ。」

「うん。うまいな。値段が高いだけの事はある。」

「でしょ？」

パフェを口に運びながら答える鈴。

「鈴、左の頬にクリームついてるぞ。」

「えっ？本当だ。」

頬についたクリームを取る鈴。

しかし、凄い量だな。

「鈴、それ食いきれるのか？」

「当然。」

「甘いものは別腹ってやつか。」

「なに？こつちのに興味あるの？」

「まあ無い訳じゃないな。」

「こつちはクリームも2種類のハーフだからね…。よし。」

鈴がチョコクリーム側を大きくすくう。

「ほら、星夜、口をあける。」

「えっ?」

「一口あげるって言ってんのよ。」

「あ、ああ…。」

鈴に言われるままに口をあける。

「それ♪」

口に甘いパフェが運ばれるがなんか味がわからなかった。

「どう?美味しい?」

「お、おう。なかなか濃いめのチョコだな。」

「もうあげないからね♪」

楽しそうに残りを食べる鈴。

……って今のは間接キス……………。

「ぐちそうさまー!」

「ぐっ、ぐちそうさま。」

食べ終わったのでそのまま会計に向かった。

当然3人は鈴が星夜に食べさせているところを目撃した。

「なっ!」

「まさか!」

「ん?」

まさか鈴がこれほど自然に大胆な行動に出るとは思わなかったよ
うで箸とシャルロットは驚きを隠せなかった。

「どうかしたのか?」

「いや、普通に考えてあれ、間接キスだよ?」

「そもそもあのような事恥ずかしくてできるか!」

「ああっ!そういうええばそうだ!」

④クルーズを出て、近くの店でショッピングに向かう。

だが先ほどの出来事のせいか落ち着かない。

「星夜。どしたの?」

「ん?ああ、大丈夫だ。なんでもない。」

「ならいいけど。」

鈴はいたって冷静だ。

「本当は甘いのがたくさん食べて気分悪いとか？」

「いや、だから大丈夫だって。」

「ふくん。じゃあ行くわよ！」

とりあえず鈴が満足するまで買い物した。

荷物持ちは大した事なくて良かった。

特に何事もなく終わると思ったんだが…。

「なあ、鈴。」

「ええ、星夜。」

「確実につけて来てる。」

後ろに一夏と箒さんとシャルがついてきている。

「どうする？」

「んん。とりあえず捕まえて事情徴収かしら？」

「それが一番だな。」

電童から白式へレオを転送する。

「「ぶぎゅっ！」「」」

いきなり頭上から通常形態のレオが来るとは思わなかったのか？
人纏めて捕まえた。

「で？目的は？」

「てか何時から見てた？」

鈴と2人で3人に詰め寄る。

「朝から…。」

「気になったので…。」

「ずっと見てました…。」

「「ごめんなさい。」「」」

3人が同時に頭を下げて謝る。

「どのファイナルアタックがいい？選ばしてやる。」

「せめてもの慈悲よ。一撃で消してあげる。」

殺気を込めて睨む。

「あつ！そうだ。星夜、鈴。今日は気を付けた方がいいよ？」
いきなりシャルが思い出したように言い出す。

「なにを？」

「実はさっきの写真をセシリアと簪に送ったんだけど——」

「さて、さっきの写真って何だ？」

「すごく嫌な予感がする……」

「ほら、@クルーズで星夜が鈴に食べさせて貰ってる瞬間の写真なんだけど——」

マジか……

「あつあれ！見てただけじゃなく写真撮って送った!？」

「うん。そしたら『すぐに向かう!』ってメールが……」

ヤバイ……

目のハイライトが消えたセシリアさんと簪さんが来るとかヤバイ。ブルー・ティアーズで蜂の巣にされて、山嵐で消し炭も残らなそう
だ。

「お前達……マジで覚えてろよ……?」

「星夜、それよりも早くここから逃げないと……」

とりあえずこいつらの相手をしてると確実に見つかるな。

「星夜さああああん！」

「星夜くうううん！」

「あつ来た。」

すごい勢いで走ってくるセシリアさんと簪さん。

形勢逆転し、余裕そうなシャル。

「ほらー星夜ー!こっちよー!」

鈴に言われて走り出す。

……だが何かに足がとられて転ぶ。

「いたたた……」

「いったい何が……」

足元を見ると見慣れた赤い尻尾が。

「ドラゴン!？」

「あんたはどっちに味方してるのよ!？」

ドラゴンはこちらを申し訳なさそうに見る。

急いで起き上がり走り出す。

「ユニコーンとボアも怪しいわね。」

「確かにな。」

まさかのデータウエポンの反乱(?)だ。

「あの2人に捕まったらどうなるかわからないわね。」

「普段の尋問どころじゃなさそうだ。」

次の瞬間、目の前にユニコーンとボアが召喚される。

「ちよっ!」

「やばっ!」

ファイヤーウォールが目の前に展開され、足を止めた瞬間、ボアが光を放つ。

クロックマネージャーだ。

気がつくときセシリアさんと簪さんに捕まっていた。

「予想外過ぎる。」

「何で星夜よりそっちが優先なのよ…。」

2人揃って黒いオーラを纏っている。

こちらは正座状態だ。

「で?」

「説明してくれるよね?星夜、鈴。」

怒りの余り簪さんが呼び捨てになってる。

「ほら、この前の迷惑のお詫びとして奢るって話だったよね?それで今日来たんだよ。」

「ほら、2人も星夜と2人でいきたいでしょ?だからあたしと先に行っておけば下見になるでしょ?」

俺と鈴で説明する。

「じゃあ、これは?」

「どうゆうことですか?」

2人は携帯の画面を見せてくる。

先ほどシャルが撮ったと言っていた写真だろう。

俺が鈴に食べさせて貰っている。

「ただのラブラブデートにしか見えませんか?」

「しかも…間接キスだよな?」

「そつそれは…。」

「たまたま流れでなっただけで深い意味は…。」

2人は鈴を見る。

そしてなにかを言おうとした瞬間。

「はあああー！」

ラウラが俺達の間飛び込んできた。

「星夜！大丈夫か？」

「ラウラ!？」

「まさか星夜を襲うとは…。セシリア、簪お前達に星夜はやらせん!？」

何か勘違いしてないか？

まあいいや、これは好機！

「ラウラ！その2人を頼む！俺は逃げる！」

「任せろ！」

即座に鈴と一緒に立上がり走り出す。

「ラウラさん！あなたには関係の無い事ですわよ！」

「そんなことは無い！今！星夜に頼まれたのだからな！」

よし、今度ラウラに何かお礼をしないと。

そんなことを考えながらその場から逃げ出した。

ちよつと離れた公園まで来た。

「ここまで来れば平気かな。」

「まさかずっとつけられてたなんて…。」

「全然気が付かなかったよ。」

「しかもあの瞬間を撮られてたなんてく。」

頭を抱えて悶える鈴。

「そうだ、鈴にひとつ聞きたいんだが…。」

「なっなに？」

顔を赤くしていた鈴がこちらを向く。

「何で俺なの？」

「きつ気づいてた？」

「まあ、ここまでされちゃあね。」

一夏みたいな唐変木じゃないし。

「……内緒。」

顔を赤くしたままそっぽを向きながら答えた。

「内緒なら仕方ない。」

「別に今すぐ返事しろとは言わないからさ……覚えておいてよ。」

「了解。」

しばらく2人で公園のベンチに座ったまま空を見ていた。

「見つけた!」

「見つけましたわ!」

「待て! 貴様らあ!」

セシリアさんと簪さんにそれを追うラウラがやって来た。

「おおう! もう来たのか!?!」

「結構やるわね。」

ベンチに座る俺達の前に立つセシリアさんと簪さん。

「すまない星夜。押さえきれなかった。」

「いや、大丈夫だよ。ありがとうラウラ。」

そう言いながらラウラを撫でる。

「ん。そうか、なら良かった。」

嬉しそうなラウラ。

なんか犬っぽいな。

「あつ星夜の隣は譲らないわよ?」

セシリアさんと簪さんを見ながら鈴が俺に引付く。

「?!?!」

セシリアさんと簪さんは

「折角だし宣戦布告しとくわね♪」

「なっ……ななな……。」

「鈴さんは織斑くん狙いだっただんじや……。」

「なんかいきなり宣戦布告したよ。」

「ん? どうゆうことだ?」

宣戦布告の意味がわからず首をかしげるラウラ。

「ま、そう言うことだからよろしく。さあ、帰りましょ。」

「そ、そうだな。」

「まつまさか…。いきなりこんな形でライバルが増えるとは…。」

「うう…：…ちよつと不利かも…：…。」

「だから何の話なのだ？」

こうしてドタバタな1日は終わった。

翌日。

GEARにて井上さんから報告会やると言われたので皆で集まった。

「今回はまだ謎の部分がありますがわかったことがいくつもありましたので報告させていただきます。」

もうないと思つてたGEARの報告会。

いつもの会議室に俺、一夏、箒さん、鈴、セシリアさん、簪さん、ラウラ、シャル、本音さん、そしてなぜか楯無さんまでいる。

GEAR側は渋谷社長とベガさんとアルテアさん。

「まず、今回は輝刃についてですが…：…」

目の前のスクリーンに映像が映し出される。

『信頼出来る仲間が居る限り何度でも、立ち上がれる！』

『仲間が居るから！勇気は無限にわいてくる！』

『1人では出来なくても！』

『力を合わせれば！出来ないことはない！』

ちくしよく。これはもう終わったと思つてたのに。

まさかのセカンドシーズンかよ。

「今回、輝刃が誕生するきっかけとなったのは星夜さんと篠ノ之さんと織斑くんの『信頼』する仲間と共に立ち向かう『勇気』を生む心の繋がり…『友情』です。」

スクリーンに表示された『信頼』と『勇気』の文字がぶつかり『友情』とデカデカと表示される。

「お、俺と…。」

「わっ私と…。」

「『星夜で『友情』!?!』」

驚きを隠せない一夏と篝さん。

「だからあのときユニコーンとレオが光輝いたのか。」

ラウラが納得する。

「ええ、ユニコーンドリルとレオサークルが再び共鳴し、産み出したエネルギーで試作武装をデータウエポンとして昇華させたようですね。」

「元の武器が可変武器だったからいくつもの形態を持つのですか?」

シャルが質問をする。

「はい、試作武装が可変式だったので輝刃がそのように作り上げただけです。」

「輝刃が自分で作ったの?」

井上さんの説明を聞き、簪さんが言う。

「輝刃は自分の体を自らの意思で構築し、あの場に現れたのです。」

「それって星夜さんに聞いた3年前のユニコーンの時と同じと違うことでしょうか?」

セシリアさんも同じように思っていたようだ。

まるで初めてユニコーンが俺の前に出てきた時みたいだな。

「そうですね。あの事例が最も近いと思われまます。」

「そう言えば輝刃は特殊能力はないの?」

鈴が次に気になることを聞く。

「それが現在、それらしい能力が確認されておりません。」

「まだ完全に覚醒していない…と言うことかね?」

渋谷社長が聞き返す。

「その可能性があります。今後、何らかの感情に反応し、更なる能力が目覚めるかもしれません。」

なるほど、輝刃に特殊能力か…どんなのがつくかな?

「輝刃に関してはこのくらいですね。」

井上さんが仕切り直す。

「あの時のみ確認されたと言うフェニックスと凰牙のデータウエポ

ン、ラゴウについてか？」

アルテアさんが聞く。

「はい、次はフェニックスについてですね。」

スクリーンに戦闘中の俺を映した映像が流れる。

「フェニックス…現在確認できたことは電童の中に残っていたデータに関してのみですが。」

スクリーンには予測のデータが表示される。

「このデータウエポンの特殊能力は無限のエネルギーを産み出すインフィニットレイヤーです。」

「無限のエネルギー…私の紅椿の絢爛舞踏と同じようなものか…。」

「でも、このフェニックスはどこから来て、どこへ消えたのかしら？今は居ないのでしょ？」

楯無先輩が言う。

「申し訳ありません。フェニックスに関してはほぼ特殊能力以外の事はわかっておりません。」

「じゃあ、どのような感情に反応したかもわからないのね？」

ベガさんが聞く。

「はい、すべてが不明です。予想としては電童のコアの中にいる可能性がありますね。」

「ふむ、フェニックスが完全に消えた可能性もあるのか…。」

渋谷社長が難しい顔をする。

「今の状態では断言出来ませんが…。」

フェニックス…あれはすごかったな…。

いつかまた会えるだろう。

そんな気がする。

「さて、最後に敵I.S、凰牙とラゴウですね。」

スクリーンにはラゴウを装備した凰牙の映像と記録から予想されるステータスが表示される。

「パイロットの声は機械で合成してたみたいで性別もわからないけどやたらと好戦的だったわね。」

「そうだな、それにあいつが言う通りならあれもデータウエポンらし

いし。」

「データウエポンって現在はGEARジャパンで作ったやつだけだよ
ね？何で凰牙が持ってたんだろ？」

「確かに、前に見た資料では凰牙を作ったGEARチャイナでもデー
タウエPONは作れなかったのでは？」

鈴、俺、シャル、ラウラから意見が出る。

「データウエPONに関しては嚴重な管理を行っているので漏洩の可能
性は非常に低いのだが…。」

「もしくは偶然にも産まれたのか…。」

「ただ、わかることはデータウエPONの特性はしつかりと持ち合わせ
ていたのでデータウエPON、もしくは非常に近い存在であるのは間違
いないですね。」

「もともと分からないことの方が多いですしね。」

渋谷社長、アルテアさん、井上さん、ベガさんが意見を言う。

「敵に関しては組織も全く掴めていないのでなんとも言えませんが非
常に高度な技術をもった組織であることは間違いありません。」

「星夜くん、織斑くん男性操縦者だけではなく、君たち専用機持ちも警
戒しておいた方がいいだろう。」

「あなたたち夏休みは一度国に帰るでしょ？長時間の移動は非常に狙
いやすいから特にね。」

アルテアさんとベガさんがこちらを見ながら強めに言う。

「はい。」

それぞれ返事をする。

「今日の所はここまでですね。お疲れ様でした。」

報告会は終わった。

「あつ星夜くん。少しいいかね？」

「あつ渋谷社長。どうかしましたか？」

報告会のあと、社員食堂で休憩していたら渋谷社長に声をかけられ
た。

一応GEARがらみだといけないので皆に断ってから席を立ち、離

れる。

「うむ、夏休みなんだが8月の初旬に5日程予定を貰って平気だろうか?」

「はい、今のところ予定もありませんし。」

「そうか、知っているとは思いますが欧州ではヘイグニツシヨンプランという計画があり、それに関係した催物があつてね。」

イグニツシヨンプラン：セシリアさん、シャル、ラウラがそれに関わってたはず…。

「それに参加すればいいんですか?」

「ああ、と言ってもそう難しく考えなくていいよ。沢山の国が一度に祭をやっているようなものだ。色々と見れて勉強にもなると思うよ。」

「そうなんですか?」

「うん、出店見たいのものもあるし、沢山の人が集まってくるからね。イメージとしては車のモーターショーと自衛隊の総火演を混ぜてISに置き換える感じかな。」

「へえ、それは楽しそうですね。ぜひ行きたいです。」

「チケットとかの手配はこちらでやっておくから。詳細はまた後日に。」

「お願いしますね。」

この感じだと欧州組の3人も参加するんだろうな。

折角だし内緒にして当日驚かしてみるか。

そんな考えをしながら席に戻る。

「どうかしたのか?」

「なにか問題か?」

一夏と箒さんが声をかけてきた。

「ん?大丈夫だよ。ただの予定の確認、夏休みが近いからね。」

「ああ、なるほど。」

「夏休みよりその前の期末試験は大丈夫なの?特に一夏。」

鈴が一夏を指しながら言う。

「だ、大丈夫だって。皆に教えてもらってるしな。」

「一瞬声が上がってるわよ？なんならおねーさんが優しく手取り、足取り教えて上げましょうか？」

「座学でどう手取り足取り教える気？迷惑かけないで。」

お色気モードの楯無先輩が一夏を誘惑するような仕草をするが簪さんに突っ込まれる。

おい、一夏鼻下延びてる。

「ふむ、一夏はしっかりとみておいた方が良さそうだな。」

「そうだね。しっかりと教えないと駄目だね…。」

一夏の両隣の2人が黒いオーラを放ち始めていた。

一夏、強く生きろ。

「楯無先輩、あまり後輩をいじらないで下さい。」

「だって皆の反応が楽しくって♪」

先輩の扇子には《愉快痛快》…。

「で？星夜くんも勉強大丈夫？」

「しっかりとやりますから安心して下さい。」

赤点は無いはずだ。

「わからなかったら私に頼ってね♪」

楽しそうに笑う楯無先輩。

扇子は《課外授業♪》

「課外授業って、なんか違いますか？」

「そうかしら？」

そんな他愛の無い会話をしながら休憩もそこそこに帰る俺達だった。

第42話 《期末試験》

7月のある日。

俺―天野星夜―は道場にて親友であり、同門の銀河と組手をしていた。

「久しぶりだけど、なまってなくて良かったぜ。」

「あいにく、今まで以上に体を使う場所に居るからな。」

ましてや命がかかってる時もあるからな。

「よし！2人ともそこまで！」

こちらを見ていたみどりさんがパンツと手を叩き、合図をする。

「ありがとうございます。」

互いに向き合い、礼。

「しかし、人数増えましたね。前はこの半分位でしたよね？」

道場にある門下生の一覧を見て呟く。

「ああ、星夜くんが2人目の男性操縦者って判明した直後に取材やら何やら沢山来てね。おかげで入門希望が一気に増えたのさ。これでも減った方さ。」

やれやれとみどりさんが言う。

「ご迷惑お掛けしてます。」

一夏も自宅に色々と来たって言ってたしな。

「1人でもしっかりとやってみたいだね。動きは前より良くなったじゃないか。」

「ISは本人の動きが反映されますからね。それに、折角教わったことを無駄にはしたくありませんし。」

「うん、あんたなら大丈夫だね。またいつでも来な。」

「はい、機会があればまた。」

「土産話もよろしくな！星夜！」

「ネタがあればな。」

今日は久しぶりに道場で来ることが出来た。

流石に学園だと手合わせできる人もいないのもつと来たいのだが。

普段ならこのまま近くのお店とかを見て回るところだが期末試験も近いので素直に帰って勉強をしよう。

「図書館、空いてるかな？」

試験が近いこともあり、図書館で勉強する人も多い。

「あまのんもべんきよ〜？」

図書館に入ると本音さんが声をかけてきた。

「試験も近いしね。」

「おお〜えらいえらい。」

「本音さんも勉強？」

「そうだよ。折角だから一緒にやろ〜。」

そう言って手招きをする本音さん。

「うん。よろしく。」

手招きされるままに席につく。

そして勉強道具を広げる。

「まずは一般教科からかな…。」

「よし。頑張るぞ〜。」

「ごめんね本音。少し遅れ…星夜くん!？」

席に近づいてきた簪さんが驚く。

「かんちゃん、あまのんも一緒にやるって〜。」

「あつ簪さん。ごめんね。相席させてもらってるよ。」

「あつうん。よろしく…。」

簪さんも席につく。

「一般教科なら基本を押さえておけば大丈夫かな？」

「まだ半年ぶんだからね。そこまで難しい事もないよ。」

「そうだね〜。」

3人で今までの内容を復習していく。

お互いに問題を出しあったり、説明しあったり。

「まあ、一般教科はこれくらいかな？」

「特に問題は無さそうだね。」

「次はIS関係だ〜。でもその前に休憩〜。」

そう言い机に倒れ込む本音さん。

「そうだね。少し休憩しよっか？」

「うん、そうしよう。」

図書館内は流石に飲食禁止だが近くに食堂があるのでそちらに移動して3人でお茶を飲む。

「そう言えば、簪さんと本音さんは夏休みは予定とかあるの？」

「私は特に無いか…。家に帰るくらい？」

「そんな感じ。でもたっちちゃんが何かするかも。」

「なるほど。楯無先輩ならなんか企画しそうだ。」

あの人は退屈とか嫌いそうだな。

「どうしてそんなこと聞いたの？」

「ただ何かするのになって。ちよつと気になっただけ意味はないよ。」

「本音の言う通り、おねえちゃんが何かするかも…。星夜くん、気を付けてね。」

「それは気をつけてどうにかなるのか？」

あの人が全力で来るとどうにもなら無い気がする…。

「さて、後半も頑張るか…。」

「うん。頑張ろうね。」

「おう。」

図書館に戻り、IS関連の書物とにらめっこしながら今までの内容を復習していった。

「あつ！そくいえば。」

「どうしたの？本音さん。」

勉強が一通り終わり、片付けをしていたら本音さんが思い出すような仕事をする。

「あまのんとかんちゃんの日デートってどうなったの？」

鈴と@クルーズに行った翌週にセシリアさんと簪さん、それぞれと@クルーズに行った。

特に問題とかはなかったが鈴が俺に食べさせていたのを知っている2人は当然同じことをしてきた。

さらに簪さんは俺が食べさせてあげるのもやった。

「いくら本音でも…教えない…。」

「ごんねくん。」

簪さんが顔を赤くしながら言う。

本音さんはからからと笑いながら残念がる。

「2人とも、今日はありがとう。色々とわかったよ。」

「うん、また何かあったら聞いてね。」

「あまのんも頑張つてね。」

今日も特に問題なく終わった。

数日後、3日間にわけて期末試験が行われた。

手応えは悪くない。

赤点は無いだろう。

「だあー。やっと終わったー。」

最後のテストが終わると同時に机に倒れ込む一夏。

「ふう。」

「なあ、星夜はどうだった？出来たか？」

一夏が倒れたまま顔をこちらに向けて聞いてくる。

「悪くない。赤点は無いだろ。そう言う一夏は？」

「俺もそんなに悪くはないけどやっぱIS関連の部分がな。」

「なら、問題無いだろ。」

「そつか、さっきのテストの選択つてA A D B C Cでいいんだよな？」

「あれ？A A D B C Dじゃなかったのか？」

俺もCかDで悩んだやつだ。

「まじか!?ちよつと自信なかったんだよな。」

「む、最後はDではなかったか？」

箒さんが頭を傾げながらやって来た。

「箒もDか…。」

「セシリアさんとシャルとラウラはさっきのテスト選択問題最後のどれ選んだ？」

「こつ言うときは他のやつにも聞こつ。」

「えっ僕はCを選んだけど。」

「私もCを…。」

「あれのDは引っかけだぞ。星夜と箒は残念だったな。」

「まあ、全部が駄目って訳じゃないし。」

「そうか、あれはCだったか…。」

「よし！とにかく飯行こうぜ！飯！」

一夏が立ちあがり、声を出す。

「そうだな。行くか。」

皆で食堂に向かった。

「みんな、お疲れさま。」

「星夜に一夏はちゃんと出来たあ？」

食堂では先に来ていた鈴と簪さんがお互いに先程の試験に関して話していたようだ。

「鈴、俺を甘く見るなよ。バツチリだぜ！」

「まあ、赤点は無いだろ。」

「あんたたちは赤点ギリギリだと千冬さんが怖いんじゃない？」

「う、確かに。」

「俺達つてよりも専用機持ちには全体を牽引する位の実力が求められてるからな。」

それぞれ食事を決め、受け取ってからテーブルへ。

「そう言えば皆は夏休みどうすんだ？」

一夏が皆に聞く。

「僕は一度国に帰らないとね。会社関係の事もあるし。」

「私もですわ。色々とあちらでやらないといけないこともありますので。」

「私もそうだ。部隊の事もあるからな。」

「面倒だけど帰らないとうるさいしね。」

シャル、セシリアさん、ラウラ、鈴がそれぞれ答える。

「俺はGEAR関係で出かける位かな。」

「おねえちゃんと家に帰るくらいかな。」

「私は何もないな。」

「やっぱり海外組は皆帰るのか。」

一夏がそれぞれの答えを聞き頷く。

「お土産位買ってくるからおとなしくしてなさいよ。」

「俺は子供か!？」

鈴が一夏をからかう。

「そう言う一夏はどうなんだよ?」

「俺か? とりあえず家に帰って掃除しないとな。」

「まあ、一夏らしいな…。」

「学園に居ないのは前半だけだから、帰って来たらどこかにでかけようよ。」

シャルが一夏に提案する。

「そうだな! 皆で何かやれるといいな!」

…安定の一夏だ。

「…うん、そうだね。」

シャルがあきれながら答える。

「あれ? シャル、どうかしたのか?」

「なんでもないよ。」

シャルはふてくされながらそっぽを向く。

「んん?」

一夏はわからないって、顔をしている。

「まあ、皆で何かするのはいいかもな。」

「でも、なにやるのよ。星夜。」

「夏休みは皆でキャンプやバーベキューをすると聞いたことがあるぞ。」

「日本の夏と言えば花火だと聞きましたが。」

「確かにその辺は定番だね。」

一夏を無視してこちらは皆で何が出来るか話し合っていた。

一学期の最終日、全校集会の後、教室にてLHRが行われていた。
試験の結果?

誰一人として赤点は居なかったよ。

「では、以上が夏休みの宿題です。忘れないよう、しっかりと計画を立ててやってくださいね。」

教壇では夏休みの宿題を配り、それぞれの説明をする山田先生。

「遠方から来ている人たちは色々忙しかも知れませんが学生の本分は勉強ですからね？ 忘れないようにお願いします。」

ちなみにこの宿題、量はそんなに多くはないがIS関連の物などもあるため難易度は高い。

さらに専用機持ちは特別課題もある。

「休み明けにだらけきった顔を見せたら遠慮なく鍛えてやるから安心しろ。」

織斑先生がクラスに向け、冷徹な笑みを向ける。

「せ、節度を持ってメリハリのある生活を送ってくださいね。」

なぜか山田先生まで軽く怯えていた。

まさか今の言葉の対象は山田先生なのか？

そのままLHRが終わり解散となる。

「セシリアさん達はいつから帰るの？」

「私は明日には出発しないと…あちらでのスケジュールが結構詰まっております。」

スケジュール帳を見ながらセシリアさんが答える。

「私も明日だ。軍の報告等やる必要があるから。」

ラウラが手元の端末を操作しながら答える。

「僕もだよ。なんだかんだあれ以来直接顔を会わせるの初めてだから少し緊張するけど。」

少し緊張した面持ちのシャル。

「あたしもそんな感じね。あくめんどくさい。星夜、代わりにやってよ。」

だるそうに机に倒れ込む鈴。

「なんで俺が鈴の代わりに中国に行かなきゃいけないんだよ。あの厳しい管理官さんに怒られるぞ。」

確かヤンさんだったか。

「うぐっ…。」

流石にあの人に怒られるのは嫌らしいな。

「皆初日から帰るみたいだけど、帰りはどうなんだ？」

一夏が帰りの予定を聞く。

「あたしはそんなに長くないわよ。7月中には帰ってこれるわね。」

鈴がすぐに答える。

「恐らくこちらは皆、欧州合同IS演習の後だろう。8月の初旬になるな。」

ラウラが答える。

「うん、そうだね。」

「そうですわね。」

シャルとセシリアさんが頷く。

「そうか。あと、欧州合同IS演習ってなんだ？」

「その名の通り欧州で行うISを使った演習。イグニッションプランの一環だよ。」

「ISのみならず、それぞれの国が開発した最新技術の発表の場ともなっておりますわ。」

一夏の疑問に対してシャルとセシリアさんがこたえる。

「へーそんなのもやるのか。皆大変だな。」

「俺や一夏、箒さんは専用機持ちとしては異端だからな。」

「そうだな。本来はそれぞれの国の代表や候補生の中から選ばれる、我々はそういった努力無しに貰っているのだからな。」

「そうよ。その辺しっかりと覚えておきなさい。いつ難癖付けられるか解らないから。」

俺達を見ながら鈴が言う。

「一夏に関しては『千冬さんの弟』だから手を出さない奴が多いけどあなたたちはそう言うの無いからね。」

「そうだな。時折不穏な噂も聞く、2人とも気を付けておくといい。」
鈴の言葉にラウラが反応する。

「なんで俺は千冬姉の弟だから平気なんだ？」

「初代ブリュンヒルデに睨まれたらIS関連の会社からはいい顔はされないよ。」

「それに織斑先生のファンの方は非常におおいですし。」

「俺はまだGEARって後ろ楯があるけど箒さんは何も無いし。」

一夏の疑問にシャル、セシリアさん、俺が答える。

「うう、そうか…そうだよな。」

いまだに自分が姉に守られている事実を知り、少し考えるような仕事の一夏。

「まあ、私も星夜も学園内ならそう襲われたりすることはないだろう。」

「そうだな。何かあれば先生とかに相談すればいいだけだし。それよりも帰って来たら皆でバーベキューとかしたいな、どうかな？」

「おお！それいいな！」

なんか辛気くさくなりそうなので話の流れを変える。

一夏が反応する。

「そうだね。折角だからやりたいな。」

「きつとたっちゃんさんが準備してくれるよ。」

箒さんと本音さんも賛同する。

あの人だけに準備させたらそれはそれで問題だな。

「じゃあ帰って来たらやろうね。」

「ふむ、それは楽しみだ。」

「出来れば日本の花火も見てみたいですな。」

シャルとラウラは帰国後の楽しみができて喜び、セシリアさんは希望を述べる。

「花火に関してはこっちで調べておくよ。この時期は花火大会も多いし。」

「よろしく頼みますわ。」

このあと、皆の予定を軽く確認して解散する。

明日から帰る為準備もあるセシリアさん達はそのまま部屋へ向かった。

「さて、少し体を動かすか。」

俺はアリーナに向かって歩く。

「星夜、自主練か？」

箒さんが声をかけてきた。

「うん、しばらくGEAR関係で出来ないかも知れないしね。」

「そうか、なら私と手合わせを願えないか？やはりまだまだ紅椿を活かしきれていないのでな。」

「いいよ、こつちも1人より2人のほうがやれることも増えるし。」

「すまない。ではアリーナで。」

「わかった。」

そして、アリーナにて電童と紅椿が向かい合う。

俺の手には実体剣が握られている。

「ほう、私に対して剣で挑むのか。」

「折角だから剣での間合いの取り方とかを箒さんから学ぼうと思っ
ね。」

「良いだろう。篠ノ之流剣技、特と見ろ！」

箒さんも刀を一本だけ構える。

「勝負!!」

お互いに正面からぶつかり合う。

そのまま鏢迫り合いの形になる。

「パワーは互角か。」

「お互いにハイパープラズマドライブと展開装甲を使わないのはって
無いけどね。」

一度力を込めて振り払い、距離を取る。

だが、箒さんはすぐに踏み込み、上段から斬りかかる。

こちらは剣を振るい、刀を弾く。

「これは防げるか…なら！」

「くっ！」

すぐさま体制を整え、素早く突きを出す箒さん。

首筋を正確に狙う切っ先を何とかよける。

「その避け方は間違いだ！」

突きの体制からそのまま刀を振り抜く箒さん。

肩にダメージが入る。

「立て直してなごさせんでー！」

そのまま刀を返し、斬り上げる。

「このままやられるか！」

とつさに刀を蹴る。

「残念だがこちらは二刀流だ！」

いつのまにか左手にも刀を握っていた箒さん。

横一閃に斬撃が入る。

「くう、このっ！」

こちらも強引に剣を振るう。

「太刀筋が見え見えだぞ！」

ひらりとこちらの剣を避け、素早い連撃を入れる箒さん。

後ろに大きく飛び距離を取る。

「やっぱり剣じゃ勝負にならないか。」

「これに関しては簡単に負けるわけには行かないからな。」

「じゃあ、これならどうか？」

剣をしまい、次の武器を取り出す。

「それは…ヨーヨーか…？」

「そう。ラウラのワイヤーブレードみたいなものだよ。」

「様々な武器を使い分けるお前やシャルロットには感服する。」

「シャルほどでは無いけどね。じゃあ、いくよ！」

「来い！」

左右のヨーヨーを時間差で放つ。

箒さんは一撃目を避けて、二撃目を弾く。

「くっ！なかなか重いな。」

「見た目に騙されると痛い目見るよ！」

このヨーヨーは軽くエネルギーを纏っているため、物理的なダメー

ジと軽いエネルギーのダメージが入る。

「なら、これで！」

箒さんはヨーヨーを避けると同時にこちらに飛び込む。

「狙い通りだ！」

ヨーヨーの糸はエネルギーなので斬ることは出来ない。

さらにヨーヨー本体と手の間に多少の障害物があっても制御することが出来る。

「なっ!? 後ろから!？」

帰ってくるヨーヨーは箒さんの背中に直撃する。

「いくらISには死角が無いと言っても扱ってるのは人間だからね。」
「折角の機能を活かしきれない所か無くすとはな。まだまだ修行が足りん。」

「その為の学園でしょ。」

「そうだな。一度休憩しよう。機体の調整もしたい。見てくれないか?」

箒さんがピットを指差す。

「俺が出来る範囲なら喜んで。」

2人でピットに向かおうとする。

次の瞬間、各ピットの扉が開き打鉄やラファールを纏った生徒たちが飛び出し俺達を囲む。

その数は10機。

「何か俺達に用ですか?」

「ふん! 男の癖にISが使えるからって専用機を貰って調子に乗ってんじゃないわよ!!」

俺達の目の前のラファールを纏った生徒がライフルを向けながら吠える。

「それを言ったら一夏も同じですが?」

「あんたも姉が開発者だから貰っただけの癖に!」

打鉄を纏った生徒が刀を箒さんに向ける。

「今ならまだ何もなかったですみますよ?」

「折角の夏休みを反省部屋で過ごしたくはあるまい?」

「いくら専用機と言ってもエネルギーが減った状態でこの数相手に何とかなると思ってたんの?」

「先輩に対する口の聞き方になってないわね! 教育してやるわ!」

全く、こちらは穏便に済ませようとしただけなのに。

一斉に射撃武器を構え撃ってくる。

「はっ!」

「この程度!」

俺は下に箒さんは上に移動し、回避する。

「このまま袋叩きよー！」

「させるかー！」

取り囲もうと動き出した相手のラファールに対して呼び出したトマホークを投げつける。

「きゃっ!?」

「貫ったー！」

トマホークを避けた所に箒さんが飛び込み一閃の元に斬り伏せる。まだ撃墜には至って無いようだが包囲が崩れたのでそのまま突破する。

「まずは囲みを突破ー！」

「この程度の連携でどうにかなると思われたのなら心外だな。」

相手と向き合う。

「星夜、私はまだ飛び込むしか能がない。援護を頼めるか？」

「当然、任せてよ箒さん。」

「来るわよ！生意気な赤いのからブツ潰せ！」

刀を両手に構え、飛び込む箒さん。

こちらは各射撃武器を装備して狙いをつける。

「はあああー！」

「こいつー！一年の癖にー！」

正面で刀を構えていた打鉄と斬り結ぶ箒さん。

同時に3人程から近接戦を仕掛けられるが1つ目を避け、2つ目を弾き、3つ目をカウンターでぶっ飛ばす。

相手の真ん中辺りのISは箒さんに任せこちらは遠巻きで箒さんを撃とうとしているISに向けミサイルを発射。

「くっ!?安全な所からしか狙えない軟弱な男が！」

「好きに言ってる。」

ミサイルを回避するか迎撃する所に合わせてライフルやバズーカ、キャノン砲を撃ち込む。

「うわああー！」

「これで終わり！」

最後に一番貫通力があるゴーガンを放つ。体制を立て直す暇も無いままエネルギーが無くなり、ISは墜落していく。

「こちらも終わったぞ。」

箒さんも最後の一機を斬り落とした。

「織斑先生、聞こえますか？天野です。」

取り敢えず織斑先生に報告しないと…。

「この馬鹿共はこちらで後はやる。お前と篠ノ之は帰っていいぞ。」

「わかりました。お願いします。」

「失礼します。」

織斑先生に後を任せ、寮に戻る。

「まさか言ったそばから襲われるとはね。」

「噂をすれば何とやら…だな。」

今後はないといいけど…。

「やはり、様々な武器を使えるよう、訓練をするべきか？」

「どうしたの？」

「今回は遠くの敵を星夜に任せたが仮に共に戦うのが一夏だったら2人とも遠くの敵を倒す手段が乏しい…。」

「確かに、今の一夏は荷電粒子砲が使えるけど制約も多いからね。出来ることの幅が広くて困ることは無いんじゃないかな？」

「ああ、今後の課題だな。機体にも早く慣れんな。」

「次は何かデータウエポンでも使ってみる？」

「そうだな。考えておこう。その時は頼む。」

「うん。じゃあお疲れ様。箒さん。」

「ああまたな。星夜。」

箒さんと別れ、部屋に向かう。

「ただいま〜。」

誰も居ないけどやっぱり言ってしまう。

「そうだ。予定を確認しておかないと。」

GEARに連絡して夏休み中の予定を確認しておこう。メールが来ていて予定が書かれていた。

「え〜と。欧州合同 I S 演習は 8 月の 2 〜 4 日の 3 日間で前後 1 日を移動に使う予定か。それ以外も何回かは G E A R で仕事か…。」

主にデータ取りか各種インタビューとかだな。

7 月の間に宿題は終わらせておかないとな…。

第43話 《夏休み》

7月の末…俺―天野星夜―はレゾナンスに買い物に来ていた。
来週は欧州に行くのでその準備だ。

「さて、必要なものはこんなもんかな。」

腕に付けた待機状態の電童で時間を確認する。

昼だ。折角レゾナンスまで来たのだし何か食ってから帰ろう。

そう思っ居ると…。

「……………だわ。」

「……………ジャン。」

「……………バリ。」

前に聞いたことのあるやたらと特徴的な語尾の声が聞こえる。
そちらの方に視線を向けると。

「さっきから1人でいるジャン?」

「君みたいなかわいい子を放っておく奴なんてろくな奴じゃないだわ。」

「俺達と楽しもうバリ。」

なんか前にも見た光景だ。

あの変な3人組が赤い髪の娘を囲っている。

赤い髪か…エリスを思い出すな。

「あんたらまだこんな事やってんだ? どう見てもその娘困ってるよね?」

そのまま見逃すのも忍びないので3人組に声をかける。

「「おっ! お前は!」」

「いつぞやのパツキンのツレじゃん!」

「お前には関係の無い話バリ!」

「でも! この前のお返しをしてやるだわ!」

こちらを振り向くとすぐにこちらに向かって走ってくる。

「この前と同じと思ったら大間違いだわ!」

「俺達の合体技を食らうジャン!」

「これで終わりバリ!」

「トリプルストリームアタック!!」

「だわ!」

「ジャン!」

「バリ!」

3人は一直線に並んでこちらに突っ込んでくる。

「はあ…アホらし。」

取り敢えず先頭にいるバリ男の顔面を踏みつけ飛ぶ。

「お、俺を踏み台に…した…バリ。」

踏み抜いた勢いで顔面を床に叩きつけらる。

「グルー…!?」

残りの2人が声を上げる。

「遅い!!」

そのまま一番後ろに居ただわ男の顔面に蹴りを入れる。

「あ、アブ…!?」

ジャン男が振り向きながら叫ぶ。

「これで終わり!」

ジャン男にアッパーカットを喰らわせる。

まあ加減はしたから起き上がるくらいはできるはずだ。

「ぐう…まさか…俺達のフォーメーションが負けるなんて…バリ…」

「あいつ…マジ強え…ジャン…」

「つ!次こそは覚えてろだわ!!」

ふらふらと立ち上がって逃げる3人。

「はあ、あれは何がしたいんだろ?」

「あ…あのう…」

さっつきまで絡まれてた女の子が声をかけてきた。

感じ的には同じ年かちよつと下位かな。

「ん?何ですか?」

「あつありがとうございます…」

お礼を言いながら頭を下げる。

「ああ、別に気にしなくていいですよ。あいつら前にも自分の友人に迷惑かけてたので。」

「わっ私は五反田蘭って言います。何かお礼を…。」

五反田蘭：前に一夏が言ってた友人の妹か？

「別にお礼なんていいですから、あの五反田さんって…」「うおおお
おおおおお！」

いきなり後ろからすごい声が聞こえる。

振り替えると。

「俺の妹になにしてんだあ!!」

「ごふう!!」

赤い髪の男にドロップキックを後ろからくらう。

「蘭！大丈夫か!?俺が来たから安心しろよ！」

着地し、五反田さんの方を向く男。

対する五反田さんは。

「この…馬鹿兄があ!!」

顔を全力で殴った。

「ぶふえ！」

「すみませんでしたあ!!」

「本当にごめんなさいなさい！」

蘭さんが事情を話したあと2人で謝って来た。

「いえいえ、気にしてないので。」

「いや、でもうちの馬鹿兄が思いつき飛び蹴りを…。」

「あれも妹さんを想つての事ですし。」

「本当にすまない!!」

「鍛えてるのでそんなにダメージもないですよ。それより五反田さん
たちに1つ聞いていいかな?」

「な、なんででしょうか?」

「答えられることなら。」

「もしかしてさ、一夏の…織斑一夏の知り合い?」

一夏という単語を聞いた瞬間2人の顔が驚きに変わる。

「えっ!?一夏さん!?!」

「一夏と俺が同い年で友達だけど…。」

「あつ自己紹介してなかったね。俺は天野星夜。俗に言う『2人目』つてやつです。天野でも星夜でも好きに呼んでください。」

「ええ!？」

「おっおまえが!いや、あなたが!？」

「やっぱり2人が一夏の言つてた五反田兄妹か…。」

2人はさつきよりも驚いている。

「一夏が言つてた鈴と付き合つてる猛者!」

「鈴さんの恋人!」

「交際の事実は無い。」

そっちかよ。

確かに先日参戦表明されたけど!

「えっ?でも一夏がそう言つてたぜ…?」

「うん、一夏さんがそう言つてました。」

「俺よりも一夏と付き合いが長いならあれの恋愛に対する鈍感度合いはよくわかつてますよね?」

「…:…:ですよね。」

すぐに2人揃つて首を縦に振る。

「一夏さん、私の事を何て言つてました?」

蘭さんがすぐに切り替えて聞いて来る。

あつこの反応は一夏に惚れてるパターンだな。

「友人の妹。としか言われてないね。後は家が食堂やつてるって事くらいかな。」

「そう…:…:ですか。」

分かりやすく落ち込んだな。

「と、取り敢えず迷惑かけたのはこっちだし、家に来て飯でも食べてかないか?奢らせてくれ!」

弾さんが話を切り替えた。

ここで断るのも気が引けるので五反田食堂でごちそうになった。

肉野菜炒めが旨かった。

「本当に今日はすまなかつた。」

「馬鹿兄がご迷惑掛けました。」

「本当に気にしてないのですよ。」

「ああ、またいつでも来てくれ。一夏にもよろしく。」

「あっありがとうございます。」

「ごちそうさまでした。また来ますね。」

しかし、一夏め……ここでもあれを言いふらしてるとは…。

「帰ったら宿題の残りを片付けるか…。」

8月1日…今日は欧州に行く日だ。

まあほぼ移動に時間を使うけど。

「あれ？星夜。出掛けるのか？」

「荷物が多いわね。遠出？」

「その感じはGEAR関係か？」

荷物を持って部屋を出ると一夏、鈴、箒さんが声をかけてきた。

「ああ、今日から5日程ね。」

「5日間もどこに行くのよ？」

鈴が不思議そうに聞いて来る。

「欧州だよ。」

「欧州、セシリアやラウラが言っていた合同演習とやらか？」

箒さんがこの前の会話を思い出したようだ。

「そう、その運営とかにGEARも関わっててね。特別ゲストだったよ。」

「へえ。じゃあ帰りは皆と一緒にか？」

一夏が訪ねて来る。

「うくん。俺はGEARの専用機で行くから別々だと思うよ。それに皆も他に用事があるかも知れないし。」

「それもそうか。」

「おっと、迎えが来てるから行くね。」

3人と挨拶をして別れる。

今回はGEARの所有する専用飛行機で行く。

一部展示物はGEARジャパンから持っていくため、スタッフも一

緒だ。

「吉良国さん、なんか嬉しそうですね。」

「そう見えるかい？星夜くん。」

同行スタッフの1人である吉良国さんがやたらと嬉しそうだ。

「はい、すごく。」

「いや、星夜くんのお陰でGEAR独自のEOS（イオス）のプロトタイプが完成してね。それをテスターとして数回使ったんだが最高だったよ！」

「ああ、なるほど。そうゆうの好きでしたもんね。」

昔の夢…というより今現在も正義の味方に純粹に憧れる吉良国さん。

目を輝かせながらそのときの感動を語っている。

ちなみにEOSとは分かりやすく言えば誰でも使えるパワードスーツだ。

各国で開発が進んでいるがあまり芳しくないらしい。

30kgもするバッテリーを積んでも1時間も動かないそうだ。

GEARはそれをどうにかして解決したらしい。

主に電童のデータが活きたそうだが。

「でも、いくら電童のデータとか使ってもそんなにすごいのができるイメージが無いんですが。」

「ふっふっふ…星夜くん、電童は元々宇宙服などのデータを元に設計されてるんだよ。型はほぼ流用できるのだ！」

すごいドヤ顔の吉良国さん。

それは知ってますけど。

「いや、それだけじゃ稼働時間とかの問題は…？」

「おっと！それに関してはまだ秘密だ！」

「つまりまだ知らないよ。」

「残念！今回は開発チームの手伝いだからちゃんと知ってるんだ！」

「そうですか…。」

「今回の展示物にそれも入ってるから楽しみにしてくれ。」

「明日の楽しみですか。」

「まあ今日中に設営もするからそのときには見れるよ。」

「うーん、稼働時間の問題を解決する新技術か…なんだらう。」

新しいバッテリーか省エネ型モーターって辺りかな。

「星夜くん、現地までは時間あるし少し寝てたら？」

「そうですね。時差ボケは早めに消したいですし。」

目を閉じて仮眠を取ることにした。

——
目的地のシャルル・ド・ゴール空港に到着した。

空港から欧州合同IS演習の会場に向かう。

「ここでの自分の仕事は…。」

「星夜くんは2日目と3日目に行われるISによるデモンストレーションに参加して貰うよ。」

手元の予定表を確認していると吉良国さんが教えてくれた。

「じゃあ初日は？」

「特別なのは無いから周りを見てきても良いよ。クラスメイトも居るんでしょ？」

「わかりました。デモンストレーションって具体的には？」

「コースを飛んだり、的を撃ったりだよ。3日目は軽めの模擬戦もあるよ。」

「わかりました。後はこのGEARのブースにいれば良いですかね？」

「そうだね。電童を展示させてもらえればそれで良いしね。」

よし、明日は皆に挨拶して出来れば各国のブース見て回るか。

「しかし、結構いろいろあるんですね。」

パンフレットを見ながら言う。

「うん、お祭りみたいなものだからね。出店もあるし、昔の飛行機とか、戦車なんかも置いてあるよ。」

「入場チケットの倍率も凄そうですね。」

「ああ、確か500倍は行くらしいからね。見学ツアーも結構あったみたいだし。」

「じゃあ2、3日目は無様な姿を見せないようにしないと。」

「うん！かつこよく頼むよ。」

話ながらも会場の設営を手伝う。

「大事な展示品は明日の朝ですかね？」

「そうだね。さすがに出したままには出来ないからね。そこにある大型テントに入れて明日の朝の並べるかんじかな。」

「えーと…このコンテナはEOSか…。」

「EOSのコンテナはこっちに頼むよ。」

「わかりました。」

言われた位置までコンテナを動かす。

「EOSは何機持ってきたんですか？」

「今回は4機だよ。その内2機は展示、2機は実演用だよ。」

「へー、じゃあ明日は動いているのが見れるのか。」

「星夜くんも使ってみる？ISとの違いもわかるし。」

「そうですね。そのときはぜひ。」

そんな感じで会場の設営は進んだ。

「欧州合同IS演習…一体どうなることやら…。」

第44話 《欧州合同IS演習》

欧州合同IS演習初日。

俺―天野星夜―はGEARのブースにて準備をしていた。

「よつと！これでラスト！」

「後は開始時間を待つだけだ。」

準備が終わり、ブース内を見渡す。

やはり、あれに目が行くな…。

「しかし、GEAR製EOSの見た目が電童と全く同じなんてビックリですよ。」

「中身は電童と全然違うけどね。」

GEAR製EOS：見た目はそのまま電童だ。

多少の違いはあるがそれこそ誤差の範囲だ。

「ここにあるプロトタイプは簡易型ハイパープラズマドライブが載ってるけどコストがかかるから採用しないんだって、だから腕と足はもう少しスマートになると思うよ。」

「へえ〜。」

展示用のEOSを見る。色は白に明るめの赤。

「この色だと救急車見たいですね。」

「そうだね。人命救助等に使われる予定だからあながち間違っていないかもね。」

「なるほど。」

これが火災現場とかで使われるのか。

「で、これがスペックね。」

名称：GEAR Extended Operation See
ker

略称：GEOS（ゼオス）

主動力：HDDシステム

主装備：HPDシステム（試作機のみ搭載）

他、一部IS用装備を使用可能

装甲材：特殊チタン合金

備考：電子格納技術対応予定

参考稼働可能時間

パワーアシスト有：約2時間

パワーアシスト無：約4・5時間

「HDDシステム？」

「そうさ。これがGEOSの要。これは電童にも関わってくる技術さ。」

HDD：なんの略だろ。

「じゃあ井上さんからの説明を待つだけですな。」

「そうだね。今は専用のトレーラーかコンテナで運んでるけど最終的には電子格納してISみたいに即座に展開、格納できるようにするらしいよ。」

吉良国さんがGEOSの後ろに展示してあるトレーラーとコンテナを指差しながら言う。

「へえ。確かにそれなら救助活動なんかでも使えそうですね。」

「空を飛んだりとかは出来ないけど、生命維持装置のお陰で少しなら海の中でも活動出来るからね。これは良いものだよ。」

そんな風に話していると開催の合図であるチャイムと放送が入った。

「さあ、ついに始まったぞ。ここにはこのGEOSを見に来る人が沢山いるから頑張って対応しないとね。」

「最初は混みそうですし自分もいますね。」

「ああ、頼むよ星夜くん。電童はそのメンテナンスベッドに展開して、展示しておいてね。」

「了解です。」

入り口の方から沢山の人が来るのを見て、パンフレットなどを用意するスタッフと一緒に作業を進めた。

ドイツエリアのとあるブース。

ここにはシュヴァルツエア・レーゲンとその姉妹機シュヴァルツエ

ア・ツヴァイクを中心に様々な展示がされている。

先程まで各企業や政府の偉い人が挨拶に来ていたのでその対応をしていたラウラの姿があった。

「ふう…。見られるだけ…。と言うのもなかなか疲れるものだな。」

「隊長、お疲れ様です。少し休憩でもお取りになられたでしょうか？」

「クラリツサ、私が居なくても大丈夫なのか？」

ラウラが近くの椅子に腰を降ろすと副官のクラリツサが休憩を提案してきた。

「はい、シユヴァルツエア・レーゲンが展示してあればパイロットが不在でも特に問題はないと思われます。先程まで来賓の対応をされていましたし、明日からのデモンストレーション等を考慮すれば本日は可能な限り休憩をとるべきです。」

「なるほど。明日に備えて無駄な疲労は溜め無い方がいいな。」

「それと、先程各ブースを回ってきた隊員の報告によりますとGEARのブースに電童が展示してあったとのことですよ。」

「なに？星夜が来ているのか？」

「姿は確認してないようですが搭乗者本人が来ているのは確かです。」

「そういえばGEARが独自のEOSを作ったと聞いた。それを確認するのもかねて行ってみるか。」

ラウラが立ち上がる。

「では、後の事は我々にお任せください。」

「頼むぞ。定期的に連絡は入れる。何かあれば呼んでくれ。」

「了解。」

ラウラはGEARのブース方面に向かって歩いていく。

「む、もしかすると明日からのデモンストレーションでは星夜もいるのか…。なかなか強敵だな。」

「あつ！おい！ラウラ〜！」

ラウラが歩いていると声をかけられた。

そちらを向くとそこはフランスエリアのデユノア社ブースでシャルロットが手を振っていた。

「シャルロットか、私はこれからGEARのブースに行くところだ。」
「そうなの？ちよつと僕も休み時間だから行こうかな。」

「部下の報告によると星夜が来ているらしい。」

「えっ!? そうなの!？」

「ああ、直接確認はしてないが電童が展示されていたそうさ。」

「なるほど。ちよつと待ってて、すぐに支度するから。」

「ああ、わかった。」

1分もしないうちに出てきたシャルロット。

2人はならんで歩き出す。

「2週間ぶりだけどドイツはどうだった？」

「ああ、以前はただ機械のように訓練を繰り返すだけで人間関係等は最悪だったのだが、今では積極的にコミュニケーションを図って部隊内の雰囲気は良くなった。」

「そ、そうなんだ。」

シャルロットはIS学園に来た頃のラウラを思い出す、確かにあの性格だとギスギスしそうだ。

「臨海学校の時も福音を探すのを手伝ってもらったしな。」

「そういえばそうだったね。後でお礼を言っておかないと。」

「むしろその前にドイツ軍が迷惑をかけている。あれはそのお詫びみたいなものだ。だから大丈夫だぞ。それにあの直後に織斑教か…織斑先生が礼の電話をしたそうさ。」

「こつゆうのは気持ちが大それたよ。」

「そうか。なら後でドイツエリアに来てくれ。隊の者を紹介する。」

「うん。わかったよ。」

「ところでシャルロットもどうなのさ？問題は無かったか？」

「ぼ、僕？特に問題は…無かったよ。ただ、しっかりと父さんと話すのが初めてだったから少し緊張したけど。今では普通に話せるし、僕の知らない母さんの事も色々聞けたし。」

「なるほど。お互い良い方向に進んでいるな。」

「ふふ、そうだね。」

2人が自然と笑顔になる。

「えっと、GEARのブースは…。」

「こつちだな。やはり、注目度が高いのか人も沢山集まつてるな。」

「噂の男性操縦者も居れば当然だよな。」

GEARのブースに近づくとつれ、人が増える。

人の流れに従い、2人は先へ進む。

イギリスエリアのとあるブース。

ここにはブルー・ティアーズとその2号機にあたるサイレント・ゼ
ファイルスが展示されていた。

そこではセシリアが他の専用機持ちと同じように来賓の対応に追
われていた。

しかし、両親が他界してからオルコット家を守ってきたセシリアに
とつてさほど難しいことではなかった。

「お嬢様、お疲れ様です。」

「あら、ありがとう、チエルシー。」

幼なじみであり、専属のメイドであるチエルシーから飲み物を受け
取る。

「お嬢様、この後は休憩時間だそうです。」

「あら、そうですよ、以外と時間が経つのは早いものですわね。折角で
すから後学の為にも色々と見て回りますわ。」

「かしこまりました。そういえばお嬢様、先程興味深い話を聞きました。
」

「なんですか?。」

「お嬢様の想い人である天野様がGEARのブースにいらしているそ
うですよ。」

「ええっ!?それは本当ですか!?!」

思いがけない情報にチエルシーの方を向くセシリア。

「はい、その話を聞き確認に向かいましたが人が多く直接見てはおり
ませんが、専用機である電童が展示されておりました。」

「ありがとう、チエルシー。すぐに向かいますわ。」

セシリアはすぐに手持ちの鏡で自分の顔と髪を確認し、GEARの

ブース方面に向けて歩き出す。

「はい、お伴いたします。」

セシリアの3歩後ろを歩くチエルシー。

「星夜さん、居られるのであれば明日からのデモンストレーション、なおのこと負けられませんわね。」

「そうですね。天野様に良い所を見せられるといいですね。」

ちなみにチエルシーにはセシリアが星夜に惚れたことを速攻で見抜かれた。

どのタイミングかと言うとクラス代表決定戦の後だ。

その日のことをチエルシーに電話で話していたら『惚れましたね？』と見抜かれた。

チエルシー曰くセシリアをずっと見ていたからわかったそうだ。

「やはり、人が多いですわね。」

「GEARは元々注目されていましたが、あの男性操縦者を見れるとなれば当然でしょう。」

GEARのブースの前には人垣が出来ていた。

「どうしましょう。」

「お嬢様、あちらに居られるのはご学友の方では？」

「あら？ラウラさんにシャルロットさん、お二人も星夜さんに会いに？」

チエルシーが指した先にはラウラとシャルロットが居た。

「うむ、部下に電童が展示してあったと聞いてな。」

「僕はそれをラウラに聞いてね。それで来たんだけど…。そちらの方は？」

「お初にお目にかかります。私、セシリアお嬢様にお仕えしております。すメイドのチエルシー・ブランケットです。以後お見知りおきを。お二人の事はお嬢様からお伺いしております。デユノア様とボーデヴィツヒ様ですね。」

「はい、よろしく願います。」

「よろしく頼む。しかし、この状況どうしたものか…。」

4人の視線はGEARブースの方に向けられるが余りにも沢山の

人が居るため様子を伺う事も出来そうにない。

「そうだ、星夜に電話してみようよ。」

シャルロットが携帯をとり出す。

それぞれのI Sは展開状態でブースに展示しているのでコアネットワークを使った連絡は出来ない。

「この状況で星夜は電話に出れるのか？」

「だよね…。」

ラウラの指摘の通り、外でこの状態だ。恐らくブース内は芋を洗うような混雑だろう。

「メールを送っておくか？」

「それがいいと思いますわ。」

ラウラの提案にセシリアが頷く。

「じゃあ、僕が送っておくよ。」

シャルロットが手に持った携帯を操作し、メールを打ち込む。

メールを送信する直前に携帯からエイリアス体のブルが出てきた。

「あつ、ブルだ。今、星夜は忙しいよね？」

シャルロットの問いにブルが動く。

シャルロット達を誘導するように飛ぶ。

「こつちか。」

「裏から入って良いのでしょうか？」

「いいからブルが来たんじゃない？」

「スタッフ用の入り口ですね。」

ついていくとスタッフ用の入り口が見えた。

まさかの大盛況にスタッフ総出で対応しているGEARブース。

元々GEOSの注目度が高い上に俺がいるせいで予定以上の人が来ているようだ。

最初はそこその数だったが俺がいる事が口伝えに広まりこんなに来てしまったようだ。

「はあ、これじゃ外は出れないな。」

速攻で囲まれて終わるな。

「そうだね。まさかこれほどの人が集まるなんて。」

吉良国さんも苦笑している。

「考えてみれば入学した直後の状態をイメージすれば良かった…。」
学園中の生徒が来てたもんな。

「窮屈な思いさせちゃうけど裏で休憩してなよ。なんだったらスタッフ用の入り口から友達呼んでいいよ。」

「いいんですか?。」

「他の所に迷惑をかけるわけにもいかないしね。あの娘達なら問題ないよ。」

「ありがとうございます。ブル、皆を呼んできてもらっていい?。」

この騒ぎだし皆俺がいる事は知ってるだろう。

きつと纏まってそうだし一体で十分だろう。

すぐにスタッフ用の入り口に向かう。

するとセシリアさん、ラウラ、シャル、メイド服の人が歩いてくるのが見えた。

メイド服の人は前にセシリアさんが言ってたチエルシーさんだろうか?。

「やっぱり集まってたんだ。久しぶり、元気そうで良かった。」

「星夜さん、お久しぶりです、ごきげんよう。」

「こちらも特に問題はない。心配なら無用だ。」

「久しぶり、こっちは大変そうだね。」

セシリアさん、ラウラ、シャルが挨拶を返してくれた。

「えーと、あなたは…。」

「はい、お初にお目にかかります、天野様、セシリアお嬢様にお仕えしておりますチエルシー・ブランケットです。以後お見知りおきを。」

丁寧なお辞儀をしながら挨拶をする。

やっぱりこの人がチエルシーさんか。

「はじめまして、天野星夜です。チエルシーさんの事はセシリアさんから聞いてます。皆、こっちに。」

このまま立ち話もあれなので中の休憩用のテントに入ってもらおう。
「いや、見積もりが甘かった…。これほど人が集まるなんて…。」

「ああ、これほど集まっているのは確実に星夜の影響だな。」

「まず、お目にかかる事がないと思つてた男性操縦者が見れるかもつて皆期待してるんだよ。」

「入学した直後もこのような感じでしたわね。」

「皆様、お茶が入りました。」

休憩用のテントで皆と話をしようとテーブルに着いたらチエルシーさんがお茶をいれてくれた。

「あつすみませんチエルシーさん。お客さんにお茶いれて貰つてしまつて。」

「皆様はお嬢様と対等の立場、なら私が御奉仕することはなんの不思議もございません。天野様も私の事は使用人と思つていただいて結構です。」

流星にそこまでは無理だな。

この感じだと絶対に椅子には座らないな。

「流星にそこまではできませんよ。」

「そうですね。天野様にご無礼を承知でひとつ伺いたいのですが、お嬢様は私の事をなんと?」

「チエルシーさんはとても気が回るし、優秀で、姉のような存在だつて。」

「そうですね、ありがとうございます。」

綺麗な笑みを浮かべ、丁寧にお辞儀をするチエルシーさん。

「星夜さん、私達が居ない間、何かございましたか?」

「ずつとチエルシーさんと話していたからか少し不機嫌なセシリアさん。」

「ん。特に変わった事は無いかな、寮がいつもより静かな位だよ。」

「そうですね。」

「あつそういえば、夏休み中に皆で何かやろうつて話、良いのがあつたよ。」

「どんなの?」

「シャルが聞き返してきた。」

「星見町の花火大会がちょうど8月の末にあつてね。その時、近くの

河で昼にバーベキューでもしてさ、そのまま花火を見るのってどう？」

「それはいいな。」

「うん、僕もいいと思う。」

「河で花火を見る。それは風情があつて良さそうですね。」

うん、なかなか好印象だ。

「よし、じゃあそれに関してはそんな感じで準備しておくよ。皆は7月の間にどんなことやつてたか教えてよ。」

「よし、私からやらせてもらおう。」

俺のリックエストにラウラが嬉々としてドイツに帰ってからの事を事細かに話してくれた。

そのままセシリアさん、シャルと話していると。

どこからともなく爆音と衝撃、そしてサイレンの音が響き渡った。

「いきなりなんだ!？」

「クラリツサ！聞こえるか!?状況を知らせろ！何…爆発!？」

「まさか…襲撃!？」

「一体何が目的で!？」

「皆様！大丈夫ですか!？」

いきなりの事態に驚くがそれぞれすぐに携帯などをとり出し状況を確認する。

「星夜くん！大丈夫か!!今、会場内の複数箇所から爆発が!」

外から吉良国さんが駆け込んで来る。

「やっぱり襲撃!」

「皆はすぐにそれぞれのブースに急ぐんだ！ISを置いてきてるよね!？」

吉良国さんの言う通りだ。

俺は同じブース内だが皆は距離がある。その間に何かあつても対応が出来ない。

「ユニコーンとレオはセシリア、バイパーとドラゴンはラウラ、ブルとボアはシャルについて行って!」

俺の携帯の中に待機していたデータウエポンを呼び出し、それぞれ

に指示を出す。

「チエルシーはすぐに避難を！私はブルー・テイアーズを取りに戻りますわ！」

「かしこまりました。お気をつけて。」

「ごめんね、星夜、少し借りるよ！」

「一般入場者が混乱してないか？場合に寄っては障害になりかねん。」
「ラウラちゃん言う通りだ、客がパニックを起こしてとてもじゃないが動けそうに無い、データウエポンを使って飛んだ方がいい。」

テントの外に出ると吉良国さんの言う通り観客達がパニックを起こしていた。

全員が逃げようとしているがどこに逃げればわからずあちこちでぶつかったりしている。

転んだ人を気にかける余裕もなく、蹴ったり踏んだりしてしまっている。

GEARの職員達が頑張って声をかけているが焼け石に水だ。

同じブース内の電童を取りに行くどころか1m進むだけでも困難を極めるだろう。

「皆！気をつけて！頼むぞ！輝刃！」

俺は輝刃を呼び出し、背中に乗る。

「星夜さんもお気をつけて下さいまし！頼みますわよ！ユニコーンさん！レオさん！」

「バイパー！ドラゴン！頼む！」

「ブルー！ボア！行くよ！」

セシリアさんはユニコーンの、ラウラはドラゴンの、シャルはブルーの背中にそれぞれ乗る。

「皆様の〴〵無事をお祈りします。」

「吉良国さん！チエルシーさんをお願いします。」

「わかった！皆も気をつけて！何が何の目的で来てるかわからないからね！」

チエルシーさんと吉良国さんに見送られ、それぞれの方向へ飛ぶ。

輝刃の背から展示台に飛び乗り、素早く電童を装着する。

「一体何が起こってるんだ……。」「
ハイパーセンサーを頼りに周囲の情報を広いながらあちこちから
上がる黒煙を見て、俺は眩いた。」

第45話 《強奪》

欧州合同IS演習会場にて爆発が起きる少し前…。

暗い部屋にて話し合う4人の人影があった。

その内の1人はかつてGEARジャパン本社を襲ったスコールだった。

「M…今回あなたの目標はイギリスのBT型の2号機へサイレント・ゼファイルス」の確保よ。」

「わかっている。」

「A…あなたはGEARのEOS…〈GEOS〉の確保よ…。最低でも1機、可能なら他にも持つてきなさい。」

「ああ。」

「これに成功すればこちらの戦力が一気に増えるわ。特にM、それはそのままあなたにあげるから頑張りなさい。」

「では、行ってくる。」

MとAと呼ばれた人物は部屋から出る。

「おい、あのガキ2匹だけで大丈夫なのかよ？スコール。」

「あら？あなた、あの子たちが心配なの？」

「まさか、あいつ等がドジってこっちに火の粉が飛ばねえか？」

「大丈夫よ。もし失敗してもアレが起爆するだけよ。」

「それもそうか。しかし、Aのヤツ、ISをぶっ壊して帰ってくるとはな。」

「まあ、あの坊や達が相手なら仕方ないかも知れないわね。仮にも一度私を負かしたのだから…。」

「スコールが負けたつてのが未だに信じられねえけどな。」

「うふふ、私も人間よ、たまにはミスをすることだってあるわ。オータム、準備はいいわね？私達も行くわよ。」

「ああ、早く暴れたくてウズウズしてるんだ。」

スコール、そしてオータムと呼ばれた人物も部屋から出ていった。

その少し後にこの部屋は跡形もなく吹き飛ぶのであった。

電童を纏って空に上がった俺―天野星夜―は周りを見渡す。

「爆発…爆弾か。きつと目を引き付けるための罠だよな。」

視界内のいくつかが上がっている黒煙を見て考える。

パツと見た感じ爆発した場所はそれぞれ違う、距離も遠い。

当然火がついている以上は消火しなければならぬが犯人はそれが狙いだらう。

「この騒ぎに乗じて火事場泥棒か？」

どのブースもそれぞれの国、企業の最先端技術が置いてある。

それはISの用な大型の物だけではない、細かな部品レベルの物もあるからそれを持ち出せるだけでもどれ程の損害になるかわからない。

「兎に角、怪しい動きをしてるヤツはいないか…。」

リーダー等を確認しながら空へ飛ぶ。今のところISや無人機等の襲撃は無さそうだ。

「なら、パニックの收拾が先だな。」

『星夜くん！そっちは大丈夫かい!?』

「吉良国さん、こっちは大丈夫です。IS等の敵影もありません！」

『わかった。さっきの爆発にジャマーか何かを仕込んでた見たいで少し通信の状態が悪い、いざとなったら自己判断で切り抜けてくれ！とありあえずは道の邪魔をしている物をどかして避難経路の確保を手伝ってくれ。』

「了解！」

ブースの近くの道で爆発の影響か夜間用の照明とかが倒れているので除去するのを手伝う為にそちらへ向かう。

「こちらラウラ・ボーデヴィツヒ、データウエポンで移動中だ、そちらの状況は？」

ラウラは冷静に部下たちに指示を出しながらブースへ進んでいた。

『こちらクラリッサ・ハルフォーフ、先程の爆発以降、特に動きはありません。私はISを装備し現在、隊長のシユヴァルツェア・レーゲンの護衛をしています。他の隊員は周辺の避難誘導に当たらせていま

す。』

「了解した、私はドラゴンフレア、バイパーウィップと共に戻る、間違えて撃つなよ。」

『了解っ！』

(この混乱に乗じて何をやる気だ…？時間を掛ければその分落ち着きを取り戻すし、重要な物の運びだしもされてしまっただろうに…。)

最初の爆発以外何も動きが無い敵を不気味に思うラウラだった。

「すまない、頼むぞドラゴン、バイパー。」

自分を運び、守るデータウエポン達に声をかけるラウラは自らの左目にある眼帯を取り、ヴォーダン・オージエを露にし敵に備える。

「何が来ようと打ち破るだけだ…。」

視界に入ったドイツエリアの愛機、シュヴァルツエア・レーゲンを睨み、ラウラは呟く。

「ブル、ボア、もう少しだからお願いね。」

シャルロットはブースに急ぎながらも周りにもしつかりと目を向け、敵からの襲撃に備えた。

空を飛んでいる為、移動は問題ないが周りからもよく見えるから狙撃される可能性もある。

「デュノア社のブースから盗るものは無いと思いたいけど…。」

デュノア社は実権を今は亡き本妻が握っていた為大した成果は上がってなかったし、最近も建て直しが優先だったからそこまで開発とかは無いので実は大した展示をしていない。

「だからって油断して痛い目は見たくないよね。」

デュノア社のブースが視界に入る。

「よし、見えてきた…。」

デュノア社のブースにそのまま飛び込む。

「シャルロット！お前のリヴァイブでうちのブースは最後だ！」

「わかりました！」

近くにいたスタッフに言われ、すぐさま愛機、ラファール・リヴァイブ・カスタムIIを装備する。

「皆さんも早く避難してください。」

「ああ！シャルロットも気を付けろよ！」

デュノア社のスタッフに見送られ空へ飛ぶ。

「こうなると…GEARブースに行つて星夜に合流した方がいいかな？」

ハイパーセンサーを使つて周囲を調べながらシャルロットは呟く。

「くっ！イギリスのブースが一番遠いなんて！」

ユニコーンの背中にて独り言を言うセシリア。

「ブルー・ティアーズはともかく、サイレント・ゼフィルスはまだ完成したばかりだと言うのに…。」

そう、ブルー・ティアーズの2号機であるサイレント・ゼフィルスは最近になって完成したばかりでまだパイロットが未登録なのだ。

「まさかとは思いますが急ぎませんと。」

セシリアは胸の中に広がるざわめきを無理矢理押さえる。

「よし、見えてきましたわ。」

ようやく見えてきたイギリスのブース。

そこでは調度サイレント・ゼフィルスの運び出す準備をしていた。

「セシリア嬢！ブルー・ティアーズは問題ありません。ゼフィルスを運び出すので周りへの警戒をお願いします！」

「かしこまりましたわ！」

すぐさまブルー・ティアーズを装備し、飛び上がるセシリア。

ハイパーセンサーに入ってくる大量の情報を処理する。

次の瞬間、近くの柱が爆発し、スタッフたちの方へ倒れそうになる。

「させませんわ！」

咄嗟にセシリアが倒れそうになる柱の下に潜り込み支える。

「くっ…このままでは…。皆さん！早く！」

野外ライブ等で使われるような沢山の鉄パイプを組み上げて作られた柱は大きく近くに人が居るため、下手に下ろすことが出来ない。

この時、サイレント・ゼフィルスを運んでいたスタッフ達は当然ながら視線が全て柱に向かっていた。

「ぐあつ!?!」

「ぐふえつ!?!」

いきなりスタツフが2人、殴り飛ばされた。

「えっ?」

セシリアは柱を支えたまま、センサーを使い意識をそちらに向ける。

そこには覆面を着けた少女が立っていた。

「頂くぞ…。」

覆面の少女は残りのスタツフも格闘で圧倒する。

「や、やらせませんわ!」

柱を支えたままではあるがセシリアはブルー・ティアーズからビツトを射出し、覆面の少女を取り囲む。

ユニコーンとレオも威嚇する。

「これ以上狼藉を働くなら撃ちますわよ!?!」

「ふん、この程度で止まると?」

威嚇としてビツトの銃口には軽くエネルギーが溜まっているがそれを笑って返す。

「これでも撃てるのか?」

近くにいたスタツフを持ち上げ盾にする。

人質を傷つけずに撃ち抜くことはまず無理だろう。

仮に覆面の少女だけを撃てたとしても人質の至近距離をレーザーが通り、少なくとも火傷を負わせてしまうだろう。

「なっ!?!卑怯な…。」

「甘い…。」

セシリアが戸惑っている間にサイレント・ゼフィルスに覆面の少女は近づき、装備する。

「なぜ!?!サイレント・ゼフィルスにはロックがあるはずなのに!?!」

「この程度のセキュリティで最高機密のISを守れると思っっているのか…傑作だな。」

サイレント・ゼフィルスには現在、パイロットがいないのでセキュリティをかけて簡単には使えないようにされていた。

だが、目の前にいる少女はロック等なく、まるでそれが専用機であるように装備した。

「では、頂いていく。」

「お待ちなさい！」

サイレント・ゼフィルスが空へとんだ瞬間を狙いビットからレーザーを発射する。

「見え透いた手だ……」

一瞬後ろに向かつて瞬時加速をするサイレント・ゼフィルス。

さも平然と高等技術の瞬時加速を後ろに向かつて行った。

そのまま飛び込んできたユニコーン、レオも取り出したナイフで巧みに捌く。

「えっ!? まだファースト・シフト前の機体で!?!」

あまりの事のにセシリアは驚く。

「代表候補生もこの程度か……つまらん。」

サイレント・ゼフィルスはセシリアに向け、ライフルを放った。

しかし、その攻撃がセシリアに当たることはなく、セシリアが支えている柱の上部に当たる。

「柱が……ですが! やらせませんわ!」

先端の方が下に落下しそうになるがそれを全てのビットで破壊し、被害の無い小さな破片にする。

サイレント・ゼフィルスはビットを射出し、ユニコーンとレオに牽制として数発放つ、いくつかは下にいる人たちに当たるコースだった為ユニコーンはファイヤーウォールを展開して守る。

その隙にサイレント・ゼフィルスは飛んで行ってしまった。

「サイレント・ゼフィルスを逃がすわけには……。」

周りの人が居なくなつたのを確認し、支えていた柱を下ろす。

「素直に飛んでいったとは思えません。」

セシリアはユニコーンとレオを連れてサイレント・ゼフィルスが向かった方へ飛ぶ。

「兎に角! GEOS関係の物を優先的に運び出して!」

今回のイベントでGEARJAPANのリーダーとして来ている吉良国が指示を出していた。

「GEOSの1号機と2号機はそのままコンテナを閉じて、3号機と4号機は速やかにトレーラーに載せて！」

展示用に出されていたGEOSは展示台を兼ねていたコンテナを閉じてすぐにキャリアに載せれば運び出せるが実演用のGEOSが先程までアイドリング状態で待機していたのだ。

「これかあ…GEOSってやつは。」

「だっ誰だ！」

吉良国は後ろからいきなりきた拳を避ける。

「くっ…ここまで接近されるなんて！」

吉良国は突然現れた人物を睨む。

顔は覆面で隠しているが体格や声からして男であることはわかる。

「これでも喰らうとけ！」

そう言って謎の男は何かを投げる。

次の瞬間、辺りが光りと爆音に包まれる。

フラッシュグレネードで視覚と聴覚を封じられ、瞬く間にスタッフ達が殴り飛ばされる。

「じゃあ、貰っていくぜ。」

「ま、まて…。」

男はそのままGEOSに乗り込もうとする。

「やらせるか！」

そこに電童が飛び込んでくる。

「ちっ！電童か！でもなあ！お前の相手はあいつだ！」

男が言うと同時に電童に向かい複数のレーザーが飛んでくる。

「試運転に付き合ってもらうぞ！電童！」

「ブルー・ティアーズ!?いや、違う！2号機のサイレント・ゼフィールスカ！」

突如現れた敵に電童が身構える間に男はGEOSを装備する。

「行かせるか！輝刃！」

輝刃がGEOSに向かい飛び込む。

「けっ！お前にやられるかよ！」

GEOSは輝刃の飛び込みに合わせて大きく後ろへジャンプする。

「ほらよー！」

着地した先に倒れていたGEARスタッフを掴み上げ、輝刃に向けて思いつきり投げつける。

輝刃は飛んできたスタッフの衝撃をうまく逃がしながら背中受
け止める。

「ここは欲張っても無駄か…あばよ！」

GEOSは一目散に走り出す。

「逃がしませんわ!!」

GEOSの目の前にブルー・ティアーズのレーザーが降り注ぐ。

「けっ！もう来やがったか！」

「サイレント・ゼフィルスだけでなくGEOSまで…許しませんわ！」

セシリアがユニコーンとレオと共にGEOSに対して構える。

「許さねえならなんだってんだ!?!」

「倒させて頂きますわ！」

「セシリアさん！GEOSを頼む！こっちはゼフィルスを止める！」

「お任せくださいませ！」

「適当に遊んだら帰るぞ！M！」

「了解だ！A！」

それぞれが構え、飛び込む。

「クラリツサ、私はGEARのブースへ向かう、やはりあそこが一番怪
しい。」

「了解です、こちらでも避難と処理が終わり次第すぐに向かいます。」

「すまない、頼むぞ。」

部下達にこの場をまかせ、ラウラはドイツエリアのブースから飛び
立つ。

『星夜！セシリア！ラウラ！誰でもいいから聞こえる!?!』

ラウラの耳にシャルロットからの通信が聞こえる。

敵の通信妨害のせい或少しノイズが混じっている。

「シャルロットか!?どうした!？」

『今、ISに襲われてて、救援頼める!？』

「わかった!すぐに向かう!」

コアネットワークを使い、シャルロットの位置を確認して真っ直ぐに向かう。

「シャルロットが救援を呼ぶなど…どれ程の敵だ?」

シャルロットは強い、優れた戦術眼、高速切替等の操縦技術、さらに今はブルとボアと言った強力なデータウエポンまでいる、そのシャルロットが戦闘中に通信をしてまで救援を求めた。

「急がねば…バイパードライブ!インストール!」

バイパーウィップを装備し加速して、シャルロットの元へ急ぐ。

「見えた!シャルロット!援護する!」

シャルロットと空中戦をしている敵に向かって肩のリボルバーカノンを発射する。

元々威嚇として放った物なので当たることを期待はしていない。

「ラウラ!気をつけて!」

「シャルロットが救援を呼ぶなど並みでないのはわかる!」

「へっ!追加か!いいぜ…遊んでやるよ!」

相手のISは8つの特徴的な装甲脚を付けた機体。

それぞれの脚は独立稼働し、先端に見える銃口から弾幕を張ることが出来るのが予測できる。

「成る程、下の人々を守りながらとなるとなかなか骨が折れるな。」

「うん、それに本人も技量がすごく高い、国家代表クラスだよ…。」

「ほれ、ペット共々掛かってこい!このオータム様が駆るアラクネに勝てるならなあ!!」

顔を隠してはいるが敵の名前はわかった。

「こいつの目的はどうあれ、とつとと倒す!」

「ブルドライブ!インストール!ボアとドラゴンは牽制と下の人たちに被害が出ないようにお願い!」

ラウラとシャルロットはオータムと名乗った敵に向かって飛び込む。

「いくら手数が多かろうと！」

ラウラはイリユージュオンフラツシユを使い多数の分身を作り出す。今、敵から見たら大量のシュヴァルツェア・レーゲンが囲んでいるように見えるだろう。

「これならば防げまい！」

ワイヤーブレードとバイパーを射出し、攻撃する。

「うおっ!?これは驚いたぜ！」

当たる直前に全ての装甲脚を操り、直撃コースの物だけを的確に弾く。

「今度はこつちだ！」

その隙を狙い、シャルロットが後ろからオートプレツシャーを使い引き寄せる。

「なっ！なんだあ!？」

何も無いところでISが引つ張られる。

まず体験したことが無いだろう状態だ。

「喰らえ！」

シャルロットは敵の背中に向かい、ブルのヒートホーンを叩きつける。

「この程度！見え見えなんだよ！」

振り向きながら回転蹴りを入れ、シャルロットの右腕を弾く。

さらにはシャルロットに向いている4本の装甲脚から弾丸が発射される。

「あぶない！」

咄嗟にシールドを構え、防ぐ。

「ほお、お前、なかなか器用だな！」

「反撃する余裕まであるなんて…。」

ラウラとシャルロットは今、目の前にいる敵の技量に純粋に驚きを隠せずにいた。

初見でイリユージュオンフラツシユからのワイヤーブレードの乱撃を直撃コースのみとはいえ防ぎきり、オートプレツシャーで体勢を崩したはずなのにそれを意に介せず反撃までしてのけたのだ。

「データウエポンのアビリティを初見で対応しきった…。」

「しかもこの人…絶対本気じゃない…。」

「当然だろ！私は遊びに来てんだからな！流石にデータウエポンにはビックリしたがなかなか楽しめるな！」

あつはつはつと楽しそうに笑うオータム。

「ほらほら！もつと楽しもうぜ！」

そう言うや否や全ての装甲脚から弾丸をバラ蒔く。

「はあっ!!」

ラウラがバイパーを振り回し防ぐ。

「当たれっ！」

シャルロットはオータムの下に回り込み、アサルトライフルを乱射する。

「当たるかよ！」

ひらりと回避するオータム。

「ここじゃあ思うように戦えない…。」

「シャルロット、通常兵器展示エリアに上手く誘い込むぞ。あそこなら人的被害は少ないはずだ。」

ラウラに言われ、シャルロットは地図を確認する。

確かにあそこなら元々戦車や戦闘機などを置くために広いスペースを取っている。

置いてある戦車や戦闘機は壊れるかも知れないが人が傷付くよりいいだろう。

「そうだね。」

2人はそれぞれ武器を構えて、オータムを誘導するように戦い始める。

できる限り、オータムより高い位置をとるようにし、射撃も下に行かないようにする。

ドラゴンやボアも火炎とガトリングで援護する。

「ほらほら！そんな及び腰じゃあ私は倒せないぜ!」

「はあっ！」

ラウラが格闘戦をしかけ押し込むたと思えばシャルロットが射撃

で牽制し、引き込む。

オータムの性格か格闘戦を多様する傾向にあるので誘導は思っていたよりスムーズに出来た。

(よし、通常兵器展示エリアまであと少しだ。)

(通常兵器展示エリアに出たらA I Cで止める。それで決めるぞ。)

(了解。)

2人はプライベートチャンネルで会話をする。

I Sのセンサーを使い目的地までの距離を確認しつつ戦いを続ける。

「こんのおおお!」

ラウラのワイヤーブレードがオータムの装甲脚に絡み付く。

そのままワイヤーを振り回し、オータムを通常兵器展示エリアに放り投げる。

「なかなかやるじゃねえか!」

吹き飛ばすオータムはすぐさま体勢を建て直し、ラウラに向けて全ての装甲脚から弾丸を放つ。

「当たるものか!」

もう周りは気にしなくていいのでバイパーの力で加速し避ける。

さらにはそのまま分身で囲み、全方位からA I Cを発動し拘束する。

「ぐっ!これがA I C…厄介だな。」

「シャルロット!」

「これで終わりだ!」

A I Cの拘束を解こうともがくオータム、ラウラは逃がすまいと全神経を集中させる。

シャルロットは左腕のシールドをパージし、グレースケールを展開、オータムの腹に押し当てる。

「ここで盾殺しかよ…。確かにこれなら終わるなあ…。」

オータムの眩きを無視してグレースケールのトリガーを引こうとするシャルロット。

しかし次の瞬間。

「ぐああっ！」

「うわあっ！」

シャルロット、ラウラ、ドラゴン、ボアが爆炎に包まれた。

「サイレント・ゼフィルスもGEOSも返してもらおうぞ！」

「出来るものならやってみろ！」

「徹底的に叩かせて頂きますわ！」

「返り討ちにしてやるよ！」

サイレント・ゼフィルスとGEOSの強奪…その第一段階は成功しているだろう。

このまま逃げられる訳には行かない。

サイレント・ゼフィルスの懐に飛び込む。

「旋風！回転拳！」

「BT型だから格闘が出来ないと思ったたら大間違いだ。」

こちらが拳を振るよりも早く身を屈め、腕の下に潜り込むサイレント・ゼフィルス。

「貫った！」

逆手に持ったナイフをこちらの腹に当てようとする。

「まだだっ！」

咄嗟に膝を上げて弾く。

「ビットを使う暇を与えるものか！」

そのまま拳と脚を使い、貼り付く。

この状態ならビットは使えないはず。

「ビットを併用出来ないか？なめられたものだな。」

サイレント・ゼフィルスのパイロット—Mと呼ばれていた少女は咳く。

「なにっ!？」

次の瞬間、俺は目を疑った。

Mは俺と格闘戦を繰り広げながら6つのビットを制御しているのだ。

イギリスで一番ビットに対する適性が高いセシリアさんだっ

こまでは出来ない。

「思考の並列処理、長く続かないはず！」

「果たしてそうかな？」

しかし、このMって奴こちらの格闘を軽く防ぎやがる。

やっぱりこんなところからISを盗もうとするくらいだから並みではないと思っただが。

輝刃たちデータウエポンはサイレント・ゼフィルスのビットで牽制されて援護にこれそうにない。

こいつの動き、本当に初めてなのか？まるで長年使った専用機ようだぞ!?

「電童：倒せないが負けるほどではないな」

「その予想を覆してやる！」

嫌な予感しかしなが兎に角こいつを逃がさないようにしないと。

「当たりなさい！」

「それで当たるかよ！そんなガタガタの照準でな！」

GEOSはセシリアが放ったレーザーをギリギリで回避する。

GEOSにもセンサー類は載っているがISのハイパーセンサー程ではない、それでもGEOSを奪った男は完全に見切ってギリギリの所を避けた。

相手の言う通り今、セシリアはサイレント・ゼフィルスの見せているビットの動きを見て動揺していてそれがビットの動きを鈍らせている。

「こいつでどうだ!？」

GEOSは右腕のドライブユニットを稼働させる。

「喰らえっ！」

飛翔烈風波を最小のエネルギーで発動し、単発の空気弾として放つ。

「くっ!？」

セシリアも最小限の動きで避け、すぐにライフルの銃口を向ける。

GEOSは当然ながら飛行能力の無いパワードスーツだ。

空を飛んでいる以上は攻撃手段は限られるのでやられることは無い、そうセシリアは考えていた。

「この調子ならすぐにエネルギーも尽きるはず、それまで耐えれば…。」

GEOSのエネルギーが尽きればあの機動力も無くなるのでそこを突いて破壊するなり捕獲するなりすればいい、そのあとは星夜と一緒にサイレント・ゼフィルスの追撃をして今回は万事解決。

(そう、落ち着いてやれば…。)

例え、今初めて使ったはずの少女にビットの制御能力で劣っていたとしても焦ってはいけなないと自分に言い聞かせるセシリア。

「そろそろ時間か…行くぞ！M！」

「了解した！A！」

GEOSがサイレント・ゼフィルスに呼び掛ける。

「逃げる気か！」

「逃がしませんわ！」

即座にそれぞれの相手に飛び込む。

「やれ！ラゴウ！」

サイレント・ゼフィルスの言葉に2人は身構える。

／グオオオオンツ！／

サイレント・ゼフィルスから臨海学校の際、苦戦させられたラゴウが飛び出してきた。

「くっ！」

「危ない！」

猛スピードで襲いかかって来た爪と牙を何とか避ける。

「ラゴウドライブ！インストール！」

その隙を狙いサイレント・ゼフィルスがラゴウを装備する。

凰牙が装備した時とは違い、手足には爪が、ラゴウの頭部は両肩に付いている。

さらにはビットにも小さなラゴウの翼のような物まで付いている。

「ラゴウのデストラクションウィルス…再び喰らって見るか？」

ビットにチャージされる光が先程までは蒼白い光だったのに対し

今は禍禍しい黒い色になっていた。

「まさかビットにあの力が！」

「ユニコーン！」

星夜は咄嗟にユニコーンを装備し、ファイヤーウォールを展開する。

「喰らえ！」

ビットから黒い光放たれる。

セシリアやデータウエポンも星夜の後ろに回ったので全てをファイヤーウォールで防げたがその隙にGEOSを掴んだサイレント・ゼフィルスが飛んで行く。

「流石にGEOSを抱えたままじゃ遅いか！」

「星夜さん！追いかけてみましょう！」

まだ見えるサイレント・ゼフィルス達の背を追いかける2人。

その先にある通常兵器展示エリアに何があるか知らぬまま…。

第46話《罨》

俺―天野星夜―はセシリアさんと一緒に逃げるサイレント・ゼフィルスとGEOSを追っていた。

「なんかこの感じはわざと速度落としてる?」

「カタログスペック的にもまだまだ余裕がありますし、GEOSの搭乗者を考慮して飛んでももう少し速いはずですわ。」

やはり、サイレント・ゼフィルスはギリギリ俺達が追える速度で飛んでいる。

つまり、この先に何かが待ち構えているわけだ。

「この先には通常兵器展示エリアがありますから、何かを仕掛けてくるのならそこが一番怪しいですわね。」

「なるほど、気を付けて進もう。」

飛行機や戦車を展示するためのスペースなら色々とできるかもしれない。

「ん?この反応は…星夜さん!あそこに!」

「ラウラ!シャル!」

通常兵器展示エリアに倒れているラウラとシャル。

サイレント・ゼフィルスとGEOSの追撃を諦め、2人の元へ。

「ラウラ!シャル!大丈夫か!」

「周りには何も無いようですわね。」

2人に声をかける。

セシリアさんは周りを警戒する。

「う…せ…星夜か。」

「ごめ…ん。油断した…。」

2人が何とか立ち上がる。

「一体どうしたんだ?2人がこんなにボロボロになるなんて。」

「それほどの使い手が居たのですか?」

周囲を警戒しながら話を聞く。

「最初はオータムと名乗る人物と戦って居たのだが…。」

「2人でもギリギリでね、ラウラがAICで拘束するまでは良かった

「んだけど…。」

「前に星夜とセシリアから聞いたスコールという人物が潜んでいて強襲されてな。それでこの様だ。」

「あつ、データウエポン達はデータ化してしまつてあるから安心して。」

「スコールツ!？」

セシリアさんと同時に声をあげる。

かつて1人でGEAR本社を襲撃した人物がここに居たのか。

そう言えばあの時ももう1人IS使いが居たつて聞いたな。

そいつがそのオータムつてやつか。

「でも、それならどうして2人のISをこのままにしたんだ？」

「確かに…：奴らの実力なら気絶している我々からISを奪える筈なのだが…。」

「何か他に目的が…?」

「兎に角、気を付けて、まだ潜んでるかも。」

全員で周囲を警戒する。

「あら?久しぶりね。春に本社でやりあつたとき以来じゃない。」

「スコール…。」

スコールはISをステルスモードにしていたらしい。

戦闘機の陰から出てきた。

「わざわざ私の事を覚えていてくれたのね?嬉しいわあ。」

「一度戦つた相手に同じ手を喰らうわけにも行かないしね。」

「あの時と同じと思わないで下さいませ。」

俺とセシリアさんで構える。

「残念だけど、今日の残りはこれのテストだけだから私は帰るわ。出来る女は残業なんてしないのよね。」

スコールはそう言うのと電子格納されていた何かを召喚する。

「あ、あれは…。」

「クラス対抗戦の時の…。」

「無人量産機とやらか…。」

「でも、たつた1機?」

細い体に細い手足、それに対して大きな頭。

それはかつて、クラス対抗戦の時に現れた無人量産機だった。

「さあ、ソルジャーの力しつかりと味わいなさい。すぐにやられたらテストにならないからね。」

ソルジャーと呼ばれた無人機はそのまま近くにあつた戦闘機に近づく。

「えっ!？」

「なっ!？」

「うそっ!？」

「なにっ!？」

俺達4人は驚きを隠せなかった。

「あら？良いリアクションね。」

笑うスコール。

驚きもするだろう：ソルジャーとやらは戦闘機に溶け込んだのだ。

「見なさい、これがソルジャーの力：無機物と一体化し！力とする！」

＼グオオオオオンツ！／

ソルジャーが溶け込んだ戦闘機は徐々に形を変え、怪獣のような見た目になる。

所々に元になった戦闘機の面影が残っているが機首の部分を頭として、両手見たいな感じで更に2つの頭が生えてきた。

「なんだよ、あれ…。」

「う、美しくありませんわね。」

「まさかこんな技術があるとは…いや、奇術か？」

「はは、まるでゴルドラックだ…。」

目の前で変化を続ける戦闘機怪獣に俺達は立ち尽くしてしまっていた。

＼ゴガアアア!!／

「日本では変身とかしてる間は手を出さないうって聞いたけど本当みたいね。」

「いや、下手に手を出して変化に巻き込まれても嫌だし…?」

スコールの言葉に対して素で返してしまった。

「ここまで出来れば上出来ね。私はこれで帰るけど、これは置いていくわ。」

「逃がすか!」

逃げようとするスコールを追おうとするが当然、戦闘機怪獣がそれを許すはずもなく…。

「星夜っ!上だ!」

「危なっ!」

「てっ!ミサイルウ!」

「口から吐きましたわ!」

いきなり3つの口からミサイルを吐き出して来た。

それも1つの口から4本程のミサイルが。

「このお!」

「落ちろ!」

「せいっ!」

「はっ!」

即座に全員で射撃武器を使いミサイルを迎撃。

「しかし、IS使って怪獣退治か…。」

「ねえ星夜、GEARで五体合体のロボットとかは作ってないの?」

「確か、GEARなら有りそうですね…。」

「敵サイズ約18m:サイズ比10倍か…。」

明らかに元になった戦闘機より大きくなっているがそんなものはここでは重要ではない。

「ラウラとシャルは大丈夫?機体のダメージが多そうだけど。」

「大丈夫だ、各機能に問題は無い。」

「後方からの援護なら出来るよ。」

「前衛が星夜さんだけに任せることになりますわね。」

ラウラとシャルはそれぞれ機体のステータスを確認する。

「ユニコーン、レオ、輝刃も居るから大丈夫だよ。」

データウエポン達と一緒に前に乗り出す。

「輝刃ドライブ!インストール!」

「レオ、ハイパースキャンお願いね。」

「ユニコーンさん、私よりもシャルロットさんとラウラさんの護衛をお願いしますわね。」

「皆、来るぞ！散開っ!!」

戦闘機怪獣は今度は腹部から機関銃を乱射する。

戦闘機に載っている武装はISが普段使う武装よりも大きい、当たればどれ程のダメージが入るかわからない。

「でかいから遅いと言う訳ではないのだな。」

「むしろあいつの1歩はこっちの10歩分はあるぞ。」

「距離感が掴みにくいね。」

「最大射程も向こうが上のようなですわね。」

回避しながら観察し、レオの解析されたデータも合わせて作戦を練る。

「喰らえ！」

機関銃でラウラ狙いで撃っている隙を突いて背後から輝刃ブレイカーで斬りつける。

「ちっ！さすがに固いな！」

ダメージが無いわけではないが一回斬った位では大したダメージにはならないようだ。

戦闘機怪獣は左右の首を腕のように振るう。

とつさに下がろうとしたが相手のリーチが長すぎて当たってしまった。

「うおっと！」

「星夜さん！大丈夫ですか!?!」

「これだけ大きいとAICでは止められんぞ。」

「ブルとボアは使えないし…。」

皆もそれぞれ射撃武器を使い攻撃しているが効果は薄いようだ。

元になった戦闘機の防御力は関係ないようだな。

「仕方ない、皆！あいつの体勢を崩して！その隙にファイナルアタックで倒す！」

「あまり時間も掛けていたらん…仕方ないか。」

「かしこまりましたわ！」

「星夜！頼むよ！」

3人が足元へ射撃武器を撃ち込みバランスを崩させる。

その間に四肢のドライブユニットが高速回転し、輝刃にエネルギーを送る。

「輝刃ブレイカー！ファイナルアタック！」

輝刃ブレイカーを横一文字で振り払う。

「はあああ！」

巨大なエネルギーの刃が敵を切り裂く寸前、戦闘機怪獣は空へ飛んだ。

「なっ！」

「あの巨体で!？」

「空を飛ぶだと!？」

まずい、ファイナルアタックで電童のエネルギーは0だ。

セシリアさんもビットで結構消費してるはずだし、ラウラとシャルも連戦であまり残って無いだろう。

「ちくしょう！まさか飛べるとは！」

実弾武装を呼び出して戦闘機怪獣を撃つ。

「元になったのはISと戦闘機だから変では無いだろうけどさ！」

「まだ会場の方には人が居る！行かせるわけには！」

「意外と速いのですわね！」

今、戦闘機怪獣はこちらに向かって攻撃をしているがこのまま会場側に行ってしまったらどんな惨劇になるか考えたくもない。

「くうっ！弾が……！」

リボルバーカノンの弾が切れたらしくラウラが舌打ちをする。

「これ使って！」

シャルがさすがにマシンガンを投げて渡す。

「シャルロット。すまない。」

「セシリアと星夜は大丈夫!？」

「こっちはまだ余裕はある。セシリアさんは？」

「最低出力でミサイルの迎撃に専念しますわ。」

データウエポン達も隙を突いて攻撃をしてくれているがあまり削

れてる感じが無い。

「てか、あいつの弾は尽きないのかよ!？」

「レオの解析でも出てこないなんて。」

「まさかその場で作ってる訳でもあるまい。」

「弾が無くなってもあの巨体は十分に驚異ですが。」

戦闘機怪獣もこちらに射撃の効果が薄いと感じたのか格闘戦に切り替えてきた。

「食われてたまるか!」

「その口に叩き込んでやる!」

俺とラウラを狙い口を大きく開けて噛もうとしてくる。

ラウラは瞬時加速で離脱し、俺はバズーカを口に向かって撃ち込む。

／＼グガアアアッ!／

「やったね星夜!」

「まだだ。怯んだだけだ。」

「ですが、効かないわけでは無いみたいですよ。」

「そう少しすれば援軍も来るはずだ、それまで耐えれば良い。」

空中でのたうつような動きをする飛行機怪獣。

その視線がこちらではなく会場の方へ向く。

「こいつ! 目標を替えた!?!」

「そもそもこいつは暴れるのが目的かもしれん!」

「さつきまでは追撃させないようにするために僕たちを狙ってたのか

も!」

「兎も角! これ以上あちらに行かせるわけには!」

戦闘機怪獣の気を引くために全員で攻撃する。

『隊長! 聞こえますか!?! クラリッサ・ハルフオーフ、こちらになにやら巨大な影が来ているようですが敵ですか?』

「クラリッサ! こちらラウラ・ボーデヴィツヒ! そいつは敵だ! 火力支援を要請する!」

『了解! 火力支援を行います。』

戦闘機怪獣の向かう方向、つまりは会場のほうからラウラのシユ

ヴアルツエア・レーゲンに良く似たISを纏った人がやって来た。

ラウラが前に言っていたドイツ軍の副官か、ありがたい。

「ダメージは入ってるだろうが…なかなか倒れそうに無いな。」

「防御も耐久も規格外すぎる。」

「これ、量産機なんだよね?」

「シャルロットさん、そこは今だけでも忘れた方が良いと思いますわ。」

何とか戦闘機怪獣を足止めしているがシャルが言った言葉は本当に今だけは忘れたい。

こんなのが5体も来るとか絶望的過ぎる。

体当たりとかを何とか避けてはいるが長丁場であることが祟ったのかラウラが相手の格闘を避けきれず吹き飛ばされる。

「ガハッ!」

「ラウラ!」

「ラウラさん!」

「隊長!」

「大丈夫か!」

「だ、大丈夫だ…それよりも敵を…。」

ラウラはフラフラと立ち上がる。

「戦線が大分下がったね。」

マップを確認しながらシャルが言う。

「ハルフォーフさん、会場の避難はどんな感じでしたか?」

「自力で歩ける人は粗方終わったが最初のパニックや爆発による飛散物による怪我人の搬送が終わりきっていない。」

「やはり、この怪獣をここから先に行かせるわけには行けませんわね。」

「ここであいつを倒すにはファイナルアタック級の破壊力は欲しい。」

「ハルフォーフさんにファイナルアタックをやってもらうしかないか?」

「私がアタッカーなのは構わんが当たる保証は無いぞ?データは隊長から見せてもらったが流石に初使用では…。」

「欲を言えば2人でやりたいね。1人だとさつきみたいに避けられるかも。」

「だが他は全員スツカラカンだぞ。どうする?」

「拘束しようにもブルさんもボアさんもダメージがありますし。」

さつきのファイナルアタックはわざわざ避けた事を考えるとあれは防ぎきれないと判断しての回避だったはず。

それ以外の攻撃はほとんど避けてないし。

頭部に攻撃を集中させるがミサイルを吐き出したり、巨大な口の噛みつきがあるため、思うようにダメージが入れられない。

「くう、私もそろそろエネルギーが…。」

「僕も弾数があやしいな…。」

「俺の方もだ。」

「ダメージが蓄積しているのは確かなのだが。」

「最初に比べれば動きが緩慢になっているが…。」

ハルフオーフさんを除き、全員の弾やエネルギーの底が見え始める。

全員が焦りを感じていた。

／ガオオオオオオ!／

戦闘機怪獣は今までに無い加速でこちらに突っ込んで来た。

突然の突撃で全員回避は出来たがバランスを崩してしまった。

その隙に戦闘機怪獣は3つの口からミサイルを会場の方向へ発射する。

「しまった!」

「いかん!」

「ここからだと言撃が!」

「間に合え!」

シャルが残り少ないエネルギーで瞬時加速を使いミサイル群に接近、アサルトライフルとショットガンで迎撃する。

「ふう、何とか間に合っ…!」

その隙を逃さずシャルを叩く飛行機怪獣、シャルは地面に叩きつけられた。

「シャル！」

「あれは絶対防御が発動したか！」

「私が行く！」

「援護しますわ！」

絶対防御が発動したらしく、気を失ったシャル、近くに居たラウラがすぐに抱えあげる。

「ラウラはこのまま撤退して！」

「そうだな…。これ以上は厳しいな。後を頼む！」

シャルを抱え後退するラウラ。

「どうにかして流れを変えないと…。」

「このままでは押し負けるぞ。」

「しかし、どうすれば…。」

セシリアさん、ハルフオーフさんで何とか戦っている状態だ。

このままだと押し負けるだろう。

『星夜くん！聞こえるか!？』

吉良国さんからの通信だ。

「はい！こちら星夜です！」

『もうすぐそちらに着く、僕が合図を出したらHDDシステムを起動してくれ!』

「HDD…これか！」

ステータスを確認し、HDDの項目を見つける。

わざわざこのタイミングで言うことは逆転に繋がるシステムってことか!?

リーダーにはGEOSの反応が近づいて来ているのが見える。

『よし、見えたぞ！良いかい？星夜くん。』

「こっちはOKです！」

吉良国さんのGEOSはこちらに向けて長方形の物を向ける。

『レーザー照準…よし!』

「システム起動！」

システムを起動する。

『ハイパーデンドーデンチ！シユートツ!!』

吉良国さんが叫ぶ。

GEOSの構えた物から射出されたもの…それは…。

「「デカイ電池!」」

3人で声を揃えて驚いてしまった。

射出された電池にタイミング合わせて電童のバックパックが動く。バックパックのカバーが後ろにスライドし、内部から2つのデカイ電池が上に向かって弾き出される。

そのままバックパックの右側からやって来た電池がレーザーガイドに従い、挿入される。

電池を固定し、バックパックが閉じる。

「エネルギーが…回復した!」

「ええっ!」

「IS用の巨大バッテリーだったのか!」

『星夜くん!驚くのは後で!今はあいつを!』

おっとその通りだ。

「セシリアさん!ハルフオーフさん!」

「私が敵を抑えますわ!」

「そちらに合わせる!」

セシリアさんはユニコーン、ハルフオーフさんはレオを装備する。

「残りのエネルギー全部使いますわ!」

可能な限りエネルギーをユニコーンに送り、巨大なファイヤーウォールを展開し、戦闘機怪獣を抑え込むセシリアさん。

「今ですわ!」

「輝刃ブレイカー!」

「レオサークル!」

「ファイナルアタック!」

赤い壁と地面に挟まる形の戦闘機怪獣にレオから放たれたエネルギー光輪と輝刃のエネルギー刃が当たる。

「ゴアアアアアアオオオオオ!」

巨体に相応しい大きな爆発を起こし、戦闘機怪獣は消えた…。
「とりあえず、一件落着かな…?」

「目標は沈黙したが…。」

「結局、逃げられてしまいましたね…。」
亡国機業に負けた感じだな…これは。」

第47話 《それぞれの夏休み》

8月3日：欧州合同IS演習2日目に当たる今日だが昨日の襲撃事件の為、当然ながら残りの予定は全て中止となった。

俺―天野星夜―達は会場に一番近いGEARフランスのビルで一夜を過ごした。

何かあった際に守りやすい様にIS学園生で纏められている。

「ふああ。昨日は大変だったな…ん？」

朝、起きるとベットに覚えの無い膨らみがある。

「なんだ？」

とりあえずめくってみる。

「んん：朝か：おはよう、星夜。」

「おはよう、なんでラウラが俺のベットで寝てるんだ？」

ラウラだった。

「もう忘れたのか？昨日はあんな襲撃があったばかりだ、星夜が襲われないよう私が護衛として一緒にいるのは当然だろう？」

「いや、気持ちはありがたいがそこまでする必要は無いんじゃないか？」

「むう、そうなのか？何時襲われるかわからないと言うのに…。」

「まあ、心配してくれてありがとな。」

ラウラを撫でる。

「ふふ、悪くない…。」

ラウラ幸せそうだな。

「さて、そろそろセシリアさんやシャルも起きるだろうし朝御飯にしようか？」

「ああ、そうしよう。」

ガバツと起き上がるラウラ。

「ってなんで裸なんだよ!？」

「ん？」

キョトンとするラウラ。

「なにかおかしいか？」

「とりあえず隠して！パジャマとかは無いのか!？」

「ああ、特に必要性を感じないからな、起きたらそのまま服を着ればいだけだからな、余計な手間を省ける。」

「そ、そうか…。」

ラウラの中では正論なのかもしれないが…。

「星夜さんおはようござい…ま…す…。」

「星夜くおはよう。ラウラがこっちに来て…るよね。」

セシリアさんとシャルが部屋に入ってきた。

「お、おはよう…2人とも…。」

「おはよう、シャルロット、セシリア。」

シャルはこの状況が予想できていたのか苦笑しているだけだ。

「これは…一体どうゆう事でしょうか?」

「いや、起きたらラウラが居てね…?」

「星夜を守る為に近くに居ただけだぞ。」

「セシリア、ラウラは寝るときにパジャマを着ないのはいつもの事だよ。」

やっぱりか…。

「と、兎に角ラウラは服を着ようか。俺も着替えたいし…。」

「ああ、そうだな。」

そのままラウラがベットから出る。

俺は視界を自分の荷物の入った鞆に向ける。

「皆が居ると着替えられないのですが?」

「ああ!そうですわね!申し訳ございません!」

「そ、そうだね!じゃあ食堂で待つてるからね!?!ほら、ラウラの服はあっちの部屋でしょ!?!行くよ!」

「あ、ああそんなに手を引っ張らなくても平気だぞ?シャルロット…。」

バタバタと音を立てながら部屋から出ていった。

「まさかラウラがあんな格好で寝てるなんてな…。」

夜、寝る前にしっかりと鍵は掛けたはずなんだが…。

「まさか…ピッキングか何かで開けたのか…?」

ラウラはこれから大丈夫なのか不安を抱きながら着替えて食堂に向かうのだった。

4人でテーブルを囲みながら朝食。

「俺は今日、GEARが用意した飛行機で帰るらしいけど皆は？」

「僕はそのまま星夜に付いていけつてき。フランス政府としては噂の男性操縦者に何かあったときに責任を追及されたくないんだろうね。」

「私もだ、ドイツも同じ考えだな。元々合同演習の後は帰るだけだから問題は無いがな。」

「私もですわね。荷物も午前中にはこちらに着くと思いますわ。」

今回は事件の規模が大きかったからこちらにかかる負担は少ない様だ。

その代わり結構な量の書類を近日中に提出しなければならぬが。

「しかし、あれに驚いたな。」

「まさか既存兵器を取り込むとはな。」

「どう見ても元の兵器や量産機の性能を超えてたよね。」

「あれは一体何でしたの？ラウラ？」

全員で考えるが当然ながら答えが出るはずもなく。

「わからないことを気にするより解ることを気にするか。」

「どうしたの？ラウラ？」

ラウラの発言にシャルが反応する。

「星夜、昨日GEOSが使ったあの武装は何なのだ？」

「ああ、あのデカイ電池だよな？映像を見せてもらったけど僕も気になるな。」

「気にならないと言ったら嘘になりますわね。」

3人がこちらを見る。

「一応資料は貰ったけど、俺も昨日知ったから概要しか説明出来ないからね？」

3人は頷く。

「あれの名前はそのままだけどハイパーデンドーデンチ略してH

DDだね。」

待機状態の電童から仮想ディスプレイを展開し、資料を映す。

「電童やGEOSのバックパックにはこれを2本入れることが出来るんだ。電池をそのまま交換するから即座にエネルギーを回復することが出来る。」

「この電池はどれ程のエネルギーを蓄えているのだ？」

ラウラが仮想ディスプレイを見ながら聞いてくる。

「1本で通常のIS1機分はあるみたいだよ？」

「ええ!? そんなにつ!?」

「常々電童が大量のエネルギーを使う技を多用されてると思いましたがこのような秘密があったとは。」

シャルは驚き、セシリアさんは納得したような顔をする。

「ただ、電池の交換でもシールドエネルギーは回復出来ないから要注意だね。」

「それだけでも充分だと思うよ。」

「一夏さんがこれを知ったら付けたがりそうですね。」

「そうだな。瞬時加速と荷電粒子砲のエネルギー問題が一気に解決できる。ただ、あの白式が改造を受け入れるかの問題だな。」

「GEOSもこれを使ってるから強力なパワーアシストと長い稼働時間の両立が出来るんだ。」

「そつかく。昨日はミサイルみたいに発射してたけどバックパックの中に直接展開したら駄目なの?」

シャルが当然の疑問を口にする。

「バックパックの中に直接出そうとすると僅かな誤差も許されないからね。外から入れるしか無いんだよ。」

「なるほど、戦闘中は激しく動くしな、仮にバックパック内に直接展開し、失敗するとどうなるか計算はでているのか?」

「ただ内部機構が壊れるだけなら御の字、高確率で電池のエネルギーが暴発する。」

「それは非常に危険ですわね。」

「パイロットの俺も危ないし周囲にどれだけの被害がでるかも分から

ない。」

「それなら仕方無いね。」

「まあ、電池に関してはこれくらいかな。現状は電童とGEOS専用の装備だし。」

「ありがとう、参考になる。」

「今度の訓練で一夏達の目の前でやってみようよ。きっと驚くよ。」

「その場合はしっかりとした連携が必要ですよ。」

そのまま皆でどう電池を交換するのか等を軽く話ながら朝食を食べた。

「吉良国さん、あとお願いします。」

「ああ、任せてくれ、こう言うのは大人の仕事だ。」

「僕たちも乗せてもらってありがとうございます。」

「各国から頼まれてるのもあるけど、目的地は一緒なんだ、気にしないでいいよ。」

「世話になる。クラリツサ、後はたのむぞ。」

「はっ、隊長もお気をつけて。」

「チエルシー、屋敷をお願いしますわね。」

「お任せください。」

空港まで来てくれた人たちと挨拶してから飛行機に乗り込む。

吉良国さん達一部のスタッフは今回の事件の後処理があるためしばらくはGEARフランスに居なければならぬ。

「やっぱりニュースでもデカデカと扱ってたな。」

「世界でもこれだけ規模の大きいIS関係の催物は少ないからな。」

「自然とどの国も目が向くよね。」

「そこを襲撃したのですから、次はどこ何が狙われるか予想が付きませんもの。」

今朝、テレビを付けたらどのチャンネルも昨日の襲撃に関するニュースをやっていた。

「トップクラスのセキュリティを持つはずのISを持っていかれている。どこも警戒するのは当然だろう。」

「一体どうやってセキュリティを解除したんだろう…。」

「スタッフ達もセキュリティを確認してから運び出しを始めたと言っていたのですが…。」

「高度なセキュリティを簡単に突破する方法か。」

「昨日から何度か話になるISの強奪、これは自分もやられる可能性がある。があるので深刻だ。」

「一番簡単なのは内部協力者を作り、セキュリティを解除させるか、自分のデータを前もって登録させる事だな。」

「今回の展示前にサイレント・ゼフィルスのコアは初期化しております、その方法ですとイベント中にデータの登録をすることになりますわ。」

「ラウラの仮定にセシリアさんが答える。」

「ん、そもそもセキュリティが無かったなんてのは無いしなあ…。」

「それだっ！星夜！それだよ！」

「俺の呟きにシャルが反応する。」

「ど、どう言うことだ？シャルロット？」

「きつとその時はサイレント・ゼフィルスにセキュリティはなかったんだよ！」

「え？でもスタッフ達が全員しつかりと確認したと…。」

「星夜、セシリア、サイレント・ゼフィルスを奪った犯人はラゴウを連れていたんだよね？」

「ああ、サイレント・ゼフィルスからラゴウが…そうか！ラゴウのウイルスか！」

「そう！あのラゴウのウイルスならただのセキュリティシステム何て一瞬で壊せるんじゃないかな？」

「確かにそれなら頷けるな。」

「シャルの予想に全員が頷く。」

「しかし、そうなると防ぐ手段はあるのか？」

「具体的な解決策が思い浮かばない…。」

「出来ることは…自分の専用機を信頼できる人以外には触らせない位でしようか？」

相手がデータウエポンだところもやりにくいとは…。

「こう言うのは専門の人に任せるしかないのか…。」

「個人で出来る事は少ないからな。セシリアが言ったように不用意に触らせなければ大丈夫だろう。」

「そうだね。そうだ、みんなは宿題終わった?」

シャルが暗くなってきた雰囲気壊すため少し明るく聞いてくる。

「シャル、安心しろ日本に7月の間に終わらせたよ。本当は自由研究を今回のイベントで少しやろうとしてた位だがまあ、念のためやっておいた予備の方を提出しよう。」

「私も一通り終わっているな。問題集等が少しだけ残っているが寝る前にやれば今日にも終わる程度だ。」

「私も宿題でしたら直ぐに終わらせましたわ。問題集に関しては見直しも終わっております。」

「よかった。皆終わってるなら心置きなく遊んだり出来るね。」

さすがにIS学園に入学するような奴が9月1日の朝まで宿題やることは無いだろう…：銀河じゃないんだし。

「シャル的には一夏とデートしたいんだろ?」

「一夏さんの宿題が終わっていないようなら手伝って差し上げればその間は2人きりになれるのでは?」

「そ、そそそ、そんなことは無いからね!?!」

俺とセシリアさんが言うのとシャルは顔を真っ赤にして慌てる。

「実際、一夏の奴何カ所か解らないくって泣きついて来たから一度見てやったら?」

「そ、そうだね。困ってるなら助けて上げないとね?」

その日は空港に着いた後、学園に戻って織斑先生に簡単に報告と挨拶をした。

——
後日。

「鈴、おはよう。」

「おはよう、星夜。」

朝の走り込み中に鈴に会った。

「夏休みだつてのにこんな朝早くからやらなくてもいいんじゃない？」

鈴がドリンクを差し出してくる。

「自分で決めた量のトレーニング位はしっかりやらないとな。サンキュ。」

ドリンクを受け取りつつ答える。

「一夏も少しは星夜を見習って欲しいわ。」

「やり方は人それぞれだろ。朝からどうした？何か俺に用があるんだろ？」

わざわざ来たのだから何かあるはず。

「ねえ、明日って予定ある？」

「明日ね…ちよつと待って。」

鈴に言われ、予定を確認する。

「特には無いな。」

「そ、そう。なら…。」

鈴は2枚のチケットを取り出す。

「これさ、一緒に…行かない？」

「えーと…。へウォーター・ワールド」の入場無料券？」

確か今年出来たばかりの場所だったな。

「そ、たまたま2枚手に入ったから2人で行かない？」

つまり、プールデートのお誘い。

「ああ、わかった。朝から行く感じでいいのかな？」

「うん、ありがと。9時に駅で待ち合わせね。」

約束をすると鈴は軽やかな足取りで歩いていった。

「さて、残りを片付けるか。」

残りのトレーニングメニューを片付けた。

翌日。

鈴と一緒にウォーターワールドに向かう。

「ここ結構デカイな。」

「そりゃあこの辺に作るんならレゾナンスからの客とか見込んでるん

じゃない？」

それぞれ更衣室に向かい着替えて中へ。

おお、中も豪華だなく。

ビーチをイメージしたプールや海賊船？見たいなアスレチック的な物とかある。

「さて、どこから向かうか？」

「スライダーとかは順番待ちが面倒だし、最初は普通の奴でいいんじゃない？」

2人で話ながら準備運動してプールへ。

軽く泳いでいると。

『水上ペア障害物レース！参加受付は12時までです。参加ご希望の方はフロントまでお越しください。』

ん？なんかイベントやってるのか。

よく見ると近くの柱にポスターが貼ってある。

「今言ってたのはこれの事かしら？」

鈴も気づいたようで2人でポスターを見る。

「参加条件はペアで水着着用。」

「コース上の障害物を上手く避けて水に落ちずにゴールすればOK、落ちたらスタートからやり直し。」

「妨害有り。当然武器など持ち込み不可。」

「ペア旅行券等、豪華商品有ります。」

2人でポスターに書いてある事を声に出して読む。

「おっ！誰かと思えば星夜じゃねえか!？」

後ろからやたらと元気な声が聞こえる。

「銀河：久しぶり、家族で来てるのか？」

「残念！北斗とエリスの3人だ！」

銀河が元気よくこちらの質問に答える。

「なあ、星夜の隣にいるのは彼女か？」

銀河は鈴を指差して聞いてくる。

「あたしは凰鈴音、中国代表候補生。まだ彼女じゃないわよ？あたしの事は鈴ってよんでね。」

「へへっよろしくな鈴！俺は出雲銀河だ！所で星夜達はそれに出るのか？」

「これにか？」

「さっき俺とエリスでエントリーしてきだんだ！星夜がいるなら盛り上がると思つてよ！」

銀河とエリスのコンビか…。

エリスも昔は逆上がりも出来ない位だったけど銀河と張り合つてる内に出来るようになったんだよなあ…。

「鈴、どうする？」

「ん、別にどつちでも…。」

あまり乗り気では無いようだ。

「ちよつと銀河く！どこ行つてんのよつ！あら、星夜じゃない。」

鈴とどうするか話していると銀河を追いかけて赤髪の女の子：エリスがやって来た。

エリス・ウイラメット：彼女は小学生の頃にアメリカから転校してきた奴だ。

勝ち気で負けず嫌いな所があり、当時はよく銀河と喧嘩してたな。

祖父が日本人のクォーターでその人に日本語を習って居たそうだ。

余談だが銀河に惚れてる。

「おつエリス久しぶりだな。」

「久しぶり、元気みたいね。その娘は彼女？」

「それ、銀河と同じ事言つてるぞ。」

「あたしは鈴、凰鈴音。」

「私はエリス・ウイラメット、星夜とは小学生の頃からの付き合いよ。」

エリスと握手する鈴。

「折角だしよ、星夜達もあれ、参加しようぜ？」

「考えておくよ。」

「参加するなら最大の敵ね、絶対負けないから！行くわよ、銀河。」

「じゃあな！星夜後でなく！」

エリスが銀河を引っ張っていく。

「ペア旅行券貰つてもな。」

「こう言う奴のって大抵日程決まってるのよね…。」
2人で参加するか話していると。

「あら〜!?そこにいるのは星夜くんじゃない〜?」

「え?」

後ろから声を掛けてきたのは楯無先輩だった。

「なんで…楯無先輩がここに…?」

「私だけじゃないわよく。簪ちゃん、星夜くん見つけたわよく。」

楯無先輩が声をあげる。

「ええっ!?聞いてないよ!」

簪さんが驚きながらもこっちに来た。

本音さんと虚先輩も居る。

「ぐぬぬ…折角2人で来たのに…。」

鈴が小さい声で文句を言っていた。

「き、奇遇ですね〜。」

この人の場合どこかで聞いてた可能性が否定できないが。

「ソウネーグウゼンヨー」

露骨な棒読み、知ってて来たな。

「お姉ちゃん!知ってて来たでしょ!」

簪さんが楯無先輩に聞く。

「簪ちゃん、鈴ちゃんに星夜くんを独り占めされていいの?」

「そ、それは…。されたくないけど…。」

「ならいいじゃない。」

「じゃ、あたしたちはこれで…。」

鈴が俺の手を引いてこの場から離れようとする。

「ちよつと待ったあああ!」

楯無先輩が鈴が引く逆の腕に絡み付くように引っ付く。

色々当たるからやめてくれっ!

絶対狙ってるけど!

「ねえねえ星夜くん、おねーさん達ともイイコトしましょうよ〜♪」

「何言ってるの!?!星夜はあたしと来てるの!離れなさいよ!」

負けじと鈴も身体全体を使い俺を引っ張る。

これ、男としては幸せだけどさあ…。

「じゃあ、こうしましょ？あの障害物レースで決めない？」

楯無先輩はポスターを指差して続ける。

「鈴ちゃん、星夜くん、私と簪ちゃん、参加して、勝ったら私と簪ちゃんも混ぜてもらおうよ。」

「じゃあ、あたし達が勝ったら去ってくれるのね？」

「そう。分かりやいでしょ？」

「やってやろうじゃん。」

「早速受付に行かないとね〜♪」

なんかトントントン拍子で決まってく…。

「あまのんも大変だね〜。」

「天野くん、頑張ってください。」

「はい、やるだけやります。」

布仏姉妹の優しい言葉…。

受付に向かい、俺と鈴ペア、更識姉妹のペアでそれぞれエントリー。

「やるからには全力でやらないとな。」

「星夜、楯無先輩は絶対あんたに色仕掛けしてくるから気を付けなさいよ。」

「あの人ならやるな…。」

内容が内容なだけに転んだフリをして色々と押し当たりして来そうだ。

「やられたいな、とか思ってる？」

すごい表情でこちらを見る鈴。

「こんな大衆前でやられたくない…。」

「つまり、物影ならOKって事よね!？」

いつのまにか隣に居る楯無先輩。

「お断りします。虚先輩、どうにかありません？」

「お嬢様、あまりやり過ぎますとまた姉妹喧嘩になりますよ？」

「えっ?？」

虚先輩に言われ、簪さんの方を見る楯無先輩。

「やっぱり…男の人は胸なのかな…。」

「大丈夫よ簪、あれとかが異常なだけよ、あたし達が普通だわ…。」
角のほうでいじける簪と鈴。

「簪ちゃんく！大丈夫よ！簪ちゃんはこれからだから！」

「戦う前から内部崩壊始まってますね。」

簪さんを励まそうとする楯無先輩。

「開始は13時30分からだからそれまでに昼飯食べておくかな。
鈴、行こうぜ？」

「うん…そうね。」

鈴と一緒に昼飯を食べるため、フードコートに向かう。

「折角だから一緒に食べましょうよ。」

「楯無先輩、引っ付かないで下さい。」

「当ててるのよ！これで反応しないなんて…まさか星夜くんってホ
…。」

「違います！」

後ろから引っ付いて胸を押し当てて来る楯無先輩を引き剥がす。

この人の水着、布面積が少ないからすごい柔らかいのが伝わって
るので理性に対するダメージがデカイ。

「星夜くんもおつきい方が良いのかな…。」

「ぐう…。あんなにはいらないけどやっぱりもう少し
……。」

鈴と簪さんが何か言ってる。

「楯無先輩、そう言うのは彼氏を作ってから存分にやってください！」

「ふふ…慌てる星夜くん見るの楽しい。」

楯無先輩に弄られながらフードコートに向かい皆で飯を食べた。

『さあ！遂にこれが決勝戦！激戦を勝ち残った選手達の入場です！』
司会の男が声をあげる。

周りの観客から歓声があがる。

この障害物レース、元々は下心丸出しの企画で水着の女性が動き回
り色々と揺れるのを楽しみたいという企画だったらしい。

だが、予想に反して参加者に猛者が多く、純粹に水上番のSASU

KEの様になっていた。

『まずはエントリーN^o. 4！パワー＆ブレイン！並の罫ではこのふたりは止められない！出雲銀河＆エリス・ウィラメットペア！』

スタートラインに銀河とエリスが並ぶ。

『次はエントリーN^o. 10！現代のくの一姉妹!?スピードはどのペアにも負けません！更識楯無&更識簪ペア！』

楯無先輩と簪さんが銀河達の隣に立つ。

『続いてエントリーN^o. 11！小細工無用！正面突破！勢いが一番あるのはこのペアだ！天野星夜&凰鈴音ペア！』

俺と鈴でスタートラインに立つ。

『最後はエントリーN^o. 18！テクニック！華麗な技で我々を魅了する！篠ノ之箒&シャルロット・デュノアペア！』

最後に入場したのは何故かここにいて参加していた箒さんとシャルだった。

予選の待ち時間に待機室で会ったので話を聞いたら…

シャルがここのチケットを購入して、一夏を誘ったら直前になって急用が出来たそう。

それだけならまだ良かったがよりにもよって一夏はそのチケットをシャルになにも言わずに箒さんに渡した。

渡された箒さんも一夏に誘われたと思ってきてみたら一夏の代わりという事実を知る。

人から貰った物を勝手に渡すとかどう言う神経してんだ？

普通は急用が出来た時点でシャルに連絡取れよ…。

電話が通じなくてもメールとかさ…。

どうせ箒さんにも「ここに行かないか？」とか言葉足らずだったのだろう。

「で、この商品を手に入れて一夏と2人で旅行に行きたい。と…。」

「そうだ。この勝負、負けられん！」

「皆には悪いけど、勝たせてもらうよ。」

この2人から発せられる気は怒りによるものか…。

「この面子だ、簡単には勝てないな。」

「あたしと星夜なら平気よ！」

「負ける気は当然ない、全力で行くぞー！」

『では！決勝戦！位置について…スタートオ!!』

スタートの合図と同時に全員が走り出さなかった。

『おっとお!!各ペア開始と同時に妨害だあ!』

全員がそれぞれ自分の隣に居るペアに対して牽制をしたのだ。

「この面子じゃあこうなるよな！シャル！」

「誰か一人くらいはそのまま走ると思ったけどー！」

「シャルロット！星夜を頼む！私は先に行く！」

蹴りをこちらに向かつて放ったシャルと箒さん。

全員がやりあつてる間に走り抜けようと箒さんは下がり、駆け出す。

『どのペアも相方を残し走り出した!』

足止めを目的としたファーストコンタクトはほんの数秒で終わり、

エリス、簪さん、鈴、箒さんが全力で走り出す。

俺、銀河、シャル、楯無先輩はそれぞれ牽制しながら動く。

『前方、ダッシュ組は箒選手、簪選手、鈴音選手、エリス選手の順で動いています！しかし！この障害物は二人でないと抜けられない！どうするのか!!』

そう、本来はペアでの参加が前提で作られた障害物達だったが。

『おおっとー！本当はそれぞれ支え合って渡る丸太橋を全員が軽やかに！丸太が沈む前に駆けていく!』

それはあくまで一般人の基準、専用機持ちは訓練の量が違う。

銀河とエリスに関しても並みではないためそれに食い付く。

一つ目の障害物は全員が苦もなくクリア。

『五つある障害物！その一つ目がまるで無かったかのように終わってしまった〜！現在のトップは簪選手だ〜!』

流星に多少の減速が合った中、全く速度を落とさずに更識姉妹が駆け抜ける。

「流星に速い！」

「私と簪ちゃんをなめないでよね！」

後続の先頭に立つ楯無先輩が速度を上げる。

『さて！第二の障害物！滝登り！勢い良く流れる滝！その中をロープに掴まり登っていきます！』

正面にはスロープ状の滝がある。

そこには5本のロープが下がっている。

水の勢いが登ろうとする人を押し返す。

更に水のせいでビニール製のロープも滑って登りにくい。

先行しているチームが苦戦しているうちに全員が追い付く。

「これは妨害の余裕がないな。」

しっかりとロープを握り、滝の中を少しずつ上がる。

「銀河！そのままそこで止まって！」

「えっ！ここでか!？」

「そう！そのまま！」

エリスが追い付いた銀河を先に登らせていたがまん中辺りで止める。

「なんかやるなら早くしろよなっ！」

「すぐに終わるわよっ！しっかりと掴まってなさいよ！」

エリスは距離をとり、助走をつけると思いつきり飛んだ。

『おっとおっ！エリス選手は銀河選手を足場に上まで飛んだ！』

銀河をまん中で止まらせてその肩を足場に一気に上に飛んだエリス。

そのまま滝の上上がり、銀河を引っ張り上げる。

「じゃ！お先に！」

「星夜！あばよ！」

怪盗の如く捨て台詞を言い2人は走る。

「鈴！」

「物まねってのはシヤクだけど！」

鈴と俺は即座に同じ作戦を決行。

鈴が俺を踏み台に一気に飛ぶ。

「くっ！あの作戦は我々では！」

「どっちが足場になっても安定はしないね。」

「まだ追い付けるわ！簪ちゃん！」

「うん、負けない！」

4人の声を後ろに三つ目の障害物を目指す。

『さあ！早くも三つ目の障害物です！ヌルヌル一本橋！この橋はただ渡るだけなら簡単だが！当然他からの妨害があるから油断できない！』

長さ3m、幅5cmほどの板の上にはローションの様なものが撒かれており、良く滑る様になっていた。

橋の前では銀河が構えて待っていた。

「へへっ！ここで全員止めちまえば俺たちの優勝だぜ！」

「なら、すぐにお前を叩き落としてエリスも落とす！」

「覚悟しなさい！」

拳を握り、銀河に殴りかかる。

「当たるかよー！」

「甘い！」

一歩後ろに下がり、拳を避ける銀河。

直後に鈴がスライディングしながら足元を狙う。

「うわあつと!？」

「落ちろっ！」

すぐに跳び跳ねて何とか避けた銀河をそのままプールへ落とす。

「残念だったな、銀河やり直しだ。」

「あたしと星夜に敵うわけ無いじゃない。」

「すぐに追い付いてやるからな！」

スタートに向かう銀河を横目に鈴は一本橋を渡り始める。

「うう、ヌメヌメするう〜…。」

「ゆっくり進めよ〜。」

板が揺れないよう押さえる。

摺り足で確実に進んだ鈴。

「む、次が来たか…。」

俺が渡り始めようとするやと後続が追い付いてきた。

「星夜！こつちに飛んで！あたしが引つ張る！」

「っ！わかった！頼むぞ！」

距離をとり、思いつき助走をつけて飛ぶ。

伸ばした手を鈴が掴み、飛んできた勢いを殺さずに対岸から引つ張る。

「あんた重い！」

「背もあるし、筋肉ついてるからな！」

そのまま後続を引き離してエリスを追いかける。

『次は第四の障害！泥プールの中に隠された鍵を見つけ、2ヶ所にある鍵穴に同時に差しこみ開けなければならぬ！』

先には四つに分けられた道があり、上にはN.O. が書かれている。

つまりはそれぞれ別々に泥プールが用意されてるのだろう。

「鍵をさがすだけね！」

「泥だから手の感触だけで探すのか。」

2人でしゃがみ、泥の中に手を入れて探る。

プールといっても小さい子が使うようなビニールプールみたいなものだ。

「いくらエリスが先に来て鍵を見つけても銀河が来なければ開けられないな。」

「他のやつらも近いから速攻で見つけるわよ。」

なかなか見つからない…。

「これか！」

「あった！」

2人で同時に鍵を見つけそれを掴み持ち上げる。

「うえっ!？」

鈴が体勢を崩し、こちらに倒れてきた。

そのまま顔が泥に入る。

どうやら見つけた鍵が同じ物だったようだ。

探すのに夢中で同じ辺りを探していることに気がつかなかった。

「だ、大丈夫か!？」

「ぺっ!!大丈夫よ!とつとともう一つ見つけるわよ!」

顔全体が泥まみれの鈴に言われてすぐに探す。

「よし！あった。」

「これで行けるわね！」

2人で鍵を開け、扉を開ける。

『鈴選手、星夜選手！鍵を見つけて扉を開けた！これで3ペア目です！』

鍵探しに時間をかけてしまったらしい、前を見ると更識姉妹とシヤル、箒ペアが最後の島で戦っている。

「最後の障害は強力な水鉄砲か…。」

「あのスイッチを押してる間は止まる見たいね。」

だからこそ、あそこで4人は戦ってるのだろう。

落ち着いてコースを見渡す。

最後の島から横に出た道を通って中央の島に行くんだよな。

中央の島はステージが組まれていて高い所にある。

天井から吊るされた飾りが多数。

「おい、鈴。」

「なに？星夜。」

「あそこにゴールが—」

「いや、流石にあそこまでは飛べないわよ。」

上を見上げながら鈴が俺の言葉を遮る。

「違う、天井から下がってる飾りがあるだろ？俺を飛び台にしてあれに掴まってターザンロープ見たいにいけないかな」

「なるほど、それは盲点だったわ。あの高さなら星夜に押し出してもらえば行けるわね。」

俺は肩に手の平を上にして置く、その手に鈴が乗る。

『おっとお！鈴選手が星夜選手に乗った！これは何をするのか！それをさせまいと追い付いてきた銀河選手が妨害しようとしています！』

「行くぞー！鈴！」

「ええー！」

「はあっ！」

銀河が来る前に 腕を思いっきり伸ばし発射台の如く鈴を投げる。

鈴はそのまま腕を伸ばし近くの飾りを掴むとその勢いでターザン

の如くゴールの島へ飛ぶ。

『まさかの大胆ショートカットオ！鈴選手そのままゴールまで飛び移れるかあ!』

鈴が島の縁に掴まる。

「よし…これで！」

鈴が声を上げる。

そのまま登ろうとした、次の瞬間。

島全体が揺れた。

「えっ!？」

「鈴っ！」

本来は想定されていない力が加わったせいかわが島が徐々に倒れてきたのだ。

鈴は手を離してしまいそのまま落ちる。

「きゃあああっ！」

「うわああ!!」

「逃げろお！」

バツシャーンツ!!と大きな物を水に叩きつけた音と大量の水飛沫。

『まさかの太ハプニングだあ〜！ゴールの崩壊に巻き込まれた選手は無事なのかあっ!』

「よっこいしよ！」

「危機一髪ね。」

俺と鈴はISを展開し、身を守った。

「しかし…これは無効試合かな？」

「そうね…。」

『おおっとお！あの2人はISを使って身を守ったようです！と、言うことは彼が噂の男性操縦者だったのかあ!!』

司会の声が響く、まさかここでISを見れると思っていなかった人達が気がつくところらにカメラを向けていた。

「他の皆は無事みたいだな。」

「そうみたいね。」

ハイパーセンサーで参加してた皆の無事を確認する。

安全のためとは言え機体を展開したままなのは良くないので足場に近付いててから2人同時に解除する。

「これってさっきの勝負はどうなるんだ？」

「さあ？もう疲れたから帰りたいけど。」

2人で話しているとスタッフが近付いてくる。

「あのうちよつといいですか？」

「あつ俺達のせいでステージ壊れた上にレースも台無しにしてすみません。」

俺が鈴に無茶な作戦を立案したせいでこのハプニングは起きたので何か言われるのなら俺だけで良いだろう。

「あつ、そうではなくて、お怪我はありませんか？」

「はい、大丈夫です。」

「あたしもです。」

「そうですか、少しお話をしたいので事務室に来ていただいでよろしいですか？」

「はい、わかりました。」

「まずは着替えね。」

当然の如く野次馬が大量に出たので自分の荷物をスタッフがスタッフ用の更衣室に持ってきてくれた。

着替えたあと、事務室に案内される。

簪さん達には時間がかかるからとメールを送っておいた。

「私がウォーターワールドのオーナーです。よろしく。」

机の向かいに座った男性がオーナーのようだ。

「天野星夜です、男性操縦者として今はGEARグループの所属になってます。」

「凰・鈴音、中国の国家代表候補生です。」

自己紹介をする。

とりあえず相手からは怒りとかは感じない。

「先程はすみませんでした。折角のイベントを台無しにしてしまつて。」

「いえいえ、思っていたよりも盛り上がってこちらとしてはうれしい誤算ですよ。」

オーナーは笑う。

「そうですね、このままではお二人の立場に良くないのでしたら…一度このCMに出演してもらえませんか？専用機持ちの方に出演してもらえただけでも話題性がありますからね。」

「そのくらいでしたら良いですよ。」

「まあ、CMの出演位なら問題にはならないわね。」

そのあとはいくつかの確認をしてウオーターワールドを後にした。

「もう夕方か…何か食って帰るか？」

「そうね、星夜が奢ってくれる？」

「最後に無茶な作戦立案したのは俺だからな、奢らせてくれ。」

鈴と近くのバーガーショップで食ってから帰る。

そんな夏の日だった。

第48話 《花火》

8月のある日。

たまには学園の図書館で本でも借りようと思い俺―天野星夜―は図書館へ。

「こんにちは本音さん。」

「こんにちわ。あまのん。」

図書館では数冊の本を横に置いてノートパソコンに何かを打ち込んでる本音さんが居た。

「あまのんは勉強?」

「いや、ただの読書。本音さんは何をやってるの?」

「ん?これはは、趣味だよ?」

そう言つてパソコンの画面をこちらに向けてくる。

「これは…。」

その画面には3Dモデルが表示されていた。

「ペットロボのモデルかな?」

「そう。ペットロボ?」

「えっと…恐竜とか色々居るね。」

何となくだがデータウエポンの様な見た目だ。

「データウエポンをイメージしてやってるんだ?」

「なるほど、ユニコーンも元々はペットロボだったしね。でも、何でこれを?」

「ユニユニ達を見てたらなんか作りたくなつたからデータだけ作ってみたく。イルカとか居たらかわいいな?」

「暇潰しにしてはクオリティ高いね。」

「楽しくてどんどんクオリティが上がつてくのさ?」

「井上さんとかこう言うの好きで個人的に作つてたりするから頼めば作ってくれるかも。」

「ほんと?」

「うん、今度聞いてみるよ。」

「お願いね?」

「じゃあ何体がデータをコピーしてっと。」

待機状態の電童にデータを移す。

その後は本音さんにくくつかおすすめの本を聞き、それを読んだ。

「おつもうこんな時間か…。」

「ほんとだ。お昼だね。」

気がつくとも12時になっていた。

「よし、このシリーズ借りて食堂に行くかな。本音さんも行く?」

「うん。行く。」

机の上を片付け、食堂へ。

「今日の定食は何かな?」

「昨日は魚だったから肉かな?」

2人で食券を購入し、商品を受け取る。

「おーい!星夜ー!こつち空いてるぞー!」

一夏が声をかけてきた。

隣には箒さんも居る。

「おつありがとう。一夏と箒さんは何かやってたのかな?」

「いや、食堂の入口で会ってな。」

「星夜とのほんさんはどうしたんだ?」

「図書館で本読んでた。いただきます。」

「そうゆうこと。いただきます。」

そのまま4人で食事をすする。

折角だから聞いてみるか。

「3人は次の土曜って予定ある?」

「あ、土曜はちよつと無理だ。」

「すまない、その日は実家の神社で夏祭りの手伝いがある。」

「暇だよ。」

一夏と箒さんは予定ありか。

「いや、その日にGEARでバーベキュー大会があつてな。人を呼んでもいいって言われてるから 暇ならどうかなって。」

「そうだったのか。誘ってくれてありがとな。」

「予定があるなら仕方ないよ。また機会があれば誘うからさ。」

「ああ、その時は頼む。」

「バーベキューも祭りも楽しそうだね。」

しかし、夏祭りか。

「そう言えば箒さんの実家は神社なんだっけ？」

「そうだ。小さい頃から夏祭りでの神楽舞を私がやっていてな。引越してからは出来なかったが今年は通える範囲だからな。」

「なるほど、祭りの主役だね。」

「ああ、巫女服来て扇を持って舞台の上で踊るんだぜ。すげえよな。」

「おおく凄そうだね。」

「おだててもないぞ?」

一夏に誉められて少し嬉しそうな箒さん。

「本音さんはバーベキュー大会参加で良いのかな?」

「うん、行く。」

「俺からも言うけど機会があれば箒さんとかにも伝えて貰える?」

「いいよ。」

「後で予定をメールで送るね。」

その後、いつもの面子に声をかけて予定を確認。

一夏と箒さん以外は全員参加となった。

そして、バーベキュー当日。

「いやあ。今日はいい天気だ!バーベキュー日和だね!」

やたらと元気な吉良国さんが居た。

「元気ですね、吉良国さん。」

「おっ!星夜くん!良く来たね!こう言うのは幾つに成っても楽しんだよ!」

「吉良国くんは子供みたいな所もあるからね。」

吉良国さんと話しているとベガさんが来た。

「こんにちは、ベガさん。」

「こんにちは、皆も楽しんでいってね。焼くのは吉良国くんがやるから。」

「ええっ!僕は焼き係ですか!?!」

「ふふつ冗談よ。」

「あははは。」

それぞれグループで大型のバーベキューコンロを囲む。

「焼けたらやつから好きなだけ食べてね。沢山あるから。」

肉や野菜を刺した串を網の上に並べながら言う。

「本当に沢山あるわね…。」

用意された食材を見て、鈴が呆れたように言う。

「こんなに食べたなら流石に…。」

その後にくく台詞を飲み込むセシリアさん。

「バーベキューとは肉を現地調達すると聞いていたが違ったのか…。」

「ラウラ、日本でやると密猟だからね?」

相変わらず少しずれた発言のラウラにシャルが突っ込みを入れる。

「さて、ジャンジャン食べるわよ。」

なんか楽しそうな楯無先輩。

「お姉ちゃん、変なことしないでね?」

「流石に火を扱っているところで変なことはしないでしよう。」

「じゅくじゅく。」

楽しそうな楯無先輩を見て不安なのか簪さんがおろおろしてる。

この辺りは平常運転です。

今回はG E A Rの社内企画で社員の知りあいまでは参加可能なので結構な人数が居る。

その中には当然子供も居たりする。

「ねーねーおねーちゃんたちあいえすもってるのほんとう?」

「みせてみせて〜!」

「ISはねく勝手に使ったら怒られるんだよ。ごめんね。」

専用機持ちなので子供達から質問攻めされるのは想定内だ。

今はシャルが子供達の相手をしている。

「——ですから、——と、なりますので——」

「えっと、セシリアさん。もう少し噛み砕いて言ってあげないとわからない子も居るよ?」

小学生高学年位の子達の質問に答えるセシリアさん。

ただし、いつもの如く理論的過ぎて半分も伝わってないところを横から簪さんが補足したりしている。

「ほくれ！データウエポンたち！行ってこい！」

「おぉー！」

「まてー！」

子供達の相手としてエイリアス体のデータウエポン達を召喚。

飛び回るデータウエポン達を子供達が追いかける。

「ふむ、平和とほいほいものだな。」

「ちよつとラウラちゃん。それおじさん臭いわよ。」

「ん？そうなのか？」

子供達を見て何やら頷いてるラウラを見て楯無先輩が突っ込む。

「星夜く。まだく？」

「あまのくん。焼けたく？」

「鈴、本音さん、まだだからね。」

「本音、もう少ししつかりしなさい。色んな方が居るのよ？」

まだ焼けてない串を見て待ち構える鈴と本音さん。

そんな本音さんに呆れつつも注意する虚先輩。

「みんなくそろそろ焼けるぞく。」

「一番いただき！」

「にばくん！」

「2人共ここに居たからね。ほい。気を付けろよ。」

焼けた串からどんどん渡していく。

俺、鈴、ラウラは串に刺さったまま豪快に食いつく。

他のみんなは串から外し、皿に移して食べる。

「星夜さんはともかく、おふたりは少々はしたなくありませんこと？」

セシリアさんが鈴とラウラに声をかける。

「ん？そのまま食べれば皿や箸等を使わずに済むから資源的にも手間的にも無駄が無く良いと思ったのだが。」

「折角のバーベキューなんだからこっちの方がらしくていいじゃない。」

鈴もラウラも予想通りの返しだな。

「まあまあ、皆好きに食べれば良いと思うよ。ラウラ、ちゃんと口の回

りは拭きなよ?」

「む、結構ついでにしまったようだ。」

用意されていた紙ナプキンでラウラの口の回りを吹いてあげるシヤル。

「妹の世話をする姉って感じだな。」

「あく何となくわかるわ。それ。」

俺が呟いた感想に鈴が相槌をうつ。

「あはは…同室だからね。色々と気になっちゃうんだ。」

「シヤルロットから教わる事は非常に多い。いつも助かっている。」

そんな感じに食べたりしながら会話をしていると。

「あれ?誰かここに置いてあったペットボトル知らない?」

自分のペットボトル飲料が無くなっていた。

「ん?知らないわよ?」

「僕のはここにあるよ。」

「星夜のは確か星のマークが描いてあったか。」

鈴、シヤル、ラウラが反応する。

ラウラの言う通りラベルの部分にペンで星を描いておいたのだが。

「あれ?かんちゃんのペットボトルってこれじゃないの?」

「え…?」

本音さんがひとつのペットボトルを持ち上げる。

ラベルに『かん』と書かれているペットボトルだ。

「じゃあ…これは…。」

簪さんは今、口をつけていたペットボトルを良く観察する。

「……。」

沈黙が包む。

簪さんの手元にあるペットボトルのラベルには星のマークが書いてあった。

「なああーっ!」

「何て羨ましいっ!」

皆で驚きの声をあげる。なんかセシリアさんだけ違ったけど。

俺が飲んでたペットボトルを気付かず口をつけてしまった。

つまり、間接キスだ。

その事実には顔を赤くする簪さん。

「あれ？簪ちゃんこの前、星夜くんとのデートでしたんじゃないの？
間接キス。」

「あの時は別のスプーン使ったからっ！」

楯無先輩が簪さんをからかう。

「もしかして…楯無先輩？」

「あら？なにかしら星夜くん？お姉さんと間接キスを希望？」
にんまりと笑う楯無先輩。

「違います。ペットボトルをすり替えましたね？」

「あら？ばれた♪」

「やっぱりいっ！」

「剛腕！大裂斬っ!!」

簪さんと同時に楯無先輩に全力で一撃を叩き込む。

「いったーいっ!!」

「当然だっ！」

「全力でやったからねっ！」

涙目になって謎のアピールをする楯無先輩。

「はい、星夜さん。新しいのをお持ちしましたわ。」

「ああ、ありがとうセシリアさん。」

「待った。」

セシリアさんからペットボトルを受け取ろうとすると鈴が横から
待ったをかける。

「どうした？鈴？」

「どうかされました？」

「セシリア…とほけない。」

鈴がセシリアさんを睨む。

「さりげなく一回開けて口つけてから渡そうとしてるんじゃないわ
よっー！」

「なっ!?私はただ、前もってふたを開けておいただけですわ!そ、そんな
破廉恥な事してはいませんわよ!」

「セツシー、見てたよ。」

「セシリア、往生際が悪いよ。」

「星夜、冷えてる奴をもらってきたぞ。」

「ありがとう、ラウラ。」

騒ぐ皆を横目にラウラから冷えたペットボトルを受けとる。

いつも通りな感じで平和に騒ぎながら楽しく過ごす。

「デザートのスイカ。貰ってきたよ。」

「結構大きいね。」

「これぞ夏！って感じがしてあたし的には好きね。」

皆にスイカを配る。

「ん？皆してどうしたの？」

「なにじくつと見てんのよ？」

「何か気になるの？」

セシリアさん、ラウラ、シャルがスイカを食べずに見ている。

「いえ、この黒いのは…。」

「種だよ。」

「食べて平気なのか？」

初めてのスイカで気になったのか。

「あ、食べても大丈夫だよ。」

「安心していいよ。」

「そうですか。」

「ん？星夜に鈴はどうしたんだ？」

簪さんや本音さんに言われて安心する3人。

その間に俺と鈴は近くの子供達と一緒に…

「ぷっ!!」

「ぷぷっ!」

「あつ！にーちゃん達スゲエ！俺たちより飛んだくっ!」

スイカの種飛ばし大会をしている。

「ちよつと!?!星夜!?!鈴!?!」

「はしたないですわよ!?!」

「あ、あれもあれで伝統みたいな物ですね。」

「そうね、沢山口の中にいれて種マシンガンっ！とかやる子が一人は絶対居るわよね。」

「そ、そうなのか…。」

楯無先輩と虚先輩に言われて不思議そうにこちらを見る皆。

「種が無くなったか。」

「ちっ、一番は星夜か。」

「にーちゃんすっごいく。」

「どうやって飛ばしたの〜?」

「思いつきり空気吸って吹く！これだな！」

バーベキューの片付けを大人達が始めているのでそのまま子供達の遊び相手になっていた。

「ん〜なかなか楽しめたわね♪」

「そうですね。たまにはこういった息抜きも必要でしょう。」

背を伸ばす楯無先輩に答える虚先輩。

「星夜さん、このあとは確か花火を見ると伺ってますが…。」

「その通り、だけどその前にもうひとつな。」

「もうひとつ？何かな？」

セシリアさんの質問に答えるとシャルが反応する。

「ちよつと移動するから準備しといて。俺はベガさんとかにあいさつしてくるから。」

「移動か。了解した。」

ちよつと皆から離れてベガさん達にあいさつをしに行く。

「今日はありがとうございました。」

「星夜くんは楽しんでもらえたかしら?」

「はい。楽しみましたよ。」

「君達はこれからどうするんだい?」

「篠ノ之神社で祭りをやってるのでそちらに行きます。」

「そうか、気を付けてね。」

「はい、失礼します。」

最後に頭を下げてから皆の元へ。

「でっどこに行くの?」

「篠ノ之神社で祭りをやってるそうだからそつちで楽しむのもありかなってさ。」

鈴が戻ってくるなり聞いてくるので返事をする。

「成る程、縁日というやつか。」

「篠ノ之神社…箒さんと関係が?」

ラウラとセシリアさんが反応する。

「ああ、箒さんの実家だってさ。今日、箒さんが神楽舞をやるんだって。」

「神楽舞って何かな?」

「分かりやすく言いますと神様に捧げる舞ですね。」

聞き慣れない日本文化であったためかシャルが疑問を口にする。

虚先輩がすぐに補足を説明する。

「巫女服を着た娘が見たいなんて星夜くんも物好きねえ。」

「お姉ちゃん?変なことを言わないの!」

火種を撒くつもり of 楯無先輩に箒さんが即座につっこみを入れる。

「じゃあ、行こうか?バスですぐだからさ。」

近くのバス停でバスに乗り、移動。

「やっぱり人が多いわね。」

「まあ、お祭りだしね。」

神社の前に到着した。

縁日だからか非常に多くの人で賑わっていた。

「神楽舞は…まだ時間があるな。」

「色々に見ながら行けばちようどいい感じじゃないかな?」

神楽舞の時間と場所を確認しておく。

そこまで大きな神社ではないのですぐに行けるな。

「ふむ、これがわたあめと言うものか…。」

「ラウラ、口の周りついてるよ。」

「シャルロットさんもですわよ。」

「セシリア、あんたは青のり付いてるからね。」

いくつか出店を見ていたらラウラがわたあめに興味を持ち、そのまま色々買って食べている。

祭りの雰囲気の中にいれば軽く何かを食べたくなるから不思議である。

「ん〜。美味しいね〜。」

「本音さん、かき氷もうほとんど溶けてない？」

「本音はいつもあだから。」

かき氷を食べる本音さんだったがいつものマイペースで食べている為、すでに色のついた水になっている。

「ねね、星夜くんは花火を見るときは誰かと二人きりで過ごしたいと思わないの〜？例えば簪ちゃんとか。」

楯無先輩が耳元で囁いてくる。

「今日は皆で楽しむのが目的です。」

「む〜つまらないなあ。」

「先輩は簪さんをどうしたいんですか…。」

「星夜くんの恋人？」

「なぜそこで疑問系になるんですか。」

「星夜くんは妹を取られて悔しい！とか思っていないからね。とか言ってるけど目が悔しいって言ってるぞ。」

「そう言うなら先輩方は居ないんですか？一緒に居たい人。」

「ここは虚先輩も巻き込んで楯無先輩を止めてもらうか。」

「え、私？簪ちゃん。」

この人即答したよ。

「そうですね。仲良くないんじゃないですか？」

「うん、仲良いわよ！で、虚ちゃんは？」

楯無先輩が虚先輩に聞く。

「…。」

「虚ちゃん？」

「虚先輩？」

「あつすみません。少し祭りの方に気をとられていました。」
珍しく虚先輩が上の空だったな。

「まさか…虚ちゃん…。」

「な、なんででしょうか？」

「私の知らないところで男を作ってたなんて！」

「ちちっ！違いますっ！違いますからっ！なんで一回返事をし損ねただけでそうなるのですか!？」

非常に珍しい虚先輩をいじる楯無先輩の凶だ。

「あ、そろそろ良い時間ですね。移動しましょう。」

「虚ちゃん、この事は後でじっくりと聞くからね。」

「何もありません。いいですね?。」

皆を呼び、神楽舞のやる舞台へ向かう。

「うん、良い位置とれたね。」

「箒さん、こちらに気づくでしょうか?。」

「まあ、こんだけ人が居るし、踊るのに必死で気がつかないと思うけど?。」

「確かに、箒さんはそうかも。」

シャル、セシリアさん、鈴、簪さんが舞台の方を見ながら言う。

「始まったな。」

「箒ちゃん、綺麗ねえ。」

「ええ、着せられている感じもなく自然に振る舞われてますね。」

「足の運びにも迷いが無い、久しぶりって言ってたけどしっかりと練習してたんだな。」

神楽舞が始まると舞台の上には巫女装束を身に纏った箒さんが上り、舞始めた。

儀礼刀と扇をそれぞれの手を持ち舞う姿は凛としていた。

「やはり、日本文化は良いな、派手ではないが地味と言うわけでもない。」

「これこそがワビサビというものでしょう。」

「箒さん、すごかったね。」

「うん、綺麗だったよね。」

舞が終わる頃には皆が見とれていた。

このあとは花火が上がるので見易い位置に移動する。

「箒さんにはあいさつはよろしいのでしょうか?。」

「さすがに疲れてるだろうし、今度感想を伝えればいいんじゃないか

な？」

あの手の奴って結構緊張して体力を使うし。

「そうですね。」

「星夜、花火はどっちだ？」

セシリアさんと話していると花火が楽しみなのかラウラが聞いてきた。

「えっと…あっちの方だな。」

「こっちか。わかった。」

ラウラが人が指差した方を向く。

ドーンと花火が始まる。

赤、青、緑、黄色、様々な色の花火が夜空を綺麗に染める。

一時間ほど続く花火は絶え間なく轟音を轟かせ視界を照らし、皆の記憶に刻まれていく。

これからも色々あるかも知れないけど、だからこそ皆との楽しい思い出を増やしていきたい。

そう思うのは俺だけじゃないはずだ――。

第49話 《データウエポンの夏休み》

夏休みの終わりも迫ってきたある日。

俺―天野星夜―は自室にてアルバムの整理をしていた。

最近はずいぶん写真が主だからパソコンでフォルダ分けしてその中から気に入ってる物はプリントしてファイリングしてる。

「結構撮ったなあ。」

デジカメだとフィルム枚数とかの制限がほとんど無いから沢山撮ってるな。

まあ、理由はソレだけじゃないんだが…。

「おーい、星夜居るか？」

「一夏…人の部屋入るときはノックして了承得てからにした方がいいぞ。」

一夏が部屋に入ってきた。

「わ、わりい。」

「で？何か用事か？」

「ほら、施設の点検が昨日で終わって今日からアリーナが使えるから皆で模擬戦やらないかって誘いに来たんだよ。」

「ああ、夏休みを利用して学園全体の施設点検してたから、ここ最近はろくにやってないもんな。いいぞ。片付けるから待っててくれ。」

「わかった。…星夜も色々写真撮ってるんだな。このアングルとかどうやって撮ったんだよ。」

一夏が机の上にある写真を見て言う。

「ああ、元々写真はとる方だったが最近はデータウエポン達も撮るかな。俺の知らない写真まである。」

そう、データウエポン達は見聞きしたことを保存する事が出来る。写真や動画を色々撮ってはパソコンのストレージに保存している。

「そうなのか。なんだこれ？シャルとラウラじゃないか。」

「ああ、それか。この前2人で出掛けた時にバイパーとブルがついていったみたいでな。その時のだってき。後で2人にわたそうかと
思ってる。」

「へえ、じゃあ俺の事も撮ってるのか？」

「幾つかあるから後で見せてやる。ほら、訓練やるんだろ？行こうぜ。」

「よし、今日は俺が勝つからな。」

「その言葉、そのまま返す。」

軽く片付け、部屋を出て一夏とアリーナへ向かう。

数日前、寮のとある部屋にて。

枕元の目覚ましがり鳴り、手を伸ばして止める。

「ふああああ…。」

大きな欠伸をしながらシャルロットは起きる。

夏休みだからと言って怠けたりせず、毎朝しつかり同じ時間に起きる。

「んく…おはよう。ラウラ？」

いつものように隣のベットで寝ているであろうラウラに声をかけようとするが今日はラウラの様子がおかしかった。

「うう…あう…う。」

「うなされてる？ラウラ大丈夫？」

苦悶に満ちたような表情のラウラ。

シャルロットは心配になり、ラウラに手を伸ばしながら声をかけようとする。

「うあああー！ー！」

「うわあっ！」

その瞬間、ラウラはベットに隠してあるナイフを取り出しながらシャルロットに跳びかかる。

寝転がっている状態から跳びかかられるとは思ってもいなかったシャルロットはそのまま床に倒れ込んだ。

ラウラはシャルロットの首筋目掛けてナイフを降りおろそうとする。

「ラ、ラウラっ！」

必死にラウラに呼び掛けるシャルロット。

ラウラの動きがピタリと止まる。

「えっ……？」

何が起きたのか一瞬理解出来ないシャルロットだったがすぐにその原因を見つけた。

「バ、バイパー……ありがとう。」

ラウラの後ろにはいつの間にか通常形態のバイパーウィップが居て尻尾を器用に使いナイフを握った右腕を止めていたのだった。

「う……？」

エイリアス体のブルホーンがラウラの右手にあるナイフを弾く。

ラウラも意識がハッキリとしてきたのかこの状況を理解しようとする。

「えくと、ラウラがうなされていたから起こそうと思ったんだけど……。」

「そ、そうか……。」

ラウラが落ち着いた事を確認したバイパーウィップはエイリアス体になる。

「そろそろどいて貰えるかな？」

「す、すまない。」

シャルロットに言われて思い出したようにラウラはシャルロットの上から退く。

「いいよ、気にしてないから……何か怖い夢でも見てたの？」

「助かる。そうみたいだ。バイパーとブルもすまない。」

バイパーウィップとブルホーンは「気にするな」と言うような仕草をする。

「ところでさ、ラウラ。」

「ん？なんだ？シャルロット。」

「パジャマ……着ないの？」

「着る服も無いし必要も無い。」

この問答は初めてでは無いし、回答も変わらない。

シャルロットはどうすればいいか考えているが答えがなかなか出ない。

「寝汗がすごいな…シャワーを浴びてくる。」

「僕も変な汗かいたから浴びよう…。」

「一緒にか?」

「ラ、ラウラの後でだよ!」

「冗談だ。」

ラウラの冗談という珍しい物にポカンとするシャルロット。

その間にラウラはシャワー室の扉を閉めた。

(まさかラウラが冗談を言うなんて…それよりパジャマどうしよう…。また星夜の部屋とか潜り込んだら大変な事になりそうだし…。)

シャルロットはこの間ラウラが星夜のベットに潜り込んだことを思い出す。

「どうすればいいかな?ブル?バイパー?」

何となく隣にいるブルホーンとバイパーウィップに聞くも首を横に振られててしまうシャルロットだった。

「買い物?」

「うん、もう少しで夏休みも終わるし、その前に纏まった買い物をしたいなって。」

朝食を取りながらシャルロットはラウラに提案した。

「ほう、新学期に向けた装備の新調か…悪くない。」

「そうですね?特にラウラは秋に向けた私服も無いでしょ?」

「確かに、以前皆に選んで貰ったのは夏用の薄い布地の物しか無いからな。幾つか長袖の物を揃えておくか。日本の季節は急に替わると聞いているからな。」

「そうそう。じゃあご飯食べたら行こうか?」

「ああ、そうだな。他の皆には声をかけてみるか?」

「うん。食べ終わったら連絡してみよう?」

「ところでシャルロット、ひとついいか?」

「ん?何かな?」

「それはなんだ?」

「それ?」

シャルロットはラウラの指差しているものが何か理解できなかった。

「そのフォークとマカロニだ。わざわざ刺さずに通しているのは何か意味があるのだろうか?」

「え? ああ、これね。」

シャルロットは無意識の内にフォークの先端にマカロニを通して食べていたのだ。

「ん〜癖かな? 何となく通しちゃうんだよね。」

「ん? つまり、理由は無いのか?」

「そ、そうなんだ。ラウラもやってみたら? 意外と難しいよ。」

「試してみるか。」

ラウラも自分の皿の上に乗るマカロニをフォークに通そうとする。

「む、く、なるほど。一、二本なら簡単だが全部の先端に通すのは難しいな…くう。」

シャルロットはそんなラウラを見て昔飼っていた猫を見ているような気持ちになった。

「やつと出来た。」

「ね? 難しいでしょ?」

やつとすべての先端にマカロニを通して満足したラウラ。

二人は談笑しつつ食事をとるのだった。

――
食事が終わり、二人は皆に電話をして予定を聞いていた。

「ああ。わかった。邪魔をした。」

携帯を操作し、通話を終了する。

「ラウラ、どうだった?」

「ああ、星夜は何でも今日、撮影があるそうだ。鈴も一緒らしい。簪は家族の予定だそうだ。」

「あ、星夜と鈴はこの前のプールかな…。」

「シャルロット、そちらの方はどうだ?」

「こつちもセシリアと箒はすでに出掛けてる見たい、一夏は反応なし。」

「友人の呼び掛けを無視するとは……ひどいやつだな。」

「一夏も色々大変なんだよ、きつと。二人で行こうか。」

「ああ、そうしよう。」

二人は準備をして、寮を出る。

バイパーウィップとブルホーンはそれぞれの携帯の中に入る。

「今日は洋服を見てお昼を食べてから日用雑貨を見ようと思うんだけどどうかな?」

「任せる。私はそう言ったことに疎いからな。」

「わかったよ。」

シャルロットは今日の流れを頭のなかで描きながら歩く。

こういつた時に非常に便利な大型ショッピングモールのレゾナスに向かう。

「えつと……1階で秋物先取りフェアをやってるね。」

「まだ夏だと言うのに気が早いものだな。」

ラウラは思っていたよりも大々的に秋に向けた物が大量に置かれたコーナーを見て驚く。

「ぎ、沢山あるから色々試してみよう!」

「あ、ああ。わかってるからそんなに押さないでくれ、シャルロット。」
シャルロットに押され歩くラウラ。

「いらつしやいませ。本日はどのようなものをお探ですか?」

2人でいくつか服を見比べていると近くにいた店員が声をかけてきた。

「今日は秋物を見に来たんですけど、おすすめはどれですか?」

「はい、今年の流行色が——でして——」

「なるほど。あとは——」

シャルロットと店員が話している横でラウラも様々な商品に目を通していく。

(むう、夏服に比べて布地は多いがどれも武器を隠すには不適切だな。もう少し膨らみがバレにくい物があれば——)

いつもの様に軍事的な倫理に基づいた服選びをするラウラ。

(——でも、確かクラリツサは……)

『おおっ！隊長の私服、素晴らしいですね！』

『こ、これか…？友人達を選んでくれた奴だ…。』

『ああ、隊長のかわいらしい姿…。良いセンスです！』

(皆、誉めてくれたな…。)

夏休みに基地に戻ったときに着ていた服を皆が可愛い、似合っていると誉めてくれたのを思い出す。

(あれは気分が良かったな…どんなのを選べば誉めてもらえるんだ…？)

「ラウラ、どうしたの？気になるのあった？」

「あ、シャルロット…。」

考え込んでいるとシャルロットが声をかけてくる。

「いや、どんなのが可愛いのがわからなくてな…？」

「可愛いのは!?わかった！僕に任せて！」

目を輝かせて店員とラウラに合う服を選び始めるシャルロット。

「はい！これっ！さっそく試着してみて！」

「ああ…わかった。ありがとう。」

すぐに5、6着の服をラウラに渡し、試着室にラウラを押し込む。

(シャルロットがあんなに強引に来るとは…。)

渡された服の中からひとつを選んで着替える。

「どうだ？変では無いか？」

「うん！いいねっ！」

「はいっ！お客様にぴったりです！」

ラウラが試着室出るとシャルロットと店員は妙に高いテンションで答えた。

「そ、そうか。わかった。残りも試してみよう。」

「うん！わからなかったら言ってね？」

そのまま暫くの間、ラウラは一人ファッションショーの様にシャルロットが選んだ服を試着し続ける事になった。

服いくつかを選び、買ってから二人で昼食へ。

「しかし、最後の方はすごかったな。」

「そうだね。周りの人達が集まって来て写真まで撮ってたしね。」
それぞれ注文した料理を食べながら話す。

「午後はどうする?」

「生活雑貨を見て回りたいな。腕時計がほしくてね。」

「腕時計?」

「うん、日本製の腕時計ってちよつと憧れがあつてき。ラウラはそう言うの無いの?」

「うーん……日本製か…日本刀だな。」

ラウラが考えて出した答えがこれではシャルロットは少し不安になつた。

「もつと…こうさ。日常的な物は?」

「特に無いな。困っている訳でもない。」

「そ、そう。」

ラウラにはもう少し常識的な女の子の発想が出来るようになってほしいと思うシャルロットだった。

「ん?何やら外が騒がしいな。」

「そうだね?何かあつたのかな?」

2人は食事を終え、店を出ると周りの雰囲気が変わっている事に気づく。

「あつちか?」

「みたいだね。行ってみよう!」

少し歩くとそこには沢山の人が集まっていた。

「すみません、これは一体…?」

「この先にある店に強盗だつて。なんでも銃を持つてるらしいからこれ以上は近づけないよ。」

シャルロットが近くの人に訪ねると驚く情報が入つて来た。

「ふむ、この国で銃を入手するのは容易ではないはずだ。米軍の横流し辺りか?」

「確かに、日本じゃ銃を持つてる人が居ても猟銃位の筈だし…つてそうじゃなくて。」

「わかっている。本来なら我々が関わる状況では無いがな。」

「なにか出来ないかな…。」

本来なら沢山の客で賑わっているはずの店内は静まりかえっていた。なぜならいきなり銃を持った男達が表れてこの店に立て籠ったからだ。

「よし、これで全員か？」

「へい、倉庫の中まで確認しました。ここに集めた奴等で全員です。」

「ちっ！こんな所で見つかるなんてついてねえぜ。」

「人質が居るんだ。簡単には手を出してこないはずだ。」

客を含め、30人近い人を一ヶ所に集め、店にあったガムテープ等で目隠しと手足を拘束していた。

『速やかに人質を解放し、投降しろ！』

外から警察が拡声器を使い呼び掛けてくる。

「囲まれたか…。だがこのままでは終わらんとぞ…。」

リーダー格の男が呟きながらドアに寄る。

「警察に告げる！人質を解放して欲しければ逃走用の車を用意しろ！勿論発信器なんか付けんじゃねえぞ！返事は拡声器じゃなく、ガキを1人だけこっちに寄越せ！それ以外の奴が来たら問答無用で撃つぞっ！」

男は警察に向かって叫ぶと狙撃されないようすぐに建物の中に戻る。

「こんなことになるなんて…。」

店から距離を取り、強盗犯達を刺激しないようにしていた警官の1人が呟く。

「下手に動くところちらが撃たれる…。こちらに向かっているヘリも一端待機させろ、ヘリの音で刺激したくない。」

現場の指揮をとっている男が頭を抱える。

「了解しました。そのように。先程の要求についてはどうしましょう？」

「子供を1人か…。危険すぎる。人質を増やすだけだ。」

すでに大勢の人質が居るとは言え、子供を送り込むなんてことはあまりにも危険すぎる。

人命を最優先する日本の警察ではこの要求を無視する事も飲む事も出来ない。

「なら、その役目は私がやろう。」

突然1人の小柄な異国の少女が立っていた。

片目を眼帯で隠した銀髪のきれいな少女―ラウラだ。

「き、君は何者だ？ここは危ない、帰りなさい。」

極めて冷静に警察は対応しようとする。

「私はこう言う者だ。」

ラウラは懐からパスケースを取り出す。

「そ、それは……。」

「専用機所有者……。」

それは専用機持ちであることを証明するパスだった。

このパスは貴重なISCコアを与えるに相応しい人間だと所属国家及びISC委員会が認めている証である。

何らかの非常事態の際、便宜を図るためのものだ。

「さっきの奴の要求は聞こえていた。私なら問題なく近づける。当然ISCもあるから速やかに鎮圧出来る。」

「しかし、犯人が複数人で人質が何処に居るかもわかりません。」

「大丈夫だ。人質の場所はもう特定している。フロア中央に集めて拘束している。犯人グループは3人、全員が銃を持っているが同時に対処できるから問題ない。」

「一体どうやって……。」

あまりにも出来すぎているのでつい呟いてしまった。

「私には頼りになる仲間が居るのでな。」

そう言うトラウラは犯人が立て籠るレストランに歩いて行く。

「い、いいんですか？」

部下が聞いてくる。

「今の我々では何もできん。だがすぐ動ける様にしておけ。」

「リーダー！ガキが1人でこっちに来ますっ！」

「なに？本当か？」

その言葉を聞き、外を見ると確かに1人だけで近づいて来ていた。

「本当だな…。」

「どうします？」

「とりあえず中に入れろ。話を聞いてやる。」

ラウラが入口に近づいてきたタイミングでドアを開けて中に入れる。

「外国人のようだが…警察はなんだって？」

「交渉するつもりはない、とつとと人質を解放しろ。」

ラウラは言葉を言い終わると同時に目の前の1人を蹴り飛ばす。

「ガハッ!!」

「なっ!？」

「ガキが調子に乗るよ！」

残りの2人が銃を構える。

「そんな狙いで当たる物か。」

ラウラは生身でその銃弾を避ける。

「なっなに!？」

「素人が銃を片手で撃って当てられるものか。ブレブレだぞ。」

驚く相手を笑って見据えるラウラ。

「なら…こつちを撃つぞ！動くんじゃねえっ！」

人質に向け、銃を向ける男達。

ガムテープで目と口は塞がれているが耳はそのままだったので人質達がビクツと反応する。

「終わりだ。」

ラウラが指を鳴らすとこつそりとエイリアス体で男達の足元に移動していたブルホーンとバイパーウィップが手元に襲いかかり銃を落とさせる。

「え…?」

「甘い。」

何が起きたか理解しない内にラウラによって速やかに気絶させら

れる犯人達。

「バイパー、警察が来るまでそいつらを頼むぞ。」

ラウラに言われ、通常形態になり犯人達を纏めて締め付けるバイパー。

「ぐっ…だがこのまま捕まる物かよ…。」

何とか意識を持ち直したりリーダー各の男が言う。

「ほお、もう持ち直したか。お前達がここに来る前に置いてきた爆弾なら先程処理したぞ。」

ラウラは犯人に見向きもせず人質になっていた人達の拘束を解きながら告げる。

「な、なに…?」

「最近爆発事件を起こしその隙に近くの宝石店など金になるものを盗んでいく窃盗団が居ると聞いていた。お前達がそれだろう?」

「そ、そんな…。」

がつくりと項垂れるリーダー各の男。

「ふん、しっかりと反省し、更正することだな。」

拘束が解けた人から順番に外に出ていき替わるように警察が中に入ってくる。

「よし、ここはこれで終わりか。後は任せるぞ。」

「ご協力、感謝します。」

現場で指揮を取っていた警官がラウラに声をかける。

「あと、何人か私と来てくれないか?こいつらが仕掛けた爆弾がある。起爆装置は無効にしているが念のためしっかりと処理してくれ。」

「ええっ?!爆弾っ?!」

涼しい顔で物騒な事を言うラウラに驚く警官達。

「私の仲間が確保している。そっちも専用機持ちだ。安心してくれ。」
「わ、わかりました。おいっ!誰か本部に爆発物処理班を要請してくれ!私は先に現地に向かう!」

「は、はいっ!」

バイパーウィップとブルホーンを連れ、歩いて行くラウラ。

警官は後ろを着いていくのであった。

「ラウラ〜！こつちこつち。」

「ああ、シャルロット待たせた。」

「えっと…もしかして…貴方が…。」

人が余り来ない裏路地のような所で待っていたシャルロットの所に着く。

シャルロットの周りにはエイリアス体のレオサークルとドラゴンフレアが居る。

「はい、フランスの代表候補生のシャルロット・デュノアです。」

礼儀正しく挨拶をしながらパスを見せるシャルロット。

「確認しました。で、こちらがその爆弾ですか？」

警官は足元にあるバックを確認する。

「はい。起爆装置は壊したので、もう大丈夫ですが残りの処理をお願いします。」

「私たちはこれで失礼する。報告書等は後程そちらの警察署に送っておく。」

「はいっ！ご協力感謝します。」

2人はそのまま爆弾を任せてその場を歩いて行く。

「でも、ラウラはよく近くに爆弾があるかもって解ったね。」

シャルロットは歩きながらラウラに訪ねる。

「ここ数ヶ月そう言った事件が多発しているとニュースでやっていたからな。それに…。」

「それに？」

「あの辺りで人質をとって立て籠る理由が無い。ならば本来は別の目的で来ていて偶然にも警察に見つかって立て籠ったと見るのが普通だろう。」

「なるほど。じゃああの犯人達は…。」

「火が燃え広がり易い所に爆弾を置きに來ただけだったのだろう。その後、違う場所で起爆しそこに注目が集まっている間に盗んでいく予定だったのではないか？」

「そっか。レオとドラゴンもありがとね。」

シャルロットの言葉に反応し、レオサークルとドラゴンフレアはうなずいた。

「爆弾を速やかに処理するならばやはりドラゴンが一番だな。」

「レオで探してドラゴンで爆破装置の無効化。これなら時限式の爆弾は問題ないね。」

「さて、少し時間を取られたがまだ余裕はあるな。次はどうする?」

気持ちを切り替えて休みモードに入るラウラ。

「そうだね。とりあえず雑貨を見て回ろう。」

このまま暫く2人はショッピングを楽しんだ。

ショッピングが終わり、近くの公園でベンチに座る2人。

「沢山買ったね。」

「ああ、非常に有意義な時間だった。ありがとうシャルロット。」

「急にどうしたの?」

シャルロットとしては礼を言われる様なことをしたつもりが無いのでラウラに訪ねる。

「いや、私1人では『普通の』買い物と言うものをする事はできなかったと思っただけ。」

「ふふっ大丈夫だよ。だってラウラは自分から『可愛い物』を探してじゃないか。」

「だが、探していただけで見つけられなかったし、判断もできなかった。」

「その時には店員さんに聞けば良いんだよ。今日も一緒に探してくれただでしょ?」

「な、なるほど…。」

「そ、『普通』に正解はあるようで無いからね。」

ニッコリと笑いながらラウラを見るシャルロット。

「なかなか難しいな。」

2人は笑顔で帰りの道歩く。

別のある日。

夏休みなのでいつもより遅めにセットしたアラームが鳴る前に何かに小突かれ目が覚める一夏。

「んあ……。なんだ輝刃か……。」

エイリアス体の輝刃が一夏を小突いていた。

「いてて！わかった。起きるから！」

起き上がる一夏。

「どうしたんだよ？何もないからたまにはゆっくり寝てても良いじゃないか。」

文句を言いながらも起きて着替える一夏。

あとアラームの設定も直しておく。

「ん？メール？」

一夏が携帯を見ると着信が一件。

「箒からか……。」

20分ほど前に送られて来ていたメールで内容は『暇なら剣の稽古に付き合え』と言うものだった。

「そつかだから輝刃は起こしたのか。」

輝刃がなぜ自分を起こしたのか理解し、準備をしてから道場に向かうのだった。

「恐らく寝ていて来ないと思ったのだがな。」

「輝刃が起こしてくれなきゃそのまま寝てたな。」

箒はきつと寝ていて参加しないと思っていた剣の自主練に一夏が来て驚きを隠せない様子だった。

「輝刃が？そうなのか。そのだらしない生活態度も直してもらえばどうだ？」

「あれ？てつきり箒が輝刃に言っつて俺を起こさせたのかと思っつたんだけど。」

「いや、特に頼んではない。」

一夏は箒が輝刃を使って自分を起こしたと思っつたが違っつたらしい。「輝刃もお前に強くなれ、と言っつたいのではないか？星夜は毎朝走っつているぞ。」

「ぐ、それを言われるとぐうの音も出ない……。」

何かと比べられるのは2人しかいない男性だからだろう。

比べられる以上少しでも上にいたいと思うのは思うのだがここ数年は録に運動もしてなかった一夏は簡単に勝てるとは思っていない。放課後はしっかりとISを使った訓練等もやってるしだらけてるつもりは無い。

ただ、疲れからか朝はどうしても睡眠に時間をさいてしまっているのであまり差は縮んでいない。

「まあいい。私も出来る限り協力する。だから一夏も努力しろ。」

「わかってるさ。すぐに箒も星夜も追い抜いて千冬姉においつかないとな。」

「ふっ私は通過点か…良いだろう。千冬さんを越えるつもりならそれぐらいは必要だろうな。」

お互いに竹刀を構えながら対峙する。

「はあっ！」

「たあっ！」

IS学園に来て、久しぶりにやることになった剣道、自分の愛機はついこの間まで刀一本しかなかった一夏には非常に大きな助けになっている。

これまで何度も箒とやっているが勝率は良くない。

それでも最初の頃よりは良くなっているのは解る。

「少しは前の勘を取り戻して来たか？」

「ああ、どれだけ錆び付いてたのか嫌でも解るくらいな。」

どんな物でも続けなければ意味が無い。

『継続は力なり』この言葉を今一番実感してる一夏だった。

「毎日やれとは言わないが、もう少し鍛練の回数を増やしたらどうだ？」

「そうだな。もう少しな。」

輝刃が見守る中、箒と訓練を続けるのだった。

「少し遅くなったけど朝飯行こうぜ。」

「わかった。シャワーを浴びてから行くから先に食堂で待っていてく

れ。」

少し特訓に熱の入った2人はいつもより遅めの朝御飯を食べることにになった。

「そう言えばもう少ししたらアリーナがまた使えるんだっけか。」

「そうだな。そうしたらISの訓練も再開出来るな。」

「そしたら俺は射撃訓練しないとなあ。」

「私はまだ紅椿に慣れきっていないからな。もう少し感覚を掴まないよ。」

一夏は夏休み前に機体がセカンド・シフトを果たし戦術が根本的に変わってしまったし、箒はいまだに高性能すぎる能力を活かしきれずに居る。

やるべきことを見つめ、考える。

「まだまだ課題はたくさんあるけどお互い頑張らないとな。」

「ああ、いつまでも足を引っ張りたく無いしな。」

2人は食事を終え、食堂を出る。

「なあ箒。今日ってこのあと暇か?」

「なんだ? 藪から棒に? 特に予定は無いぞ。」

「じゃあさ、付き合ってくれないか?」

一夏から「付き合ってくれ」と言われ、乙女心が反応したがすぐに以前のことを思い出す。

「か、買い物か?」

「ああ、1人で行っても良いんだけどさ、やっぱり1人よりは2人のほうが良いだろ?」

「う、うむ。そうだな幼馴染として付き合ってやらんこともない。」

一夏と2人で出かける上に向こうからの誘いだ。

恋する乙女としては嬉しいがここでにやける訳にもいかずいつも通りのツンとした態度でかえす箒。

「じゃ、準備出来たら寮の前でいいか?」

「ああ、わかった。」

一度部屋に戻り箒は急いで取って置ききの服に着替えるのだった。

「なあ、これなんてどうだ？」

「一夏には少々派手じゃないか？」

2人は普通にシヨツピングをしていた。

普段ならレゾナンスまで行くが今回は近場の店だ。

「じゃあこつちか？」

「ああ、そつちの方が一夏らしいと思うぞ。」

「そつちか、じゃあこれにするか。」

一夏は手にもった籠に選んだ商品を入れる。

「しかし、今日はどうしたんだ？雑貨とかなら別に今でなくてもいいだろうに。」

「いや、ほんとに意味は無いんだけどな。ただ朝早く起きたし思い立ったが吉日って言うだろう？」

「そうだな。たまにはこう言うのも悪くない。」

何だかんだでデートみたいになっていて箒としては大満足だ。

「よし、こんなもんか。」

「これからどうする？帰るのか？」

会計を済ませて店を出た所で箒が訪ねる。

「必要なのは揃ったけど箒は何かあるか？」

「いや、特に無いが…。」

「折角だしこの辺少し歩いてから帰ろうぜ？余り来ない場所だし。」

「そうだな。少し散策するか。」

2人で並んで歩く。

「まだまだ暑いなく。」

「ふん、心頭滅却すれば火もまた涼し、つまりは気の持ちようだ。」

何となく一夏の口からでた言葉に箒は厳しめに答える。

「相変わらず厳しいな。」

「ただでさえ一夏は遅れているのだ、甘やかして良いことなどあるまい。」

「そうだけだよ…少し位優しくしてくれよ…。」

「なら、一夏は少しシャキツとしろ。」

幼馴染に言われて背筋を伸ばす一夏。

「それでいい……こっちの方が格好いいしな……。」

夏の日差しに照らされた一夏の横顔を見てつい本音が出るが眩く感じだったので一夏には届かなかったようだ。

「おい、箒！」

いきなり一夏が声を上げる。

「ど？どうした？」

まさか今のが聞こえていたのかと顔を紅くするがそれは一瞬の事。

一夏の顔が真剣な物だったからだ。

「あれ！火事じゃないか!？」

一夏が指を指す先には黒い煙が上がっている。

「あちらは確か駅の方だ。その可能性は高いな。」

「行くぞ！なにか出来るかもしれない！」

言い終わるよりも早く一夏は走り出す。

「い、一夏!?!ええいつ！」

その後を追うように箒も走り出す。

しばらく走ると一つのビルが燃えているのが確認出来た。

「ここかっ！」

「一夏っ！無闇に近づくなっ！」

周りを見るとなんとかビルから出てきた人たちが居る。

しかし、何やら揉めてるようだ。

「今戻ったら危ないっ！」

「で、でもウチの子がっ！」

聞こえてくる話からするとまだビルの中に少なくとも一人残されているようだ。

まだ消防車等も来ておらず火の勢いを考えるとこの中に居るのなら早く救助しなければ。

そう考えると一夏は自然と動いていた。

火の勢いが増すばかりのビルに向かおうとする女性を必死に止めている人達に近づき。

「任せてくださいー！」

「え？」

それだけ告げると白式を展開しながらビルの中に突っ込む。

「あ、あれは…IS…。」

「しかも男だったぞ。」

「あれが噂の…。」

助けないと。

ただそれだけを考えて飛び込んだ一夏。

「どこだ〜！」

周りを見渡しなが探す一夏。

「闇雲に探しても見つからんぞ。」

紅椿を展開し後を追ってきた箒。

「でも〜早くしないと〜！」

「馬鹿者っ！落ち着いて各センサーを使えばすぐに見つかる！それ位頭を使えっ！何のための力だ!?!」

箒に言われて気がつく。

今、一夏は目の前の事に捕らわれて「子供を探す」事しか考えていなかった為、センサーも使わず目視で探そうとしていた。

「わ、悪い。」

「全く。2人で子供の1人も助けられなかったとなれば笑いだ。まさせん。あつちか。」

センサーを使って子供の位置を確認した2人は燃えるビルの中を進む。

「居た！もう大丈夫だぞ〜！」

「よし、怪我はしてないな。あとは外に出るだけだな。」

2人は4階に居る2人の子供を見つけた。

見た感じ怪我や火傷は無さそうなので速やかにつれてこうとする。

「とりあえず窓まで行けば俺と箒で抱えて出れるな。」

「そうだな。ん?」

「どうした?箒。急ごうぜ。」

「この反応。もう1人居るぞ〜！」

箒がが上を見る。つまりは上の階に居るようだ。

一夏もセンサーを再度確認する。

確かに微弱な反応がある。

「わかった。俺が行く。箒はこの子達を。」

「ああ、気を付けろよ。」

ここに居る2人は箒に任せ一夏は上の階を目指す。

念のため再度センサーを確認し、他にも人がいないか慎重に向かう。

「じっとしてるんだ。そう。いい子だ。」

箒は子供を2人同時に抱えて近くの窓を目指す。

ISなら壁を壊して脱出することも出来るが壁を壊した影響がビル全体に出ると困るのでそのような事はしない。

「大丈夫。大丈夫だ。」

子供達をシールドエネルギーで包み守りながら進む。

ブースター等を使えば当然子供達にも良くないので歩きだ。

その時、目の前の柵か扉だった物が焼け落ち、それにつられ周りの物も崩れ落ち、道を塞ごうとする。

「輝刃!？」

だがそれは 輝刃が突飛ばし道をあける。

「助かる。」

輝刃が先行する形で進み外に出た。

「消防隊も来たようだな。これで大丈夫だろう。」

4階の窓からゆっくりと飛び着地して子供達を下ろす。

「ああ!!ありがとうございますっ!」

すぐに親が来て子供達を抱き締めながら箒に感謝を言う。

「一夏は…まだか?」

まだビルの中に居る一夏を案じ視線を一度向けるがすぐに状況を消防隊に報告する為そちらに向かつて行くのであった。

「大丈夫ですか!？」

一方、一夏は倒れた家具の下敷きになっていた男性を見つけ、運び出そうとしていた。

「だ…だれだ…。私はもう駄目だ……。」

「諦めるな!絶対に助けますから!」

見たところ火傷と怪我をしているようだ。
諦めている男性に対し一夏は声を掛ける。

(でも、どう運ばばいいんだ？下手に動かして傷が開いてもヤバイだろうし…。)

家具に潰されかけた時に出来たのか大きな傷があるらしく血も出ている。

しかし、時間をかけていられないのも事実なので兎に角安全な場所に行こうと考えるといきなりガトリングボアが出てきた。

「ボア!?どうしたんだ？」

ボアは男性に向けてクロックマネージャーを使う。

「そうか！時間が止まってる間なら傷も開かない！」

即座に男性を持ち上げ素早く移動しようとする一夏。

その直後に頭上の天井の一部が焼け落ちる。

「なっ!？」

このまま生き埋めになるとクロックマネージャーに割いているエネルギーがすぐに尽きてしまう。

その直後にユニコーンが現れてファイヤーウォールを展開、一夏達を頭上の瓦礫から守る。

「助かった！」

そのまま一直線に窓を目指し一夏は急ぐ。

「よし！外だ。」

脱出した一夏は消防隊の人間に男性を預ける。

「あとは頼みます。」

「ああ、任せてくれ。ありがとう。」

消防隊の人々が一夏と箒に礼を言う。

「いえ、たまたまですから。」

「むしろ勝手な行動をしてしまい申し訳ありません。」

「いいえ、お二人の迅速な行動のお陰で人の命が救われたのです。胸を張ってください。」

その後、火が収まり一通りの処理が終わるまで2人は現場に残ることになった為、気がつけば周りが暗くなっていた。

「ふう、悪いな箒。」

「どこに謝る必要がある？さつき言われただろう胸をはれ。」

「ああ。助けられて良かったよ。」

「そうだな。」

2人はやり遂げた達成感から笑顔になる。

「あ……。」

「一夏？どうした？」

いきなり一夏が何かを思い出すような仕草をしてとまる。

「時間！時間見ろ！門限過ぎてる！」

「ああ!? 本当だ！」

2人は寮の門限を過ぎてることに気付きすぐに学園の寮監である千冬に電話をしようとする。

「あれ？千冬姉からメール？」

「私にも来ているな。」

2人の携帯には千冬からのメールが来ていた。

『お前達の状況はデータウエポン達から聞いた。門限に関して今回は不問とする。終わり次第速やかに帰ってくるように。』

「なんか今日は朝からデータウエポンに世話になりっぱなしだな。」

「色々助けられたのは事実だな。ボア達は輝刃がよんだのか？」

箒に聞かれ横を飛ぶエイリアス体の輝刃が頷く。

「ホント、ありがとな。箒、急いで帰ろうぜ？」

「そうだな。早く戻らないと食堂がしまってしまうな。」

ちなみにその日のニュースでこの火事を取り上げられていた為、一夏と箒が2人つきりを出掛けていた事に関して箒はクラスメイト等から色々と聞かれるのであった。

アリーナでの模擬戦が終わりいつものように反省会みたいな事をしようとしてピットに集まる。

「ちよつとー今の何だったのよ!？」

「ファイナルアタック使ったはずなのになんで紅椿みたいにエネルギー回復してんだよ!？」

「なんなのだ!? あれは!? バカデカイ電池にしか見えなかったぞ!」

「ねえ! あれってGEARの新兵器!? そうなの!」

久しぶりの模擬戦だったし、全員揃ったので4対4のチーム戦をやったのだがその中でハイパーデンドーデンチを試した結果がこれである。

「ああ、この前の合同演習で受け取った新装備だ。」

対戦相手だった一夏、簪さん、簪さん、鈴はまさか電童から2回もファイナルアタックが飛んでくるとは思っていなかった為驚いているようだ。

「いやあ、面白いくらいに引っ掛かったね。」

「うむ、電池換装をした瞬間の皆の顔はなかなか愉快だったぞ。」

「これも私の射撃の腕が有ればこそ…。」

こちらのチームのシャル、ラウラ、セシリアさんは予想通りに事が進みご満悦のようだ。

「とりあえず軽く説明すると電童専用の電池、戦闘中でもああして交換すれば瞬間的にエネルギーを回復できる。シールドエネルギーは回復しないけど。」

「いや、十分だろ! というか白式にくれ! 荷電粒子砲と瞬時加速の燃費が改善できる!」

「白式って勝手に改造していいのか…?」

「そうだよな…。」

がくつと項垂れる一夏。

「あれ、何発持ってるのよ…。」

鈴が半ば呆れながら聞いてくる。

「いや、今の所1セットだけ。」

「その電池の初使用シーンって映像ある?」

「え? えーと、戦闘記録の中にあるよ? 簪さん、見たいの?」

「興味があるの!」

「じゃあ、後でデータ見せてあげるから。」

何だかテンション高いな。簪さん。

「しかし、この見た目に意味はあるのか?」

「まあ、わかりやすさかな？ GEARもこの規格で色々作るみたいだし。」

箒さんは見た目がただデカイ電池なのが気になっているようだ。

「ま、今後は多少無茶した後にファイナルアタックを使えるようになったのは大きいかな。」

「そうだね。クロックマネージャーとかで大きく使っても余裕があるわけだし。」

「やはり、電池換装は隙が大きかったな。もう少しフォーメーションを考えて使わないと危ないかも知れん。」

「そうですね。今回は相手の意表を突く形でしたし。」

そのままいつも通り模擬戦の内容を確認してそれぞれの動きなどに関して話し合っていた。

もう少しで夏休みが終わり、新学期が近づいて来ている。

第50話 《新学期》

9月、長い夏休みが終わり新学期が始まる。

俺―天野星夜―はアリーナで模擬戦を行う一夏と鈴を見ていた。

この模擬戦は近接戦闘の必要な物を確認する為の物だ。

自分達だけではなく1組と2組のクラスメイト全員が見ている。

「うーん。得意分野をとことん伸ばしたら欠点も同じ位伸びたか?。」

「ああ、白式・雪羅に振り回れているな。」

「今まででも燃費の悪さがネックだったのが更にひどくなったからねえ。」

「今までと同じ扱い方では半分の時間も持たないようですし…。」

「燃費が悪いのは私の紅椿もなのだが…それよりも酷くないか?。」

模擬戦を見ながらそれぞれ思ったことを言う。

アリーナの中を所狭しと動き続ける2機であるが誰の目から見ても鈴が優勢なのは明白だ。

「箒さんは絢爛舞踏だっけ?あれが安定して発動出来れば改善できるけどね。」

「そのはずなのだがあれ以来発動出来ていないのがな…。」

「しかし、鈴の牽制もうまいな。」

「弾丸が不可視なのをうまく利用してプレッシャーをかけていますわね。」

「この場合一夏は衝撃砲の射程外からの荷電粒子砲か零距离の雪片の2択。やりづらいだろうね。」

近づこうとする一夏に対して青龍刀を振りかぶりながら腕部衝撃砲で攻撃して体勢を崩し即座に離脱する鈴。

距離を取ろうとすれば肩の衝撃砲が遠慮なく撃ち込まれ退路を絶たれる。

「一夏はあれだな。開始直後に零落白夜で決めようとする癖を無くさせないとな。」

「機体特性的には間違ってはいないのだがな…。」

「そうだね。もう少し選択肢は増やした方がいいよね。」

「荷電粒子砲関連の習熟も必要ですわね。」

「む、決着のようだな。」

鈴の両手にもった青龍刀が白式をXの字に切り裂き試合終了のアラームが鳴る。

「くっそおおおっ！負けたあ！」

「イエーイ！勝った！」

ピットに戻るなりそれぞれ叫びを上げる。

「一夏はもう少し消費を抑えて動けるようにしないとな。」

「瞬時加速にしてももう少し減らせるはずだ。」

俺とラウラで一夏にアドバイスを言う。

「鈴は最初に引き離すか近づくか決めておいた方が素早く出来ると思うよっ。」

「相手に合わせる必要はありませんし、鈴さんのペースで動けると思っていますわ。」

シャルとセシリアさんは鈴にアドバイス。

「んくそうね。確かに相手のペースを壊してやるためにも先に決めないと行けないわね。」

「んくどうすれば瞬時加速を減らせるかなあ…。」

ギャラリーからの感想を受けてそれぞれ考える。

「箒さんはどう？さっきの戦闘で気になるところあった？」

まだ専用機に慣れてない箒さんに声を掛ける。

「やはり、私はしばらく一夏の戦術を基本にアレンジしていく方がいいか。」

「同じ近接型だからね。ただ、箒さんの方が出来ることは多いから頑張らないとね。」

「ああ。」

「よし、午前の授業はここまで、午後は各グループに別れての実習だ。遅れないように。」

織斑先生が全体に声をかけて授業は終わる。

「ふっ悪いわね！一夏！」

「くそ、次は負けねえ！」

食堂にて一夏が鈴に奢っていた。

なんでも模擬戦前に約束したそうだ。

「一夏：お前の勝率でその賭けは無謀だぞ…。」

「無謀な賭け事は破滅を呼ぶぞ。」

「うぐ…。」

俺とラウラに言われて何も言えない一夏。

ちなみに今の俺達、専用機持ちの勝率はラウラとシャルがほぼ同率で首位タイ、俺と鈴がほぼ同じ位でその下にセシリアさんと簪さんで、一夏と箒さんが最下位争いをしてる感じだ。

「ああ〜うまい！とくにおごりつて所が！」

「パワーアップしてるはずなのになんで勝てないんだろ…。」

見せつけるように食べる鈴と勝てない事に悩む一夏。

「どう見たって燃費でしょ。あんたの機体の燃費が悪すぎ、正直引くわ。」

「星夜あ、あの電池を使えるようにしてくれ〜！」

「俺にそれ言っても無駄だろ。GEARと倉持技研に交渉しろ。」

無理難題を言ってくる一夏に突っこみを入れる。

「だ、大丈夫だ一夏！私の絢爛舞踏があればエネルギーなどすぐに回復できる！」

「僕が援護すれば零落白夜もちゃんと当てれるから安心して！」

弱気になる一夏に対して救いの手を差し伸べてアピールする箒さんとシャル。

「おおっ！そうだな。2人とも頼むな！」

「あんた1人でやるときの問題がそのままになってるわよ。」

2人に励まされて明るくなった一夏の雰囲気ですぐに鈴が叩き落とす。

そのままそれぞれ一夏と組む場合はどうすれば良いかを話していると昼休みは過ぎていった。

午後になり実習の為にアリーナにて専用機持ちをリーダーとした各

グループに別れて並んで居るのだが一夏が来ない。

「天野、お前は何か聞いているか？」

「いえ、特には聞いてません。」

こうなると当然俺に聞かれる訳で。

「更衣室には居たのか？」

「はい、自分が着替え終わって出るときに入れ違いで入ったので間に合うと思っただんですが。」

ちなみに今、授業開始のチャイムが鳴った。

一夏は遅刻つと…。

「お、遅れました。」

必死の形相でこちらに来る一夏。

「織斑、なぜ遅れた？」

その一夏の前に立ちふさがる織斑先生。

「えつと…それが…。」

一夏が言うには着替えが終わり、更衣室を出ようとしたところで楯無先輩に捕まった為、だそうだ。

楯無先輩が一夏に用があるなんて珍しいな。

「つまり、お前は特に理由も無く、話をしていて遅れたと言うわけだな？」

「え、えくとそうなります…。」

一夏の言葉が終わると同時に出席簿が垂直に落ちた。

「では、各グループ毎に実習を開始！リーダーはしっかりと指導するように！」

痛がる一夏を尻目に実習が始まった。

「じゃ、始めますか。」

専用機持ちはそれぞれ愛機を展開し、メンバーと向き合う。

今日の実習内容は格闘戦における距離の取り方。

「天野くん！こっちはいつでもいいよ。」

「オツケー。」

打鉄を装備したクラスメイトと向かい合う。

「たあつ！」

数mはあった距離を一瞬で詰めて右拳を相手の目の前で止める。

「は、はやいねえ…。」

「いくらハイパーセンサーがあっても使っているのは人だからね。油断しているとすぐに相手の距離になるから気を付けてね。」

お互いにI Sをつけているから反応出来ると思っていたのか予想以上の速さについていけなかったようだ。

「よし、次はそっちが打ち込んでみよう。好きなタイピングでやっていいよ。」

「わかった。」

打鉄の刀を展開し、構える。

「やあっ！」

「よっ！」

相手が打ち込むのに合わせて一歩下がる。

そうすれば相手の刀は空を切る。

「うそお、これでダメなの〜。」

「ただ振り下ろすだけじゃ駄目だよ。しっかりと集中して。」

「こんな感じで4、5回繰り返したら次の人に替わって続ける。」

「天野、お前の所はどうだ？問題は無いか？」

「いえ、特にありません。順調ですよ？」

各グループを見回っている織斑先生が声をかけてきた。

「そうか、後でお前とボーデヴィツヒで模擬戦を行う。」

「わかりました。」

そのまま授業が進み、俺とラウラの模擬戦だ。

「皆が見ているのだ、手本となる戦いをしなければな。」

「そんなに難しく考えないで全力で戦えばいいんじゃないかな？」

「そうだな。織斑先生、準備完了です。」

「こつちも大丈夫です。」

『了解した。では今日の授業のめだ、しっかりとやれよ。試合、開始っ！』

試合開始の合図と同時に飛び込む。

ラウラも同じように飛び込んでくる。

「はあああつー！」

「うおおおおつー！」

それぞれ右腕を構えている。

この状態で使えるラウラの武装は…。

ナイフとプラズマ手刀か。

なら相手の左側面に回り込む。

「読み通りだー！」

こちらが左側面に回り込むのを予測していたらしく即座に左脚の蹴りを放つ。

「こつちもなー！」

ラウラが簡単に側面をとらせる訳がないと踏んでいた俺は放たれた蹴りを利用して左脚を掴む。

「ぐっー！」

「そりゃあー！」

そのまま自分を軸に一回転してラウラを投げる。

「やるなー！」

即座に体勢を整えるラウラ。

その隙を逃さず捕らえる。

「剛腕！大裂斬ー！」

腕のプラズマドライブを稼働させ、叩きつける。

「ちいっー！」

ラウラは咄嗟に腕を交差させて防御する。

「でりゃあつー！」

「があつー！」

その状態から左脚の蹴りを入れる。

「ぐっーだがっー！」

蹴りによって距離が開くと同時にラウラはワイヤーブレードを射出する。

4つの内、3つは弾く事が出来たが1つが脇腹にあたる。

「捌ききれない！流石だなー！」

「2つは当たると踏んでいたのだがなー！」

しばらくはそのまま着かず離れずの距離での攻防が続く。
ラウラのワイヤーブレードに対して俺はヨーヨーで応戦。
ラウラは手数が勝るがこちらはその分一撃の威力がある。

ヨーヨーを回してブレードを弾いたり強引に一直線に飛ばしたり。
気がつくまで授業の時間もそろそろ終わりだ。

「ラウラ、そろそろ時間だ。決めさせてもらう！」
「いいだろう！来い！」

そのまま続けると時間切れで引き分けになるのだがここは専用機
持ちとして決着を着ける事にした。

エネルギーを多めにヨーヨーに送り、エネルギーが溢れバチバチと
音をたてる。

「それ！」
ヨーヨーをラウラに向かい放り投げる。

「甘いぞ！星夜！」

ラウラはA I Cを使い、ヨーヨーを受け止める。

「貰った！」

その隙に展開した新たな武装を使う。

「な、なに！なんだそれは!？」

ビュツと勢い良く降った腕から伸びるワイヤー、その先から放たれ
たもの…。

「ベガさん直伝、ベーゴマだ！」

ヨーヨーよりも小さいベーゴマがラウラの近くに飛んでいき、爆
発。

『ダメージレベルオーバー、試合終了。勝者、天野星夜。』

「くっ…ヨーヨーが囷なのはわかっていたのだが…。」

「でも、次は通じない…だろ？」

「ふっその通りだ。」

ラウラとピットに戻りI Sを解除してクラスの元へ。

「今日の実習レポートは明後日の朝までだHRで回収するからそれま
でに仕上げるように。」

最後にまとめとして軽めの座学を行い授業終了。

「ああ、天野は少し残れ。」

「え？はい、わかりました。」

アリーナ内の講義室から出ようとする際、織斑先生に呼び止められた。

「少し気になるものがあつてな、簡単な確認だ、そう身構えるな。」

「確認…ですか？」

「あのベーゴマ、アルクトスのものか？」

「はい、織斑先生つてベガさんと知りあい何ですか？」

まさかベーゴマに関して聞かれるとは。

「ああ、私が現役時代に何度か会う機会があつてな。あの武器を見て少し気になったただけだ。」

「今はGEARジャパンに居るのでいつでも会えますよ。」

「そうか、今度アルクトスにたまには会いに来てと言つておいてくれ。」

「はい、わかりました。」

「ああ、もう行つていいぞ。時間を取らせた。」

「いえいえ、では失礼します。」

ベガさんと織斑先生は知りあいだったかく。

放課後、生徒会室に向かう。

明日行ふ全校集会の準備の為だ。

「じゃ、明日の流れはこんな感じで♪」

「一夏に接触した理由つてこの為ですか？」

「そうね。今まで星夜くん経由で何度か会つてたけどちゃんと話した事も無かったから。」

「遅刻するタイミングは狙いました？」

「いくえ、偶然よ♪話しかけやすいタイミングがそこだけただけよ。」

あ、これ絶対狙つて話しかけた。

「明日から学園祭に向けた事が色々と始まりますので天野くんにも手伝つて貰う事もあると思いますのでよろしくお願いしますね。」

「はい、わかりました。」

「本音、あなたはもう少ししっかりしなさい。」
「うにゆうく。」

俺と会話しながらも本音さんを起こそうとする虚先輩。

「あ、そう言えば星夜くんは知ってるかしら？学園祭の時にはいくつか外部の企業が展示とか行うのは。」

「はい、知ってますよ。その内の一つがGEARですし。」

専門学校とかの文化祭とかって関連企業が来て、自社アピールとか良くするもんなく。

就職先の候補選定の1助にはなるだろうし。

「この担当責任者のアルテア・アルクトスってどんな人？」

「えっと、報告会で数回見てると思いますけど、和服っぽい服を着た人ですね。責任感の強いいい人ですよ？」

「そう、もしかしたらGEAR関係の対応は星夜くんに頼むかも知れないから覚えておいてね。」

「わかりました。」

しかし、この内容ってすごいなあ…。

「本来学園祭では生徒や来場客による投票で上位を取った部活とかには特別予算が分配されていたのよ。」

「その代わり今回は一夏をその部に入部させると…。」

「これなら平等よね。」

楯無先輩の手にはいつもの扇子があり《争奪戦》と書いてある。

「天野くん、しばらくは運動部に注意してくださいね？」

「えっ?。」

虚先輩に言われ、一瞬首をかしげる。

「学園祭で1位になれる望みの薄い運動部が会長の座を奪う為に襲撃してくると予想されますから。」

「ああ、なるほど。IS学園の生徒会長は生徒最強じゃないといけないんですもんね。」

「そう、その関係で生徒会役員で専用機持ちの君を襲う可能性もあるからね?。」

そう言いながら扇子を閉じて開くと《実力主義》と書いてあった。

「わかりました。気を付けておきます。」

「少し、話が変わりますが。天野くんは誰を呼ぶかちやんと考えていますか?」

虚先輩が聞いてくる。

「呼ぶ?」

「天野くんはご存知ありませんでしたか。学園祭の時には生徒1人につき1枚招待券が渡されるんですよ。」

「なるほど。1人か、中々悩みますね。」

銀河、北斗、エリス……など頭の中で誰を呼べば良いか軽く考える。

「折角の機会ですからよく考えて下さいね?」

「はい、わざわざありがとうございます。」

とりあえず皆の予定とか聞いてみるか…。

翌日、全校集会が行われる。

「あれ?一夏、星夜は?」

「シャルか、なんかいないんだよな。もう始まるのにどこ行ったんだ?」

「先程、織斑先生に何かを言っていたようだから無断では無いだろう。」

クラス毎に集まりつつある体育館にて星夜が居ないことに気がついたシャルロットは一夏に尋ねたが知らなかったようだ。

「星夜さんが抜ける理由、何でしょうか。」

「織斑教官が許可したのなら問題は無いのではないか?」

特に心配することでもない全員がそれぞれしつかりと列に並ぶ。

「では、全校集会を始めます。」

壇上にて司会を勤めるのは本音の姉、虚。

一夏達は彼女が生徒会役員であることをこの場で初めて知った。

「あの人ってのほほんさんのお姉さんだよな?」

「虚先輩だな。」

「生徒会だったんだね。」

「真面目そうな方ですし、ぴったりですわね。」

「しつ、静かに。教官がこちらを見ている。」

知りあいが生徒会役員だったのでつい小声で喋っていたため、軽く千冬に睨まれる一同。

「では、生徒会長からのお話です。」

（生徒会長か、そう言えば今まで見たこと無かったな。）

一夏、いや今年の1年生達は1学期の間、生徒会長を見たことがなかったのでは？ いろんな人物かとイメージしながら壇上を見る。

すると壇上に来たのは一夏達には何度か見たことのある人物だった。

「皆さん、おはよう。今年はゴタゴタが続いてて中々挨拶ができなくてごめんなさい。私は2年生の更識楯無。あなた達生徒の長、生徒会長よ。よろしくね♪」

陽気に挨拶をする楯無に一夏達は驚きを隠せなかった。

「さて、1人紹介するわ。生徒会の新役員、会計補佐に就任する天野星夜くんよ。」

楯無に紹介されると同時に星夜は壇上に上がり、楯無の横に並ぶ。

「え〜。只今紹介に預かりました天野星夜です。会計補佐として今後は様々な行事に関わって参りますのでよろしくお願ひします。」

簡単に挨拶をし、頭を下げる星夜。

一夏達には再度衝撃がはしる。

「さて、皆さんが言いたいこともあるかも知れませんが、それは後に質疑応答の時間でお願ひするわね？」

ざわめいていた生徒達が少し、静かになる。

「皆さん〜」存知だと思いますが今年是非常に多くの、特に1年生が関わる行事に何らかのトラブルが起き、中断や縮小と言ったことが起きています。」

楯無の言葉に一夏をはじめとする1年生の専用機持ちはギクリとする。

「次の行事は学園祭、学園をあげて行われる行事。当然外部の方々も多数お越しになります。よって！今まで以上に盛り上げっ！中断や中止になつた行事の分まで！楽しもうではありませんか！」

楯無が声を大きくする。

一体どうやって学園祭を盛り上げるのか全校生徒の視線は期待に満ちていく。

「その名も！『部活動対抗！織斑一夏争奪戦！』」

いつの間にか起動していた大型スクリーンには一夏の顔写真が映し出されていた。

「なっ——」

「『なっんっだつて——』」

「!!!」

一夏の驚きはその他の全ての生徒の大合唱によって消された。

「生徒の皆さんならご存知の筈ですが！本来全生徒は何らかの部活動等に参加しなければなりません。ですが織斑くんは未だに所属もありません。このまま各部活動が織斑くんに勧誘を行えば彼の学業に影響が出るのは明らかですから学生として本末転倒、ですので一公平和でかつ、公平に決めようと思ったのです！」

ざわざわと騒ぎ出す生徒達。

「毎年学園祭では生徒、教師、来場者からアンケートをとり、その上位の部活動等に対して特別金の配布を行っておりました。しかし、今回はその1位の部活動もしくは委員会には織斑くんが入ります！」

楯無が宣言すると同時に生徒達は喝采を上げる。

また、一夏は未だに状況が把握できずポカンとしていた。

「いつ、一体どう言う事だよ……。」

そのまま全校集会が終わって生徒が各々教室に向かう中、やっと一夏の口から出た言葉はこれしかなかった。

教室に戻った各クラスは学園祭での演し物を決めるためのLHRが開かれていた。

「え、一度皆さんから出た意見をまとめると——」

クラス代表として一夏は意見をまとめる為、黒板を背にクラスを見渡して。

「全部却下だっ！」

バツサリと切り捨てた。

クラスからは大ブーイングの嵐だ。

ちなみに今まで出た意見は『一夏のホストクラブ』『一夏とツイスター』『一夏とポッキーゲーム』『一夏と王様ゲーム』等……………。

『星？鈴のイチャラブ観察』って提案したの誰だ！

匿名の用紙提案だからって調子に乗りやがって！

筆跡鑑定して犯人を追い詰めるか!?

そもそも鈴は2組だろうが！

「そもそもこんなものやって誰が嬉しいんだ！」

「最低でも私は嬉しい！」

「私もだ！」

「ぼっ僕もっ！」

一夏と女子連合軍による演し物論争はずっとこれの繰り返しだ。

ちなみに織斑先生はすでに職員室に居るので山田先生に頼るしかないのだが残念な事に山田先生も連合側だ。

「星夜っ！お前もっ！何か有るだろ!？」

「俺か…………。」

流石にこのままでは先に進まないと判断した一夏はこちらに話を降ってきた。

「ん〜。俺と一夏がこのクラスの強みなのは間違いでは無いけどそれだけだと活かす方向が違うよね？」

「ええ〜だって私たち織斑くんや天野くんと触れあいたいよ〜。」

「そうだそうだ〜。」

欲望に忠実過ぎるだろ、このクラス。

「なら、メイド喫茶はどうだ？」

席から立ちあがり、周りにしつかりと聞こえる声で提案したのは

…………ラウラだった。

「メ、メイド喫茶…………。」

「ラウラ、意味わかって言ってるよな？」

まさかラウラからこのような提案が出るとは思わず、俺と一夏で聞き返してしまった。

「ああ、店員が給仕の服を着て、来店客に接客するのだろ？」

「ああ、間違つてないな。」

「我々はメイド服を、星夜と一夏には執事服を用意して着れば対等だ。それに他のクラスだけでなく様々な人が来るだろう。そうすれば収益も悪くないはずだ。」

スラスラと喋るラウラ。

「星夜と一夏が交互に休憩を取れば『噂の1年1組に来たのに男性操縦者に会えなかった』と言うクレームが来ることも無いだろう?」

「執事服を着た織斑くん達に『お嬢様』って呼んでもらえる…。」

「これなら確かにふれあえる…。」

周りもそれぞれこの意見に賛成のようだ。

「他の意見も無いし、1年1組の学園祭の演し物は喫茶店で——」

「『二意義なくし!!』」

こうして1年1組の演し物は喫茶店：厳密には『ご奉仕喫茶』に決定した。

ちなみにこの事を織斑先生に報告した際、提案者がラウラと知って大笑いしたそうだ。

放課後。

生徒会室で虚先輩と学園祭に向けた書類の準備をしていると一夏を連れて楯無先輩が入って来た。

「楯無先輩お帰りなさい。一夏はいらっしゃい。」

「ええ、ただいま。織斑くんはそこに座ってすぐにお茶を出すから。」

「は、はあ。」

言われた通りに席に座る一夏。

「なあ、星夜はあの人が生徒会長なの知ってたのか?」

「ああ、初めて会ったときに言われた。」

そもそもこの部屋だったし。

「じゃあなんで教えてくれなかったんだよ。」

「聞かれなかったし、教える必要もなかったしな。」

「てか、星夜はあれの事をいつから知ってた?」

「あれ？ああ、一夏を景品にした学園祭の事か？昨日だな。」

「なんで俺に相談が無いんだよ！それに俺は部活動なんてやってる余裕が無いのは知ってるだろ!？」

一夏がすごい勢いでこちらに迫ってくる。

「一夏が言いたいことも解るが楯無先輩も言ってただろ？『生徒は部活動等に参加しなければならぬ』って。未だに何の所属も無いのはお前だけだ。」

「でもよ、どうして学園祭で決めることになるんだよ。」

「お前が何も参加しないせいで各部活動とかから大量の苦情が来ていてな。」

「そ、そうなのか。」

苦情が来てることを知り、少し落ち着く一夏。

「そもそもお前、前にシャルの件で『俺、勤勉だから校則もちゃんと覚えてるぞ』みたいな事言ってたよな？その校則の中に書いてあるぞ。」

「あ…。」

硬直する一夏。

お茶を入れた楯無先輩と虚先輩、そしてさつきまで寝ていたがお茶会と聞いて復活した本音さんがケーキを持ってきた。

「まあ、織斑くんにも言いたいこともあるでしょうけど、このまま放っておいたらさつきみたいな勧誘があるかも知れないわよ?。」

楯無先輩が一夏を脅すような口調で言う。

さつきみたいな、とは一夏を賞品にした学園祭での勝ち目の無い運動部の生徒達が襲撃してきた事を言うらしい。

「ラウラやシャルだって部活動をやってるんだ。お前だけがやらない訳にはいかないんだよ。」

「わかったかしら?。」

「た、たしかにそうかも知れませんが。」

「大丈夫、その代わりに、私が織斑くんの事を鍛えて上げるわ。」

「遠慮します。」

楯無先輩の提案を断る一夏。

「なんで断るのかしら?」

「既に皆から教わってるので。」

「ねえ星夜くん。」

「なんですか? 楯無先輩?」

一夏を見たままこちらに問いかける楯無先輩。

「君はどう思う?」

「楯無先輩の指導ですか? 確実に実力は上がると思います。」

「だ、そうよ?」

「星夜は関係ありません。そもそもなんで指導する話になるんですか?」

「それは君達がまだまだ弱いからよ。」

「……そんなに弱くないと思いますが。」

楯無先輩に『弱い』と言われ少しムツとする一夏。

「いいえ、弱いわ。星夜くんもあなたも。だから少しでもマシになるように鍛えてあげるわよ。」

「じゃあ、勝負しましょう! それで負けたらしたがいします!」

一夏は立ちあがり、楯無先輩に挑戦状を叩きつける。

「ええ、いいわよ。」

対する楯無先輩は笑って答えた。

その後、一夏と楯無先輩は勝負の為、部屋を出ていった。

「天野くん、先程の話、あなたも対象になってましたが何も言わないんですね?」

「既に先輩の実力を目の当たりにしてますし、現役の国家代表と専用機貰って半年の間じゃ月とスッポンも良いところですよ。」

虚先輩と書類仕事をしながら話す。

確かに弱いと言われて気にならない訳では無いが事実なので何も言えない。

「冷静ですね。」

「きつと簪さんと楯無先輩の勝負を見てなければ一夏と同じ反応してましたよ。」

「なるほど。少し話が代わりますがいいですか?」

「なんですか？」

何か虚先輩が俺に聞きたい事があるのか？

「いえ、先日偶然にも天野くんのご友人に会いまして。」

えっと…虚先輩が知ってる友人…北斗かな？

「喫茶店に居た北斗ですか？」

「はい、少しお話をしたのですが彼はなかなか博識ですね。」

「そうですね。北斗は文武両道をしっかりと出来る奴ですからね。あと、あいつは面白い特技を持ってるんですよ。」

「あら？なにかしら。」

「スポーツとかで手本を1回見せるとほぼ同じ動きが出来るんです。」

「それはすごいわ。」

北斗の特技を聞き、驚く虚先輩。

「予定が合えば学園祭にも来ますよ。その時に見れるかも。」

「そうですね。それは是非見たいわね。」

そんな会話をしながら書類を2人で片付ける。

ちなみに本音さんはほぼ寝てました。

「さてと、学園祭は誰を誘うかな……。」

書類仕事が終わわり、部屋に戻って招待状を使って誰を呼ぶか考えていた。

「そろそろ皆からメールの返事も来てるかな？」

友人達に送ったメールの返信を確認する。

「おっ来てるな。」

あくまで1人しか招待できないので5人程しか送ってない。

「ん〜。どうするかな。」

2人まで絞れたけどどっち呼ぶかな……。

そんな風に考えているとドアがノックされる。

「星夜、居るか？私だ。」

「ラウラ？どうかしたの？」

珍しくラウラがやって来た。

とりあえず部屋に入れてお茶を出す。

「いや、星夜に提案があつてな。」
「提案？」

「なんだろうか？学園祭の演し物の事でかな？」

「LHRの際に招待状が配られただろう？」

「うん。」

「恥ずかしいことに私には招待する友人がいないのだ。軍の部下達もスケジュール的に厳しくてな。」

「ラウラは今日配られた招待状を出して続ける。」

「そのまま無駄にするのも勿体ないだろう？だから星夜が使つてくれないか？」

「そう言う事なら喜んで使わせてもらうよ。ありがとうラウラ。」

「渡りに舟つてこう言う事かな。」

「招待状が2枚になったので2人とも誘えるぞ。」

「いや、日頃から迷惑をかけているしな。それに余り物みたいな物だ。気にするほどじゃない。」

「いやいや、今2人の内どちらを誘うか考えていた所でね。両方誘えるのはありがたいよ。」

「そうか、なら良かった。」

「笑うラウラにこちらも笑顔で返す。」

「そうだ、今日の特訓で楯無先輩が来たのだが星夜は知っていたか？」

「ああ、生徒会室で話してるのは聞いた。」

「やはり、現役の代表はすごいな。」

「恐らく一夏と箒さん以外は楯無先輩が現在のロシア代表であることは知ってるだろう。」

「今日、一夏に対して行っていた指導を見て感じたそうだな。」

「今日は指導しているだけだったがその内容でどれだけ実力があるかは解る。」

「生徒会長でロシア代表だからね。ホント、すごいよ。」

「普段の態度からは全く想像がつかなかった。」

「そうだね。今日はどんな事やってたか教えてくれない？」

「ああ、いいぞ。まずは――」

ラウラからその日の特訓の内容を聞いて復習しておく。

「星夜はP I C制御は出来るか？」

「ああ、じゃないと出来ない技もあるからね。」

「そうか、なら問題は無いだろう…む、もうこんな時間かそろそろ失礼する。」

「うん、色々ありがとう。また明日ね、おやすみ。」

「うむ、また明日。」

ラウラは部屋を出て、まっすぐに歩いていった。

「あ、招待状の準備してから寝るか。」

ラウラから貰った招待状も合わせて2枚分、発送する用意をしてから俺は眠りに着くのだった。

第51話 《学園祭準備中!》

9月。

学園祭に向けて授業の合間に色々と用意をしているISS学園。

俺―天野星夜―はクラスで当日に着る執事服のチェックをしていた。

「よし、これでどうかな?」

クラスメイトから渡された服を着て教室に入る。

『「ぶ〜!」』

教室に入るなりダメ出しを喰らった……。

ああ、何となくわかった。

「んん、これでよいでしょうか?お嬢様。」

『「オツケーっ!」』

服を着たらスイッチ入れろって事か……ほんと皆物好きだな。

「うん、やっぱり2人とも似合ってる。」

「よし!写真だっ!今のうちにツーショット写真を!」

「そうだね!当日は忙しくて撮れないだろうし!」

「これはクラスメイト特権だねっ!」

俺より先に着替えていた一夏共々ケータイ等のカメラを向けられる。

「ど、どうするよ?星夜。」

小声で聞いてくる一夏。

「本日は当日に向けての練習、なら写真を撮影することも必要ですよね?お嬢様?」

あえてクラスメイトに向かって答える。

「そ、そうそう天野くんわかってる。」

「ほら、織斑くんも!」

「皆様、落ち着いて下さい。こう騒がしくしていると織斑先生に怒られますよ?それに他のクラスの方が押し掛ける可能性もございませぬ。」

「え、ええ星夜さんの言う通りですわね。」

こちらの言葉にセシリアさんが頷く。

「よし、星夜。まずは『執事にご褒美セット』と『執事のご褒美セット』の練習だ。」

うへえ、なんかラウラがさらつと難易度高い奴を要求してきてるぞ。

「一夏、お前もだ。」

「はやく、こつちこつち。」

一夏を捕まえたシャルと箒さんは隣のテーブルに引きずって行く。

「かしこまりました。ラウラお嬢様。」

ラウラに向かって笑顔で答えると急に顔を赤くするラウラ。

「こ、これは以外と恥ずかしいのだな……。」

俺と一夏にとっては地獄のような特訓？が始まるのだった。

クラスメイトに通りの練習を兼ねた接客対応を行ない疲労困憊となった俺と一夏。

「つ、疲れた……主に精神的に……。」

「ああ、マジで疲れた……。」

執事服から制服に着替え、教室で机に倒れこむ。

「大変だっ！織斑くんと天野くんがお疲れだっ！」

クラスメイトの誰かが芝居がかったように言う。

「誰かつ！この2人を癒せる者は居らんのかっ!？」

「「ここに居るぞっ!」」

その言葉に合わせるようにメイド服に着替えていた箒さん、シャル、セシリアさん、ラウラが俺と一夏を囲む。

「えっ……?？」

俺と一夏がシンクロする。

「さあ一夏、たっぷりと奉仕してやろう。」

「一夏、お疲れ様。コーヒーでも飲む？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。これより、天野星夜に奉仕活動を開始する。」

「さあ、チエルシー直伝の奉仕術！覚悟して下さいましっ！」

「これを、俺達にやる意味あるのかー!？」

残りの力を使って突っこみを入れる。

「あるよ！当日は男の人も来るからねっ！」

「少しでも耐性を付けないとさっ！特に専用機持ちの皆は今回のお店の看板なんだから！」

「さあ！早くやって！後がつかえてるよ！」

「全員分やるのかよっ!?」

今度は攻守逆転……精神的には追撃だったが……。

「せーいやつ！」

「鈴か…どうかした？」

廊下をふらふらと歩いてると鈴が後ろから声をかけてきた。

「ただ見かけたから声かけただけよ。そっちこそ、どうしたの？軽く死にかけてるけど？」

「いや、クラスで演物の練習でな……。」

「あー確か御奉仕喫茶だっけ？こっちに客来るのかしら……？」

鈴が納得しながら当日の事を危惧する。

「そっちも喫茶店なんだっけか。」

「そ、飲茶喫茶ね。」

「まあ、被ったのは偶然だからな。頑張ってくれ。……俺も死ぬ気でがんばる……。」

「そんなになるってどんなことしてたのよ?」

「執事服来て奉仕活動の予行練習。」

「クラスメイトに?」

「ああ、セシリアさんとかラウラに。」

それを聞いた瞬間、鈴は羨ましそうに。

「今からあたしにもやりなさいよ。」

「断る。」

「なんでよ!?!」

「だだでさえ疲れてるのにそんなのやってられるか!そんなにやってほしけりゃ当日来い!その時は歓迎してやる、盛大にな!」

「いいわよ!絶対に一番に並んでやる!」

「クラス代表がそれでいいのか？」

「いいのよ。代表特権よ。」

うわあ〜横暴だあ〜。

「ああそう。じゃ俺はこれで。疲れてるから部屋で休みたい…。」

「なら、折角だからこれ、食べなさいよ。」

鈴が小さい包みを出してきた。

「これは？」

「芝麻珠、日本だと胡麻団子って言えばわかるかしらね？疲れてるなら甘いのは調度いいんじゃない？」

「あ、ありがとう。」

鈴から包みを受けとる。

「いいのよ、どうせメニューの練習で沢山作って余ったやつだから。じゃあね〜。」

鈴と挨拶してわかる。

部屋に帰ってから食べたがやっぱり市販の物よりもこう言う物の方が美味しいな。

いや、これはこんどお礼をしないと。

翌日の放課後。

「せつ星夜あつ!?!」

「一夏、いきなりどうした？」

若干涙目になった一夏がこちらに向かって走ってくる。

「き、来てくれ！」

「わ、わかった！わかったから引っ張るな！」

こちらの腕を掴むなり走り出す一夏。

ついた先は一夏の部屋の前だった。

「こ、この中にな……。」

「ああ、なんかいるのか？」

「と、兎に角頼む。」

「……はあ、わかったよ。」

仕方ないのでゆっくりと扉をあける。

「おかえりなさあい♪私にする？私にします？それともお…わ…た…し？」

扉をあけると裸エプロン姿の楯無先輩が立っていた。

「一夏、こう言う時は俺じゃなくて虚先輩か簪さんに報告した方が効果的だぞ。」

そう言いながら俺は携帯を取り出し通話の準備をする。

「ちよっ!?星夜くん!どこにどう連絡する気かしら?」

「え?簪さんに『君のお姉さんは男子の部屋に潜り込んで裸エプロンを見せるのが趣味なんだね。』って言うつもりですか?」

「そんな風に言われたら勘違いされてまた嫌われちゃう!」

簪さんに軽蔑される未来でも見えたのかあわてふためく先輩。

「じゃあ周りに迷惑がかかることするのは止めましょうか?」

「私はただ、一夏くんをびっくりさせようとしただけなんだけど。」

「びっくりしすぎて軽いパニック起こしてますからね?」

「な、なんでここにいますか!」

やっと状況が理解出来た一夏が俺の後ろから楯無先輩に聞く。

「今日から私、ここに住もうと思ってるね。」

「へ…?」

「はあ?」

突然の発言に俺と一夏は気の抜けた返事をする。

「こ、ここは一年寮ですよ?」

「生徒会長特権!」

なんか聞く方向性を間違えてるような気のする一夏の質問にいきなり切り札を持って答える楯無先輩。

「ふふ、噂の一夏くんと同棲生活。これは楽しめそうね♪」

「一夏、こうなったらこの人は止まらないから諦めろ。」

「な、星夜!見捨てないでくれ!」

踵を返し、帰ろうとする一夏が腕を掴んで来た。

「折角美人のおねーさんが誘ってるのにそっちを取るの?つれないなあ〜一夏くん♪」

その腕を楯無先輩が払い、一夏を後ろから抱き付いている。

裸エプロンに見えていたがエプロンの下にはしっかりと水着を着ていたようだ。

そんな格好の楯無先輩に密着されているのだから色々柔らかい物が当たって思春期の男子としては平然とはしていられないだろう。

「じゃ、一夏。また明日な。」

「ま、待ってくれ！」

「ほらほらあく。星夜くんもああ言ってるんだから。楽しみましょうよ♪」

騒ぐ一夏に背を向けたままドアに向かうとドアが開いた。

「一夏、差し入れを持ってきた。しかし鍵を開けたままなのは用心だぞ。」

入ってきたのは包みを抱えた箒さんだった。

「や、やあ。」

「む？星夜か。一夏はどうし……」

目の前に居た俺に気づきそのまま部屋の主である一夏を探す箒さん。

まあ、少し俺との軸をずらせばすぐ見えるんですけど。

この数秒の間に何があったのか後ろから抱き付いていたはずの楯無先輩と一夏のたち位置が入れ替わっており、ベットに押し倒したような感じになっていた。

当然、そんな一夏を見た箒さんが冷静でいられるはずもなく。

「……………どけ。」

「はいっ!!」

俯いた顔の表情は見る事が出来ないが、確かな殺気を持って放たれた小さな言葉に俺は恐怖を感じ速やかに道を譲る。

手に持った包みを俺に押し付けるように渡した箒さんは一歩一歩確実に歩み寄る。

「あ……………あ……………」

一夏は弁明しようとするが箒さんから放たれる殺気に怖じけ付いたのかなかなか口が動かないようだ。

こんな状態でもニコニコ笑ってる楯無先輩ってすごいな。

「一夏あ……。」

「ああ……なんだ？……箒。」

なんとか受け答えた一夏。

「あの世で悔いろっ！」

箒さんは言うのとはほぼ同時に直立の状態から腰を落とし、その手に空裂を展開し、振り抜く。

神速と言っても過言では無かったであろう。

そのままいけば一夏の首を切り落とすはずの切っ先は楯無先輩が展開したランスで防がれた。

「なかなかの速さね。すこーし焦ったわ。」

「なっ!？」

「今、一夏くんを亡き者にされるとちよつち困るのよね。」

居合いの振りは速さを求めた型であるため、一度防がれると弱いと聞く。

今も楯無先輩が軽く手を動かすと刀は軽く弾かれ、天井に突き刺さった。

「ぐっ……ま、参りました。」

「うん、よろしい。」

敗けを認め、膝をつく箒さん。

勝ち誇り、どや顔で仁王立ちする楯無先輩。

余りの事態に動けない一夏。

「あっ。」

ふと天井に刺さった刀を見るとちようど自重により天井から抜けて、一夏の目の前に突き刺さる。

「あ、あぶねえ……。」

一夏って運がいいのか悪いのか……。

その後、楯無先輩は制服に着替えて、箒さんが持ってきた包みに入っていたいなり寿司を4人で食べている。

「ふむふむ、箒ちゃん文武両道ね。料理も美味しいじゃない。」

「外の油揚げに味がしっかりと染みてる。それでいて後味もしつこくない。旨いな。」

「い、いや。それほどでも。」

「謙遜しなくてもいいのよ？美味しいわよね？一夏くん？」

「は、はい…そうですね。」

箒さんを得意の口八丁で丸め込めた楯無先輩。

これにより、楯無先輩に対しては警戒心を解いたようだが一夏に対しての怒りは収まってないようだな。

そんな視線にさらされているためか一夏は余り食が進まないようだ。

俺と楯無先輩でどンドン食べる。

「んく。ぐちそうさま♪」

「ぐちそうさまでした。」

2人同時に手をあわせる。

それを追うように一夏と箒さんも頭を下げる。

「じゃ、俺は部屋に戻るか。また明日な。」

「お、おう。また明日。」

みんなに挨拶して部屋を出た。

しかし、楯無先輩は一夏と一緒に住んで何するつもりなんだろうか…。

学園祭に向けて色々やってはいるが日々の授業や特訓は当然ある。

今日はアリーナで一夏の射撃練習に付き合っている。

「ちくしよ〜！星夜は出来るのかよ〜！」

「PICのマニュアルなんて一番最初に教わったぞ。」

元々教えてくれたベガさんが高機動射撃型だったのもあるだろうが。

お陰で空中でも地上と同じように技を繰り出せるんだが。

『星夜くん！狙いが甘い！もつとしっかり撃ちなさい！』

「了解っ！」

今、俺と一夏でサークル・ロンドと呼ばれる機動を取っている。

具体的に言うとも相手から一定距離を保った状態で左右どちらに常に移動し続ける機動だ。

上から見るとお互いの中間点を軸に円を描く機動になる。

本来、この状態でお互いのマシンガン等の面制圧力の高い射撃武器で牽制し、隙を見つけたらスナイパーライフルのような高火力武器で叩くのが定石だが、一夏には荷電粒子砲しか無いので基本的に避けるに徹して近距離に持ち込める隙を伺っている。

「やっぱり白式の加速は凄いな。」

『一夏くん！そこで瞬時加速！早く！』

「えっ!? あっはいつ! っつうあわあゝっ!」

楯無先輩からの指示でサークルロンドの機動から瞬時加速を使ううとして制御を誤ってアリーナの壁に突っ込む一夏。

「おい、一夏、大丈夫か?」

「な、何とか……。」

『瞬時加速の準備をしながらもP I Cの制御を忘れちゃダメよ?』

「は、はい。気を付けます……。」

『星夜くんはもう少し射撃を当てれるようにしないと射撃だけで戦う時に厳しいわよ?』

「そうですね。未だにシャルやラウラには上手く当てれないですし。」

『そろそろ終わりにしましょう。ピットに戻って来てね。』

「わかりました。」

一夏とピットに戻る。

「うん、最初の頃より大分良くなったんじゃないかな?」

嬉しそうに笑う楯無先輩の手には《進歩》と書かれた扇子。

「でも、先輩から見たらまだまだでしょう?」

「でも、前進しているのは確かよ? 頑張って続けましょう?」

「はい、お願いします。」

楯無先輩からいくつかアドバイスを貰って今日の特訓は終了。

「じゃあ、当日はG E A Rの方では自分がやることはない感じですかね?」

『そうだ、君はあくまでI S学園の生徒だ。しっかりと楽しむといい。』

学園祭ではGEARも来るのでそちらとの連絡は自分が請け負っている。

当日の担当者になっっているアルテアさんと通話中だ。

「GEOSは持ってこないんですね。」

『あんなことがあったからな。むやみやたらと出せなくなっただけ。代わりにGEOSに使われている技術関連の展示で落ち着いたからな。』

そうだよなあ、折角の試作機持っていかれた訳だし持ってこないよなあ。

「では、この資料通り特に変更無しと学園には伝えます。」

『ああ、よろしく頼む。』

「はい。あ、そう言えば。」

『どうかしたか?』

「織斑先生とベガさんって知り合いなんですね。」

『ああ、彼女とは2人が現役で代表だった頃からの付き合いだ。私も面識はある。』

なるほど、そう言えばベガさんって短い間だけど代表だったとか言ってたな。

「そうだったんですか。もしかして剣で戦ったとか?」

『ああ、未だに決着がつかなくてな。』

「——え?」

決着がつかない?

そんなことあるのか?

『何度も打ち合っているうちにお互いの得物が持たなくてな。碎け散って終わってしまうのだ。』

「そ、そうなんですか……。」

人外同士の戦いですかそれは?

見たいような見たくないような……。

『ふむ、学園祭の時にでも話す機会はあるだろう。向こうにはよろしく言っておいてくれ。』

「わかりました。では。」

通話を終える。

「GEARは予定に変更無しと……。」

手元の書類に必要事項を記入、職員室へと向かう。

「GEARの方は特に変更はありません。」

「ああ、わかった。報告ご苦労。」

織斑先生に書類を渡す。

「向こうの担当はアルクトスの兄か、こちらも久しぶりだな。」

「アルテアさんも言っていましたね。久しぶりだって。」

「そうか。近いうちに勝負したいものだ。」

「ずっと決着がついてないんですよね?」

「ああ、あれほど心踊る戦いは無いな。」

「な、なるほど。」

心なしか織斑先生が嬉しそうに見える……。

「クラスの準備も順調で良かったです。」

自分の言葉に反応して大きく溜め息を吐く織斑先生。

「どうしたんですか?何か問題が?」

「いや、更識のやつがあんなことを言ったせいで部活や委員会なんか
が色々と問題を起こしかねない演物をな……。」

ああ、自重しなかったんですね。

「お、お疲れ様です。」

「お前からも更識に言っておけ、これ以上の騒ぎにはするなど。」

「はい、伝えておきます。」

「まあ、焼け石に水……。」

「今回は騒ぎが大きすぎますね。」

苦虫を噛み潰したような顔をしている織斑先生。

「クラスの方は自分達でしっかりと纏めますので安心してください。」

「ああ、頼むぞ。」

「あ、星夜くん。少しいいかな?」

「ん?どうしたの?簪さん。」

ある日、簪さんに呼び止められた。

「あの、私のクラスが演劇をやるのは知ってるよね？」

「うん、簪さんが主役なんですよ？」

主役の部分を気にしてか顔が紅くなる簪さん。

「そ、それで劇の演出でデータウエポン達を貸してもらいたいなつて。」

「ああ、そう言うのならいいよ。」

「本当に!？」

「うん、こっちは喫茶店だし、あいつらも暇だしね。」

「ありがとう！早速今日から練習するから借りるね。」

「いいよ。はい、転送。」

電童から打鉄式式にデータウエポン達を移動させる。

「終わったら適当に帰るから。」

「うん、わかった。またね。」

「じゃあね。」

劇であいつら使うってどんなのやるんだろ？冒険物？

「あいつらも楽しめるならそれでいいか。」

こうして段々と学園祭に向けた準備が進んでいくのであった。

第52話 《学園祭開催》

「では皆さん、明日は学園祭本番となります。外部の方も沢山いらっしやるので頑張つて盛り上げて楽しみましょう！」

学園祭を翌日に控えた教室でクラスに声を掛ける山田先生。

全ての飾り付け等が終わり、普段とは完全に変わった学園内。

こんな環境では全員気が緩んでも仕方ないだろう。

「明日はまず1時間は俺と一夏は接客と…。」

「で、その後は星夜と俺で交代しながら、だな。」

俺―天野星夜―は一夏と明日の流れを確認していた。

「まあ、そんな暇があるか怪しいけどな。」

「そうか？」

「一夏、入学した直後を思い出してみろ。学園中の生徒がほぼ全員見に来てたろ？」

「ああ、そうだな？」

こちらの言われてイメージする一夏。

「外部から来た人たちも同じだろう。だからほぼ休みは無いかもって思っておけ。」

「ま、まじか…。」

がつくりとする一夏。

「逆に客が来すぎて俺達を外に出す可能性もあるかもな。」

「な、なるほど。」

さて、明日はどんな1日になるかな…。

—————
そしてついに始まった学園祭。

実際には開催30分前から入場が出来るのでそのうちに好きなところへ行って並ぶのだが…。

「多すぎだろ…。」

「な？言つたろ。」

並んでる人の列を見て一夏が驚く。

既にこの時点で待ち時間は1時間を超えるかも知れない。

「とにかく、整理券渡しして一度離れてもらおう、このままだと隣でやる2組に迷惑がかかる。」

「うん、天野くんの言う通り整理券作っておいて良かったよ。」

受付担当の相川さん達に話して並んでる人達に対応してもらおう。

「問題にならないように気を付けないとね。」

「そうだな。列の整理や空いたテーブルの片付けは早くやらないとクレームが出るかもしれん。」

「ここはお互いの声かけを密に行いましょう。」

ラウラやシャルが接客を行うクラスメイトと話している。

「後5分か…。」

ちらつと時計を見て接客の流れを再度確認、よし。

「よし！各模擬店開始時間だつ！皆！頑張つて楽しもうつ！」

『おーーーーーっ！』

一夏の号令に皆の声が重なる。

入口を開き、人が入ってくる。

「いらっしやいませっ！」

こうして非常に大変な時間が始まった……。

IS学園、校門。

今日は学園祭の為、いつもは閉まっている門は全開であり、真ん中には受付用のテントが出ていた。

「うっひゃー！門からしてすげえなっ！」

「大声出さない。変な目で見られるよ。」

門を見てはしゃぐ銀河を嗜める北斗。

「島が丸ごと学校てのがすごいよな。」

「正確には人工島だけどね。」

2人は話ながら受付に行こうとする。

「ああんっ!!どうゆうことだよー！」

「先程からご説明しています通り、招待状の無い方は入場できません。」

受付では何人かの男達が怒鳴り声をあげている。

「銀河、あれって……。」

「ああ、俺達の学校の不良グループだな。初日に俺達に喧嘩売ってきたから覚えてる。」

聞こえる会話は無理やり入ろうとしている不良グループと止める受付係と言った所か。

「あいつらのせいで俺達の評判まで悪くなっちゃう。こらしめるか。」
「そうだね、素早く済ませよう。」

2人は近付く。

「おい！他所まで来て迷惑かけてんじやねえよ。」

「これ以上の騒ぎを起こすつもりなら、学校にもしつかりと報告するよ。」

「ああっ!? て、てめえらは!?!」

銀河と北斗を見て驚く不良グループ。

「て、てめえらなんでこんなところに居んだよ!?!」

「はあ? それはこっちの台詞だぜ?」

「どう考えても君たちにIS学園の知り合いは居なさそうだけど?」

「う、うるせえ! てめえらが招待状持ってんなら寄越しやがれ! 野郎共! やっちまえ!」

叫ぶと同時に2人を囲むように不良達が動く。

「はあ…やれやれ…。」

「悪い奴には容赦しないぜ!」

2人はそれぞれ囲む不良達の司令塔役を見抜き即座に距離を詰める。

「速攻で!」

「決める!」

アッパーカットの要領で相手の顎に掌底を叩き込む。

「かつ……。」

「うえ!?!」

不良達がびびり、腰が引けた瞬間を見逃さず2人は一番奥で傍観していたリーダー格の男に詰め寄る。

「ひっ…!?!」

「遅いっ!」

北斗がしゃがみながら足払いを掛ける。

体勢が崩れ、前に倒れそうな所で銀河が額に拳を叩きつける。

「あがつ……」

男はそのまま倒れる。

『「り、リーダーっ!?!」』

不良達が声をあげる。

「ほら。ちやちやつと持つて帰れっ!」

「この件はしっかりと報告しておくから覚えておくように。」

倒れた3人を残った奴等がすぐに担いで逃げ出した。

「お騒がせしました。すみません。」

2人は周りの人達に対して頭を下げる。

「いえ、対処していただきありがとうございます。草薙くん、出雲くん。」

虚が2人に礼を言い丁寧に頭を下げる。

「ん?なんで俺の事知ってんのだ?」

「星夜から聞いてたんじゃない?」

虚が銀河の事を知っていたので少し驚く2人。

「夏のプールでの障害物競争を見ていましたから。」

「ああく!あの時かっ!」

「はい。あ、招待状の確認をさせていただきますね。」

「あ、はい。これです。」

「ちよつと待ってくれ…ほいっ!」

2人は招待状を出し、虚に見せる。

「ありがとうございます。では、お楽しみください。天野くんのクラヌは大盛況のようですので気を付けてくださいね?」

「わかりました。」

「おうっ!」

虚からパンフレットを受けとり、2人は歩いて行った。

「12番！空いたからすぐに片付けてっ！」

「織斑くん！次は4番！天野くんは8番！」

「オーダーっ！コーヒーマー、カフェオレ2！」

「サンドイッチセット出来たよ！持って行って！」

模擬店開始から1時間ほどたったが客足は勢いを増すだけだ。

俺と一夏は1テーブル5分と決めて対応しているがそれでもこれは大変だ。

「お待ちせいたしました。鈴お嬢様。」

「ほんと、こっちは大盛況ね。」

次のテーブルに向かうと座ってるのは鈴だった。

こいつ本当に来やがった。

華やかなチャイナドレスに身を包んでいたが顔は少し不機嫌そうだった。

「ええ、お陰さまで常に満席となっております。さて、ご注文はどうされますか？」

「この『執事にご褒美セット』と『執事のご褒美セット』の差は何？」
「やっぱりそれか！ちくしょう。」

「文字通りに自分もしくはは一夏と一緒におやつセットを食べる物ですが、『執事にご褒美セット』はお嬢様が自分に『執事のご褒美セット』は自分がお嬢様に対して食べさせる違いがございます。」

説明を聞き少し顔を紅くしながら考えた鈴は口を開く。

「じゃあ『執事のご褒美セット』で。」

「かしこまりました。『執事のご褒美セット』ですね。お飲み物はどうぞされますか？」

「紅茶、冷たいので。」

「はい。少々お待ちください。」

お辞儀をし、席から離れて注文の品を取りに行く。

「オーダー、執事のご褒美セット、飲み物はアイステイラー。」

「はいー！」

隣の教室で調理担当にオーダーを伝える。

「甘々空間はほどほどにねっ？」

「そんな空間作る訳無いだろ…」

予想通りの事を言われながらトレーにお菓子とアイステイーを載せて席へもどる。

「お待たせ致しました。」

「ん、ありがとう。」

鈴の前に飲み物を置き、自分の手元にお菓子を置く。

「さて、どれからお食べになられますか？」

「ん〜と…。」

皿の上にあるお菓子を見て考える鈴。

「…ポッキー。」

「はい、かしこまりました。」

心を無にしてポッキーをひとつ摘まんで鈴の口元に運ぶ。

「あ〜ん…。」

サクサクと音をたてながら食べる鈴。

「いつもと同じお菓子でもシチュエーションが違うだけで変わるものね…。」

「そうですか。それは良かった。」

鈴が嬉しそうに言う。

「次は—」

そのまま鈴が言う通りに次々と口元に運ぶ俺だった。

「鈴お嬢様、名残惜しいですが時間です。」

「ん、そうね。このまま出るからお会計お願い。」

お菓子を食べ終わり、少し話していると時間になった。

「はい、かしこまりました。会計はあちらです。」

出口側を指し、誘導する。

「あ、天野くんはそのまま休憩だから行ってらっしゃい。」

「…いいの？まだ沢山並んでるけど？」

「いいのいいの、むしろ天野くんが外に出ればとりあえず男性操縦者が見たいって人の気がすむかもしれないじゃん？」

「このままだと2人とも休めずに終わりそうだからね、鳳さんとデートでもしてきなよ〜。」

ニヤニヤしながら答えるクラスメイト達。

「あら、それなら持つてくから。」

「えっ？マジなのか!？」

聞くや否や俺の腕を掴み、引きずる鈴。

「どうぞどうぞ。」

「ありがとうございます。」

手を振るクラスメイト達。

「なっ！星夜さんがっ！それならば私も……っ！み、皆さん！何故っ！私を抑えるんですの〜!？」

「星夜、茶道部に来る約束を忘れるなよ？」

俺達を見ていたセシリアさんとラウラがそれぞれ反応する。

「わかつてる。ラウラ、後でな。」

なんか、セシリアさんに関しては何にしないでおこう…。

「じゃ、どこから回る？」

「そもそも鈴のクラスは放っておいて大丈夫なのか？」

「さつきも言ったでしょ？1組のおかげで閑古鳥が鳴いてるのよ。」

「それはすまない…。でも、あの胡麻団子はうまかったな。」

「何人かで作った料理をパックに詰めて売りに行ってるわ。」

「おっ星夜発見だぜ。」

「よかった。星夜のクラスは2時間待ちって言われてどうしようかと思っただよ。」

「北斗に銀河じゃないか思ったよりも遅かったな。」

鈴と話していると北斗と銀河が声をかけてきた。

「あれ？なんであんたは2人呼んでるのよ？招待状は1人に1つでしよっ。」

「ん？ラウラが使わないからってくれたんだよ。」

「へえ〜。」

俺が2人呼んでる事に疑問を感じた鈴が聞いてきたので答える。

「そうなんだ。その人にはお礼を言わないとね。」

「そうだな。紹介してくれよ！」

「ああ、茶道部にいるから後で一緒に行くか。」
話をしていると鈴の携帯が鳴る。

「ん？なんだろう……。もしもし……。えっ？……。マジ？……。わかった
すぐに戻るわ。」

鈴は携帯をしまう。

「急に客が入るようになって人手が足りないからあたしは戻るわ。」

「そうか、頑張れよ。」

急ぐ鈴を見送る。

「よし、折角だから3人で回るか？」

「おう、いいぜ。」

「僕も賛成。」

そんなこんなで3人で回ることに。

「あ、GEARも来てんだな。」

「ああ、IS関連の事もやってるからな。」

銀河がパンフレットを見ながら気づく。

そう言えばこの2人はGEARのバイトやってたな。

「吉良国さんいるかな？」

「吉良国さんは居なかったと思うぞ。」

「どんなの出してるか気になるから行こうぜ？」

3人でGEARの展示場へ。

「む？君達か。こんにちは。」

「天野か、クラスの方はどうだ？」

GEARの展示場ではアルテアさんと織斑先生が話していた。

「あ、アルテアさん、こんにちは。」

「こんにちは。」

「こんにちはアルテアさん、クラスは大盛況ですよ織斑先生。」

挨拶を返す。

「そうか、特に問題も無いようだな。その2人がお前の友人か。」

「はい。小学生の頃からの友人です。出雲銀河と草薙北斗です。」

織斑先生に2人を紹介する。

「出雲銀河です。星夜とは家の道場で一緒にやってきました。」

「草薙北斗です。2人と違って格闘技とかはやってはないですけどそれなりに運動は得意です。」

2人は頭を軽く下げる。

「私は天野のクラス担任の織斑千冬だ。今日だけだが学園祭、しっかりと楽しんでくれ。こちらは見回りがあるので失礼する。アルクトス、後でな。」

「ああ。」

織斑先生は他のGEARスタッフに軽く挨拶しながら歩いて行った。

「あの人が…。」

「ブリュンヒルデ…。」

「そうだ。公式戦に置いて一度の不戦敗を除きすべてを勝利した者だ。」

「本人はそう呼ばれるの嫌いみたいですけど。」

「ありやあ今の俺なんかじゃ勝てる気がしないぜ。」

「ああ、俺も銀河も踏み込む前に切られて終わるな。」

全員で織斑先生が歩いて行った方を見ていた。

「さて、皆はどうしたんだ？ここに展示してある物など今更見る必要も無かろう？。」

「え？銀河と北斗も見たことあるの？」

この2人ってパークのアトラクションとかのバイトじゃなかったか？

「うん、何度か見させてもらったよ。」

「おう。カッコいいよな。あれ。」

「GEOSの可動データを取るのに若い人のデータも欲しいと開発部から言われてな。」

「なるほど。」

「千冬も言っていたが中々来れる所では無いのだから楽しむといい。」

「そうですね。では。」

アルテアさんやGEARのスタッフに挨拶をしてから離れる。

「お、そろそろいい時間だ。茶道部に行こう。」

「えっと、招待状をくれたラウラちゃんって娘がいるんだよね？」

「そ、茶道部らしく、中庭で野点やってるらしい。」

「作法とか堅苦しいの嫌いなんだよね。」

茶道と聞いて銀河は堅苦しく感じたらしい。

「ああ、あくまで楽しむためのやつだから安心しろ。」

「おっそうか。」

「中庭は…あっちだね。」

北斗がパンフレットを見て歩く。

「おっ居た居た。おい、ラウラ。」

「星夜か、待っていたぞ。後ろに居るのが星夜の友人か。」

野点用に中庭に敷かれた畳。

その前で受付をするラウラを見つけた。

ラウラは着物姿だった。

「はじめまして、僕は草薙北斗。」

「俺は出雲銀河。」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ出身だ。よろしく頼む。」

軽く自己紹介済ませて、野点の受付をする。

「星夜たちはあそこだ、座って待っていてくれ。ああ、べつに正座じゃなくてもいいぞ。」

「わかった。」

案内された所に座り待つ。

「待たせたな。茶菓子は織斑きよ…先生のお気に入りの和菓子屋で買ったものだ。」

茶菓子と道具一式を持ってきて俺達の前に座るラウラ。

「では、始めるぞ。」

ラウラはそう言うのと無駄なくテキパキとお茶を点てる。

「今日は茶を知ってもらおう為のものだ。作法などは気にせず気軽にしてくれ。」

茶を点て終わり、茶碗を俺達の手前に置きながらラウラが言う。

「「頂きます。」」

茶と茶菓子をいただく。

「君のおかげで星夜は僕と銀河を呼べたんだよね。ありがとう。」
「そうそう、ありがとな。」

「ん？ああ私は呼ぶ人が居なくてな。そのまま捨ててしまうのは勿体無いだろう？だからそんなに気にすることでも無いぞ。」

野点が終わり、最後に北斗と銀河がラウラにお礼を言う。

「星夜、このあとは簪のクラスか？劇がそろそろだろう？」

「ああ。そうだな。そのあとクラスに戻って一夏と入れ替りだな。」

「では、また後でな。」

「ラウラも頑張ってたな。」

「ごっそさん。」

「ありがとうございます、お茶、美味しかったよ。」

「2人と話せて良かった。また、機会があれば。」

ラウラに見送られ茶道部を後にした。

「劇かあ中学生の時に文化祭でやったよな！」

「そうだね。」

「あの時は主役を誰がやるかで女子が揉めてたな。」

劇を見るために体育館に向かいながら歩いてると昔やった事を懐

かしむ銀河。

「あの時は西遊記だったな。」

「銀河が孫悟空で星夜が沙悟浄、僕が猪八戒だったね。」

「で三蔵法師役が……。」

「「スバル」」

スバル：アルテアさんやベガさんの弟で俺達と同一年なのだ。

あの兄や姉に影響されてか色々と規格外なところがあったな。

「スバルにも最近会った記憶がないな。」

「そうなの？僕達は結構会ってるよ。」

「GEOSのテストの時とかに居たぜ。普段はアルテアさんとかの手

伝いやつてると言ってたぜ？」

「へー。じゃ今度GEARに行くときにメールしてみるか。」

話ながら歩いてると体育館に着く。

「ここがいいな。」

「おつよく見えそうだな。」

「えつとタイトルは『カンザシクエスト』？」

「ああ、主役の名前をそのままタイトルに使ってる。」

「へえ。おつ始まるみたいだな。」

『ご来場の皆さま、お待たせしました。1年4組の『カンザシクエスト』の開始時間となります。』

ブザーが鳴り、劇の幕が上がった。

劇の内容としては至って普通に魔王を倒す冒険活劇だがこの劇の真髄はデータウエポン等を使った大胆な演出だ。

何も付けていない生徒をブルのオートプレッシャーでワイヤーアクション張りの動きをさせたり、ドラゴンフレアのクラッシュレイが人体には影響無いことを利用して本当に撃たれたように見せたりした。

あと待機状態のラファールや打鉄の使って剣や鎧を魔法で出現したようにも見せたりしていた。

「す、スゲエ劇だったな。」

「うん、量産型のISを沢山持つてるIS学園だから出来る劇だね。」

「これも1つの『技術の無駄使い』ってやつになるのか？」

『発想の勝利』…かな？」

「いやあ、本当に凄かった…。」

3人で感想を話ながら体育館を後にする。

周りの人たちの反応も似たような感じで演出の面で非常に高い評価を得ているだろう。

「おつと、そろそろ時間だから俺はクラスに戻るわ。まだまだ時間はあるから楽しんでな。」

「おう。頑張れよ。」

「頑張つてね。」

銀河と北斗を残し、俺はクラスに戻るのだった。

「さて、とつと戻って一夏に休みをやらないな。」

そうしないと確実にシャルのパイルバンカーと箒さんの二刀流の標的になるな。

「ただいま。一夏、次はお前だぞ。」

「お、お帰り星夜。じゃあ休憩もらうぜ。」

クラスに戻って一夏に声をかける。

一夏は廊下に出ていく。

「では、私も休憩をもらうぞ。」

「僕も貰うよ。」

一夏を追うように箒さんとシャルが部屋から出ていく。

「鷹月さん、俺はどうすればいい?」

「えつと天野くんは…6番のお客さまの所に行ってくれ?」

「わかった。」

周りの状況を確認しながら身支度を整え指示された席に向かうのだった。

第53話 《学園祭の楽しみ方?》

IS学園―普段は世界でも有数の教育の現場として機能しているが今日だけは違う。

IS学園生のみならず沢山の人が廊下を、教室を、中庭を歩き来している。

「なあ、北斗く何か食わねえ?そろそろ腹へったぜ。」

「そうだね。時間的にもちようどいいかな?」

北斗は腕時計を確認しながら答える。

時計の針は12時を指そうとしている。

「さっきあの辺にたこ焼きとか焼そばとかあったなっ!」

そう言うとすぐに銀河は駆け出す。

「あっ!銀河っ!いきなり走ると誰かにぶつかるとよ!」

「へっ!エリスじゃねえんだから平気、平気!」

北斗の注意を無視して走っていく銀河を追うため北斗も少し急ぎながら歩く。

「全く、銀河は変わらないなあ。」

「きやつ!」

角から出てきた人と肩が当たってしまった北斗。

「おっと:大丈夫ですか?すみません。」

「あ、はい大丈夫です。少し急いでいたので申し訳ありません。」

IS学園の生徒だったらしく、そのまますぐに走って行ってしまった。

「おっ!北斗、早く来いよっ!」

「うん!すぐ行くよっ!」

呼び掛ける銀河の元に行く北斗だった。

「ねえねえ、今の人、どうだった?」

「メツチャイケメン!」

「あの人呼んだの誰だろ!?誰かの彼氏!」

「なんでも1組の天野くんが呼んだみたいよ?」

「ならワンチャンあるかも!」

実は先程肩が当たった生徒はわざと当てたのだった。別に難癖付けようとかでは無く、ちよつといい男居ないかなーと言うグループがたまたま北斗に目をつけたただけだ。

「ありがとうございます。」

俺―天野星夜―は休憩から戻ったあと、先程と同じように接客をしていた。

「はい、星夜くんは5分休んだら7番の席にいつてね。」

「はい。わかりました。で、何の用です？楯無先輩。」

先程ふらつと教室に楯無先輩が来て何故か手伝いをしているのだ。主に指示と調理をしているようだ。

「ん〜？特にはないわよ？ただ後で一夏くんを貸してほしいからその分の労働力を提供してるのよ。」

「そうですか。」

クラスメイト達との交渉も終わっているらしく、近くにいた数名が頷いていた。

「さつきより楽に感じるのは楯無先輩の指示が的確だからかな？」

「そうよ？なんでも急いでやればいいって物じゃないわ。色々と考えないとね。」

「6番のテーブルが空いたぞ。次の客を案内してくれ。」

ラウラが入ってきて近くの人に報告する。

「あ、ラウラちゃんはこのあと廊下で受付の手伝いね。」

「了解した。受付に向かう。」

楯無先輩の指示を受けてラウラが受付に行く。

「じゃあ、自分も7番に行きます。」

「はい、行ってらっしゃい。」

気持ちを切り替えて席に向かう。

でも…一夏を使って何するんだ？楯無先輩は……。

「かあ〜っ！やっぱりここはすげえなっ！」

「うん、なかなか見るこの無い物もあるしね。」

学園内を周り、休憩所として開放されている図書館で休みながら話す北斗と銀河。

「でもよ、なんか落ち着かねえな。」

「まあ、ここは女子校見たいな物だし僕達位の男子が居るのは珍しいんじゃない?」

「そうだな。すれ違った奴の中でも俺達と同じくらい奴なんて殆ど居なかったもんな。」

銀河が思い出せる範囲で数えるが指折り数える程しか居なかった。

「このあとはどうしようか?一通り見たけど。」

「ん。星夜は忙しそうだしなく。でも帰るのも勿体ねえしなあ。」

「あの、少しよろしいでしょうか?」

2人で話をしていると声をかけられた。

「ん?あつ!さっきの眼鏡のねえちゃんじゃん。」

「布仏さん、どうかしましたか?」

手にファイルを持った虚が2人の所に近づく。

「この学園に同年代の男性が来るのは珍しいのでアンケートにご協力頂けないでしょうか?」

持っていたファイルを開き、中からA4サイズのプリントを出して2人の前に置く。

「ええ、それくらいでしたら。」

「ああ、いいぜ。」

「ありがとうございます。」

虚からペンを受けとり、アンケートに書き込む2人。

「そういや北斗はこのねえちゃん仲間いいけど何処かであったのか?」

「うん、前に星夜が友人達と『ポラール』に来てね。それから何回か来てくれるんだよ。」

「ええ、あの辺りに用事があるときによらせていただいています。」

「へえ。アンケート終わったぜ。」

「僕も。」

「はい、確かに。ありがとうございました。」

2人からアンケートを受けとりファイルにしまう。

「あつ一つ聞いていい?」

「なんででしょうか?出雲くん?」

「学生から見てもススメって何?」

「そうですね…今なら第三アリーナでラファールと打鉄を使った模擬戦を行いますからそちらはどうでしょうか?動いているISを間近で見る機会はなかなか無いと思いますし。」

「おっそりやいな!北斗、行こうぜ!」

「そうだね。ありがとうございます。」

「はい、お楽しみ下さい。」

軽く頭を下げ、見送る虚。

「さて、そろそろあちらの準備ですね。」

虚も図書館を出て行く。

「うう、折角の学園祭なのに星夜さんと回れないとわ…。」

「休憩の時間はクジで決まったのだから仕方あるまい。」

「げ、元気出してセシリア。ほ、ほらこの後はあれがあるから!」

一夏、箒さん、シャルが休憩から帰ってきてからも未だに減らない客の対応をしていると聞き逃せない言葉が聞こえた気がした。

「シャル、あれって?」

「えっ?!いい、いやっ!こつちの話!こつちの!」

なんか露骨に拒否されたな。

「そうか、なら言及しないで置く。」

「そうよ。女の子の秘密を聞こうなんてデリカシーの無い真似はダメよ?」

こちらを見ながら楯無先輩の扇子に《デリカシー》と書いてある。

「そろそろ一夏くん借りてくからね。」

「わかりました。」

「えっ?おれっ!」

この後に自分が貸し出される事を本人は知らなかったようだ。

楯無先輩に捕まり引きずられる一夏を見送る。

「あれ？皆も？」

「う、うん。ちよつとね。」

「すまない、極秘指令だ。」

「では皆、後を頼むぞ。」

「行って参りますわ。」

その後が続くようにセシリアさん、ラウラ、シャル、箒さんの4人が教室から出ていく。

「あつ天野くん。もう終わりでいいよっ！」

「相川さん？どうして？」

「いや、あんだだけ仕入れたのに全部在庫が無くなったのよ…。」

後ろでは空になった箱を潰しているクラスメイト達。

「そ、そんなにか。」

「うん、だから1組はもうこれで閉店。片付けは明日があるから今日は軽めの掃除だけ。」

「そっか、じゃあ残り後少しだけど先に行かせてもらおうよ。」

「うん。おつかれ〜。」

受付の所に終了の貼紙をして、廊下へ。

「えっと…今やってるのは…。」

パンフレットを取り出して体育館で行われてる劇やアリーナを使った演物の確認をする。

「んん？…生徒会の劇…しかも参加型…？一夏はこれに引っ張られたのか。」

しかし、何も詳細が書かれて無いんだよなあ。

俺に何も言わなかったのは一夏にばれないようになかな？

「アリーナの方でも行くか。銀河と北斗ならそっちに行きそうだし。」

とりあえずアリーナに向かうことにした。

「すっげえなあ。」

「やっぱり生で見ると違うね。」

アリーナ内でラファールと打鉄の模擬戦を見る2人。

テレビでやってる中継位しかISを見る事が無い人々にとっては

間近で飛び回るISはそれだけで見物である。

「本当に空中を滑るように動くんだな。」

「急な方向転換も慣性が無いからすごく速い。」

ちなみにこの模擬戦は一般の人でもしっかり見れるように速度を抑えて行われている。

「本当ならこの戦いが数倍の速度で進んでるんだよね。」

「いつもこんな戦いしてるのか…星夜は…。」

地に足を着けての格闘技をやるぶんには自信がある。

ただ、目の前で繰り広げられているのは広大な空を使った高機動戦闘。

前提条件が違い過ぎるがそれを見て何処かで敗北感を感じる銀河。

「大丈夫だよ。」

「北斗?。」

「星夜はISが使えるからって『銀河じゃ相手に成らない。』なんて言わないよ。」

北斗に今の気持ちを言い当てられてポカンとする銀河。

「あれ?違うことだったかな?」

「いや、合ってるけどよお。なんでわかんだよ?」

「あんなに怖い目で見ればわかるよ。僕達なら。」

「それもそうか。俺達だしな。」

2人で笑ってから再びアリーナに目を向ける。

その直後、アリーナに大きな爆発が起きた。

——
体育館にて。

織斑一夏が王子の格好をして舞台の上に立っていた。

沢山のスポットライトが一夏を浮かび上がらせる。

『昔々ある国に一人の王子様が居ました。』

楯無の声によるナレーションが始まる。

台本も無く、全てアドリブだと言われたが舞台の設定すら聞いてないので一夏も楯無によるナレーションを聞き逃さない。

『その世界はは不思議な力で溢れていました。特に王族は聖なる獣の

守護により大きな力を持っていました。』

楯無のナレーシヨンに合わせ一夏の頭上に輝刃がエイリアス体で出てくる。

『人々はその力を欲しました。』

気がつくとも一夏の周りには人が立っていた。

ライトは一夏のみを照らしているため周りに居るのが誰かまでは解らない。

ただ、わかることは皆、綺麗なガラスの靴を履いていることくらいか。

『そして、その時は偶然にもこの王子を除いて全ての国は王女しか産まれなかったのです！そうすれば当然、たった1人の王子に多数の求婚者が集まります。』

少し照明が明るくなり、周りに立っている人の服装がドレスであることがわかる。

ナレーシヨンからしてウエディングドレスを意識した物だろう。

『その国の王は言いました。「我が国の王子と結婚したければ力を示せ。獣の力を宿す王冠を手にした者に結婚を認めよう」と。』

ナレーシヨンが終わると同時に一夏に集中していたスポットライトが分散し、それぞれを照らす。

「王子！その王冠を頂くっ！」

「王冠寄越せっ！」

「私が頂きますわっ！」

「王冠：貰うよっ！」

「さあ！王冠を渡してもらおうかっ！」

「お願い！王冠ちょうだい！」

一夏を囲んでいたのは一年生の専用機持ちだった。

ラウラ、鈴、セシリア、簪、箒、シャルロットが一斉に踏み出す。

『「いかなる手段でも構わない。全てをもって挑むが良い！」王子は自ら望まずとも戦いの中に放り込まれたのです！」』

「なんだってえっ!?!」

この瞬間、一夏は理解した。

今、この6人は自分の王冠を狙っているのだと。

飛び掛かってくる6人を避けるため、後ろに下がる一夏。気がつけば輝刃は白式の中に入ったようだ。

「あつぷ……なあつ!？」

次の瞬間、6人はそれぞれの獲物を取り出していた。

刀、ナイフ、短剣はまだわかるがライフルやショットガン、薙刀はどこにしまっていたのか、一夏は疑問に思うがそれを口にしてる余裕はない。

「こちらの目的は王冠だ。それさえ渡せば命の保証はしよう!」

ナイフを構え、先陣を切ったのはラウラだ。

「ちよっ!・まてっ!」

一夏は回避に専念する。

「隙だらけよ!貫ったあ!」

ラウラの格闘を縫うように一夏の足元にめがけて鈴が短剣を投げる。

「うおつと!!」

格闘の最中に横から狙われては対処出来ずバランスを崩す一夏。

「貫ったあ!!」

倒れた一夏の頭にある王冠を狙い鈴とラウラが飛びかかろうとする。

「っ!」

次の瞬間、鈴とラウラの間でセシリアがライフルを放つ。

「邪魔をするなっ!」

「あんたから潰すわよっ!?!セシリア!」

どう見ても妨害の為に放たれた弾丸に怒りを覚える2人。そのままセシリアとの戦闘を開始する。

一夏はその隙に体勢を立て直す。

「ふっ!」

「たあつ!!」

そこを簪の薙刀と箆の刀が狙う。

「やらせないよっ!」

一夏の前に立ち、ショットガンを簪と箒に向けて放つシャルロット。

「一夏、大丈夫!？」

「あ、ありがとう。シャル。」

「こんな時でも自分を守ってくれるシャルロットに感謝する一夏。」

「邪魔立てするならそちらから倒させて貰うっ！」

「一夏はやらせないよ！」

「よし、2人が争ってる内に…。」

箒とシャルロットがにらみ合い、その横を簪が行こうとする。

「簪も！行かせないよ！」

「その程度で出し抜けると思ったか!？」

気が付くと一夏を放り出して2つの戦闘が行われる。

高校生とは思えない身体能力を駆使した戦いは見ている人たちが

「これ、なんの劇なんだ?」と言う疑問を消し飛ばす程だった。

「……………」

一夏はその戦いから距離を取るようにゆっくりと下がる。

『当然、求婚者は隣国の王女だけではありません。国中の貴族達も自

慢の花嫁を王子の元に送り込んだのですっ!』

楯無のナレーションと共に舞台の両脇から大量のドレスを着た生

徒達が飛び出してくる。

「王冠だっ！」

「王冠っ！王冠っ！」

「王冠置いてけえっ！」

「王冠を寄越せえっ！」

「うっ！うわああああっ！」

その迫力は何度かの実戦を積んだ一夏でも恐怖を覚える程だった。

「一体俺が何をしたあああっ!？」

一夏は吠えながらも必死に逃げ回るしかなかった。

…一夏は知らないがこの劇で一夏の持つ王冠を手に入れた者は一夏、星夜のどちらかと同室になれると楯無から言われ、全員が二つ返事で引き受けている。

「ど、どうすりゃいいんだ……。」

いくら大きな舞台だとしてもこの人数が参加すれば逃げ場は無い。

一夏はとりあえずセットの裏に隠れるように移動する。

「ここも時間の……。」「こっちです。付いてきて下さい。」「うわあっ!?」

舞台の下から足を捕まれ、引きずり込まれた一夏。

だが、言葉からしてこちらを助けてくれるようだ。

目の前に見えるスーツ姿の女性を追いかける。

「ここまで来れば大丈夫でしょう。」「

「はあ…はあ…ありがとうございます。」「ごぎやいます。」「

舞台の下にある通路を通り、更衣室へとたどり着く。

一夏は息を整え、ここまで誘導してくれた人物にお礼を言いながら顔を確認する。

「あつ巻紙さんだったんですね。」「

「はい。」「

一夏に言われ、にっこにこと笑顔で答える巻紙。

先程、休憩中に出会った人で当社のIS装備を使ってくれないかと頼んできた。

白式は新しい武装の追加はコアが全く受け付け無いので丁寧に断つたのを一夏は覚えている。

さつき名刺を貰ったのだが何処の会社か確認するのを忘れていた。

「ひとつ、お願いがあるのですが…。」「

「えっと出来ることなら…。」「

助けて貰ったのだからその分の礼はしないとイケない。

一夏はそう思いながら答える。

「白式を譲っていただきます。」「

「えっ?」「

笑顔のまま急に距離を詰めながら言われた言葉を理解できず一瞬固まる一夏。

「貰ったああっ!」「

先程までの安心感を与えるやさしい笑顔から、恐怖を煽る禍禍しい笑顔に変わる。

「っ!？」

恐怖のお陰か反射的に後ろに飛び下がる一夏。

「ちっ、ガキの癖に勘がいいじゃねえか。」

「お前…何者だ!？」

一夏は睨み付ける。

「威勢がいいな…今時の男にしちゃあマシな反応だ。」

ISを展開しながら言葉を続ける。

「いいぜ教えてやるよ…『亡国機業』のオータム様だ。覚えておきな！
行くぜ！アラクネっ！」

一夏はその瞬間、前に聞いた話を思い出す。

「欧州でISを奪った奴の1人か！」

シャルロットとラウラが同時に戦い、データウエポンを駆使して
やっと対等だった人物。

その人物が今、自分と白式を狙っている。

白式を展開し、雪片を構える。

「オラオラオラっ！」

「くっ!?!なんて手数だっ！」

本人の四肢のみならず多数の装甲脚が一夏を倒さんとラッシュを
かけてくる。

たった一本の雪片で防ぎきれぬ訳もなく、装甲脚のジヤブを喰らい
そのままオータムの右ストレートを貰う。

「がっはあっ！」

「おいおい、こんなもんかよ…。」

吹き飛ばされ、後ろにあつたいくつかのロッカーをグシャグシャに
変型させる。

オータムはつまらなそうにゆっくりと近づいてくる。

「ぐっまだだっ！」

一夏はすぐに立ち上がり距離を取る。

「お前…近距離型だろうが！」

すぐにオータムは全部の装甲脚を射撃モードに変更、一夏に狙いを
つける。

「くっ！」

すぐに横に飛び、射撃を避ける。

最近教わったPIC制御を駆使してロッカーの間をすり抜ける。

(こいつ相手に1人は危険だ…。)

一夏は冷静に考える。

この敵はどう考えても自分より場数を踏んでいるだろう。

技量の差は圧倒的だ。

それにこちらは周りの被害を考えて攻撃しなければならない。

こんなところで荷電粒子砲を使えばどんな被害がでるかかわかったものでもない。

(時間を稼げば誰か来るか?)

わざわざ学園に潜入してまで白式を奪う敵がその事を考慮してないとは思えない。

「それそれっ！当たっちゃまうぞ！」

「くう。せめてもう1人いれば…。」

一夏が呟くと同時に思い出す。

(そうだ！さっきの劇のどさくさで輝刃が居るじゃないか！)

力強い味方が居ることを。

「うおおおおおっ！」

「やつとその気になったか！」

一気に加速して距離を詰める一夏、それと同時に輝刃を召喚する。

「喰らええっ！」

「甘いんだよっ！」

輝刃と同時に斬りかかる。

…が輝刃は装甲脚からの射撃で止められ、一夏は真剣白羽取りで雪片を止められてしまう。

「なっ！」

「喰らいなっ！」

装甲脚から至近距離で射撃を叩きこまれる。

シールドエネルギーがあるので体がに傷はつかないが、衝撃は内部にしつかりと伝わるため、苦痛である。

「ぐあああつー！」

「へっー！」

装甲の少ない部分を的確に狙い撃ち込まれた射撃。

身体中を襲う痛みの中、一夏は痛みをこらえ、左腕を振るう。

雪羅をクローモードにし、オータムの油断を狙う。

「なにっ!？」

オータムはこの状況で反撃をするとは思わなかったため、反応が遅れた。

だが、射撃を受けながらと言う無理な体勢からの反撃のため、与えたダメージは装甲脚の一つを無力化するだけで終わった。

「てめえっー！」

オータムが一夏を蹴り飛ばす。

「輝刃っー！」

一夏に集中している瞬間を狙い、背後から一撃を入れる輝刃。

「ぎっけんっー! てめえもまとめて貰ってやるっー！」

オータムの傷はまだまだ浅い。

それに比べ一夏はすでに大きなダメージをもらっている。

幸い、白式の生命線たる加速力と攻撃力はまだ健在だ。

「簡単にやられるかよっー！」

「あの時のガキが偉くなったじゃねえか!？」

「なんだとっ!？」

オータムとは初対面だと思っていた一夏は予想外の言葉を聞かされる。

「ああ、そうかあ。知らなかったのかあ…。」

オータムは不気味に笑う。

「まあそうだよなあ…。モンド・クロツソの時に誘拐されてえ…。」

オータムの言葉に一夏の中にある何か揺さぶられる。

「大事な大事な…おねえちゃんの晴れ舞台を台無しにしたときの事なんて覚えてたく無いよなあ!？」

「お前、まさか!？」

…ここまで言われればこのあと何を言う気かは大体予想がつく。

「そうだよ！あん時にお前を捕まえて廃墟に押し込んだのは私さあつ
!!」

「——!!」

一夏の脳裏にあの日の記憶が鮮明に呼び起こされ、感情が渦巻く。
右も左もわからない国でいきなり襲われて、気がつけば廃墟の中、
孤独と恐怖に怯え、そこに来てくれた姉…。

「うがあああああつ！」

次の瞬間、何も考えず全力で目の前の敵に突っ込んでいた。

「お前は蜘蛛の巣に飛び込む虫だつ！そらよつ！」

オータムは右手を一夏に向けてかざす。

手の平からエネルギーワイヤーが射出され、目の前で弾け網とな
る。

「なっ!?けどエネルギーならっ!!」

雪羅と雪片を使い、エネルギーの網を切り刻む。

「甘えっ！」

「ええっ!？」

エネルギーは切った端からすぐに伸び、まるで生き物かのように一夏
に絡み付いていく。

「なっなんだ？動けない……。」

「これが蜘蛛の糸だよ…。さて、まずはお前だつ！」

動けなくなった一夏を無視して、輝刃に狙うオータム。

装甲脚から放たれる弾幕で動きを制限され、手に持ったマシンガン
でダメージを与える。

「輝刃っ!!」

「へっ！あつちを気にする余裕なんかあるはずねえんだけどな？」

弾幕で輝刃を行動不能まで追い込んだオータムは一夏に向き直る。

「こんだけ時間があつたんだ。お別れはすんだよな？」

「な——」

一夏の言葉を待たずにオータムは新たに取り出した装置を一夏に
向ける。

「お前の…愛機とだよ！」

オータムが取り出した装置は先の方が開き、虫の脚のようになる。そのまま一夏の胸に押し当てると脚が閉じ、胴体に固定される。

「ぐうっーぐああっ！」

大量の電流が一夏に流れる。

「よし、終わったか。」

オータムは装置を一夏から離す。

一夏は同時に自分を縛り付けていた物が無くなったことを感じると、すぐに反撃のため拳を振るつた。

「当たるかよー！ISも無い奴の拳が！」

「ぐっっ！」

だが逆に腹を思いっきり殴られる。

体がくの字に曲がり、ロッカーに当たるまで飛ばされる。

痛みをこらえ、体を起こしながら一夏は気がついた。

先程まで纏っていたはずの白式が無いことに。

「白式!? 一体何がっ!？」

雪片だけではなく、装甲の欠片も残っていない。

自分の姿が信じられない一夏にオータムが笑いながら答える。

「それはここにあるからさっ！」

オータムが菱形の結晶体を見せつける。

一夏は初めて見るそれが白式、そのコアだと確信する。

「どうだ? 《リムーバー》の力はっ!?! ISを強制解除出来る秘密兵器さ。」

リムーバー、先程の装置の事だろう。

今はそんなことより大事な事がある。

「か、返せえっ!!」

走ってオータムの元まで行き、結晶体を奪おうとする一夏。

当然、ISに生身で勝てるはずは無く。

「うっせえー！」

強力な蹴りを喰らう。

「おっと次はあれだな。」

オータムは一夏にもう用は無いとばかりに倒れてる輝刃に近付く。

「輝刃っ！逃げろおっ！」

一夏は輝刃に向かって叫びながらオータムを止めようと再び殴りかかる。

「邪魔だつてのー！」

装甲脚で殴られ、捕まる。

そのまま一夏を壁に押し当てる。

「折角このまま帰ってやるかと思っただが、五月蠅えからお前…殺すわ。」

先程までと代わり一切笑わずに告げるオータム。

手に持ったマシンガンを一夏の腹に押し当てる。

「あら、それは困るわね。」

「誰だっ!？」

「た…楯無さ…ん。」

場違いな程軽い口調で声をかけてきたのは楯無だった。

「お前は…ロシアの代表か…。」

「あら？知ってるなら話は速いわね。」

楯無に向けて装甲脚の内、二つを楯無へ向ける。

「動くな。こつちにや人質が居るぜ？」

「ええ、そうみたいね。」

いつものように口許を扇子で隠しつつオータムと会話を続ける。

「あなたを逃がすわけにはいかないし、一夏くんも白式も輝刃もあげないわよ。」

「状況がわかってるのか？」

「ええ、悪い人が逆転劇でこれから負けるのよ。」

楯無の言葉が終わると同時にオータムが楯無に向けて発砲する。

放たれた弾丸が楯無に当たると、楯無の体は一瞬で霧となり、部屋中を満たす。

「なっ!?!これは…。」

オータムは壁に押し付けていた一夏を盾にする為、動こうとする。

「そこよっー！」

その瞬間を狙い、一夏を捕まえていた装甲脚にいくつか光線が当た

る。

装甲脚は制御を失って一夏を放してしまう。

「逃がすかよっ!」

「やらせないわっ!」

一夏を捕まえようと腕を伸ばすオータムだったが横から突き出された槍によつて弾かれる。

「ちっ!」

「一夏くん。大丈夫?」

「な、なんとか…助かりました。」

距離を取るオータム。

楯無は一夏の目の前に立つ。

「この間のドラゴンも居やがったか…。」

「そうよ、これでああなたの装甲脚は半分封じたわ。」

楯無は左脚に装備したドラゴンをパンパンと叩きアピールする。

「一夏くん、あなたは願いなさい。」

「えっ?」

一夏にそれだけ告げると楯無はオータムに向かって飛び込む。

「はああああっ!」

「ちいっ!」

槍をもつて飛び込んでくる楯無に対してオータムはカッターを持って応戦する。

「ここに来るだけあつてなかなかの手練れね。」

「オータム様を舐めるなあっ!」

数回打ち合うがすぐにオータムは後ろに飛び距離を取る。

「まあ、やることやったし帰らせて貰うぜ。」

「折角の学園祭なんだから、もう少し楽しみなさいっ!」

楯無が飛び込むがそこを狙ってオータムはエネルギーの網を射出する。

「楯無さんっ!危ないっ!」

一夏が叫ぶ、楯無は水の防壁でエネルギーの網を防ぐが、防壁を迂回し身体中に巻き付く。

先程の一夏のように身動きがとれなくなる。

「ふんっ！見積りが甘かったなっ！」

「貴方がねっ！」

オータムが勝利を確信する瞬間を狙い、楯無は指を鳴らす。

すると、オータムの周辺に霧として漂っていたアクアナノマシンが大爆発を起こす。

「がああああっ！」

「どう？これがミステリアス・レイディのクリアパッションよ。」

一夏や周りに無駄な被害を出さないようにオータムだけを狙った攻撃。

「ぐうっ！まだだあっ！」

機体のダメージを確認しながら立ち上がるオータム。

「いいえ、もう終わりよっ！一夏くん！」

「来いっ！白式いいいっ！」

一夏の叫びに答えるようにオータムが持った白式が強い光を放つ。光が収まるとオータムが持っていたはずの白式を一夏は纏っていた。

「なっなんだとおっ!？」

「うおおおおおっ！お返しだあっ！」

オータムが動揺している隙を突き、急接近する一夏。

雪片を振りかぶる。

「でりやああー！」

「うおおっ！」

反応が遅れたオータム、咄嗟に残りの装甲脚を盾にするが、すべて零落白夜の刃で切り捨てられる。

「喰らえっ！」

オータムは雪片を振り切った一夏にエネルギーの網を射出、再び拘束する。

「輝刃っ！」

「ぐおっ！」

一夏が叫ぶと同時にオータムの後ろから輝刃スピナーが突撃する。

「これでっ！終わりだあっ！」

一夏は輝刃をブレイカーモードにし、全力で振り抜く。吹き飛ばされ、壁にぶつかるオータム。

「一夏くんっ！捕まえるわよっ！」

「はいっ！」

オータムを捕まえるため、2人で飛び込む。

「簡単に捕まるかよっ！」

後ろの壁に出来た亀裂を殴り、穴を開けて外に出ると同時にアラクネを乗り捨てる。

「逃がすかよっ！」

「一夏くん！ふせて！」

そのまま一夏は追おうとするが、すぐに相手の目的に気付いた楯無が止める。

直後に残されたアラクネが爆発する。

「一体何がっ!？」

「ISのコアだけを抜いて装備を自爆させたのよ。私たちから逃れるためにね。」

水の防壁を出していた楯無が一夏の疑問に答える。

「あのタイミング、下手すれば自分も巻き込むかも知れないのによくやるわ。」

「追わないんですか？」

「ここまでやった相手なら追撃を逃れる為に仲間を用意しているはずよ。この状態で追っても危ないわ。」

b 荒れ果てた更衣室で2人は敵が居ないことを確認し、ISを解除する。

「一夏くん。まだ終わりじゃないわ、ついてきて。」

「は、はい！」

真剣な眼差しで楯無に言われ、一夏はそれに従うように付いていくのであった。

第54話 《学園祭の裏事情》

目の前で起きた爆発、それに反応した人はこの客席に居ただろうか？

いや、誰も居ない。

脈絡も無く起きた爆発で訳がわからずポカンと見ている者か、演出か何かだろうと思っっている者が大半だ。

「うおっ!?なんだこりゃあ?」

「演出にしてはちよつと不自然だけど…。」

客席の一番前で見ていた銀河と北斗の2人は違和感を感じる。

まず、先程までは何も無い一般人でも目で追える様に速度を落としていたISが急に速度を上げ始めたのだ。

また、打鉄とラファールの操縦者の顔が驚きで染め上げられているのがちらつと見えた。

「なあ、北斗…あれ…何だと思う?」

「流れからすると、突如乱入してきた悪役に見えるけど。」

爆煙の向こうには何やら人影が見える。

「まさかこっちにまで来るなんて…。織斑くんも天野くんも居ないのにつ…。。」

近くにあつた入口から走って来た虚。

眩く言葉が銀河と北斗に入る。

「布仏さん、一体何が起きてるんです?」

「草薙くん、出雲くん…!」

虚の状況から騒ぎにしたくない事を読み取った2人は普通に話しかけるようにたずねる。

アリーナ内ではラファールと打鉄が現れた者に対して連携して攻め立てている。

「そんな顔して『何でも無いから楽しんでください』ってのは無しだぜ?」

「あの敵役はイレギュラーですよね?」

「……はい。」

他の人に悟られないよう平静を保ったように話を続ける。

「今年は織斑くん、天野くんを狙ったと思われるトラブルが多く発生しています。」

「ああ、星夜の奴もそんなこと言ってたな。」

「決まりだからって詳しくは聞けなかったけど、トラブルが多いって言っていました。」

「当然、IS学園としても出来る限りの事をしてきました。それでも外部の人間が多く入る学園祭では小さな穴があります。」

「それに潜り込んだのがあれってこと？」

「そうですね。このまま撃退出来ればあくまでも演出の一環ですませることが出来ると思いますが…。」

虚の言葉が続かない事からあの2機のISでは難しいのだと察する2人。

「星夜とか専用機を持つてるんだろ？呼べないのか？」

「もしくはもつと機体を投入するとか。」

「天野くんは呼んだのですが他の専用機持ちは少し難しいですね。」

「設備に異常が出たって言って一般客を避難させるのは？」

「避難を始めたときに、相手がこちらを狙ったら終わりです。」

2人は思い付く事を聞いてみたがいいいアイディアは出なかった。

虚がアリーナから通路に移動したので2人は着いていく。

「なあ、何であいつらはこつちを襲ってこないんだ？」

「恐らく、相手側もあまり表沙汰にしたいくないのだと思います。」

「たまたまお互いの意見が一致している訳ですね。」

「ですが追いつめられると何をするかはわかりませんが。」

「虚先輩っ！」

誰も居ない通路で話していると星夜が駆けつける。

「天野くん、事情は先程メールした通りです。」

「わかりました。あくまでも一般の方には悟られずに事件を終わらせるんですね？」

「ええ、頼みます。」

「銀河、北斗…すまないがこの事は内緒にしてくれ。」

「わかってるよ。」

「安心しろって。」

「ありがとう。ちょっと礼儀知らずなやつを殴ってくる。」

星夜はそのまま走っていくのだった。

俺―天野星夜―は通路を走り、ピットへ向かう。

あくまでも演技としてやる以上はピットを通りアリーナに向かう
しかない。

「皆、頼むぞ。」

待機状態の電童に声をかける。

正しくは中で待機してるデータウエポン達にだ。

ピットに着き、電童を展開しながらアリーナへ。

「こちら電童、天野星夜ですっ！ここからは自分がやりますっ！」

『あ、天野くんですか!?お願いしますね!』

『打鉄、ラファールはエネルギーがもう無い、一度下がる。』

打鉄とラファールを使っていたのは先生なので速やかに入れ替る。

「敵は……。」

視界の中央に敵をとらえる。

「お前かっ!?!スコール!!」

「やつぱり来たわね!さあ、リベンジマッチよ!」

こちらが突きだした拳を向こうも拳で止める。

「何が目的かは知らないが、全力でやらせてもらう!」

「ふふ、楽しみましょう!」

至近距離での殴り合いが続く。

お互いに決定打を打ち込めず軽めのダメージだけが通る。

「なかなかやるようになったじゃないの。」

「立ち止まっている暇は無いからなっ!」

スコールは前と同じように遊んでるな。

本気なら尻尾を使わない筈がない。

目的は時間稼ぎかな?

「でえりゃあっ!」

「くっ！」

ハイパープラズマドライブを起動させ、フルパワーで殴る。両手でガードしたスコールを数メートル後退させる。体勢を建て直す前に追撃をかける。

「爆砕！重落下！」

「つうっ!!」

全力で脚を叩きつける。

しかし、スコールは旨く衝撃を逃がしたようでダメージは無さそうだ。

相手の頭上を押さえる形になったのでそのまま、各射撃武器を出して攻撃する。

「うおおおおおおおっ！当たれえっ！」

「プロミネンスコート、起動。」

スコールは炎の繭を作り出して防ぐ。

「やっぱり射撃じゃダメージは通りにくいか。」

「さあ、掛かってきなさい！」

武器をしまい、そのままスコールとの格闘戦に移る。

「今日は逃がさないっ！」

「そう簡単に行くと思わないことねっ！」

スコールは炎を纏った腕で殴りかかってくる。

「そっちが炎なら、こっちは雷だ！」

ドライブユニットを回転させ、産み出したエネルギーを放たずに腕に纏わせる。

互いの拳が打ち合う度に大きな爆発が起き、閃光が走る。

「ふふ、楽しくなってきたわ。」

「こっちは楽しむつもりは無いっ！」

スコールが大きく尻尾を振るう。

後ろに跳び、回避する。

「私ただけだと盛り上がり欠けると思っ……こんなのを用意したわ。」

スコールが指を鳴らすと、それに反応して俺の周りに何かが出現す

る。

「無人量産機かつ!？」

『ソルジャー』よ、覚えておきなさい?」

クラス対抗戦、欧州合同演習で出てきた無人量産機だった。

軽く10機は居るな。

「ほら、悪の手先に囲まれて絶体絶命：分かりやすいでしょ?」

「とつとと終わらせるっ!」

強がってみたがこの数はヤバイかも知れない。

「おっ織斑先生っ!」

「どうしました? 山田先生。周りに人が居るんだ。あまり騒がないように。」

真耶に呼ばれ千冬は振り替える。

学園祭の最中に大声を出していたのでそこを注意する。

「す、すみません。」

「とりあえず、場所を移す。話はそれからだ。」

「は、はい。」

人目に付かない物陰に移動する2人。

「何があった?」

「更識さんから『網にかかった』と報告がありました。」

「他には?」

「それとほぼ同時にアリーナの方にも襲撃が：今は天野くんが対応しています。」

「成る程、わかった。山田先生はそのまま予定通りに。私はしばらく外す。」

「わかりました。」

周りに聞こえない声で話をしたあと、千冬と真耶はそれぞれ歩き出す。

「恐らくあれは囿のはず、なら奴等の目的は——。」

独り言を言い、千冬は歩く。

アリーナにて多数の敵に囲まれた電童。

周りから一方的な銃撃を浴びせられている。

その光景を虚、銀河、北斗はピットから見ている。

「お、おいっ！何か無いのかよっ!？」

「さつき星夜と入れ替わりで出たラファールと打鉄は？」

友人である星夜がやられていて銀河と北斗の2人は虚に尋ねる。

「ラファールと打鉄はダメージが多く、出せません。他の専用機持ちも別の案件で動いています。」

「ちつくしよっ！何も出来ないのかよ！俺はっ！」

「僕たちは星夜みたいにISは使えない……。あれ？データウエポンって奴を使わないのかな？」

「天野くんがデータウエポンを召喚しないのは強奪の可能性があるからかと…。」

何か出来ないかと銀河は周りを見る。

「2人供、ここに居たか。」

ピットの扉が開く、振り替えるとそこにはアルテアが居た。

「ど、どうしたんですか？」

「てか、何でここに？」

「我々GEARスタッフも今の事態は把握している。2人に渡すものがある。」

そう言いながら銀河と北斗は差し出されたものを受け取る。

「えっと……。」

「こ、これは……?？」

「GEOS格納型通信端末…『Gーコマンダー』だ。」

銀河は青、北斗は黒のGーコマンダーを手に取り見つめる。

「それには様々な機能があるが、今重要なのはGEOS転送機能だ。ドライブAを1回、LRを2回、LLを1回そしてenter！」

「Aを1、LRを2…」

「LLを1回…」

銀河と北斗は言われた通りに入力する。

「enter！」

2人がボタンを押すと同時に光に包まれる。

「こ、これは?！」

虚は目の前の光景に驚く。

銀河と北斗がまるでISを展開した様に見えたからだ。

「おおっ!」

「これは…GEOS…でも所々違うような…。」

2人は自分の身を包むGEOSを見る。

銀河は白と緑を基調としたGEOS。

北斗は青と赤を基調としたGEOS。

「これは君たち専用で作られたGEOSだ。HPD等、本来なら採用されていない装備も付いている。」

アルテアは説明を続ける。

「シールドエネルギーや装甲の自動修復等のISコアが由来の機能は無いが、電童と同じ部品を使っている。」

「じゃ、じゃあこれなら…。」

「僕たちも…。」

「そうだ。多少の不利はあるだろうが戦える。」

その言葉を聞き、虚は口を開く。

「待ってください!純粋な装甲しか無いのならIS相手には…。」

「あのピンチを切り抜ける助力にはなるだろう。」

「アルテアさん…。」

「ありがとう!」

2人はアルテアに礼を言い。ピットからアリーナに出るためのハッチへ近付く。

「布仏さん、ここを開けてもらえますか?」

「頼む!」

虚を見る2人。

「少々お待ちを…。今、天野くんは中央付近で戦っているので、カタパルトを使って飛び込んだ方が良いでしょう。」

近くのコンソールを操作し、ハッチを開ける虚。

同時に準備されるカタパルトに乗る。

「草薙くん、出雲くん、御武運を……。」

「すまないが私は他にやる事がある。ここを頼むぞ。」

「はいー!」

「行ってくるぜっ!」

アルテアと虚に返事をして、開くハッチを見る。

「1、2の3っ!!」

カタパルトが動き、勢いよく飛び出す2体のGEOS。

スコールが量産機『ソルジャー』を呼び出してからは一方的な展開だった。

相変わらず単機の火力は大したことは無いが、それでも浴び続ける訳には行かない。

「くっ、流星にヤバイか……。」

「あら? データウエポンはどうしたの?」

距離を取られて全方位からの射撃。

スコールは余裕の表情だ。

「あからさまに対策をしてそうな奴を相手に使えるか!」

「それもそうね。」

兎に角、今はこの状況をどうにかしないと。

「ん?」

センサーに反応があり、そちらに視線のみを向ける。

ハッチが開こうとしているようだ。

「あら? 増援ね。いつぞやの彼女かしら?」

当然、スコールもハッチが開いたことには気づいている。

誰が来たにせよありがたい。

「うおおおおおっ!」

「はあああああつ!」

飛び込んで来た影は白と青。

シルエットからしてGEOSだ。

更にこの声は……!」

「銀河! 北斗!」

「GEOS!?!まさか持ち出して居たとはね!」

スコールもGEOSが来るのは予想外だったようだ。

「旋風!回転拳!」

「旋風!回転脚!」

射出時の勢いを使って、それぞれ1体ずつ攻撃して吹き飛ばす。

「星夜!助太刀するぜ!」

「倒せなくても、援護くらいなら!」

「頼む!」

周りは2人に任せてスコールに突撃する。

「いくぜ!...このチュウチュウ虫ヤロウ!」

「さて...いくよ!」

銀河と北斗はそれぞれ左右に別れて敵を引き付ける。

「GEOSの完成型かしら?まとめて貰うわよ。」

「そう言うのは『とらぬ狸の皮算用』って言うんだよっ!」

スコールはまだ手加減モードではあるようだが1対1に戻ったのはありがたい。

「せいっ!」

「はあっ!」

2体のGEOSは電童を狙う敵を優先的に攻撃して、星夜が集中出来るようにしている。

「これって武器とかねえのか!」

「あつても僕も銀河も使えないよ!」

なかなか敵を減らせない事に苛立つ銀河がぼやく。

現在GEOSに武装の類いは付いていない。

訓練も無しに使えるものではないのを2人は解ってはいる。

『草薙くん、出雲くん。聞こえますか?』

「布仏さんっ!?!」

「聞こえてっけど、なにっ!?!」

戦う2人の耳に虚からの通信が入る。

『こちらからサポートします。』

2人の視界にGEOSのステータスが表示される。

虚がピットから遠隔操作しているようだ。

そして、その中からひとつの項目がクローズアップされる。

「これって……。」

「必殺技ってやつか!」

『私が合図したらそのコマンドをインストールして下さい。それで相手は一掃できるはずです。』

「わかった!」

「わかりました!」

『まずは追い込みます。出雲くんは正面に居る敵をそのまま押し込んで下さい。』

「おうっ!でりやあっ!」

銀河は言われるままにソルジャー達を殴り、吹き飛ばす。

『草薙くん、そのまま前進して敵の中央に!』

「はいっ!」

北斗は脚のドライブユニットをタイヤの様に使い、姿勢を低くし、素早く移動する。

『出雲くんは草薙くんの真上を目指してジャンプです!』

「了解っ!」

GEOSのパワーアシストを活かして大きく跳躍する銀河。

『2人供!今です!』

「SPII!コマンド!インストールっ!」

虚の指示に合わせて2人は表示されていたコマンドを選択。

両腕のドライブユニットが高速で動き、エネルギーが溢れ出す。

「閃光!雷刃撃!」

両腕から巨大な閃光を放ちながら、回転する。

地上と空中で同時に放たれたエネルギーの刃。

ソルジャー達は避ける事が出来ず、ほぼ全てが爆発した。

「よっしやあっ!」

「うまくいきましたね。布仏さん。」

『まだ本命が残っています。気を抜かずに。』

2人は星夜の方を向き、走り出す。

「まさか、あの数を簡単に潰すなんてね……」
「俺達を甘く見るなよ！」

二つの閃光雷刃撃がソルジャー達を消した瞬間、スコールが呟いた。

「あっちも失敗したみたいね……。そろそろ帰らせてもらおうわ。」

「逃がすかよ！今日こそ捕まえる！」

一瞬、通信でもしたのかスコールが突如として撤退を始めた。

「あなただけならなんとでもなるのよ。」

「ちっ炎の鞭か！」

スコールは両手に出した炎の鞭を振るう。

少し距離を取って避ける。

「これはサービスよ！受け取りなさい！」

両手から小さい火の玉を大量にばら蒔くスコール。

「この程度の炎ならっ！」

それを無視して飛び込もうとする……がすぐに電童がデータを解析し、警告する。

瞬間的に反応して大きく離れる。

「なんだ!?!このエネルギー反応は!?!」

「ふっ！そうよ！避けて正解よ！」

スコールが笑うと同時に小さい火の玉は大爆発を起こした。

「ぐっ！」

恐らくは圧縮した炎を投げつけたのだろう。

直撃したらただではすまない。

「じゃあね、これはお土産よ。」

スコールがそう言うと同時にアリーナのバリアを突き抜けて巨大な何かが落ちてくる。

「こいつはっ!?!」

『エネルギー反応大！天野くん！気を付けて！』

虚先輩から通信が入る。

落ちてきた物が立ち上がる。

赤いボディに銀の手足、右肩にはキャノン砲らしきものがついている。

「いつぞやの戦闘機怪獣の仲間かっ！」

この出鱈目な感じはそうだろう。

恐らくスコールが撤退時の妨害用に前もって待機させていたようだ。

スコールは入れ替わる様にバリアに空いた穴を通って行ってしまった。

／ギシャアアアアッ！／

「お、おい！星夜！なんだありやあっ!？」

「デカイ！20m近くあるっ!？」

戦闘機怪獣の事は当事者のみしか知らないから当然だが、銀河と北斗が驚く。

「銀河！北斗！こいつらを使え！」

2体のデータウエポンをそれぞれの前に召喚する。

「おう！」

「わかった！」

銀河の前にレオサークル、北斗の前にユニコーンドリルが現れる。

「レオ！」

「ユニコーン！」

「ドライブ！インストール！」

レオとユニコーンをそれぞれ装備して構える。

「このデカブツは危険だっ！気を付けるよ！」

「見りゃわかるっ！」

「でも、逃げるわけには行かない！」

『皆さん、敵が動きますっ！』

肩に付いたキャノン砲を構え、こちらを狙ってくる。

銃口に光が溜まっている所からレーザーキャノンのようだ。

「当たるかよ！」

横に避けると同時に一筋の閃光が走る。

避けたレーザーがアリーナのバリアに当たり、眩い光を放つ。

「うおっとー！」

「な、なんて火力だ！」

初めて見る敵の力に驚く銀河と北斗。

「虚先輩！増援は無理そうですか？」

『お嬢様が織斑くんと一緒にそちらに向かっています…が距離的に少し難しいかも知れません。』

「了解！」

「覚悟しやがれっ！デカブツヤロー！」

「行くよ！」

3人でそれぞれの方向から飛び込む。

「まずは…俺からだっ！」

主兵装と思われる肩のレーザーキャノンに向かって各射撃武器を放つ。

「くらえっ！」

「でりやあっ！」

銀河と北斗もそれぞれデータウエポンを使い、攻撃しているがあまり効果は無いようだ。

「おいっ！これ効いてるのかよ!?!」

「まるで蚊に刺された程度にしか反応しないよ！」

「兎に角、脚を狙ってくれ！」

チクチクとやって来る俺達に嫌気がしたのか敵は腰から大量のミサイルをばら蒔く。

「あぶねえ！」

『草薙くん、ファイヤーウォールを！出雲くんもその後ろに！』

「は、はい！」

「おっとと！」

ミサイルの爆煙に紛れ、一気に近づく。

「爆砕！重落下！」

肩のレーザーキャノンを真ん中から凹ませる。

「よし！まずはひとつ！」

「負けてらんねえ！飛翔！烈風波！」

銀河が飛翔烈風波を放ち、敵の姿勢を崩す。

「続けて喰らえ！レオ旋風脚！」

脚に付けたレオのサークルカッターを起動させ、銀河が飛び込む。

敵は頭を銀河の方に向ける。

「駄目だっ！ファイヤーウォール！」

北斗が何かに気づき、銀河の前に割り込んでファイヤーウォールを展開する。

次の瞬間、敵は口を開き、その中からレーザーを放った。

レーザーはファイヤーウォールに当たり霧散する。

「銀河！突っこみ過ぎ！」

「すまねえ北斗！」

『皆さん、アリーナのバリア発生装置が過負荷の為、異常が発生します。早めの決着を。』

虚先輩からの通信を聞き、確認すると確かにアリーナのバリアが不安定になっている。

「わかりました！」

「どうする？星夜！」

「俺が奴を止める！その隙に2人でファイナルアタックだ！」

体勢を立て直そうともかく敵に残っている射撃武器を全て叩き込む。

怯んでる間にガトリングボアを召喚する。

「ボアドライブ！インストール！」

ボアを装備しクロックマネージャーを起動する。

「クロックマネージャーツ！」

敵を全力で停止させる。

対象がデカイからかいつもよりエネルギーの減りが早い。

『草薙くん！出雲くん！今です！』

虚先輩の通信に合わせ、2体のGEOSが四肢のドライブユニットを全力で稼働させ、エネルギーをデータウエポンに送る。

「レオサークルツ！」

「ユニコーンドリルッ！」

「ファイナル！アタック!!」

レオサークルから放たれた光輪は敵の四肢を切り落とし、ユニコーンドリルから放たれた螺旋状のエネルギーが敵の中心を貫く。

／グゴアアアアッ！／

前と変わらず大きな爆発を起こし、四散する。

「敵の撃破を確認！」

「これで終わりなのか？」

「そう…みたいだね。」

『はい、周辺に敵性反応はありません。そのままピットに戻って下さい。』

周りで見ていた人たちはあくまで演出と思ってくれたようだ。

「銀河、北斗。ありがとう。」

「いいってことよ。」

「うん、僕達がやりたくてやったことだから。」

そんな事を口にしながらピットに向かい歩く。

――
I S 学園の地下にある特別区画。

ここは教師達でも入れる者は一握りである。

(さすがに…ここまで来ない…か?)

その区画の通路に立つ千冬。

その手にはI S が使うブレードが握られていた。

「おやおや、弟さんが大変な目に合ってるのに、こんな所で油を売っていてもよろしいのですか？」

通路の影から現れたのは白いスーツを着たスキンヘッドの男性だった。

「貴様…何者だ。部外者がここにこれる筈は無いのだがな。」

千冬はスーツの男を睨み付ける。

「ああ、そんなにセキュリティも固くなかったので大した物は無いのかと思いましたよ。」

I S 学園の中で最も嚴重にセキュリティをかけてあるこの区画、散

歩感覚でこれる場所では無い。

「そう思うならとつと出ていつて貰おうか？」

「いえいえ、私にも事情がありましたね。」

敵意を隠さず睨み付ける千冬。

「貴様らの事情など知らんな。それ以上進むのならそれ相応の覚悟を
してもらうぞ。」

「ふむ、ISを持たない貴女が？」

話ながらも歩みを止めない男に向かい、千冬は手に持ったブレード
で切りかかる。

「この程度ですか…。」

「な、なに!？」

千冬が振るったブレードをいつの間にか持っていた如意棒の様な
武器で止める男。

「いかに世界最強と謳われても、ISありきですか。」

「ぐっ!」

男は棒を軽く振るい、ブレードを弾く。

「もう少し、出来ると思っただけですが。」

「貴様…。」

ギリツと音がするほど強く奥歯を噛み締める千冬。

力を込め、ブレードを縦に振るう。

「今日は貴女の相手をするために来た訳では無いんですよ。失礼。」

男が棒を横に振るい、ブレードを弾く。

それだけでは終わらず衝撃波が千冬を飛ばして壁に背中から叩き
つける。

「かはっ!」

「おや?まだ立ち上がれますか。」

体中に走る痛みをこらえて立ち上がる千冬。

「貴女なら、力量の差を理解していただけたらと思っただけですが。」

「くっ!」

先程までと違い、しっかりと構える男。

千冬もブレードを構える。

「ならば仕方ありません。消えてもらいましょう。」

男が一步踏み出そうとする、その瞬間。

「がっ!!」

「なっなんだ!?!」

男が宙を舞う。

まるで何かに殴られた様に。

「やはり、ここに居たか。」

千冬にとつて聞き覚えの声が聞こえる。

気がつくのと千冬の目の前に電童の様なシルエツト。

GEOSが立っていた。

その腕にはパイパーウィップとブルホーンが装備されている。

「アルクトスか!!」

「ああ。」

「くっ…!あなたまで来るとなると流石に分が悪いですね。」

GEOSを使った一撃を生身で受けたにも関わらず男は立ちあがる。

「貴様…人間では無いな。」

「ええ、当然。」

アルテアからの問いに普通に答える男。

「この場であなたと戦うのは、私としても得策ではありません、退かせて頂きましょう。」

「ま、待てっ!」

「逃がさん!」

男が後ろに飛び下がる。

千冬とアルテアはそれを追う。

「させませんよ!」

男はどこからか取り出したラグビーボールの様なものを投げつける。

「むっ!下がれ!」

「爆弾か!?!」

それが何かすぐに察した2人は後ろに下がり、GEOSの後ろに千

冬が回る。

ドンツと大きな音を立てて爆発する。

通路は炎と煙で埋め尽くされる。

「大丈夫か？千冬。」

「くっ…！逃がしたか…。」

視界が晴れる頃には男は姿を消していた。

「助かったのは確かだが…何故ここに居る？アルクトス。」

「お前と同じ様に、この特別区画に侵入を企てる者に心当たりがあつてな。」

GEOSを解除しながら話をするアルテア。

「鍵はデータウエポンで解除したのか？」

「ああ、緊急処置だ。奴は以前GEARチャイナ調査時に現れた。その時も重要区画に平然と入り、各情報を消されてしまった。」

「なんだとー！」

「亡国機業でも特別な立場とそれ相応の実力を備えている。」

「GEARも奴を追っている。何か判れば連絡しよう。」

「わかった…。」

そのまま歩いていくアルテアを追うように千冬も特別区画を歩く。

「GEOSはデータウエポンを使えるのか。」

「これは市販品とは異なる特別品だがな。バイパーウィップ、ブルホーンありがとう戻ってくれ。」

Gーコマンドーに入るバイパーウィップとブルホーン。

「GEARは…どこまで知っているんだ？」

「そちらの轡木学園長とGEARの西園寺会長は旧知の仲らしい。我々が思っているよりも裏で色々繋がつているようだな。」

「そうか…。」

「安心しろ。私もベガも君の味方だ。それだけは信じて欲しい。」

「ああ信じている。」

2人が通常区画に戻る頃には学園祭の終了を知らせるアナウンスが廊下に響いていた。

第55話 《後片付け》

道を歩く1人の女性がいる。

ツカツカと音を立てながら歩く姿は、どこか怒りを感じる。

スーツを着ているので周りから見ると「何か仕事であったのかな？」と思える。

(くそ、くそ、くっそおおっ！)

この女性とはIS学園から何とか逃げ出したオータムだ。

周りに気付かれないように表面上は平静を保っているが、内心は怒りで満ちていた。

(こんなはずじゃ無かった！全部あいつのせいだ！)

今回の作戦は元々織斑一夏が1人の時に襲撃する予定だった。

だが最近になって寮に同居人：現ロシア代表、更識楯無が一緒に居た。

その為、夜間の襲撃は成功率が低いので今日行う事になったのだ。

(それにあのリムーバー：遠隔コールが出来るなんて聞いてねえ。)

今まで組織内で何度か使用していたがその様な報告はなかった。

(これじゃあ今後あれは使ってられねえな…。)

考えながら歩いていると、公園に着いた。

周りを見渡すと無人のようだ。

(ちようどいい、あそこで水を…。)

近くの水飲み場に近づき、蛇口から水を飲む。

生温いが必要なことを気にする今のオータムではない。

(あの女だ！あいつは絶対に殺す！スコールがなんと言おうとな！)

ドス黒い感情がオータムを支配する。

どの様な手段でやれば無様な命乞いをするだろうか。

そんな考えは異常を感じ、すぐに終わる。

「ん？」

今、自分の喉を潤していた水が止まったのだ。

(壊れてるのか?)

不思議に思い、蛇口を見るとあり得ない事が起きていた。

蛇口から出ている水がそこに透明な壁でもあるのか、遮られているのだ。

(A I Cか!?)

オータムの頭の中でこのような現象を起こせる物を思いだし、その場からすぐに飛び退く。

「ぐっ！」

だが、時すでに遅く、A I Cで足を捕まれたらしい。

空中で足が止まり、慣性に従い背中から地面に叩きつけられる。

「捕まえたぞ、亡国機業。合同演習では世話になったな。」

「ドイツのI Sか…。」

「動くなよ、狙撃手がお前の眉間に狙いを定めている。」

冷たい威圧感を放ち、ラウラはゆっくりとオータムに近づく。

「貴様のI S：アメリカの第二世代型だったな。どこで入手した？」

「そんなんで言うと思ってるのか？だとしたら目出度い頭だな。」

こんな状況でも笑うオータム。

「まあ、そうだろうな。安心しろ、尋問の心得もある。長い付き合いになるな。」

当然、答えると思っていなかったラウラはオータムを確保するために近づこうとする。

『ラウラさん！敵です！』

セシリアからラウラに通信が入る。

即座にレーザーの有効範囲を拡げるが敵を認識すると同時に肩を撃ち抜かれる。

「ぐうっ！」

ラウラは即座に左目の眼帯を外し、ヴォーダン・オージエを発動する。

追撃のレーザーを何とか避けるラウラ。

『ラウラさん。下がって！』

セシリアは弾道から敵の位置を割り出し、照準を向ける。

「やはり…！サイレント・ゼフィルス！」

スコープに写し出されるのはかつて目の前で奪われた、サイレン

ト・ゼファイルスだった。

「これで！」

即座に狙いを定め、レーザーが放たれる。

だが、サイレント・ゼファイルスはシールドビットを展開し防いでしまった。

「くっ！」

即座にセシリアもビットを射出。

4つのビットを制御し、サイレント・ゼファイルスを撃とうとするが、直後にビットが破壊される。

「あの高機動でこの精度の射撃をつ！」

前に対峙した時に相手の方がビットの制御、格闘戦能力で勝っているのはわかっていたが、狙撃能力までも勝っているようだ。

『セシリア！狙われているぞ！動け！』

驚愕するセシリアにラウラが通信を送る。

「くうっ！」

相手のビットがこちらを狙い、放たれる。

6本ものレーザーを何とか避けるセシリア。

ラウラに向かってライフルによる牽制も行われる。

(ならー！これで！)

セシリアはミサイルビットを自分の影になるように射出。

相手の死角に潜り込ませる様に、制御する。

「甘いな。」

サイレント・ゼファイルスを駆るMが微笑を浮かべる。

「そーそんなんっ!？」

次の瞬間、サイレント・ゼファイルスが放ったレーザーが曲がり、セシリアのミサイルビットを貫く。

(偏光制御射撃!?)

その光景を目にしてセシリアは固まってしまう。

(なぜっ!?!私がBT適正最高値のはずっ!?!なのにー！なんであちらはこ
うも容易く!?!)

「なんだ？的が希望か？なら撃たせてもらう。」

「馬鹿者っ！戦場で止まるなっ！」

セシリアの隙を逃さず撃とうとするM。

ラウラは咄嗟にセシリアを突き飛ばす。

「ぐあああああっ！」

「ラ、ラウラさん！」

セシリアの代わりにレーザーを受け、ダメージによって苦痛の声を上げるラウラ。

その声を聞き、セシリアはやっと我に返る。

「迎えに来たぞ、オータム。」

「呼び捨てにするんじゃないっ！」

Mはセシリアとラウラにビットで牽制を続け、その内にオータムをA I Cによる拘束から救出する。

「データウエポンがなければこの程度か…ラゴウ。」

Mはラゴウを召喚、その背にオータムが乗る。

「さらばだ。次は少し位楽しませてくれよ？」

Mはラゴウと共に来た方向へと飛び去った。

しばらくラウラとセシリアを足止めしていたビットが、最後の役目として目眩ましを兼ねて自爆する。

「追跡しますっ！」

「やめろ！あのまま素直に飛んでいったとは思えん。仮に追い付いても我々だけでは…負けるぞ。」

「……………」

セシリアは悔しさに唇をぎゅうつと噛み締める。

合同演習に続き、証拠を残さず去っていく。

2人は見えないが、確実に巨大な組織の存在を感じていた。

俺―天野星夜―はアリーナのピットで話をしていた。

「アルテアさんがG E O Sを…?」

「うん。」

「俺達用だって。」

銀河と北斗がG E O Sの待機形態にあたる〈G―コマンダー〉を出

しながら答える。

「夏休みに見たときはまだ電子格納は出来ないって言われたのに…もう出来たのか…。」

「ISコアが無いのはメリットとデメリットがありますね。」

虚先輩が言う。

「コアが無いデメリットは何となく解るけどメリット?。」

「だってISより弱いんだろ?。」

「確かにそうですね。」

銀河と北斗が虚先輩の言葉に反応する。

「個々の戦闘力では劣りますが、生産性はこちらが上回ります。ISはコアの数以上に作れません。」

「確か500個も無いんだっけ?。」

「また、特殊事例を除き、女性しか使えません。」

「星夜と織斑一夏くんですね。」

「今、2人のGEOS見せて貰ったけど、こいつ飛べるぞ。」

「マジで!。」

「ISコア由来の能力である、粒子格納、シールドエネルギー、絶対防御、自己修復、自己進化。この辺りが使えないだけです。」

「PICとかもすっかり載ってるから燃費は悪いけど一通り出来るな。」

ピットにあったホワイトボードにまとめながら話をする。

「自己修復に関しては、大きなダメージを負えば部品を換えた方が早いのでそこまで大きな利点にはなりにくいですね。」

「エネルギーの自然回復も遅いから連続で使うときは補給する。GEOSもあまり変わらないな。」

こうして箇条書きにすると本当に大差無いな…。

「これ、本当に持つてていいのかな?。」

「なんで俺達用なんだろうな。」

「それは君達を守るためだ。」

ピットの扉が開き、アルテアさんと織斑先生が入って来た。

「アルテアさん!。」

「織斑先生も！」

「天野、状況は聞いた。無駄に騒ぎを広げずに良くやった。出雲と草薙だったな、協力ありがとう。」

「僕達はやりたいことをやっただけです。」

「そうそう。」

織斑先生が銀河と北斗に礼を言う。

「で、GEOSを2人に渡した目的を教えてくださいますか？アルテアさん。」

「ああ。単純な事で星夜くんに近い人物として、亡国機業のターゲットにされる可能性はゼロでは無い。」

「だから自衛手段を与えるために？」

「そう言うことだ。」

確かに、俺と仲の良かった奴なんて調べれば簡単に出てくるだろう。

亡国機業に人質にされるかもしれない。

「我々は2人ならそれを悪用するような事は無いと、信じている。」

「だってさ、銀河。調子に乗って、見せびらかせたりしたら駄目だよ？」

「そ、そんなことしねえよっ!!」

アルテアさんに言われ、銀河を北斗が軽く茶化す。

「さて、今回の件については箝口令が敷かれる。くれぐれも他言無用にな。」

「はいっ！」

確認の意味を込めて銀河と北斗に織斑先生が話しかける。

「学園祭はこれで終わりだ。2人はこのままアルクトスについて行くといい。本来ならもう一般客は居ないはずだからな。」

「GEARも片付けをしている。トラックになるが自宅まで送ろう。」

「あ、ありがとうございます。」

頭を下げる銀河と北斗。

「2人ともお疲れ。」

「おう！何かあれば呼べよ？このGEOSで助けてやっからよ！」

「まったく銀河は……。星夜、今日は招待してくれてありがとうございます。楽しかったよ。」

「ああ、呼んで良かったよ。それに助かった。」

「草薙くん、出雲くん。ありがとうございます。お気をつけてお帰りください。」

「はい、布仏さんもありがとうございます。」

「じゃ、またなっ！」

挨拶をして銀河と北斗を見送る。

「天野、報告書は早めに頼むぞ。今日は部屋に戻って休め。」

「はい。織斑先生、虚先輩もお疲れ様です。」

「では、私はこれで。」

織斑先生、虚先輩と挨拶をしてアリーナを後にした。

その日の夜。

一夏の部屋に俺は居た。

理由は楯無先輩に呼ばれたからだ。

そして、今回の騒動に関しての説明を受けている。

「つまり、楯無先輩は一夏を護衛する為に同室になったんですね？」

「ええ、そうよ。」

「いや、星夜も普通に会話してるけど楯無さんって何者なんですか？」

「ん？ I S 学園生徒会長よ？」

一夏がくれたお茶を飲みながら楯無先輩が答える。

「茶化さないで下さい！」

「そうねえ、更識家は裏工作とかを担当してるの。対暗部用暗部。すごいでしょ。」

自分だけが知らないことに少し苛立つ一夏に楯無先輩が答える。

「いや〜。これで当面の危機は去ったと思うわ。肩の荷が降りたわ〜。」

楯無先輩は背伸びをし、頬笑む。

「今回は白式を狙ってたみたいですけど、あいつらの目的って何ですかね？」

「組織の存在は確かなんだけど、目的に関しては全くわからないのよね。」

「基本的にはIS関係で色々やってるイメージがあるくらいか?」

「そうなのか…。」

一夏はお茶を飲み、気を落ち着かせる。

「じゃあ、部屋割は戻すんですか?」

「残念、王冠ゲットでもう少し一緒よ。」

「うぐっ!? そうだった。」

「ああ、参加型ってそう言う…。」

どうやら劇で一夏を使ったのは一夏を餌にするためだったようだ。

「2人はこれからも色々巻き込まれると思うから気を付けなさいよ?」

「ええ、わかってますよ。」

「そう何度もやられないですって。」

一夏と一緒に力強く返事をする。

「うんうん。頼もしいわね。それでこそ男の子♪」

満足そうな楯無先輩。

「おっと、もうこんな時間か…楯無先輩、一夏、そろそろ部屋に戻ります。」

「おっそうだな。おやすみ星夜。」

「星夜くん、一人寝が寂しければおねーさんが一緒に寝て上げるわよ♪」

「残念ですが俺の部屋はいつも頼れる仲間達でいっぱいなので、寂しくなんかありませんよ。」

「ちえー、残念。」

2人に挨拶して部屋を出る。

亡国機業…何者かは解らないが向かってくるなら、全力で立ち向かうだけだ。

「おいっ! あれはどう言うことだっ!」

オータムはアジトに着くなり、ISを解除したMを捕まえ、声を荒

たげる。

「なんの話だ？」

オータムとは対照的に極めて冷静に返すM。

「あれだよ！リムーバーだっ！」

「リムーバーが起動しなかったか？」

Mはリムーバーに不調があつたと思ひ聞き返す。

「違うっ！耐性の事だっ！」

「耐性…ああ、2度使えないと言うやつか。」

「使えない所か、遠隔起動するじゃねえか！知ってたんだろっ!？」

「ほう…そうなのか。」

「とぼけんじゃねえっ！」

オータムは右手を振り上げ、Mを殴ろうとする。

「そこまでだ。」

オータムの腕を横から来た男が掴む。

「A！邪魔すんじゃねえっ！」

「仮に遠隔起動出来たとところで奪った時に殺して置けば問題なかったはずだ。お前のミスだオータム。」

「んだとっ！」

オータムは腕を振り払う。

「オータム、お疲れ様。その件は誰のせいでも無いわ。」

スコールがオータムの前に立つ。

「スコール！お前は知ってたのか!？」

「知っていら、ちゃんと話してるわ。貴方が無事に帰ってきて良かったわ。」

オータムを優しく抱き締めるスコール。

オータムは顔を赤くしながらも幸せそうに抱き返す。

「下らん。」

「M、サイレント・ゼファイルスはあつちに回しておいて、まだ調整が完璧には出来てないでしょ?。」

「わかった。」

「A、あれの修理が終わったわ。受け取ってきなさい。次の作戦で使

うから、慣らしておきなさい。」

「了解。行くぞ、マドカ。」

「ああ、アマツ…。」

M…マドカとA…アマツは並んで歩いて行く。

「さあ、オータム。シャワーでも浴びてきなさい。食事を用意してお
くわ。」

「ああ、頼むスコール。」

スコールとオータムも歩き出す。

——
翌日。

「あく片付けて憂鬱〜。」

「準備とかは楽しみがあるけどね〜。」

「ほらほら、手を動かす。」

今日は片付けた。

各クラスの教室、模擬店で使用した教室、各種機材、クラス毎に割
り振られた共用エリア。

そんな感じで班別けをして、分担して清掃等をしている。

ちなみに俺は教室の班だ。

「ねえねえ、天野くん。」

「ん？何ですか？」

掃除しながら相川さんが話しかけてきた。

「鳳さんとどこまで行ったの!？」

「何もない。」

「嘘だ！」

何故か全力で否定された。

「だって2人で回ったんでしょ？」

「その前に俺の友人来て、鈴はクラスに呼び出されたよ。」

「ちっ、残念。」

「何が残念なのか…。」

「だってここって実質女子校じゃん？」

「うん、そうだね。」

「だから、そう言う話題に飢えてるのよ！」
訳が判らん。

「だったら、シャルか箒さんを焚き付けて一夏にアタックさせれば？」
「ん〜それはなく。」

「何？相川さんが落とす？」

「難易度高いよ〜。」

雑談を交えながら掃除をしているとドアが開く。

「お前達、しっかりとやってるか？」

織斑先生が教室に入ってきた。

「はい、ゴミの分別も終わって後はゴミを集積場所に持っていくだけです。」

「そうか、私は他の所を見てくる。頼むぞ。」

一通り見て織斑先生は踵を返して歩いていった。

「これ、誰が持ってく〜？」

「ああ、ゴミはこっちで持っていくから、後よろしく。」

「えっ？いいの？天野くん？けっこう量あるよ？」

「データウエポン達が居るからね。」

「なるほど、じゃあよろしくっ！」

積まれたごみ袋を持ち、データウエポン達と一緒に運ぶ。

こう言うときに1回ですむのは便利だ。

片付けが終わり、体育館にて全校集会が行われる。

学園祭で行われた投票結果の発表が主な題目。

というか生徒達の関心はこれにしか無いと言っている。

「学園祭、投票結果第1位は——」

俺は壇上の端にて全生徒に向かい話している。

全生徒は固唾を飲んで続く言葉を待っている。

「生徒会主催、生徒参加型活劇『超武闘会！明日のルームメイトは彼だっ！』です。」

沈黙が続く…。

『ええええええええええっ！！！！』

直後、全生徒の大合唱が響き渡る。

「なんでっ！なんで生徒会なのよっ！」

「インチキだっ！改竄だっ！」

「こんなの絶対おかしいよっ！」

「第三者機関による調査を求めろっ！」

まあ、大体の想像通り『生徒会が不正した』と思ってるようだ。

「皆さん！静かに！」

檀上の中央で楯無先輩が声をあげる。

「劇の参加条件に『生徒会に投票』と事前に公開した通りです。その皆さんの投票なのですから、これは公正ですよ？」

楯無先輩に言われ、多くの生徒が口を紡ぐ。

そう言えば投票してた…。と今になって気づく。

「そして、織斑一夏くんに関してですが、彼は生徒会から各部活動の補助要員として貸し出しを考えております。」

考えてもいなかった事に全生徒がざわめく。

「詳細は後程、書面で各部活動に配りますが、早ければ今月中から織斑一夏くんの貸し出しを開始しようと思います。」

文化系の部活は兎も角、学園祭で上位入賞など難しい運動部にとっては柵から牡丹餅と言ったところか。

これならどの部活も平等に一夏と会える。

「やったー！」

「ぜひっ！ぜひっ！料理部に！」

「テニス部！いや、テニス部に！」

「お静かに、皆さん、納得されましたね？」

楯無先輩の言葉に肯定の沈黙が続く。

「では、生徒会からは以上です。」

楯無先輩が檀上から下り、代わりに先生が登り、全校集会は続いた。

全校集会が終わり、放課後。

生徒会室に集まっていた。

「織斑一夏くん、副生徒会長着任おめでとう♪」

「と、言う名の生贄じゃないですか。」

楯無先輩、虚先輩、本音さん、一夏、俺。

いつものように皆でテーブルを囲み、お茶会となっている。

「……なぜ……こんなことに……。」

出されたケーキとお茶に手を出さず、項垂れる一夏。

「そりゃあ、一夏くんがどこにも所属しないからよ。」

「下手にどこかの部活に入ると、引抜き合戦があるだろうからな。」

「今後の事を考えて、今回の措置となりました。」

「おりむ。頑張つてね。」

一通りの言葉を聞き、何を言っても変わらないと悟ったのか、肩をガツクリと落とす一夏。

「俺の意志が無視されてる…。」

「なによ。美女を3人も侍らせてまだ不満なの？」

「そうだぞ。美女だぞ。」

「美女かどうかはさておき、ここでの体験は無駄にはならないと思いますよ？」

一夏はこつちを見てくる。

「一夏、お前の意志がどうこうって言うんならどこか入りたい所があったのか？」

「えつと…。出来れば…」

一夏の表情から読めたので言葉を被せる形で発言する。

「校則にもあるから『入らない』は無いぞ。どこに入っても毎日他の部活動から勧誘を受けまくるだけだ。」

「そうよ。それに、ここなら私も居るから訓練もやり易いし、どの部活も均等に機会があるから勧誘（物理）もないし。」

「うう、わかりました。……放課後はここに集合ですか？」

「当面はそうなりますね。派遣に関して細かいところが決まったらすぐにお伝えしますから、それに従って下さい。」

「はい、わかりました。」

虚先輩の説明に頷く一夏。

「さて！一夏くんが納得したところで！お茶会を始めますか！」

楯無先輩の一言でいつも通りのお茶会が始まった。

「久しぶりだな、スバル。」

「ああ、久しぶりだな星夜。」

学園祭から数日たったある日。

GEAR本社にて新装備の受領をしに来た。

ついでにスバルとメールをして、食堂でお茶をしている。

「なかなか会う機会がなかったな。」

「そうだな。僕もなかなかタイミングが合わせなくて、ごめん。」

「いやいや、スバルのせいじゃないでしょ。」

「兄さん達から話は聞いてたんだけど。GEOS関連の事で忙しくてな。」

「へえ、GEOSの初期スタッフなのか？」

「ああ、最初は歩くだけでも大変だった。」

「やっぱり、アルテアさんやベガさんの弟だけあって色々やってるみたいだな。」

「じゃあ、スバルも専用のGEOSを？」

「ああ、内緒だぞ？」

「わかってるよ。」

2人で軽く談笑している。

「星夜、今日受領した装備とはなんだ？」

「ああ、それはな。」

電童を操作し、仮想ディスプレイを展開する。

「こんど行われる『キャノンボール・ファスト』用の装備だ。」

「なるほど、大型ブースターか。」

「ブースターとミサイル。複合型の兵装だな。」

「キャノンボール・ファストは一般公開されるし、僕たちも応援に行こう。」

「ああ、見ててくれ、音速のレースを。」

「楽しみにしてる。…あとひとつ聞いていいか？」

スバルは俺の横にある箱に視線を移す。

「この箱だろ？これはクラスメイトの本音さんが考えたペットロボだ。井上さんが暇つぶしに作ってくれてね。」

「なるほど、納得だ。あの人ならやるな。」

箱を開けて中を見せながら話す。

「ふむ、これは…恐竜か。」

「そ、まだ名前は決まってるない。」

「考えた人がいるなら当然だな。」

所謂テイラノサウルス的な形のペットロボ。

色は黒で塗られている。

「しかし、女性が考えたにしては攻撃的な印象だな。」

「データウェポン達を参考にしたって言ってたからなく。」

箱を閉めて袋に入れる。

「IS学園の事は判らないが、メールの相手ならいつでもやるぞ。」

「ああ、その時は頼むよ。」

ただ友達と軽い世間話をするのも悪くない。

IS学園のアリーナにて、日曜日だが多くの生徒達が自主訓練をしている。

専用機を持たない多くの生徒は数少ないISを使い回すため、割り振られた日程で行うしかないのだ。

学園祭の次は『キャンノンボール・ファスト』と呼ばれるISを使ったレースが行われる。

全生徒が参加する市内のアリーナを使ったイベントであり、テレビなどのメディアに取り上げられるかもしれないとなると、一層の努力をしているのだ。

「はあ…はあ…。」

そんなアリーナの中で1人で、一心不乱に訓練をするセシリア。

（私が…最もBT兵器の適正があるはずなのに…！）

ビットを飛ばし、標的のドローンとは全く違う方向にビットからレーザーを放つ。

（曲がれ！曲がれ！）

心の中で念じるもレーザーは一直線に進み、アリーナのバリアに当たり強い光を放つ。

(未だに同時制御も出来ていないと言うのに…。)

セシリア自身、自らの弱点は把握している。

機体とビットの同時制御、近接戦闘の貧弱さ。

日々、鍛練は欠かしていないが成果が出るとは言い難い。

(せめて…せめて…一つくらいは…。)

朝から休まずに続けている為、大量の汗が肌を伝う。

(星夜さんや一夏さん、それぞれが自らの欠点をうまく潰していると言うのに!!)

星夜や一夏はまだ専用機を受け取ってから半年しか経っていないので、欠点はいくらでもある。

それでも一つ一つを確実に潰してメキメキと実力をあげている。

(私は…入ってから何も変わってない!)

自分の中でいくら考えても、実力が上がった実感がない。

それどころか何処かのテロ組織に実力の差を見せられただけだ。

(偏光射撃くらいは…。)

何度目の挑戦か…数えるのも馬鹿らしくなるほど、繰り返したが未だに曲がる気配はない。

『オルコット!聞こえてるのか!』

「はっ!はい!?織斑先生ですか!」

急に入った通信に驚くセシリア。

『熱心なのは良いことだが、少しは休め、朝から一度も休んでいないだろ。』

「で、ですが…。」

アリーナの様子を見ていた先生達が一度も休みを取らないセシリアを不安に思い、千冬が声をかけたようだ。

だが、訓練の内容に納得のいかないセシリアは続けようとする。

『貴様が何に焦っているのかは知らないが、そんな状態で繰り返しても得るものは何もないぞ。休め。』

「……………はい。わかりました…………。」

千冬に強めに言われ、渋々とピットに戻るセシリアだった。

(……やはり、装備がいけないのでしょうか……。)
いくら努力しても曲がる気配の無い射撃に対して、八つ当たりのような心境になる。

装備に関して本国にいくら掛け合おうと、録に相手にされない。

兎に角、変化を求めているセシリアには、全てが自分を押し潰しに來ているように感じていた。

(どうすれば……どうすればいいのでしょうか……。)

自分……愛機……本国……

考えれば考えるほどマイナスの方向に考えている、そんな自分の状態をセシリアは気づいていなかった。

気がつけばセシリアは草原の様なところに居た。

『ねえ、どうして信じてあげないの?』

『……えっ?』

突然聞こえた声に驚き、振り向くセシリア。

そこには1人の男の子が立っていた。

『なんで?』

『な、なんのことかしら?』

問われ事の意味を理解できず聞き返してしまうセシリア。

『あの子達は待ってるよ。だから、信じてあげて……。』

『あの子達……?』

言われていることが頭の中で理解できず、混乱するセシリア。

『ちゃんと、見てあげて……。』

男の子は悲しそうな表情でセシリアを見つめていた。

徐々に視界が歪んでいく。

「ん……」

目覚ましが鳴り、体を起こすセシリア。

夢を見ていた気もするが、起きた直後のせいかわ、ハッキリしない。

「あら、ユニコーンさん。おはようございます。」

目覚ましの隣に居たユニコーンに挨拶をするセシリア。

「今日も一日、いい日になりそうですわ。」
そう言った彼女の笑顔は何処か悲しげなものだった。

第56話 《高速機動訓練》

学園祭が終わり、9月の中頃。

俺―天野星夜―達は、食堂で食事をしていた。

「そう言えば一夏、もう少しであんたの誕生日じゃない。」

「ああ、そうだな。」

鈴が急に思い出したように一夏に言う。

「ええ!?一夏の誕生日って近いの!?!」

「お、おう。」

それを聞いたシャルが大きな声で反応。

一夏に言い寄る。

「い、いつ!?!」

「27日だよ。落ち着けて!」

「う、うん。」

一夏に言われ、椅子に座るシャル。

「へえ、じゃあ何かプレゼントの1つくらい用意するか。」

「そうですね。もう少し早く教えてもらえれば、時間を掛けて選ぶのですが…。」

「ご祝儀と言う奴だな。一般男性が喜ぶものか…。」

「何がいいかな…。」

俺、セシリアさん、ラウラ、簪さんで軽く考える。

「そんなに盛大なのじゃ無くていいぞ?」

セシリアさんやラウラの言葉からどんな物が来るか、予想がつかないからか、一夏が声をかける。

「しかし、『キャノンボール・ファスト』の当日だな。」

「そうなんだよ、中学時代の友人達と集まって俺の誕生日パーティーやるって言ってくれてるんだけど、その関係で少し遅くなるな。」

「誕生日パーティーか、よくやったな。北斗の家で。」

あいつの家が喫茶店だったから夕方から貸しきりにして、夜遅くまで騒いだなあ。

「そうだ。折角だから、皆も来ないか?」

「ほ、本当!?!行くっ!行くよ!」

「幼馴染だからな、行ってやろう。」

一夏からの提案に元氣よく返事をするシャル、仕方ないな、とか言いながら喜んでるのが丸解りな箒さん。

「久しぶりに弾とかに会うのも良いわね。」

「折角の誘いだ。行かせてもらおうとしよう。」

「一応、予定確認してから返事するね。」

鈴、ラウラは行く。

簪さんは行く気はあるみたいだ。

「俺も特に予定は無いし、行くよ。」

「ああ…ってセシリアは?」

「……。」

「セシリア?」

唯一返事が無いセシリアさんに一夏が聞くが黙ってしまっている。

「セシリアさん。」

「ひゃいっ!」

肩を叩くとセシリアさんが変な声を上げる。

「大丈夫か?」

「は、はいっ!大丈夫ですっ!……えっと、一夏さんの誕生日パーティーですね?確か予定は入ってなかったと。」

「じゃ、じゃあ、一応全員参加って事でいいよな。」

挙動不審のセシリアさんを横目に、一夏が軽く全員に確認する。

「パーティーって事なら料理の1つくらい持っていくべきか?」

「あ、それは大丈夫だ。近くの弁当屋にオーダブル頼むから。」

「そうか?わかった。」

食べ終わった食器をまとめつつ話をする。

「明日から高速機動の実習か…。」

「まあ、今まで学園祭の関係で座学だけだったもんな。」

「具体的にどんな事やるんだ?皆は知ってるか?」

一夏が全員に聞く。

「今までの座学の内容で予想はつくと思うが、主に高機動用のパツ

ケージのインストールから始まり、高機動時の制御練習が主題になるだろう。」

「と言ってもあんたの白式と箒の紅椿はパッケージが無いから、調整して高機動再現になるんじゃない?」

「そうか。ありがとう。」

ラウラ、鈴からの話を聞き、頷く一夏。

「高機動パッケージって言うと、セシリアのヘストライク・ガンナーだよな。他の皆もそんな感じか?」

「そうね。まだ届いてないけど甲龍用のとびつきりを用意してるわ!」

一夏の言葉に鈴が元気よく返す。

「こちらは姉妹機から高機動ブースターを移して使うことになるな。」

「姉妹機：確かハルフオーフさんが使ってた『シユヴァルツエア・ツヴァイク』だっけ?」

「ああ、その通りだ。」

俺の言葉にラウラが反応する。

「僕のリヴァイヴは増設ブースターを付ける事になるね。元々ブースターの類は増やしやすなんだよね。疾風の名は伊達じゃないよ。」

「確かにな。」

シャルが自信満々に言い、一夏が頷く。

「私の場合は打鉄のブースターを改修して取り付ける形になるかな。」

「やっぱり同型の機体から借りるのが一番だよな。」

簪さんが呟く感じで言い、俺が相槌をうつ。

「やぱり星夜はあれか?バイパーでやるのか?」

「まさか、あれだと燃費が悪すぎる。だから、先日GEARに行つて受け取ってきたよ。」

一夏の予想に答える。

「まあ、パッケージじゃなくて、シャルと同じく増設ブースター系だけだ。」

「へえ、電童用に作ったの?」

「ああ、そうらしい。でも、GEARの方でテストしてるから完成はし

てるぞ。」

「じゃあ、後は星夜に合わせるだけだね。」

「そうだな。それが大変そうだけど。」

シャルと簪さんが興味を持って聞いてくる。

「しかし、そうなると一番有利なのはセシリアか。」

「既に何回か使用してるのは大きいわね。こっちはなにやってんのかしら。本当は夏休みの時に受け取る予定だったのにな。」

「訓練はそれなりにやっては居るが、実機に触れているのは大きな利点だな。」

一夏、鈴、ラウラが今のところ誰が有利かを話す。

「シャルは今まで使ったことあるのか？」

「うん、会社でテストターとして何回かね。でも、今回はその新型だから調整とかは必要だよ。」

「打鉄式で高速機動はしたこと無いから少し不安だな……」

俺、シャル、簪さんで心配な所の確認。

「なあ、セシリア。高機動時の事、教えてくれよ。」

「……申し訳ありません。それはまた今度。ラウラさんも詳しいですわよ。」

「そっか。わかった。ラウラ、教えてくれ。」

「いいだろう。覚悟しておけ。」

一夏に返すセシリアさんの表情が普段とは違う感じだった。

微笑んでこそいたが、全体的に暗さを感じた。

「なあ、セシリアさん、本当に大丈夫か？」

「えっ？私がかしましたか？」

「いや、俺の気にしすぎならいいんだけど、なんか具合が悪そうに見えるから……。」

「あら、意外と心配性ですわね。特に問題はありませんわ。」

どうしても気になったので聞いてみたが、否定された。

「そう言えば、一夏さんの部活動への貸し出しはどうなっておりますの？」

「そうだね。いつからなの？星夜は知らない？」

セシリアさんが話題を変えた。

シャルは俺と一夏を見てくる。

「え…と、たしか今は順番を決めてる最中だよな？星夜。」

「ああ、明日辺りには部活動掲示板に張り出すから、そっちで確認してくれ。俺達の口からは言えないから。」

「ふーん…。星夜は来ないの？」

「行きません。」

鈴がこちらを見ながら聞いてくるので速答する。

「星夜も行ってくれば俺も楽なだけだな…。皆は何処に入ってるんだ？」

一夏が今度から貸し出される事から全員の所属が気になったようだ。

「私は初めから剣道部だ。」

箒さんが言い、一夏が幽霊部員だったよな、と付け足す。

「私はラクロス。入って早々に期待のルーキーよ。」

自慢気に話す鈴、一夏もふんふんと頷いている。

鈴なら敵を気にせず、縦横無尽に駆け回ってそうだ。

「僕は…料理部…だよ。」

すこし恥ずかしそうに答えるシャル。

元々料理は得意だがレパートリーを増やすべく、入ったそうだ。

まあ、恐らくは日本の家庭料理を習得して、一夏の胃袋を掴むためだろう。

既に一夏も興味津々なようだし。

「私は英国が生んだスポーツ、テニス部ですわ。幼い頃からやっておりましたので、上級生の方にも遅れはとりませんわ。」

立ち上がり、すこし大袈裟にポーズを取るセシリアさん。

やっぱり優雅さとか気にしながらやってるのだろうか？

「茶道部だ。織斑教か…織斑先生が顧問をしているから知ってるかも知れんが。」

淡々と言うラウラ。

なんでも、入部希望者が多くて、2時間耐久正座で耐えきった者だ

け入部が許されたとか。

「あ、私はコンピューター部。ただ、あまり出れてない…。」

簪さんが小声で答える。まあ、打鉄式式の関係とかであまり出れてなくて堂々と言えないのかも。

「ふくん。まあ行つたときはよろしくな。」

一通り聞き、満足した一夏が全員に声をかける。

「つて話してたらもうこんな時間じゃないか。」

「本当だ。そろそろ教室に行かないとね。」

時計を見るといい時間なので食器を片付け、教室に向かった。

ある日の夜。

GEARからの連絡が入る。

「はい、天野です。」

『こんな時間にすまない。渋谷だ。』

「社長、なにかあったんですか？」

渋谷社長から直接連絡が入るとは珍しい。

『先程、GEARアメリカに襲撃があった。』

「GEARアメリカ…まさか!?!」

GEARアメリカは俺の父さんと母さんが今いる場所じゃないか
!?

『お、落ち着いて欲しい。まだ向こうは混乱しているようだが、人的被害の報告は入っていない。大丈夫だ。』

「そ、そうですか…。」

よかった。無事なようだ。

「でも、なんでGEARアメリカが？」

『ああ、近くの米軍基地襲撃と同時に行われたようだね。アメリカ軍からIS、こちらからは何かしらのデータ、恐らくはデータウエポン関連を奪おうとしたようだ。』

「なるほど。」

『先日そちらで確認された、サイレント・ゼフィルスと凰牙が来ていたらしい。亡国機業の機動力は恐ろしい。十分に気を付けてくれたま

え。』

「この間、IS学園を襲撃したばかりだと言うのに、今度はアメリカか…本当に神出鬼没だな。」

「わかりました。」

『うん、一応ご両親の無事が確認できたら連絡しよう。』

「お願いします。」

電話を切る。

何が目的か知らないが、これまでの感じからすると、キャノンボール・ファストにも乱入してくるかも知れない。

「やっぱりデータウエポンかなあ…。」

解らないことを考えるのはやめて、シャワー浴びて寝るか。

「はい、それでは皆さん。今日から高速機動についての授業をしますよー！」

山田先生の声が第六アリーナに響く。

今日は普段使っている第三アリーナではなく、楕円形に長い第六アリーナだ。

「では、専用機持ちの皆さんに実演をしてもらいます。」

山田先生がぱつと手を向ける先にセシリアさん、一夏、俺が待機している。

「1人目は高機動パッケージヘストライク・ガンナー」を装備したオルコットさんー！」

「よろしくお願いいたしますわ。」

山田先生に呼ばれ、一歩前に出て、お辞儀をするセシリアさん。

「2人目は出力を調整して仮想高機動機にした織斑くんー！」

「あ、えーと…頑張ります…?」

続く一夏は周りの女子が上げる声援に気圧されて、弱々しい挨拶になっている。

「最後は機体アタッチメントに増設ブースターを付けて、機動性を上げた天野くんー！」

「全力で行きますー！」

山田先生の声に合わせ、右手を振り上げて挨拶する。

「しかし、星夜のそれ、でっかいな…。」

「俺もそう思う。」

「その分、出力も大きそうですが…。」

一夏とセシリアさんが電童のバックパックに取り付けられた、ブースターユニットを見て感想を言う。

「ブースターユニットへヴァルハラ、出力の高さはお墨付きだけど、その分取り扱いが難しい…そうだ。」

受け取ってから使う機会が無かったので、今日が初使用だ。

「では、3人は準備をしてください。」

山田先生に言われ、それぞれ準備をする。

「星夜さんに一夏さん、お二人共センサーの設定は大丈夫ですか？」

「えっと、どれだっけ？」

「確か…高機動補助用のハイスピードモードだったな。」

「ええ、それと各スラストを連動監視にしますの。慣れないと酔いますわよ。お気をつけて。」

セシリアさんに言われ、設定の確認をする。

視界全体がより鮮明に映る。

「よし、設定完了。」

「電童、準備完了です。」

「ブルー・ティアーズも完了ですわ。」

それぞれ空へ行き、スタートラインに並ぶ、山田先生の合図を待つ。

「はい！では皆さん！行きますよ！」

フラッグを持つ山田先生が声を上げる。

「……3、2、1、スタート！」

フラッグが降り下ろされると同時にスタート。

一気に加速し、瞬時加速並の速度で突き進む。

しかし、ハイスピードモードに設定したバイザーのお陰で、視界は非常に鮮明だ。

「くっ！確かにじゃじゃ馬だな、こいつは！」

2人に遅れずついていけるが、ちよつとした事でバランスが崩れ、

機体が揺れる。

『では、お先に♪』

慣れない高速機動に苦戦する俺と一夏を横目に、セシリアさんが一気に加速し、前に出る。

『よし！俺も負けないぞー！』

それに釣られて一夏も加速、セシリアさんの後ろに付く。

「継続的な加速ってのは慣れないな。」

2人を追いかけるように飛ぶ。

『あら、お二人共、私のヒップにご興味がありました？』

『ぼつ馬鹿っ！そんな訳ないだろっ！』

「残念ながらそんな余裕は無い！」

『ふふっ冗談ですわ♪』

軽く冗談を言うくらいに余裕があるセシリアさん。

俺と一夏はついていくので精一杯だ。

『折り返しですわよ。』

『段々わかつてきたぞ。行つくぜえ！』

「一夏、調子に乗って事故るなよ！」

IS学園の中央に位置する、タワーの頂上で折り返し、来た道に戻る。

セシリアさん、一夏、俺の順番でゴールを通り、減速し、先生達の元へ行く。

「はい！皆さんお疲れ様でした！」

山田先生が笑顔で出迎えてくれた。

「いいか、今年は異例の1年生参加だが、やる以上は各自目標を持って努力するように、キャノンボール・ファストは貴重な経験として必ず生きてくるだろう。訓練機組は選出を行うので各自割り振られた機体の準備を開始しろ！」

織斑先生がクラスの全員に声をかける。

今、織斑先生が言っていたが、本来ならキャノンボール・ファストに参加するのは整備課のある2年からで1年は観戦しかしなかったらしい。

恐らくは俺達、専用機持ちが多すぎるからだろう。

今回の授業で出場選手と整備班に、クラスをわけるとうだ。

「天野くん、初めての高速機動はどうでしたか？」

「慌ただしく準備を進めるクラスメイトを横目に、山田先生が話しかけてきた。」

「今までの動きと癖が違うので少し怖いですね。補助バイザーのお陰で綺麗に見えるのも違和感がありますし。」

「そうですね、動きと視界の違いに最初は戸惑うと思いますが頑張ってくださいね。」

「あと、思ったようにライン取りが出来なかつたです。どうしても行きすぎますね。」

「上手い人は腕や足の角度を少し変えるだけで軌道の微修正が出来るそうですよ。」

「へえ、それはすごいですね。」

「同じ様に増設ブースターを使うデユノアさんやボーデヴィツヒさんと話したらどうですか？何か得られるかもしれませんよ。」

「あ、はい。そうしてみます。」

訓練機を使う生徒達の方へ向かう山田先生を見送り、ラウラとシャルが作業してる所へ向かう。

「ラウラ、シャル、調子はどう？。」

「あ、星夜。」

「インストール作業は順調だ。問題ない。」

ブースターユニットが入っているであろうコンテナの近くで作業をしている2人。

頭部のヘッドギアのみを展開し、作業状態を確認してるようだ。

「星夜はどうかしたの？」

「問題でもあったのか？先程の飛行を見てる限り、大きな物は無さそうだったが。」

「いや、初めての高速機動だから、上級者の話を聞こうと思ってさ。」

一瞬、2人が深刻な顔をしたので誤解を解いておく。

「なるほど。そう言うことか。」

「高速機動は気を付ける所が多いからね。」

そのまま、装備のインストールが終わるまで2人から簡単な注意点等を聞いていると、一夏が来た。

「あっ一夏。」

「3人で何してるんだ？」

「ん？同じ増設ブースター組としてレクチャーを受けてた。」

「初心者に対するアドバイスは、上級者にとっても自分の技量を確認する貴重な機会だからな。」

「ああ、なるほどな。」

一夏が頷くとほぼ同時に、ラウラとシャルのインストールが終了した事を伝えるメッセージボイスが流れる。

「良いタイミングだな、シャルロット、軽く流すか？」

「うん、そうだ一夏、星夜。映像回してあげるね。チャンネル304で。」

「お、助かる。上級者の視点をモニタリングできるのっていいよなあ、助かる機能だ。」

「こちらは305だ。じっくり見ておくといい。」

「305…よし、設定完了。位置取りや加減速のタイミングがわかるのは助かるな。」

IS同士で視界情報を共有する機能があり、相手が見ている物をそのまま見れる。

テレビのバラエティとかである視界カメラのイメージだ。

「やっぱり、自分の顔が見えるのって違和感があるな。」

「そうか？鏡とかと一緒にだろ？」

「あくそう言う考え方もあるかあ。」

目の前に居るラウラやシャルの視界を見てるため、当然俺や一夏が映る。

この感覚が一夏的には違和感があるようだ。

ラウラとシャルは機体を展開し浮上する。

「よし、準備完了だ。シャルロット、そちらは？」

「うん、大丈夫だよ。じゃ、じっくり見ててね。」

「おう、瞬きすらしてる暇はないからな！しっかり見てるぜ。」

「代表候補生の動き、しっかりと参考にさせてもらおうよ。」

2人はスタートラインに並び、合図と同時にスタート。

先程の自分達と同じコースを迷いなく、しっかりと駆け抜けていく。

「加速タイミングは機体の差かな、でも、減速は同じ位のタイミングか…。」

「ライン取りもほぼ同じ。2人ともブースターの慣らしが目的だから速度はもつと出るだろうな。」

あくまで練習であり、ブースターの初使用となれば慣らしの為、全力で稼働することはない。

それでも先程の自分や一夏と比べれば早いタイムでコースを一周し戻って来た。

「おかえり、2人とも上手いよなあ。」

「慣らしで俺よりも良いタイム出してるもんな。」

「こつちはその為の訓練を受けている。そつちはやっていない。それだけの差だ。本番まで頑張れば埋めれる差だろう?」

「そうそう、2人とも初めてなんだから仕方ないよ。今の動き見て解らない所とか、気になることはあった?」

俺と一夏でいくつか質問し、それに2人なりの答えを貰う。

「うん、こんなもんかな、ありがとう。参考になったよ。」

「ああ、ありがとう。さすがはシャルとラウラだな。」

「うむ、大いに精進するといい。」

「うん、僕はもう少し調整しようかな。」

ラウラ、シャル、一夏と別れブースターの調整をするため、機材が置いてあるエリアに行く。

「箒さん、隣使って平気かな?」

「ああ、いいぞ。」

電童を機材に接続、調整の準備に入る。

「すまない、少し意見をもらっていいか?」

「俺でよければ。」

箒さんがディスプレイをこちらでも見えるようにする。

「先程、一夏と話したのだが、なかなか難しくてな。」

「展開装甲の配分か…。」

展開装甲はパッケージを必要としない装備だが、その代わりに燃費が悪い。

恐らくはそのエネルギーを〈絢爛舞踏〉で供給する前提の設計なのだろう。

「全てを開けるとエネルギーが持たなくて、開けないと出力が足りない…。」

「ああ、一部だけ展開すると出力差がありすぎて制御できない。」

「なるほどな…。」

ディスプレイを見ながら考える。

「ねえ箒さん、別に最初から最後まで同じ必要はないよね？」

「ん？どういう事だ？」

俺の言ったことがいまいち伝わらなかったようだ。

「スタートからゴールまで同じ展開状態を維持するなら、パッケージと変わらない。展開装甲は柔軟な対応をするための装備でしょ？」

「っ！そう言う事か。」

「そう、加速のタイミングだけ開けたりすれば燃費と出力の両方を取れるはず。」

「状況に合わせて展開状態を変えるのか、これは盲点だった。ありがとう、少し自分で考えてみる。」

「どういたしまして。」

「しかし、星夜のあれは大丈夫なのか？先程は少し振り回されているように見えたが。」

「ああ、あれは完全にベガさんに合わせたやつ。これから調整して使いやすいところに落とし込まないと。」

「そうか、頑張ってくれ。」

会話をしながらも画面を見つめ、各数値を弄っていく。

授業の分だけだと足りなさそう。GEARで練習させてもらわないと。

キーボードを打ちながら思う。

本番まで2週間程しかなく、実際にこの第六アリーナを使った実習は数えるほどしかない。

全クラスが順番に使うのだから当然だし、放課後の申請ももう埋まっていると思っただ方が良いだろう。

「よし、これで一回飛んでみるか。」

「そうか、気を付けてな。私はもう少し調整している。」

箒さんと別れ、コースの方へ向かい、電童を展開。

「ブースター接続確認…よし。」

頭の中に流れる各情報から問題が無いことを確認し、浮上する。

「あら、星夜さんはこれからですか？」

セシリアさんが目の前にやって来た。

「ああ、初めてだから調整も時間がかかってね。セシリアさんは？」

「そうですか、私はこれから一度降りて機体の確認ですわ。」

「そっか。頑張ってるね。」

「ええ、今ですとコースに沢山の方が飛んでらっしゃいますから、接触等にご注意くださいませ。」

「忠告ありがとうございます。」

セシリアさんが離れたのを確認し、センサーでコースの確認をし、先程と同じように飛ぶ。

セシリアさん、シャル、ラウラの飛んでいたラインや加減速のタイミングを意識し、小刻みに制御する。

「本番はこれに妨害が加わるのか…。」

飛びながら呟く。

今、制御で手一杯の為、このままでは本番で周りからの攻撃に対処仕切れないかもしれない。

その日は調整しては飛び、それを元に修正を行い再び飛ぶ、の繰返し授業時間を目一杯使ったのだった。

放課後、今日の内容を踏まえ、整備室でブースターを前に唸っていた。

「これだけやっても、機体のロールが安定しないな…。」
何度調整をしても、機体が安定しない。

このままでは当日に最下位まっしぐらだ。

「あまのくん、悩み事〜?」

「確か今日は〈ヘキヤノンボール・ファスト〉に向けた初実習でしたね。
装備についてお悩みですか?」

布仏姉妹が整備室に入ってきた。

ちなみに本音さんの足元には、井上さんが作ったペットロボが居る。

「虚先輩に本音さん、ご指摘の通りです。性能が良いんですけど、なかなかピーキーな様で…。」

「天野くん、少しデータを見せて貰っていいかしら?」

「見せて見せて〜。」

「あ、はい。どうぞ。」

仮想ディスプレイを展開し、各データを表示する。

「こちらの数値はもう少し低い方が使いやすいかと。」

「これは〜こういじって〜、こっちがこうだね〜。」

2人がテキパキとキーボードを操作していく。

数分すると、作業が終わったらしく、手が止まる。

「大まかな調整ですがこの位でどうでしょうか。」

「次の実習の時に見せてね〜。」

「あ、ありがとうございます。」

ディスプレイを見て、調整前後の状態を見比べる。

「結構数値が低いんですね。」

「熟練者の方は数値を上げる傾向にあります。慣れていないのなら、扱い易さを重視した方が結果的に速くなりますよ。」

「これならあまのんも周りにちよっかい出されても平気かも〜。」

なるほど、ベガさんの設定そのままを使うより、俺が完全に扱える範囲に抑えたのか。

「わざわざすみません。」

「いえ、本音が先日贈り物を貰ってますし。」

「えへへ、そのお礼だよ。」

足元のペットロボも吠えるような仕草をする。

「自分はいくまで仲介役をやったただけですが。」

「それでも嬉しいんだよ。」

「また、調整で解らないことがあれば、いつでも協力しますから、その時は声をかけてください。」

「今回は解らないことが多いのでまた、力をお借りすると思います。」
心強い助っ人を得た。

その後は細かい調整の仕方を聞いて解散した。

後日、休日だが、少しでも練習する為にGEARに向かおうとして
いると…。

「おはよう、鈴、簪さん。」

「おはよう、星夜。」

「おはよう、星夜くん。」

寮を出たところで鈴と簪さんが居た。

「星夜は出掛けるの？」

「ああ、ちよつとGEARまでね。」

「GEARに？ 装備に何かあったの？」

「いや、純粹に授業時間じゃ足りないと思ってね、アリーナも一杯だし
GEARで練習をね。」

「そうなんだ。」

「ねえ、それあたしも行って良い？」

頷く簪さん、鈴からまさかの申し出だ。

…いや、装備の到着が遅かったから、少しでも慣れたいのか。

「こっちは別に構わないぞ。」

「じゃ、すぐに準備するから、ちよつと待ってなさい！」

言うや否や寮のなかに行く鈴。

「簪さんも来る？」

「え、うん！ちよつと待ってて！」

俺に言われて一瞬だけ、キョトンとした簪もすぐに準備に向かう。

数分後、準備してきた2人とGEARに向かった。

「へえ、あんたのも大変ねえ。上級者に合わせてあったなんて。」
「本音さんや虚先輩には助けられたよ。」

「ここが高速機動訓練用アリーナ？」

GEARに到着し、ISスーツに着替えてアリーナに向かう。

情報封鎖の一環から地下にある特別アリーナだ。

「ここは学園のと違ってほぼ平面だけど、本番もこんな感じらしいから丁度良いな。」

「この方が少し狭い感じね。」

「でも、練習には最適だね。」

軽く話ながら機体を展開する。

「ほお、それが甲龍の新パッケージか。」

「ええ、へ風（フエン）くよ。」

まるで新しい服を自慢するように、その場で一回転する鈴。

「パッケージは本当に見た目が変わるから、大分印象が変わるよな。」

「見た目だけじゃ無いってことを教えてやるわ。」

「私も…負けない。」

話ながらもステータスのチェックを行い、スタートラインで準備をする。

「じゃ、始めるか。」

「ええ、いいわよ。」

「うん、大丈夫。」

コースに備え付けられたスタートシグナルを電童から遠隔で操作する。

カウントが始まる。

シグナルレッド…シグナルイエロー…シグナルブルー。

「スタートオー！」

3機のISが同時にブースターを吹かす。

加速によって歪む視界はセンサー即座に補正し、鮮明になる。

簪さん、鈴、俺の順番に最初のカーブに入る。

今日は実戦形式の妨害ありでやる予定だが、さすがに一回目はウォーミングアップをかねて飛ぶだけだ。

『貰ったあー!』

カーブの終わりで少し膨らんだ軌道になってしまった簪さんの隙を、鈴が逃さず仕掛けインサイドから抜いていく。

「加速なら負けねいぞ!」

『まだ始まったばかりだよ!』

1人で突っ走る鈴を2人で追いかける。

『ふっふっふっ……。あたしの速さに誰も追いつけないのよ!』

「絶対に!」

『追い越す!』

上機嫌な鈴が通信を飛ばして挑発してきたので、絶対に追い越すと心に決める。

「カーブで越すのは難しいから、やっぱり直線だな。」

2つ目のカーブを曲がりながら鈴を追い越す算段をつける。

「少し外に行きながら……。ここだっ!」

カーブが終わり、姿勢を直すタイミングを狙い一気に加速する。

「よし!」

『やるわね!星夜!』

『残念だけど、私が貰うよ。』

俺が鈴を追い越した直後、俺の後ろでスリップストリームを利用して加速した簪さんが更に前に出る。

「やっぱり1人で飛ぶよりも為になるな!」

こうして周りの皆と切磋琢磨していると自分の力量がどれくらいか分かりやすい。

皆に比べてまだまだだが、その分延びしろがあると思っておこう。

その日は朝から夕方までたっぷりと、時間を掛けて飛び続けた。

「あー、疲れた〜。」

「学園の授業時間よりもやってたからね。」

「2人のお陰で良い訓練が出来たよ。」

「あたしも思いつきり〈風〉を動かして良かったわ。」

「レースの予行練習には丁度良かったよ。」

体に軽い疲れを感じながら歩く。

「ま、本番でもあたしが1位を貰うからよろしくね♪」

今日一番勝ちが多かった鈴が高らかに勝利宣言する。

「今日は練習、本番とは違う…。私が勝つ。」

それに対して簪さんが答える。

「そうだぞ、本番までまだ数日ある。それまでに力をつけて勝たせてもらうぞ。」

俺も同じように宣言する。

「ふふんっ楽しみにしてるわ。じゃ2人とも、お疲れ！」

「うん、星夜くん、鈴さん。お疲れ。」

「お疲れさま。」

寮の前で挨拶して別れる。

それから本番までクラスでの実習、放課後の特訓、本音さんと虚先輩に教わりながら調整して過ごした。

そして9月27日『キャノンボール・ファスト』開催の日となった

第57話 《飛べ！光よりも速く！》

9月27日、今日は『キャノンボール・ファスト』だ。

市内アリーナを使い行われるイベントで、アリーナの周辺もお祭騒ぎだ。

中で見れなくても大型のスクリーンで映してるので、それを見る人もいる。

アリーナ外周の道には出店も来ており、朝から夜まで賑わうらしい。

そんな中で俺―天野星夜―はと言うと。

「はい、これで終わりですね。」

「しゅくりよ。」

「本音さん、虚先輩、ギリギリまでありがとうございます。」

ピットの隣にあるメンテナンスルームで、最終調整を行っていた。

「こういった特殊な装備は細心の注意を払うべきですから、天野くんは間違っていないですよ。」

「いつもお世話になってるからねー出来ることならやるよ。」

今回は本当に助かった。この精度を自分一人で出そうとしたら時間がいくらあっても足りなかっただろう。

「では、私達はこれで。頑張ってくださいね。」

「頑張ってる。」

「はい！頑張ります！」

2人は部屋を出て、観客席に向かった。

「えーと、これから開会式か…。」

最後に片付けをして、今日の流れを確認しながら部屋を後にした。

「お、星夜。もう少しで始まるぞ。」

「かなりギリギリまでやっていたようだな。」

ピットに入ると一夏と箒さんが話していた。

「ああ、少し気になるところがあったからな。勝つためにも妥協なんてしてられないだろ？」

「なるほど、星夜らしいや。」

「準備を怠ると痛い目に会うのは何事も同じだからな。」

2人とも納得したように頷く。

開会式はスクリーンからの放送で行われる。

ISの競技用に作り直された市内アリーナ、その収容人数は東京ドームとほぼ同じ約5万人だ。

しかし、競技スペースなどを含める全体の面積は2倍近いらしい。そんな大きさなので、よくあるスポーツの開会式と同じようにやるわけにもいかないようだ。

「皆さん、準備は大丈夫ですか？」

「開会式終了後、2年のレースが始まる、その次がお前達、専用機持ちによる特別レースだ。それまでになにか問題が発生した場合は、すぐに近くの職員に伝えるように。」

織斑先生と山田先生が入ってきて全員に声をかける。

「織斑、天野。お前達は初の公式の場での試合になる。周りを気にせず試合に集中しろ。」

「はい、拳法でも大会に何度か出てますし、そのくらいで乱れるような訓練はしてませんよ。」

「そうだけ、見ててくれよ。千冬姉!」

「織斑先生だ。何度言えば覚える…。」

あきれながら出席簿でコツン、と軽く叩かれる一夏。

「では、皆さん、2年生の部が始まりますよ。終わる頃に又来ますので、それまでここで待機してくださいね。」

先生達は他の生徒の様子を見るため、ピットを出ていった。

「お、そろそろだな。」

モニターに映るのは多数のラファールと打鉄。

それぞれがブースターなどを思い思いに付けてカスタマイズしている。

司会の声に合わせて、スタートのカウントがされ、全ての機体が一斉にスタートした。

キャノンボール・ファストの始まりだ。

「えつと…Fの35…Fの35…」

競技が始まる少し前、自分のチケットに書かれた座席番号を見ながら歩く1人の少女が居た。

五反田蘭である。

「きゃっ!?!」

「おつと…」

チケットを見ながら歩いていて、前に立つ人に気がつかずぶつかってしまう。

「大丈夫か?」

「は、はい。ありがとうございます。」

ぶつかり、転びそうになった所を支えてもらう蘭。

相手は自分と同じくらいか少し上に見える男性だった。

「人が多いし、通路も狭いからしつかり前を見るんだ。」

「す、すみませんでした!」

頭を下げる蘭。

「あと、Fの列はひとつ後ろだ。」

ピツと指す方向を見ると確かに『F115』と書かれた席がある。

「重ね重ねありがとうございます!」

「なに、自分の席がその隣だからな。偶然だ。」

「あ、そ、そうなんですか!?!」

時おり席の数字を確認しながら蘭は男性と歩く。

「あ、私、五反田蘭って言います。」

「スバル、スバル・アルクトスだ。」

「あの、アルクトスさんも生徒さんの招待で来たんですか?」

「ああ、友人にチケットを貰ってね。ここだな。」

座席の番号を確認し、2人は座る。

「も、もしかしてその、友達って…」

蘭は1度だけ会ったことのある人物を思い出す。

「天野星夜、よく『2人目』と呼ばれているな。」

「わ、私は一夏さん…『1人目』の一夏さんからチケットを貰いました。」

「星夜から話は聞いているが、なかなか愉快的な人物らしいな。」

「あ、あははは…そ、そうですか…。」

2人は軽く話ながら開始の時を待つ。

ピット内に居ても観客席からの歓声が聞こえる。

「やつぱり2年生の人達は違うなあ…。」

モニターに映るレースを見ながら呟く。

まだ半年程しか使ってない自分と比べるのもあれだが、動きが綺麗だ。

無駄な動きを無くし、フェイントなどを駆使したレース。

もう最終ラップの為、全員が妨害よりも加速を優先し、1mmでも前に出ようとしている。

観声も一段と大きくなる。

「流石に楯無先輩は居ないんだな。」

「去年まで専用機持ちの人は、色々あつて基本的に見てるだけだったんだよ。」

隣に居る簪さんが教えてくれる。

各機体がゴールをくぐり、最後に大きな拍手と歓声が聞こえた。

「やつぱり勝負にならないから?」

「主に機密保持の部分かな、キャノンボール・ファストは人が多いから。」

「じゃあ、今回俺達がやるのって…。」

「きつと、男性操縦者の情報公開要求に対するガス抜きをかねてるんだと思う。」

「ま、理由はどうあれ、全力でやる。そうでしょ?」

簪さんと話していると鈴が横からやって来た。

既に甲龍を展開している為、床を滑るように移動する。

「当然。」

「で、星夜も簪もそろそろ展開したら?もう少しであたし達の出番よ。」

「うん、そうだね。」

簪さんと同時に機体を展開する。

「やっぱり皆のブースターと比べると、でけえな。」

「俺もそう思う。」

一夏が俺と簪さんの装備を見比べて感想を言う。

「それが鈴のパッケージか！本当にすごいな。」

「ふふん！そうよ！これがキャノンボール・ファスト用に作った装備、

〈風〉！」

一夏は初めて見る鈴のパッケージに驚いている。

今は軽く流していたが、今回キャノンボール・ファスト用の装備をつけているのは鈴だけだ。

セシリアさんの〈ヘストライク・ガンナー〉は本来強襲用、俺達は単なるブースターを増やしただけ、この差は決して小さくないだろう。

「純粋な訓練時間はラウラとシヤル、装備の熟練度はセシリア、装備その物は鈴が有利なのか。」

一夏が周りを見ながら言う。

「ふん、装備だけで勝敗が決まる訳が無かろう。」

一夏の一言に強気に言い返すのは箒さんだ。

「そう、どのような勝負であれ、流れを掴んだものが勝つのだ！」

ラウラが勝利宣言の如く、大きな声をあげる。

「ラウラ、勝利宣言には早いんじゃないかな？」

ラウラを制するようにシヤルが答える。

「皆さん、悔いの無いよう全力で戦いましょう。」

セシリアさんが締めると同時、ピットに山田先生が入ってきた。

「皆さん、これから出番ですが準備は大丈夫ですか？」

「はい。大丈夫です。」

山田先生の指示に従い、ピットからアリーナへ。

『では、ガイドビーコンに沿って並んでくださーい。』

ISを通して視界に表れるガイドビーコン。

それぞれがスタートラインにつく。

『会場の皆様！先程の2年生の部はお楽しみにいただけただけでしょうか！?』

スピーカーから声が響く。

『これから始まるレースは！今年度の目玉！1年生の専用機持ちの部！』

／ワアアアアアアアツ！！／

スピーカーの声に負けない位、大きな声が響く。

『総勢8機もの専用機達が音速の中で凌ぎを削ります！』

司会の声が響く中、中央の大型モニターには俺達、専用機持ちのプロファイルが表示されてる。

『皆様！ここから先は！トイレはもちろん！瞬きすら禁止！決定的瞬間を見逃してしまいますよ！』

コース内の確認を行っていたスタッフ達も居なくなり、シグナルランプが真っ赤に点灯する。

全員が構える。

『では！これより！1年生専用機持ちの部を始めます！』

周りの歓声が一斉に消える。

会場の視線が全て俺達に向けられているのが判る。

『3…』

全てのブースター、スラスターにエネルギーを送る。

『2…』

送られたエネルギーが種火となって、解放されるその時を待つ。

『1…』

一瞬でも遅れないよう、全ての神経を集中させ、走り出す時を待ちわびる。

『スタートオオオツ！』

8機ものISが一瞬で加速し、周辺の空気が揺れる。

本来ならまともな前を見れないはずの速度だが、ハイパーセンサーが補正する。

「ちっ、出遅れたか…。」

先頭から

ブルー・ティアーズ

ラファール・リヴァイヴ・カスタムII

シヴァルツエア・レーゲン

甲龍

打鉄式式

電童

白式

紅椿

の順になる。

自分と一夏、箒さんの位置はほぼ変わらない。

ひとつ頭が飛び出てるのはセシリアさん、その後ろに並ぶシャルとラウラ。

鈴と簪さんが並んでいる。

『そこだっ！』

最初のコーナーに入るか否かの所で仕掛けたのは箒さんだ。

空裂を振り、エネルギー刃が俺と一夏に迫る。

『だあっ!? あぶねえー!』

一夏は横に大きく避ける。

自分の頭を軸にして1回転する。

調度自分の体が逆さまになる瞬間にエネルギー刃が過ぎていく。

『貰ったー!』

一夏が避けたことによつて、空いた空間をすり抜けるように、加速する箒さん。

「させないよー!」

横を抜けようとする箒さんに、ブースターユニットからミサイルを撃ち込む。

『ぐっ!』

『俺まで!?!』

加速してる最中に目の前にミサイルが来たせいで、加速がそこで止まる箒さん。

ついでに一夏の前にもいくつか撒いておく。

ミサイルは2人に近づくと爆発し、爆風と煙で妨害する。

「お先に!」

カーブが終わり、直線に入った瞬間にブースターの出力を一気に上げる。

次は衝撃砲とミサイル、青龍刀と薙刀によるドッグファイトを繰り広げる鈴と簪さんだ。

『星夜!? もう来たの!』

『さすがだね! でも!』

2人は俺が近付いているのを確認すると、衝撃砲とミサイルの一部をこちらに割り振り、牽制をしてくる。

「ちいつ!」

ミサイルと衝撃砲を確実に避けるため、大きく移動する。

見えない衝撃砲は元より、ミサイルもしっかり距離をとって避けないと、爆風の餌食になってしまう。

「もう少し温存しときたかったけど…。」

変に出し渋りをして、巻き返せなくなるのも嫌だしな。

そう思うと同時に、両足のハイパープラズマドライブを起動する。

「いっくぜえええ!」

ハイパープラズマドライブが後方で圧縮した空気を解放する。

次の瞬間、電童が爆発的に加速する。

『えっ!?なんでそんな加速が出来るのよ!?!』

『きやつ!?!』

2人の予想より早く復帰した俺は、ブースターユニットのビームキャノンを撃ち込み、体制を崩す。

「お返しだつ!」

そのまま、一気に2人を抜き去る。

『行かせるかあつ!』

鈴が食らいついてくる。

「浅かったかつ!」

『拡散衝撃砲の威力! 味わいなさいっ!』

横並びになると同時に、横に向けられた拡散衝撃砲を発射。

カーブに入る直前で大きく外側に飛ばされる。

「ぐっ!」

目の前にアリーナの壁が迫る。

「このっ！まだだあ！」

両足のハイパープラズマドライブを突き出し、回転させる。アリーナの壁に向かって正座のような形でぶつかる。

「ちよつと型が変わるが…疾風！激走脚！」

両足のドライブユニットをタイヤに見立て、壁を走る。

なんとか壁への直撃を避けたが、その隙に一夏と箒さんも行ってしまふ。

「一気に最下位か…。スバルが見てるのにこの結果はカツコ悪いだろ…。」

そう呟き、壁を蹴り空中に戻る。

「一か八かだ。」

今まで余りの出力の大きさに一度もやったことの無かったが全出力を加速へと回す。

「ぐっおおおっ！」

PICが消しきれない程の加速Gを体に受ける。

「これでええっ！」

今回は普段の武装を降ろして替わりに、増設ブースターと一緒に入れた物がある。

それは大型の物理シールドだ。

普通のレースなら単なるデッドウェイトにしかならないが、今回はこれが必要なのだ。

シールドを展開し、前に構える。

「纏めて…ぶっ飛ばす！」

制御出来ないならしなければいいと、ちよつとなげやりな発想の元、固い楯と圧倒的な加速を使って全力の体当たりで突き進む。

「えっ？うわああっ！」

「なあっ！」

「えっ!?ちよっ!?まっ!?」

『きやっ！』

鈴と簪さんに追い付きつつあった一夏と箒さん、4人の集団に向

かつて真つ直ぐ突き進む。

この速度での接触は流石に恐ろしい物があるが、そんなことは言っていない。

4人に構わず加速し、追い越す。

「シャルとラウラ…。見えた！」

『まさかここまで一気に来るとはね…。』

『だが、その加速も終わりだ。それでカーブは曲がれないだろうか？』

最下位から一気に4人抜きをしたが、流石にこの速度ではカーブは曲がれないので、減速する。

減速と同時にシールドも格納する。

「ここまで来たんだ！もう少し欲張らせて貰う！」

『その意気や良し！』

『でも、僕やラウラを簡単に抜けると思わないでね！』

さっきの強行突破のお陰で後ろの4人はまだ距離がある。

この2人に集中できる内にかしなくと…。

「!？」

突然、目の前に二つの閃光が走る。

目の前を飛ぶシャルとラウラが急に撃たれた。

アリーナのバリアが破れた事により、緊急事態を知らせるサイレンが鳴り響く。

「ラウラ！シャル！」

ブースターにダメージを受けた事により、バランスを崩して、コントロールを失った2人が落ちていく。

「サイレント・ゼフィルス……い！」

上空を見上げると、サイレント・ゼフィルスが此方を見下しながら笑っていた。

突如鳴り響くサイレン。

そして、大きな爆音と振動。

ただ、楽しかった特別な日が、一瞬であり得ない非日常へと変わる。会場にいる5万人もの人間がパニックを起こさない訳が無かった。

全員が助かるため、出口をめざして動き出す。

「きゃっ!?!」

何が起きたか全く理解出来なかった蘭、椅子から立ち上がった姿勢で固まっていたら誰かの肘が当たり、体制を崩す。

「大丈夫か?」

横の席に居たスバルが咄嗟に支える。

「あ、ありがとうございます。」

「全員がパニックを起こしている、下手に動くといけない。落ち着いてきたら移動するぞ。」

スバルは冷静に周りを見渡す。

「一夏さん……。」

蘭はアリーナの中でサイレント・ゼフィルスと睨み合う一夏を祈るような目で見ている事しか出来なかった。

サイレント・ゼフィルスがライフルを構える。

その銃口の先には先程ダメージを与え、壁に衝突して墜落したラウラとシャルが居る。

「やらせるかあっ!」

「シャル!ラウラ!」

俺と一夏でラウラ、シャルの前に立ち、大型シールドと雪羅のシールドを構える。

直後、複数のレーザーが降り注ぐ。

「お前……何者だっ!」

一夏が雪片式型を構え、サイレント・ゼフィルスに問いかける。

「皆さん!ここは私が!」

「お、おい!セシリア!」

一夏の制止も聞かず、サイレント・ゼフィルスに向かい全速で飛び込むセシリアさん。

「1人で突っ込むなっ!」

セシリアさんを追うように飛び込む鈴。

「みんな!大丈夫!?!」

簪さんがこちらにやって来る。

「ぐっ……、高速軌道中に撃たれたとは言え、無様をさらしてしまっ
た。」

「あのまま壁に衝突してたら、絶対防御が発動してたね。」

シャルとラウラがゆつくりと立ち上がる。

「シャル！ラウラ！」

「無事か!？」

「ブルが直前にオートプレッシャーで軽減してくれて助かったよ。」

そう言うシャルの右手にはいつの間にかブルが装備されていた。

「だが、ブースターがやれた際に本体にもダメージが入ってる。直接
戦闘は難しいな。」

「僕はなんとか動けるけど。あの速度じゃ難しいな。」

2人は増設ブースターを強制排除する。

無惨にも撃ち抜かれ、風穴が空いた装備がガランと地面に転がる。

「ここから支援砲撃をする！行け！」

「ラウラの防御は僕に任せて！ユニコーン借りるよ！」

ラウラは反動を殺すためか、ワイヤーブレードを地面に打ち込ん
で、その身を固定する。

シャルはブルを解除し、ユニコーンを装備する。

「わかった！」

「いくぜ！」

「2人とも、無理はしないでね！」

俺達も鈴とセシリアさんを相手にしているサイレント・ゼフィルス
に向かって飛び込む。

「喰らえっ！」

一夏が飛び込みながら雪片式型を上段から落とす。

それと同時に、後ろから急接近した箒さんが斬りかかる。

「ふん……」

サイレント・ゼフィルスのパイロットは冷静だ。

前後から迫る斬撃を2人が振り切る直前に動き、一瞬で一夏の背後
に回る。

「なに!?!」

「なんだと!?!」

「甘いな。」

一夏を思いっきり蹴飛ばし、箒さんにぶつける。

そこを狙って撃ち込まれた衝撃砲、レーザー、ミサイルをシールドビットを使い、的確に防ぐ。

「これで!」

シールドビットの無い方から飛び込む、が上から来た別の敵に防がれる。

「おい! 貴様の相手は俺に決まってるだろ!」

「凰牙!?!」

ラゴウを装備した凰牙が俺の前で構える。

「あの時の傷の札、受け取りやがれっ!」

「先に仕掛けてきた癖に、よく言うっ!」

凰牙との格闘戦になる。

拳と拳、脚と脚がぶつかり、火花が散る。

「星夜くん!」

箒さんが後ろから援護射撃を行う。

「2対1程度のハンデじゃあ、勝てねえって事を教えてやるよっ!」

「私たちだって、あの時より強くなってる!」

「その身で思い知ってもらう!」

凰牙に2人で挑む。

「MもAもやるじゃない…。IS学園の専用機持ち達は少しガツカリね…………。」

周りに誰もいない、ガラんとした席の一つに座りながら呟く1人の美女、スコール。

こんな状況で平然と客席に座り見ていることから、この状況を作り出した1人、少なくとも知っていたのは誰が見てもわかる。

「あら、勝手に乱入しておいて、ひどい物言いね。」

そんなスコールに後ろから声をかける人物、楯無。

「これはこれは、ロシアの代表様。アリーナが大変な事になってるわよ。」

ここに居る時点で、高い確率で来るであろうとわかっていたので、スコールは冷静に答える。

「あれが彼等の実力だと思ってるなら、それは過小評価ね。」

「あら、そうなの。」

楯無と話ながら、スコールは席を立ち上がると同時に、ナイフを投げる。

楯無はしっかりと見極め、蛇腹剣へラスティ・ネイルでナイフを弾き、返す刃でスコールを狙う。

スコールは片腕だけ、ISを展開すると刃を受け止める。

「何が目的？『亡国機業』」

「このシチュエーションから予想してみたら？考える力も必要よ？」

「じゃあ、後で答え合わせをするためにも貴女にはここにいてももらわないとね！スコール！」

剣を手放し、代わりに多機能ランス〈蒼流旋〉をガトリングモードで展開し、構える。

構えるとはほぼ同時に4門の砲口から大量の弾丸が撃ち出される。

しかし、スコールが作り出した金色の防壁に防がれる。

「止めましょう？更識楯無さん。」

「……………」

楯無は何も答えず、ランスを構え直す。

「貴女の機体では私の防御は破れない。わかってるでしょう？」

「確かに…私の機体じゃあ、その防御は破れないかも知れない…。」

楯無はスコールを真っ直ぐ見つめる。

「だからって引き下がったら、それは私じゃ無いわね！ドラゴン！」

楯無が叫び、次の瞬間には左脚にドラゴンフレアが装備される。

直後、クラッシュユレイをスコールに向け放つ。

「くっー！」

「流石にこれは防げないわよね？」

スコールは上体を反らし、クラッシュユレイを避けた。

そこに合わせて、楯無はランスに大量の水を纏わせ突撃する。

「甘いわ!」

スコールは楯無に向かってナイフを投げる。

ナイフはランスの先端に当たると、爆発した。

「さようなら、また会いましょう?」

「!?!」

爆発で怯んだ一瞬の内に、スコールはISを完全に展開し、飛び去った。

レーダーの反応を見ると逃走用にブースターを着けていたようだ。

「また、逃げられたわね……。」

あの速度では、外に待機していたスタッフ達も追いつけないだろう。

「なにか対策を考えないとね……。」

悔しそうな表情を浮かべる楯無だった。

「オラオラア! どうした!?! 折角ハンデをやってるのにこの程度か!?!」

「ちいっ!」

凰牙と格闘しているが、防戦一方だ。

ラゴウを装備した凰牙と今の電童で最高速度に大差は無いだろう。

だが、こちらはあくまで長い距離を飛ぶための装備だ。

機動性は普段より劣る。

「このままなぶり殺しにしてやるっ!」

「そんなことっ! ……させないっ!」

簪さんが凰牙を側面から荷電粒子砲で撃つ。

「チマチマと…うざってえ!」

凰牙は俺を思いつき蹴り、その反動を使い距離を取り、簪さんの射撃を避ける。

「ん…そろそろ時間か…? おいつ! M!」

「わかっている。A。」

凰牙はサイレント・ゼフィルスを呼ぶ。

それに答えるサイレント・ゼフィルス。

「何をする気か知らないが…。」

「思い通りにさせない!」

俺と簪さんで同時に凰牙を狙い撃つ。

「そんな狙いで当たるかよ!」

凰牙は大きく上昇。

回避と同時に外へ出るつもりのようだ。

「逃がすか!」

当然、全員が追おうとする。

『こいつは土産だ。』

『たっぷりと相手をしてもらえ。』

凰牙とサイレント・ゼフィルスから一方的な通信が入る。

その後、リーダー内に大きな反応が2つ、表れる。

「まずい!この反応は!」

「全員!気を付けろ!」

「デカブツが来るよ!」

俺、ラウラ、シャルで一夏達に警告する。

「逃がしませんわっ!」

「ちよつと!セシリア!」

鈴の制止を聞かず、セシリアさんだけサイレント・ゼフィルスと凰牙を追って行ってしまった。

セシリアさんと入れ替わるように1体の大物が入ってくる。

人の様な上半身に獣の様な下半身。

まるでケンタウロスのようなようだ。

「お、おい…:…なんだよこれ…。」

「話は聞いていたが、これほどの巨体とは…。」

「え、これ倒せるの?まじ?」

「まだ外に同じような反応がある…。」

大型の敵を初めて見る一夏、箒さん、鈴、簪さんは驚きが隠せないようだ。

『お前達!散れ!的になるぞっ!』

織斑先生からの通信で我に返った一夏達、相手は複数の目からレ

ザーを放つ。

「織斑先生！避難状況は!？」

『アリーナ内は大体終わっている…が外周の方は大型機のせいでパニックだ。』

敵からの攻撃を避けつつ通信を続ける。

俺たちに追わせないために何て物を…。

『先行したオルコットの事もある、今、デユノア、ボーデヴィツヒ以外でエネルギーに余裕があるのは誰だ?』

全員のデータをリンクして確認する。

「電童、約7割は残ってます。」

「甲龍、約6割です。」

「打鉄式、約5割。」

「白式、4割だ。」

「紅椿も4割ほどです。」

『篠ノ之、紅椿の〈絢爛舞踏〉は?』

「…発動しません。」

織斑先生は全員のステータスを確認し、指示を出す。

『わかった。織斑、篠ノ之、ボーデヴィツヒ、デユノアはアリーナ内の敵を何としても倒せ。残りの3名は今すぐオルコットを追え。』

織斑先生が取った策は大胆にも1体を無視するものだった。

「えっ!?!もう1体は!？」

当然、全員が不思議に思う。

一夏が織斑先生に聞き返す。

『そちらは学園側で持ち込んだ機体を使って、牽制する。周りに人がいる状況で、派手にやるわけにはいかん。』

「わかりました！鈴！簪さん！」

「ええ！今行くわ！」

「皆！気を付けてね！」

俺たちはブースターを吹かし、上昇する。

「こっちはまかせろ！こんな奴は俺と箒で真つ二つだ！」

「星夜！輝刃を借りるぞ！」

「まだ増援があるかも知れん！気を付けろよ！」

「無茶しないでね！」

一夏が雪片を構え、箒さんが輝刃をストライカーモードで呼び出す。

シャルとラウラは敵の注意を引くため、援護射撃を開始する。

俺たちはセシリアさんの後を追うため、バリアの隙間を抜ける。

アリーナに大型の敵が出現する瞬間、蘭はスバルのお陰で何とか外に出た所だった。

「っ?!伏せろー！」

「きゃっ?!」

スバルが大きな声で周りに注意を促し、同時に隣の蘭をふせさせる。

＼グガガアアアッ！／

「な、何あれっ?!」

蘭は自分の目の前に居るものが理解できなかつた。

TV局の車が停まっていたはずなのに、次の瞬間には良く解らないケンタウロスみたいな怪獣になっていたのだ。

「話には聞いていたが……。」

「え……う。」

スバルは周りのパニックと違い、冷静だった。

蘭はそこに違和感を感じる。

「とにかく、ここは危険だ。少しでも離れるんだっ！」

スバルが声をかけるが周りの人はパニックを起こしているか、腰を抜かして動けない人ばかりだ。

＼グオオオオオン／

怪獣は吠えるとアリーナに向かって跳ねた。

「中にいる専用機持ちを狙ってるのか!」

「そ、そんなー！一夏さんが!」

蘭はアリーナに向かって走り出そうとするが、スバルに止められる。

「今、君が行ってどうする!?足を引っ張るだけだっ!」

「で、でもっ!」

「専用機持ちなら、大丈夫だ、信じるんだ。」

「うう……。」

2人が避難のために歩こうとする。

コンと近くにコンクリートの欠片が転がってきた。

「ん……?」

スバルが不思議に思い、顔を上げる。

そこにはもう1体の巨体があった。

その見た目は芋虫の背中にパラボラアンテナを付けたような形だ。

「おいっ!上ジャン!」

「もう1体居るバリイ!」

「は、早く逃げるんだわ!」

近くに居た数人がその存在に気づく、その声を聞き、全員が気づいた。

先程のケンタウロスと違い、これはこちらを見ている。

もしかしたらこちらを攻撃するつもりかも知れない、と不安に感じ、人々が蜘蛛の子を散らすように逃げ出す。

「きゃあっ!」

どっちに逃げていいか解らない人々は、我武者羅に走り出した為、お互いに押し合い、転ばせる。

その動きに反応したのか、芋虫は目を光らせ、背中のパラボラにエネルギーを貯める。

「くっ!」

スバルはとっさに上着の内ポケットから「Gーコマンダー」を取り出し、コードを入力する。

「はあっ!」

「えっ!?!ええ!?!」

隣に居たスバルがGEOSを身につけたのを見て、蘭は驚きの声を上げる。

まだ一般にはGEOSの情報は出回っていないため、ISを身につ

けたように見えたのだろう。

「こつちを狙え！」

空を飛び、手に持ったライフルを敵の頭目掛けて放つ。

／＼ギツ!?キギツ!／

敵はスバルの攻撃に反応し、顔を上げる。

「そうーこつちだ！」

そのままライフルを撃ちながら、高く飛び注意を引こうとする。

／＼ギギ…ギツ!／

途中までスバルを目で追っていた敵が突如向きを変える。

スバルに対して背を向けるように素早く旋回する。

「なぜだ…?」

スバルは不可解な敵の行動を探るため、センサーを同じ方角に向ける。
直後に目的を知り、声を上げる。

「星夜!狙われてるぞ！」

——

『星夜!狙われてるぞ!』

アリーナの外に出て、セシリアさんの後を追おうと向きを変えた瞬間、スバルの声が聞こえた。

「えっ!」

すぐに後ろを向くが、目の前に敵の放ったと思われるレーザーが迫っていた。

体をひねり、避けようとするが間に合わず、ブースターユニットに被弾する。

「うわああっ!」

「星夜!」

「星夜くん!」

直撃では無いが、右側に大きな穴が空いた。

俺はバランスを崩し、落下する。

「鈴!簪さん!先に行ってくれ!あいつを倒したらすぐに追う!」
『わかったわ!』

『無理しちゃダメだよ!』

俺を撃った敵は、こちらに狙いをつけている様で、2発3発 と撃たれる。

落下しつつも体勢を直し、近くにあったアリーナの入口に隠れる。鈴と簪さんはすぐにセシリアさんの後を追う為、ここから離脱する。

『大丈夫か!?星夜!』

「スバル、ありがとう。直撃を貰わずにすんだ。」

状況を確認するため、スバルと通信をつなぐ。

『今、敵は星夜が隠れた辺りを凝視している。お前が目標のようだ。何かしたのか…?』

「心当たりが多すぎるな。」

『相手の武装はパラボラアンテナ型のレーザー砲だけのようだな。』
「わかった。」

『こちらもできる限り援護する。早めに片付けるぞ。』

「了解。」

一度通信を切り、織斑先生につなぐ。

「ちっ、敷地内のはずなのに通じないのかよ。」

現状を報告しようとしたが、相変わらず強力なジャミングが行われているようだ。

「機体システムチェック：問題なし。ユニットチェック：右側が丸々やられてるか。」

ダメージの確認をする。

レーザーでブースターユニットを撃ち抜かれた位なので、電童には問題はない。

「これじゃあいつを倒しても後は追えないか…。」

「天野くん!大丈夫ですか!」

「あまのん!」

「えっ!?2人共何で!」

機体のチェックをしていたら、布仏姉妹が来た。

「アリーナ内に怪我人等が居ないか確認をしていたら、大きな音が近

くでしたので。」

「慌ててやって来たんだよ。」

「なるほど。」

2人の視線がブースターユニットに行く。

「まだ使うよね？あまのん？」

「え、ああ、その予定。」

「なら、私達で直しますから外して下さい。」

「お願いします。」

ブースターユニットを切り離し、2人に預ける。

「じゃあ、その間に害虫駆除をします。」

「はい、お願いしますね。」

「頑張つてね。あまのん。」

『星夜、そろそろ敵が動き出すぞ。』

「了解！」

入口から飛び出し、敵からのレーザーを避け、スバルと合流する。

「まだ周りに人が居るな。」

「ああ、速やかに片付けよう。」

スバルと並び、敵を睨む。

第58話 《信頼》

キャノンボール・ファスト。

市を上げて行われるこの行事は、たった2つの光を合図に大混乱になつていた。

「一夏！ 箒！ このサイズ差だ！ 当たるなよ！」

「僕たちで気を引くから、死角から攻めて！」

「わかった！」

「承知した！」

アリーナ内部に侵入してきたケンタウロスのような敵を前に一夏、箒、シャルロット、ラウラが構える。

「いくぞ！」

「こつちだよ！」

シャルロット、ラウラがそれぞれ射撃武器を使い、敵の気を引く。

／＼ガアオオオン！

敵は咆哮を上げると、攻撃してきたシャルロット、ラウラの方へ顔を向ける。

「そこだ！」

「貫つた！」

目を光らせ、レーザーを放とうとする敵の頭部に左右から斬撃を入れる一夏と箒。

「本当に固いな！」

「輝刃でもかすり傷すらつかんとは……。」

一応、効いてはいるようで、攻撃は中断された。

その代わりに、両腕を振るって一夏と箒をはたき落とそうとする。

「うわつと！」

「当たりはせん！」

敵が大きいお陰で、攻撃その物は大振りなので避けるのは問題ないが、距離が離れてしまう。

「箒！ ファイナルアタックだ！ 外にもう1体居るんだ！ 早く倒さないと！」

「くっ！仕方ない！行くぞ！輝刃！……っ!?!」

箒がファイナルアタックの準備をするが、動きが一瞬止まる。

「箒!?どうした!?!」

「何か問題か!?!」

一夏、ラウラが箒に問いかける。

「ファイナルアタックが……使えない!」

「ええっ!?!どういふこと!?!」

箒の答えに全員に衝撃が走る。

こうしている間も敵は当然暴れまわる。

「いや、使用する事は可能なのだが、輝刃が言うには今のエネルギー量では奴を倒しきれない……」

機体のエネルギーを全て使って放つファイナルアタック。

その威力は機体のエネルギー量に左右される。

「なら！俺がつ!」

「お前も私と大差ないだろう！落ち着け!」

一夏が迷わず名乗り出るが、燃費の悪さは紅椿と同等の白式も同じような状態である。

シユヴァルツェア・レーゲン、ラファール・リヴアイヴは機体のダメージが大きく、ファイナルアタックを満足に撃てる状態ではない。

「どうすりゃいいんだよっ!」

「一夏！箒！関節を狙え!」

「解口部か稼働部なら装甲は薄いはずだよっ!」

「承知!」

シャルロットとラウラの援護を受けつつ、装甲の薄いところを狙う一夏と箒。

沢山の人で賑わっていたアリーナは、爆音が鳴り響く戦場となっていた。

アリーナ内、管制室。

今回のイベントでは教師陣が居る本部としての役割をしていた。

「報告！アリーナの電源に異常は見られません!」

「各設備と外観に変化はありません。異常は内部的な物のようです。」
「アリーナの戦闘は膠着状態です。外の方は周りへの無差別攻撃から防戦一方です。」

通信が通じない為、教員が手分けして直接確認をしている状態だ。
「設備は恐らくラゴウのウィルスにやられたか…。」

「はい、その可能性が非常に高いかと。」

報告を聞き、千冬は指示を出す。

「まずはアリーナ周辺の避難を優先。専用機持ちの負担を少しでも減らす。同時に各設備の機能復旧を行う。」

「了解！」

返事をし、全員が部屋を出る。

「頼むぞ…お前たち…。」

千冬は窓から見える一夏たちを見て呟いた。

アリーナ外周で俺―天野星夜―達と芋虫みたいな敵とのにらみ合いは、そう長く続かなかつた。

「くっ！」

「やらせるものか！」

芋虫型の敵は背中にあるパラボラアンテナから、レーザーを放つ。

しかも俺やスバルを狙わず、周りに居る逃げ遅れた人達を狙っている。

俺とスバルは格納領域から盾を取りだし、レーザーを防ぐ。

「逃げろお！」

「そちらを狙ってるぞ！走れ！」

攻撃を防ぎながら叫ぶ。

恐怖心から一目散に走る者も居るが、未だに腰が抜けて立てない者も居る。

「すぐに救援が来る！それまで耐えるぞっ！スバル！」

「あぁっ！わかつている！」

ハイパーセンサーで周囲に居る逃げ遅れた人達の位置を確認し、次

の攻撃に備える。

「I 発だろうと!」

「後ろには通さん!」

星夜と別れた鈴と簪。

2人はセシリアを追うため、街の上を飛ぶ。

「セシリアっ!」

「駄目! やっぱリジャミングされてる。」

ISによつて補助された視界内、ギリギリ見えるセシリアに向かって、鈴が叫ぶがジャミングのせいで届くことは無い。

「兎に角、向かうわよ。」

「うんっ!」

2人が速度をさらに上げようとする、上から巨大なエネルギー反応を示す警告が鳴る。

とつさに体をひねり、センサーが示した場所を確認する。

「凰牙っ!」

「待ち伏せ!」

そこに居たのはラゴウを装備した凰牙だった。

凰牙は腕に装備したラゴウにエネルギーをためている。

「喰らいなあっ!」

凰牙が右腕を突きだすと、禍々しい色の閃光が放たれる。

「危なっ! なにあの色!」

「閃光雷刃撃!? ラゴウの特性が付与されてる!」

2人は避けながらも解析する。

「オラオラア! かかってこいよ!」

凰牙は鈴の懐に飛び込むと、拳撃を中心とした格闘を仕掛ける。

鈴は凰牙の拳を受け流す。

「相変わらずパワーはやたらとあるわね!」

「おいおい! 受けてるだけじゃあ、俺は倒せねえぞ!」

「こつちを倒す気も無いくせに! 良く言うわね!」

「ははっ! こつちは帰りも考えないといけないんでなあ!」

「簪！今のうちに！」

鈴は凰牙と格闘しながら叫ぶ。

「わかった！」

簪はその意図を理解し、すぐにセシリアの居る方へ行こうとする。

「ラゴウ！そっちのヤツと遊んでやりな！」

凰牙が叫び、ラゴウが分離して簪に襲いかかる。

「くっ！振りきれない！」

簪はセシリアの元へ行くことを諦め、薙刀〈夢現〉を展開し、ラゴウに向かって突きだす。

ラゴウは突きを避け、距離をとって睨みあう。

「あっちはあっちで楽しんでんだよ……。邪魔するなよ。」

「ぐっ！こいつら……。」

「最初からセシリアさんが狙いの……？」

相手の目的が最初からセシリアなら、あちらにどんな罫があるかわからない。

セシリアを追うためにも、目の前の敵をどうにかしなければならぬ。

「兎に角！速攻で片付ける！レオ！」

「鈴さん！行くよ！」

鈴はレオサークルを呼びだし、装備する。

「へへ、掛かってこいよ！」

「さっさと落ちろ！」

「なんとしても…倒す！」

3人と1体は街の上で激突する。

市街地の上を駆ける2つの影。

セシリアのブルー・ティアーズとMのサイレント・ゼファイルスだ。

「そこっ！」

「ふっ……！」

セシリアがライフル〈ブルー・ピアス〉を構え、Mを狙い撃つがシルドビットによって防がれる。

Mから反撃を撃ち込まれ、避ける隙に距離を離される。

(やはり、強い——！)

先程から同じ様な事の繰り返しだ。

下にある市街地に被害を出さないよう、射線が下を向かないように注意しているとは言え、ビットも封印しているブルー・ティアーズでは手数が少ない。

だが、Mはエネルギーを温存したいのか、攻撃はライフルのみでビットは防御にだけ使われていた。

「このままではっ……っ！」

元々試合の最中に襲われた、エネルギーはこちらの方が先に底をつくだろう。

流れを変える為、セシリアはその手に持つライフルをしまい、ナイフヘインター・セプターに持ちかえる。

そのまま、一気に加速をし、Mに近付く。

「はああああっ！」

右手に持ったナイフを加速に合わせて突きだす、Mもライフルをしまい、ナイフを取り出すと、軽く振るう。

ナイフ同士が当たる、セシリアの突きは軽く振るわれたはずのナイフで横に弾かれる

「出来もしない格闘を選ぶとは…愚かだな。」

「何とでもおっしゃいなさい！」

実際、IS学園に来るまではセシリア自身、近接戦をあまり考えて居なかった。

予備の装備もナイフではなく、ハンドガンを入れて貰おうと担当者と話していた位だ。

だが、今ではあの頃の自分を叱りたいと思っている。

射撃、近接それぞれの得手不得手はある。

それでも、一夏以外の専用機持ちは近接戦も遠距離戦もそれなりに出来る。

一夏も最近増えた射撃武器を取り入れた戦術を研究して、侮れなくなっている。

そんな中で自分だけ近接戦が出来ない、なんて泣き言を言う事は貴族としてのプライドが許さなかった。

ラウラやシャルロット等に教えを乞い、練習しているのだ。

だが、Mはその技量を軽く上回って居た。

(やはり……近接戦も侮れません！)

いくらこちらが攻め立てようと軽くあしらわれる。

何度か打ち合うとMは突如、高度を上げた。

「えっ!？」

何故?と思う前にその理由に気が付き、セシリアは高度を下げる。

その進行方向には高速道路があり、直進していたらぶつかっていた。

セシリアは近接戦に夢中になっていたため、気がつくのが遅れたのだ。

「そろそろ茶番も終わりだ……ただで、ブルー・ティアーズ!」

高速道路の下を抜けた先の上空ではMが待ち構えていた。

セシリアはすぐに加速し、再度接近しようとする。

「遅い……。」

「くっ!」

Mはライフルを構え、放つ。

セシリアはギリギリの所で避け、そのまま加速を続ける。

「捕まえましたわっ!」

セシリアは加速を殺すことなく体当たりの様にぶつかると同時に相手を逃がさない様に捕まえる。

「喰らいなさい!」

セシリアが叫ぶと同時に、推進力として機体に固定されているピットが4門とも発射される。

機体の一部を破壊しながら放たれる一撃、最悪の場合は機体が空中分解する可能性もある。

だが、セシリアは確実に敵を倒すため、この禁断の技を使うことにした。

「ふんっ!」

ビットからレーザーが放たれる瞬間。

Mはセシリアの腹を思い切り蹴飛ばす事で距離を取り、回避した。ビットは接続部が壊れ、剥がれるように落ちていく。

「なっ!？」

セシリア自身、この捨て身の攻撃なら致命傷を与えられる、と思っただけに外したショックは大きかった。

「終わりだ……。」

その一瞬の隙を逃さずMはセシリアにライフル、ビットからの一斉射撃を浴びせる。

「きゃああああっ!」

全身で攻撃を受け、セシリアはその瞬間、意識を手放した。

「うおおおおおっ!」

雄叫び上げながら一夏は雪片を振りおろす。

相手の足を狙って切りつけるが、僅かな傷をつけるだけだった。

「ちくしょうっ!全然効かねえ!」

一夏が攻撃が効かないことに苛立ちを覚えはじめていた。

「どこかに……弱点は無いのか!?!……はあ……!」

同じ様に何度も切りつけている箒には、疲れが見え始めていた。

「グオオオオオンッ!」

敵が咆哮を上げ、暴れる。

箒は巨大な拳に当たらない様に避ける。

後ろの壁に深く突き刺さった敵の腕。

伸びきっているため、箒はここぞとばかりに肘の間接を狙い振りかぶった。

「はああああっ!」

「箒っ!駄目だっ!!」

横から一夏が箒を突き飛ばす。

「なっ!?!」

直後、箒の居たところに敵のレーザーが放たれた。

「すまない!勝負を焦った!」

「大丈夫だ！箒！行くぜ！」

2人で構え直した瞬間、敵が腕を引くと背後から大きな音がした。

「一夏！箒！そこから離れて！」

「えっ？」

シャルロットが叫ぶ、後ろでは戦闘の影響で脆くなっていた壁が、巨大な拳の一撃で崩れ始めていた。

「うっ！うわあああああ！」

天井の一部すら巻き込んだこの崩壊に、一夏と箒は呑み込まれる。数秒後には瓦礫の山が出来ていた。

「一夏！箒！」

「センサーに反応はある！大丈夫だ！兎に角あいつの気を引くぞ！」

余りの事態に混乱しかけるシャルロットだったが、ラウラの声で落ち着きを取り戻す。

「そ、そうだねっ！」

弾数が残り少ない武器を構え、敵を撃つ。

瓦礫の山を見ていた敵はこちらに振り向く。

「そうだ！こっちだ！」

一夏と箒ならあそこから自力で出てくると信じ、少しでも時間を稼ぐシャルロットとラウラ。

「ぐっ！箒！大丈夫か!？」

「ああ、私も輝刃も無事だ。」

瓦礫に押し潰された一夏と箒。

絶対防御は発動しなかった様だが、ただでさえ少ないエネルギーが一気に減ってしまった。

たまたま瓦礫の山の中に出て来た空間に居る2人。

「だが、これからどうすれば……。」

「大丈夫だ……。」

状況は苦しくなる一方で、暗くなった箒に対し、一夏は力強く返事を
をする。

「一夏？」

「俺と箒、シャルにラウラ、ここには輝刃も居るんだ。大丈夫だ。」

「馬鹿を言うな！全員まともにダメージを与えられてないのだぞ！」

「諦めなければ絶対に勝てる！星夜も言ってただろ？『心の負けが本当の敗北』だって。」

一夏は箒の手を掴み、真っ直ぐ見つめる。

箒はその真剣な眼差しについてドキツとしてしまうが、頑張って心を落ち着かせる。

「俺1人じゃ倒せない……だから、力を貸してくれ、箒！あいつを倒すんだ。皆を守るためにも。」

「ああ、わかった。」

一夏と箒と一緒に輝刃ストライカーを持ち上げ、構える。

その瞬間、輝刃が強い光を放つ。

「うおっ!?き、輝刃!?!」

「一体何が……!?!」

急な事に驚く2人。

そして、ある変化に気づく。

「え、エネルギーが……」

「か、回復している……。」

輝刃からエネルギーが生まれているのか、それぞれの機体のエネルギーが回復している。

「箒……〈絢爛舞踏〉か?」

「いや、違う……これは輝刃からだ。」

エネルギーが回復する。一夏は真っ先に紅椿の〈絢爛舞踏〉が思いついたが違うようだ。

「まさか、これが輝刃の能力……なのか?」

「わかんねえ……だけど、これなら!」

「ああっ!やつを!」

「倒せる!」

一夏は輝刃の右側に立ち、右手で持つ。

箒は輝刃の左側で左手で持つ。

それぞれ空いた手を輝刃の後ろに添える。

「輝刃ストライカー！」

2人が叫ぶ。

センサーで敵がどこに居るのかを確認し、輝刃をそちらに向ける。

輝刃は先端からエネルギーを放出する。

白く輝くエネルギーは2人を包むように螺旋を描く。

「ファイナル！アタック！」

宣言すると同時に白式と紅椿が完全に同調した瞬時加速を使い、瓦礫の山を飛び出す。

そのまま、目の前に見えた敵の背中に突っ込む。

まるで紙切れを破くように敵を貫ぬく。

2人は突き抜けると、輝刃をブレイカーモードにしながら振り向く。

「これでええええっ！終わりだあああっ！」

輝刃ブレイカーの切っ先を天に掲げ、振り下ろす。

莫大なエネルギーによつて生み出された、巨大な刃で敵を脳天から真つ二つにする。

／グギャシヤアアアアアツ！／

断末魔の様な叫びと巨大な爆発を起こし、敵は四散した。

「一夏！箒！」

「やったぞ！そちらは大丈夫か！」

「ああ！シャル、ラウラ！こっちは大丈夫だ！」

「すぐ外に……!!？」

シャルロットとラウラの無事を確認した2人はすぐに外に向かうとするが、エネルギーが一気に減り、飛べなくなる。

「くっ!!?どう言うことだ?」

「機体のダメージが大きすぎたのか!？」

機体のステータスを確認すると、各部のダメージが原因の様だ。特にブースター関係が酷い。

2人の元にシャルロットもラウラも駆けつける。

「どうやらこれ以上の戦闘は無理みたいだね。」

「ああ、4人ともダメージを受けすぎた。」

「外は大丈夫なのか……?」

「千冬姉え!聞こえるか?……まだ雑音ばかりだ。」

敵を倒した為、ジャミングは収まりつつあるようだが、状況が解らない一夏達。

「皆さーん!大丈夫ですかー!」

そこヘクラス副担任の真耶が走ってくる

4人は真耶から現状を聞くのだった。

アリーナの外で敵の攻撃を防ぐ俺とスバル。

怪我人や動けない人が居るため、なかなか反撃に出れないで居た。

「くそっ!スバルは大丈夫か!」

「さすがに敵の出力が高すぎる。もって後1、2発だ。」

スバルのGEOSは盾とライフルを装備したタイプだが、既に限界を迎えそうだ。

「今、何人かのスタッフ達が後で運び出しているが……。」

「どう見てもそこまで持たないよな……。」

こちらの盾も限界に近い。

何か突破口を作らないと……。

「危ないけど突っ込むか?」

「なら、次の射撃を受けなかった方が飛び込んで一撃でやるしかないな。」

「ああ。」

敵の挙動を見逃さない様に、しっかりと構えつつ少し前に出る。

敵のパラボラにエネルギーが貯まる。

「来るぞ!」

「ああっ!」

どちらに攻撃が来てもいいように身構え、お互いに確認する。

敵のパラボラからレーザーが放たれる。

「はあっ!」

スバルがいる方だったので、盾を手放し、飛び込む。

「ぐはっ！」

後方からGEOSの限界が来たのか小さな爆発音とスバルの叫ぶような声が聞こえる。

一瞬、そちらに気を取られそうになるが、後が無い状況で失敗は許されない。

前の敵に集中する。

「爆砕！重落下！」

敵のパラボラ目掛けて爆砕重落下を決める。

パラボラの皿の部分を粉碎する。

しかし、直前にエネルギーを送っていたのか暴発する。

当然、その爆発をもろに受けてしまった。

「がっ！」

「せっ！星夜！」

思いつきり吹き飛び、地面を転がる。

「て、敵は!？」

全身の痛みを無視して体を起こし、確認する。

「畜生、武器だけかよ……。」

主武装と思われるパラボラレーザーは破壊したが、芋虫部分は丸々無傷に近い。

単純にあの巨体で転がるだけでも十分な破壊力があるだろう……。

「スバル、大丈夫か？」

「体は無事だがGEOSは限界だ……。」

「わかった……。」

スバルの方を見ると、セーフティが起動して、GEOSが解除されていた。

敵はやっぱり武器が無いのかこちらに向かって来る。

「スバル！敵の気を引くから今のうちに！」

「すまない！後をたのむぞ！」

体はデカイがその分動きが遅いので距離を取るのとは簡単だ。

スバルは近くの人達に声をかけながら離れていく。

「さて、あとはあいつをどうするかだな。」

機体のステータスを確認する。

エネルギーはまだあるからファイナルアタックで倒せるはず。

「バイパー！ドライブインストール！」

バイパーを装備して、敵を見据える。

「行くぞ！バイパーウィップ！……なっ!?!」

ファイナルアタックを発動しようと構える。

だが、アリーナ内の戦闘の影響か、アリーナが大きく揺れ、一部が崩れる。

「本音さん！虚先輩！」

崩れた場所は本音さんと虚先輩の2人が隠れてブースターの修理をしている場所。

「うおおおっ！」

助けるため、迷わずバイパーの加速を使い、2人の元へ行く。

「ファイナルアタック！」

落下してくる天井に向かってファイナルアタックを放つ。

天井は跡形もなく砕け散った。

「あまのん!?!」

「天野くん！」

「よかった、間に合った。」

なんとか2人を助ける事は出来た…。

問題はこの状態でどうやってあれを倒すかな。

バイパーを解除しておく。

「本音さん、虚先輩は逃げてください。」

「で、でも…。」

「天野くんはどうするおつもりですか？ファイナルアタックでもうエネルギーは無いですよね？」

「出来ることをやります。時間を稼げれば誰か来るかも知れませんが、」

「今、どこも大騒ぎだよ?。」

「恐らく1年生以外の専用機持ちは、他の生徒の避難誘導および護衛で動けません。量産機も敵の工作で動かせません。」

2人は俺の事を心配してくれてる。

「2人の言う通り、無謀かも知れないけど、少しでも可能性があるなら！」

言うのと同時に走り出す。

敵もこちらに向かって来てるので少しでも2人から距離を取るためだ。

「うおおおっ！」

飛びあがり、頭を殴る。

全くダメージは無さそうだ。

敵は頭を持ち上げ叩きつける。

後ろに飛んで回避する。

「やっぱりただ殴るだけじゃ無理か…。」

どうするか考えてると、ビームが敵の頭にあたる。

「あまのくん！」

「ブースターの応急修理が出来ましたよ！」

ブースターについてるビームキャノンで攻撃したようだ。

大型なだけあってあの中にも補助のエネルギータンクがある。

「よし…それなら！」

なんとかなるかも知れない。

と思ったが、敵が見逃すはずもなく頭を持ち上げ、ブースターごと2人を叩き潰そうとする。

「やらせるかあ！」

真正面から突撃し、受け止める。

ほとんど無いエネルギーを絞りだし、必死に抵抗する。

さすがに体格差から、すぐ押される形になる。

「2人が『作って』くれた可能性をやらせるかよ！」

「あまのん！」

「天野くん！」

「ぐうっおおおっ！」

一瞬、周りがぼやける。

この感じは……。

『星夜さま。お困りのようですね。今回は特別に力をお貸し致します。』

臨海学校の時に聞こえた声!?

力を貸すだって!?

「なっ!?!」

「ええっ!?!」

「こ、これは…!?!」

謎の音が聞こえた瞬間、電童から虹色の光が溢れ出す。

そして、気づけば両隣にはドラゴンとボアが居る。

『さあ、お呼びください星夜さま。あなたの新たな力を…その名を……。』

「来い! 飛焰(ひえん)!!」

輝刃の時と同じようにドラゴンとボアから紅と翠の光が放たれ、後ろにあったブースターに注がれる。

「ガウッ!」

「ギャオちゃん!?!」

さらに、本音さんのペットロボがそこに飛び込む。

光が一層大きくなり、敵がすこし後退する。

「ギャオちゃんが…。」

「IS用装備がひとつに……。」

光が収まったとき、そこには深紅の装甲を身につけた恐竜が居た。

背中には大きなブースターがついていて、元になった装備と変わらない加速を生み出すのは想像に難くない。

『飛焰の覚醒…おめでと〜ございます。いずれ相見えるその日を楽しみにしています。では……』

「待ってくれ! あんたは誰なんだよ!?!」

「天野くん! どうしました!?!」

「敵が動くよ!」

相変わらず声の主はわからない、気になるがまずは目の前の敵を倒さない。

「飛焰! ドライブインストール!」

俺が叫ぶと飛焰は本体が上半身と下半身、背中に付いたブースターユニットに分離する。

本体の上半身部分は頭部を砲口とするバズーカに変形。

下半身とブースターは脚が折り畳まれて、ブースターユニットと合体、そのまま電童の背中に装備される。

「飛焰ブースター！シユート！」

トリガーを引くと、強力なビームが放たれる。

敵の頭部に当たり、怯んだのか大きく後退する。

ダメージは入ってるが倒すにはまだ足りない…。

「ちっ！倒しきれない！」

「やっぱりエネルギーが……。」

「あつ！天野くん！あちらに！」

虚先輩が指差す方を見ると、2つの人影が見える。

「星夜！」

「助けに来たぞ！」

「銀河！北斗！」

銀河と北斗だった。

「GEOS！ドライブインストール！」

2人はGEOSを展開し、俺の前に並ぶ。

「あつちで青髪のねーちゃんの手伝いしてたら、スバルが来てこっちに行けっとな。」

「状況はわかってる。星夜、先に行って良いよ。」

「残念だけど、エネルギーがな…。」

2人がきたならこいつを倒すのは大丈夫だろう。

だが、セシリアさん達を追うのは難しいだろう。

幸い、敵は先程の攻撃が効いてるらしく、あまり動きが無い。

「電童のエネルギー、なんとかありますね。」

「虚先輩？」

「草薙くん、出雲くんのGEOSは電童と同じバッテリー、HDDを使っています。」

「だから、どっちかはあれをファイナルアタックで倒して、もう片方

「はあまのんに電池を上げればいいんだよ。」

「あ、なるほど。」

「なんだ、簡単じゃねえか。」

「銀河、バックパックを開けるから電池の交換を。」

2人の説明を聞き、うなずく。

北斗のGEOSはバックパックを開き、銀河が電池を外す。

こちらにもバックパックを開き、新しい電池と入れ換える。

「ありがとう、北斗、銀河。」

「スバルにも言っておけよ?」

「銀河、敵が動き出す前に決めよう。」

電童のエネルギーが回復した事をステータスで確認しながら、2人に礼を言う。

「行くぜ!ボア!ドライブインストール!」

銀河は敵を見て、ボアを構える。

「ガトリングボア!ファイナル!アタック!」

ボアから放たれたエネルギーが敵を貫き、爆発を起こす。

「皆、ありがとう!行ってくる!」

「星夜、気をつけて!」

「おう!すっかりやってこい!」

「怪我人の誘導などはこちらでやっておきます。」

「気を付けてね。」

一応、センサーで周りの安全を確認し、反応がなかったので、セシリアさん、鈴、簪さんが飛んでいった方角へ行こうとする。

「うおっと!」

飛焰が外れ、再度変形する。

体を真っ直ぐ前に伸ばし、腕と尻尾は収納され、脚がさきと同じように折り畳まれてブースターになる。

背中のブースターが後方へ移動する。

まるでエアバイクの様な形だ。

「なるほどな。行くぞ!飛焰スライダー!」

飛焰スライダーに股がる。

元の形態で首に当たる部分にはグリップがあり、そこをつかむ。元になったブースターと同じように加速力を発揮し、進む。

「無事で居てくれよ……。」

仲間の無事を祈りながら、前に進む。

「ウラァー！」

「破アツ！」

何度も繰り返される拳と脚の応酬。

風牙はあくまで時間稼ぎが目的の為か、積極的には攻めて来ない。なかなか突破口を見いだせない鈴と簪は少しずつ焦りが産まれていた。

「ちっ！しぶとい……。」

「へへっ！やっぱりてめえとの戦闘は楽しめるな。」

焦る鈴に対し、余裕を感じさせる風牙。

「ラゴウ……やりにくい……。」

／グウウウウ……／

簪に対し2つの頭を唸らせ、睨み付けるラゴウ。

膠着する戦局の中、遠くから大きな爆発音が聞こえる。

「爆発……?」

「あっちのデカブツをやった……?」

「ちっ……もうやられたのか……。」

鈴と簪は風牙の反応から、自分たちの予測が合っていると確信する。

「残念だが、今日はここまでだな。あばよ！」

「逃がすか！」

風牙は格納領域から、野球ボールサイズの物を取り出し、投げた。

「……っ!!」

「目眩まし!」

それは対ISのフラッシュグレネードだった。

視界が白く染まり、晴れる頃には風牙とラゴウの姿は見えなくなっていた。

「ちっ！逃げられた！」

「鈴さん！それよりもセシリアさんの所に！」

「そうね！急ぐわよ！」

悔しがる鈴を簪が呼び、すぐさまセシリアの居る位置へ向かうのだった。

「ふははははっ！」

セシリアのブルー・ティアーズに出来る限りの射撃を浴びせ、笑うM。

「おっと、そのまま墜落されると流石に後が面倒だ。」

落下するセシリアを掴もうと近づく。

「ッ!？」

その瞬間、背後から気配を感じ、頭をずらす。

直後、Mの顔を掠めるようにレーザーが走る。

「誰だ!？」

振り向くと、そこにはブルー・ティアーズのビットがあつた。

「なんだとっ!？」

驚くM、再度放たれるレーザーを避ける。

気がつけば6つのビットに囲まれている。

落下していたブルー・ティアーズは体勢を建て直し、上昇する。

その様子を見て、Mは更に驚く。

「なっ！気絶しているだどー！」

そう、ブルー・ティアーズを纏うセシリアは確かに気絶しているのだ。

だが、機体はしっかりと飛行し、ビットはこちらを攻撃している。

まるで別の意志があるように。

「なんだ！一体なんなのだ!？」

自身の理解を越えた状況に声を荒らげるMだった。

『あれ……私は………？確か……サイレント・ゼフィルスに……。』

セシリアは草原の様な場所に居た。

知らない場所のはずなのに、まるで生まれ育った場所の様な安心感がある。

『信じてあげて?』

『えっ?』

気がつけば、目の前に男の子が立っていた。

『あの子達は今、頑張ってるよ。あなたの為に。』

『あ、あの子達……? 頑張ってる……?』

『うん、だから、あの人と同じ位、信じてあげて?』

あの人……言われただけで誰を指しているのかが、何故かセシリアにはわかった。

『星夜さん? 同じ位?』

『うん、そうだよ。思いだして、あの日の事を……。』

そう言われた瞬間、セシリアの頭の中にある記憶が蘇る。

愛機、ブルー・ティアーズと出会ったその日。

祖国、イギリスが威信をかけ開発した第三世代IS。

IS適性とは別にもうひとつの適性が求められた為、自分が選ばれた。

それがなければ自分ではない他の誰かが選ばれていただろう。

自分よりも技量のある人物などいくらでもいる。

大人達は小難しい言葉を並べて、我々に選ばれたと言う。

しかし、彼女は思った。

違う、この機体へブルー・ティアーズ自身、自身がセシリア・オルコツトを自らのパートナーに選んだのだと。

『私を選んでくれて……ありがとう……。』

誰にも聞こえないように言った言葉……。

力を求める少女に絶対の力を与えてくれた存在。

誇りを、家を、守るための力。

自分の力を出し切れると信じてくれた愛機と出会った日……。

『思い出せた?』

目の前の男の子は笑う。

『ああ、そうでした。何故……忘れていたのでしょうか……。』

セシリアは空を見上げる。

『私のはあの日……選ばれた……それに答えようと……努力してきた……。』

視線を下げ、足元を見る。

『なのに……私は自分の力不足を……貴方達の所為にしていたのですね……。』

視線の先には6匹のウサギが居た。

『私が最も信頼しなければならぬ貴方達を……裏切っていたのですね。』

気がつけばセシリアの目には涙が流れていた。

『こんな私を……貴方達は……まだ信じて……『信頼』して……くれるのですか……?』

6匹のウサギは同時にうなづく。

セシリアは涙を拭う。

『ありがとう。さあ、行きましょう! 〈ブルー・ティアーズ〉!』

そう叫ぶと周りが少しずつ白に染まっていく。

『頑張っつね。』

男の子は嬉しそうに笑い、歩き出そうとしていた。

『いえ、貴方も一緒ですわ。ユニコーンドリル。』

『え……。』

『貴方のお陰なのですから、さあ。』

セシリアは目の前の男の子に手を伸ばす。

『ありがとう。貴方が私を信頼して下さるから、あの子達の事を思い出せました。』

『うん。僕が力になれるなら……。』

男の子が手を繋ぐと同時に世界は完全に白に包まれた。

「あああああああつ!」

理解できない状況に対し、ただ声を荒らげ、我武者羅に攻め立てよ

うとするM。

しかし、ビットのレーザーやミサイルが牽制し、本体は逃げに徹しているため、思うように攻撃することが出来ない。

「なぜだ！なぜだ！なぜ当たらないいいー！」

叫ぶM、やつとブルー・ティアーズに変化が見えた。

「待たせましたわね。へブルー・ティアーズ」

セシリアが目を覚ましたらしく、声が聞こえた。

「いい加減に落ちろ！堕ちろ！」

牽制が止んだことを確認し、即座に攻撃準備に移るM。

対するセシリアは冷静だった。

まるでMなどそこには居ないように。

「さあ、行きますわよー！」

セシリアの叫びに呼応し、全てのビットがセシリアの元に集う。

セシリアの横にはユニコーンドリルが召喚される。

「貴様にこれ以上付き合う気はない！消えろ！」

ライフルと全てのビットから一斉射撃を行うM。

「ブルー・ティアーズ！プラグイン！ユニコーンドリル！」

Mの攻撃が届く瞬間、セシリアが蒼い光に包まれる。

その光によって、Mの放ったレーザーは全て掻き消された。

「攻撃が…弾かれた!？」

驚愕するM。

光が収まると、そこには大きな変化がおきていた。

先程までは、ダメージでボロボロだったブルー・ティアーズ。

傷が無くなったばかりか、腕や肩、脚には新たな装甲が増えている。

ただ増えただけではなく、各部にスラストターノズルや、蒼いクリスタルのエネルギーパックが備えられている。

全体的な重量は増えているだろうが、その分、機動性や防御力が上がっているのは明白だろう。

手に持ったライフルも大型でこそあるが、どことなくユニコーンドリルを連想させるパーツが見える。

ヘッドギアにはユニコーンと一体になったことを示すかのよう

純白の角があった。

「せ、セカンドシフトしたと言うのか!？」

そう推測したMは、敵の力を計るため、再度攻撃を仕掛ける。先程までと違い、あくまで冷静な攻撃だ。

「当たり前せんわー！」

セシリアはそれを回避する。

避けられたレーザーは途中で反転、セシリアを後方から狙うように見せかけ、直前で曲がり左右から攻める。

「無駄ですよー！」

セシリアがそう叫ぶと、両肩に備えられたユニットから、赤く輝くマントが展開される。

レーザーはマントに当たると弾かれて消えた。

「な、なに!？」

「今度はこちらの番ですわー!お行きなさいー!ラビットビット!」
待っていたと言わんばかりに飛び出す6つのビット。

元のブルー・ティアーズについていたビットよりも大型化したビット達だ。

よく見るとウサギの様なシルエットをしている。

それぞれが全く異なる動きを見せる。

- 一つは只、真っ直ぐに目標へ突き進む。
- 一つは小刻みに機動を自在に変えながら。
- 一つは回り込むため、大きく弧を描きながら。
- 一つは他のビットの影に隠れ、機をうかがいながら。
- 一つは目を引くような大胆な動きをしながら。
- 一つはエネルギーを砲口に溜め、大きな一撃を用意しながら。

「くっ!?!この程度!?!」

今までのビットの動きとは全く違う。

だが、それぞれの動きをしっかりと追えば対処は難しくない。多少のダメージを負いつつも、致命的なものは避けられる。

そう考えたMだったが、1つ間違いがあった。

「私を忘れてなくて?？」

先程まで、ビットとの連携が取れなかった筈のセシリアが仕掛けてきた事だった。

大型ライフルから放たれる一撃は当たれば唯ではすまないだろう。大きく体をひねり、回避する。

「くうっ！調子に！乗るなあ!!」

シールドビットを使い、ビットからのレーザーを防ぎながら反撃しようとするM。

セシリアは空いた左手をピストルの形にしMに向けていた。

「バーン！」

次の瞬間、Mは背後から大きな衝撃に襲われる。

そう、先程避けた一撃が反転し、背中に当たったのだ。

「ぐふっ!?!」

余りのダメージに意識が飛びかけるMだったがなんとか耐え、トリガーを引く。

「はっ！」

先程同じようにマントで防ぐセシリア。

「やっ！と一矢報わせて貰いましたわ！」

「まだだあ！」

Mはナイフを構え、戦いを続けようとする。

だが、機体が限界なのか、警告が出る。

対するセシリアも、本人の傷は治っていないらしく、顔色が優れない。

「うあああああっ！」

声を上げ、セシリアに突撃するM。

セシリアは対処できずその突撃を止められなかった。

「くっ！うう！」

「ふはははっ！私の勝ちだ！」

脇腹に刺さったナイフを抜きながらMは笑う。

セシリアはなんとか展開したナイフを振るが避けられてしまう。

しかし、セシリアに気をとられ過ぎたのか、次の瞬間、ビット達の攻撃を受ける。

「がっ!？」

2人はほぼ同時に気を失い、機体が解除され、落ちていく。

「セシリアアアアッ!」

「マドカアアアアッ!」

落ちるセシリアとMを掴むのは電童と凰牙だった。

飛焰に乗ってセシリアさんの所へついたとき、相討ちになったのか、サイレント・ゼフィルスのパイロット(確かMと呼ばれていた)と一緒に落ちていた。

レーダー内に凰牙の反応があることも気にせず飛焰と飛び込んでいた。

「良かった……間に合った……」

セシリアさんを掴み、抱き上げる。

反応を見る限り気絶しているだけのようだ。

しかし、油断は出来ないので、早くしっかりとした場所で見てもらわないと。

「凰牙……」

凰牙を見る。

あいつもMを抱き上げている。

「俺も忙しいんだ。今回は見逃してやるよ。電童。」

「こつちもセシリアさんが心配だからな。乗ってやる。」

よかった。あいつも戦う気が無いようだ。

「次こそは……お前を消す!」

そう言うとき凰牙は飛んでいった。

「星夜!? あんたなんでここに居るのよ!？」

「セシリアさんは大丈夫!？」

凰牙が飛んでいった方角を見ていたら鈴と簪さんがやって来た。

「ああ、セシリアさんは気絶しているだけ。でも、早く病院にでもつれていかないと。」

「わかったわ。」

「ん、通信も回復したみたい。」

回復した通信ですぐにセシリアさんの状態を伝え、アリーナに戻る
俺達だった。

第59話 《新たな可能性》

キャノンボール・ファスト

ISを使った何でもありの高速レースは、亡国機業と思われる組織の乱入で中断となった。

「ねえ、星夜。」

「なんだ？ 鈴？」

俺―天野星夜―は気絶しているセシリアさんを運んでいた。

「その、その子って……。」

鈴の言葉を継ぐ簪さんが、飛焰を見る。

「こいつは飛焰。本音さんのギャオちゃんと俺のブースターへヴアルハラ〜が合体して誕生した。輝刃と似たような感じかな？」

「そ、そうなんだ……。」

「今度は恐竜でバイクかぁ…ホント、バリエーション豊富ねー。」

「確かにね。よし、先生が居た、降りよう。」

アリーナの前に織斑先生達が居たのでそこへ降りる。

セシリアさんを担架に乗せ、後は医療班の人に任せる。

「お前達、よく戻った。」

「織斑先生……。」

機体を解除し、織斑先生の前に並ぶ。

「詳しい事は報告書に書け。今は医療班に従い検査、その後は追って指示する。」

「はいー！！」

俺、鈴、簪さんで返事をし、医務室へ行き、検査を受けた。

アリーナの医務室にて簡単な検査をし、特に異常は無かった。

比較的早く終わった俺はスバル、銀河、北斗とアリーナの近くにあり公園で話していた。

「学園祭に続いて今回も助けられたな。」

「何言ってるんだよ、当然だろ？」

「僕と銀河は最後に良いところ取りしたみたいなものだし。」

「星夜の頑張りがあつての事でもあるぞ。」

自分がチケットを送ったスバルはともかく、銀河と北斗が来ていたのは正直驚いた。

俺が出ることは元々知っていたので、チケットの抽選に参加したが、高倍率な事もあり、落選。

せめて近くで応援しようとして来てくれていた。

「会場の周りにも出店があるだろう？それだけでも祭りぽくつてな。」

「実際銀河は星夜のレースが始まるまで、ずっと食べてたしね。」

「銀河らしい。」

「全くだ。」

はははと笑い声が響く。

「あ、もしかして乙女ちゃんとかも居たのか？」

「ああ、来てたけど、母ちゃんと一緒に避難して先に帰ってる。怪我なんかしてねえよ。」

「そっか、よかった。」

出来る限りの事はしたが、被害が無かったわけではない。

「おーい！星夜ー！」

気がつけばそこそこの時間が経っていたようで、一夏がやって来た。

「ん？結構話し込んでたな。」

「4人揃うのは久しぶりだもんね。」

「なんかあったのか？」

「そろそろ帰るのかな？一夏、どうした？」

取り敢えず、一夏に確認をする。

「今日はもう帰っていいぞって言われたから、声かけに来たんだよ。」

「ああ、わざわざ悪いな。じゃ、3人とも、またな。」

3人に挨拶して、別れようとする、一夏が。

「なあ、俺達はこの後、パーティーやるんだけど、折角だし来ないか？」

「「「え？」「」」」

突然の提案に驚く俺達だった。

「では！織斑一夏くんの誕生日を祝して！」

／＼乾杯！／

楯無先輩の合図で、全員が手に持ったコップを上げる。

現在、織斑家にて、一夏の誕生日パーティーだ。

元々参加予定だった俺達一年生専用機持ちと本音さん。それに加え、楯無先輩、虚先輩、黛先輩。

更に一夏の友人である、五反田兄妹、御手洗さん。

俺の友人の銀河、北斗、スバルだ。

セシリアさんは怪我があるが、日常生活には問題ないとの事で、参加している。

リビングだけでは足りず、隣の部屋も使って行われている。

「ホントに良かったのか？折角の誕生日パーティーなのだろう…。」

「僕はお店に来たことがあるから、顔見知りだけど…。」

「別に気にしなくていいんじゃない？本人が言ったんだし。」

最初、単にパーティーと聞いてたが、実は誕生日パーティーだったと知り、少し遠慮がちな北斗とスバル。

そして全く気にしないで料理を食べる銀河。

「まあ、気にしなくていいと思うぞ。」

ちなみに、パーティーをやる前にそれぞれの自己紹介は済ましてある。

「あ、あの！今日はありがとうございました！」

スバルと俺の所へ蘭さんが来て、頭を下げる。

「いやあ、蘭さんが無事で良かった。」

「ああ、気にすることは無い、出来ることをしただけだからな。」

そのまま、しばらく会話をし、蘭さんは離れていく。

「よし…そろそろ渡しに行くか。」

皆が順番にプレゼントを渡して居たので、一通り終わったタイミン
グで一夏の元へ。

「一夏、改めておめでとう。」

「ああ、ありがとうな、星夜。」

「まあ、流れ的にわかると思うが俺からのプレゼントだ。」

そう言ってから、箱を渡す。

「おお、星夜のは何が入ってるか想像がつかねえな。」

「じゃ、開けてみな。」

一夏は丁寧に箱を開ける。

「こ、これは!？」

箱から出てきたのは、1体の鳥型ペットロボだ。

「今度GEARから発売される新型モデルだ。ちなみに色は白式に合わせた専用色。非売品だぞ。」

「うおお。皆から色々貰ったけど、釣り合うお返しなんかできねえぞ。」

「安心しろ、別にお返しが欲しくてやった訳じゃないぞ。」

「そうかもしれないけど、確か星夜は12月だったよな。ちゃんと考えておくぜ。」

「ああ、楽しみにしてる。あ、一夏、そいつの初期設定は一通りしてるけど、名前はまだ決まってるから早めに付けてやれよ。」

「ああ、わかった。どうやるんだ?」

箱から説明書を出して、確認する一夏。

「簡単だ、そいつの目を見ながら『お前の名前は』って言えばいい。『よし!じゃあお前の名前は…』」

一夏は自分の手の上に乗せたペットロボを見ながら言う。

「白翼(びやくよく)だ。」

「ストレートにつけたな。」

「分かりやすい方がいいだろ?」

「それもそうだな。それで設定は完了だ。細かいのは説明書読め。」

「ああ、ありがとうな。」

白翼は一夏の肩に泊まる。

「大切にしろよ。」

そう言ってから一夏から離れる。

「ん?北斗は?」

「あつちで眼鏡のねーちゃんと話してるぞ。」

銀河の指す方を見ると確かに北斗と虚先輩が話している。

「そつとしておこう。」

「そうだな。」

「なんで？」

「いまいち理解できない銀河が首を傾げる。

俺とスバルで銀河の両肩を掴み、引きずる。

「皆く！人生ゲームをやるわ！人数多いからこのくじでコンビ作るわよ！」

その後は鈴が持ち込んだ色々なボードゲームで遊んだ。

「今日はありがとう。」

「ああ、こっちも楽しかったぜ。」

楽しい時間はあっという間に過ぎた。

最後に一通りの片付けをして、解散だ。

北斗、銀河、スバルは少し家が遠いので、近くのバス停まで見送りだ。

3人を乗せたバスが見えなくなり、俺と一夏で歩き出す。

「あく！やっぱり皆で楽しむのはいいな！」

「そうだな。しかし、なんか悪かったな。3人も参加させて。」

「だって、久しぶりに揃ったんだろ？だったら皆で楽しみたいなんて。」

一夏なりに俺に気を使ってくれていたようだ。

「まあ確かに多い方が盛り上がるしな。」

実際コンビでやった人生ゲームやモノポリーは、おおいに盛り上がった。

「ん？」

「どうした？星夜？」

ふと、目の前の十字路、その横の道に人の気配を感じる。
「誰だ？」

「ほう、平和ボケしている日本人にしては鋭いようだな。」

少し、強めに呼び掛けると、返事と共に2人出てきた。

「……っ!？」

「……なっ!？」

俺と一夏は驚きを隠せなかった。

後ろにいる男はバイザーで顔は解らない。

だが、前にいる女性の顔は……。

「ち、千冬姉……?？」

そう、織斑先生を俺達と同じくらいの年齢にしたような顔つきなのだ。

実弟である一夏がそう言ってしまうのだから、似ているのだろう。

「違う……。」

笑いとも、怒りとも判断が出来ない表情で俺達、特に一夏を睨む。

「私は……私は……貴様だ!織斑一夏!」

「な、なに!？」

「どう言う事だ……?」

相手の意図がわからず、構えることしか出来ない。

「まあ、そんなことはどうでもいい。」

彼女は、右手にハンドガンを持っていて、こちらに向けてきた。

「私は……織斑マドカ……私が私で在るために、お前を消す。」

「マドカ……?お前、サイレント・ゼフィルスの!」

驚く一夏を横目に、マドカと言う名前に対して思い当たる事があったので、口に出す。

そう、風牙が一度、サイレント・ゼフィルスのパイロットをそう呼んでいたはずだ。

「そうだ。電童のパイロット……天野星夜。」

後ろに居た男がマドカの隣に立ち、ハンドガンを下ろさせる。

「邪魔をするのか?A。」

「ここでやりあっても面倒なだけだ。顔見りや十分だろ。」

マドカはAを見て、小さく舌打ちをすると銃を上着の中にしまった。

「次に会うとき、貴様の命を頂く、織斑一夏!」

「お前の命も貰うぜ?天野星夜!」

2人は後ろに飛び退き、死角に移動する。

「待て！」

「待ちやがれ！」

俺と一夏はすぐに追うが、そこに姿はなかった。

「織斑……マドカ……。」

一夏は相手が名乗った名前を呟く……。

あの言い方、一夏や織斑先生と全く無関係では無いのだろう。

その日の晩、IS学園の寮に戻った俺は部屋で考えていた。

サイレント・ゼフィルスのパイロット達に会ったことは皆にはまだ伏せている。

理由としては、一夏が折角の誕生日パーティーに水を差したくないと言ったからだ。

「風牙のパイロット……。」

恐らくあのAと呼ばれていた男が、風牙のパイロットだろう。

つまり、3人目の男性操縦者だよな。

あいつはなんで俺を狙ってるんだ…。

「顔を見ればなんか解るかと思っただけど…。」

サングラス越しとは言え、記憶に無い。

でも、あいつは俺を狙っている。

「確かラゴウはあいつのデータウエポンみたいだし…。」

いくら考えても思考が行き詰まる。

「駄目だ。寝よう…。」

諦めて寝ることにした。

「ええ!？」

「サイレント・ゼフィルスのパイロットに!？」

「ああ、昨日の夜にな。」

月曜日の夕方。

織斑マドカという名前に関しては伏せ、全員に説明している。

学園にも報告済みだ。

「サイレント・ゼフィルスのパイロット…一体何が目的なんだろう。」

「織斑くん、何か思い当たる事は？」

「さあ、な。」

シャル、簪さんの問いかけに対して短く返す一夏。

昨日のあの直後から、時折険しい表情をする。

何か引つ掛かるのか…？

「星夜さん、他には何も？」

「ああ、昨日はただの顔見せって感じだったな。」

セシリアさんの問いかけに答える。

銃を向けられたが、ISを持つてる者には威嚇にもならない。

そんなことは百も承知だろう。

「兎に角、やつらは2人を名指しで宣言したのだな？」

「Mって奴が一夏。Aって奴が俺をな。」

「A…：確か凰牙のパイロットだったか？」

ラウラが顎に手を添えて考える仕草をする。

「おい、お前達。」

急に織斑先生が声を掛けてきた。

「な、なんだ？千冬ね／＼スパーンツ！／＼」

「口の聞き方を気を付けろ。織斑先生だ。」

「す、すみません。」

いつものように出席簿で一夏を叩く。

その後、こちらを見渡す。

「昨日の件については後はこちらでやる。不用意に掘り返すな。何気

ない一言が情報の漏洩に繋がる時もある。」

「は、はい。」

どうやら俺達に釘を刺しに来たようだ。

「あと、オルコット。お前は本来なら謹慎処分になる事をしたのだ。

それを忘れるな。」

「はい、申し訳ございません。」

市街地の上空で戦闘になった原因として、セシリアさんの無理な追

撃が挙げられている。

事後処理が長引いているのは市街地の被害確認に、時間を割かれて

いるからだそうだ。

「各自、報告書は出来次第、速やかに提出しろ。いいな。」

「はい。」

一通り伝える事を伝えたのか、織斑先生の目付きが少し柔らかくなる。

「所で、お前達はいつもこのメンツで食事してるのか？」

「そうですね。部活とかで抜けたりするのはありますけど、基本は専用機持ち全員が揃ってますね。」

「そうか、交流を深めるのもいいが、たまには広げるようにしろよ。」

織斑先生はそう告げると奥の席にいる山田先生の所へ向かった。

「先生から見て、俺達って固まり過ぎることかな？」

「クラスの子から、『織斑くんを専用機持ちで独占しすぎ。』とか言われる。」

「あたしもそんな感じに言われるわね。」

簪さんと鈴が俺の言葉に頷く。

そう言われると、確かにクラスメイト達とも会話はするが、それこそ一言、二言位だ。

「専用機持ち以外だと……本音さんと虚先輩位か……。」

確かにこれだと交友関係が非常に狭い。

「周りが女子しか居なくて、自然と知ってる奴としか話して無いな……。」

俺も一夏も、自分から話しかけるなんて、しないからなあ。

女子の話題なんてわからないし。

「まあ、少しは意識しよう……。」

周りに壁作っていいこと無いしね。

翌日の放課後、キャノンボール・ファストの際に破損した機体の修理が終わわり、全員でアリーナに集まって居た。

理由は簡単だ、あの時に起きたいくつかの事を確認するためだ。

いつも通りGEARで井上さん達が調べてくはいるが、少しは自分達でも考えたい。

「ファイナルロード！飛焰！」

まずは飛焰の確認だ。

俺のコールに合わせて、飛焰が通常形態で表れる。

「ふむ、これが飛焰か…。」

「輝刃と同じように、2体のデータウエポンの力を受けて、誕生したんだね。」

ラウラや簪さんが飛焰をぐるっと見渡す。

「えっと、この間はバイクみたいになってたけど他には？」

「通常形態とは別にバズーカと背部ブースターに別れる〈ブラスタ〉、エアバイク型の〈スライダー〉、戦闘機型の〈ファイター〉だな。」

「飛焰に特殊能力は？」

「それは確認出来なかった。」

鈴と簪さんの疑問に答える。

「輝刃はユニコーンとレオだったけど、今回は？」

「恐らくはドラゴンとボアが反応した。」

あの時の事で、あの声の事だけは皆には言っていない。

俺自身、しっかりと説明出来る気がしないからだ。

「飛焰はこのくらいだね。次は…。」

「輝刃の特殊能力だな。」

シャルが一旦区切る。

それに合わせて輝刃を召喚する。

「あいつを倒すときにどんな事が起きたんだ？」

当事者の一夏と簪さんに聞く。

「俺と箒で輝刃を持ち上げたら、いきなり輝いてな。」

「直後に私たちの機体のエネルギーが回復した。」

「〈絢爛舞踏〉じゃないの？」

「ああ、私と一夏も最初はそう思ったが絢爛舞踏が発動した記録はなかった。」

簪さんが確認すると、箒さんは首を振った。

「あと、ファイナルアタックに違和感があったな。」

「違和感?」

「ああ、あんまり使った事無いけど、やけに軽かった。」

「軽い?」

一夏の表現に首をかしげる。

「そう、なんか敵が柔らかかすぎるって言うか…。」

「確かに、横から見えていても、具体的には言えないが違和感はあるな。」

ラウラが一夏の話を肯定する。

「とりあえず一度試して見よう。輝刃ドライブインストール!」

輝刃をストライカー形態で装備する。

「んくステータスに変化は無いな…。」

本来、特殊能力が増えたのなら、装備した機体にその情報が流れるはずなのだが、それはなかった。

「まだ、何か足りないのかな?」

「やはり、星夜さんが居ないと駄目なのでしょうか?」

もしかしたら、一夏と箒さんに一時的に反応しただけなのかも…。

そう考え、輝刃を解除する。

「あとは…。」

「ええ、わたくしですわね。」

今日、一番の気になる点だ。

俺がセシリアさんの所に駆けつけた時、遠目ではあるが、セシリアさんが纏っていたブルー・ティアーズは普段と違っていた。

最初はブルー・ティアーズがセカンド・シフトしたのかと思った。

だが、今セシリアさんが纏っているのは、今まで通りのブルー・ティアーズだ。

「私もうまく説明出来る自信はございませんが…。」

そう言いながらユニコーンを隣に召喚するセシリアさん。

「星夜さんは少し見られたかも知れませんが、あの戦いの中、ブルー・ティアーズは進化していました。」

「なに!?!」

「で、でも今は!」

セシリアさんの言葉にラウラとシャルは驚きの声をあげる。

「そうです、今は戻っております。恐らく、あの時、私のブルー・テイアーズとユニコーンさんが合体していたのでは?と考えています。」
「ええっ!?!」

「が、合体い!?!」

セシリアさんの考えに皆、驚きを隠せない。

「普段は腕に装備する形で力をお借りしますが、あの時、機体の全てにユニコーンさんの力を感じました。」

横にいるユニコーンを優しく撫でるセシリアさん。

「きつと、私とユニコーンさんの『信頼』が更なる高みへと登った状態なのでは?」

「うくん。」

「なるほど。」

話を聞いて、全員が軽く考える。

「データウエポン達のセカンド・シフトと言った所か?」

「そうかも知れんな。」

「ねえ、セシリア、今は出来ないの?」

「一回試したのですが、正直、あの時は無我夢中だったので…。」

「まあ、仕方ないよ。」

あの時はセシリアさんも傷だらけで危なかったし。

「だああくっ!!わっかんねえ!」

一夏が頭を搔くような仕草をする。

「まあ、ここで考えて解るようなら、専門家は要らないわよね。」

「うん、そうだね。模擬戦、しようか?」

そんな様子を見て、鈴とシャルが話を切り替える。

その後は軽く模擬戦を行った。

放課後のI S学園、その職員室で千冬は自らの携帯を操作し、電話をかける。

その画面には『ベガ・アルクトス』と表示されている。

『もしもし?珍しいわね。貴女からかけてくるなんて。』

「ああ、2つ頼みたいことがあってな。実は――」

千冬は自分の用件を速やかに伝える。

それを聞き、ベガは電話の向こうで静かに笑う。

『なるほど、面白そうね。』

「そこで、お前達に協力してもらいたい。」

『ええ、わかったわ。細かい所はこちらで決めても良いのかしら？』

「ああ、そちらに一任する。出来れば可能な限り内密にな。」

『ふふ、任せなさい。目処が付いたら連絡するわ。』

「頼む。」

それを最後に電話をきる。

「さて、これで少しは良くなるといいが…。」

千冬は携帯をしまいながら、職員室を後にする。

翌日、朝のSHRを行う教室。

「皆さん、少し急ではありますが、後日、専用機持ちの方々でトーナメント形式の模擬戦を行います。」

山田先生がクラスにしつかりとした声で伝える。

「えっと…つまり、俺達、専用機持ちがやるってことですか？」

一夏が山田先生に聞き返す。

「はい、織斑くん達一年生の8名だけでなく、二年生の更識さんとサファイアさん、三年生のケイシーさんのも含めた全員。11名で行います。」

やっぱこう聞くと今年の専用機持ちの多さは異常だな。

しかし、いきなりこんなやるなんて、理由はやっぱり…。

「山田先生、今回のトーナメントの目的を教えてください。」

ラウラが手を上げ、質問する。

「はい、先日のヘキャノンボール・ファストにおける所属不明機の乱入、今後のこのような事態に備え、各自のレベルアップを図るためです。」

「わかりました。ありがとうございます。」

ラウラが山田先生にお礼を言いながら手をさげる。

「詳しい内容は本日中、プリントにて配布しますので、しっかりと確認するようにしてください。では、朝のSHRを終わります。」

山田先生の言葉に合わせて日直が号令をかける。

午前の授業が終わり、食堂に行く。

今日は少し用事があつたので、皆とは別だ。

「あつ！あまのんだろ。」

「あれ？天野くん1人？珍しいね。」

「少し用事があつてね。」

本音さんが俺に気付いて手を振ってくる。

一緒に机で食べていたクラスメイト達も反応する。

やっぱり専用機持ちはセット感覚があるみたいだな。

「天野くん！ここ空いてるよ。」

「いいの？」

「いいよ〜！」

「さ、座って座って！」

空いている席に座って飯を食う。

「天野くんもこの半年で変わったよね。」

「そう？」

口の中の物を呑みこみ、返事をする。

「うん！だって2組の鈴ちゃんと付き合ってるじゃん！」

「だから！それは違うって！」

全力でツツコミを入れる。

「大丈夫大丈夫！皆わかってるから！」

テーブルに座る全員が良い笑顔でこっちを見る。

「いや！その顔はどう見ても楽しんでいる顔だよね!？」

しかも本音さんも一緒になって笑ってる。

「だって、最近はずちのクラスに来るとすぐ天野くんの所に行くじゃん。」

「前は織斑くんだったけどね。」

あ。確かにそこは変わったな。

「どうして天野くんになったのか気になるよね〜?」

「いや、俺に聞かれてもわからん…。」

「何か心当たりは無いの?」

「全くない。あえて言うなら一夏の鈍感さのせいじゃないのかな?」

心当たりはホントに無いんだよねあ。

「確かに言い出したのは織斑くんだよねえ。」

こんな感じで他愛のない会話をしつつ食事をした。

午後の授業も終わり、教室でトーナメントに関するプリントが配られる。

参加者である俺達、専用機持ちは細かいルールが書かれた冊子だ。

「今回は個人のトーナメントとなります。」

「基本的なルールは公式戦と変わらないが、1つだけ加えさせて貰った。それが―」

／ 『試合毎にデータウエポンを1体使用!』 ／

山田先生と織斑先生の言葉に続く形で俺以外の1組専用機持ちが声をあげる。

「そうだ。これに関してGEARから許可はとってある。天野も了承している。」

クラス全員が一瞬、俺を見る。

「試合を始める前にそれぞれに1体のデータウエポンさんをランダムで決め、使用していただきます。」

「装備するも召喚するのも自由だ。だが、収納するのは無しだ。常にデータウエポンを出すようにな。」

山田先生と織斑先生が軽く説明する。

「あの、これはどう言った意図で行われるのですか?」

ラウラが織斑先生に質問する。

「朝、山田先生が言ったように各自のレベルアップがトーナメントの目的だ。だか、それ以外にIS学園としては気になる事があってな。」

「それが、データウエポンですか?」

「今までの困難な状況において、それを覆して来たのは主にデータ

ウエポンド。しかし、データウエポンに関して解っている事が少なすぎる。」

織斑先生の言う通り、福音事件等はデータウエポン達が居なければ、俺達はどうなっていたのか解らない。

「でも、何で毎回ランダムなんだ？千冬姉。」

「織斑、口の聞き方に気を付けろ。様々なシチュエーションのデータを得るためだ。パートナー毎の違いを比べることも立派な情報だ。」

「トーナメント当日にはGEARのスタッフも来ます。機体情報の漏洩防止に関する要望等があれば、前もって教員の誰かに伝えるか、当日にGEARのスタッフの方に直接伝えてください。」

一通りの説明を終え、解散となる。

「皆、すまないが当日まで余りデータウエポンを使った練習は出来ないと思ってくれ。」

「え？何でだよ!？」

「やっぱりそうだよね。」

解散となった直後に俺の元へ来た、皆に向けて言った言葉に一夏が驚き、シャルが納得したような反応をする。

「一夏、今回のトーナメント参加者は？」

「えっと…俺達専用機持ちだろ？」

「そうだ。そのなかで不公平な部分があるのは解るか？」

「ん……??」

シャル、ラウラに言われ、考える一夏。

「そうか、楯無先輩以外の二年生と三年生にいる専用機持ちは、星夜やデータウエポン達を知らない。」

「あ……。」

箒さんが気付き、一夏もハツとする。

「そう、だから二年生のサファイア先輩と三年生のケイシー先輩が優先的に練習しないと、今回のトーナメントが成立しないんだ。」

「では、星夜さんはそちらのコーチに？」

「ああ、最低でも各データウエポンの特性を教える事になってる。」

セシリアさんの質問に答える。

「そうか、上級生に対する指導とは中々難しいと思うが頑張れ。」

「ありがとう、じゃそういう訳で。」

「おう、頑張れよ。」

「鈴や簪にはこちらから伝えておくよ。」

一夏達に別れを告げ、早速データウエポン達とアリーナに向かう。

——
アリーナ。

そこで俺の前には2人の専用機持ちが立っていた。

「はじめまして、2人目の男性操縦者。天野星夜です。よろしくお願
いします。」

「二年のフォルテ・サファイアっス。よろしくっス。」

「三年のダリル・ケイシーだ。よろしくな。」

今まで接点が全く無かった2人だが、今回の変則トーナメントに参
加するため、データウエポンの事を教える事になった。

「じゃあ、まずはデータウエポンがどんな物か説明をさせてもらいま
すね。」

「おう、頼む。しっかし固いなく一年生。」

「別にウチらはタメ口でも気にしないっスよ。」

こうして、先輩2人には各データウエポンの特徴の説明と実機での
確認や模擬戦をして教えていった。

——
GEAR本社、データウエポン研究室では井上が端末を操作してい
た。

「うくん。なぜ今回は飛焰は目覚めたのか…。そして、オルコツトさ
んのブルー・ティアーズ…これは……。」

一心不乱に今回の事件で起きた現象の映像を見て、各データと見比
べ、考える。

「調子どうかね？井上くん。」

「おや、社長。ここまで来るとは珍しいですね。」

そんなとき、部屋に社長である渋谷が入ってきた。

「今回は今まで以上に特殊だ。気になる事は多い。だが、それで体を悪くしたら本末転倒だぞ。」

渋谷は井上の肩を軽く叩く。

「あはは、そうですね。しかし、興味深いデータが多すぎます。何せ今回は前提条件が揃ってないのに起きていますから。」

「そうだね。」

2人はモニターを見る。

「話は変わるが織斑千冬からの提案…君はどう思う?」

「私は悪くない提案だと思いますよ。今後、より激しくなることを考えれば必要でしょう。」

「うむ。負担ばかりで申し訳ないが、そちらの方も頼むぞ。」

「はい、任せて下さい。今回は報告会は向こうも忙しいと思うので、星夜くん達にはレポートで渡しましょう。」

「ああ、任せるよ。」

渋谷は差し入れの入った袋を渡すと部屋を後にした。

第60話 《専用機持ちトーナメント》

急遽開催される事になった専用機持ちトーナメント。

それに向けて、俺―天野星夜―は今までデータウエポンを使った事がない、ダリル先輩とフォルテ先輩の2人に色々教えていた。

2人だけでやっていると言っていると戦法が片寄ってしまうので、他の専用機持ちも呼んでやっている。

今回は一夏を呼んだ。

「キバツ！行けっ！」

「なんの！」

ダリル先輩が輝刃スピナーを一夏に突撃させる。

一夏はすぐに雪片を構え、正面から切り込み輝刃スピナーを反らす。

「狙い通りだっ！」

「えっ!?うわああああっ!?!」

その隙を逃さず、ダリル先輩は両肩にある犬の頭から、口に溜めていた炎を吹き出す。

次の瞬間、一夏の前にユニコーンが割り込み、ファイヤーウォールで防ぐ。

「サンキュー！」

一夏はユニコーンに礼を言いながら、ダリル先輩に斬りかかる。

「ふっ！甘いんだよっ！」

ダリル先輩は落ち着いて自分の手に双刃剣を呼び出し、一夏の斬撃を防ぐ。

「おーおー、先輩に踏み込むなんて、度胸あるっスね。」

「一夏は踏み込むしか選択肢が無いんですよ。」

目の前の攻防を見ながら俺とフォルテ先輩はピットで話していた。

「あ、剣しかないんだっけ？」

「一応、左手に大砲隠してますけどね。」

「へ。」

一夏とダリル先輩の戦いはクライマックスを迎えたようで、お互い

にデータウエポンを装備している。

「ファイナル！アタック！」

一夏とダリル先輩が同時にファイナルアタックを放つ。

「うおりゃあああああつー！」

残りエネルギーが少なかった一夏がそのまま競り負け、輝刃ストライカーの一撃を喰らった。

「ま、こんなもんだろ。」

「ま、負けた……。」

2人はISを解除して、こっちに来た。

「おう、一夏お疲れ。」

「ぐっ結局今日は一回も勝てなかった……。」

「始めて半年の奴に負けるもんかよ。」

腕を組み、得意気なダリル先輩。

「あれ〜？そう言つて、電童に負けたの誰っスか〜？」

フォルテ先輩がダリル先輩をつつく。

「あ、あれは！データウエポンの使い方を知るためにわざとだ！」

「ふくん、そう言うことにしとくつスよ。」

「ああ!?やるのかフォルテ！」

2人が向かい合い、一触即発の状態になる。

「そろそろアリーナの使用時間過ぎますから、片付けしてください。」

そんな感じで今日の訓練は終わった。

夕方、訓練も終わり、俺はGEARから送られてきた資料に目を通す。

主な内容は先日の『キャノンボール・ファスト』で起きた各現象だ。

いつもならGEAR本社で井上さんから直接聞いてるんだが、今回は余り時間がないから報告書になった。

俺以外にもいつもの様に専用機持ちや織斑先生等にはほぼ同じ資料が送られたそうだ。

新データウエポンについて

飛焰（ひえん）

D W I E X 2

象徴：理想（慈愛＋創造）

共鳴者：不明（当時は付近に布仏虚と布仏本音の2名のみ）

属性：熱（炎＋光）

特殊能力：未確認

キャノンボール・ファストの際、突如乱入してきた亡国機業の大型兵器との戦闘中に誕生。

輝刃と同じように、ドラゴンフレアとガトリングボアのエネルギーを受けていると思われる。

大型ブースターへヴアルハラ〜と布仏本音が所持する恐竜型ペットロボが素体。

通常形態

恐竜型のデータウエポンではあるが、背中や脚についているブースターのおかげでトップスピードは速い。

口からはエネルギー弾を放つ事が出来る。

他のデータウエポンと比べると単体の戦闘力は高め。

ブラスター

ビームバズーカ+ブースターとして装備される形態。

高機動パッケージと同等の機動力を与えることが出来、バズーカは攻撃力、射程に優れる。

しかし、全体的に燃費は悪い為、運用の際は残りエネルギーに注意が必要。

スライダー

エアバイクとして乗り込む事が出来る形態。

ブラスターよりも速度、航続距離に優れる。

威力は低めだが、この状態でもビームを放つことは可能。

ファイター

高機動形態。

戦闘機のような形で、主にビーム砲とミサイルでの援護を行う。

輝刃の特殊能力について

特殊能力：ゲットアビリティ

一言で表すならばコピー能力。

この特殊能力は輝刃単体では使う事が出来ない。

輝刃が一定の条件を満たすと、ISの特殊能力をコピーする模様。

また、これによってコピーした能力は有限で、一回使用すると再度コピーする必要がある。

今回は紅椿の〈絢爛舞踏〉を使用し、紅椿と白式のエネルギーを回復、ファイナルアタック時には白式の〈零落白夜〉を使用し、攻撃力を上昇させていた。

コピーの条件、ストック可能数などについては現状は不明。

ブルー・ティアーズとユニコーンドリルについて

サイレント・ゼフィルスとの戦闘中に発生した謎の現象。

パイロット、セシリア・オルコットの予測通り、ユニコーンドリルをブルー・ティアーズに「装備する」ではなく、ブルー・ティアーズと「融合」と言う次の段階に進んだと思われる。

融合した際は、各武装の強化が行われ、セカンド・シフトと同等のステータス変化がある模様。

ユニコーンドリルの特殊能力〈ファイヤーウォール〉を元にしたと思われるマント状の装備も確認されている。

発動条件は不明だが、ユニコーンドリルとセシリア・オルコットの精神状態が深く関わっていると予想される。

資料に目を通し終わり、机に置く。

「輝刃、特殊能力に覚醒してたのか……。」

しかも、絢爛舞踏と零落白夜か。

どこまでコピー出来るかわからないけど。

しかし、今回は本当に解んないのが多いな。

そのうちGEAR本社で本格的に電童ごと調べてもらった方がいいか？

「セシリアさんのアレは融合だったのか……。」

もしかしたら、他の人もなるかも……。

「トーナメント終わったら、一回本社に行かないとな。」

そんなことを考えながら、シャワーを浴びに行く。

今日はダリル先輩とフォルテ先輩に用事があるとの事で、いつもの面子でトレーニングをしている。

「クロックマネージャーに当たるわけには！」

「クロックマネージャーだけが切り札では無いぞ！」

今は簪さんとラウラが戦っている。

簪さんはレオをつけ、ラウラはボアをつけている。

レオのおかげか、ラウラのクロックマネージャーとA I Cを見切つて避ける。

ラウラも簪さん本人に当たらないと見るや、ミサイルの回避に使う様にし、消費を押さえている。

「はあっ！」

「うっ!？」

ラウラがワイヤーブレードを放ち、簪さんはそれをギリギリで避ける、そのまま簪さんが側面から、斬りかかる。

「これでっ！」

「甘いぞ！簪！」

ボアは特殊能力は強力だが、ボディに装備する関係で少し動きづらい。そのため、簪さんは側面からの攻撃を選んだ。

対するラウラは冷静にボアの牙を掴んで、ブーメランの様に投げる。

上手く相手の顔を狙って投げた牙を、簪さんは薙刀で弾くと同時に、そのまま体を一回転させて右脚のレオを振る。

しかし、体が停止する。ラウラがA I Cで固定したのだ。

「私の勝ちだ。」

「負けた……。」

喉元にプラズマ手刀を突き付け、勝利宣言するラウラ。

敗けを認め、残念そうにする簀さん。

「データウエポンの装備状態で、星夜を除くとラウラが一番動けてるかな？」

「いや、シャルロットの方がいい動きをしていると私は思うぞ？」

横で見ていたシャルと簀さんが話している。

シャルとラウラは戦い方は違うが、どのデータウエポンを装備しても強いのは変わらない。

ラウラはデータウエポんに拘らず、それを囿にすることでAICを使いやすい状態に持ち込むこともあるなど、柔軟な対応も出来る。

シャルはデータウエポンが使いやすい距離になるように、他の武装で敵との距離を操り、実弾武装が中心だから、各特殊能力を潤沢に使えるのが強みだ。

「今回のトーナメントは正直どうなるか解らないな。」

「そうね、自分とデータウエポンとの相性もあるし、相手のデータウエポンでも変わるからね。」

俺の独り言に鈴が反応する。

今回は単純に1対1や前もって決められたタッグマッチでもない。

自分のデータウエポン、対戦相手、対戦相手のデータウエポン多様な組み合わせがある。

しかもそれが試合開始までわからないのだから。

「やっぱり、基礎技量の高い先輩達は要注意だな。」

「そうですね。特に楯無さんは唯一の国家代表ですし。」

「うん、他の先輩達も結構場馴れしてると思うから、気を付けなないと。」
たった数回使っただけで、データウエポン達を使いこなしてるあの人は正直すごいと思う。

「よし！次は俺と簀だな！」

「ふっ！勝ちほらうぞー！一夏！」

一夏と簀さんがそれぞれ愛機を纏い、向かい合う。

「じゃあ、今回の2人が使うデータウエポンは…。」

俺がそう言うと、2人の前にそれぞれ、データウエポンが召喚され

る。

「よっしゃ！パイパー行くぜ！」

「頼むぞ！ドラゴンフレア！」

「じゃ、試合開始！」

こちらの宣言と同時に両者は激突する。

「うむ、箒は絢爛舞踏を物にしつつあるな。」

「そうだね。やっとな機体のポテンシャルを存分に活かせるようになったね。」

戦いを見ていると、箒さんの紅椿が輝く。

そう、最近ではワンオフ・アビリティである絢爛舞踏をしっかりと使える様になっているのだ。

まだ、完全では無いらしいが、それでも、狙って使える様になっているのは大きい。

今まで悩まされていたエネルギー問題が一気に解決しつつあるのだ。

「ねえ、前に一回だけいたフェニックスが使える様になったらあんな感じなるのよね？」

「まあ、能力的には同じだな。」

鈴が思い出したように聞いてくる。

確かにフェニックスエールの特殊能力はエネルギーの無限供給だ。

「フェニックスもアレ以降音沙汰無いからなあ…。」

「本当に輝刃の為に力を使い果たしたのかな？」

「まあ、そのうち会えると思うよ？」

「何でわかんなのよ？」

「勘。」

そんな会話をしてると決着が着く。

パイパーを装備し、分身で攪乱してから零落白夜で一夏の勝ちだ。そんな感じに日々が過ぎていく。

トーナメント当日。

俺は少し早く会場であるアリーナにある一室へ行き、GEARS

タッフに挨拶していた。

「井上さん、こんにちは。」

「ああ、星夜くん。こんにちは。」

今回のGEAR代表である井上さんの元へ行く。

「今日はよろしくお願いします。」

「星夜くんも頑張つてね。応援してるよ。」

「はい、頑張ります。」

一通りの挨拶が終わり、俺は廊下へ出る。

「あつ！天野く〜ん！」

「どうしました？ 黛先輩？」

廊下を歩いてると黛先輩が声をかけてきた。

「ほら、今日は試合でしょ？ それに向けてのインタビューよ。」

手にもったボイスレコーダーを向けてくる。

「データウエポンの扱いで負けるわけには行きません。少なくとも、

一年生組のトップにはなりませんよ。」

「おおっ！ 言うねえ！ じゃ、写真を一枚！」

レコーダーをしまうと同時にカメラをこちらに向ける黛先輩。

軽くポーズを決め、シャッター音がする。

「うん！ ありがとう！ あつ！ ちなみに天野くんは一年生の中ではオツ

ズ一番だからねえ〜っ！」

黛先輩は叫ぶように言いながら走って行った。

ちなみにオツズとは生徒会の方で今回のトーナメントを使った博

打大会をしている。

黛先輩がその管理の一部をしているので、その数字を覚えてるのだ

ろう。

「まあ、今回はデータウエポン前提だからなあ…。」

自分への投票率が良いのは確実にその為だろう。

普通のトーナメントなら、一年生の中ではラウラかシャルが一番人

気になるはずだ。

「おっと、そろそろ開会式だったな。」

開会式の為、アリーナへ向かう。

開会式は問題無く終わった、博打大会の事を知らなかった一夏が騒いだ位か。

挨拶が終わり、それぞれがピットで待機する。

「一戦目は一夏と箒さんか…。さて、どうなるかな?」

人数の関係で、一つのピットに2人もしくは3人居る。

このピットには俺、セシリアさん、鈴が居る。

「ん、一夏って本番に強いタイプよねえ。ここぞつと時に爆発するの。」

「あの2人の組み合わせですと、データウエポンが決まるまで解らないですわね。」

「ああ、一夏は特に相性が出るし。」

ちなみに今、データウエポン達はGEARスタッフの所に居る。

試合開始と同時にそこから転送される予定。

「星夜とセシリアは誰かにかけたの?」

「いや、興味ないからやってない。」

「私も賭け事はちよつと…。」

「ふーん…。」

鈴が博打大会の事を聞いてきた。

俺は実際興味ないので賭けなかった。

セシリアさんもやってないらしい。

「そう言う鈴は自分にでも賭けたか?」

「いや、星夜に掛けた。」

「なぜに!?!」

そこは自分じゃ無いのかよ!?!

「いや、今回のルールだと星夜が一番かなあつて。」

「一応、一年の中だと俺が一番人気らしいが…。」

どう考えたって先輩達の方が確率高いだろうに。

「それに、名目は『応援』じゃない?だったら自分にやるのは変だし、自分以外で頑張って欲しいのは星夜だし。」

「おおう。」

「なっ！」

これは恥ずかしい！すごい恥ずかしい！

正面からこんな言われたら恥ずかしいわ！

セシリアさんも顔を軽く紅くしてる位だよ！

「と、言うわけだから、頑張りなさいね！」

「わかった…頑張るよ…うん。」

鈴が俺の額を指でつつく。

「そこでお二人だけの世界を作らないでくださいまし！」

セシリアさんが怒って声を上げる。

「まあまあ、セシリ——ズドオオオオオオンツ！！

鈴がセシリアさんに声をかけようとした瞬間、爆発音と衝撃がピットを襲う。

「鈴！セシリア！無事か!？」

ほぼ反射的に電童を装着し、2人に呼び掛ける。

ピット内に舞った埃せいで直接は見えないが、2人もISを纏ったのはセンサーで確認出来た。

「今度は何よ！」

「部屋中央！居ますわ！」

それぞれ構える。

敵が解らない為、様子見だ。

すでに緊急事態を知らせるアラートが鳴り響いている。

「な……………」

「えっ……………」

「まさか……………」

視界が晴れ、目の前に立つ敵をしっかりと見る俺達は言葉が詰まる。

「電童…だと!？」

真っ黒な電童だった。

風牙と違い、バイザーの形状も電童と同じで全ての装甲が黒い。

俺達がそれを認識した瞬間、黒い電童のバイザーが上がる。

「っ！」

「ドクロ!? 趣味悪すぎでしょ!」

電童にはあるフェイスパーツは無く、光がないどす黒い眼をした髑髏だった。

「さっきの揺れから考えてこいつだけじゃないはずだ!」

「速攻で倒すわよ!」

「援護しますわ!」

／グオオオオオオオツ!／

黒い電童は雄叫びを上げ、こちらに向かって飛び込んで来た。

トーナメントに向けた最終確認を行っているって最中、いきなり轟音と衝撃がアリーナを襲う。

多くの教師とスタッフが驚き、バランスを崩す。

「一体何が起きた!」

千冬は大きな声で周りの教師とスタッフに問いかける。

「しゅ、襲撃です! 画像を出します!」

真耶が素早くコンソールを操作、メインモニターに各ピットの映像が分割されて表示される。

「こいつらは…!?!」

「で、電童です! 全体が黒く染まってますが電童です! 現在5機確認されてます!」

各ピット内に居る専用機持ちはそれぞれの機体を纏い、黒い電童と交戦している。

「くそっ……早すぎる……『あれ』はまだ準備が……。」

「えっ?」

真耶の反応に千冬はすぐに口を閉ざす。

一瞬、目を閉じて、思考をリセットし再度目を開き、指示を出す。

「ピット以外の各セクションの状況は!?!」

「隔壁類、全て最高レベルでロックされています!」

「一般教員は生徒の避難指示を! 技術教員とGEARスタッフはシステムの奪還! 戦闘教員は全員レベル3で防衛戦の準備を! システムを奪還次第、突入する! データウエポンはすぐに専用機持ち達の所へ

！」

「了解！」

その場に居た全員が返事をし、行動に移る。

画面に表示されていたデータウエポン達も直ぐに動き出した。

「すみません、そちらも使わせていただきます。」

千冬は井上に声をかける。

「いえいえ、ここでは貴女が最高責任者です。従いますよ。」

井上それだけ答えると近くの席に座り、GEARスタッフ達と作業を始めた。

「やってくれるな……だが、甘く見るなよ。」

千冬はメインモニターを睨み、ハッキリと呟いた。

「くっ！貴様！何者だ！」

突如、天井をぶち抜いて現れた黒い電童。

それは目の前に居たラウラに襲い掛かった。

左手で首を掴み、持ち上げる。徐々に力が込められていく。

髑髏のフェイスパーツが不気味に笑ったように見えた。

「ぐうっ！」

とにかく首の拘束を外そうともがくラウラ。

腕のプラズマ手刀を展開し、相手の腕を切り落とそうと振り上げる。

しかし、それは使っていない右手で掴まれて止められる。

「ラウラ！」

シャルロットが相手の腹部にパイルバンカー〈グレー・スケール〉を撃ち込む。

「このおっ！」

パイルバンカー特有の激しい音と共に、相手の拘束からラウラは解放される。

しかし、黒い電童は冷静に両腕のドライブユニットを稼働させ、エネルギーを貯めていた。

「ラウラ！下がって！」

シャルロットが言う通りに後ろに回るラウラ。
得意のラピットスイッチで即座に盾を3枚重ねて構える。

直後、相手は閃光雷刃撃を放つ。

「くうっ！」

星夜の使う電童と違い、リミッターがかけられていないのか、自分達の知る威力よりも大きく、シャルロットの盾は貫かれた。

「シャルロット！」

「大丈夫！少しシールドエネルギーが削れただけ！」

シャルロットの事を気にしつつも、ラウラは左目のヴォーダン・オージエを解放、AICで相手を拘束する。

「うおおおっ！砕けろおっ！」

大口径のリボルバーカノンが相手の頭部に当たる。

その結果を確認せず、ラウラは射撃を続ける。

「っ！ラウラ！」

シャルロットは声を上げるが次の瞬間、2人は高速の何かによって吹き飛ばされた。

「おい、フォルテ。」

「なんすか？先輩？」

殴ろうとする黒い電童を避けるフォルテとダリル。

「これってGEARの奴だと思っか？」

「まっさか。今まで何度も出てきた奴らのっしょ？」

「だよな。」

ダリルは避けながら、背中に双刃剣で一撃を与え、相手の体勢を崩す。

「ともかく、こいつを叩き出すぞ！」

「了解っす！『イージス』のコンビネーション見せてやりましょう！」
起き上がった黒い電童が放つ飛翔烈風波を、2人は炎と氷の障壁で難なく防ぐのだった。

「ふん！」

「まだまだっスね！」

得意気な顔で黒い電童を見る。

相手はただ静かに右手を上げて構える。

「はっ！こいよ！」

「そんなパンチじゃ、うちに傷の一個もつけられないっすよ」

しかし、次の瞬間、2人が作り出す障壁が何かによって潰された。

「なにっ!？」

「そっ！それは!？」

驚きのあまり、動きが止まった一瞬。

2人は大きな衝撃で吹き飛んで居た。

「えっ……?？」

簪は突然現れた黒い電童の顔を見て、恐怖した。

慣れ親しんだ電童、その顔が髑髏になっているせいだ。

まるで電童が負け、星夜が死んだと言っているように見えるからだ。

「こっ！来ないで！」

必死に否定するように荷電粒子砲〈春雷〉を構え、放つ。

黒い電童は上手く避けながら近づいてくる。

「いやっ！いやっ！」

即座に薙刀〈夢現〉を展開し、振るう。

しかし、それは簡単に避けられる。

一旦距離を取り、睨み合う。

(大丈夫、星夜くんなら……平気？大丈夫？……まさか……?)

元々簪は気が弱い方である。

姉である楯無に対する劣等感等もあり、ネガティブに物事を捕らえる事も多かった。

打鉄式式が完成してからは、他の専用機持ち達と居ることも多く、彼らのお陰で引つ張られていたので明るく振る舞っていた。

しかし、今は1人で居るせいとか、どんどん悪い方へイメージが広がっていく。

「うおおおおおっ！」

そんな状態のピットに壁を壊して入ってきたのは白式を纏った一夏だった。

元々同じピットで待機する予定だったので、近くに居たのだろう。一夏はそのまま黒い電童に蹴りを入れて吹き飛ばす。

「おつ織斑くん！」

「簪！無事か!？」

雪片を構え、黒い電童の前に立つ。

「なんだ!?!顔がドクロ!?!」

一夏も敵の異様さに驚く。

その隙を逃さず飛び込む黒い電童。

「うわつとー!」

一夏は雪片で拳を弾く。

「なんだ!?!星夜の電童よりパワーがあるぞ!」

「もしかしたらリミッターが無いのかも!気を付けて!」

一夏の疑問に簪が答える。

「ああつ!わかった!兎に角こいつを一回アリーナに押し込もう!」

「うん!」

白式と打鉄式は高機動型の機体だ。

その為、狭いピット内の戦闘では相手の黒い電童が有利と判断し、簪がアリーナハッチを壊し、一夏が相手を押し込む。

「よし!」

「これでっ!」

壁を壊した時に舞った土埃で敵の姿が見辛い、センサーでどこに居るかはわかるので問題ない。

戦いやすくなったと思った瞬間、相手の閃光雷刃撃が2人の目の前に迫っていた。

「えっ!?!」

「なんっ!?!」

成す術無く2人は閃光に飲まれた。

「紛い物めっ!散れっ!」

箒の2振りの刀が黒い電童を狙う。

しかし、刀を弾かれ、反撃の蹴りが振られる。

「やらせないわよー！」

横から楯無がランスへ蒼流旋を突きだし、黒い電童を突き飛ばす。

「ありがとうございます。」

「どくいたしまして。まだ倒せてないわ。」

隙を見せること無く、構える2人。

敵が立ち上がる瞬間を狙い、楯無が突撃する。

「はあっ！」

楯無が突き出したランスを黒い電童は両手で掴み、受け止めた。

全力でランスを押すがピクリとも動かない。

「箒ちゃん！」

「はい！」

楯無の言葉に自分のやるべき事をすぐに理解し、箒は行動に移る。

楯無の後ろに回り、ランスを押し込む。

2人分の力で押されたランスは少しずつ、敵の胸部装甲に進んで行く。

「まだまだ！」

「はい！」

楯無と箒は同時にブースターを吹かした。

余りの出力に相手の黒い電童も耐えることができず、壁に叩きつけられる。

「箒ちゃん！展開装甲を全部防御に回しなさい！」

「楯無さん！なにを!?」

押し返そうとする黒い電童に対し、ランスに内臓されたガトリングを喰らわせつつ、楯無は自らの周りに漂う水を右腕の一転に集める。

「ミステリアス・レイデイが扱うアクア・ナノマシンを全部使って、最大の一撃を喰らわせるわ。分かりやすく言うと私版のファイナルアタックね。」

ミステリアス・レイデイのファイナルアタック。

その言葉に嘘は無く、楯無の右手に集まっている水は既にあり得な

い程のエネルギーを持っている。

センサーを通じてそれを見た箒は防御の準備をする。

「楯無さん！」

しかし、それほどのエネルギーを目の前にして、相手が黙っているはずもなく、右腕から飛翔烈風波を放つ準備をしている。

楯無は必殺の一撃を用意するため、動くことが出来ないのは箒にもわかる。

敵の攻撃を防ぐ為、箒は片手をランスから離し、刀へ雨月を切り出す。

「箒ちゃん、行くわよ。」

「えっ?」

言われた直後、高エネルギー反応に紅椿が判断し、パイロットの安全の為、展開装甲を全て防御に回す。

「ミステリアス・レイディー!ファイナルアタック!」

楯無が右手を相手に突きつけると水の塊が敵へ向かって行き、大爆発を起こす。

「ぐっおおおおっ!」

俺は黒い電童と取っ組み合いになっていた。

相手はリミッター等が無いのか、そもそも改造してあるのか解らないが、出力は確実にこっちより上だった。

「はっ!」

「たあっ!」

その隙に両サイドから鈴とセシリアさんが攻める。

「速い!」

相手は一瞬の迷いもなく、俺を全力で蹴り、その反動で距離を取って回避する。

「星夜!」

「大丈夫ですか!」

「まだ問題無い!」

何回かの取っ組み合いをして、わかったのはこの黒い電童は全てに

おいて電童のスペックを超えていること位か。

「鈴！セシリアさん！穴開けてアリーナに押し込もう！」

「そうね！ここじゃ狭すぎるわ！」

「皆さんと合流できるかも知れませんが！」

このままだとジリ貧になりそうなので、広い場所に移る為、行動する。

「喰らいなさい！」

まずはセシリアさんが、ピットとフレキシブルを活かした多面攻撃で相手の足を止める。

「砕けろお！」

鈴が両肩の衝撃砲で敵に攻撃しつつ、ピットハッチを壊す。

「これでえ！」

ハッチを壊した瞬間、敵が体勢を整える前に蹴りを入れて吹き飛ばす。

「もう一発！」

「行けえ！」

「貫きますわ！」

敵が地面で体勢を直しながら、着地する瞬間を狙って3人で同時攻撃。

飛翔烈風波、衝撃砲、ピットレーザー。

ほぼ同時に放たれた攻撃に敵は防ぐ術は無いはず。

爆発に飲まれる黒い電童。

煙が立ち込め、敵の様子は見えないので構えながらその一点を睨む。

／ズドオン！／

／ドゴオン！／

アリーナの壁の2ヶ所から爆発が起きる。

恐らく中に居た皆が同じように壊したのだろう。

「あそこは…一夏と簪ね。」

「もう片方は楯無先輩と箒さんだな。」

「この距離でも通信が出来ませんわ。」

ピットハッチのNo. からそれぞれ中に居た人物を上げる。状況を確認しようと思いを試みるが、繋がらない。

かなり強力なジャミングを行っているようだ。

そんな中、目の前の敵の姿がはつきりして来た。

「ちっ！まだ健在か……」

「でも、それなりにダメージは……」

「あっ！あれは……」

仁王立ちする影を見て、俺達は眩くがその途中で言葉が止まる。

黒い電童は赤い壁に守られている。

「なんで!？」

「レオ!？」

「ユニコーンさん!？」

目の前の黒い電童は右腕と右脚にユニコーンとレオを装備していた。

／ドツゴオオン！／

余りの状況に理解が追いつかず止まっていた俺達。

その前にアリーナのバリアを破り、巨大な影が降りてくる。

「よおっ！潰しに来たぜえ！電童おおおっ!!」

「凰牙!」

「やっぱりお前か!」

「大型の装備!？」

巨大な影の正体は凰牙だった。

今まで見たことも無い、新たな装備。

バックパックに付けた太いフレーム。

そのフレームの先には巨人の腕とも言える黒い腕がついていた。

「これが！俺の『破壊』だあ!」

「新しいデータウエポンか!？」

凰牙の腕の動きに追従する形で両サイドの巨腕が動く。

指の中は空洞でそこにはエネルギーが貯まっている。

「喰らいなあ!」

左右合わせて10門のエネルギー砲が放たれる。

俺達は即座に散開、砲撃を回避する。

「そらよっ！」

凰牙は俺に向け、巨腕を振るう。

「ぐっ！」

なんとかガードするが、そのまま地面に叩き落とされる。

追撃を避けるため、地面を蹴って後ろに飛ぶ。

「星夜！」

「星夜さん！」

俺を援護しようとして鈴とセシリアさんが動こうとするが、その間にユニコーンとレオを付けた黒い電童が立ち塞がる。

「どうせ見かけ倒しでしょ！」

「何が狙いか存じませんが！」

鈴とセシリアさんがそのまま、黒い電童と戦い始める。

「何言ってるんだ？本物に決まってるだろ…。」

「っ！」

俺と戦いながら、鈴やセシリアさんにも聞こえるように言う凰牙。

「なっなんですってえ!？」

「一体なぜ!？」

「簡単な事さあ…。」

「ラゴウの毒か!？」

「当たり前だあ!？」

俺達に動揺が走る。

実際、戦いが始まって時間がたっているのに、俺の元に一体も来ていない。

仮に学園側のコントロールを取り返す事を優先していたにしても

おかしい。

「いつの間!？」

「全部教えると思ってるのか!？」

凰牙の巨腕のパンチを避ける。

距離を取りつつ、考える。

ただ、わかっているのは、最悪の状況に追い込まれている事だった。

第61話《キズナ》

各モニターに映る映像を見て、千冬は…いや、その場に居たすべての者は驚きを隠せなかった。

「な、なぜだ…?」

「敵の電童が…データウエポンを…。」

星夜、鈴、セシリアの3人の前に立つ黒い電童は、確かにユニコーンドリルとレオサークルを装備していた。

「まさか…そんなはずは?!」

井上はコンソールを操作し、確認する。

「井上博士、わかりますか?」

「ええ。」

千冬の言葉に答える井上。

「あのデータウエポン達は本物です。恐らくはウイルスで操られていると思われます。」

他のモニターに映る黒い電童を見る。

そこにもデータウエポン達を装備した黒い電童が居た。

一夏、簪の前に立つ敵はガトリングボア。

箒、楯無の前に立つ敵はドラゴンフレア。

シャルロット、ラウラの前に立つ敵はバイパーウィップ。

ダリル、フォルテの前に立つ敵はブルホーン。

「全てのデータウエポン達が敵に!?!」

「しかし、輝刃と飛焰が見えません。あの2体を操る事は出来ないようですね。」

真耶の叫びに井上が冷静に答える。

「井上博士、こちらからデータウエポンを取り戻すことは?」

「難しいでしょう。ただでさえ、システムをあちらに握られているのですから。」

「くっ……!」

千冬は机を叩き、モニターを睨む事しか出来なかった。

俺―天野星夜―達は敵と睨み合う。

「鈴！セシリアさん！その黒い電童を頼む！俺は凰牙を！」

「わかったわっ！」

「なんとしても取り返します！」

「いつくぜええええ！電童おおおおっ！」

凰牙が吠えると同時に巨腕のエネルギー砲を放つ。

「狙いが甘いつての！」

砲撃を避けながら、凰牙に接近する。

「そんなんで近づけるのかよ！」

凰牙は巨腕を大きく振る。

上に飛び、そのまま蹴りをお見舞いする。

「ぐおっ！」

「大振り過ぎたな！隙だらけだ！」

着地と同時にドライブユニットを稼働させ、出力を上げて疾風三連撃を叩き込む。

「疾風！三連撃！」

「ぐがっ！だが！」

凰牙は踏みとどまり、右腕を振るう。

それを後ろに避ける、凰牙はその場で横に回る。

横から、巨腕がリアアットの如く当たる。

まるで壁にぶつかったような衝撃で、吹き飛ばされる。

「ついでに貰っとけ！」

吹き飛んだ先を狙ってエネルギー砲を放つ凰牙。

「閃光！雷刃撃！」

俺はエネルギー砲をギリギリで避け、反撃する。

一夏達も戦っている相手がつけているものに気づき、動揺を隠せなかった。

「なっ！なんで！ボア!？」

「どうせ偽物だ！騙されるなっ簪！」

動揺する簪を鼓舞しながら、内心焦っている一夏は敵へと突撃す

る。

「うおおおおっ！」

雪片を振りかぶり、零落白夜を発動させる。

敵はボアから光を放つ、すると一夏の動きが止まった。

「織斑くん!?!」

簪が声をかけるが反応が全くない。

敵は一夏に向けてガトリングを放つ。

「ぐおっ！」

ガトリングをもろに喰らい、吹き飛ばす一夏。

「くっそ!いきなりなんだ!?!」

訳が解らないと体勢を整えながら呟く一夏。

横から見ていた簪が声をあげる。

「織斑くん!今のは:クロックマネージャー!」

「なっ!?!マジか!なんでだ!」

「解らない:もしかしたら奪われたのかも:??」

2人は困惑しながらも、2手に別れて黒い電童を攻め立てる。

「相手がボアなら!」

「兎に角クロックマネージャーを避ける!」

それぞれ、機動性を活かした動きで敵の攻撃を避けつつ戦う。

――

至近距離での爆発を受け、少し飛ばされアリーナに出る筈。

「くっ!楯無さん!!」

爆発に飲まれた筈は煙で周りが見えず、楯無に呼び掛けるが返事がない。

い。

「むっ!まだ立っているのか!」

煙の先に見えた黒い装甲:相手の黒い電童が倒れていないと知っ

た筈は、迷わず斬りかかる。

「なっ!なぜだっ!?!」

筈の一撃を止める黒い電童、煙が晴れて見えた姿には大きな傷が見

えなかった。

そして、反撃として左脚の蹴りを喰らう。

蹴りが当たった瞬間、箒は炎に包まれる。

「ぐっ!？」

すぐに距離を取りつつ、体勢を整える。

「ドラゴンフレア……だと?」

相手の脚についているドラゴンフレアを見つけた箒。

(まさか!周囲のナノマシンを無効化して、ダメージを減らしたのか!?)

ドラゴンフレアの持つ特殊能力を思い出し、敵のダメージが少ない理由を推理する。

「だが!ダメージが無いわけでは無かろう!」

ダメージで動けないであろう、楯無の事を考え、敵をこの場から離すことを優先する。

2振りの刀を用い、果敢に攻め立てる。

「喰らいなさい!」

「でりやあ!」

双剣を振るい攻める鈴、その隙を埋めるようにフレキシブルレーザーで援護するセシリア。

そんな2人の連携を慌てることなく、止める黒い電童。

「ちいつ!今のを避けるかあ!？」

「鈴さん!落ち着いて!」

接近する鈴をファイヤーウォールで封じ、機械特有の反応速度でセシリアのレーザーを避ける。

一撃すらまともに入らず、鈴が声をあげていた。

「ハイパースキヤンのお陰でセンサー類が強化されてる無人機ってこんなに面倒になるのね。」

「私たちが使ってる時以上の恩恵があるみたいですよ。」

黒い電童の右腕と右脚を睨む鈴とセシリア。

「レオ!あんた何簡単に使われてるのよ!」

「ユニコーンさんも!後でお説教ですよ!」

2人は叫びながら、攻撃を再開する。

「くそっ！」

「まだ…行ける！」

ボアを装備した黒い電童と戦う一夏と簪。

攻撃を避けた際に、視界にアリーナの床に水色の物が微かに映る。

「…っ!？」

この場で水色の物が、楯無のミステリアス・レイデイであるのはすぐにわかった。

「簪！楯無さんを頼む！こいつは俺が押さえる！」

「え、あ、うん！」

一瞬、反応が遅れたが、簪は敵に対して数発のミサイルを放ち、その隙に楯無の元へ向かう。

「お前の相手は…！俺だあ！」

簪を追わせないように、一夏は敵に斬りかかる。

敵を一夏に任せ、簪はすぐにセンサーの感度を上げ、楯無を探す。

「——居た…！」

すぐにミステリアス・レイデイの反応を見つけ、駆け寄る。

「おねえ——」

簪の声が止まる。

そこには無惨にも、装甲の殆どが失われ何とか展開状態を維持しているミステリアス・レイデイを纏った楯無だった。

本人にも何カ所かの傷が見え、気絶してるのかピクリとも動かない。

(う…う…うそ…ウソ…嘘…)

頭の中が混乱する。

目の前の事に対して理解が追い付かない。

立ち呆けていると、爆発音と共に一夏が飛ばされてくる。

「お、おり…むらくん…。」

一夏も気絶してるのか、返事がない。

大きな攻撃を喰らったのせいか、装甲にはヒビが入り、一部が欠けている。

簪は視線を一夏を飛ばした、黒い電童に向ける。

「ゆる…きさない！」

言うと同時に瞬時加速を使い、敵に接近し薙刀で斬り付ける。何度か斬り付けるが、敵は薙刀の刃を掴み叩き折った。

「うわああああっ！」

すぐに薙刀を手放し、荷電粒子砲を至近距離で放つ。回避も間に合わず、喰らう黒い電童。

攻撃の反動で距離が開こうとするが、決して離さず何度も喰らわせる。

——カチリ——

しかし、エネルギーが底をつき、いくらトリガーを引いても反応が無い。

頭部が半壊した黒い電童が体勢を直し、簪に向く。

「これでっ!!」

叫びながらミサイルを展開し、放とうとする。

しかし、その瞬間簪は光に包まれる。

「クロッ——」

対象の時間を奪うクロックマネージャー。

それに当たったのだろう。

簪の意識はそこで止まる。

——ガギンツ——

意識が戻ったとき、目の前には黒い電童の一撃を受けとめる楯無の姿があった。

「おねえ…:…ちゃん…:…。」

「大丈夫？ 簪ちゃん。」

ボロボロの装甲で何とか黒い電童を止める楯無。

「一夏くん！」

「はいっ！」

楯無の呼びかけに答え、起き上がった一夏が後ろから斬りかかる。後ろから斬られ、ダメージが限界を超えたのか倒れる。

直後、楯無も膝をつく。

「っ！」

「お姉ちゃん!？」

「楯無さん!」

一夏と簪は急いで、楯無の前に行き、顔を覗きこむ。

「だ、大丈夫よ…それよりもまだ敵は居るんでしょ? 気を抜かないの。」

無理矢理笑いながら、周りを見る。

「一夏くんは箒ちゃんの方へ行つて、結構ダメージが入ってると思うから2人なら大丈夫よ。……これを持っていきなさい。」

「はい……あつちか!」

一夏は楯無からなにかを受け取ると、すぐに箒の紅椿を見つけるとすぐに飛んでいく。

「箒ちゃん……」

「お姉ちゃん……」

「あなたは…星夜くんを助けに行きなさい。」

アリーナの中央で戦う電童と凰牙を見る。

凰牙は見たこともない大きな腕を使い、攻めているようだ。

「で、でも……。もう武器が……」

簪は自分の機体が既にほぼ戦えない状態にあることを告げる。

薙刀は折られ、荷電粒子砲もエネルギー切れ。

わずかにミサイルが残っているだけだ。

「大丈夫よ。箒ちゃん…あなたなら、創れるわ。」

「えっ?」

「どんなに絶望的に見えても、星夜くんは立ち上がるわ。あなたが力を貸せば勝機も創れる。」

優しく微笑み、簪を抱きしめながら、楯無は口を開く。

「だから…大丈夫よ。自信を持ってね。」

「うん。行ってくる。」

簪は立ち上がると、星夜の居るアリーナ中央へと向かう。

「行ってらっしゃい。」

楯無は簪に声をかけるとその場にゆっくりと倒れる。

アリーナの中央で凰牙と殴り合いを続けて居たが、相手の新装備である、巨大な腕に押されていた。

接近時の圧倒的なリーチとパワー。

遠距離でも強力な弾幕にさらされる。

小回りが利かないようなので、何度か懐に入って殴る事は出来たがあまりダメージは与えられていない。

「そろそろ終わらせるかあ！」

「やらせるかよ！」

凰牙が巨腕を構える。

「うおらっ！」

「ぐっ！」

こちらの足元を狙いエネルギー砲を放つ。

当たりはしなかったが、大きな隙になった。

「しまった!?!」

「捕まえたぜえ！電童っ!!」

そこを逃さず凰牙が接近してきて、巨腕に両サイドから潰すように掴まれる。

「ハッハッハッ！このままボロ雑巾にしてやるよ！」

「ぐっあああああっ！」

メキツという音と共に、身体全体を締め付けられる。

巨腕のパワーは圧倒的で、電童の装甲もいつまで持つかかわからない。

「アーツハッハッハッ！苦しめ！苦しめ！」

勝利を確信した凰牙は笑いながら、攻撃を続ける。

次の瞬間、凰牙に大量のミサイルが降り注ぐ。

「星夜くんを！やらせない！」

「ちいっ！打鉄式式だど!?!」

「今だっ！」

攻撃を喰らい、怯んだ隙を逃さず全力で手を振り払う。
敵の拘束から逃れ、やって来た簪さんと合流する。

「簪さん、ありがとう。」

「ごめんね、遅れた。」

2人で並び、風牙を睨む。

「ふんっ！お得意の絆とやらは壊れてるがなあ!？」

風牙は馬鹿にするような言い方で、挑発してくる。

「創るよ…。」

「あん?」

小さく、ハッキリと言う簪さん。

「何度壊されても！何度でも創る！諦めずに！」

「ウルセエんだよ!!」

簪さんの言葉に風牙は苛立ちを隠さず、攻撃してきた。

巨腕のパンチを避ける。

「そうだ！俺たちは絶対に諦めない！勝利を掴んで見せる！」

「あなたに見せてあげる！これが私の『創造』だ!!」

簪さんの呼びかけに答えるかのように、ガトリングボアが隣に現れる。

「打鉄式式！プラグイン！ガトリングボア！」

ボアが強い光となり、簪さんの打鉄式式を包んで行く。

「こ、これはっ！……セシリアさんと同じ!!」

「な、なんだ?!こりやあつ!!」

何が起きているか解らず、叫ぶ風牙。

俺の頭のなかにはキャノンボール・ファストの時に起きた現象が浮

かび上がる。

その考えを肯定するように、打鉄式式に変化が訪れる。

全体的に軽装だった、各装甲に翠の追加装甲が表れた。

腕にチェーンガン、肩には小型の荷電粒子砲が増え火力が上がったのは誰が見てもわかるだろう。

アンロックユニットは大型化し、ミサイルの装填数や機体の推進力を強化してあるのだろう。

ヘッドギアにはボアの頭部を模した飾りが付いている。

「打鉄式式……刻創（こくそう）!!」

光が収まり、ボアの牙を模した刃を持つ薙刀を構えながら、簪さんが名乗りを上げる。

「何だが知らねえがつーこれで消えちまいなあつー！」

巨腕にエネルギーを送り、大出力で放つ凰牙。

俺は即座に回避するが、簪さんは正面から受ける。

「簪さん!？」

「はっーこれなら新型だろうと——なんだと!？」

爆煙が消え、そこにいる簪さんの打鉄式式・刻創には傷は一つもなかった。

「今度は……こつちの番だ!」

お返しとして、無数のミサイルを放つ。

ミサイルは様々な軌道を描き、凰牙を襲う。

「ぐおおおつー！」

「まだまだあつー！」

「このまま一気に!」

ミサイルを喰らい、怯みでる隙に飛び込む簪さん。

それに合わせこちらも飛び込む。

「はああつー！」

「爆砕!・重落下!」

凰牙を正面から斬り付ける簪さん、その頭上を飛び越える形で爆砕重落下を喰らわせる。

「ぐーふつー！」

「もう一撃!」

吹き飛んだ凰牙に対し、簪さんが合計4門の荷電粒子砲を向ける。

「星夜くん!」

「ああつー合わせる!」

簪さんからの問いかけに答えながら、両腕のドライブユニットを高速度で回転させ、エネルギーを貯める。

「閃光!!」

それぞれの砲口からエネルギーが放たれると、同時に両腕を突きだし、こちらも放つ。

「乱舞塵!!」

「うあああああああつー!」

凰牙は何とか巨腕を合わせ、防御の姿勢を取る。爆発に飲まれ、その中から出てきたのは肩を残し、無惨に壊れた巨腕とボロボロになった凰牙だった。

「くそ……何でなんだよ!」

凰牙は巨腕をしまいながら声を荒たげる。

「何で何時も!お前らばかりっ!!」

こちらを睨んでいるのか、殺気を感じる。

その気迫に俺と簪さんは動けずにいた。

しかし、その沈黙も長くは続かなかつた。

周りの戦いも決着がつき、大きな爆発が起きる。

「星夜!こっちはやつつけたぞ!」

「後は凰牙!お前だけだ!」

一夏と簪さんが、それぞれ刀を構えて凰牙を囲む。

「待たせたわね!星夜!」

「ここから逃げられると思わない事ですわ!」

鈴もセシリアさんも駆け付け凰牙の包围に加わる。

「ああ、ムカつく!そうやって見せつけるのか!!お前はあつ!!」

凰牙はその場で閃光雷刃撃を放つ。

不意打ちに近い形ではあったが、全員当たらずにすんだようだ。

距離を放した事を確認した凰牙は足元にボールのような物を投げつける。

対IS用フラッシュグレネードだ。

「逃がすかっ!」

予想していた俺はすぐに飛び込み、凰牙を掴む。

「くそっ!放しやがれ!」

凰牙は俺を放そうと顔を殴ってきた。

「ぐっ……このおっ!」

お返しとして殴り返す。

お互い、ボロボロの状態だった為か、頭部の一部が欠ける。

「やつと顔を——」

俺はそこで止まった、なぜなら凰牙の欠けた頭部から見える人物の顔を知ってるからだ。

「どうした？見たかったんだろ？喜べよ……？」

「な、なぜ……。」

顔の一部しか見えないが、確実に俺と同じ顔だとわかった。

「ラゴウツー！」

「ぐあつー！」

驚きで止まっていた隙に、凰牙はラゴウを呼び出す。

呼び出されたラゴウは俺を突き飛ばすと、すぐに凰牙に装着される。

ラゴウのスピードで一気に離脱された。

「星夜さん！」

「大丈夫!？」

「ああ、機体にダメージはあるけど、身体は大丈夫……皆は？」

動揺を抑えつつ、皆に確認をとる。

「全員、似たような状態だな。」

「ここに居ないラウラやシャルロット、先輩達は大丈夫だろうか？」

一夏と箒さんが周りを見ながら言う。

電童の周りにデータウエポン達が出てくる。

「データウエポン達は、解放されたみたいね。」

俺の周りにデータウエポン達がやって来たのを見て、鈴が肩の力を抜きながら言う。

データウエポン達は全員、頭を下げてきた。

恐らく、敵にやられていた事の謝罪だろう。

「全員無事でよかった。でも、後で井上さんに調べてもらわないとな。」

先程の戦闘で見なかったブルやバイパーが居るし周りから音も振動も無いので、恐らくラウラ達も勝ったのだろう。

ふと、簪さんの方を見る。

既にボアとの合体は解除され、打鉄式式に戻っていた。

「皆、大丈夫見たいね。」

「お姉ちゃん！」

「楯無さん！」

少しふらつきながら、楯無先輩がこちらに来了た。

簪さんや一夏が駆け寄る。

「ああ、私は大丈夫よ。ちよつと頭がくらくらする位よ。」

「それはダメなやつです！」

「せめて座つてて！」

強がる楯無先輩を簪さんと一夏が座らせる。

「もう…心配性なんだから…。」

全員が身体を落ち着かせると、施設のコントロールが戻ったのか、照明がつく。

そして、アリーナのハッチが開き、医療班の先生達が来了た。

その場で簡単な診察をし、傷の深い人から順番に医務室へ行くことになった。

比較的、傷の浅かった自分は治療を受けた後、井上さんと会つていた。

「私も映像を見ていたが、やはり今まで以上の力を備えているね。」

「はい、基本的にはそれぞれの機体を強化してる見たいです。」

井上さんは俺が渡した電童のデータを見ながらはなす。

「あとはこれを任意で発動できるか、だね。」

「機体が治り次第、簪さんと話して試してみます。」

「うん、頼むね。うくん…。」

電童のデータを見ていた井上さんが唸る。

「どうしました？」

「いや、機体のダメージが思ったよりあつてね。これは一度本社の方でオーバーホールを兼ねて全面的に直した方が早いな。」

「そうですか、すみません。」

「いや、星夜くんが謝ることじゃないよ。壊れた物は直せるけど、人はそうはいかないからね。」

「そうですね。」

電童を腕から外し、井上さんに渡す。

電童を受け取ると代わりに井上さんが俺の手にあるものを置いた。

「これは…。」

「何があるかわからないからね。保険だよ。」

そう言われて手の中の物を見る。

銀河や北斗達が持つ〈Gーコマンダー〉だ。

「GEOSですか…？」

「ええ、何も無いよりはいいでしょう。」

「ありがとうございます。」

お礼を言いながら上着にしまう。

「あと、データウエポン達も預かります。今回のウイルスがどの様な経路で感染させられたのか、もう完全に無くなったのか見ますので。」

「ぜひ、お願いします。」

井上さんに頭を下げる。

「井上博士、少しよろしいでしょうか？」

織斑先生がやって来た。

事後処理で忙しいのだろう、少し疲れが見える。

「ええ、平気ですよ。」

「あ、じゃあ自分はこの辺で。」

なんの話をするかわからないので念のため、2人に挨拶をしてからその場を後にした。

しかし、井上さんと何を話すんだろ？

星夜が廊下の向こうへ消えると、千冬は口を開く。

「今回の件、私は内部からの手引きが合ったと考えています。」

千冬は真剣な眼差しで話す。

「なるほど、強固な壁も内側からなら容易く崩れる…と？」

「ええ、しかもそれはGEAR側ではなく、こちら側です。」

「そうですか。」

「ですが、そちらにも可能性は…。」

「わかっています。その辺りはアルテア君達がどうにかするでしょう。」

「そうですね。あの2人なら……。」

「ああ、そう言えばこれを……。」

井上が思い出したようにポケットからメモリを取り出す。

「ベガ君が君に渡してくれ、と。」

「ありがとうございます。」

千冬はそれを受け取り、ポケットにしまいながら礼を言う。

「では、今回の報告書は近い内に。」

「ええ、お願いします。」

2人は短い挨拶をし、それぞれの場所へ向かう。

「あ、一夏大丈夫そうだな。」

「星夜か、お前も大丈夫そうだな。」

医務室の前に備え付けられた椅子に座っている一夏を見つけた。

何か所か包帯は見えるが動くぶんには問題なさそうだ。

「ああ、骨とかには異常は無いつて。」

「入院の必要は無いけどあちこち痛い。他の皆はもう少しかかるって先生が言ってたぞ。」

「そんなにひどいのか?」

「ああ、楯無さんが絶対安静だつて。」

「やっぱりか。」

あの人、あの時一番フラフラしてたもんな。

周りに誰も居ないことを確認しながら、俺は携帯を操作し、一夏にメールを送る。

「ん?」

「静かにな。」

メールに気づいた一夏に小さい声で話す。

『凰牙のパイロットは俺と同じ顔だった。』

この事は誰にも言わないでくれ。』

メールを見て、一夏は驚いた顔でこちらを見る。

「俺達、自分の知らない所で何かに巻き込まれてるのかもな。」
「どう言う事だよ…それ。」

俺と凰牙パイロット、一夏とマドカ。

この間には何があるのだろうか…。

「ごめん、先に部屋に戻ってる。みんなには大丈夫だって伝えておいてくれ。」

「あ、ああ。気を付けろよ…。」

一夏に挨拶して、部屋に向かって歩く。

その後、部屋に戻った俺は疲れからか、飯を食べることなく寝た。

その日の夜。

IS学園地下のある部屋に、撃破されたISの残骸が集められていた。

「織斑先生、今回の黒い電童…以前現れた無人機と同系列の物と思われる部分が見つかっています。」

「山田先生、コアは？」

「はい、撃破された全5体の内、3つ回収されました。」

千冬からの質問に答える真耶。

回収されたコアが3つ並んで置いてあった。

「ふむ…政府には全部破壊されたと伝えろ。」

「え…？」

千冬の言葉に真耶は驚いた表情を見せる。

「ここ最近、亡国機業のせいでISを失った国がいくつあると思う？
その中にフリーのコアを出して見ろ、余計な混乱を生み、最悪の
場合は戦争になるだろう。」

「で、ですが…。」

千冬のしようとしている事は、IS学園を危険にさらす事に繋がる
かも知れない。

そう思うと真耶は少し表情が固くなる。

「ふっ、私を誰だと思ってる？…これでも元世界最強だぞ。」

千冬は明るく言葉を続ける。

「学園の1つくらい守って見せるさ。」

朝、目覚ましが鳴る前に目覚める。

「ん……あのまま寝ちゃったか……。」

机で倒れた状態で寝てしまっていた。

余程着かっていたのだろうか？

「少しダルい気がするけど……少し動かした方がいいよな……。」

日課である朝のトレーニングをするため、着替え、顔を洗ってから外へ出る。

「あくやっぱり所々痛むな……。」

軽くジョギングしながら身体の状態を確認する。

身体中あちこちから痛みを感じるが、激しく動かなければ大丈夫そうだ。

「おはよう、ラウラ。」

広場のベンチで座るラウラを見かけたので挨拶をする。

が、ラウラが珍しく上の空の様で返事がない。

「おい？ラウラ？」

「うわあっ!?な、なんだ……星夜か、驚かすな……。」

本当に珍しい……ラウラがここまで隙を見せるなんて。

「大丈夫か？なんか上の空だったけど」

「だ、大丈夫だ……少し疲れが残ってるだけだ。」

「そっか、昨日は凄かったもんな。」

「ほぼ1人で鳳牙の相手した星夜ほどではないさ。そろそろ部屋に戻るか。」

「ああ、気を付けろよく。」

「星夜もな……あまり身体を動かすと怪我に響くぞ。」

ベンチから立上がり、ラウラは行ってしまった。

「なんか……無理してないか……？」

ラウラの事だから大丈夫だとは思いたい、しばらく様子を気にしよう。

今日は本来、休日だったが、昨日の事件もあり、教師達も後処理に追われている。

朝食を食べ終わった頃、山田先生が俺の部屋に来た。

「天野くん！」

「山田先生、どうしました？」

「取り調べです！」

「あ、事情聴取ですか？」

「はい！特に天野くんは他の人達より時間がかかると思います！」

まあ、覚悟はしていたが…。

「えっと…予定はどれくらいで？」

「3時間は覚悟するように。と織斑先生が言っていましたよ。」

「わかりました…。」

取り調べ室になっている生徒指導室に向かった。

第62話《GEOS》

長い事情聴取を終え、俺―天野星夜―は廊下を歩く。

楯無先輩がまだ検査入院中なので、お見舞い行く為だ。

「失礼します。」

「あら、星夜くん。いらっしやい。」

ノックして部屋に入るとベットのの上には、けん玉を片手に持った楯無先輩が居た。

「入院って聞いたから心配しましたよ。」

「やあねえ、皆大袈裟なんだから、おねーさんはこの程度へっちゃらよ。」

そう言いながら片手に持ったけん玉を、素早く動かしていた。

俺はけん玉に詳しく無いけど、とりあえずこの人が得意なのはわかった。

「けん玉、上手ですね。」

「ええ、昔から得意なの！」

にこやかに笑いながらけん玉を続ける楯無先輩。

俺は視線をけん玉から別の物に移す。

「じゃあ、こっちの編み物セットは？」

「けん玉と一緒に一夏くんが持ってきたのよ。『楯無先輩も折角ですから苦手を克服してください』って、にこやかにね！」

あく前に簪さんが楯無先輩は編み物が苦手…と言うか下手だって言ってたな。

「日頃から弄りまくってたんだし、この位の反抗は当然じゃないですか？」

「あ、星夜くんもそんなこと言うのね！」

「騒ぐと傷に触りますよ。」

「むう…。まあいいわ。一夏くんに伝えておきなさい。次の特訓は泣かせてあげるってー！」

「はい。伝えておきますよ。」

そんな感じでしたらしく話をして、部屋をあとにした。

数日後。

一部アリーナに立ち入り禁止区域がある以外、普段の生活に戻りつつあった。

「おはよう天野、少しいいか?」

「おはようございます。どうかされましたか?」

朝、教室に向かう途中で織斑先生に声を掛けられた。

「お前にはやっってもらおう事がある。これから応接室の方へ行ってくれ。」

「わかりました。」

応接室? GEARから誰か来たのだろうか?

「ああ、授業は気にしなくていいぞ。」

「はい、で、何をするんですか?」

「ああ、行けばわかる。」

織斑先生からの話を聞き、俺は驚きを隠せなかった。

朝のHRが終わり、グラウンドにて訓練機の準備をする生徒達。

そこから少し離れた場所で、星夜を除く1年生専用機持ちが千冬の前に並んで居た。

「本日は学年合同実習だが、お前達の機体は先日のダメージで当分の間、使用が禁止されている。」

「はいー!」

千冬の言葉に全員が頷く。

自分の機体ダメージ等を把握し、自己修復が終わるまで待つか、星夜のように専用の設備で修理を行わなければいけないのは全員理解している。

「さて、そこでだが。山田先生!」

「はい! 皆さん、こちらに注目です!」

千冬に呼ばれ、真耶が並んだコンテナの前で手を振っていた。

グラウンドに最初から置いてあり、目を引く物の為、全員がなんなのか気になって居たものだ。

「なんだろう？」

「もしかして…新しいISS!？」

「それならISSハンガー使わない？」

「まさか…新作おかし!？」

遠巻きに見ていた生徒達もおしやべりを始める。

こんなときでも平常運転の本音の言葉を聞いて、少し笑ってしまう簪達だった。

「静かに！…お前達はもう少し静かに出来ないのか…。山田先生、開けてください。」

「はい！それでは、オープン・セサミ！」

元気よく叫ぶ真耶に対して、理解出来ない学生達はぽかんとする。

「うう…世代差って残酷…。」

泣きながら真耶がリモコンのスイッチを押すと、コンテナがモーター音を轟かせながら開く。

「…これはっ…!？」

一夏が驚き声を上げる。

「何ですか？」

＼スパーンツ！／

千冬の出席簿が一夏の頭に振り下ろされた。

「い、痛え…。」

「無駄に騒ぐからだ…馬鹿者。」

一夏は痛む頭を押さえながら、コンテナの中を見る。

そこにあつたのは金属製のアーマーのようなものだった。

「教官、これは―」

「ボーデヴィツヒ、教官ではなく先生だ。」

何度も注意されているが、未だにラウラからの教官呼びは矯正されない。

千冬に軽く睨まれ、ラウラは怯んでしまう。

「これは国連が開発している外骨格攻性機動装甲『EOS』だ。」

「イオス…。」

「Extended Operation Seeker。略してE

OSだ。その目的は災害救助や平和維持活動など、様々な運用を想定している。」

「あの、織斑先生。これをどうすれば…?」

「もしかして…。」

箒と簪が恐る恐る訪ねる。

「乗れ。」

「えっ!？」

一夏は声を上げて驚く。

「二度は言わん。こいつの運用データ及びレポートの提出をIS委員会に言われていてな。機体が使えないお前達には丁度良い任務だろ?」

「は、はあ。」

「さあ、わかったら始めろ。」

「皆さくん準備は出来ましたか?」

真耶は後ろに居た生徒達に訓練機の準備状況を確認しに行く。

千冬はEOSを眺める専用機持ち7人を軽く叩く。

「早くしろ、時間は有限だ。それともお前達はこれをいきなり使いこなせるのか?」

「準備に入りますっ!」

全員がマニュアルを軽く確認し、機体を装着する。

「ぐっ!このっ…。」

「こっこれは…。」

「お、重い…ですわ…。」

「う…動きにくい…。」

乗り込み、試しに腕を上げるがそれだけでも多大な疲労感。

ISと違い各種補助装置がほぼ無い為、機体の重さをダイレクトに感じているからだ。

また、積んである補助装置も無いよりマシ、と言った程度でISの物と比較にならない。

背中には巨大なバッテリーがあるが、それを使っても30分も稼働できない。

一夏達はISがいかに優れた物なのか身をもって知ることとなった。

「ふむ…あの頃に比べればマシンにはなったか…だが、あれには遠く及ばないな。」

1人黙々と機体の感触を確かめたラウラは、一度目にした事のあるGEOSとの違いを口にしていった。

「あく確かに……。」

「なぜ……あちらを採用しなかったのでしょうか……。」

ラウラの言葉に同じ様に見たことのあるシャルロットとセシリアが答える。

「あれってなんだ？」

「一夏くんはもう少しIS関連の事を調べた方が良いと思う。」

「全くね。まああたしも実物見たこと無いけど。」

「噂しか知らないがそんなに凄いのか……？」

実際にGEOSを見たことの無い一夏、簪、鈴、箒が話していた。

「無駄口を叩く余裕があるようだな。ならばこれより模擬戦を開始する！防御に関しては装甲のみのため、基本的に生身に攻撃するな。武器はペイント弾だが、当たるとそれなりに痛いぞ。」

千冬が手を叩き、全員の注意を促す。

全員がそれぞれ距離を取ったところで千冬から開始の合図が下される。

「まずは……一夏だな。」

ラウラは一番近くで動かす事に四苦八苦している一夏に狙いを定めて、脚部にあるランドローラーを使い間合いを詰める。

「げっ!？」

「遅いっ!」

一夏は何とか右腕を動かし、パンチを放つがラウラは余裕をもって避ける。

そのまま腰を落とし、足払いを放つ。

「ぐえっ!」

「終わりだ。」

一夏に素早くサブマシンガンでペイント弾を撃ち込み離脱。
そのままセシリアの元へ向かう。

「もううぞ。」

「そう簡単にはやらせません！」

セシリアは両手でしつかりと構えたサブマシンガンをフルオートで放つ。

しかし、照準は合わず弾はかするだけだ。

「くっ！反応が……。」

「日頃からISの機能に頼りすぎたな！」

ラウラの指摘通り、ISならばPICで反応を自動で消す事ができる。

さらにセシリアが普段使っているレーザー兵器は反応が火薬式の武器に比べて少ない事もあり、照準がうまくいかずにいる。

「くっ！火薬式と言うだけでも使いなれないのに！」

セシリアがサブマシンガンの弾切れを起こし、弾倉を入れ替える隙を逃さず、ラウラは接近する。

「もらった！」

「きやあっ!!」

接近時の速度を保ち、盾を前に突き出して突進する。

重量のあるEOSは鈍い音をたてながら後ろに倒れる。

セシリアは当然、立ち上がるため、背部の起立ユニットを使うが余りにも遅い。

その間にペイント弾を撃ち込まれる。

「あとは——」

「喰らえっ！」

次の目標を定める前にラウラに対して鈴が横から強襲をかける。

右腕を振りかぶり、加速に合わせて全力で振り抜く。

「良いパンチだ……だがっ！」

「うわっ」とと！」

ラウラは冷静に後ろに下がり、突き出された右腕を掴み引つ張る。引つ張られた事でバランスを崩した鈴はベッドスライディングの

様に転ぶ。

「ふむ……。」

転んだ鈴にペイント弾を撃ちながら周りを見ると、残った箒、シャルロット、簪が共闘をするため、陣形を組んでいた。

「1対1では敵わないと悟ったか。」

「ただやられる訳にはいかんのでな！」

「これも戦術！悪く思わないでね！」

「行くよ！」

簪の掛け声に合わせて、箒が前に出る。

シャルロットと簪は箒の後ろからそれぞれ、射撃を行う。

「足止めからの攻撃か、基本だな。」

ラウラは箒に軸を合わせて、突進する。

「簡単にはやらせん！」

対する箒も盾を構え進む。

「残念ながら、練度が違う。」

箒の横にすり抜ける様に移動し、体当たりするラウラ。

急に横からの衝撃を受けて箒は体勢を崩し倒れる。

ラウラはそのまま後方の2人向かって進む。

「この弾幕なら！」

「押しきれぬ！」

「そうはさせんさ。」

ラウラはシャルロットに向かって進みながら、盾を投げつけ、そのまま速度を落とすことなく、簪を狙い撃つ。

「うわあっ!!」

「きゃあっ!!」

「足を止めたのが敗因だっ！」

盾によつて、体勢を崩しかけたシャルロットをタックルで押し込み、倒す。

「よしーそこまでー！」

千冬の声が響く。

模擬戦が終わり、EOSをグラウンドの隅に並べ、千冬の元に集合

する。

「ふむ、流石だな。ボーデヴィツヒ。」

「これもドイツ軍で教官にご指導——バシンツ——」

「織斑先生だ。いつになったら覚えるのか……。」

いつものように、手に持ったファイルで頭を叩く千冬。

頭を押さえるラウラに一夏が問いかける。

「なあラウラはこのEOSって、使ったことあるのか？」

「いや、これではないが、似たような物ならドイツ軍にあつてな。主にIS用装備の試験運用などに用いられていた。」

「なるほどね。そりゃあんなに上手く使えたのね。」

「上手いと言うほどでも無いし、あれに比べればオモチヤの様な物だろ。」

鈴に答えるラウラ、そこに一夏が再び質問する。

「なあ、模擬戦前にも言ってたけど、あれってなんだ？」

「ん？ああ、そうか。一夏は知らないのか。」

「一夏、ラウラの言うあれって言うのは——バシンツ——」

シャルロットが一夏に説明をしようとすると、シャルロットの頭にファイルが落とされた。

「お前達、無駄話もそこまでにしろ、午後も本機を使用する。異常等が無いか今のうちに確認しておけ。終わり次第、昼休みだ。」

「わ、わかりました！」

涙目のシャルロットが答える。

一夏達はすぐ、自分の使ったEOSを点検し、昼食に向かった。

「ねえ、そういえば星夜はどうしたのよ。」

「午前中、居なかつたけど。」

食堂で、それぞれ料理の乗ったトレーをテーブルに置きながら鈴と簪が問いかける。

「ええ、GEARの方で用事だとか……。」

「朝、織斑先生が言っていた。」

セシリアと箒が答える。

「なに？もしかしてあれを持ってくるつもり？」

「実物が見れるなら、それは気になるかな。」

「うくん、午前中の内容を考えるとその可能性は高いね…。」

鈴の一言で、簪とシャルロットが反応する。

「何回か聞いたけど、あれって何なんだ？星夜が居ないのと同様関係あるのか？」

「恐らく…な。」

一夏の問いにラウラが短く答える。

「ふくん。ラウラはなんで難しそうな顔してるんだ？」

「む、そう見えたか？」

「あれ、違ったか？てっきり悩んでるのかと。」

「何を悩むと言うのだ。一夏、お前は他人を気にする余裕があるのか？さっきの模擬戦では一番最初にやられてるのだぞ。」

「うぐっ！それを言われるとキツイ…。」

ラウラの指摘に一夏がダメージを受ける。

結局、一夏はみんなの言うあれが、何物なのか知らずに午後の授業を迎えるのだった。

「よし。全員揃っているな。」

午前と同じように、千冬の前に並ぶ専用機持ち。

午前との違いは周りの生徒達が見学の体勢を整えている位か。

「織斑先生、午後はどのような内容で？」

セシリアが手を上げ、質問する。

「ああ、午後は比較試験だ。」

千冬が質問に答える。

「比較？ISなんかと比べるまでもないんじゃない？」

比較と言われ、ISとの比較だと思った一夏が口を開く。

「馬鹿者、そんなものは小学生でもわかる。」

一夏を睨みながら答える。

「じゃあ、やっぱり…。」

「そうだ。山田先生。」

「は〜い。皆さん！お願いしま〜す！」

真耶が声を上げると、グラウンドに2台のトレーラーが入って来た。

その側面にはGEARのロゴが入っている。

「えっ!? GEARっ!?」

全く状況の読めない一夏は驚きの声を上げる。

そのままトレーラーが止まると、背部のハッチが開き、中から2体ずつ、計4体のGEOSが出てきて並ぶ。

4体の色は、白を基調とし、各所に赤、青、緑、黒のラインが入っている。

外見的特徴としては、電童や初期型GEOSの両腕、両脚に付いていたドライブユニットが無い事だ。

「お前達には、このGEOSと模擬戦を行ってもらおう。」

「ええっ!? 色が違う電童!?!」

千冬が一夏の頭にファイルを叩きつける。

バシンツと良い音が響き渡る。

「電童ではなく、GEOSだ。しっかりとニュースを見ていれば知ってるはずだぞ。」

千冬 of 言葉を聞き、一夏はゆっくりと他の専用機持ちの方を見る。すると全員が頷いていた。

「私達、ヨーロッパ組は合同演習の際に実物を見ておりますし。」

「前々から噂は流れてたしね。」

「ネットニュースにものってたよ。」

セシリア、鈴、簪が一夏に答える。

「ま、マジでか…。」

「お前達、いつまであつちを待たせるつもりだ?」

千冬が準備を促し、全員がGEOSに向かう。

「あれのどれか1体は星夜って訳よね。」

「恐らくね…。」

EOSを着けながら、鈴と簪が呟く。

「なあ、なんだよあれ? 量産型の電童か?」

「あれはGEOS、GEARで作ったEOSだよ。」

「じゃあ、あれもコイツ位重いのか？」

「それを知るための比較試験だろう。」

一夏、シャルロット、箒も話ながら準備をする。

「数はこちらが有利ですが…。」

「全員、油断するなよ。」

セシリアとラウラが注意をしながら、並び準備が整う。

「では！これより比較試験とし、EOS対GEOSの模擬戦を始める
！」

千冬の合図に合わせ、全員が同時に動き出す。

「確実に数を減らすっ！」

一番最初に動いたのはラウラだった。

盾を構え、GEOSに向かってサブマシンガンを乱射する。

「かすりもしないか！」

しかし、GEOSは即座に散開、回避する。

「は、早え!?!」

一夏も同じように撃とうとするが、動きが追えず、狙いがつけられない。

「判断が遅い！」

赤のラインが入ったGEOSが手に持ったサブマシンガンで一夏をあつという間にペイントまみれにする。

「先ずはひとつ…。」

「そこですわ！」

一夏を撃つた隙を狙い、セシリアはサブマシンガンを放つが、後ろに飛び回避される。

「くっ！あんなに軽く動けるとは！」

「狙いは悪くない、だが…。」

冷静に狙いをつけたGEOSはセシリアを撃つ。

「まだですわっ！」

セシリアは盾を使い、ペイント弾を防ぐ。

その間にGEOSは急接近し、盾を弾く。

「なっ!?!」

「終わりだな。」

盾を弾かれ、無防備になったセシリアにペイント弾が放たれた。

――
緑のラインが入ったGEOSを狙う鈴と箒。

「行くわよっ!箒!」

「良いだろう、鈴!行くぞ!」

2人はサブマシンガンで弾幕を張りながら距離をつめる。

相手のGEOSは銃を持ってないらしく避けるだけだ。

敵の目の前で左右に別れる。

「このっ!!」

「喰らえっ!」

GEOSを挟みうちの形で格闘戦を仕掛ける2人。

鈴の放つパンチをくぐり、背後に回るGEOS。

そのまま思いつき蹴りを入れ、鈴は箒に向かって倒れる。

「えっ!?!ちよっ!?!まっ!?!」

「何だとっ!?!」

何とか鈴を支える箒。

当然、その隙を逃すGEOSではなかった。

足払いでまとめて倒されるのであった。

「よし、一丁上がり!」

GEOSはその言葉と共に、左の拳を右の手に打ち付けるような動きをする。
それは星夜が試合後によくやる締め動きと同じだった。

――
青のラインが入ったGEOSは箒、シャルロットの2人と向き合う。

「狙いは...」

「つけさせない!」

シャルロットと箒はそれぞれ、左右に別れてサブマシンガンを乱射する。

GEOSは細かく動き回り、ペイント弾を避ける。

「くっ、よく動くー！」

「本当に電童を相手にしてるみたい！」

2人とも普段から射撃を得意としてるだけに、中々当たらない事に驚く。

「そろそろ……こっちから仕掛けるよー！」

GEOSのパイロットがそう言い放つと同時に、少しの助走で上に跳ぶ。

「えっ!?!」

いくらパワーアシストがあるとは言え、GEOSは軽々と5m程の高さに舞い上がる。

「そーー！」

「きゃああっ!?!」

「うわあっ!?!」

そのまま2人に上からサブマシンガンを放つ。

跳びながらの為、狙いがついてないが牽制としては十分だった。

着地したGEOSは、マガジンに残った弾を簪に向かって放つ。

簪は防ぐことが出来ず、ペイント弾を浴びた。

「こっこのおっー！」

「ふっー！」

シャルロットは脚部のランドローラーを使い後退しながらサブマシンガンを放つ。

GEOSはペイント弾を避けながら追跡する。

流石に純粋な走りとランドローラーの速度差では追い付く事が出来ない。

GEOSはサブマシンガンのマガジンを取り替え、構えるが、撃つことなくしまう。

相手の行動に違和感を感じながらも、シャルロットは次の手を考える。

「おいっーデュノア！止まれ！」

「えっ!?!」

突然の千冬の言葉に驚くシャルロット。

驚きながらもしつかりと止まることが出来たのは日頃の訓練の賜物だろう。

「相手と距離を取るのには良いが、しつかりと周りを把握しろ。背後が壁ならお前は衝突していたぞ。」

千冬にそう言われ振り向くシャルロット。

背後には見学の生徒達が居た。

「じゃあ、さつきGEOSが撃たなかったのは…。」

「他の生徒に当たる可能性があったからだ。デュノア、以後気をつけるように。」

「はい…。」

シャルロットはそのまま撃墜扱いとなった。

ラウラは黒のラインが入ったGEOSに狙いを絞る。

「その動き…星夜だな！」

「よくわかったな。」

散開する瞬間の動きでパイロットを見切ったラウラ。

相手の足元を狙い、トリガーを引く。

「行くぞ！」

「来い！」

ラウラはトリガーを引きつつ、足のランドローラーを使い、ジグザグ走行でGEOSに接近する。

対するGEOSはペイント弾を避けつつ、ラウラに接近する。

「はあっ！」

ラウラは残り3mを切ったところで、弾倉が空になったサブマシンガンを投げつけ、そのまま殴りかかる。

「ふっ！」

GEOSは顔に向かって来るサブマシンガンをギリギリで避け、突き出された腕を受け流す。

懐に入ったGEOSは下段の蹴りを繰り返し、ラウラの体勢を崩させる。

「ぐはっ！」

「よしーそこまでー！」

ラウラが倒れると同時に千冬の声が響き渡る。

模擬戦の後、各性能差を調べる名目で色々な試験をやった。

綱引き、徒競走、腕相撲等の簡単な物だ。

授業中はGEOSとEOSを対面させる形で立ってたから一夏達と話はほぼしてない。

そもそも織斑先生の授業で私語なんて話したら、GEOS越してもダメージが残りそうだ。

「今日の授業はここまで、実習レポートの提出期限は3日だ。しっかりとやるように。」

織斑先生が全体に声をかけ、授業は終了。

一夏達がEOSを片付けるなか、俺達GEAR関係者はEOSの片付けを始める。

「よし、GEOSはトレーラーに載せておいて。」
「了解です。」

スタッフの指示に従い、トレーラー内のある専用ハンガーにGEOSを固定し、解除する。

「ふう、スバルもお疲れさん。」

「ああ、お疲れ。」

同じトレーラー内のスバルに声をかける。

因みに、残りのGEOSは銀河と北斗が使っていた。

「この後は、会議室でミーティングか。」

「そうだな。」

トレーラーはグラウンドから移動し、駐車場へ。

そこでトレーラーから降りて、俺、スバル、銀河、北斗の4人は会議室に向かう。

「よし、そろったな。ミーティングを始める。」

俺達が会議室にきて、少ししたら織斑先生が入ってきて直ぐにミーティングが始まる。

今日の内容に対する、それぞれの感想などを述べていく。

「ふむ、こんなところか。」

一通り聞き終えた織斑先生。

手元のノートを閉じる。

「さて、本題に移ろうか。」

ん？本題？

「織斑先生、本題とは？」

「天野には知らされてない事で、その3人に関係する物だ。」

織斑先生がスバル、銀河、北斗を見ながら続ける。

「GEOSやEOSをIS学園で運用するに当り、入学時から整備技術科の生徒募集、そしてその中には男子生徒の募集も検討されている。」

「まさか……！」

「そうだ、その試験生として彼らを1組に入れる。」

俺が横に座る3人を見ると、頷いた。

「なかなか出来る体験じゃないよな。」

「今すぐって訳じゃないけど、近いうちにね。」

「僕はGEOSの初期開発から関わっているから、役に立てるだろうしな。」

銀河、北斗、スバルがそれぞれ口にする。

「今日はいないが、あとエリス・ウィラメットを含む4名が来月から本格的に入ってくる予定だ。」

「エリスまで……。」

自分の知らないところで色々と進んでいたようだ。

「最近は女性権利団体が幅をきかせ、男性を見下した女性が多くなっている。このIS学園の卒業生は特にそれが顕著だからな。それを早期に修正するため、学園を共学にする目的もある。」

「な、なるほど……。」

「しかし、試験生と言うのは表向きだ。」

「表向き……?と言うことは……。」

織斑先生の目が鋭くなる。

「そう。ここ最近頻発している亡国機業などの対応策の1つだ。非公式ではあるが、この3名は専用のGEOSを所持し、その即応性は専用機持ちに近い。」

「戦闘能力もデータウエポンを使えば第二世代機に勝てなくはないですしね。」

「そう言う事だ。今後、何かあれば天野、お前が中心になって動け。」なるほど、わかりました。」

「正式な発表は明日になる。あまり騒ぎ立てないようにな。」

「はい。」

「よろしい。今日はここまでだ。各々、準備はしっかりしておけよ。」

このまま軽く今後の予定を確認して、解散となった。

翌日、急遽全校集会が開かれ、織斑先生から共学化等に関して発表された。

いきなりの事で皆驚いていたが、1組のみんなは意外と受け入れる感じだった。

「なあ、星夜が昨日1日居なかったのは…。」

「GEOSはGEARの物だからな。そうもなるさ。」

「ねえ、星夜はどんな人が来るか知ってるの?」

「シャル、悪いがそれは俺からは言えないんだよ。」

「まあ、そうだよねえ。」

そんな発表がされれば知っている俺に質問が集中するのも無理はない。

専用機持ちだけではなく、クラス全員が俺を囲んでいた。

「とりあえず、今回の件に関しては俺も少し聞いただけだし、答えられないから席に戻ってくれ。」

とは言え、流石に答える訳にもいかないので、こうしか言えないが。

「ちっ! やっぱ無理か。」

「どんな人が来るんだろ…。」

「かっこいい人だといいなあ。」

クラスの皆が色々と言いながら席に戻って行く。

「皆さん、おはようございます。」

タイミング良く山田先生が教室に入ってくる。

「朝から驚いてると思いますが、授業を始めますよー。」
今日もいつも通り授業が始まった。

第63話 《編入生》

IS学園の共学化等の話があつてから数日たった日曜日。

俺―天野星夜―はIS学園にある駅に居た。

目的は今日から寮に入る銀河、北斗、スバル、エリスを迎える為だ。

「さて…そろそろだな。」

時刻表通りに運行しているので、ホームにそろそろ到着するはずだ。

「おーい、星夜。何してるんだ？」

「誰かの出迎えか？」

「おはよう、2人さん、篝さんの言う通り出迎えだよ。」

腕時計で時間を見ていたら、一夏と篝さんが声をかけてきた。

「そう言う2人はどこかに行くのか？」

「いや、ただの散歩だよ。天気がいいからな。そしたら篝と会つてさ。」

「まあ、そ、そんなところだ。」

2人を見れば軽装だし、出かけるって感じでもないな。

「星夜が待つてるって事は…まさか！新しく来る男子生徒か!？」

「GEARが選出したGEOSのパイロットか…興味はあるな。」

「当り、寮には今日から入るんでな、案内役を織斑先生に頼まれてるんだ。」

前から男子が増える事に喜んでた一夏は、楽しそうに笑う。

純粹にどんな人物か気になるのか、篝さんも駅の方に顔を向ける。

「星夜、俺も一緒にいいか？」

「ああ、別にいいぞ。予定とか大丈夫か？」

「おう！特に予定も無かったしな。」

「同じクラスで過ごすのだ。挨拶をしておかねば。」

「お、ちょうど来たな。」

大きめの旅行鞆を持った4人が目に入り、手を振る。

「おっ！星夜―！来たぜー！」

「銀河は相変わらずだな。」

1番に声を上げるのは相変わらず元気な銀河。

「あく荷物が重いく…星夜、少し持って…。」

「エリスはそんなにいっぱい何を持ってきたんだ？」

一際大きな荷物を持っているエリスが俺に荷物を持たせようとする。

「おはよう。星夜、案内よろしくね。」

「おはよう。北斗。」

横で騒ぐ2人を軽くスルーしながら挨拶をする北斗、何だかんだでこの流れも久しぶりだな。

「その2人は…一夏と箒だったな。これからよろしく。」

「そうそう。一夏と箒さんね。」

「お、おお！よろしくな。」

「よろしく。」

スバルは俺の隣に居た一夏と箒さんに挨拶していた。

「じゃ、まずは荷物置くから寮に行くよー。そのあと織斑先生に挨拶して施設の案内な。」

「オツケー！」

俺と一夏、箒さんに続くように4人が荷物を持ってついてくる。

「来年度までには男子寮も出来るらしいけど、今はまだ女子寮の一角な。」

「銀河、変な騒動起こさないですよ？」

「なんで俺だけなんだよ!?エリス！」

俺の説明を聞き、エリスが銀河をジト目で見ながら注意する。

当然、銀河は反論する。

「星夜はここにもう半年居て問題無いし、北斗やスバルが変なことするわけないでしょ？だからあんたに言ったのよ。」

「なんだと!？」

「ほら、2人共、静かにする。」

北斗がすぐ間に入って、喧嘩になりそうな2人を止める。

「星夜、部屋割りはどうなるんだ？」

「えつと…3人が同じ部屋でエリスは本音さんと同室だな。」
いつも通りな3人は置いておいて、スバルが部屋割りの確認をする。

「え、俺達一緒なのか？」

「ああ、少し大きめの部屋を用意したそうだから、余裕はあるだろ。」

「ふむ、なら銀河の遅刻、宿題忘れは防げるな。」

「折角部屋が一緒なんだ。有効に使わないとね。」

「げげえ。マジかよ…。」

銀河ががつくりと肩を落とす。

「私と一緒にの本音ってどんな娘？」

「のほほんさんか、のんびりしてるぞ。」

「一夏がそれでは伝わらないぞ。独特の雰囲気を持つてるのは確かだが。」

同室の本音さんが気になるエリス。

一夏が説明にならない説明をして、箒さんが呆れる。

「えつと…夏のプールの時にも居たんだが…直接は会ってないか…。」

「あ、そうなんだ。ギャラリーに居たってことね。」

「そうそう。今頃部屋の掃除をしてるんじゃないかな？」

話をしながら部屋を目指し歩く。

部屋の鍵は織斑先生から受け取っているの、それぞれに渡す。

「エリス、ここがエリスと本音さんの部屋。男子部屋はもう少し先な。」

「ここね。ありがとう。荷物おいて挨拶して来るわね。」

「あ、箒さん一緒に居て貰っていい？」

「ん？ああ、わかった。」

女子寮の部屋の構造は基本的に一緒だから、箒さんも居ればスムーズに進むはずだ。

「じゃ、後でね。」

「本音、入るぞ。」

2人がドアをノックして、入っていくのを見届け俺達も3人の部屋へいく。

「ここだ。あつちに俺の部屋がある。」

「よっし！ここだ！」

「なるほど、確かに広めだな。」

「流石はIS学園、設備もしっかりしてるね。」

「ほお、他の部屋の2倍位ないか？ここ。」

部屋に入るなり、ベットに飛び込む銀河、スバルと北斗は部屋を見直し、設備の確認をする。

一夏も部屋を見て感想を述べる。

「大きめの荷物はもう運び込んであるから、後で整理してくれ、織斑先生に挨拶行くぞ。」

「オツケー！」

銀河が元気良く返事をし、飛び上がる。

「ここ、寮だから騒ぐなよ。」

「騒がねえよ。」

「銀河、今の飛び上がりはダメだよ。」

「ま、マジか!？」

「その音量もアウトだ。」

今までにない環境で、はしやく銀河を北斗とスバルがたしなめる。

部屋を一旦出て、エリス、箒さん、本音さんも合流。

織斑先生の元へ向かう。

寮の談話室、大きめな机に織斑先生と銀河達4人、隣の机に俺や一夏達が座る。

「今日からお世話になります。」

「よろしくお願ひします。」

「ああ、よろしく頼む。すでに資料を読んでいると思うが、一応確認するぞ。」

織斑先生が寮やIS学園で生活していく際の注意事項の中でも基本かつ、重要な項目を4人に確認していく。

「よし、生活の部分は問題無さそうだな。授業の方はどうだ？ついていけそうか？」

「はい、前もって貰った問題集や資料は一通り目を通しました。」
「なんとか、ついていけると思います。」

「男子は女子と違ってＩＳ関連に触れる機会が少ない。必要なら放課後に特別授業を行う事も視野にいれている。解らないときは聞くようにな。」

織斑先生が授業に関して質問すると、銀河が思いつきり蒼くなるが、何とか勉強はしてきてるようだ。

流石に特別処置で入っている以上、テストで悪い点は取れないだろうし。

「天野は元々顔馴染みで大丈夫だろうが、織斑、お前も一応は先輩なんだ。しっかりと見本になれるようになる？」

「わかってるって千冬姉。」

「織斑先生だ。」

「す、すみません。」

距離があるため叩かれずにすんだが、しっかりと睨まれる一夏。

「私からの話は以上だ。後は学園内を見て回るのか？」

「はい、そのつもりです。」

「少しでも早く慣れないといけませんし。」

「そうか、何かあれば私か山田先生を呼べ。」

「ありがとうございます。」

織斑先生が立ち上がり、皆も立ち上がる。

「織斑先生、これを。」

「ん？これは？」

「兄さんからです。」

「わかった。ありがとう。」

スバルが懐から小包を出して渡す。

それを受けとると、織斑先生はそのまま寮の部屋に向かって行った。

「スバル、今のは？」

「知らん、兄さんから織斑千冬に渡せと言われただけだ。」

軽く質問するが、知らないようだ。

「色々あるんだろう。」

「そうだな。さて、どこから見るかな。」

気持ちを切り替えて、皆に施設の案内をしなければ。

「腹減った。飯にしようぜー！」

「全く銀河は…。」

「相変わらずだな。」

「じゃあ、食堂だな。」

「こつちだ。」

何だかんだでいい時間なので、食堂へ向かう俺達。

IS学園の食堂は味、質、量、メニューの多さ、全てにおいていいので皆満足したようだ。

昼飯を食べて、休憩後IS学園の案内をする。

教室、グラウンド、アリーナなどがどんな時に使うか等も含め説明したりした。

途中でクラスメイト達に会い、質問責めにあつたがそれ以外は特に大きな問題もなく案内は終わった。

「まあ、こんなところか。」

「気を付けなきや行けないのはトイレだ。男性用は少ないからな、どこにあるかしつかり覚えとかないとヤバイぞ。」

一夏がトイレに関して力説していた。

まあ、気持ちはわからなくもない。

学園全体が広い上に最低限の箇所しかないからな。

「マジか、気を付けねえとな。」

「それ、せめて私達が居ないときに話なさいよ。」

真剣に危機感を感じている銀河、そこにエリスが冷ややかに突っ込みを入れる。

「んー、いい景色だね。」

「ああ、夕焼けがきれいだ。」

今は学園に何か所がある広場に居る。

海岸側のため海が一望できるので今ののように夕方はいい色に染

まった海が見える。

「皆、これからよろしくな。」

「おう！よろしくな！」

「うん、よろしく。」

「よろしく頼むわね。」

「よろしく。」

たった半年前まで同じメンバーで集まっていたのに、凄く久しぶりな感じがする。

きつと、この半年がそれだけ濃かったのだろう。

そんなことを考えてると、俺の携帯が鳴る。

「ん？相川さんから？なんだろ。」

さつき会ったクラスメイトの一人、相川さんからの電話だった。

クラスメイト全員の連絡先は知ってるので電話が来るは問題無いのだが。

不思議に思いながらも電話に出る。

「はい、天野で『天野くん！転入生の歓迎会やるから！すぐに寮のレクリエーション室ね！』……あ、はい。」

凄いい勢いで用件だけ言って通話は終わった。

「星夜？どうかしたのか？」

「何か問題か？」

余りの勢いに俺が軽くフリーズしていたため、一夏と箒さんが心配そうに聞いてくる。

「あ、ごめん。大丈夫だ。それより皆、これから寮のレクリエーション室に行くぞ。」

「え？」

「なんで？」

「お楽しみだ。」

あえて説明せずに皆を連れて移動する。

「では！1年1組の新メンバーに！」

／『カンパニー!!』／

急遽決まり、始まった歓迎会。

俺が案内してる内に準備したとは思えない程の量の料理があった。折角の機会なので、転入生である銀河達はそれぞれバラけてテーブルに居る。

「相変わらずクラス所か学年すら合わない人が居ますね。」

「まあまあ、細かい事は気にしないの。」

「こんなお祭り騒ぎ、楯無先輩や黛先輩が見逃すはずもなく、普通に紛れ込んでいた。」

当然、鈴や簪さんも居る。

「で、楯無先輩は何故こっちに？」

「ん〜？特に意味は無いわよ？ただ新しく来た人物を良く知る子に話を聞きたいだけだから。」

「この前一夏の誕生日パーティーで会ってますよね？」

「そうね、あの時はここに来るなんて知らなかったから。」

「まあいいですけど、どこから話せば？」

「そんなに身構えなくていいわよ。星夜くんから見た評価が聞きたいだけよ。」

「そうですねー」

楯無先輩にそれぞれの話をしていく、一通り聞くと満足したのか、いつもの扇子を取り出し。

「ありがとう、後は直接話してくるわ。」

広げた扇子には『協力感謝』の文字が書かれていた。

「半年たったけど、あれは未だに解らないな…ん？」

エリスの方へ行く楯無先輩を見送ると、少し離れたところで座るラウラが目に残った。

「ラウラ、疲れたのか？」

「ん？星夜か、まあ少し…な。」

ふう、と一息つくラウラ。

「元々こういう事には無縁だったからな。気疲れしてるのかもな。」

「勢いあるからなあ。皆騒ぐの好きみたいだし。」

「私は大丈夫だ。友人達の所に行ったらどうだ？」

「もし、体調が悪いんなら早めに言うんだぞ。」
なんとなく1人になりたそうに感じたので、ラウラの言う通りに皆の方へ向かう。

「私は…。」

何かラウラが呟いていたようだが、周りの喧騒で良く聞こえなかった。

正式に4人が転入してきて数日、平日だが俺はGEAR本社に来ていた。

電童、データウエポンの受け渡しだ。

同時にいくつかの確認事項があるそうだ。

「やあ、星夜くん。わざわざありがとうございます。」

「井上さんも修理ありがとうございます。」

待機状態の電童を受けとり、腕に着ける。

何だかんだで貰ってから数日間手放したのは初めてで、以外と心細かったな。

「これからも、頼むぞ電童。」

ついそんな言葉がでた。

「一度、展開してくれるかな？一応の確認をかねてね。」

「はい。」

すぐに電童を展開する。

そのまま、軽くストレッチのように体全体を動かす。

「どうかな？」

「はい、特に問題は無さそうです。」

「じゃ、この後は地下の方でデータウエポン達を一通り試して貰っていいかな？」

「はい。わかりました。」

一度、電童を解除して、地下のアリーナに移動。

データウエポン達と久しぶりに会う。

「皆、おかえり。」

俺の一言に反応し、全員が電童に入ってくる。

「早速やりますか?」

「うん、頼むよ。」

俺は井上さんに言われた通り、データウエポンを出しては装備し、試験していった。

――
IS学園、午前の授業が終わり、昼休みになろうとしていた。

「はく。疲れた…。」

「もう、銀河。だらしないわよ。」

「僕は銀河の気持ちもわかるかな。」

「ああ、今までやって来た授業よりも内容が濃いからな。それに周りからの目も気になるしな。」

教室の机でダルそうにする銀河。

それを囲む3人の友人。

IS学園に来てまだ日の浅い銀河、北斗、エリス、スバルの4人は星夜を加えた5人で行動することが多かった。

元々専用機持ち達には今現在、2人以上での行動が義務付けられている。

そして、GEARを通してここに来る事になった4人は当然、星夜と行動を共にしている。

しかし、今日は星夜がGEARに出向いている為、4人だった。

「星夜は今日の夜まで居ないんだっけ?」

「そうだ。本社の方で受け渡しと各種確認があるからな。」

「丁度いいんじゃない?」

「何がだよ?エリス。」

エリスの言葉に銀河が疑問を投げ掛ける。

「ここに来てそれなりにたったし、色んな人たちに話を聞いたりするチャンスじゃない。」

「聞くなって何を?」

「そんなの決まってるじゃない…。」

エリスはすつと椅子から立ちあがり。

「星夜の色恋沙汰よ!」

「なんじゃそりゃ!?!」

「あはは…。」

「女子は本当にそう言う話が好きだな。」

力を入れるエリスを見て呆れる3人。

「だって気になるじゃない! 星夜はここに半年も居たのよ!?! 彼女位居たって不思議じゃー」

エリスが熱弁していると、突然灯りが消えた。

教室だけではなく、廊下、電子掲示板、全てが消えた。

まだ昼なので窓からの日光が周りを照らす。

「なっなにっ!?!」

「おいっ! あれっ!」

エリスが驚くと同時に銀河が窓を指差す。

窓はガシャガシャと音を立て、防壁が閉じていく。

「防壁シャッター!?!」

「何故閉じる!?!」

全ての防壁が作動し終わり、内部は真っ暗になる。

ざわざわと騒ぐなか、何人かの生徒は携帯の灯りで照らし出す。

「なぜだ、ここに通常用の電源とは別の緊急電源があるはずなのに…。」

「それどころか非常灯すらついてないわよ。」

異常事態に身構えていると、それぞれが持つ「Gーコマンダー」に通信が入る。

『G班、聞こえてるか? これからマップを転送する。オペレーションルームへ集合せよ。隔壁に遮られた場合は破壊を許可する。』

千冬の静かだが強い声。

IS学園に何かしらの問題が発生したのは明らかだった。

「行くぞ。」

「ああ。」

「うん。」

「ええ。」

スバルを先頭に指示されたルートで4人は急ぐ。

「全員揃ったな。状況説明を始める。」

IS学園の地下にある、オペレーションルーム。

地下特別区画にあるこの部屋は生徒は当然ながら、教師の中でも一部の者しか知ることの無い場所。

今は現在学園に居る専用機持ち7人と特別編入生4人が集められていた。

箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪、楯無が並び、正面に立つ千冬と真耶を見る。

スバル、銀河、北斗、エリスはその箒達から見た右側に並び説明を聞いていた。

「今現在、IS学園は外部からのハッキングにより、各機能が停止している。」

ここは他の施設と独立した電源設備を持つてるのか、正面にある旧式のディスプレイに各情報が表示され、灯りが灯っている。

「こんな施設があつたなんてね…。」

「ええ。一体何の為に…。」

鈴とセシリアが周りを見ながら、ひそひそと小声で話す。

「鳳！オルコット！状況説明の途中だぞ！静かにしろ！」

「はっはいっ！」

「申し訳ありません！」

千冬の怒号で鈴とセシリアは静かになり、背筋を伸ばし直立状態になる。

「現在、IS学園で全てのシステムが強制的に停止させられています。これは何らかの電子的攻撃、つまりハッキングを受けていると断定します。」

千冬の隣で話す真耶の声も、いつもより堅さがある。

「今現在、生徒に被害はありません。防壁で閉じ込められて居ますが、あくまでも建物外に出れないだけのようです。」

だから、トイレも行けますよ。と付け足したが誰も笑わなかった。「質問がある方は居ますか？」

「はい。」

ラウラが挙手する。現役軍人として、有事の際の落ち着きが一番だ。

「IS学園は独立したシステムで運用されているはずですが、それが外部からのハッキングを受けるなど、あり得るのでしょうか？」

「そ、それは…。」

真耶が返答に困っていると、千冬が口を開く。

「手段は問題ではない。今、攻撃を受けている事実の問題だ。」

「敵の目的は？」

「それがわかれば苦労はしない。」

ラウラは納得し、質問を終える。

「では、これから敵のハッキング対し、反抗作戦を行います。」

真耶が作戦内容の説明を始める。

「篠ノ之さん、オルコットさん、ボーデヴィツヒさん、デユノアさん、鳳さん、以上5名はISコア・ネットワーク経由で電腦ダイブをして頂きます。更識簪さんはバックアップを担当してください。」

真耶が作戦を伝える…がそれに対する専用機持ちの反応は少なかつた。

「あれ？皆さんどうかしましたか？」

／『『電腦ダイブ!』』／

「はい。理論上可能な事は知ってますよね？ISを使い電腦世界へ仮想可視化しての進入が出来る。実際にはアラスカ条約で規制されるので行う事はありませんが、今回は特例になります。」

「そ、そう言うことを聞いてるんじゃないかって！」

鈴をはじめとした、専用機持ち達が電腦ダイブに対する必要性を教師陣に聞いている横で、銀河は隣に居るスバルに話しかける。

「なあ、オレ達って必要？」

「必要だから呼ばれたんだ。順番だ。」

「星夜が戻ってくる前に解決したいね。」

「静かに待ちなさいよ。」

専用機持ち達も納得したらしく、千冬がパンツと手を叩く。

「よし！それでは電腦ダイブを始めるため、各自はアクセスルームへ移動しろ。」

その言葉を受け、専用機持ち達がオペレーションルームを出て、アクセスルームへ向かう。

「さて、お前達には別の任務を与える。」

千冬が残った楯無、スバル、銀河、北斗、エリスを見る。

「何なりと。」

「任せてください。」

「何をすればいいんだ？」

楯無はいつものおちゃらけた感じは無く、静かに返事をする。

スバル達も同様に静かに真っ直ぐ千冬を見る。

「この混乱に乗じて、システムダウンさせた勢力とは別の敵が学園にやってくるだろう。」

「防衛ですね？」

「ああ、今のあいづらは戦えない。悪いが、頼らせてもらう。」

「任されました。」

「その為の僕達、ですよね。」

「初めてだけど、やりますよ。」

楯無につられるように北斗やエリスも笑って返す。

「では、更識楯無は自己判断で、お前達は山田先生の指示で動け。」

楯無はお辞儀をして、オペレーションルームを出ていく。

真耶も準備の為、スバル達と一緒に部屋を出た。

部屋のドアが閉まった後、千冬は机に手を思いきり叩きつけながら呟いた。

「私達はなにを…守るべき生徒達に……。」

しかし、千冬の後悔とも懺悔とも取れる考えはすぐに終わる。

「私がするのはこんなことでは無いな……。」

千冬はすぐに準備に取りかかった。

第64話 《GEOS対IS》

GEAR本社の地下アリーナで、俺―天野星夜―は電童とデータウエポンのテストを行っていた。

「イリキュジョンフラッシュ！」

バイパーの力で分身し、フィールドに散らばったターゲットを一気に破壊する。

『シミュレーションパターン12、クリア。』

アリーナ内に形成されていたホログラムのターゲット達の欠片が消える。

『星夜くん、一度休憩にしよう。』

「わかりました。」

開いたゲートをくぐり、電童を解除する。

「ふう。データウエポンの調子も良さそうだ。」

待機状態の電童を見て呟く。

そこにベガさんがやって来た。

「お疲れ様。調子は良さそうね。」

差し出されたドリンクを受けとる。

「ありがとうございます。」

「スバルはどう？ちゃんとやってる？」

「大丈夫ですよ。しっかりとクラスの皆に馴染んでいますし。」

何だかんだで弟の事が気になるようだ。

「良かった。あの子、兄さんに似てぶつきらぼうな所があるから。」

「そんな所が『クール系！嫌いじゃないわ！』とか言われてるんで大丈夫ですよ。」

「ふふつ大丈夫そうね。何かあれば、私たちに相談してくれてもいいからね？」

「はい、その時はお願いします。」

そんな話をしていると休憩も終わり、テストが再開された。

真耶と共に迎撃の準備を進める銀河達、エリス以外の4人はそれぞれ機体を展開する。

「ウイラメットさんののはGEOSとは違うんですね？」

「はい、私のは情報処理特化の〈GOVERNOR（ガバナー）〉です。戦闘能力はありませんがGEOSを補佐して、よりISに近い運用が出来るようになります。」

周囲に仮想ディスプレイを展開しながらエリスが答える。

「わかりました。ウイラメットさんはこの部屋で皆さんへの指示等をお願いします。」

「了解です。」

「で、俺達は敵の注意を引けばいいんだよね？」

「はい、指定ポイントに誘導してくればそれで勝ちです。」

「敵の増援が来ない内に片付けよう。」

「数ではこっちが勝ってるんだから、落ち着いてやれば大丈夫だよ。」

「草薙さんの言う通りですが、もしも危険だと思ったら迷わず引いて下さい。あなた達も大切な生徒なのですから。」

真耶は銀河、北斗、スバルを見ながらしつかりと口にする。

「大丈夫だって、逃げ足ならそこそこ自信あるし。」

「兄さんや姉さんにも同じことを言われてます。」

「無茶はしませんよ。安心してください。」

3人はしつかりと頷き、部屋を後にする。

「皆……。」

「ウイラメットさん、こっちも準備を終わらせましょう。」

「はい！」

真耶とエリスは準備を急いぐ。

「……………」

ぎゅっと、ブーツのベルトを締める。

強化スーツの状態を確認して、近くに置いてある、IS用のブレードを改良した刀を左右3本、合計6本太股のホルスターに取り付ける。

「この髪型も久しぶりだな。」

紐で髪を纏め、ポニーテールにする。

「このお守り、使わずに終わればいいが…。」

先日、スバルを通してアルテアから渡された物を懐に入れ、両手に刀を持つ。

「さて、行くか…。」

千冬は部屋を出る。

楯無は灯りの消えた通路を一人歩く。

「さて、避難は済んだみたいだし、後は…。」

独り言を喋りながらパツと扇子を開く、そこには《熱烈歓迎!》と書かれている。

と言っても歓迎方法は主に拳なのだが。

『E3、反応6。』

端末から無機質な報告がくる。

更識家が学園内に独自に設置した、完全独立型のセンサーの物だ。

端末の画面に表示される映像には、最新装備を身に纏った敵が6名写し出されていた。

(システムダウンから突入までの時間が短すぎる。―やっぱり常時監視されてる訳ね…。)

IS学園は多くの女子が居る所だ。そんなところを24時間監視とは、気持ちの良いものでは無い。

「……。」

楯無は正面を見据える。

そこには何も見えないが、『何か居る。』

次の瞬間、パシユツと小さな音と共に楯無に数発の弾丸が迫る。

「その程度じゃあ、私には届かないわよ?」

弾丸は空中で何かに捕まれたように止まった。

「これが私流のAICよー。」

右腕のみを部分展開したミステリアス・レイデイが空気中の水を制御し、弾丸を止める。

「さあ！反撃よ！」

楯無が指を鳴らすと廊下が爆発した。

正しくは廊下に散布されていたアクアナノマシンだ。

敵は完全に動揺している。

「まるで弱いものイジメよねえ……完全に私が悪役じゃない？」

だが、あくまでも楯無はIS学園の生徒で、相手は不法侵入者、大義名分はこちらにある。

「少しは正義の味方っぽくしますか！」

そう言うと同時に楯無が5人に増える。ランスを持った楯無がそれぞれ構える。

／『水流戦隊！楯無ファイブ！』／

アクアナノマシンの力を使い、水人形やレンズに映し出された幻。

敵は迷わずに弾を放つが、実体を持たないそれらに効果は無い。

「どっかーん！」

「ぐわああああつ！」

「ひいいいっ！はっ班長!!」

他のエリアから来た敵の増援も、まとめて相手にするが、楯無の一方的な展開は変わらなかった。

「ひ、退け！退くんだ！」

様々な訓練を受けていたであろう兵士も、ISをもつてすればこの程度なのだ。

相手を容赦なく攻め立てる楯無の姿はまるで悪役のようだった。

「ここがアクセスルーム？」

「まさかこれ程の施設があるとは……。」

「一体何の為に……。」

アクセスルームに入った筈達は、部屋に置かれた様々な機材を見ながら呟く。

「さっきのオペレーションルームも謎だよな。スツゴイ耐久構造だったし。」

「シャルロット…あんたまさかスキャンしたの？」

こっそり機体を起動させていたシャルロットが、秘密だよ？と人差し指を唇に立てる。

「じゃあ、皆はこの椅子に座って待ってて。私は準備するから。」

簪に促されて、全員がベッドチェアに座る。

「解らないと言えば、彼らも…だな。」

「ああ、GEARからの推薦とは言え、この間まで一般の学生だったのだから？」

簪が呟いた一言にラウラが反応する。

「ええ、そうですわね。」

「普通に考えて、この状況で何が出来るのよ？」

「織斑先生が呼んだって事は大丈夫なんだろうけど…。」

全員で話していると、簪が準備を終え、声をかける。

「皆、準備出来たからISをソフトウェア優先処理モードで起動して。」

「あ…前に星夜が見てたアニメで電腦世界に入るって言うのがあったけど、そんな感じになるのかな？」

ふと、シャルロットがワクワクした様子で語り、他のメンバーがぼかんとしている。

「あ…確かに…。」

「そんな感じ…かも？」

鈴と簪がシャルロットの言うアニメの事を考え、肯定する。

「簪、準備は出来てるのだろうか？早くやろう。」

「ご、ごめんなさいっ！」

ラウラが簪を急かす、全員がベッドチェアにしつかりと座っている事を確認する。

「中は仮想空間で、データやプログラムを認識しやすい形に置き換えであるから、最初は驚くかも知れないけど落ち着いてね。」

「承知した。」

簪の注意に簪が答える。

「システム、接続開始。」

簪が端末を操作すると、5人の意識は吸い込まれるような、落ちる

ような不思議な感覚に包まれた。

「んん……こは？」

セシリアは目を開けると、周囲を見渡す。

そこは辺り一面が緑に包まれた草原のようだった。更に正面には大きな森が広がっている。

「成功したって事でいいのよね？」

横で倒れてた鈴も起き上がりながら、周りを見る。

そこにラウラ、箒、シャルロットも集まり、簪からの通信を待つ。

『皆……大丈夫？』

「ああ、全員大丈夫だ。指示を頼む。」

5人の前に少しノイズの混じった仮想ディスプレイが現れる。

そこから簪の声が聞こえ、ラウラが答える。

『今、その空間は皆が認識しやすい形として、森の見た目になってる。』

「うん。そうだね。」

『一本の木、それぞれが学園内の端末を表してる、一番大きな木が学園のメインターミナルだから、そこを指して。』

「ふむ、あれか。」

簪の話を聞き目の前に広がる森の中で、一際大きな木を見て箒が確認する。

『敵がどんな風に妨害してくるか解らないから、注意して。そこで大きな怪我をしたりすると起きれなくなるから。』

「了解！」

全員が返事と同時に目標に向かって走り出す。

「おい！誰かいるぞ！」

少し走ると、ラウラが遠くに人影を見つける。

『こつちでも確認した。気を付けて——』

簪の通信が途中で途絶える。

目の前の人物がジャミングをした、と全員が身構えながら囲む。

「貴様！何者だ!？」

「……」

「答えろ！」

相手はラウラと同じ綺麗な銀色の髪を持った女性だ。相手の女性は目を閉じたまま、ゆっくりと喋りだす。

「今、貴女方の相手をしている時間はありませんので。」

次の瞬間、全員の視界が光に包まれ、倒れた。

「幸せな夢を…。」

銀髪の女性は倒れた5人を無視して歩き出した。

IS学園の地下通路を進む影が一つ、それはアメリカで採用されているISフアング・クエイクと非常に似たシルエットを持つステルス試験機だ。

それを纏うは今回IS学園に侵入した特殊部隊の隊長。

ISのセンサーは地上施設で活動して居る部下達が、学園側のISと戦っている影響で発生している僅かな振動を感知していた。

(囿としての役割は果たしているな。)

全て計画通りに進んでいる。目標は先日IS学園を襲撃した無人機のデータの回収、可能なら現物の回収だ。

(さて、そろそろこちらにも来る頃だろう…。)

隊長は自分を迎撃する為、学園側が何かを用意してることは想定している。

そしてそれを肯定する様に、センサーに反応が現れる。

「ここから先は行かせねえよ！」

被っていたステルスマントを投げ捨てながら、1体の白いGEOSが飛び込んで来る。

「ふっ！」

「…。」

飛び込みながら放たれた拳を冷静に受け流す隊長。

観察すると、市販されているGEOSと違う箇所がいくつか確認される。

(高コスト故にオミットされたドライブユニットか、出力は高いだろうが、IS相手に無駄な事だ。)

1対1の状況でISに勝つ事は不可能、それが世の中の常識である。

だが、目の前のGEOSはそんな常識は知らんと言わんばかりに攻撃を続ける。

「どうおりゃー！」

「ふん…。」

声から判断すると、IS学園に入ったばかりの男子生徒だろう。

シールドエネルギーの無い、通常装甲ならISの拳一発で事足りる。そう考えながら隊長はGEOSの蹴りを避け、隙を見せた腹部に握り拳を放つ。

「一人じゃー！」

「無い！」

十字路の左右から同じ様にステルスマントで隠れていたGEOSが2体現れる。

紅いGEOSはライフルを持っており、腕を的確に狙い撃ち、GEOSに迫っていた拳を弾いた。

青いGEOSは飛び蹴りを入れて、隊長の体制を崩させる。

「1体も3体も同じだ。」

「それは！」

「俺たちを倒してから言いやがれ！」

「行くぞ！」

隊長は構え直しながら、3体のGEOSを見る。

互いに踏み込むと同時に拳を叩きつける。

GEOS達が戦いを繰り広げる地下通路より、もつと中枢に近い場所、千冬は立っていた。

鋭い目が正面を睨み付ける。

「やはり来たか…。」

「お久しぶりですね。」

学園祭でも、地下の特別区画に現れたスキンヘッドの男だった。

「今日こそは貴様らの目的を聞かせて貰うぞ。」

「出来ますかね?」

千冬は踏み込むと同時に両手の刀を相手に叩きつける。

「なるほど…悪くない一撃です。」

男は手にした棒で防ぎながら笑う。

そのまま切り抜け、後ろに回る千冬。

「ふん、上から目線もいつまで持つかな?」

「それはそちらもでしょう?」

人間とは思えない速度で走り出す2人、刀と棒がぶつかり、火花を散らしていた。

GEARで訓練をする俺だったが、それは突然終わりを告げた。

「よし…これで…あ、あれ!?!」

『どうしたんだ!?!えっ飛焰!?!』

訓練中にいきなり飛焰が飛び出して来た。

それと同時に他のデータウエポン達が電童の中に居ない事に気づく。

「データウエポン達が…居ない!?!」

『なんだって!?!』

飛焰はこちらに緊急事態を知らせるメッセージを送ってくる。

「すみません! I S 学園に連絡はできますか?」

『いや、こちらからはつかない…まさか!?!』

恐らく、I S 学園に襲撃があったのかも知れない。

前にユニコーンとレオがセシリアさんと鈴のピンチに駆けつけた事を考えると間違いはないはず。

「すぐにI S 学園に戻ります!」

『わかった。15番ゲートを開ける、そこなら周りは海だから、あまり騒ぎにはならないはずだよ!』

「ありがとうございます、飛焰スライダー!」

開くゲートに飛び込むように入り、飛焰をスライダーモードして乗り込む。

『気を付けるんだよ!』

「天野星夜、電童！行きます！」

ゲートに設置されたカタパルトを使い、初速を得て、一気に加速し、学園に向けて急ぐ。

敵を倒し終えた楯無は、気絶した敵を縛っていた。

「さて、こんなものかしら。」

楯無は敵の装備を確認する。

（この進行ルートなら、ダミーデータ31のはず…巧妙に隠しているけど、装備もアメリカ仕様とほぼ同じね。）

相手の素性を予想しながら、次の行動を考える。

現在、学園内の隔壁等が全部降りている為、場合によっては隔壁を壊して、外気をいれないといけないかも知れない。

「生徒会長自ら学園の破壊活動はどうなのかしら？」

そんな独り言を言いながら、楯無は一度部分展開していたミステリアス・レイデイを解除する。

「えっ…？」

解除した瞬間、楯無の体に衝撃が走る。

背中に何か当たったのだ。いや、何かではなく弾丸だ。

後ろを見ると気絶させ、拘束したはずの敵は全員隠し持っていたカッターで拘束を外し、自由になっている。

「やっと隙を見せたな…。」

（くっ……やられた…。）

「ISが無ければただのガキよ。拘束しろ。連れていく。」

「はっ！」

男達は素早く楯無を拘束し、注射器で薬を打ち込み意識を奪う。

（たすけて……くん…。）

無意識の内に1人の名前を呼ぶがそのまま楯無は意識を失った。

IS学園の地下で戦う銀河、北斗、スバルの3人。

エネルギーシールドの無いGEOSでは一撃でも当たれば、即戦闘不能もありえる。

狭い通路の中、相手の拳をギリギリで避ける。

「つぶねえ！」

「よく耐える…。何の為に戦う…？」

「知らねえよ！」

つい出てしまった隊長の呟きに銀河の叫びが答える。

「ただ仲間を守ってくれって言われたただけだ！」

「だから、全力でお前から皆を守る！」

銀河の叫びに北斗、スバルが続く。

「わかったか！この真つ黒ISが！」

予想外の答えに僅かながら隙を見せてしまった隊長。

銀河の拳が胸部に当たり、押し込まれる。

その隙を逃さず、スバルの射撃、北斗の蹴りが連続で叩き込まれる。

全体からすれば1割程のエネルギー消費だが、ISでは無い、ただのワードスーツにやられた事が隊長のプライドに傷をつけた。

「調子に…乗るなよ！」

ファンング・クエイク系の特徴である瞬時加速を使い、一瞬で距離をつめ、銀河のGEOSを殴り飛ばす。

「がっ！」

「銀河っ!？」

「北斗！止まるな！」

「遅いっ…！」

壁にめり込む勢いで吹き飛ばされた銀河を北斗が見る。

戦闘中に敵から目を離すという最大限の隙を隊長は見逃さなかった。

そのまま北斗に蹴りを入れ吹き飛ばす。

「後は…お前だっ！」

「くっ！」

スバルに向けて瞬時加速で接近し、拳を振るう。

スバルは後ろに大きく跳んで回避しながら、ライフルを放つ。

「逃げられると思うなよ…。」

引き撃ちをするスバルを追う隊長、本来なら追撃は必要なく、目的

の物を探すべきなのだが、女尊男卑の世に置いて、IS使いのプライドが全員を倒さねば許せなかった。

「ここだっ—」

「なにっ!？」

スバルは相手の瞬時加速のタイミングに合わせて、横に移動、反対の壁に向かい何かを投げつける。

「ぐふっ!？」

スバルの横を通りすぎる瞬間、隊長が顔を歪めた。

壁に向かって投げたのは、ワイヤーアンカーで調度人の首の高さにある。

「姉さんや織斑先生曰く、『絶対防御頼りの奴にはよく効く』そうだ。」

当たった衝撃でアンカーは簡単に抜け、首にかかったワイヤーはシールドエネルギーが焼く。

ほんの一瞬だが、首が締めまり意識が持っていかれる。

速度のある状態で制御を失った機体は、そのまま壁にぶつかる。

「きつ貴様ああっ—」

自分より年下の男に二度もやられ、怒りの絶頂を迎える隊長。

全力で走るスバルの背中を見て、なにも考えずに追う。

直前で閉められたドアを蹴飛ばして、部屋に踏み込む。

「観念したか…、これで終わりだっ—」

「そちらがなっ—」

そう言いながらスバルはステルスマントを掴み、バサツと音をたてながらめくる。

そこには1体のIS『ラファール』が隠れていた。しかし、その姿は普段と違い大きく形が異なっていた。

巨大な4門のガトリングガンとその質量を支えるために伸びた補助脚、圧倒的な火力と反動を制御を行う為固定砲台となったラファール。

「クアッド・ファランクス」を構えた真耶は即座に叫んだ。

「クアッド・ファランクス！全門斉射！」

遮蔽物も無く、後ろの通路も直線で逃げ場が無い。

隊長はその弾幕を全身で受けるしかなかった。

「エリス、こっちは終わった。銀河と北斗は？」

『大丈夫。ちよつと打っただけみたい。気絶してるだけね。』

エリスが銀河達の状態を確認し、命に別状は無いことを伝える。

「すぐに医療班が向かいますから、ウイラメットさんはその場で待機してください。」

『了解しました。』

「アルクトスくんと私で、この方をオペレーションルームまで連行します。」

真耶は倒れた相手から待機状態のISを外すと、スバルに渡し、自分で拘束した相手を持ち上げ移動を始める。

「はい。」

スバルはその後を追うように歩く。

――
IS学園上空。

そこに近づくひとつの影。

(なんなんだ!?!この胸騒ぎは!?!)

それは白式を纏った一夏だった。

今日は開発元である倉持技研でメンテナンスを行ってた為、学園の異常を知らなかった。

だが、倉持技研でのメンテナンス中に白式のコアを通じて輝刃が現れた。

その瞬間、何か起きたと察した一夏はすぐに倉持技研を飛び出し、連続瞬時加速を行い駆けつけたのだった。

「みんなは無事なのか……。」

機体の中に入っていた輝刃を隣に召喚しつつ、一夏は学園を見渡す。

そこでセンサーが何かの反応を捉えた。

「あれは……!」

学園の中庭を進む見慣れない男の集団、その中に見えたのは拘束された楯無の姿だった。

「その人を――」

即座に体を傾け、加速する。

「離せえー!」

集団に向かって進む一夏、気づいた集団は慌てて楯無を人質として使おうとする。

「ぎゃあっ!?!」

「ぐえっ!?!」

しかし、浮き足だった一瞬の隙を突き、ドラゴンフレアが楯無のミステリアス・レイデイから出現、楯無を担いでいた男達を突き飛ばして楯無を確保する。

「なっ!?!」

「容赦しないからな!」

その間に近づいた一夏と輝刃によって瞬時に制圧される男達。

「楯無さん!」

一夏がドラゴンから楯無を受け取り、名前を呼ぶ。

センサーが生体反応を示しているので死んでは居ないのはわかるが、目を覚まさない事に一夏は不安を覚え、名前を呼び続ける。

白式のセンサーが接近するISの反応を示す。

それは星夜の電童だった。

「一夏! どうした!?!」

「星夜! 楯無さんが!」

近くに降りてきた星夜の質問に慌てながらも答える一夏。

星夜も一夏の腕の中に居る楯無に呼び掛ける。

「楯無先輩!」

「楯無さん!」

「んあ……。」

2人からの呼び掛けでようやく目を覚ました楯無。

しかし、薬でも使われたのか、その目は上手く焦点を結ばずにいる。

「楯無さん! すぐに医務室に連れていきますから!」

「だが、この状態で医務室が機能してるのか?」

「ふたりと……も……ここに……むかつ……て。」

楯無が何とか一夏の白式にオペレーションルームの位置データを渡す。

「わかりました！」

「最短ルートで行く！ 隔壁は俺が破る。先輩を頼むぞ。」

示された場所へ最短ルートを通る2人、降りている隔壁は先行する電童が砕いていく。

「ここか！」

オペレーションルームにたどり着くと、そこには拘束された女性と真耶、スバルが居た。

「スバル！ 山田先生！」

「一体なにが!?!」

「織斑くん！ 天野くん！」

2人は再び眠ってしまった楯無をスバルに渡すと、真耶から簡単な状況説明を受ける。

「織斑くんはアクセスルームに向かってください。向こうには更識簪さんが居ますので細かいことはそちらで聞いてください。」

「わかりました！ すぐに向かいます！」

一夏はすぐに部屋を飛び出し、走り出した。

「天野くんは私と一緒に織斑先生の援護に向かいます。」

「了解です。」

「アルクトスくんは更識楯無さんをお願いします。」

「はい。星夜、気を付けろよ。」

「わかってる。楯無先輩を頼むぞ。」

その場をスバルに任せると真耶と星夜は部屋を飛び出した。

第65話《夢》

夢——人が寝ながらに見るもの、起きながらに見るもの。

『幸せな夢を…。』

あのととき、彼女が言ったのは前者だろう……。

部屋に差し込む優しい朝日。

まだ寝てたいと言う欲求を思考の奥にしまい、あたし——凰鈴音——はベツトから起き上がる。

「ふうあああ……。おはよう……。」

朝から大きな欠伸をしつつ朝の挨拶をして、席に着く。

「おはよう。鈴。」

「おはよう。ほら、朝ごはん出来てるわよ。」

両親が食卓を挟んで挨拶を返してくる。

「ん。いただきます。」

目の前に並んだ朝食を食べ始める。

「今日はやけに早いじゃないか。」

「何か予定でもあるの?」

「あ、うん。そんな感じ。」

普段の休みならお昼前まで寝てる事もあるからか、両親が不思議そうに聞いてくる。

ドキッとしながらも、あたしは平静を装いつつ答える。

「もしかして、デート?」

「ぶっ?!?」

母がニヤニヤしながら聞いてきた。

私は思わず飲んでたお茶を吹き出しかけた。

「な、なんで知って——」

「当たり前みたいね。」

「なっ!?!」

母には勝てないなあと思いつつながら、父の追及を無視して朝食を食べる。

「むう…。」

私―セシリア・オルコット―は鏡を前に悩んでおります。

「お嬢様、準備はお済みですか？」

ドアを開け、使用人のチエルシーが入ってくる。

「チエルシー、あの方は蒼と白、どちらが好みかしら？」

「あの方の好みは判りませんが、以前『セシリアは蒼が良く似合う。』とおっしゃられておりましたね。」

「ありがとうございます、ならこちらですわね。」

チエルシーの助言に従って、蒼のドレスを選ぶ…あら？

「チエルシー、先程の言葉は何時間聞いたのかしら？」

「それは秘密です。」

まさか、私の使用人が主に断り無しであの方に会ってるなんて！

「以上！解散！」

私―ラウラ・ボーデヴィツヒ―の号令で隊員達はそれぞれ、荷物を持って宿舎に戻っていく。

「隊長、お疲れ様でした。」

「ああ、しかし今回は当たりだな。命中精度が格段に違う。」

副官のクラリッサが持ってきたドリンクを受け取りながら、今日試した試作砲の感想を軽く伝える。

「それほどですか？」

「ああ、カタログスペック通りかそれ以上だな。アレならシユヴァルツェア・レーゲンの強化に使える。」

「それは良かったです。隊長、GEARから客人が来てますので、応接室に通してあります。」

「な!?!それを先に言え!直ぐに向かう!」

急ごうとする私をクラリッサが止める。

「お待ちください。その前にシャワーを浴びる事をおすすめします。そのままでは彼の印象もあまり良くないですよ。」

「む、そうか。では手早く済ませよう。」

折角来てくれた彼を待たせない為にも、シャワールームに足早に向かう。

僕の名前はシャルロット・デュノア。

今は母国フランスを離れて、日本に長期のホームステイしている。

「おはようございます。」

「おはよう。日本には慣れたかい？」

「はい！お陰さまで。」

ホストファミリーの人達も優しく、ほっこりする。

それに、男の子だけと同じ年の人が一緒にいてくれるから色々楽しい。

「デュノアさん、あの子まだ寝てるみたいだから起こしてくれる？」

「はい、わかりました。」

今日は珍しく彼は寝坊してるみたいだ。

折角だからちよつと寝顔を写メでもしちやおうかな？とか考えながら、彼の部屋にむかう。

「997…998…999…1000っ！」

「よ、お疲れさん。」

私―篠ノ之箒―は後ろに居た一夏から、タオルを受け取る。

「ありがとう…何時から居た？」

「950回あたりからかな？素振りと走り込みが終わって覗いたら居たから見た。」

「そ、そうか。気配に気づけなかった…。」

「そんだけ集中出来てたって事だろ？いいじゃねえか。」

私が汗をぬぐい終わると、ドリンクを差し出してきた。

「ほら、しっかり飲んでおけよ。」

「ありがとう。そろそろ朝食が出来てる頃だ。食べていけ。」

「なんか、最近は毎日の様にお邪魔しちやっってるな。」

私の言葉に一夏が頭をかきながら答える。

「母さんは一夏は真剣に食べてくれるから作りがいがある、と言って

いたから気にしなくていいのではないか？」

「まあ、家だと俺が作るか、買ってくるの二択だから、おばさんののは勉強になるんだよ。」

「相変わらず千冬さんは忙しいのか。」

「それ言ったら束さんもだろ。」

他愛のない会話をしながら、2人並んで歩く。

こんな日々も悪くない…。

「ここか！」

一夏は教えられた部屋に勢い良く入ると、そこにはベッドチェアで眠っている箆達とモニターの前で狼狽える簪の姿があった。

「一体何があつたんだ!？」

「あ、い、一夏くん……お、落ち着いて。」

「ご、ごめん。」

一夏が簪の肩を掴んでいたことに気づいて、謝りながら離す。

簪がひと息おき、話始める。

「今、皆はISを通して電腦空間にダイブしてる。だけど、敵の妨害で足止めをされてるみたい。」

「みたい？」

「うん。こちらからは観測出来なくなってるから…。」

「俺はどうすればいいんだ？」

一夏の言葉に簪が空いているベッドチェアを指差す。

「一夏くんも電腦空間にダイブして、直接サルベージしてもらうのが確実。」

「おう。ここで寝ればいいのか？」

迷わずベッドチェアに行く一夏、直ぐに簪と準備を進める。

「ISをソフトウェア優先処理モードで起動して。」

「ああ、これでいいんだよな？」

「うん。大丈夫……システム接続、ダイブ開始。」

簪が端末を操作し、一夏の意識は電腦空間へ飛び込んだ。

一瞬の暗闇の後、一夏が感じたのは暖かい日差しと森の木々を撫でる風の音だった。

「ここが電脳空間?」

回りを見渡していると、近くに輝刃と簪が映った仮想ディスプレイが現れる。

『一夏くん、状況はわかる?』

「えっと…森みたいなの所だけど…ここであつてるのか?」

『うん。電脳空間ならデータウエポンはこの上ない助っ人だから、一緒に進んで。』

簪に言われるまま、輝刃についていく形で進む。

『一夏くん! 気をつけて! 敵が攻勢に出てきた!』

「なんだって!?!」

言われると同時に、嫌な気配を感じた一夏は横に飛ぶ。一瞬遅れて、一夏の居た所に何かが飛んできた。

「うわっ! なんだ!?!」

『前方! 敵性反応!』

簪の叫びが終わるより前に、輝刃が飛び込む。

「なっ! なんだよあれは!?!」

目の前で輝刃と格闘するロボットの様な物を見て、一夏は声を上げる。

『たぶん、敵の攻撃プログラム!』

「ここつて白式つかえるのか!?!」

『ちよつと待って! 直ぐに攻撃用プログラムをインストールするから!』

簪がそう答えると、一夏は光に包まれ気がつけば白式を纏っていた。

『ダメージを受けすぎると、帰って来れなくなるから注意して!』

「わかった! ありがとう簪!」

一夏は雪片を構え、飛び込んだ。

地下の特別区画にある部屋で、激しくぶつかり合う鉄の音が響く。

「ふっ！」

「はっ！」

千冬の振った刀がスキンヘッドの男が持つ棒に当たり、火花が散る。

火花と共に刀の刃から鉄片が飛び散り、根元から折れて地面に突き刺さる。

「残り2本ですね…降参されますか？」

「どうした？疲れたのか？」

千冬は一度距離を開け、折れた刀の柄を捨て新しい刀を抜く。

「まさか、先程から同じことの繰り返し…お互いに無益では？」

「それはそっちの都合だろう？こちらはお前が進めないだけで十分なのだからな。」

「そうですか…そろそろ終わりにさせて貰いますよ！」

男は言い終わると同時に、一気に距離を詰めて棒を振り下ろす。

千冬は刀の峰を使い受けるが、踏ん張りが効かず吹き飛ばされる。

「くっ！」

「はあっ！」

男は千冬目掛けて棒を槍の如く投げた。

刀で咄嗟に弾くが衝撃で刀を落としてしまい床に突き刺さる。

千冬は壁にぶつかり、肺の中の空気が吐き出される。

「かっ!!」

「残り1本…その次は貴女の命が無くなりますよ？」

男は落ちた自分の武器を持ち直し、千冬に向ける。

「……。」

「ん……？」

千冬が何かを呟く。

男が不審に思うと同時に周りに突き刺さった刀の刃達が爆発し、部屋は爆炎に包まれた。

ドオオオオンツ!!

俺―天野星野―が学園の地下通路を進んでいると大きな音と振動

が来た。

「山田先生！」

「大丈夫です！恐らく織斑先生が敵の足止め用の物を使っただけです！」

一緒に居る山田先生に確認をとろうとすると即座に返事が来た。

「もうすぐです！」

「はい！」

先程の爆発の影響か、少しひしゃげた扉を壊して部屋に入る。

「織斑先生!？」

「大丈夫ですか!？」

部屋を見渡すが、かなりの爆発があったらしく、部屋中黒こげになった瓦礫ばかりだ。

「その声は真耶と天野か、私なら大丈夫…だ。」

盾にしていたらしい瓦礫を押し退け、織斑先生が現れる。

「織斑先生、敵は?」

「あれに巻き込まれた程度でどうにかなる奴ではない。気を付けろ。」

瓦礫の山を睨む織斑先生。

俺も電童のセンサーで確認するが、特に反応は見られない。

「反応が…無い?」

「いや、そこだ！」

織斑先生が手にした刀を槍投げの要領で、瓦礫の1つに向かって投げける。

投げた刀が突き刺さる前に、瓦礫から出てきた棒に弾かれる。

「やってくれましたね…。」

「貴様が間抜けなだけだろう?」

瓦礫をどかしながら、白いスーツを着たスキンヘッドの男が出てくる。

「しかし、全ての反応を消したはずなのに良くわかりましたね。」

「確かに消えていたな、不自然な程に。」

「成る程…参考になりますね。」

男は棒を軽く振り、構え直す。

「3人ですか…しかもデータウエポンまで居るとなると、流石に不利ですね。」

「なんだ？逃げる気にでもなったか？」

「いえいえ、少しばかり本気を出させて頂く、程度の事ですよ。」

男はそう言うのと、目を紅く光らせ姿を変えていく。

「IS!？」

「いやー違うー！」

山田先生が驚き叫んだ事に織斑先生も叫ぶように答える。

男は全身が白い細身のロボットの様な見た目になっていた。

「ISじゃ…ない?」

「ええ、私はISは使っておりませんよ。」

センサーに出ている表示がISとは別の物を示し、俺が呟くと男の声が返ってきた。

「やはり、お前がああの時の…」

「おお、覚えていらしたのですか。」

「あの時の事を…忘れる訳がないだろう！」

珍しく感情を吐き出す織斑先生に、俺と山田先生は驚きを隠せなかった。

「激しい感情…やはり、人間は管理されなければ行けませんね。」

「管理…まるで人を物みたいに…！」

感情を感じない声が聞こえ、俺は構え直し睨む。

「天野、奴はアルクトス兄妹も手を焼く奴だ。」

「はい。」

織斑先生が静かなにいいながら、懐からGーコマンダーを取り出した。

「今の私の取って置きだ。」

そう言つて織斑先生はGEOSを身に付ける。

「天野は私と来い、山田先生は援護を！」

「了解っ！」

織斑先生に続き、相手に向かって飛び込む。

「簪！皆の所にはまだ着かないのか?!」

『そろそろ視界に入る!』

一夏は輝刃と協力して、敵を倒しながら森を進む。だが、中々仲間の姿が見えず焦っていた。

見た目こそ普段の白式と一緒にだが、あくまでも一夏が戦うイメージをしやすい様になった見た目だけで、視覚強化などはない。

「ん？あれは…皆!」

開けた場所に出ると、そこには箒達5人が倒れていた。

また、その周りではそんな彼女たちを守るようにデータウエポンが戦っている。

「輝刃!まずはアイツ等を蹴散らすぞ!」

一夏は雪片を構え、輝刃と共に飛び込んだ。

皆でカラオケに行き、沢山歌ってもう夕方だ。

「鈴、家近いし送ってくぞ。」

「うん。ありがとう。」

それぞれ男女のペアになって家まで送っていく流れに。

元々そのつもりだったけど、いざ2人つきりになると緊張するわね。

今、あたしの隣には大好きな幼馴染の天野星夜がいる。

今日、あたしは星夜にこの気持ちをぶつけると決めていた。

恥ずかしかったけど、友達にも相談して協力して貰っていて、この状況を作った。

「ねえ、星夜…。」

「どうした、鈴?」

「少し、話さない?」

「ああ、いいぞ。」

そう言ってあたしは公園に行く、少し高い所にあり、町を見下ろせる公園だ。

「ほら、コーヒー。」

「ありがと。」

ベンチに座る私は缶コーヒーを受けとる。
一口飲んで隣に座る星夜を見る。

「……。」
「……。」

星夜もこちらを見て来たので、見つめ合う形になる。

沈黙が流れる。

「鈴、話ってなんだ？」

恥ずかしそうにしながら、星夜は口を開いた。

「えつと……。」

言え！この流れと勢いで告白出来なかったら一生出来ないぞ！
なんて心の中で吠えるが、口は意思に反して動かなかつた。

「ん〜…俺も話したいことあるし、先に言っつて良いか？」

「い、いいけど…。」

あたしの返事を聞くと、星夜は立ち上がりあたしの前に立つ。

「鈴、俺は――」

私はパーティーが終わり、隣に座る最愛の人、星夜さんと語り合つていました。

彼は若くして世界的企業GEARの次期代表として、様々な国に出向いている。

今回もGEARイギリスで新しい発表があり、そのパーティーの後、私の為に時間を割いてくださいました。

「しかし、何度やってもああいうパーティーは慣れないな。」

「そうですね？中々様になっておりましてよ？」

「そうか？まあ、セシリアが言うんなら少しは自信が持てるな。」

星夜さんは少し嬉しそうに答えます。

「そうですねわ！胸をはって下さいな。」

「そうするよ。」

紅茶を一口飲み、彼の肩にもたれ掛かる。

「セシリア？」

「星夜さん、私少し疲れてしまいましたわ。」

「俺でよければ。」

そう言うと星夜さんは優しく肩を抱き寄せます。

「セシリア、俺は――」

私は今、信頼できる人物、天野星夜と会談していた。

「今回の新装備はよかったぞ。カタログスペック以上だ。」

「ラウラなら、あれは気に入ると思ってたよ。」

彼はGEARの技術者で、IS装備開発の中心に立つ人物だ。

彼が持つてくる装備はどれも素晴らしく、使いやすい。

「しかし、軍は大変だな。」

「だが、やりがいもある。」

「ラウラらしい。」

彼は私の事を受け入れくれる。

生まれた時から戦うことしか知らない私を癒してくれる。

この気持ちをなんと言うかは知らないが悪い気はしない。

「なあ、星夜。ひとつ聞きたいのだが……。」

「なんだ？」

「その、最近……星夜いると……な。」

「俺と居ると……？」

「そ、そうだ！……こう……その……。」

上手く言葉に出来ない。自信をもって発言出来ない。

それを見て、星夜が口を開く。

「ラウラ、それは――」

僕は今、学校で皆とご飯を食べている。

学校では主に2人の男の子と一緒にいる。

天野星夜と織斑一夏、星夜はホストファミリーの息子さんで、同い年と言う事で最初は色々と教えて貰った。一夏は星夜の友達。

「うくん。やっぱり一夏の料理は美味しいね。」

「うちのクラスで一番なんじゃないか？」

「そうかあ？ただやってたら上手くなったただだよ。」

僕は今、一夏の作ってきたお弁当を食べてる。

先日、一夏が料理が上手いって話になって食べてみたい、と言ったら、じゃあ明日なって。

「うん！この卵焼きも美味しい。」

「ありがとよ。」

一夏は僕が誉めると恥ずかしいのか、少し視線をずらした。

「ねえ、2人に聞きたいんだけど。」

「なんだ？」

「シャルが俺たちに質問って珍しいな。」

「2人はどんな風に仲良くなったの？そこを知りたいなって。」

「ん？ああそれなら…。」

「まずはな—

今日は休日と言うこともあり、私と一夏はご飯を食べた後、街へ出ていた。

「お、このシャツいいな！」

「わざわざセール品の中から選ぶ辺りが一夏らしい。」

「浮いた分、好きなことに使えるんだよ。」

「まあ、買い物は人それぞれだな。」

難しい事を考えず、楽しく付き合えるのは幼馴染みだからだろう。

しかし、何か足りないような、忘れているような気がする。

「筈、どうした？」

「な、なんだ？」

「なんだ？じゃねえよ。急にブーツとしだしたら気になるだろう？」

「ああ、すまない。何か忘れてる気がするな。」

「忘れてる？まさかついでお使いとか言われたとか？」

「いや、そうではなく…ええと…なんとさえばいいか…。」

「思い出せないなら、その程度って事だろ？ほら、いこうぜ？」

「そ、そうだな。」

一夏が伸ばした手に自分の手を重ねる、その瞬間—

「箒！鈴！セシリア！シャル！ラウラ！おい！起きろ！」

データウエポン達と協力し、敵を一通り倒した後、全員を安全な場所に移してから、それぞれに声をかけていく一夏。

『みんなのバイタルは安定してるから、寝てるだけみたい。』

全体の確認をし、危険は無いことを伝える簪。

「じゃあ、大丈夫なのか？」

『そのままだと起きないかも知れないから…。』

「起きない!?!それってやばくないか!?!」

『だから織斑くんが、皆にアクセスして…。』

「え？」

『目を覚まさせてあげて。』

「えと…俺が起こせばいいんだよな？どうやって？」

『これを使って。』

「これは…鍵？」

一夏の手の中に鍵のような物が現れる。

『それを持ってれば皆の深層意識にアクセス出来る。』

「わかった。やってみる。」

一夏の目の前に、扉のような物が現れる。

一夏は迷わずその扉を開いた。

「待ってろよ…皆！」

第66話 《目覚め》

俺―天野星夜―はISとは違う未知の力を持つ敵と戦っていた。

「はあっ！」

「ふん、それで狙ってるつもりですか？」

俺が放った拳を軽く受け流し、そのまま後ろから山田先生が撃ったライフルを弾く。

「ふんっ！」

「やはり、貴女位ですかね？ 相手になるのは…。」

敵はいとも簡単に織斑先生の突きを止める。

「ファイルロード！ 飛焰！」

飛焰を召喚し、火球で援護させる。

「チッ！ 鬱陶しいですね！」

敵は少し後ろに下がると、体から湾曲ビームを放つ。

「くっ！」

「うっ！」

「きやっ！」

見た目は細いが威力は中々で、ISのシールド越しても熱を感じる。

「まずは貴女からです！」

各自の体勢が崩れた隙を突き、素早く山田先生に接近し、手にした如意棒で殴り付け、地面に叩きつける。

「山田先生！」

「天野！ 隙を見せるな！」

山田先生に追撃をかけようとする敵に、俺は飛び込む。

「甘いですね！ データウエポンのマスター！」

予見していたのか、敵はこちらを見向きもせずに拳を止める。

「細い割りに力持ちだな！」

「見た目で判断されては困りますね！」

止まった瞬間を狙って織斑先生が突っ込むが、俺とのバランスを上手くずらして体勢を崩して避ける。

「まだです！」

山田先生が倒れた状態から、マシンガンを掃射するが、難なく避ける。

「いつまでも貴殿方に付き合うつもりはありませんので。」

敵は再び湾曲ビームを放つ。

先程より出力を上げたのか、無数の光線が俺達に降り注ぐ。

「うわあああつー！」

激しい攻撃に、天井が崩れ大量の瓦礫が俺たちを襲う。

敵対していた3人が瓦礫の山に埋もれた事を確認した男は、千冬達が護っていた扉へ元の姿に戻りながら向かう。

「さて、予定よりも時間を使ってしまったが……。」

扉は戦闘の影響で変形しており、開閉出来ない状態の為、男は武器である棒で吹き飛ばし先へ進む。

「ようやくアレを我らの手中に……。」

少し廊下を進むと、非常に強固に守られた扉へたどり着く。

「ふむ、この程度で最高級のセキュリティですか……。」

男が手を触れると、まるでセキュリティなど存在しないかのようにロックが外れ、開いて行く。

「くくくつ……！ やつと見つけ……なつ?!」

ここにあると、確信してしていた物が無かったのか、目を見開いたまま固まってしまう。

「ふっー！」

その瞬間、背後から千冬のGEOSが襲い掛かる。男は攻撃を防ぐことが出来ず、斬撃を受けて吹き飛ばす。

「……どこにやったのです?」

「なんの話だ?」

千冬を追いかける形でやって来た星夜と真耶を含めた3人を睨みながら立ち上がる。

「惚け無いで貰いましょうか、ここにキューブがある筈です。」

「キューブ……?」

「何かの比喩でしょうか？」

「それがお前の目的か。」

激昂する男に対し、星夜と真耶はキューブと言う単語に対して考察し、千冬は目的の一端を知り少し口角を上げる。

「どうやら、貴方達は本当に知らないようだ。なら、用は有りません！」

男は再び姿を変えると、一気に接近して手にした棒で尻払う。

3人は後ろに飛ぶ形で避ける。

「貴様の都合は知らん、ここで倒させてもらう。」

「たった3人で私を？そんなボロボロの状態で？」

「ならー！」

「試してみろー！」

「行きますー！」

3人が一斉に構え、攻撃に移る。

一夏が扉をくぐった先は1つの部屋だった。

「なんだ？これが誰かの深層意識って所なのか？」

それほど大きくないその部屋には沢山のモニターがあり、箒達それぞれ映されていた。

「なあ、箒、ここは？」

『わからない、本当なら直接誰かの深層意識にダイブする筈なのに……。』

箒にも想定外な事を知り、とりあえずモニターに近づく。

『どう？何か変なところとかある？』

「モニターに色々映ってて、皆笑ってる。」

一夏が、モニターを見てみると、急に部屋がノイズのように乱れ出す。

「か、箒!？」

『ジャミン……駄目……信が……っ!』

咄嗟に箒に話しかけるも、途切れてしまう。

「一体何が!？」

気がつくくと、部屋ではなく地下のにあるような長い廊下に居た。先に続く廊下の様な空間を見て一夏はどうするか悩む。

「輝刃?」

輝刃がそのまま前に進むので、一夏はとりあえず着いていく。

「なんだ?、また変わったぞ……?」

再び周りの環境が変化する。

「海岸……?なんか前にも見た気がするな……?」

一夏はその光景に既視感を感じるが、それが何か思い出す前に人を見つめる。

「あれは……ラウラか?」

美しい銀色の髪を見て、ラウラを思い出す。

「初めまして、織斑一夏ですね?」

「え?はい、そうです……」

急に声をかけられ、普通に対応してしまった一夏。

「私はクロエ、クロエ・クロニクルです。」

「ど、どうも。」

動揺する一夏を気にせず、クロエと名乗った少女はそのまま話し出す。

「貴方のご友人達には仕事の邪魔になるので、少し夢を見させて頂きました。」

「なっ!あんたが!」

「ですが、こちらの目的も達成しましたので、そろそろ解放されるでしょう。ご安心下さい。」

ペコリと頭を下げるクロエに一夏は質問する。

「目的って?」

「申し訳有りませんが、言うことは出来ません。しかし、そちらに害をなす事では有りません。」

一夏の隣に居る輝刃に近付き、頭を撫でるクロエ。

「データウエポン……人々を導く獣……」

「えっ?データウエポン?」

何かを知ってそうなクロエに話しかけようとするが、彼女が急に一

夏の方を向く。

「では、また会う時があれば。」

「ええっ!? 待ってくれ——」

急に視界が白に染まり、浮遊感を覚えると共に意識が途切れる。

俺達3人で、敵の相手をしていたが、やはり敵の方が優勢で徐々に押されている。

特に一般のラファールを使っている山田先生が危ない。

「おや、もうこんな時間ですか。」

「逃がさんぞ。」

「かのブリュンヒルデからのお誘いと言えど、譲れない事もありますので。」

先程と同じように、天井へ攻撃して崩落させてくる。

「ちいっ!」

「次こそは頂きますので、しっかりと用意をしておいて下さいね?」

そのまま地上までを一直線に破壊して、敵は撤退した。

「すみません。織斑先生……。」

「逃がしてしまいました。」

「いや、この状況でお前達はよくやってくれた。」

それぞれ、装備を解除し情報交換を行いながらオペレーションルームへと行く。

夕陽によって紅く染まる喫茶店。ここはIS学園から非常に近い所にあり、それを売りにしている。

オープンテラスの席で1人の少女が座っていた。

「……。」

カップに注がれたカフェオレは冷めきっており、それを前にしている少女は目を瞑ったままで、まるで寝ているようにも見える。

「失礼する。」

そこに近付き、テーブルを挟み置かれた席に着く千冬。

「織斑千冬……。」

少女は目を開けること無く、相手の名を口にする。

「束の使いだな？」

「はい。」

「奴らの目的を知っていて、それを妨害したな？」

「ええ。間違いありません。」

千冬の質問に機械的に返す少女。

「では、奴が言っていたキユーブとはなんだ？」

「それは言えません。」

「なぜだ？」

「知る必要が無いからです。」

「つまり、お前が持ち出したのか……。」

その言葉を肯定するかの様に、少女は口を閉じたまま、席を立つ。

「私も予定がありますので、ここで失礼します。」

「束に伝えておけ、『わかるように説明しろ』と。」

「かしこまりました。確かにお伝えします。」

その一言共に彼女は千冬の視界から急に消える。

千冬は驚く様子も無く、自分のコーヒーを口にする。

「束、お前には何が見えているんだ……。」

常識の遥か上に行く友人を思い、コーヒーを飲む千冬だった。